

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第135集

関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第10集

黒熊中西遺跡

(1)

1992

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第135集

関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第10集

黒熊中西遺跡

(1)

1992

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団



黒熊中西遺跡遠景（北東から）



黒熊中西遺跡全景（東方から）



2号建物跡・3号建物跡



1号建物跡から2号建物跡方向を望む



軒丸瓦



軒平瓦



3号建物跡出土鬼瓦



2号建物跡出土鬼瓦



3号建物跡出土文字瓦



73号住居跡出土墨書土器



28号住居跡出土経軸端

序

西毛の鎭川流域は武蔵国から信濃国への交通の要路として早くから開けてきました。その要路に高速道の上信越自動車道が建設されることになり、工事によって消滅するところの埋蔵文化財の発掘調査が昭和61年よりはじまりました。

高速道が通過する吉井町黒熊の中西地区も、埋蔵文化財調査の対象となりました。中西地区は、上毛三山を始め上信越国境の山々が一望できる景観の良い地であります。当地区は吉井町内にある特別史跡「多胡碑」の碑文中「給羊」の「羊」の解釈をめぐる識者の注目をひいた「辛子三」の文字瓦が出土した地として、第2次世界大戦前より知られており、発掘調査の成果が期待されていきました。

平成元年度・2年度の2年間発掘調査が行われましたが、期待にそむかず丘陵上の遺跡より平安時代の寺院跡、集落跡など貴重な遺構・遺物が発見され本県の古代寺院の研究を進める上で大いなる成果がありました。

これらの貴重な遺構・遺物の資料は、平成3年度に報告書刊行のための整理作業を行い、計画どおりに作業が終了したので、調査報告書を上梓することにしました。

発掘調査から報告書刊行に至るまで日本道路公団東京第2建設局、群馬県教育委員会、吉井町教育委員会、地元関係者等より種々のご援助、ご指導、ご協力を賜りました。ここに深甚なる感謝の意を表し本報告書が本県の歴史の解明および古代寺院の研究を進める資料として、広く活用される事を願い序とします。

平成4年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之

例 言

1. 本書は、関越自動車道上越線建設工事に伴い事前調査された「黒熊中西遺跡」の発掘調査報告書である。報告書は、第1分冊（寺院跡編）と第2分冊（住居跡編）の2分冊からなり、本書はその第1分冊にあたる。
2. 本遺跡は、発掘調査の時点では「栗崎八幡遺跡」と呼称していたが、それは事業名として使用していたものである。栗崎八幡遺跡は栗崎区・八幡区・中西区の3区からなっていたが、調査後、遺跡のありかたを検討したところ別個な遺跡ととらえるほうが妥当であると考えられたため、栗崎区を黒熊栗崎遺跡、八幡区を黒熊八幡遺跡、中西区を黒熊中西遺跡と呼称することとした。すなわち、本遺跡は旧称での「栗崎八幡遺跡の中西区」にあたる遺跡である。
3. 黒熊中西遺跡は、群馬県多野郡吉井町大字黒熊字中西721番、他に所在する。
4. 本発掘調査は日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施されたものである。
5. 実際の発掘調査にあたっては、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団内に上越線地域埋蔵文化財調査を目的に設置された関越道上越線調査事務所が担当した。
6. 調査期間および担当者
 - (1) 発掘調査 調査期間 平成2年2月8日～平成3年3月31日
調査担当者 須田茂（専門員） 山口逸弘（主任調査研究員） 鹿沼栄輔（主任調査研究員）
小林徹（調査研究員）
 - (2) 整理 整理期間 平成3年4月1日～平成4年3月31日
整理担当者 須田茂
 - (3) 事務 常務理事 邊見長雄
事務局 長 松本浩一
管理部長 田口紀雄（平成元・2年度） 佐藤勉
調査研究部長 神保侑史
課 長 岩丸大作
主 任 国定均 須田朋子 吉田有光
主 事 柳岡良宏 船津茂
非常勤嘱託員 松下登
臨時職員 野島のお江 今井もと子 角田みづほ 松井美智代
関越自動車道上越線調査事務所
所 長 高橋一夫（平成元・2年度） 阿部千明
総括次長 片桐光一（平成元年度） 大澤友治
次 長 徳江紀
課 長 鬼形芳夫（平成元・2年度） 依田治雄
係長代理 宮川初太郎（平成元・2年度）
主 任 国定均（平成元年度） 笠原秀樹
臨時職員 山崎郁夫 神戸市四郎 松井留男 町田康子 本城美樹 後閑玲子 田中智
恵美

7. 報告書作成関係者

編集担当 須田茂

本文執筆 須田茂 鹿沼栄輔（第3章第5節2） 小林徹（第3章第5節3）

遺構写真 須田茂 鹿沼栄輔 小林徹

保存処理 関邦一 小材浩一

整理補助員 土田三代子 高橋優子 茂木良子 富沢スミ江 長岡美和子 阿部雅子

8. 委託関係 航空写真は齋青高館・齋技研測量設計、遺構測量は齋技研測量設計・齋社シン航空

土層およびテフラの鑑定は齋パリーノ・サーヴェイ、石材鑑定は陣内主一氏に依頼した。

9. 本遺跡の発掘調査にあたっては、奈良国立文化財研究所建造物研究室長宮本長二郎、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター主任研究官上原真人の両先生にご指導をいただいた。

10. 出土遺物・図面は一括して、群馬県埋蔵文化財センターに保管してある。

11. 報告書作成にあたり、下記の諸氏にご教示、ご指導をいただいた。記して謝意を表す次第であります。

（敬称略）

阿久津久 石川県鹿島町教育委員会 井上和人 慧日寺資料館 大橋泰夫 北上市立埋蔵文化財センター

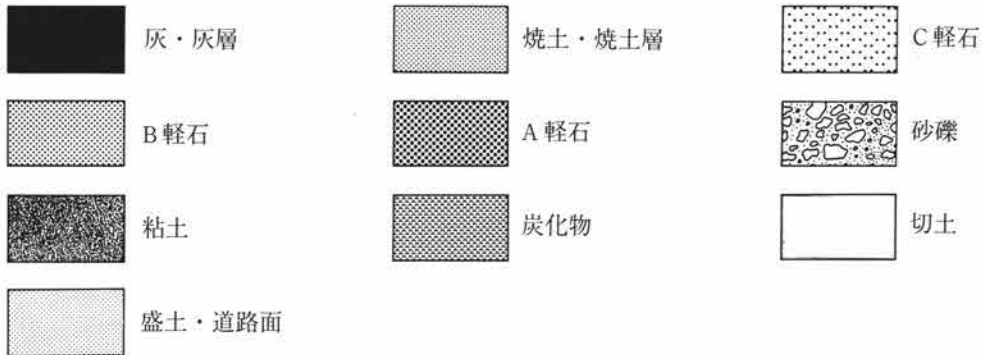
黒沢彰哉 榊原功一 国生尚 湖西市教育委員会 小林公治 小島純一 小牧市教育委員会 正満英利

菅原征子 高橋一夫 田辺征夫 時枝務 日本窯業史研究所 濱島正士 坂野和信 磐梯町教育委員会

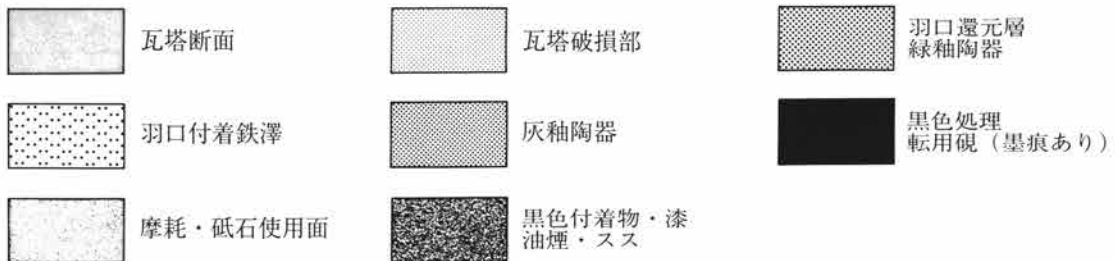
凡 例

- 遺構図の方位は、国家座標の北を示している。
- 遺構断面図、等高線に記した数値は標高を表し、単位は原則としてメートルである。
- 遺構実測図の縮尺は原則として下記のようなものである。
 - 礎石建物遺構の平面図・断面図 1/80・1/120
 - 礎石建物遺構の整地状況図・遺物分布図 1/120～1/210
 - テラス遺構図 1/80・1/100
 - 土坑・鍛冶炉・礎石 1/40・1/60・1/80
- 遺物実測図の縮尺は下記のとおりである。
 - 土器（大型） 1/4
 - 土器・硯・砥石・羽口・鉄製品・瓦塔 1/3
 - 丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・文字瓦 1/4
 - 鬼瓦 1/5
- 遺物番号は、遺構毎に通し番号とし、遺物実測図・遺物分布図・遺物観察表・写真図版と共通する。
- 遺構図および遺物実測図のスクリーントーンは原則として下記のとおりである。

遺構実測図



遺物実測図



目 次

序

例 言

凡 例

抄 録

第I章 発掘調査の経過	3	(6) 7号建物跡	114
第1節 発掘調査に至る経過	3	(7) 8号建物跡	120
第2節 調査の方法と経過	3	(8) 1号特殊遺構	122
(1) 試掘調査	3	第6節 テラス	125
(2) 発掘調査の方法と経過	4	(1) 1号テラス	125
(3) 整理の経過	6	(2) 2号テラス	133
第3節 黒熊中西遺跡の発見と周知経過	6	(3) 3号テラス	133
第II章 遺跡の立地と環境	8	(4) 4号テラス	133
第1節 地理的環境	8	(5) 5号テラス	137
第2節 歴史的環境	11	(6) 7号テラス	137
第III章 遺構と遺物	16	(7) 8号テラス	141
第1節 遺構と遺物の概要	16	(8) 9号テラス	145
(1) 遺構の種類と分布	16	(9) 10号テラス	147
(2) 遺物の種類とあつかい	18	(10) 12号テラス	148
(3) 瓦の分類と部位名称	19	第7節 焼土坑(燃火跡)	150
第2節 基本土層	22	第8節 鍛冶遺構	153
第3節 整地	24	遺物観察表	155
第4節 道路遺構	25	第IV章 むすびにかえて	183
(1) 1号道路遺構	25		
(2) 3号道路遺構	26		
(3) 4号道路遺構	27		
(4) 7号道路遺構	28		
(5) 9号道路遺構	28		
(6) 10号道路遺構	30		
(7) 11号道路遺構	30		
(8) 道路遺構の出土遺物	30		
第5節 礎石建物跡	32		
(1) 1号建物跡	32		
(2) 2号建物跡	40		
(3) 3号建物跡	79		
(4) 4号建物跡	101		
(5) 5号建物跡	103		

なお、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝などの遺構・遺物は第2分冊に掲載する。

挿 図 目 次

- 参考図 黒熊中西遺跡既出の瓦
第1図 遺跡位置図
第2図 遺跡周辺の旧地形
第3図 鑄川流域の地形分類図
第4図 周辺遺跡分布図
第5図 調査区区分割り図
第6図 軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦の分類
第7図 瓦類部位名称
第8図 遺跡周辺の土層断面図
第9図 基本土層
第10図 整地及び基壇造成に関する造成範囲
第11図 整地及び基壇造成模式図
第12図 道路遺構分布図
第13図 1号道路・3号道路・7号道路
第14図 1号道路遺構（北半部）
第15図 道路遺構断面図
第16図 道路遺構出土遺物
第17図 道路遺構出土遺物
第18図 礎石建物遺構分布図
第19図 1号建物跡
第20図 1号建物跡盛土状況
第21図 1号建物跡断面図
第22図 1号建物跡基壇造成前の整地地形
第23図 1号建物跡付設土坑
第24図 1号建物跡遺物分布図
第25図 1号建物跡基壇上出土遺物
第26図 1号建物跡基壇下・周辺・フク土出土遺物
第27図 2号建物跡
第28図 2号建物跡地鎮状遺物出土状況
第29図 2号建物跡礎石
第30図 2号建物跡柱穴・ピット・土坑(1)
第31図 2号建物跡柱穴・ピット・土坑(2)
第32図 2号建物跡鍛冶状遺構
第33図 2号建物跡整地状況
第34図 2号建物跡瓦分布図
第35図 2号建物跡軒瓦・鬼瓦分布図
第36図 2号建物跡土器・鉄製品分布図
第37図 2号建物跡主要土器分布図
第38図 2号建物跡出土軒丸瓦
第39図 2号建物跡出土軒平瓦
第40図 2号建物跡出土軒平瓦
第41図 2号建物跡出土丸瓦
第42図 2号建物跡出土丸瓦
第43図 2号建物跡出土平瓦
第44図 2号建物跡出土平瓦
第45図 2号建物跡出土鬼瓦
第46図 2号建物跡出土鬼瓦
第47図 2号建物跡基壇上出土遺物
第48図 2号建物跡基壇上出土遺物
第49図 2号建物跡基壇上出土遺物
第50図 2号建物跡基壇上出土遺物
第51図 2号建物跡基壇上出土遺物
第52図 2号建物跡基壇上出土遺物
第53図 2号建物跡基壇下・出土位置不明・地鎮跡出土遺物
第54図 2号建物跡北方整地面上・北方整地地下出土遺物
第55図 2号建物跡北方整地地下出土遺物
第56図 2号建物跡北方出土位置不明・西方整地地下出土遺物
第57図 2号建物跡西方整地地下出土遺物
第58図 3号建物跡
第59図 3号建物跡の掘立柱建物状遺構と焼土
第60図 3号建物跡土坑
第61図 3号建物跡瓦分布図
第62図 3号建物跡軒瓦・鬼瓦分布図
第63図 3号建物跡土器・鉄製品分布図
第64図 3号建物跡出土軒丸瓦・軒平瓦
第65図 3号建物跡出土丸瓦
第66図 3号建物跡出土丸瓦
第67図 3号建物跡出土丸瓦・平瓦
第68図 3号建物跡出土平瓦
第69図 3号建物跡出土平瓦・文字瓦・特殊瓦
第70図 3号建物跡出土鬼瓦
第71図 3号建物跡基壇上出土遺物
第72図 3号建物跡基壇上出土遺物
第73図 3号建物跡基壇上出土遺物
第74図 3号建物跡基壇下出土遺物
第75図 3号建物跡基壇下出土遺物
第76図 4号建物跡遺物分布図
第77図 4号建物跡祭壇上遺構
第78図 4号建物跡基壇上出土遺物
第79図 4号建物跡基壇上・基壇下出土遺物
第80図 5号建物跡遺物分布図
第81図 5号建物跡鍛冶炉と土坑
第82図 5号建物跡基壇上出土遺物
第83図 5号建物跡基壇上・基壇中出土遺物
第84図 5号建物跡基壇下出土遺物
第85図 5号建物跡基壇下出土遺物
第86図 5号建物跡周辺グリッド出土遺物
第87図 5号建物跡周辺グリッド出土遺物
第88図 7号建物跡
第89図 7号建物跡1号石組遺構
第90図 7号建物跡1号石組遺構遺物分布状況
第91図 7号建物跡出土遺物
第92図 7号建物跡1号石組遺構出土遺物
第93図 8号建物跡出土遺物
第94図 瓦塔推定復元図（S = 1/13）
第95図 瓦塔実測図
第96図 1号特殊遺構
第97図 1号特殊遺構出土遺物
第98図 テラス遺構分布図
第99図 1号テラス整地状況
第100図 1号テラス土層断面図
第101図 1号不詳遺構
第102図 1号テラスの土坑
第103図 1号テラス土坑・グリッド出土遺物
第104図 1号テラスグリッド出土遺物
第105図 3号テラス
第106図 4号テラス
第107図 4号テラス・D斜面出土遺物
第108図 7号テラス遺物分布図
第109図 7号テラス出土遺物
第110図 7号テラス掘込遺構出土遺物
第111図 8号テラス
第112図 8号テラス鍛冶炉・土坑
第113図 8号テラス出土遺物
第114図 8号テラス出土遺物
第115図 9号テラス
第116図 9号テラス・東斜面出土遺物
第117図 10号テラス
第118図 12号テラス
第119図 12号テラス出土遺物
第120図 2号焼土坑・3号焼土坑
第121図 2号焼土坑・3号焼土坑出土遺物
第122図 G区m-19グリッドの鍛冶炉と土坑

表 目 次

表1	整理工程表
表2	周辺の遺跡
表3	周辺の古墳
表4	遺構一覧
表5	黒熊中西遺跡・瓦類分類表
表6	土器観察表
表7	軒丸瓦観察表
表8	軒平瓦観察表
表9	丸瓦・平瓦・文字瓦等観察表（含・軒丸瓦の丸瓦部・軒平瓦の平瓦部）
表10	鉄製品観察表

写真図版目次

P L . 1	航空写真(昭和22年米軍撮影)
P L . 2	遺跡遠景
P L . 3	遺跡全景(西から)
P L . 4	遺跡全景(東から)
P L . 5	遺跡全景(北から)
P L . 6	遺跡中央部
P L . 7	頂部区景観
P L . 8	頂部区・西尾根区の景観
P L . 9	1号道路跡
P L . 10	3号道路跡
P L . 11	4号道路跡
P L . 12	1号建物跡景観
P L . 13	1号建物跡全景
P L . 14	1号建物跡全景
P L . 15	1号建物跡礎石
P L . 16	1号建物跡土坑・景観
P L . 17	2号建物跡調査状況
P L . 18	2号建物跡景観
P L . 19	2号建物跡全景
P L . 20	2号建物跡遺物出土状況
P L . 21	2号建物跡基壇上の状況
P L . 22	2号建物跡基壇化粧
P L . 23	2号建物跡基壇化粧
P L . 24	2号建物跡礎石
P L . 25	2号建物跡礎石抜き取り穴
P L . 26	2号建物跡礎石抜き取り穴
P L . 27	2号建物跡基壇隅部羽釜設置状況
P L . 28	2号建物跡地鎮状遺物
P L . 29	2号建物跡基壇北方状況
P L . 30	2号建物跡基壇築成状況
P L . 31	2号建物跡基壇周辺整地状況
P L . 32	3号建物跡全景
P L . 33	3号建物跡全景
P L . 34	3号建物跡礎石
P L . 35	3号建物跡礎石抜き取り穴
P L . 36	3号建物跡遺物出土状況・鍛冶状遺構
P L . 37	3号建物跡基壇築成状況
P L . 38	4号建物跡全景
P L . 39	4号建物跡基壇
P L . 40	4号建物跡礎石・祭壇状遺構
P L . 41	5号建物跡景観
P L . 42	5号建物跡全景
P L . 43	5号建物跡土層

P L . 44	5号建物跡調査状況
P L . 45	5号建物跡鍛冶炉
P L . 46	7号建物跡全景・石組遺構
P L . 47	1号特殊遺構
P L . 48	1号特殊遺構礎石・柱穴
P L . 49	1号テラス全景・景観
P L . 50	1号テラス全景・不詳遺構
P L . 51	1号テラス土坑
P L . 52	3号テラス
P L . 53	4号テラス
P L . 54	7号テラス
P L . 55	7号テラス1号掘り込み遺構
P L . 56	7号テラス2号掘り込み遺構
P L . 57	8号テラス全景
P L . 58	8号テラス鍛冶作業面
P L . 59	8号テラス鍛冶炉
P L . 60	9号テラス・10号テラス
P L . 61	12号テラス
P L . 62	焼土坑・鍛冶炉
P L . 63	道路跡・1号建物跡出土遺物
P L . 64	2号建物跡軒丸瓦・軒平瓦
P L . 65	2号建物跡瓦
P L . 66	2号建物跡瓦
P L . 67	2号建物跡鬼瓦
P L . 68	2号建物跡出土遺物(基壇上)
P L . 69	2号建物跡出土遺物(基壇上)
P L . 70	2号建物跡出土遺物(基壇下)
P L . 71	2号建物跡出土遺物(地鎮状・基壇北方)
P L . 72	2号建物跡出土遺物(基壇北方)
P L . 73	2号建物跡出土遺物(基壇西方)
P L . 74	3号建物跡軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦
P L . 75	3号建物跡出土遺物(鬼瓦・基壇上)
P L . 76	3号建物跡出土遺物・4号建物跡出土遺物
P L . 77	5号建物跡出土遺物(基壇上)
P L . 78	5号建物跡出土遺物(基壇中)
P L . 79	5号建物跡出土遺物(基壇下)
P L . 80	7号建物跡石組遺構出土遺物
P L . 81	8号建物跡出土遺物
P L . 82	1号テラス出土遺物
P L . 83	4号テラス・D斜面・7号テラス出土遺物
P L . 84	7号テラス・8号テラス出土遺物
P L . 85	8号テラス・焼土坑出土遺物
P L . 86	鉄製品(2建)
P L . 87	鉄製品(3建)
P L . 88	鉄製品(各遺構)
P L . 89	壁材(2建)
P L . 90	壁材(3建・5建)
P L . 91	鉄滓(2建・3建・8建)

抄 録

1 遺跡の概要

本遺跡は、群馬県多野郡吉井町大字黒熊字中西に所在する。吉井町の南東部に位置し、藤岡市との境界がほど近い。地形的には、鎭川右岸の河岸段丘の最上位面に立地する。が、遺跡付近の段丘面は浸食により尾根状の低丘陵と浸食谷の混じる地形となっており、黒熊中西遺跡の今次調査区は、標高200mほどの東西方向の細長い尾根とその北側斜面（中西区）、およびそれに西接する丘陵（庚申山区）の2地点が調査対象となった。発掘調査は、平成元年11月から平成3年3月まで1年余を要して実施され、整理事業は平成3年4月から平成5年3月までの2年間で実施される。

2 遺構の概要

発掘調査により確認された遺構は、縄文時代の遺物が微量あるものの、主たるものは、古墳時代末期から平安時代後期にかけての住居跡（集落跡）と平安時代の寺院跡の2つである。遺構の数量は下記のとおりである。

種 別	時 代	数 量	備 考
道 路 遺 構	平安	7	
礎石建物跡	平安	6 (8)	瓦葺2棟 10～11世紀
テラス	平安	9	工房など
竪穴住居跡	古墳・奈良・平安	78	6世紀～11世紀
掘立柱建物跡	平安	3	
溝	(古墳・奈良)・平安	10	
井戸	平安	1	石組み
土坑	古墳・奈良・平安	約200	
鍛冶炉	平安	10	

3 まとめ

- ① 縄文時代の遺物は、土器片や石器が数十点出土した。明確な遺構は確認されなかった。
- ② 古墳時代末期から平安時代にかけての住居跡は調査区内に散在する。古墳時代末から平安時代前期までの住居跡は丘陵頂部から一段下った台地斜面部に集中しており、平安時代中後期の住居跡は寺院跡の建物の近辺など寺院跡域内にも分布するものがある。後者は一般的な集落というより、寺院との関わりを強く有していたのではないかと推測される。
- ③ 平安時代の寺院跡は、礎石建物6～7棟、テラス遺構9面ほどからなり、前者は寺院の主体となる堂宇、後者は付属的な施設や工房あるいは空間面など見られる。そのほかに本調査では、道路遺構、相輪様状遺構、燃火跡、石組遺構など従来あまり例をみない遺構、あるいは性格を特定しがたい遺構を伴っている。丘陵頂部に立地する大規模な寺院遺構というやや特異な遺跡の構造が明らかにされるとともに、その細部の様相までもが把握され、有意義な資料を提供するものと考えられる。

黑熊中西遺跡

(1)

第I章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至る経過

関越自動車道上越線は、東京都練馬を起点に関越自動車道新潟線を併用し、群馬県藤岡JCから長野県を経て新潟県上越市に至る高速自動車道として、日本道路公団東京第二建設局により建設される。群馬県内は、藤岡市・吉井町・甘楽町・富岡市・松井田町を通過し長野県佐久市までの69kmが当面の工事区間である。本線建設による埋蔵文化財の取り扱い、群馬県教育委員会文化財保護課が行い、路線内の分布調査をもとに昭和60年、上越線地域埋蔵文化財調査計画を策定した。全調査対象地は55遺跡、約100万㎡であり、このうち、藤岡市から富岡市の区間の約76万㎡を群馬県埋蔵文化財調査事業団が受託した。本事業団はその担当組織として「関越道上越線調査事務所」を吉井町内に設置し、昭和61年から5年次の予定で発掘調査を開始した。

吉井町域を通過する路線は、鎗川をつくる中位段丘・上位段丘およびそれに連なる丘陵地や山地またそれらを開析する小河川上を東西に走るようになっており、一部の山地と低地部分を除き、大部分が埋蔵文化財の包蔵地つまり発掘調査の対象地となった。

今回報告する黒熊中西遺跡を含む事業名栗崎八幡遺跡の調査範囲は、地形的状況から栗崎・八幡・中西の3地区に分けることができ、発掘調査の時点ではそれぞれ栗崎区・八幡区・中西区と仮称していたが、整理の時点では別個の遺跡とすることとし、黒熊栗崎遺跡・黒熊八幡遺跡・黒熊中西遺跡の名称を用いることとしたものである。

調査面積は、事業名栗崎八幡遺跡としては68,730㎡である。これを遺跡ごとの内訳で見ると、黒熊栗崎遺跡が32,100㎡、黒熊八幡遺跡が19,900㎡、黒熊中西遺跡が16,780㎡となる。

事業名栗崎八幡遺跡の発掘調査は、まず黒熊栗崎遺跡の発掘調査が昭和62年4月1日から昭和62年9月30日に実施し、ついで黒熊八幡遺跡と黒熊中西遺跡が平成元年7月1日から平成3年3月31日まで一連的に実施した。後二者については、おおむね黒熊八幡遺跡が平成元年7月～平成2年3月及び平成2年12月～平成3年3月、黒熊中西遺跡が平成元年11月～平成3年3月に調査した。

第2節 発掘調査の方法と経過

(1) 試掘調査

黒熊八幡遺跡と黒熊中西遺跡は、本調査に先立つ、昭和63年7月に、試掘調査を実施した。試掘調査の目的は、遺構の種別および分布密度の確認にあった。担当者は、群馬県埋蔵文化財調査事業団の右島和夫、船藤亨、小林徹の3名である。調査は10mごとに幅1.2mのトレンチを設定し、バックホウを使用して掘削した。試掘調査の面積は、遺跡全体の約12%である。

試掘調査の結果、黒熊八幡遺跡では台地面で数軒の竪穴住居跡があって集落跡であることが確認されると共に、東側の谷地部分では浅間B軽石の堆積が確認され、B軽石下の水田跡が予測された。黒熊中西遺跡では、まず尾根の頂部に瓦と土器が多量に堆積し、寺院跡の存在が推測された。また、東側斜面で瓦もしくは須恵器の窯跡が推測された。尾根の北斜面部では表土下にローム層に類似する明黄褐色土が厚く堆積し遺構確認面の認定が難しいことから竪穴住居の確認はごく少数にとどまり、遺跡全体として、遺構量はあまり多くはないであろうと推測された。が、本調査では住居跡だけでも70軒を上回る多量の遺構が確認された。

(2) 発掘調査の方法と経過

調査区 黒熊中西遺跡の調査面積は、16,780 m²である。調査範囲は、北東部に狭長な取り付け道路部分が付くが、それを除くとおおむね幅90 m・最大長250 mの東西に長い台形状をなす。

調査グリッド 調査グリッドの設定にあたっては、遺構測量の基準に国家座標を用いることにしたため、国家座標軸に準拠して調査範囲をカバーできるようにした。ただし、黒熊中西遺跡の発掘調査は、東接する黒熊八幡遺跡と同時に調査したため、グリッドの設定もこの二遺跡を一連的にカバーすることとなった。具体的には、一辺100 mの正方形の大グリッドを組み、東から西へアルファベットの大文字でA・B・C……と名付けた。

この大グリッドをタテ・ヨコ各25等分し、一辺4 mの正方形の小グリッドとした。小グリッドの軸の名称は、南北軸つまりY軸をアルファベットの小文字で東からa・b・c……とし、東西軸つまりX軸を北から算用数字で0・1・2……とした。そして、小グリッドの名称は北東隅の軸交点の名称を用いることとした。例えば、「G区のg25グリッド」のようである。が、略す場合はこれを「G-g25グ」と表記することとした。なお、座標値は、A区のa0グリッドが、X軸で+26,850 m、Y軸で-72,700 mである。

小調査区の設定 黒熊中西遺跡は、南半部分が東西に長い尾根となっている。また、北半部は尾根の北斜面となっているが、北から2本の小谷が入るため、三つの小尾根に分かれている。調査にあたっては、このような微地形に応じて調査区を区分するのが適切と考え、尾根の頂部を「頂部区」、小尾根を「東尾根区」・「中尾根区」・「西尾根区」とし、後日、さらに頂部区直下の平坦面を「1号テラス区」、頂部区東側の斜面部を「東斜面区」とし、さらに中尾根区を東西（中尾根東区・中尾根西区）、西尾根区を南北（西尾根南区・西尾根北区）に細分した。つまり、八つの小調査区に区分した。ただし、この小調査区は、遺構の所在位置を簡明に示す意図を主とした便宜的なものであって、遺構番号は基本的には全調査区で通番で付すようにした。

発掘調査 発掘調査は、平成元年・2年の2年度にまたがって実施した。

黒熊中西遺跡は、試掘調査により、尾根の頂部付近に古代の寺院跡の存在が予測されていた。そして、寺院跡には礎石建物や基壇建物を伴うことが一般的であるため、表土の除去には重機（バックホウ）を使うことは避けなければならないことであった。そのため、基本的には、調査区が畑と山林の混じる地であることから、まず山林の伐採と除去を行い、その後、地表観察とボーリングステッキによって礎石建物を探してその部分は手作業による表土除去、それ以外の部分をバックホウによる表土除去を行うこととした。

平成元年度の調査は、県教委と道路公団との協議の結果、工事用道路部分を優先的に調査することになった。その対象地は、調査区の北側としたが、以後の廃土置き場を確保する意図からやや広めに取った。つまり、おおむね30 mの幅で調査することとした。調査は、平成元年11月～12月および平成2年2月～3月に実施した。11月中旬に雑木の伐採、11月下旬から12月中旬にバックホウによる表土除去を行うと共に、12月1日からは遺構確認作業と一部の遺構の掘り下げを行ったが、12月20日から八幡地区の調査に全員がかかったため、一時中断した。再開したのは2月8日であって、まず堅穴住居跡24軒の調査を行った。その後、土坑と溝の調査および旧石器の試掘を3月末までに終了した。

平成2年度の調査は、第一段階として、昨年度の作業を継続して堅穴住居跡を主体とする中尾根区などの斜面部の調査を行い、第二段階として寺院跡が存在する頂部区の調査を行うこととした。

調査は、4月初旬に頂部区の未買収地を除いた部分の雑木の伐採から開始し、その後、東尾根区・中尾根区・西尾根北区の表土除去を行い、堅穴住居跡などの調査にはいった。東尾根区は、遺構数は少ないものの、59号住居付近では遺構面が3層以上重なることや掘立柱建物・溝・土坑・焼土などが複雑に重複することから、調査に細心の注意を要した。中尾根区の堅穴住居跡は、昨年度確認の13軒のほかに、新たに28軒が確認され、

第2節 調査の方法と経過

その他に溝・土坑・道路なども確認された。西尾根北区は、7号テラスが確認された。西尾根北区は6月末に終了したが、中尾根区は8月、東尾根区は10月の段階でほぼ終了した。この間、5月下旬から6月上旬に、庚申山区のA区を新たに取り込んで調査した。4月以降、きわめて雨が少なかったことから、土の乾燥が激しく、粘質土や礫層の露出部分での調査はことさらに苦しい作業が継続した。

7月にはいと、梅雨のため数日の降雨日があったが、小雨傾向は不変だった。調査は中尾根区・東尾根区を継続しつつ、新たに、西尾根南区の調査に着手した。この部分はややきつい斜面であるので、当初は遺構の存在は予測していなかったが、厚く堆積した浅間A軽石の下から礎石建物（1号建物・5号建物）・道路2本・竪穴住居跡5軒などが見つかり、寺院跡の一部にあたることが判明した。また、バックホウにより東斜面区の表土除去を行ったところ、試掘段階で窯跡が推測された所からは煉瓦が出てきたため、近代の炭窯の可能性が高くなった。この部分もきわめてきつい斜面であることから、遺構の存在は予測していなかったが、2つのテラス状遺構が確認された。

8月には、一部が未買収地となっていた頂部区の問題も調査実施の方向で解決し、雑木を除去して調査にはいった。このようにして西尾根南区の1号建物・5号建物に続いて、頂部区の2号建物・3号建物・4号建物など、寺院跡の主要遺構の調査に着手した。2号建物・3号建物・4号建物は礎石建物であり、表土の除去にバックホウは使えないので、手作業で行った。例年のない猛暑の中で密生する篠を取り払うという作業となった。また、上旬には中尾根区・東尾根区・西尾根北区の空撮を行った。

9月には、礎石建物遺構は、瓦や鬼瓦などの遺物ならびに遺構面の検出作業がピークを迎えた。礎石建物の周辺の竪穴住居跡や道路跡の調査も併行した。廃土の搬出のためにベルコンを導入し、作業の効率化をはかった。この頃から県内外の研究者の見学が増えだした。

10月には、奈良国立文化財研究所の宮本長二郎氏・上原真人氏を招いて礎石建物の調査の方法ならびに本遺跡の特徴点などについてご指導をいただいた。礎石建物の調査は、遺物取上げおよび遺構平面図の作成が中心となった。調査は8号テラスや竪穴住居跡の発掘、東斜面区や1号テラス区の遺構確認なども併行した。10月20・21の両日には現地説明会を実施した。

11月には、1～5号の礎石建物は、写真測量を行い、その後、エレベーション図などを採りつつ、基壇の断ち割りを開始した。1・8・9・10号テラスや礎石建物北方の急斜面、および竪穴住居跡などの諸調査も継続した。

12月には、庚申山区のB区・C区の調査が新たに取り入れられた。この調査には調査体制の1/3の人員をあて、12月20日に終了した。本来の調査区も、1号テラス区や礎石建物北方斜面部の遺構などを継続調査した。なお、年度当初の予定では黒熊八幡遺跡も調査の範囲に含まれていたのであるが、黒熊中西遺跡が予定以上に時間を要したため、調査体制を組み直して当たることとなった。

1月には、調査区の明け渡しの関係で、1号テラス区や礎石建物北方の斜面部の調査が急務となった。礎石建物の調査も急ぐ必要があり、厳寒期の寒風の中、霜溶けの足元に注意しながら調査を行った。

2月には、2号・4号・5号の三つの礎石建物の基壇下の調査を残すのみとなり、中旬に現地での調査は終了した。以後、3月末まで黒熊八幡遺跡の調査と整理作業を行った。

第 I 章 発掘調査の経過

(3) 整理の経過

黒熊中西遺跡の整理事業は、平成3年度・4年度の2カ年で実施される。なお、報告書は単年度刊行の形を採るため、2分冊となる。以下、平成3年度の整理事業の経過を記す。

4月から7月までは、主に土器・瓦などの遺物の接合・復元作業を行った。5月・6月には瓦の分類と量の調査、鉄製品のクリーニング、礎石建物跡の遺物の出土位置分類などを併行した。土器類の接合は大形の器種が少ないことから順調に進んだが、瓦の接合、特に丸瓦・平瓦は量が多いことから時間を要する反面、接合資料は少なかった。

7月から9月までは、遺物の実測作業、および遺跡全体図・礎石建物跡の遺構図のトレース用原図の作成作業を行った。遺物の実測は、器械実測と手実測を併行した。

10月から11月までは、遺物・遺構のトレース作業を行った。

12月以降、遺構・遺物図の版下作成、写真図版の版下作成、遺物観察表の作成などを行った。本文の執筆は須田が行った。その後、収蔵作業を行い、本年度の作業を終了した。

表1 整理工程表

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	備 考
遺物	接 合	—————												
	復 元	—————												
	実 測				—————									
	ト レ ース						—————							
	版 下 作 成							—————						
	写 真 撮 影				—									
	写真版下作成									—————				
遺構	原 図 整 理		—————											
	ト レ ース						—————							
	版 下 作 成							—————						
	写真版下作成										—————			
原稿	土器観察表						—————							
稿 本 文		—————												
そ の 他														校正・収納

第3節 黒熊中西遺跡の発見とその周知経過について

黒熊中西遺跡は、今次の発掘調査によって瓦葺の建物2棟を含む数棟の堂宇からなる平安時代の寺院跡であることが判明した。が、寺院跡の存在については発掘調査の当初から予想されていたものではない。換言すれ

ば、本遺跡は県内の考古学研究者とくに古代寺院跡の研究者に周知されていたものではなく、いわば未知の寺院跡が発見されたと言える。

しかし、本遺跡つまり吉井町大字黒熊の中西地区に瓦が散布することは、実はごく少数の人達には知られていたものであり、正満英利氏もその一人でおられる。つまり、第2次世界大戦直後、山林であった本遺跡地が開墾されて畑となった時期があり、それに伴って瓦が出土した。正満氏のお話によると、かねてから県内の古瓦の収集をされていた氏は当地から瓦が出土するとの情報を受け、すぐさま瓦の採集にあられた。氏が瓦を主として採集された地点は、今次調査における中尾根区と西尾根区間の谷の部分であって、当時は畑となっていた。そして、当遺跡については、瓦が出土すること、及び丘陵頂部において礎石が散見されたことから寺院跡が存在するのではないかと推測した、とのことである。本遺跡における瓦葺建物は丘陵頂部に所在する2号建物と3号建物であり、おそらくその部分の開墾によって出た瓦が谷部に流し落とされ、正満氏はそれを採集されたものと思われる。

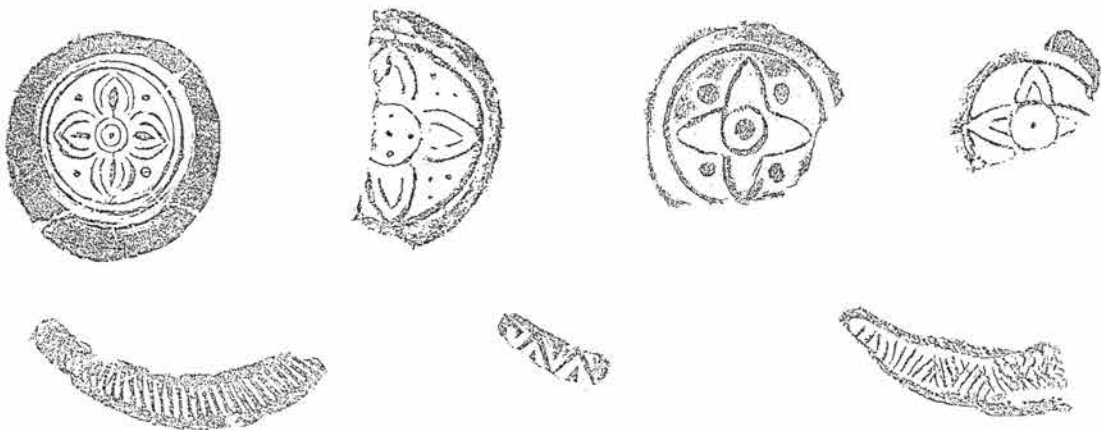
正満氏の採集された瓦は「中西遺跡の古瓦」と呼ばれるのが慣例であるが、その周知については、以下のような経緯がある。まず、正満氏はこの瓦について特に公表されることはなかったようである。ついで、久保田文雄氏が群馬大学学芸学部の昭和27年度の卒業論文の資料として、また須田茂は同大学教育学部の昭和47年度の卒業論文の資料として瓦の拓本を採らせていただいた。この資料も公開されたものとは言い難いが、後者についてはその後の古瓦の論考（『群馬県における古代軒瓦の変遷』『入谷遺跡』群馬県新田町教育委員会1981）等の中で公表させていただいた。

その後、正満氏は本資料を群馬県立歴史博物館に寄贈された。そして、同館の第8回企画展において展示され、図録（『群馬の古代寺院と古瓦』1981）にも写真図版が掲載された。また、第3回関東古瓦研究会の研究資料（『第3回関東古瓦研究会研究資料』1982）に本遺跡の瓦の拓影図が掲載された。この二者を通して本遺跡出土の瓦は周知されたと言えよう。

昭和58年度には高崎市教育委員会により綿貫遺跡が発掘調査され、一棟の瓦葺基壇建物が検出されたが、その瓦は中西遺跡のものと同類似性が高いことが注目された（『綿貫遺跡』1985）。

しかしながら、瓦が周知されたことに反して、遺跡地そのものは正満氏等の踏査以後、追究されることはなくなり、遺跡の所在地さえも研究者の間で不明となっていたのである。

今次調査は30年以上の歳月を隔て、忘れ去られつつある遺跡に再び光をあてたものである。



参考図 黒熊中西遺跡既出の瓦

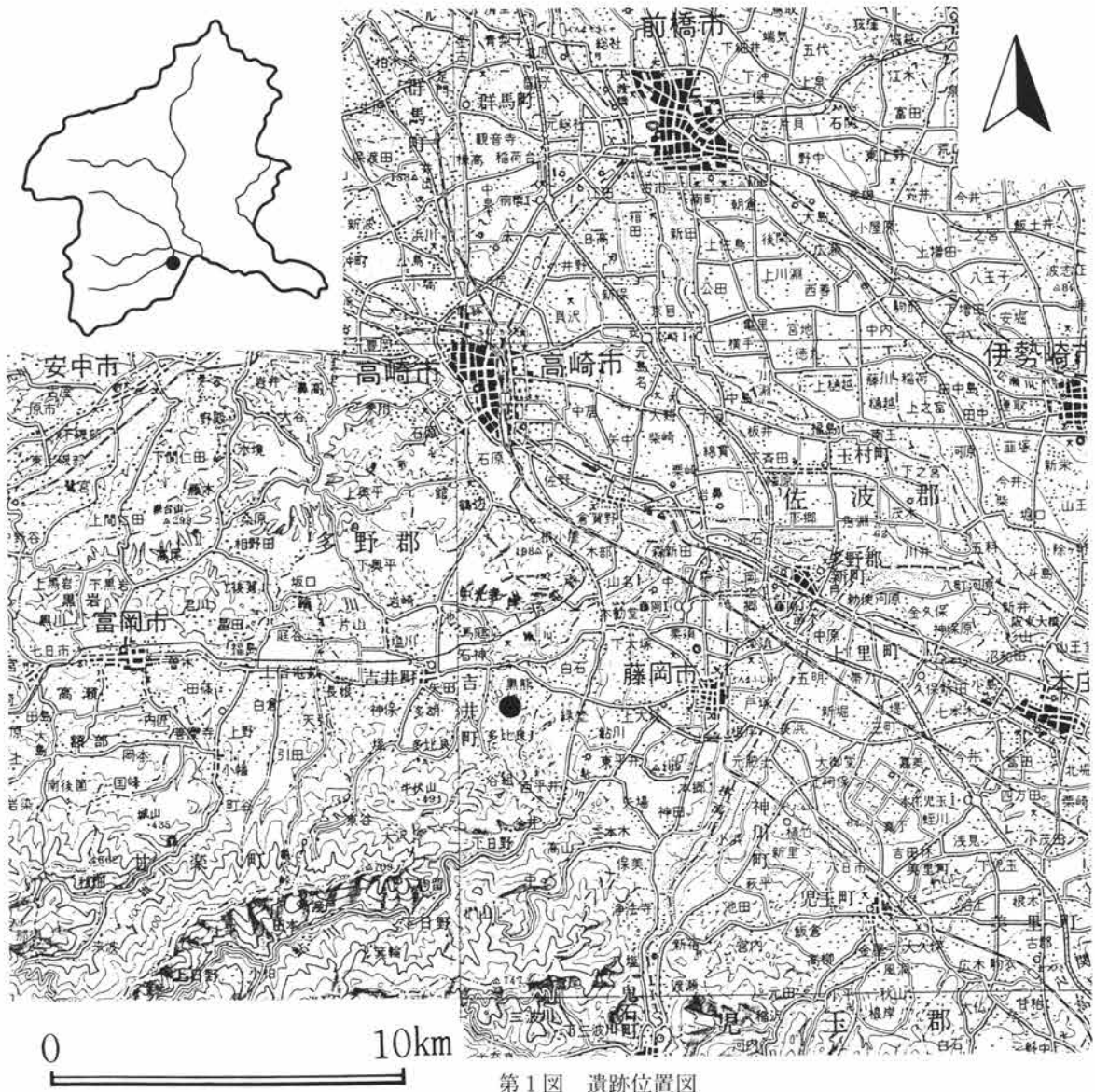
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

本遺跡は、群馬県多野郡吉井町大字黒熊に所在する。吉井町は群馬県の南西部に位置し、遺跡はこの吉井町の東端部、東接する藤岡市との境界付近に所在する。

本遺跡は、地形的には鍋川南岸の河岸段丘から丘陵に移行する地に立地する。鍋川は長野県境に源を發し、北側の観音山丘陵と南側の多野山地（関東山地）の間を約40 km東流し、烏川に合流する。鍋川は下流域つまり、富岡市以東の右岸および左岸の一部に河岸段丘が形成されている。特に右岸においては三段からなる段丘面が良く発達し、下位面と中位面は典型的な段丘面が見られる。が、上位面は河川の侵食により丘陵状化している。

そして、この鍋川右岸に沿って東西に長く続く段丘面は、多野山地から北流して鍋川に流入する中小の河川、つまり雄川・白倉川・天引川・大沢川・矢田川・土合川等により分断され、これらの河川と河川の間が一単位



第1図 遺跡位置図

の段丘面ととらえられる形となっている。

その中の最も東の段丘面は土合川と鮎川に挟まれた面である。段丘面はやはり三段に分かれ、下位面は三ツ木段丘、中位面は深沢・白石段丘と呼ばれ、上位段丘面は吉井町黒熊から藤岡市西平井にかけた丘陵地となっている（この黒熊から西平井にかけた丘陵は、現在普遍的な固有名称が無いので、以下、本報文では「黒熊緑野丘陵」と呼称したい）。標高は、下位面が90 m、中位面が120～150 m、上位面が170～220 m程である。本遺跡は、この土合川と鮎川の中の河岸段丘の、上位面北端部のやや西寄りに位置していることになる。前述したように上位段丘面は侵食が進んでおり、本遺跡の周辺においても標高200 mほどを頂高とする尾根（台地）と谷が複雑に入り混じる地形をなしている。発掘調査の中ではそれを西から庚申山、中西、八幡、栗崎、根岸の尾根（台地）と呼称した（ちなみに、地元では、八幡の尾根を「徳山」、栗崎の尾根を「柿山」あるいは「みの山」と呼んでいる）。このように本地域に見られるような丘陵地帯に深く谷が入り込んだ地形を古代の人々は「いりの（入野）」と呼んだようであって、『万葉集』には「吾が恋はまさかもかなし草枕多胡の入野の奥もかなしも」（巻14・3403）と歌い込まれている。

これらの尾根にはそれぞれ遺跡が分布しており、この度の関越自動車道土越線建設に伴う埋蔵文化財調査の中で調査の対象となり、庚申山と中西の丘陵は黒熊中西遺跡、八幡の丘陵は黒熊八幡遺跡、栗崎の丘陵は黒熊栗崎遺跡・塔之峰遺跡、根岸の丘陵は白石根岸遺跡と命名されている。なお、黒熊中西遺跡と黒熊八幡遺跡の北側に広がる中位面は黒熊遺跡群と命名されている大規模な集落遺跡である。

黒熊中西遺跡の所在する尾根は標高はさして高くないが、眺望は良い。尾根の頂部から南を見ると、牛伏山や御荷鉾山などの多野山系の山並みが連なっており、逆に北を見ると眼下に鍋川の谷、その向こうに観音山



第2図 遺跡周辺の旧地形（迅速測図「吉井町」明治18年測量）

丘陵、その奥に浅間山・榛名山・子持山・赤城山などの上野国の山々、目を右に転じれば関東平野が広がり、はるかに筑波山までも見ることができる。

なお、本遺跡東方の藤岡市側は地形環境を異にする。すなわち、鎭川に沿う河岸段丘は鮎川を東限とし、その東側は鮎川と神流川の二河川によって形成された扇状地が形成されている。扇状地面は南北6 km・東西4 kmにおよび、その広く平坦な扇状地面は藤岡台地と呼ばれている。

- 参考文献 1 『吉井町誌』 吉井町誌編纂委員会 1974.
2 『群馬のおいたちをたずねて』 上毛新聞社 1977.

第2節 歴史的環境

本遺跡の周囲には数多くの遺跡が分布する。ここでは本遺跡を中心に東西10 km、南北7 kmほどの範囲、つまり吉井町のほぼ全域と藤岡市の西部域まで含め、原始古代に焦点を絞って遺跡の分布状況を見ることとした。 (以下、遺跡の番号は、第4図、表2に対応し、古墳は表3に対応する。)

旧石器時代

吉井町周辺における該期の遺跡は、採集資料として神保字植松・多比良字新堀において尖頭器が1点ずつ発見されているのみであった。が、昭和61年から開始された関越道上越線の一連の調査により、甘楽町の天引向原遺跡・白倉下原遺跡でAT層下の暗褐色粘質土中から良好なブロックが確認されているのをはじめとして、神保富士塚遺跡(7)・矢田遺跡(17)・多比良追辺野遺跡(32)などで層位あるいはブロックの把握がなされている。

また、藤岡市側では北山遺跡が良好な内容を示しているが、緑野遺跡群内(59)でAT層に伴う剥片が確認されている。

縄文時代

縄文時代の遺跡は鎭川の両岸に分布し、遺跡数も多いが、時期により様相は異なる。

草創期・早期の遺跡は西場脇遺跡(3)、入野遺跡(34)などで遺物がみとめられるが、分布は希薄である。藤岡市側では東原遺跡(55)と竹沼遺跡(60)がある。

前期の遺跡は、鎭川右岸の上位段丘面に集中しており、中位段丘面にも広がりが見られる(7、9、34、47、50、51)。左岸域では東吹上遺跡(92)がある。藤岡市側では鮎川左岸の上位段丘面や中川流域の台地面に分布する(65)。

中期の遺跡は著しく増加し、上位段丘面や中位段丘面のみでなく下位面にも見られる(2、8、9、15、16、17、51、57)。鎭川左岸では観音山丘陵南部の高所にも分布がある。藤岡市側でも遺跡数は増加しており、底台地まで分布域が広がっている。

後期は鎭川右岸の上位・中位・下位の各河岸段丘面に分布があるが、全体に減少傾向にある(6、14、16、19、78、86)。藤岡市側でも分布は中期とほぼ同様である(59、68、70)。

中期から後期にかけては、敷石住居跡が出現するが、藤岡市の中大塚遺跡(63)や寺前遺跡(70)などがある。晩期になると、遺跡は激減し、わずかに塚原遺跡(74)が認められるのみである。藤岡市側では緑野遺跡群(59)で土坑や土器の出土がある。なお、藤岡市中栗須の谷地遺跡は後期から晩期にかけた、耳飾り、ペンダント、石棒、石剣、岩版などの豊富な遺物が出土している。

なお、鎭川中下流域の縄文時代の遺跡分布については、鬼形芳夫・内木真琴「鎭川右岸下流域段丘上における縄文時代遺跡分布調査」『群馬の考古学』群馬県埋蔵文化財調査事業団昭和63年が詳しい。



第4図 周辺遺跡分布図

表2 周辺の遺跡

番号	遺跡名	旧	繩	弥	古	奈平	瓦	窯	田島
1			○	○	○	○			
2	長根安坪遺跡		◎	◎	◎	◎			
3	西場脇遺跡		○		◎	◎	○		
4	折茂上野場遺跡				○	○	○		
5	折茂東遺跡			◎	○	○			
6	長根羽田倉遺跡		◎	◎	◎	◎	○		◎
7	神保富士塚遺跡	◎	◎	◎	◎	◎			
8	稲荷山遺跡		○	○					
9	神保植松遺跡		◎	◎	◎	◎			
10			○	○	○	○	○		
11			○	○	○	○			
12			○						
13	神保下城遺跡				◎	◎			◎
14	多胡蛇黒遺跡	◎			◎	◎			
15	川内遺跡		◎	◎	◎	◎			
16	椿谷戸遺跡		◎		◎	◎			
17	矢田遺跡	◎	◎		◎	◎	○		
18	柳田遺跡				◎	◎			
19					○	○			
20			○		○	○	○		
21						○			
22			○			○			
23			○						
24					○	○			
25			○		○	○			
26			○		○	○			
27			○						
28	滝の前窯跡							○	
29			○	○	○	○			
30			○		○	○			
31	東沢遺跡				◎	◎			
32	多比良追辺野遺跡	◎	◎	◎	◎	◎	○		
33	千歩原遺跡		○		○	○	○		
34	入野遺跡		◎	◎	◎	◎			
35						○	○		
36	末沢窯跡							◎	
37	不動沢遺跡						○		
38			○				○		
39			○			○			
40			○			○			
41	藤岡吉井窯跡群							◎	
42	金山瓦窯跡							◎	
43	上の場遺跡						○		
44	下五反田窯跡							◎	
45	多比良平野遺跡					◎	○		
46	黒熊中西遺跡		○		◎	◎	◎		
47	黒熊八幡遺跡	◎	◎		◎	◎	◎		◎
48	黒熊栗崎遺跡		○			◎			
49	塔ノ峰遺跡					○	○		
50	白石根岸遺跡		◎			◎	○		
51	黒熊遺跡群	○	◎	◎	◎	◎	○		
52	三ツ木橋向遺跡								
53			○						
54					○	○			
55	東原遺跡		○			○			
56		○			○	○			
57	大御堂遺跡		◎		◎	◎	◎		
58	薬師原遺跡		◎		◎				
59	緑野遺跡群	◎	◎		◎	◎			
60	竹沼遺跡	○	◎	◎	◎	◎			

61									◎
62	道上遺跡					◎	○		
63	中大塚遺跡				◎				
64	滝前遺跡		○		◎	◎			
65	滝下遺跡		◎		◎				
66	新掘遺跡						◎		
67	上宿B遺跡						◎	◎	
68	西原遺跡		◎				◎		
69	北原遺跡							◎	
70	寺前遺跡		◎		◎	◎			◎
71	稲荷屋敷遺跡		◎				◎		◎
72			○						
73			○						
74	塚原遺跡				○	○		◎	
75	祝神遺跡				○				
76			○		○	○			
77							○		
78	砂井戸遺跡		○		○	○	○		
79	雑木見遺跡							○	
80	岡遺跡							○	○
81			○				○		
82							○	○	
83	道六神遺跡							◎	○
84			○						
85			○	○					
86			○						
87							○	○	
88							○	○	
89			○				○	○	
90			○				○	○	
91			○				○	○	
92	東吹上遺跡		○	○	◎	◎			
93			○	○	○	○			
94			○						
95			○						
96			○				○	○	
97	富岡遺跡		○	○			◎		
98			○						
99	川福遺跡							◎	
100								○	
101								○	
102	馬庭東遺跡		○					○	○
103			○					○	
104								○	
105								○	
106								○	
107	多胡碑								
108	山ノ上碑								
109	吉井条里								
110	下大塚条里								
111	水窪遺跡								○
112	上栗須・下大塚・中大塚						◎	◎	◎

※ ◎は発掘調査により遺構や遺物が確認されたもの
○は遺物の散布が確認されたものを示す

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

表3 周辺の古墳

1 安坪古墳群	21 片山古墳群	41 猿田古墳群
2 恩行寺裏古墳	22 小棚古墳群	42 白石古墳群
3 神保古墳群	23 岩崎古墳群	43
4 塩古墳群(松山支群)	24 馬場塚古墳	44 緑野古墳群
5 塩古墳群(金堀塚支群)	25 池四朗塚古墳	45 南坂古墳群
6 中天水古墳群	26 御穴塚古墳	46 東平井古墳群
7 多胡古墳群	27 薬師穴横穴群	47
8 多胡薬師塚古墳	28 松木瀬古墳	48
9 稲荷塚古墳	29 西浦古墳群	49
10 山ノ神古墳群	30 岩井古墳群	50 片山1号墳
11 山王山古墳群	31 山ノ上古墳	
12 石神祝神古墳群	32 山ノ上西古墳	
13 小串古墳群	33 伊勢塚古墳群	
14 多比良古墳	34 稲荷山古墳	
15 塚原古墳群	35 伊勢塚古墳	
16 高木古墳群	36 七輿山古墳	
17 下涼古墳群	37 宗永寺古墳群	
18 下池古墳群	38 皇子塚古墳	
19 北原古墳群	39 十二天塚古墳	
20 本郷古墳群	40 稲荷山古墳	

弥生時代

弥生時代の遺跡は、鎭川右岸上位・中位段丘面に立地しており、中でも長根段丘・神保段丘・多胡段丘には濃密である。一方、藤岡市側では沖積地内の微高地に遺跡が点在する。

中期の遺跡は上位段丘から中位段丘にかけてのなだらかな斜面に分布する。稲荷山遺跡(8)、長根羽田倉遺跡(6)、神保富士塚遺跡(7)、神保植松遺跡(9)などが知られるが、いずれも再葬墓や土坑などである。藤岡市側では沖Ⅱ遺跡が中期初頭の遺跡として著名であり、緑野遺跡群には土器の出土がある。

弥生後期の遺跡は、遺跡数の増加とともに立地も多様化する。鎭川右岸の中位段丘面では主として樽式土器を伴う集落の定着が見られる(2、5、6、9、15、32、34、51)。が、藤岡台地では該期の集落の調査はほとんどない。

古墳時代

古墳時代の集落は、広範な分布が見られるが、時期によりその様相が異なる。

前期の集落は、鎭川の中位段丘から上位段丘にかけて分布が見られる(2、3、5、7、9、15、32、34、51)。藤岡市側では竹沼遺跡(60)がある。

中期の集落は、遺跡数が少なく、吉井町側で折茂東遺跡(5)、藤岡市側で緑野遺跡群(59)がある。後期の集落は、急激に増加し、ほぼ全地域でみとめられる。発掘調査によって数十軒から百軒を越す大規模な集落の見られる遺跡もある。

古墳については、鎭川および鮎川の中下流域は群馬県域でも密度の濃い地域として著名である。

鎭川流域では、富岡市の茶白山古墳と茶白山西古墳が初期古墳としてあり、吉井町周辺ではそれにやや後出する片山1号墳(50)が粘土槨と内行花文鏡・石製模造品を有し4世紀末葉、それに続く恩行寺裏古墳(2)が5世紀前半代に位置付けられている。6世紀以降は小地域ごとに横穴式石室をもつ古墳群が形成される。その中から多胡薬師古墳(8)や多比良古墳(14)などの精巧な截石切組積石室が派生し、それを最後に古墳の築造は終焉する。

鮎川下流の左岸段丘上の白石古墳群(42)は県内屈指の古墳群である。5世紀前半の白石稲荷山古墳(40)、6世紀の七輿山古墳(36)などの盟主墳を中心に多数の古墳が築かれている。また、周辺にも東平井古墳群(46)

など6世紀以降の古墳群の形成がある。伊勢塚古墳(35)など河原石を小口積み(文様積み)にした横穴式石室も当地域の特徴である。

奈良平安時代

奈良平安時代の集落遺跡は、古墳時代後期の在り方をほぼ踏襲しており、台地上や沖積地中の微高地などに広く分布する。矢田遺跡や多比良追辺野遺跡のように大規模な集落もある。

白石根岸遺跡(50)、黒熊八幡遺跡(47)、多比良追辺野遺跡(32)、長根羽田倉遺跡(6)では、天仁元年(1108年迄)に降下した浅間B軽石下の水田遺構が調査されている。

また、畑の遺構が藤岡台地上の寺前遺跡(70)や稲荷屋敷遺跡(71)、滝前遺跡(64)などにある。なお、鍋川の流域は条里的地割りが各地にみられる。吉井町では吉井市街地の乗る下位段丘面(109)、藤岡市では下大塚を中心とする地区(110)、上栗須北方の温井川流域などがある。

吉井町南東部から藤岡市西部の丘陵地帯は、10カ所以上からなる奈良平安時代の須恵器と瓦を生産した大窯業跡群であって、金山窯跡(42)は上野国分寺創建期の瓦窯として著名であり、他に滝ノ前窯跡(28)などの平安期以降の瓦窯もある。

瓦が出土あるいは散布する遺跡は、吉井町や藤岡市には瓦窯跡群が近隣にあることもあって相当多数がある。住居内にカマド材など転用の形で持ち込まれる例が多いのであろう。が、寺院跡ないしは官衙跡と見られる遺跡もある。馬庭東遺跡(102)は複弁七弁軒丸瓦とロクロ挽き三重弧文軒丸瓦があって7末から8世紀初頭、岡遺跡(80)・雑木味遺跡(79)は複弁六弁軒丸瓦とヘラ描き三重弧文軒平瓦があって8世紀前半に位置づけられ、この他に塔之峰遺跡(49)や折茂上野場遺跡(4)などに奈良平安期の瓦の出土がある。藤岡市側では、水窪遺跡(111)で複弁七弁軒丸瓦とロクロ挽き三重弧文軒平瓦があって7末から8世紀初頭に位置づけられ、その他に鮎川尺司遺跡など数カ所で奈良・平安時代の瓦の出土がある。

馬庭東遺跡が多胡郡域、水窪遺跡が緑野郡域での最古の寺院と推定され、郡司クラスの豪族の氏寺にあてられよう。そして、それぞれの郡衙もこれらの寺院跡の近隣に所在することが推測されるのであるが、具体的には不明な状況にある。

多胡郡と緑野郡の成立

ここで文献史料によって当地域の様相を概観しておきたい。

『日本書紀』安閑二年紀(532)条に「置(中略)上毛野国緑野屯倉(以下略)」とあり、奈良平安時代の緑野郡域周辺に屯倉がもうけられたとみられる。緑野の地名の初出史料であろうが、本屯倉の範囲など詳細については不明な点が多い。

律令制の施行に伴い、吉井町周辺は多胡郡、藤岡市周辺は緑野郡となった。『和名抄』には、多胡郡に山字(山宗)、織裳、辛科、大家、武美、浮囚、八田の7郷、緑野郡に林原、小野、升茂、高足、佐味、大前、山高、尾張、保美、土師、浮囚の11郷が所載されている。

多胡郡は『続日本紀』和銅四年(711)条に「割上野国甘楽郡織茂韓級矢田大家、緑野郡武美、片岡郡山等六郷、別置多胡郡」とあって、和銅四年に甘楽郡・緑野郡・片岡郡の3郡から6郷を割いて新設された郡であることが知られる。この内容は『多胡碑』の碑銘にも符合するものである。

上記の内容からして多胡郡の武美郷は和銅4年に緑野郡から分割されたものであり、その郷域は当然緑野郡に近い地域、つまり本遺跡の所在する吉井町黒熊を含む地域に想定される。

以上の他にも当地域にかかわる文献史料はあり、特に仏教関係では緑野寺や道忠・最澄など本遺跡との関連からも看過できないものもあるが、この点については後述したい。

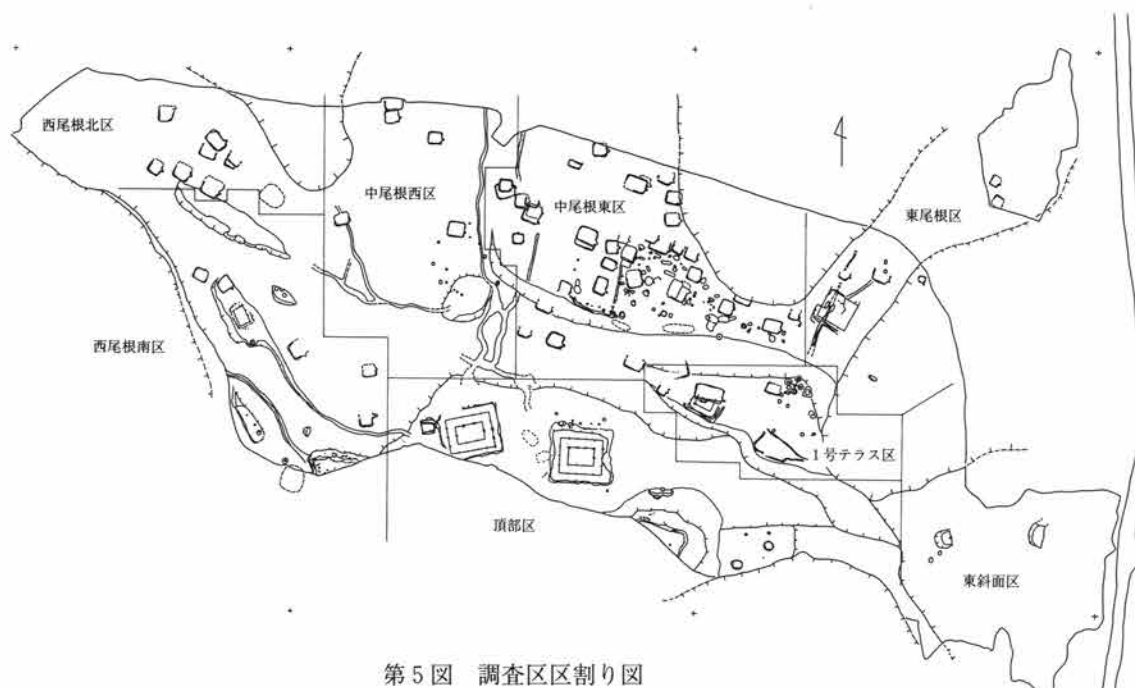
第Ⅲ章 遺構と遺物

第1節 遺構と遺物の概要

(1) 遺構の種別と分布

黒熊中西遺跡は、縄文時代の遺物が微量あるほかは、古墳時代後期から平安時代にかけての集落跡と、平安時代の寺院跡とで構成される。したがって、遺構の種別ということでは縄文時代の遺物は対象外であり、集落跡と寺院跡が対象となる。その遺構としては、道路遺構・礎石建物跡・テラス・焼土坑・鍛冶遺構・掘立柱建物跡・竪穴住居跡・土坑・溝・その他、等をあげることができる。遺構の名称については、基本的には一般的なものを採用の方針をとった。しかし、他遺跡であまり類例の見られない遺構もいくつかあり、それらについては便宜的な名称で呼ばざるをえないものもあった。なお、個々の遺構の内容については各項目の中でふれるので、ここでは詳述は避けた。

遺構の分布や数量は、表2のようである。本遺跡での遺構のあり方で留意されることは、大きな遺構の中に中小の遺構が営まれているという複雑な様相が見られるということである。例えば、3号建物跡の上には鍛冶遺構と掘立柱建物跡がある。また、7号建物跡は1号テラスの上であって、7号建物跡内に1号石組遺構があるというようである。表4は、このような遺構の帰属関係を明瞭に示すことも意図したものであって、道路遺構を除いて、テラスから住居跡・掘立柱建物跡までの遺構は右側のものが左側のものの上にあるか、あるいは付属するような位置関係をもっている。なお、本遺跡は集落と寺院からなり、遺構を二者に区分すれば、集落的な遺構は住居跡・掘立柱建物跡・溝・井戸・土坑、寺院的な遺構は礎石建物跡・鍛冶・焼土坑・テラス・道路および石組遺構や祭壇状遺構などの特殊な遺構などとなる。しかし、集落的な遺構としたものの中には寺院を構成したものも多々あると考えられ、また、逆のケースもありうると考えられるので、遺構を集落と寺院との二つに区分することは無意味であり、不可能である。したがって、本報告書では、編集の前提として遺構を集落と寺院に区分することはしないこととした。



第5図 調査区区分り図

表4 遺構一覧

遺構種別	道 路	テ ラ ス	礎石建物	鍛 冶 土 坑 焼 土 坑	溝 井 戸 そ の 他	住 掘 居 立
小区						
(全 体)	1号道路 3号道路 4号道路 7号道路 9号道路 10号道路 11号道路			鍛冶炉・土坑		
西尾根北区					3号遺物集積	17住 21住 18住 22住 19住 23住 20住 50住
						62住 63住 69住
西尾根南区			5号建物	鍛冶炉 3基 土 坑 5基	9溝	
			(8号建物)			
				2号焼土坑 3号焼土坑		
		2号テラス	1号建物	土 坑		64住 65住
		3号テラス		土 坑 3基		
		7号テラス			1掘込 2掘込	
		12号テラス				
頂 部 区			2号建物	鍛 冶		掘立柱建物 78住 79住
				土 坑		
			3号建物	鍛 冶		掘立柱建物
			4号建物	祭壇状遺構		
		4号テラス		土 坑 2基		
		(5号テラス)				
1号テラス区	整地上層	1号テラス	7号建物	1号石組遺構	不詳遺構	
						74住
	整地下層			1号特殊遺構		75住 76住 77住
						土 坑 数基
東斜面区		9号テラス 10号テラス (テラス?)				
東尾根区				土 坑 焼 土	溝 3条	1号掘立
				166土坑		14住 57住 15住 58住 54住 59住 55住 70住 56住 71住

第Ⅲ章 遺構と遺物

中尾根西区		8号テラス		鍛冶炉 5基 土坑 10基		
				鍛冶炉 1基 土坑 1基		
						5住 6住 27住 32住 37住 53住
中尾根東区						1住 36住 2住 38住 3住 39住 4住 40住 7住 41住 8住 42住 9住 43住 10住 44住 11住 46住 12住 47住 16住 48住 25住 49住 26住 60住 29住 61住 30住 66住 31住 67住 33住 68住 34住 73住 35住 80住
					溝 3条	
				土坑 多数		
					1号井戸 遺物集積 (1号・2号)	
		7条	9面	7棟	鍛冶炉 10基 土坑 約200基 焼土坑 2基	井戸 1基 溝 9条
計				土坑 7基	溝 1条	住居 4軒
庚申山区				鍛冶炉 10基 土坑 約200基 焼土坑 2基	井戸 1基 溝 10条	住居 78軒 掘立 3棟
総計	7条	9面	7棟			

(2) 遺物の種別とあつかい

① 遺物の種別

黒熊中西遺跡における出土遺物は、土器、土製品、瓦、金属製品、壁材などがある。

土器 土器は種別としては、圧倒的多数を占める須恵器のほか、土師器、灰釉陶器、緑釉陶器がごく少量ある。酸化炎焼成のものでも成形にロクロが使用されているものは須恵器とする。したがって、いわゆる土師質土器はこれにあたり、また、黒色処理された土器もほぼすべてこれにあたる。

須恵器は、器形としては皿、杯、椀、蓋、鉢、瓶、壺、甕、羽釜、硯、などのほかに、多嘴瓶、鉄鉢、火舎(?)がある。皿、杯、椀には高台の有るものと無いものがある。

土師器は、ほぼ全て杯と甕である。

灰釉陶器は、皿、椀、瓶の3種があり、そのほかに花瓶が1点ある。

緑釉陶器は、破片が数点あるのみである。器形は皿と椀(?)である。

以上が土器の器種、器形である。なお、土器類の中には、墨書や刻書のあるもの、灯火器(灯明具)、漆の

付着痕のあるもの、硯に転用されたもの、磨耗痕のあるものなど、いわば土器本来の用途とはやや異なる副次的要素を有するものがある。が、これらの要素は土器の分類の要素とはせず、基本的に保有する要素で分類することとした。

土製品 土製品としたものはフィゴの羽口である。

瓦 瓦類には、丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、文字瓦、瓦塔などがあり、鬘斗瓦や面戸瓦とみられるものはなかった。

金属製品 金属製品には鉄製品と青銅製品がある。鉄製品は量が多く、釘、鋏、S字状製品、門（かんぬき）、蝶番（ちょうつがい）、鋸（かすがい）、槍鉋、鋤、鉄鍬、不明品などがある。また、製品ではないが、鉄滓もある。青銅品は、経軸端など少量である。なお、鉄釘の分類については2号建物跡の項（p.58）でふれる。

② 遺物のあつかい

黒熊中西遺跡の発掘調査においては、住居跡や土坑などのように伴出する遺物が明瞭なものほかに、テラスや礎石建物のように共伴遺物の範囲を確定しにくいものがある。本報告では、テラス面に分布する遺物はそのテラスの遺物とし、礎石建物の場合は建物の基壇上と基壇周囲の遺物を建物に付随する遺物とした。さらに、テラスや礎石建物は整地や基壇の構築作業に伴う盛土が多々行われており、盛土中や盛土下にも遺物が分布するが、それらもテラスや礎石建物に共伴する遺物とした。その場合、盛土の上・中・下によって遺物の年代や性格を異にすると考えられるので、遺物のあつかいとしては、それぞれを別個に呈示することとした。

(3) 瓦の分類と部位名称

黒熊中西遺跡では、瓦葺き建物である2号建物・3号建物をはじめとする多くの遺構から多量の瓦が出土した。瓦類は、丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦など五つの瓦種があるが、それぞれの瓦種ごとに細分類することができる。本報告ではこれについて、遺構ごとの分類ではなく、遺跡全体を通し、かつ、瓦類全体を包括する細分類を試みた。

まず、瓦種ごとに見ると、丸瓦・平瓦は大きくはⅠ～Ⅲ類の3類に分かれ、細かくは9類に分類される。軒丸瓦は、A類からG類の7類がある。軒平瓦は、A類からF類の6類がある。鬼瓦は、A類からD類の4類がある。

そして、胎土・焼成・色調及び製作技法や形態などを検討し、丸瓦・平瓦の分類を中心に軒瓦や鬼瓦を含めた瓦類全体のグルーピングを想定したものが、表5である。つまり、丸瓦・平瓦の分類を瓦類全体の分類の基準としたものであり、たとえばⅠ類という場合、狭義には丸瓦・平瓦のⅠ類をさすが、広義には軒瓦や鬼瓦を含めた分類をさす。表5の分類は、生産地や生産時期を共通とするような大枠のグルーピングを意味する。軒

表5 黒熊中西遺跡・瓦類分類表

類	丸瓦・平瓦					軒丸瓦	軒平	瓦鬼瓦
	胎土	色調	焼成	整形	厚さ			
ⅠA1	粗、砂礫多	暗青色	還元	凸面ナデ	厚	B類	A類・B類 C類	A類
ⅠA2	粗、砂礫多	暗青色	還元	凸面縄叩き	厚			
ⅠB1	やや粗	灰色	還元	凸面ナデ	厚・普	A類	D類	
ⅠB2	やや粗	灰色	還元	凸面タテナデ	厚・普			
Ⅱ	やや細	橙色・灰褐色	酸化	丸瓦凸面平行叩き 平瓦凸面ナデ、一部ヘラ	やや厚			
ⅢA	やや細	明橙色	酸化	凸面タテナデ後、平行叩き	普	C類	E類	B類
ⅢB	ふつう・やや細	橙色・橙褐色	酸化	凸面タテナデ後、平行叩き	薄			
ⅢC1	やや粗	橙色・暗褐色	酸化	凸面タタキ（無文）	薄	E類		D類
ⅢC2	やや粗	橙色・暗褐色	酸化 半還	凸面タタキ（無文） 凹面ムシロ目	薄			

軒丸瓦



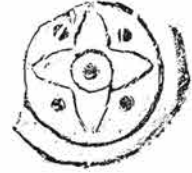
A類
(単弁四弁文)



B類・范キズなし
(四弁文)



B類・范キズあり
(四弁文)



C類
(四弁文)



D類
(四弁文)



E類
(四弁文)



F類
(七弁文)



G類
(単弁五弁文)

軒平瓦



A類
(格子目文)



B類
(へら描き格子目文)



C類
(無文)



D類
(格子目文)

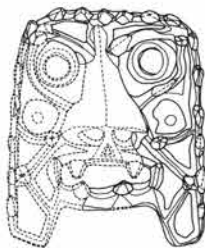


E類
(鋸歯状文)

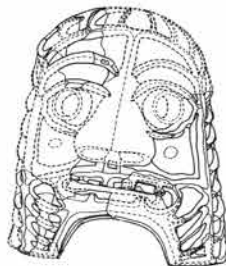


F類
(綾杉状文)

鬼瓦



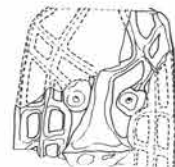
A類



B類



C類



D類

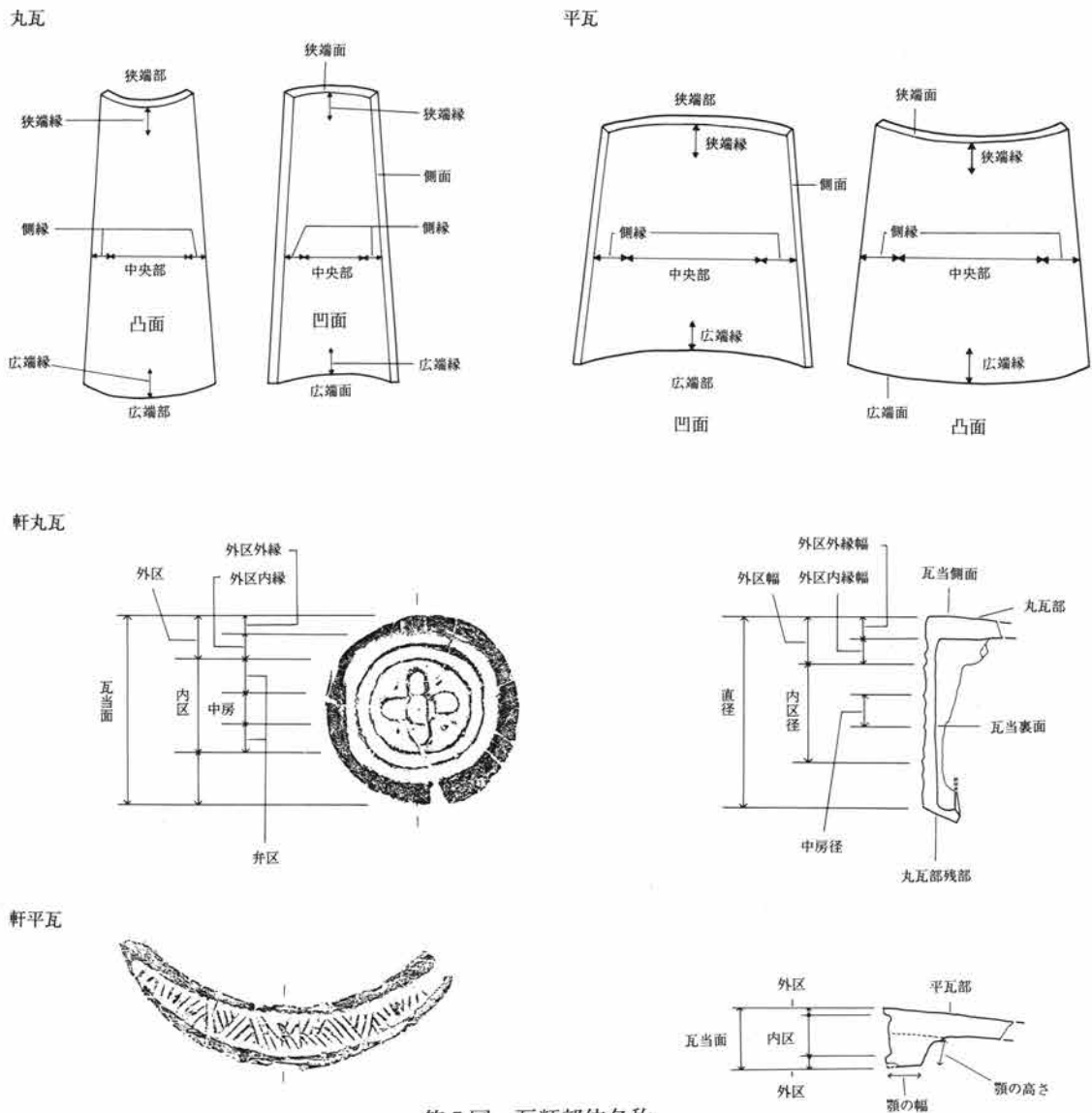
第6図 軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦の分類

丸瓦と軒平瓦の組み合わせ関係は表示してはいるが、軒瓦の組み合わせについても、それぞれの枠の中で限定されるものとするものである。

I～III類の瓦の特徴は、以下のようである。I類の瓦は、胎土に砂礫を多く含み、粗い素地である。焼成は、還元炎であって、青色ないしは灰色を呈す。外形的には厚めで大きめである。III類の瓦は、胎土は普通かやや細かく、砂礫の混入は少なめである。焼成は酸化炎で、褐色系を呈す。瓦の厚みは薄めで、軽量である。II類の瓦は、I類とIII類の中間的な様相を呈す。

製作技法という点では、平瓦はIからIII類まで共に一枚造りであるが、凸面の成形は、I類がナデや縄叩きであるのに対し、II・III類は平行ないしは無文の叩きである。軒丸瓦はいずれもいわゆる一本造りである。軒平瓦は平瓦の凸面広端部に粘土を貼って范を押すという技法であって、三類とも共通である。鬼瓦は三類とも手捏ねであるが、裏面の整形がI類はナデ、II類は布目が残る。このように、I類の瓦はナデ整形が多用されて、手間がかかっているのに対し、III類・II類は簡略的である。

また、瓦類の部位名称については、第7図のようである。



第7図 瓦類部位名称

第2節 基本土層

鎗川流域の多野郡吉井町・富岡市、さらに碓氷郡松井田町・安中市にかけた地域には新生代第三紀の地層が分布している。この第三紀の地層は、新生代後半すなわち新第三紀に形成された海成層である。

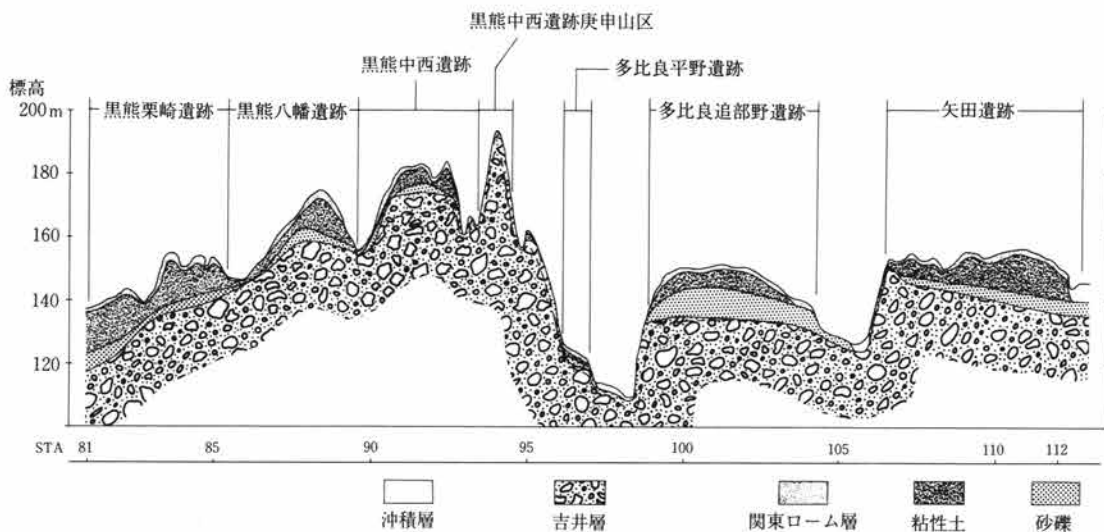
黒熊中西遺跡は、鎗川南岸の河岸段丘上に立地する。この河岸段丘の基盤は、第三紀層の中の上部層にあたる吉井層と呼ばれる暗灰色の泥岩層である。遺跡のある上位段丘面では、吉井層の上に、上半部の粘性土層・下半部の砂質土層からなる段丘堆積物があり、その上に、関東ローム層、その上に表土である淡褐色土が堆積する。

本遺跡では、基本土層として表土から岩層まで11層に分類した。その内容は下記のようなものである。

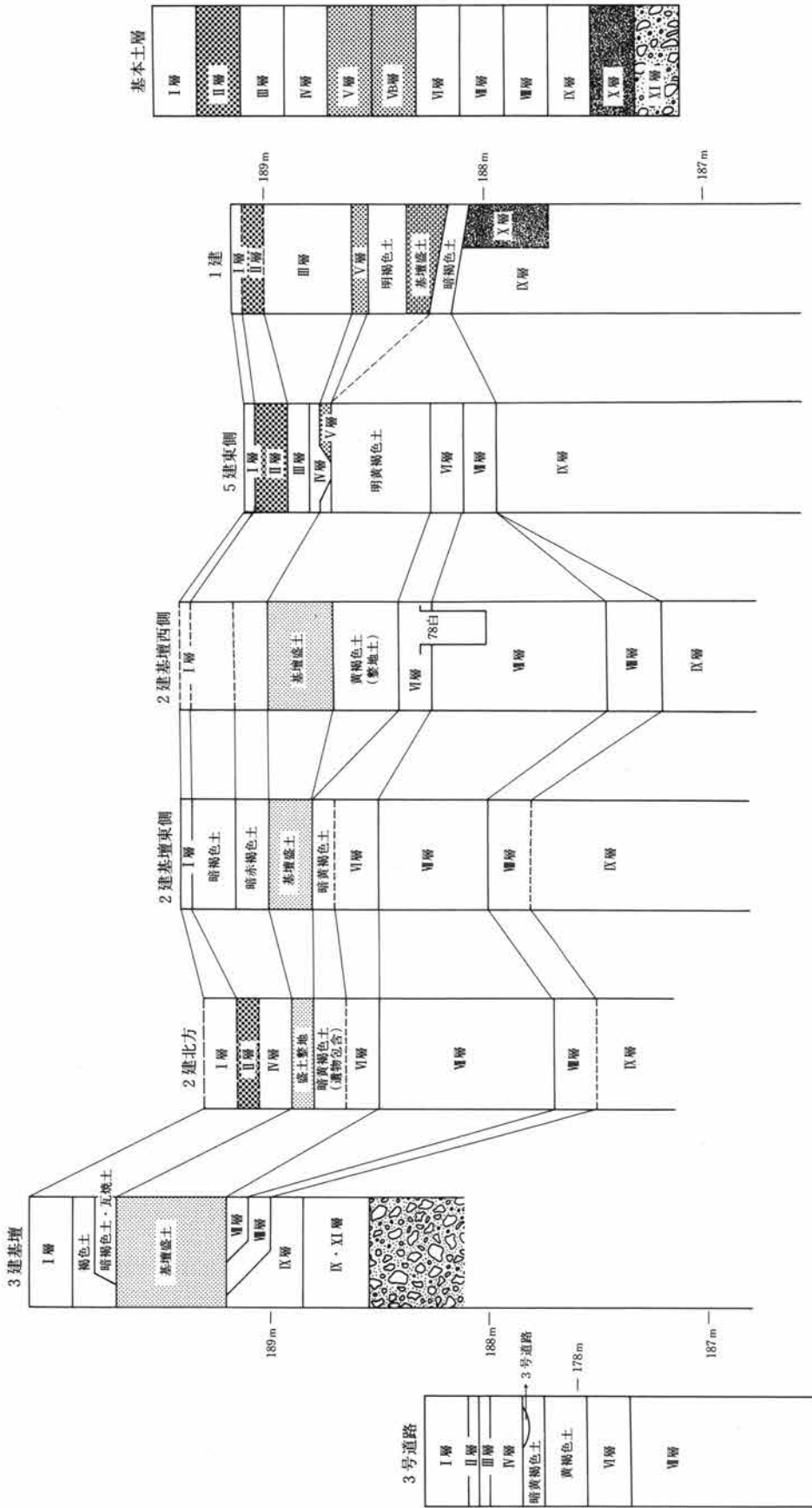
基本土層

- I 層 表土。畑の部分では耕作土であって、しまりのない淡褐色土である。山林部分では色調がやや暗く、全体に木の根や芝の根のはびこりがはげしい。
- II 層 浅間A軽石の堆積層。
- III 層 黄白色灰質土。浅間A軽石下に堆積する径3～5mmの粒子の粗い灰質土の純層である。
- IV 層 明褐色土。ローム漸移層に似る。
- V 層 浅間B軽石の堆積層。残りの良い部分では径1～2mmの白色軽石を主体とし、灰青色の微粒の灰層を混える。VB層は、浅間B軽石を混入する黒褐色土である。
- VI 層 暗黄褐色土。いわゆるローム漸移層あるいはソフトローム層に対比される層である。
- VII 層 黄褐色土。いわゆるハードローム層である。
- VIII 層 浅間MP層（室田軽石層）。3～5mmの橙色の軽石の純層である。
- IX 層 暗褐色粘質土。緻密でしまりが強い。地点によっては河原石を混入する。
- X 層 白色粘質土
- XI 層 白色ないしは黄白色を呈し、軟質の凝灰質の泥岩層である。

VI～VIII層がいわゆる関東ローム層であり、IX・X層が段丘堆積層、XI層が吉井層に対比される。



第8図 遺跡周辺の土層断面図



第9図 基本土層

第Ⅲ章 遺構と遺物

本遺跡における特徴的な点は、表土から関東ローム層までの土層である。一般的な洪積台地では上から、淡褐色の表土、暗褐色土（いわゆる黒ボク土）、ローム漸移層、ソフトローム層、ハードローム層という層順であるのに対し、本遺跡では軽石層を除いた基本的な層順は、表土（Ⅰ層）、明褐色土（Ⅲ層）、ローム漸移層・ソフトローム層（Ⅳ層）、ハードローム層（Ⅴ層）である。表土下に黒ボク土が無く、その層位にソフトローム層に似た明褐色土があり、また、ローム層の堆積も不完全である。その原因は、確証は無いが、斜面地であるためにローム層が流失してしまったためかと推測される。

そして、遺構の構築面はⅥ層であるが、その上層のⅣ層との識別が難しいことから、遺構確認面の認定には度々悩まされた。

つぎに、火山噴出軽石層についてふれておきたい。本遺跡で確認された軽石層は全て浅間山給源であって、いわゆるA層・B層・MP層の三層である。YP層・BP層は明瞭なものではなく、C層は確認されない。MP層は暗褐色粘質土の直上にあり、旧石器の試掘の指標となった。B軽石層は堆積範囲はさして広くはなく、状況は良くはなかったが、礎石建物跡の周囲など遺構に直接かかわる位置にあることが多く、遺構の年代決定に重要なポイントとなるありかたが見られた。A軽石層は、山林部で厚い堆積状況がみられた。

なお、B軽石については、従来知られていたもののほかに新たな知見があった。つまり、従来B軽石といわれたものの上に薄い間層をはさんで、少量の軽石層が確認された。確認地点は、2号建物跡北方の26号トレンチである。2号建物跡北方は、地滑りがあって土層にタワミがあり、その窪んだ部分に堆積したものと考えられる。早田勉氏は、これを「B軽石」と呼ばれていたが、本遺跡ではこれを含めて土層や軽石について鑑定していただいております、その結果については第2分冊で報告する。

第3節 整地

黒熊中西遺跡は、寺院跡と集落跡からなる遺跡であるが、標高200mほどの東西に長い尾根状の丘陵に立地しており、寺院の造営にかかわって平坦面を確保するための造成作業の跡が所々に認められる。造成作業は、山側の斜面を切り崩したり、谷側の斜面に盛土をしたりするものである。以下、前者を「切土」、後者を「盛土」と呼称する。

切土・盛土によって造成された平坦面は主として礎石建物跡やテラスなどの遺構に認められ、単一の住居跡および土坑などには基本的に見られない。

なお、切土や盛土作業そのものは、礎石建物跡の造成にもみとめられる。例えば、3号建物跡は、山側を切土、谷側を盛土によって基壇が造成されている。盛土のみに関して言えば、平坦面を造成するための盛土と基壇を造成するための盛土とは内容を異にするので、前者を盛土による整地、後者を盛土基壇と呼ぶことにする。ただし、1号建物跡は、基壇の造成と盛土による整地が一連的に行われており、そのように両者の区別が判然としない例もある。

第10図は、切土と盛土、および基壇の盛土の範囲を示したものであるが、細かいところは推定の部分が多い。つまり、盛土の範囲の確認はあるていど可能であるが、切土の範囲の確定は困難であり、想定範囲を多くとらざるをえない。

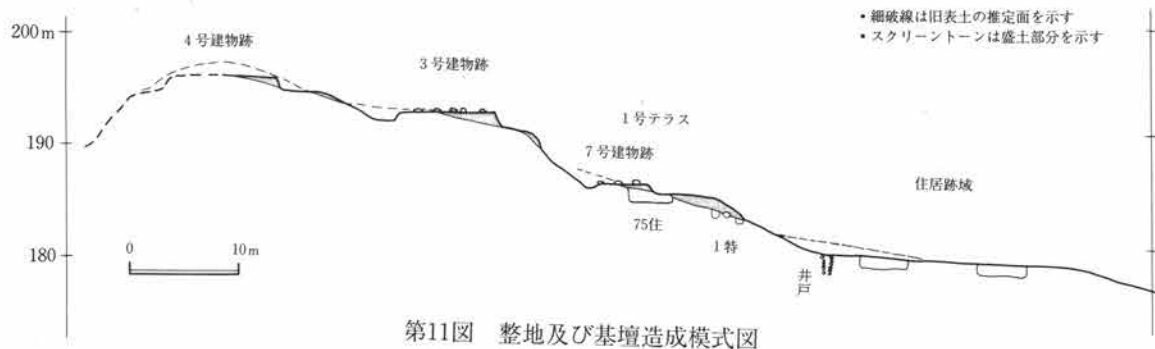
また、第11図は、切土と盛土の状況をより明確に示すことを意図して、その状況を模式的に断面図として表わしたものである。遺跡内の最高地点である4号建物跡から3号建物跡・1号テラス・7号建物跡・中尾根東区の住居跡域というように遺跡を南北に横断するような形で図化したものである。

礎石建物は、基本的には山側を切土、谷側を盛土によって基壇が造成されているが、細かくは盛土をする前



にしっかりした土層まで表土を除去しており、また、建物前方にも盛土による整地面が多々造られている。盛土の下部、あるいは切土があまりなされていない部分では、旧表土面に営まれた遺構が依存していることがある。1号テラス区はそれが顕著であって、盛土上に7号建物跡と1号不詳遺構があり、盛土下に75号住居跡・76号住居跡・1号特殊遺構・土坑などの遺構がある。また、図示はしていないが、2号建物跡でも盛土下層に78号住居跡・79号住居跡・土坑、5号建物跡では基壇の盛土下面に鍛冶炉や土坑がある。

その反面、切土によって消失してしまった遺構もあったものと推測される。その例は中尾根東区の住居跡域であって、切土想定範囲では10世紀以降の住居跡のみがあって、それ以前の住居跡は削除されてしまったものと考えるのが妥当性が高いと思われるのである。

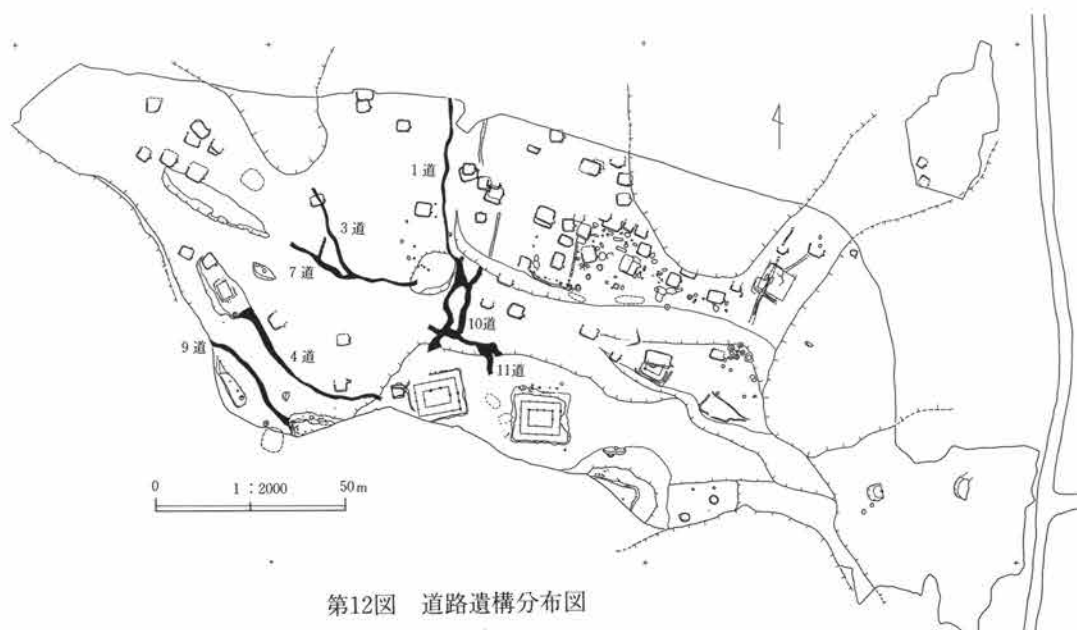


第4節 道路遺構

道路遺構は、不明確なものも含めて6条ほどがある。道路とする要件は、A、硬化面が細長く続くこと。B、丘陵斜面を切土による幅50~150cmほどの細長い平坦面が続くこと。のいずれかをもつものとした。以下、欠番遺構を除いて番号順に遺構の内容を記述する。

(1) 1号道路遺構

中尾根西区の南北にのびる尾根の中央を登るようにして、2号建物跡の北側10mほどに至る道である。尾



第12図 道路遺構分布図

根の最も高い部分を通り、等高線に直角に道筋をとる、いわゆる尾根道の形を呈す。現状では調査区内で50mほどの長さが確認されるが、北側の調査区外にも尾根は延びていることから、本道路遺構も北に続いていることは確実視される。走行は、南北方向であって、8号テラスから北は尾根の傾斜がやや緩いため屈曲はあまりないが、8号テラスから2号建物跡までの部分は急斜面であることから折れ曲がりながら登る。

断面形は、幅80から100cmほどで、深さ10cmほどの浅い溝状をなし、その下底部が幅60から80cmの硬化面をなす。硬化面は堅くしまっており、使用頻度が高かったものと考えられる。遺構の構築面はローム漸移層に近い暗黄褐色土であり、基本土層のⅥ層の上半部に対比され、これは他の多くの遺構とも共通するものであり、本道路遺構が古代のものであることをしめすものと考えられる。

本道路遺構は、外部と本遺構（寺院跡）を結ぶ道であると考えられる。また、形態としては人為的ではなく、自然発生的な道、いわば踏み分け道のような様相を呈している。

(2) 3号道路遺構

8号テラスから斜面を西に下り、さらにカール状の凹地の中央を西北方に下る道である。長さは調査区内で40mが確認され、53号住居跡付近で不明瞭となる。が、谷に沿って50mほど下ると、現在は水田となっている、湧水のある谷地となっており、その方向に至るものと推測される。3号道路遺構は、いわゆる谷道であるが、形状や規模などに1号道路遺構と類似した点が見られる。

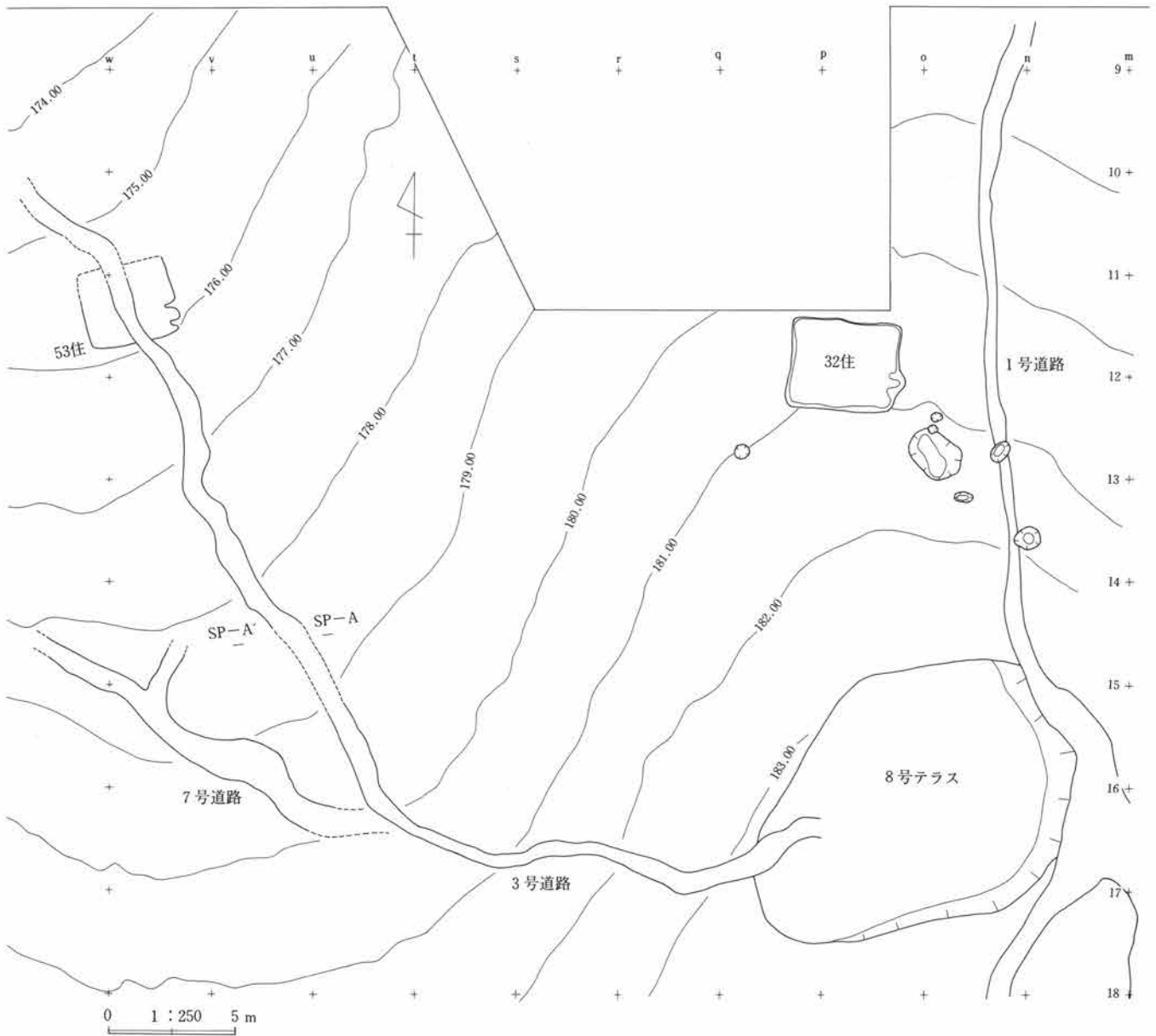
硬化面の幅は、50～120cmで地点によって異なる。土層断面をとった地点では、断面形は幅100cm内外で、深さ10cm弱の溝状を呈し、下底面が幅80cmほどの硬化面をなす。硬化面は比較的堅く、しっかりしている。遺構の構築面は、ローム漸移層から1層の間層をおいた褐色土層であり、基本土層のⅥ層の上半部に対比される。土層からみると、1号道路遺構と同様である。

なお、本道路遺構は53号住居跡と重複するが、土層断面の観察所見では、道路遺構が後出すると判断される。その場合、当然、本道路遺構の上限年代が限定されることになろう。ただし、本道路遺構のような踏み分け道のようなものは少々の道筋の変更はたやすかったと考えられ、3号道路遺構の年代や走状については慎重な検討を要するものと考えられる。

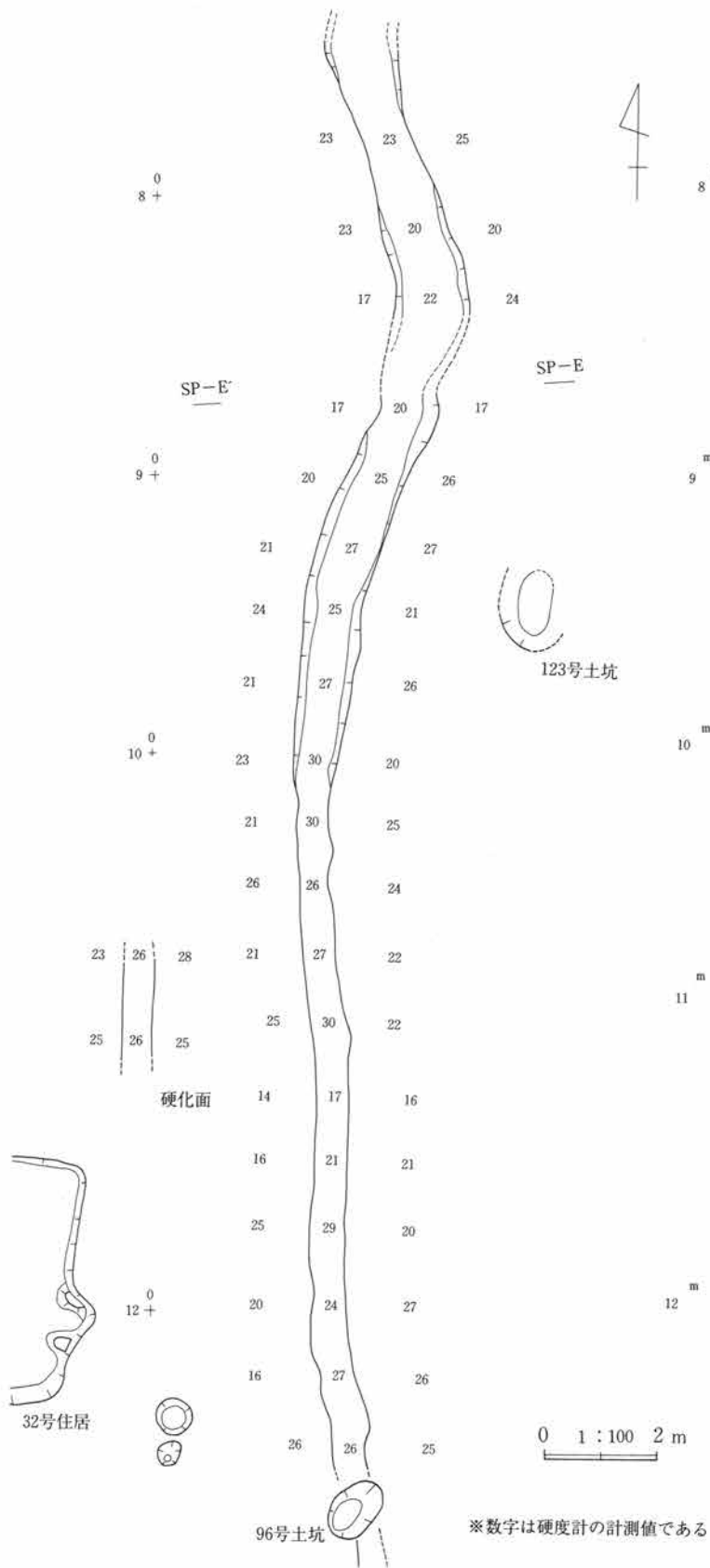
(3) 4号道路遺構

2号建物跡と1号建物跡を結ぶ道である。丘陵斜面をほぼ等高線に平行し、地形に沿って湾曲するように走るいわば「まき道」のような道である。標高は2建付近で188m、1建付近で185mであり1号建物跡の方に下っている。本道路遺構は山側を切土して造られており、路面の幅は2号建物跡付近で60～80cm、中間部で1m、1号建物跡付近で2mほどである。1号建物跡寄りでは地盤が礫混じりの粘質土であるために残りが良いが、2号建物跡寄りではソフトローム質のために土が流されるために道幅が狭いものとみられる。硬化面はあまり明瞭ではなく、使用頻度はあまり高くはなかったと思われる。

1号建物跡寄りでの土層断面を見ると、覆土は地山に近似する褐色土と浅間B軽石をやや多く含む褐色土の2層で覆われており、後者は砂質でしまりがいいことから遺構確認の良い指標となった。このようなあり方は、後述する9号道路遺構とも共通し、また、浅間B軽石は天仁元年(1108)に降下したので、道路遺構の年代の



第13図 1号道路・3号道路・7号道路



第14図 1号道路遺構（北半部）

指標ともなろう。

(4) 7号道路遺構

3号道路遺構の途中から分岐して2号テラス方向に向かう道である。硬化面の幅は80~130 cmであって、形状と規模は3号道路遺構に似通っている。現状では20 mほどの長さが確認される。走向からみると、2号テラスに至ることは確実と思われる、その場合、全長は30 m以上となろう。

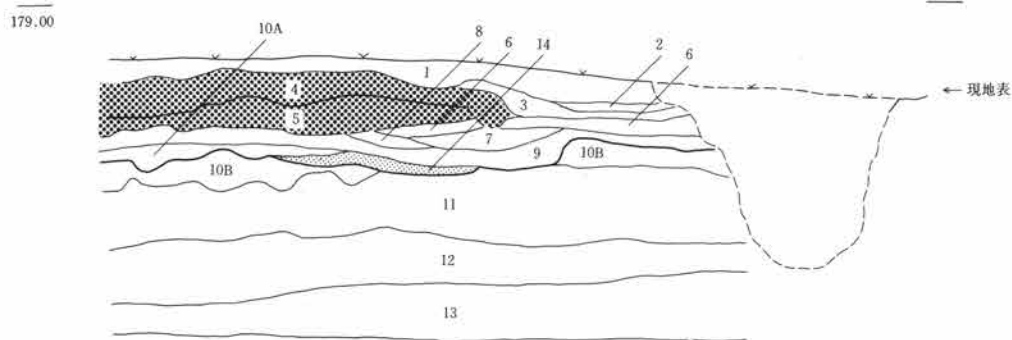
また、7号道路遺構の中間部から北に分かれる硬化面があり、3号道路遺構に接続するような形状を示すが、硬化面はあまり明確ではない。

(5) 9号道路遺構

4号道路遺構の10 mほど高いところにあり、やはり、丘陵斜面を等高線に平行するように走る。現状では5号建物跡から12号テラスの北東方を通過して尾根に抜ける30 mほどが確認されているが、尾根に出てからはさらに尾根道として北西につづくと推測される。庚申山区でも東側の尾根から頂部へ登る道跡が確認されており、本道路遺構はそれにつながるのではないかと推測される。また、5号建物跡から東は同建物跡前方の平坦面を通過して2号建物跡方向に向かうものと推測され、部分的に硬化面がみられた。

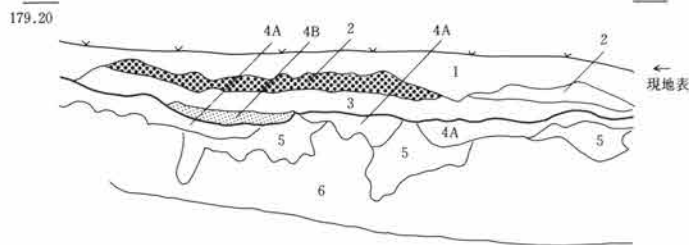
本道路遺構は、山側を切土して造られているが、道幅は50~80 cmでやや狭く、小規模であって、造成は4号道路遺構ほどは明瞭でない。覆土は地山の崩土の暗褐色土が直接覆い、その上に浅間B軽石混じりの砂質土が覆う。

1号道路跡



- | | |
|---|---|
| 1 くすんだ淡褐色土 浅間A軽石をやや多量に混入する。 | 9 黄褐色土 6層を主体とし、腐蝕物が混入した感じの土。しまりはない。 |
| 2 淡褐色土 水で流された砂粒の層。 | 10 暗黄褐色土 ローム漸移層に近い黄褐色土を主成分とし、暗褐色土をブロック状に混入する。10A層は後者の量が多く、10B層は少なめであり、共にしまりはない。 |
| 3 淡褐色土 浅間A軽石をやや多く混入する。ややしまりが強く、道路敷であった可能性がある。 | 11 明黄褐色土 ローム漸移層。 |
| 4 やや暗い褐色土 浅間A軽石を主成分とする。 | 12 明黄褐色土 ローム層。軟質。 |
| 5 黄褐色土 浅間A軽石が純層に近い。 | 13 黄色硬質 ローム |
| 6 明黄褐色土 ローム漸移層に近い土質である。混入物はほとんどなく、しまりもない。 | 14 黄褐色土と暗褐色土の混土硬くしまっている。[道路面] |
| 7 黄褐色土 6層に近いが、やや暗い。 | |
| 8 明黄褐色土 6層と同質。 | |

3号道路跡



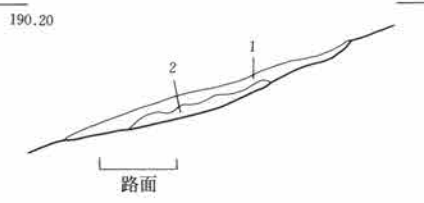
- | |
|-------------------------------|
| 1 褐色砂質土 浅間A軽石を多量に含む。 |
| 2 白褐色土 浅間A軽石及び灰層を主体とする。 |
| 3 淡褐色土 径数mmの砂礫をまばらに混入する。 |
| 4 A くすんだ褐色土 質は3層に似るが、よりきめが粗い。 |
| 4 B 4 A層と同一であるが、道路の硬化面である。 |
| 5 暗褐色土 黄褐色土と暗褐色土の混土。 |
| 6 くすんだ黄褐色土 ローム漸移層。 |

4号道路跡

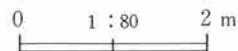


- | |
|--|
| 1 やや暗い褐色土 軽石粒(浅間B軽石)を少量混入する。礫は多量に混入する。 |
| 2 褐色土 1層に近似するがやや明るい。 |

9号道路跡



- | |
|---|
| 1 暗褐色土 浅間B軽石を混入し、砂質でざらざらしている。 |
| 2 暗褐色土 やや粘性をおびる。地山の崩土とみられる。※地山は、黄褐色の粘性をおびた土である。 |



第15図 道路遺構断面図

(6) 10号道路遺構

1号道路遺構の東側5mに平行するように通る道である。幅は1~1.3m前後で、硬化面も比較的しっかりしている。現状では20mほどが確認され、南端は11号道路遺構に接合する。北端は急斜面の上端で未確認となるが、中尾根東区へ下るものとみられる。

なお、10号道路遺構では、路面上で鍛冶炉と土坑各1基が確認された。道路と鍛冶遺構に前後関係があるのか、同時に存在したのかは確認できなかった。後者の場合は短期的であろうが、路面が鍛冶の場所として使われたことになる。なおこの鍛冶炉と土坑については第8節でふれる。

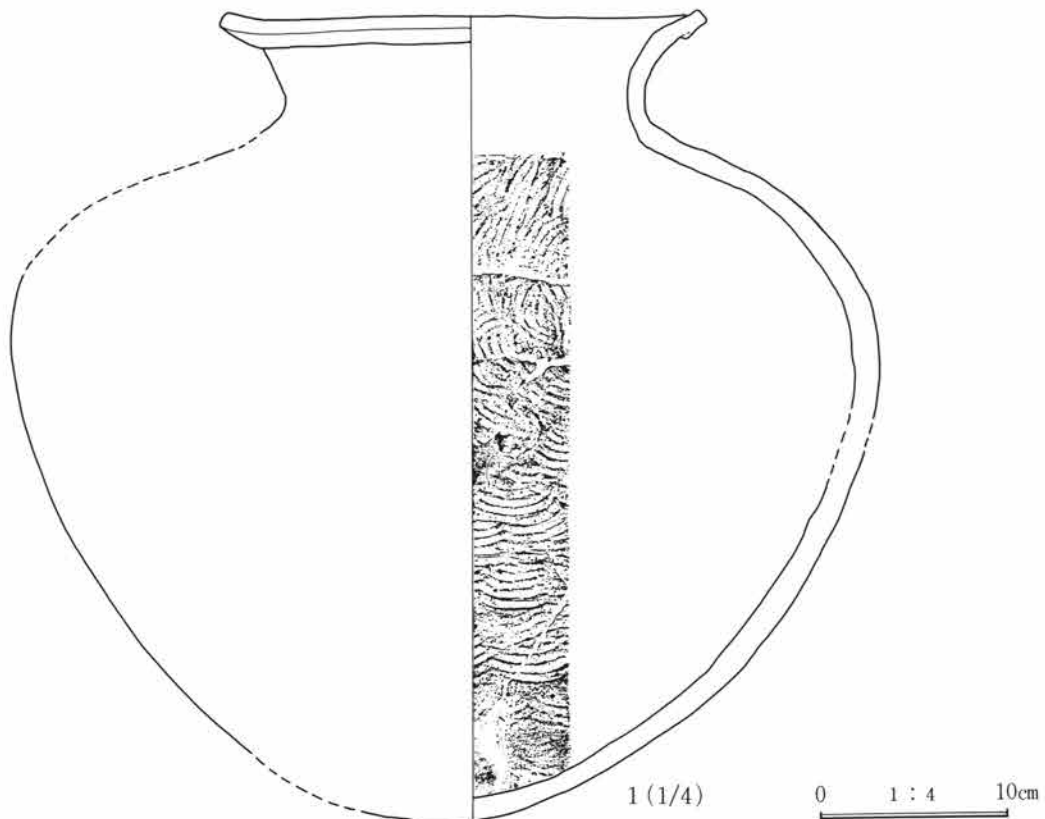
(7) 11号道路遺構

3号道路遺構と10号道路遺構に接続して2号建物跡や3号建物跡・4号建物跡にいたるものと考えられる。1m以上の道幅を有すが、建物寄りでは広がって不明確となる傾向がある。また、遺存状態の良い部分もあり、形状の把握に難しい点もあった。

(8) 道路遺構の出土遺物

道路遺構の出土遺物としたものは、道路面上で確認された遺物である。しかし、在り方からみるとほぼ全ての遺構から流下したものと見なされ、道路に直接帰属するものとは考えられないものである。したがって、道路遺構の出土遺物は、道路の年代の一点を示す可能性はあろうが、厳密に決定する資料としては適切ではないと考えられ、図示する遺物も最小限にとどめた。なお、遺物の出土量としては、5号建物跡下方での4号道路、2号焼土坑・8号建物跡下方での9号道路において、これらの遺構から流下したとみられる遺物が多い傾向があった。

3号道路

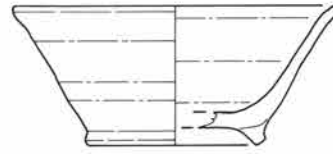


第16図 道路遺構出土遺物

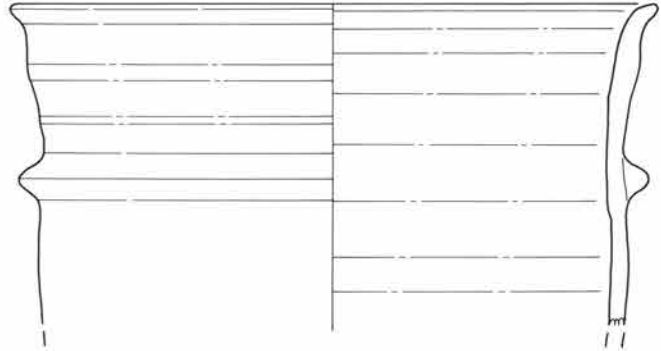
4号道路



1

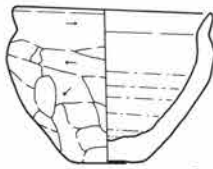


2

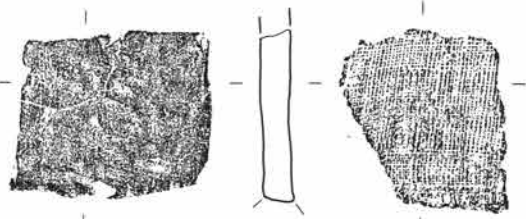


3

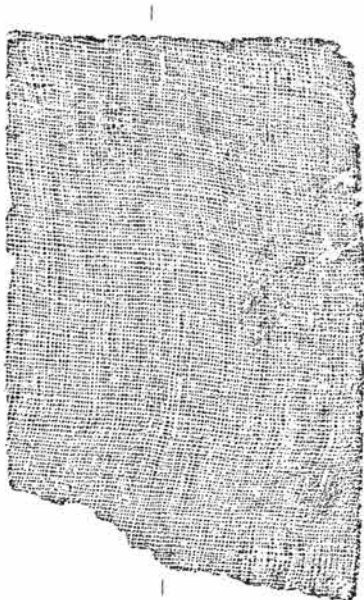
10号道路



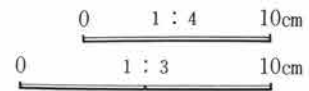
1



2



3



第17図 道路遺構出土遺物

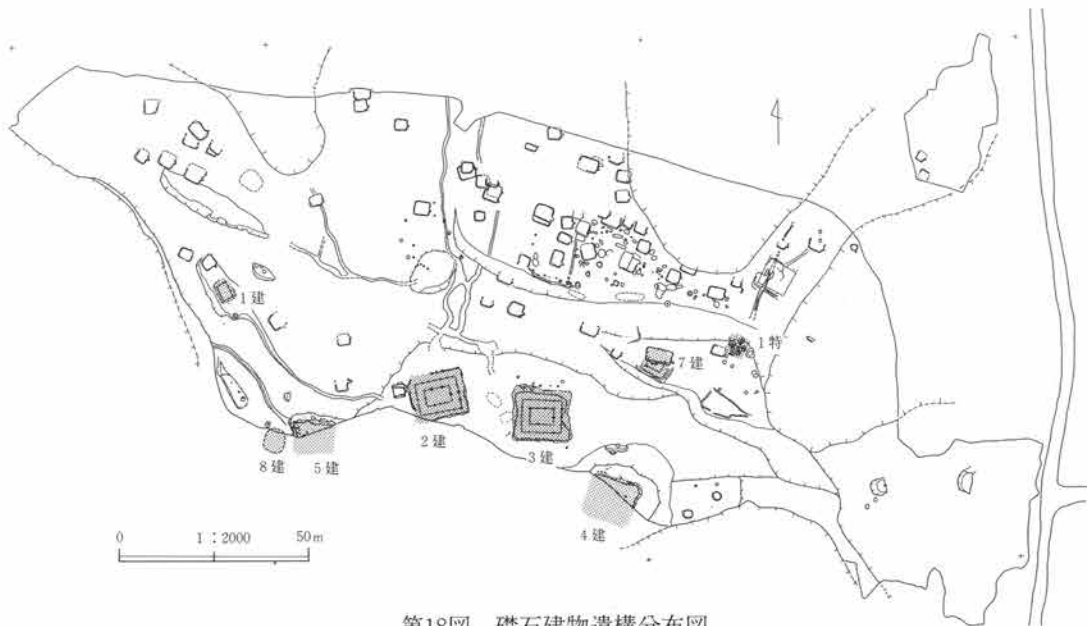
第5節 礎石建物跡

礎石建物跡は、総数で8棟がある。このうち、特殊な遺構である1号特殊遺構を除くと、全て基壇を有するものである。

1号建物跡・2号建物跡・3号建物跡はほぼ全容が把握され、礎石建物として明確にとらえることができた。7号建物跡は遺存状態が不良であるが、基壇の一部と礎石1個が遺存していた。4号建物跡・5号建物跡の2棟は、基壇の北辺が調査区にかかったものであり、礎石の有無は確認されず、掘立柱建物の可能性も残る。8号建物跡は盛土の一部が調査区にかかったものであり、テラスの可能性もあるが、瓦塔の出土があることなどから建物に含めておくほうが妥当と考えるものである。

以上のように、本遺跡で礎石建物跡と呼ぶものは、単に建物跡と呼ぶほうが妥当な面があるものではあるが、掘立柱建物跡との区別を簡便にさせるうえからもこの名称を用いるものである。

建物としての構造や細部の名称については、一般的なものを用いるようにするが、本稿では、柱の位置番号については、建物の北東隅から左回りに付番することとする。つまり、一般的には柱の位置表示は、例えば「側柱の東から何番目の柱」とし、その位置の礎石や抜き取り穴は「側柱何番目の礎石や抜き取り穴」というところであるが、本稿では柱位置番号は建物の北東隅からめぐるように付番し、礎石や抜き取り穴の位置表示は該当する柱番号の礎石や抜き取り穴つまり「何番柱の礎石」・「何番柱の抜き取り穴」などと記す。



第18図 礎石建物遺構分布図

(1) 1号建物跡

A 遺構

位置 1号建物跡は、西尾根南区にある。北東側を下る丘陵斜面の中腹にある。この丘陵斜面の傾斜は16度である。標高は、184.50 mほどである。

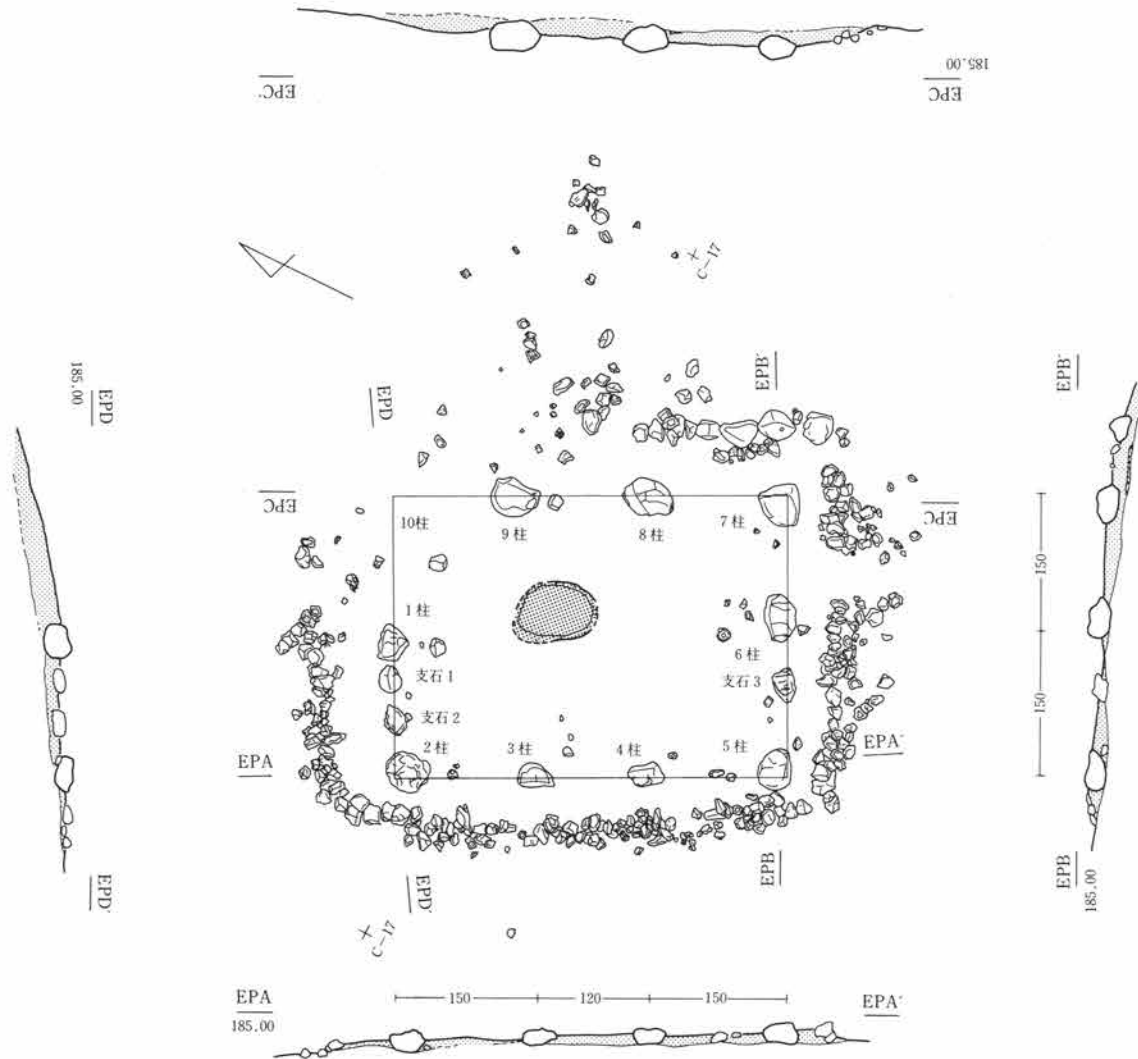
整地 本建物跡は、山側つまり南西側を切土し、谷側に盛土して造成された整地面上にある（この整地面は、「2号テラス」と呼称する）。整地により形成された平坦面は11 m×7.5 mである。ただし、1号建物跡の場合、盛土整地土と基壇の盛土の土は、同質で差異はないことから、整地と基壇の造成は同時・一連的になされ

たものと考えられる。盛土の範囲は、6.5 m×8 mであり（第19図）、厚さは15~30 cmである。盛土の土質は少し粘性をおびた暗褐色土であり、地山の暗褐色粘質土を主体にしているとみられる。盛土は、版築の形跡はみられず、単層である。ていねいとはいえず、しまりもそう強いとは言えない。

切土は、10 m×16 mの範囲、最も深いところで1 mほどまでと推定され、地山の暗褐色粘質土層まで達している。なお、切土による整形面上には、1.2 m×1.9 mの長円形の範囲で弱く焼けている部分があった。切土作業後、盛土作業前に短時間であろうが、何らかの理由で火を燃やしたものであろう。

基壇 基壇は整地面の中央部にある。北西隅から北東辺にかけて崩壊がみられるが、遺存状況はおおむね良好である。北東辺の縁線は直線状をなしているようであるが、他の三辺は外側にふくらみ、隅も直角になっていない。規模は幅5.5 m、奥行4.2 mである。高さは10~20 cmである。小規模で簡素であり、企画性の認めがたい基壇である。

基壇化粧 基壇の周囲は、河原石によって化粧されている。北西隅部は遺存しないが、他は遺存の状況は良い。北東辺は建物の正面として意識されていたためか、径25~40 cmのやや大ぶりの石を主体に小石を混じえながら組まれている。そして、さらにその奥に部分的かもしれないが、もう一列裏込めの小石が詰まれている。他



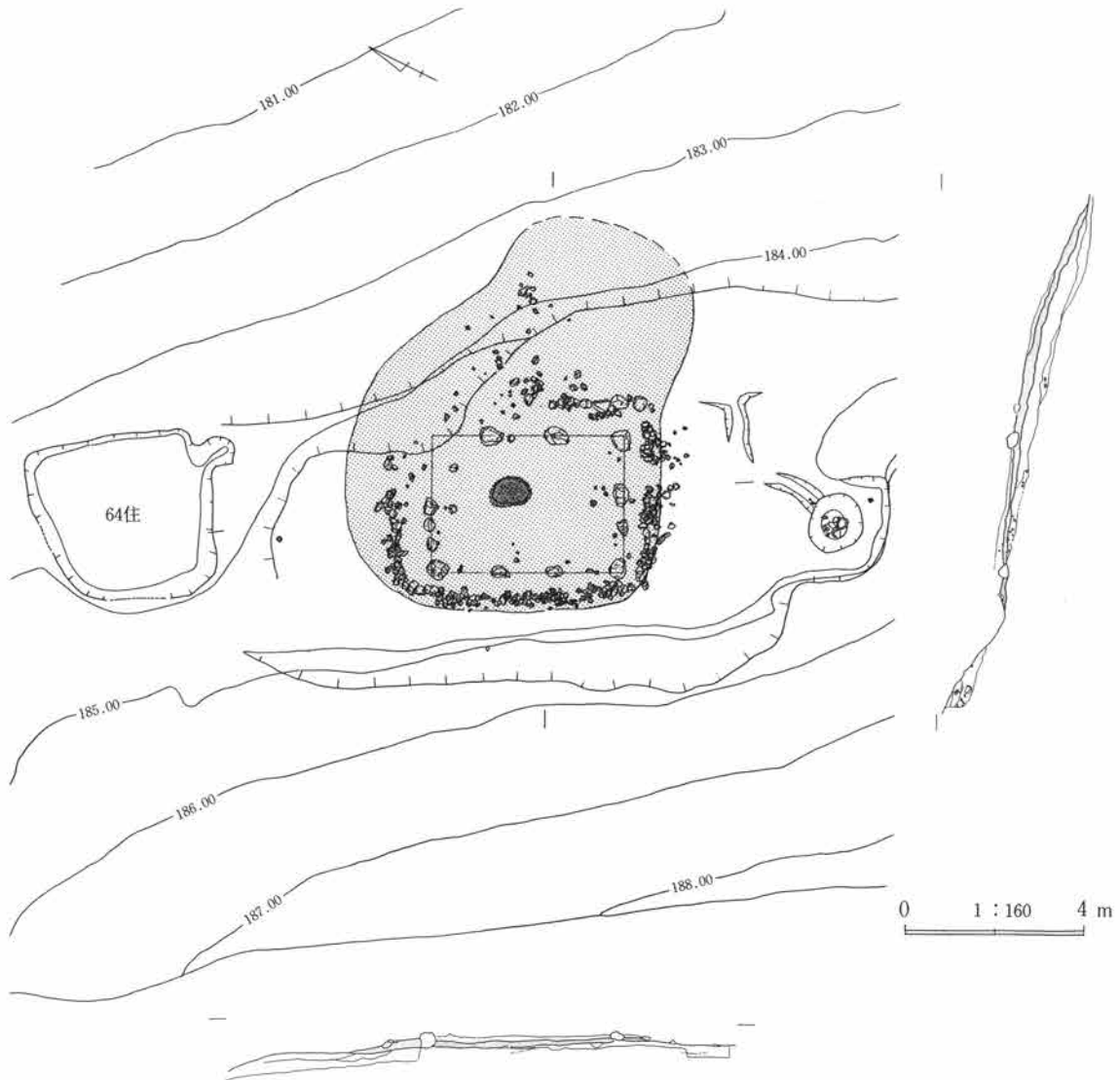
第19図 1号建物跡

第三章 遺構と遺物

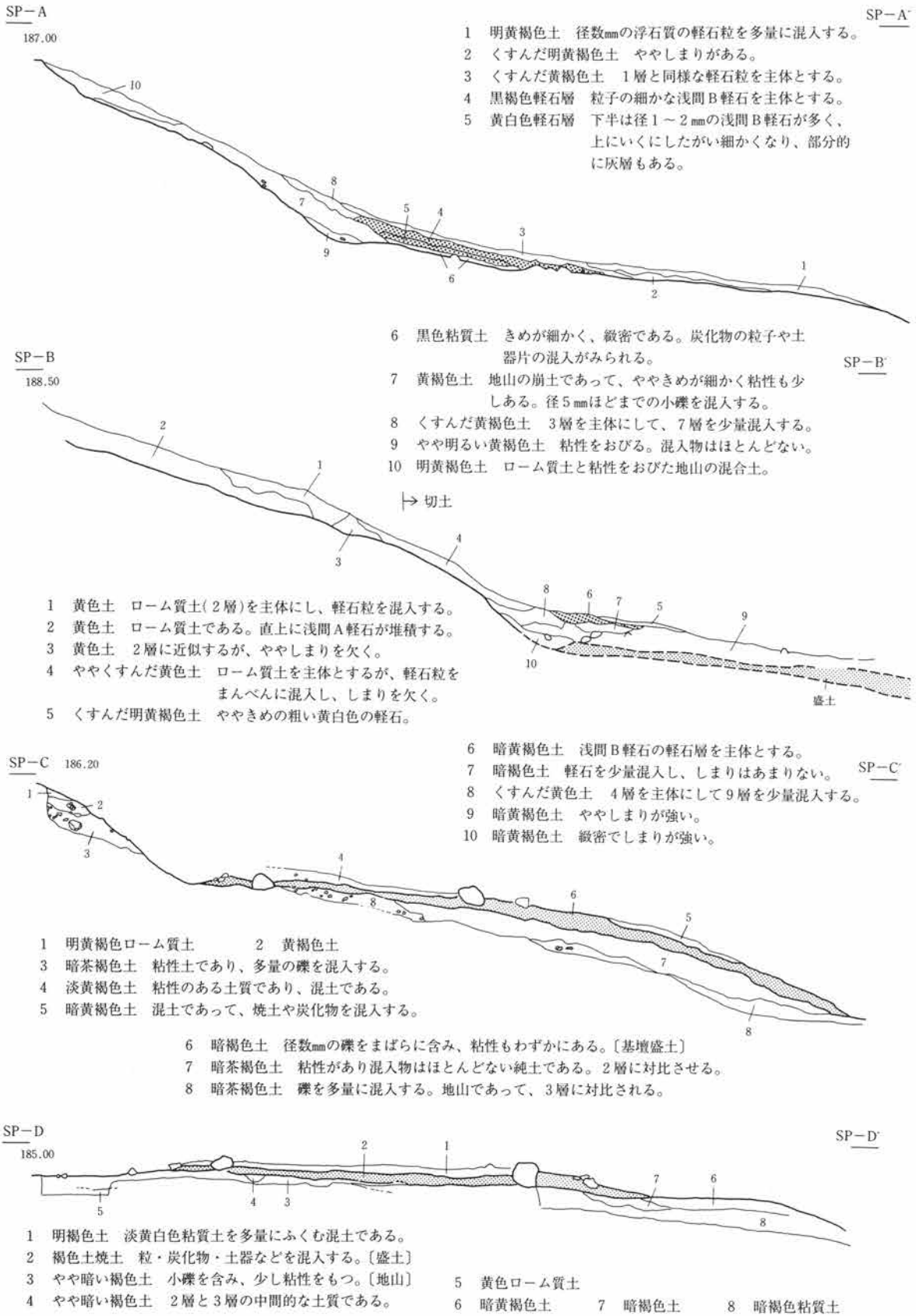
の三辺は5～20 cmの小ぶりの河原石が雑に積まれている。なお、6柱と7柱に対する部分では化粧石がなく、これは流失したものかも知れないが、建物入口に関するものかとも推測される。

使用石材は、北東辺のやや大ぶりの石が安山岩を主体とし、他の小石は安山岩・チャート・石英片岩を混じえている。

平面構造 本建物の柱間は、桁行3間・梁間2間である。本建物の場合、柱の想定位置については必ずしも礎石の中心ではなく、礎石上面の最も高い部分にあって、しかもそれが礎石の外端にある傾向があるのではないかと推測される。それによると、桁行柱間寸法は、中間が4尺(1.20 m)、端の間が5尺(1.50 m)、梁間柱間寸法は5尺(1.50 m)等間となり、桁行総長は14尺(4.20 m)、梁間総長10尺(3.00 m)となる。なお、この柱間寸法の尺度については1尺を30 cmとして換算したが、本建物の場合、30 cmよりやや短いものが妥当とみられる。建物規模が小さいために、細かい数値は出しがたいが、29～30 cmの間のいずれかと推測される。



第20図 1号建物跡盛土状況



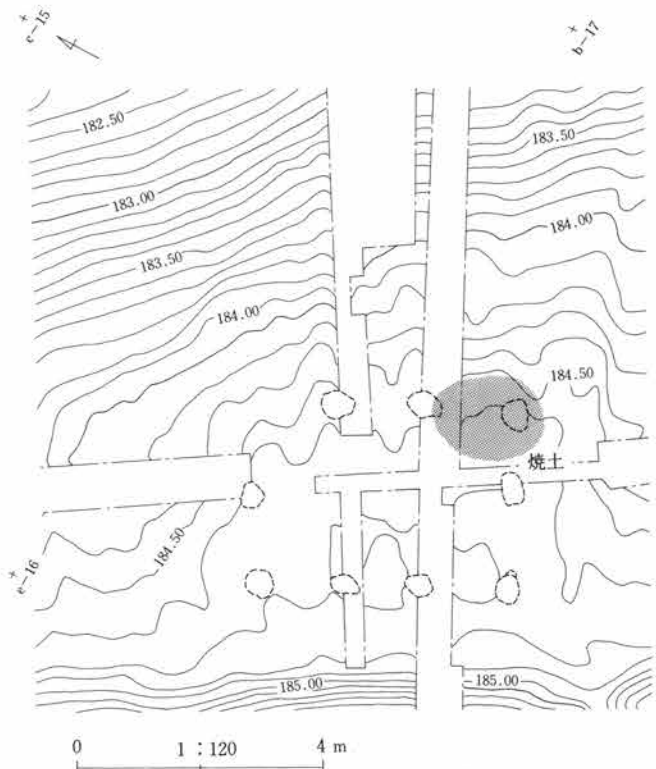
第21図 1号建物跡断面図 (本図は付図3に対応する。)

第三章 遺構と遺物

上記のような柱間幅の検討からすると、9柱の礎石は柱想定位置からややずれがあり、基壇の崩壊に伴って北西側に15cmほどずれたのではないかと考えられる。

建物の軸方位は、N-63°-Eである。

礎石 礎石は、10柱の礎石が基壇の崩壊に伴って落下し、それを除く9個が現存する。全て自然石（河原石）であって、上面に加工はみられない。最小のものは22cm×40cm・厚さ16cm、最大のものは38cm×53cm・厚さ30cmである。隅部に大きめの礎石が用いられた傾向がある。礎石上面の標高値は184.70m～184.95mというように差があるが、谷側のほうが低い。これは整地面が谷側に沈んだことに起因するものではないかと考えられる。礎石の据え方は基壇の築成途中に据えて、さらに基壇の築成を続行する方法がとられている。礎石の根石はあまり多用されず、わずかに2柱で1個、5柱で2個がある。



第22図 1号建物跡 基壇造成前の整地地形

なお、梁間では奥の方の間に、南東辺で1個、北西辺で2個の20cm×25cmほどの礎石状の石が柱筋上に配されている。上面の標高値は礎石のそれより数cm低い。この石の機能については、相対する石の数が異なることから間柱とは考えられず、上面の高さからみて地覆長押の可能性も低いと考えられ、壁や窓に関するものではないかと推測される。以下、本稿ではこれを「中間支石」と仮称することとしたい。

礎石や中間支石の大きさ・上面の標高値・石材は下記のようなものである。

番号	タテ	ヨコ	厚さ	上面標高値	石材	
礎石	石1	30cm	48cm	31cm	184.77m	安山岩
	2	42cm	45cm	23cm	184.82m	安山岩
	3	25cm	37cm	17cm	184.84m	チャート
	4	21cm	36cm	16cm	184.85m	安山岩
	5	34cm	43cm	21cm	184.93m	安山岩
	6	33cm	50cm	23cm	184.90m	安山岩
	7	43cm	45cm	25cm	184.82m	安山岩
	8	38cm	54cm	25cm	184.72m	安山岩
	9	40cm	52cm	33cm	184.70m	安山岩
中間支石	1	23cm	29cm	13cm	184.70m	
	2	22cm	32cm	13cm	184.72m	
	3	22cm	36cm	15cm	184.83m	

基壇上の土坑 基壇上には、中央やや北西寄りに85 cm×60 cmの不正長円形で、深さ8 cmほどの浅い平底の土坑があり、中は全体に弱く焼けて赤色味を帯びている。覆土は焼けた小礫と炭を多量に含んだ褐色土である。掘り込み面は、黄白色粘質土を主体とする淡黄褐色土（第21図 SP-Cの4層、SP-Dの1層）である。この層は後述するように、基壇盛土の直上の堆積であり、そのことから本土坑は建物倒壊時以降のものである蓋然性が高いと考えられる。

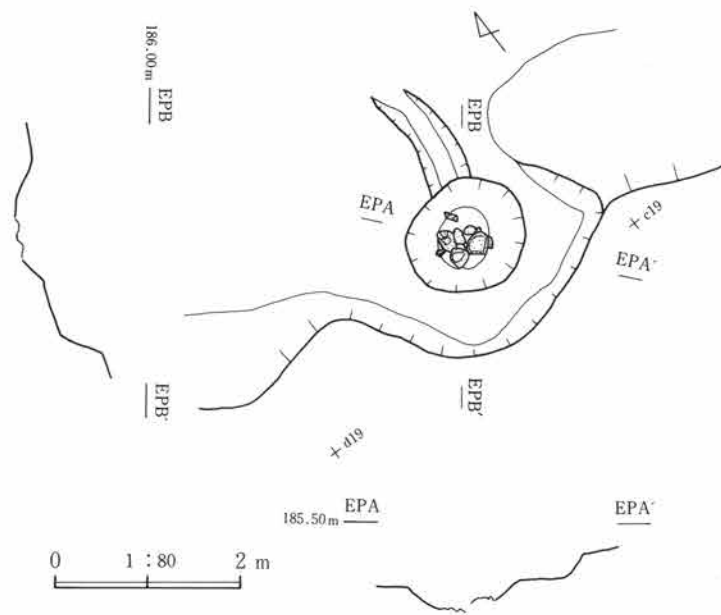
廃絶状況 本建物跡は、火災にあった痕跡はないことから、廃絶は火災によるものではない。

建物廃棄後の覆土はおおむね下から、淡黄褐色土10～15 cm、暗褐色土数cm、浅間B軽石を主体とする褐色土10～15 cm、ローム層に類似した明黄褐色土数cm、黄白色灰質土、浅間A軽石、表土という層順であり、後三者の厚さは1 m内外であった。

基壇を直接覆う淡黄褐色土は粘性を帯びた混土であるが、白色味の強い部分が多い。建物の壁材を主体とするものではないかと思われ、建物倒壊に伴って堆積したものと推測される。

そして、この淡黄褐色土の上に、薄い間層（暗褐色土）を挟んで、浅間B軽石の堆積がある。この浅間B軽石層は純層ではないが、二次堆積でもないとみられる。このことから、1号建物跡の廃絶時は浅間B軽石降下の前であって、かつそれを大幅に溯らない頃と推測される。

付設土坑 1号建物跡の基壇南東辺から東方3.5 mの位置に1基の土坑があり、これを1号建物跡の「付設土坑」と呼ぶ。本土坑は1号建物跡の所在する整地面（2号テラス）の南西隅部にある。切土の奥の崖面を幅220 cm・奥行き180 cmほど掘り込んで造られた矩形の画の中央にある。平面形は、タテ130 cm・ヨコ110 cmのやや横長の円形であって、深さは30 cmである。下底部には大小10個ほどの石が放り置かれたようにある。本土坑は、黄白色粘質土を掘り込んで造られており、水の浸透性はきわめて低く、土坑下底部には滞水していた様相が認められる。なお、発掘調査中においても滞水の状況は視認することができ、機能的には滞水・貯水を目的としたものと考えられる。



第23図 1号建物跡付設土坑

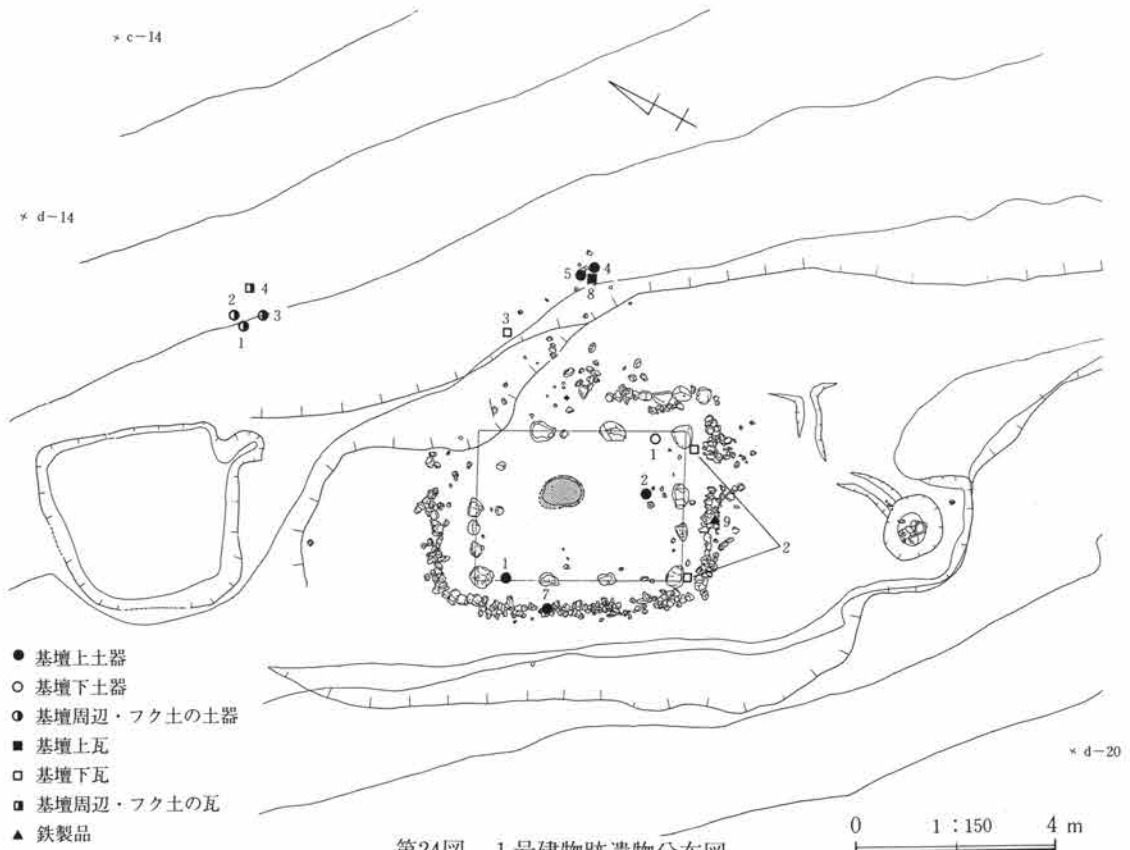
本土坑からは北西方に幅40 cmの浅い溝が出ている。が、深さは2～3 cmときわめて浅く、また形状も整っていないことから、人為的なものではなく、土坑からあふれた水が流れて自然にできたものとみられる。

B 遺物

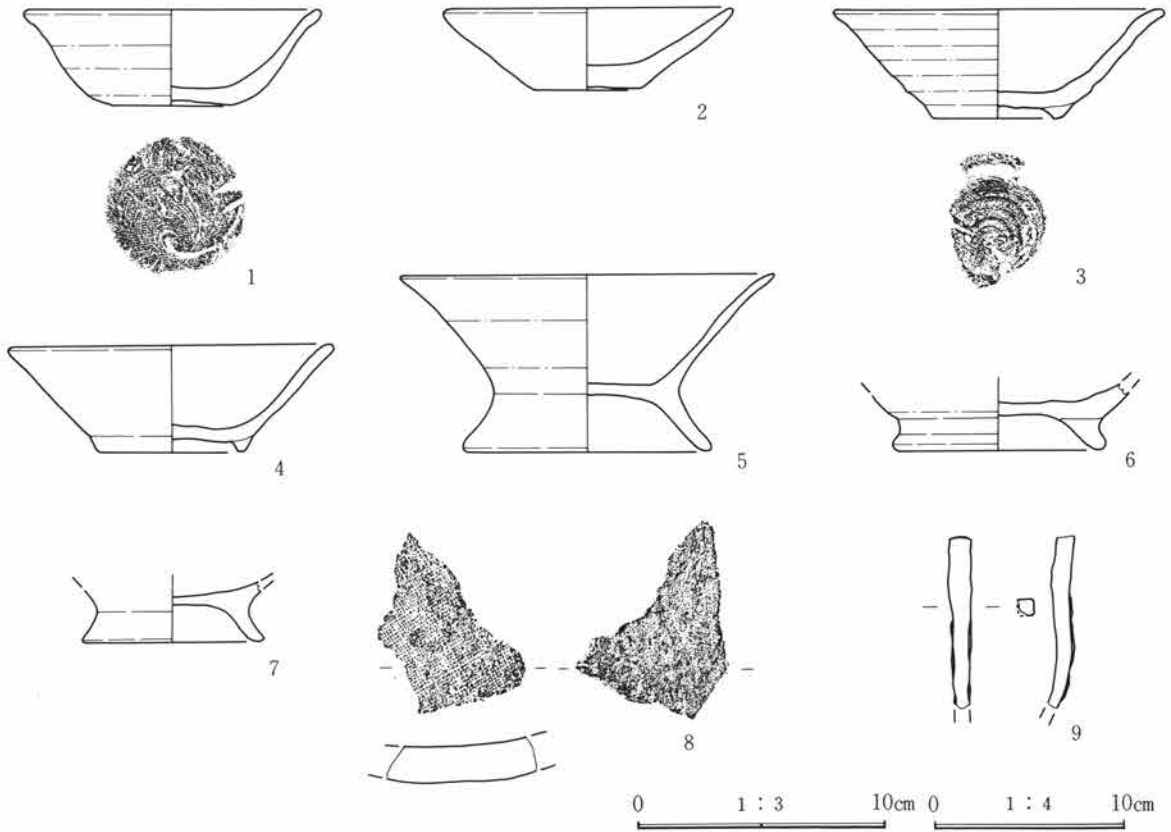
1号建物跡の出土遺物は、ごく少量であった。1号建物跡出土の遺物は、出土位置により、三群に分類した。まず、整地や基壇の造成に伴う盛土の上面と下面とで分けた。この盛土の上面の出土遺物を「基壇上の遺物」とし、盛土中と盛土下の遺物を「基壇下の遺物」とした。また、基壇の周辺より出土したものと出土位置不詳のものをまとめて「基壇周辺・フク土」とした。遺物の分布状況は、第24図のとおりである。

1号建物跡で出土した瓦は数片であり、量からみて瓦葺きであったとは認められない。

第三章 遺構と遺物

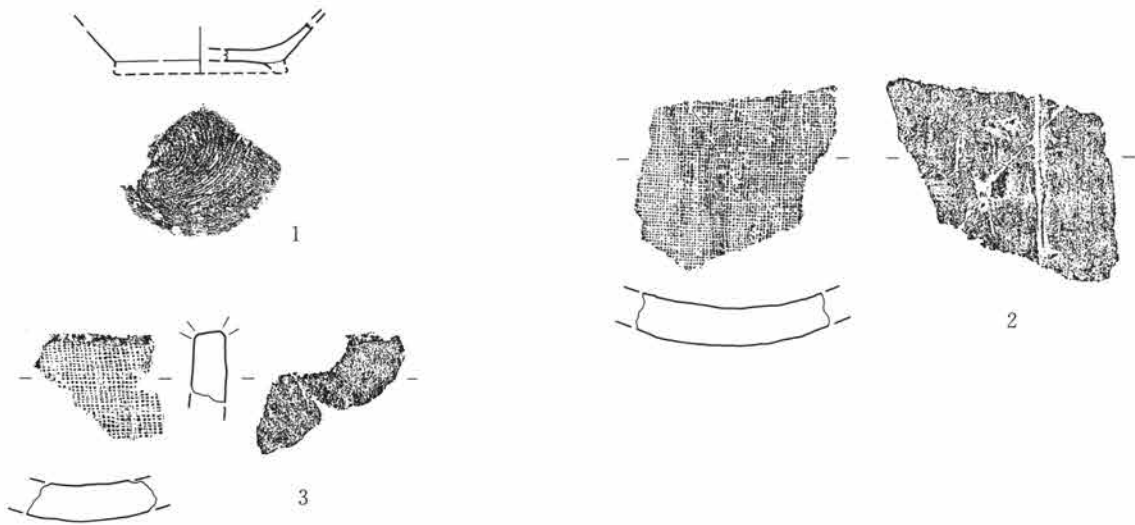


第24図 1号建物跡遺物分布図

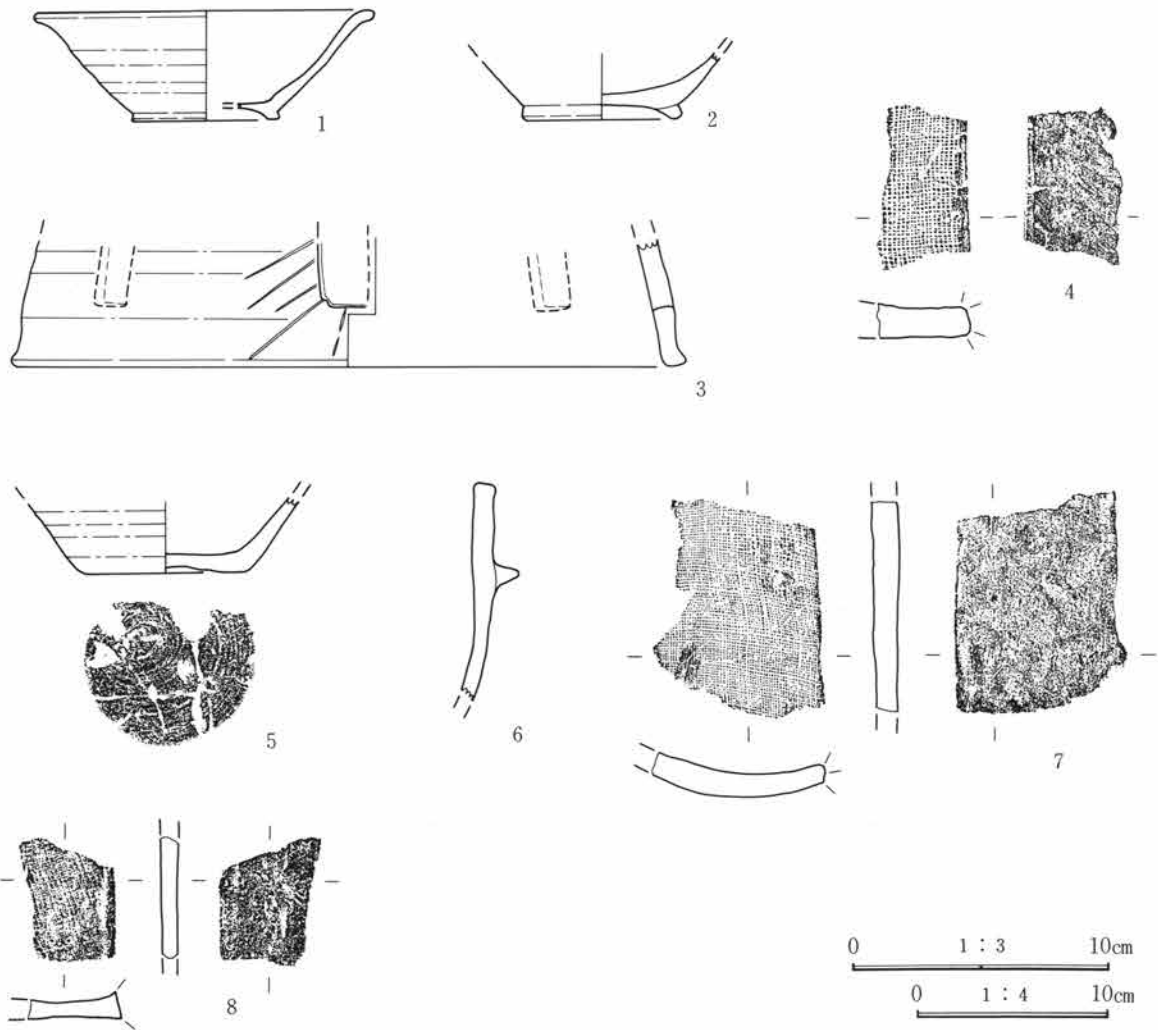


第25図 1号建物跡基壇上出土遺物

1号建物跡基壇下



1号建物跡周辺・フク土



第26図 1号建物跡基壇下・周辺・フク土出土遺物

(2) 2号建物跡

A 遺 構

概要 基壇上に建つ5間4間の礎石建物であって、瓦葺き建物である。

位置 頂部区の西寄りに位置する。寺院跡の主体部が形成されている、東から西へのびる尾根頂部の西端にあたる。東方には3号建物跡があり、西方は谷を隔てて西尾根に面する。標高は、189.0 mである。

整地 本建物跡は、東から西に下る細い尾根の、中央から北側の斜面に立地し、建物の建造に当たり、基壇下および周囲に、切土と盛土による相当大規模な整地がなされている。

切土の規模は、厳密には確定できないが、斜面の山側つまり建物の東方と南方に見られる。特に、東側は顕著であって、3号建物跡との中間に1.5 mほどの段差があり、ローム層下の暗褐色粘質土が露出している。

盛土による整地は、大きくは3部に分けられる。これを整地A・整地B・整地Cと呼ぶ。以下、これらの整地についての記述は主として、第33図と付図5を参照されたい。

整地A (付図5 20号トレンチ) は、基壇の北西側の下層から基壇西方にかけてなされたものである。この整地は、西方は5号建物跡まで連続しているとみられ、単に建物の基盤を造成するものではなく、2号建物跡と5号建物跡の間の鞍部状に窪んだ尾根を平坦化するものでもある。厚さは最も厚い部分で1 m程に達しており、4～5層に分層され、山側から順次盛られたことがわかる。用土は、暗黄褐色土および暗褐色土であって、ロームあるいはローム質土を主体としており、混土ではあるが、夾雑物はほとんどない。全体として、しまりは強くはなく、さしてていねいな造成とは見なされない。

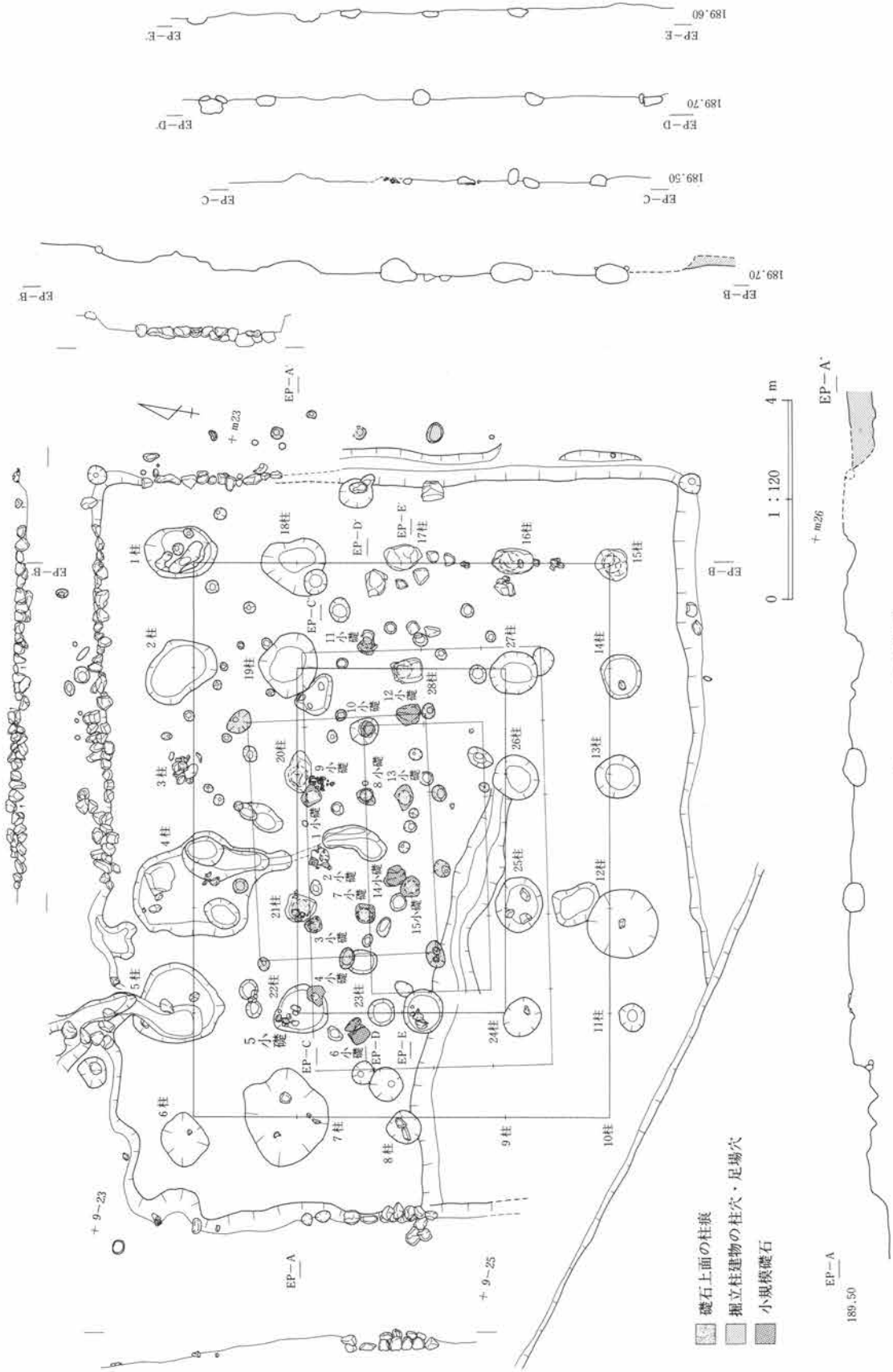
なお、本整地の下層は、炭化物や土器などを包含する暗黄褐色の自然堆積土が堆積しており、この層中から住居跡(78・79号住居跡)が掘り込まれている。また、その土器群は、「西方整地面下」の出土遺物としてあつかった。

整地B (付図5 トレンチ14・15・16・20) は、基壇東方から南方にかけてなされた整地である。この部分は、一旦地面が掘り窪められたものであって、基壇の東辺と南辺もこの切土によって削り出されている。この切土によって掘り窪められた部分に再度盛土されたものを「整地B」と呼ぶ。整地Bは、基壇の東から南にかけて一連になされているが、以下、東の部分と南の部分に分けて記述する。

東の部分は、南北約25 m・東西の最大幅6 mの範囲におよび、上面はほぼ整った平面をなすが、東から西、南から北へ緩く下っている。すなわち上面の標高値は、南側で189.70 m、北側で188.70 mであり、中央部の東側で189.75 m、西側で189.25 mである。また、盛土の厚さは、最も厚いところで50 cmほどである。土の積み方は、多いところでは7～8層に分かれ、薄い層は2～3 cm、厚い層は10数cmである。用土は、褐色土・暗黄褐色土・暗褐色粘質土など数種が使われている。ほぼ水平な堆積を呈し、版築状である。しまりは堅いというほどではないが、全体としては、ていねいな造成とみられる。

この整地土内からは、地鎮状の土器のセットが出土した。位置は、1-23グリッドのほぼ中央部である。整地層の上面から深さ25 cmのところ、須恵器6個体が、正立して、まとまって置かれたようであった。器種は小壺1・椀3・高台付椀2である。土坑を掘って埋めたのではなく、整地の途中でそれらの土器を置いて埋めながら整地を継続したものとみられる。土器には使用した痕跡は全くなく、破損もほとんどない。意図的に新しい土器を埋置したものであって、整地にたいする地鎮と見るのが妥当と考えられる。

南の部分は、調査区が限られているため、整地の範囲は不明であるが、南北幅は6 mほど、東西長は15 m以上におよぶ。上面は東から西、南から北へわずかに傾斜している。中央部の標高は189.30 mである。用土は、暗褐色粘質土および暗褐色土である。他は東の部分と同様である。



第27図 2号建物跡

第三章 遺構と遺物

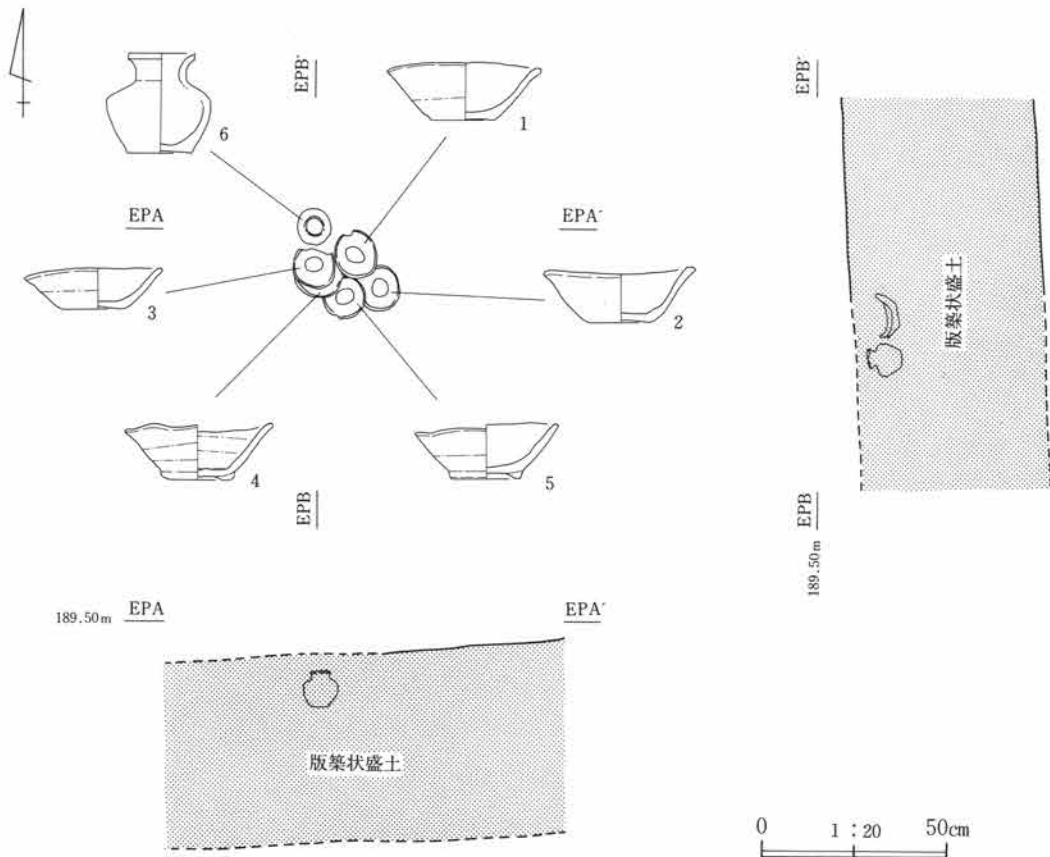
なお、整地Bは、2号建物建造に伴う足場穴が整地面上から掘り込まれたことが確認されており、整地Bの造成は2号建物建造の当初になされたものであるとみなされる。

整地Cは、基壇北方から北西にかけてなされた整地である。2号建物跡から北へは細い尾根が下り、また、南西側は谷へ向かって急に下り込んでいる。盛土はこの尾根と急な斜面になされており、2号建物跡の北側の平坦な空間面を確保する目的でなされたものとみられる。盛土の範囲は、東西17m・南北16mの不整形である。盛土の厚さは、東側が薄く、西側が厚い傾向があり、最も厚い部分(26・27トレンチ)では1m以上におよぶ。用土は、暗褐色土・暗黄褐色土と共に暗褐色粘質土や凝灰質泥岩が多量に使用されており、全体として土質の粗い盛土である。土の盛り方は、多いところでは10層以上に分層できるが、層の厚さは均一ではない。山側から順次、地形の傾斜にあわせて盛られた状況がうかがえる。

なお、整地Cは、地滑りによる地割れが随所に入っていると共に、土層断面をみると波状にたわんでいる状況がみられる。この地割れは基壇の中央部付近まで達していて、窪みや亀裂が見られる。

また、本層の下部には、黄褐色土ブロックと暗褐色粘質土を少量混入し、土器も包含する暗黄褐色土層が堆積する(24トレンチ)。その土器群は、「北方整地面下」の遺物として見つかった。

基壇 基壇は、切土と盛土によって造成され、平面形は長方形を呈す。南西隅の一部が調査区外に出るが、遺存状況も比較的良好であって、ほぼ全容は把握できる。規模は、東西15.1m・南北12.0mであり、基壇上面の標高は189.40mである。基壇の高さは、南辺が20cm、東辺が30cm、北辺が60cmである。西辺は遺存状態が良くないが、北辺と同様と推測される。北辺と西辺は、端縁がゆるやかに低くなり、実際の高さは30cmほどと推測される。

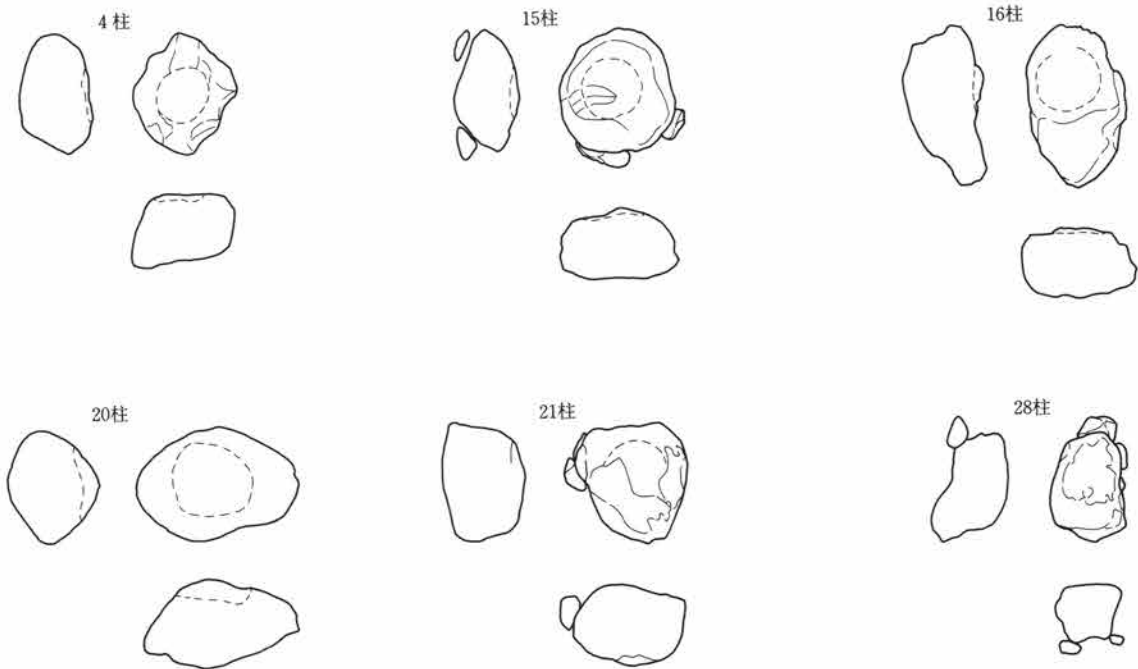


第28図 2号建物跡地鎮状遺物出土状況(遺物の縮尺は1/6である。)

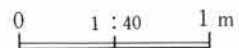
基壇の造成 本基壇は、東辺と南辺は切土によって造り出され、それ以外の大部分は盛土によって造られている。切土による造成部分では、南東隅寄りでは暗褐色粘質土が露出し、そこから西あるいは北に行くに従い黄色ロームやソフトローム的な暗黄褐色土が露出している。盛土は整地面が北西方に下ることから、北西方に向かってしだいに厚くなり、もっとも厚い基壇北西部では約80 cmに達する。盛土の用土は、黄色のハードロームに近似したやや暗い褐色土であって、全体的に均質である。が、細かく見ると、盛土の単位が多いところで8層ほどに分けられ、ブロック状のハードローム・浅間室田軽石粒・暗褐色粘質土などの微量な混入のしかたに微妙な差異がみられる。層は、薄いものは3 cmほど、厚いものは10数 cmであり、ほぼ水平堆積を呈し、いわゆる版築状をなす。しまりはあるが、さして強固ではない。なお、盛土の内部で鍛冶が行われた形跡があり、そのためか炭化物が盛土に混入している部分もある。

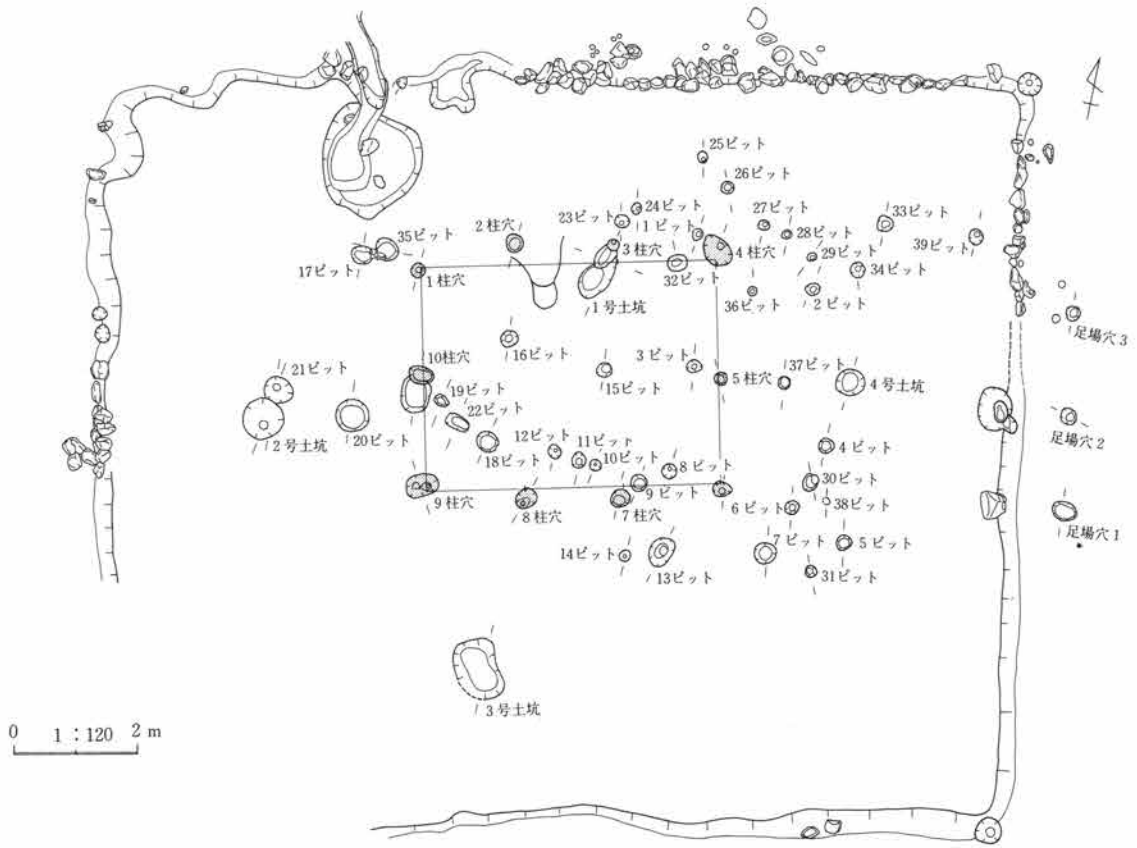
基壇化粧 基壇化粧は、東辺の北1/3、北辺、西辺の北半分、つまり基壇の北半分ほどになされ、南半分にはなされなかったものようである。が、自然に崩落している部分もあり、特に基壇の北西部は地滑りにより大きく崩れている。また、基壇南辺は耕作による攪乱を受けている。このように、基壇化粧の全容を厳密に確定することはやや難しさもある。石材は、長さ30～50 cmの安山岩とチャートの河原石が混用されている。石はおおむね平たいものが使われている。石の積み方は、残りの良い部分を見ると、まず、石の広い面が正面に出るように並べ、つぎにその上に石を水平に置いている。つまり、基壇化粧は石を2段に積んで構成されたものとみられる。

平面構造 本建物遺構は、東西5間、南北4間の東西棟であって、四面庇付きの礎石建物である。原位置を保っている礎石は側柱に3個、身舎に3個があり、原位置から動いている礎石は1個がある。本建物遺構では礎石の根石は概して少ないようであって、礎石が抜き取られた部分では、明確な根石はあまりなかった。なお、礎石据え付け穴あるいは礎石の抜き取りの際に掘られた窪みが、西側柱列を除いた柱位置のほぼ全てにみられた。

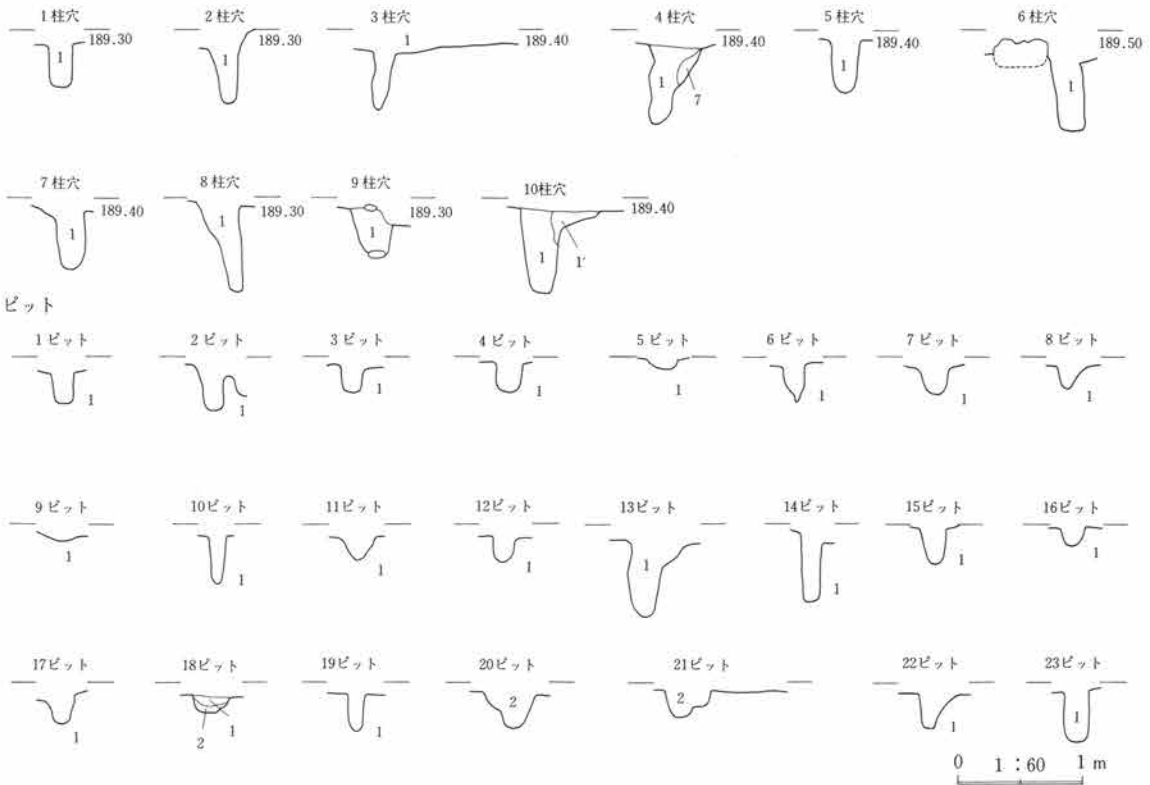


第29図 2号建物跡礎石

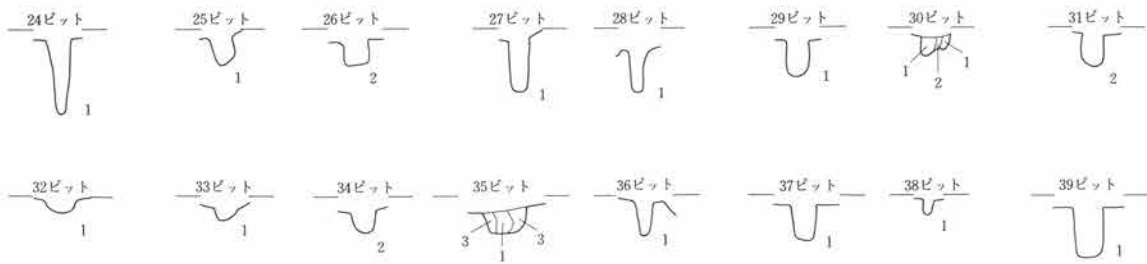




掘立柱建物状遺構の柱穴



第30図 2号建物跡柱穴・ピット・土坑(1)



足場穴



- 1 黒褐色 焼土粒と炭化物粒が混入する。たいへんもろい土。
- 2 暗褐色土 ロームブロックと焼土粒が混入する。
- 3 暗褐色土とロームブロックの混合土 炭化物粒が混入する。もろい土である。
- 4 暗褐色土 炭化物と、白色と橙色の粒土が混入する。固い。
- 5 暗褐色土 炭化物が混入する。しまりは乏しい。
- 6 暗褐色土 炭化物が混入し、焼土粒が微量混入する。しまりは乏しい。

土坑



- 1 黒褐色土 焼土粒と炭化物粒が混入する。たいへんもろい。一度に埋まったとみられる。焼土粒は壁材と考えられる。
- 2 暗褐色土 焼土粒とローム粒が混入する。
- 3 暗黄褐色土 若干焼土粒が混入する。

0 1 : 60 1 m

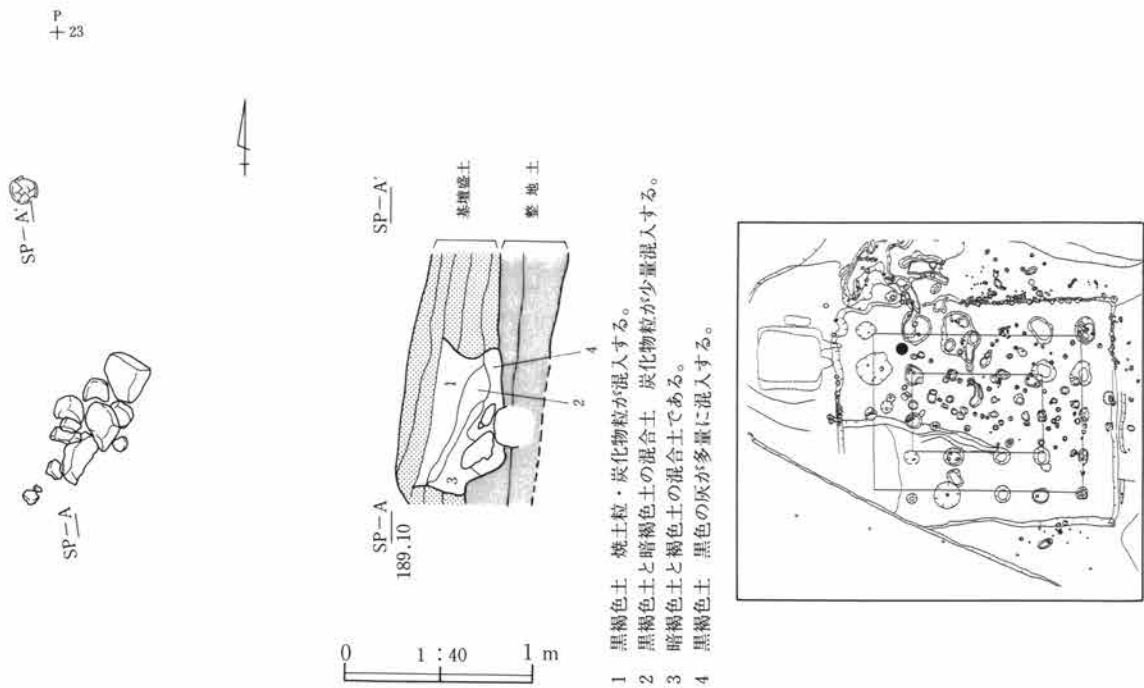
第31図 2号建物跡柱穴・ピット・土坑(2)

礎石やそれらの穴のほぼ中心に柱位置を推定すると、桁行は、総長11.1 m (37尺) で、端の2間が2.1 m (7尺)、中の間が2.7 m (9尺) であり、梁間は、総長8.4 m (28尺) で、柱間は2.1 m (7尺) 等間である。建物の主軸方位は、N-10°-Eである。

なお、側柱の軸線から基壇化粧の外縁までは2 m内外であり、軒の出は7尺ほどと推測される。

礎石 礎石は、原位置を保つもの6個、動いているもの1個がある。以下、それぞれの状況を記すが、位置と番号は第27図のとおりである。15号柱位置の礎石は、タテヨコ75×63 cm、厚さ38 cm、石材はチャート、根石は3個がある。16号柱位置の礎石は、タテヨコ86×52 cm、厚さ36 cm、石材はチャート、根石はない。17号柱位置の礎石は、タテヨコ74×53 cm、厚さ48 cm、根石はない。20号柱位置の礎石は、タテヨコ81×58 cm、厚さ48 cm、石材はチャート、根石はない。21号柱位置の礎石は、タテヨコ66×60 cm、厚さ43 cm、石材は安山岩、根石は3個である。28号柱位置の礎石は、タテヨコ65×46 cm、厚さ35 cm、石材は安山岩、根石は7個である。4号柱位置の礎石は、原位置からは動いているが、タテヨコ74×64 cm、厚さ44 cm、石材は安山岩とみられる。これらの礎石は、本遺跡の礎石建物の中では大きめである。河原石が使われ、上面に加工はみられない。本建物は火災にあっており、礎石の上面や側面は熱により、赤変や表面の剝離が見られる。また、礎石の上面には、柱のあたっていた部分の焼け方が弱く、その痕跡が円形状に残るものがある。15号礎石は、32×34 cm、16号礎石は35×35 cm、20号礎石は42×39 cm、21号礎石は36×40 cm、4号礎石は32×34 cmであり、このことから、柱径は30から35 cmほどと推測される。

小礎石 基壇上には、上記の礎石の他に、小ぶりの礎石状の石が15個ほどみられ、それらを「小礎石」と呼ぶ。その位置と番号は第27図のとおりである。なお、以下、「小礎石」と上記の礎石を区別するために、後者を便宜的に「普通礎石」と呼ぶことがある。1号小礎石は、タテヨコ45×40 cm、厚さ17 cm、石材は安山岩である。



P
+24

第32図 2号建物跡鍛冶状遺構

2号小礎石は、タテヨコ32×37cm、厚さは上半が破損して確定できないが、20cmほどであり、石材はチャートである。3号小礎石は、タテヨコ36×30cm、厚さは15cm、石材は安山岩である。4号小礎石は、タテヨコ42×37cm、厚さ23cm、石材は安山岩である。5号小礎石は、破碎していて規模は不明、石材は閃緑岩である。6号小礎石は、タテヨコ45×30cm、厚さ18cm、石材は珪岩である。7号小礎石は、タテヨコ40×38cm、厚さ24cm、石材は安山岩である。8号小礎石は、タテヨコ42×33cm、厚さ29cm、石材は安山岩である。10号小礎石は、タテヨコ36×30cm、石材は未調査のため不明。11号小礎石は、タテヨコ30×37cm、厚さ20cm、石材は未調査のため不明。12号小礎石は、タテヨコ50×40cm、厚さ15cm、石材はチャートである。13号小礎石は、タテヨコ55×38cm、厚さ19cm、石材は安山岩である。14号小礎石は、タテヨコ38×46cm、石材は硬砂岩である。15号小礎石は、タテヨコ42×49cm、厚さ17cm、石材は安山岩である。これらの小礎石は、「普通礎石」と同様に、火災により赤変しており、円形の柱の痕跡が残るものもある。1号小礎石は径26cm。3号小礎石は径22cm。4号小礎石は径17cm。7号小礎石は径25×27cm。8号小礎石は径21×25cm。13号小礎石は径24×27cm。15号小礎石は径42×40cmである。小礎石としたものは、上記のように15個であるが、同様な石は他にも数個がみられ、総数では20個前後になるとみられる。これらの小礎石には根石を伴うものはないが、11号小礎石の東にある石には2個の根石状の小石があった。

小礎石の性格 上記の小礎石の性格については、まず、原位置を保っているかどうか、という問題が前提となるが、これについては確定しえるものはない。が、1・2・3・4・8・10・11の7個は原位置を保っている可能性があるかとみられる。また、1号と3号の2つの小礎石は、「普通礎石」のかたわらにあって、その上にもるような位置関係がみられ、時間的な関係として小礎石は「普通礎石」に対し同時か遅れて設置されたものと考えられる。基本的には、小礎石の上面には径20~25cmほどの柱痕跡が残っており、礎石であって



第33図 2号建物跡整地状況

建物にかかわるものであること、火災に遭っていること、の2点が確認される。以上のことから、小礎石上には建物が建っていたと考えられるが、問題はそれが「普通礎石」の建物と同時であったのか、あるいはその後に建てられた別個な建物であったのか、ということであろう。前者の場合は高床構造にかかわる可能性が考えられ、後者の場合は「普通礎石」建物焼失後の再建建物となろう。

第27図は、後者の想定で、建物を想定してみたものである。建物南半域に礎石の欠損があるが、一応5間4間の四面庇付きの東西棟の建物となる。桁行は、総長8.85 m (29.5尺) あるいは8.7 m (29尺) であって、端の2間は1.5 m (5尺)、中の中間は2.85 m (9.5尺) あるいは2.7 m (9尺) である。梁間は、総長4.8 m (16尺) であって、柱間は1.2 m (4尺) である。建物の軸方位はN-8°-Eである。

小礎石が建物にかかわると仮定した場合の建物は上記のようであるが、それは面積としては41.76 m²であって、「普通礎石」建物の93.24 m²に比して半分以下であり、規模的には小さなものである。「普通礎石」の基壇に対して不釣り合いであるが、基壇を改造した形跡はない。また、基壇周辺に大量に散布する瓦も「普通礎石」に伴うものと見なされるが、それらも整理した状況はない。つまり、小礎石を再建建物とした場合、周辺の地表に、瓦あるいは炭化材などが散在した状況のままなされたと考えられる。そのようなこともなくはないのであろうが、再建の可能性はきわめて低いのではないかと推測される。

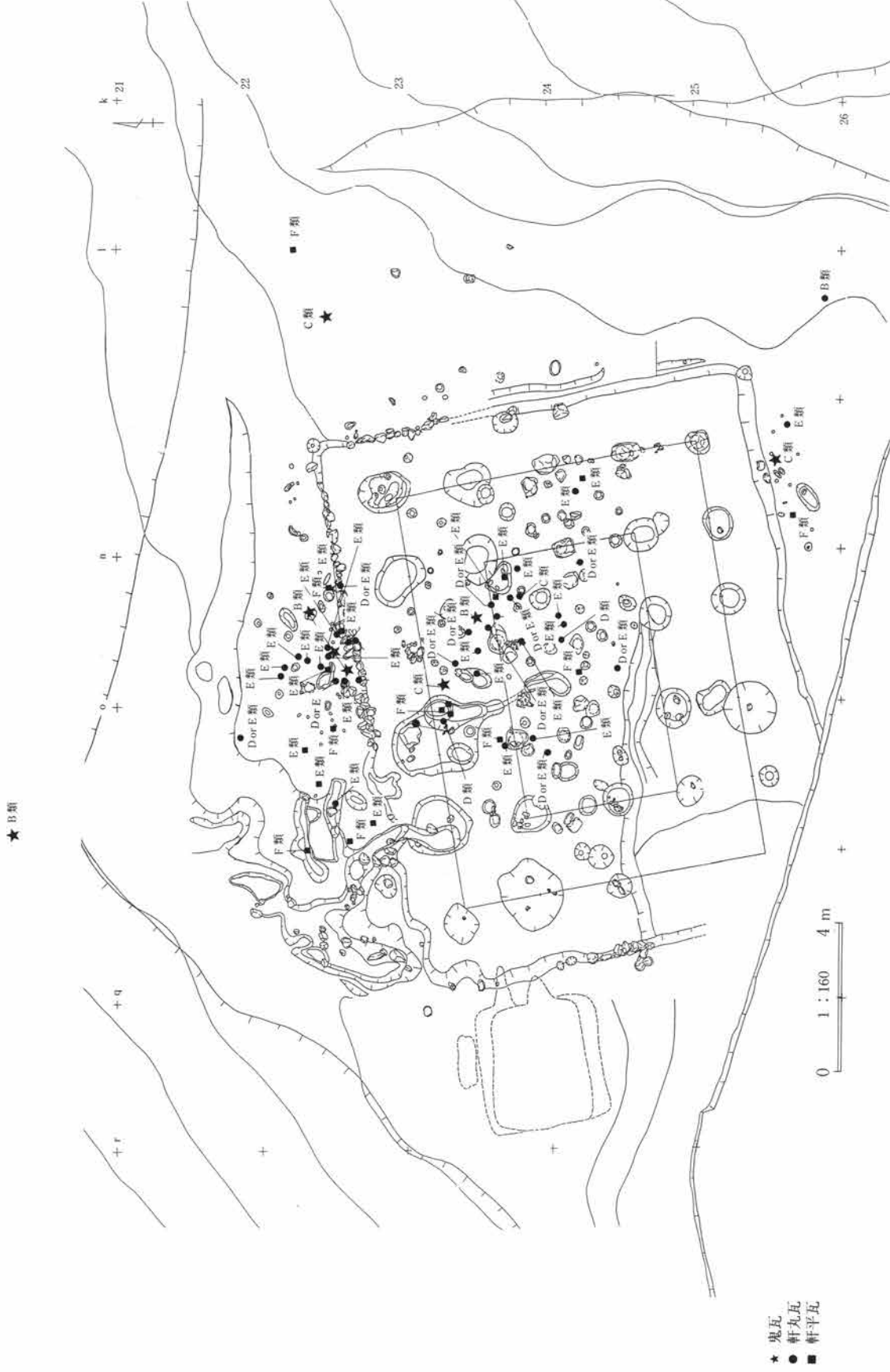
基壇上の遺構 (第30・31図) 2号建物跡の基壇上には、10本の柱穴からなる掘立柱建物状遺構1棟、柱穴状のピット39本、土坑4基の遺構などが確認された。

掘立柱建物状遺構の10本の柱穴の規模は以下のものである。1号柱穴は径22×23 cm、深さ34 cm。2号柱穴は径29×28 cm、深さ38 cm。3号柱穴は径20×19 cm、深さ47 cm。4号柱穴は径57×43 cm、深さ64 cm。5号柱穴は径22×22 cm、深さ43 cm。6号柱穴は径29×25 cm、深さ55 cm。7号柱穴は径31×28 cm、深さ47 cm。8号柱穴は径33×37 cm、深さ72 cm。9号柱穴は径55×36 cm、深さ40 cm。10号柱穴は径74×47 cm、深さ67 cm、である。建物としては、3間2間の東西棟である。桁行は、4.8 m (16尺) であって、柱間は1.6 m (16尺を3等分) 等間である。梁間は、3.6 m (12尺) であって、柱間は1.8 m (6尺) 等間である。桁行の中2本の柱が外側に出る傾向があるが、北側の2本は地滑りの影響を受けていることも考えられる。本遺構は、基壇上における、鍛冶などの建物造営作業に伴う仮設的な建物と推測される。

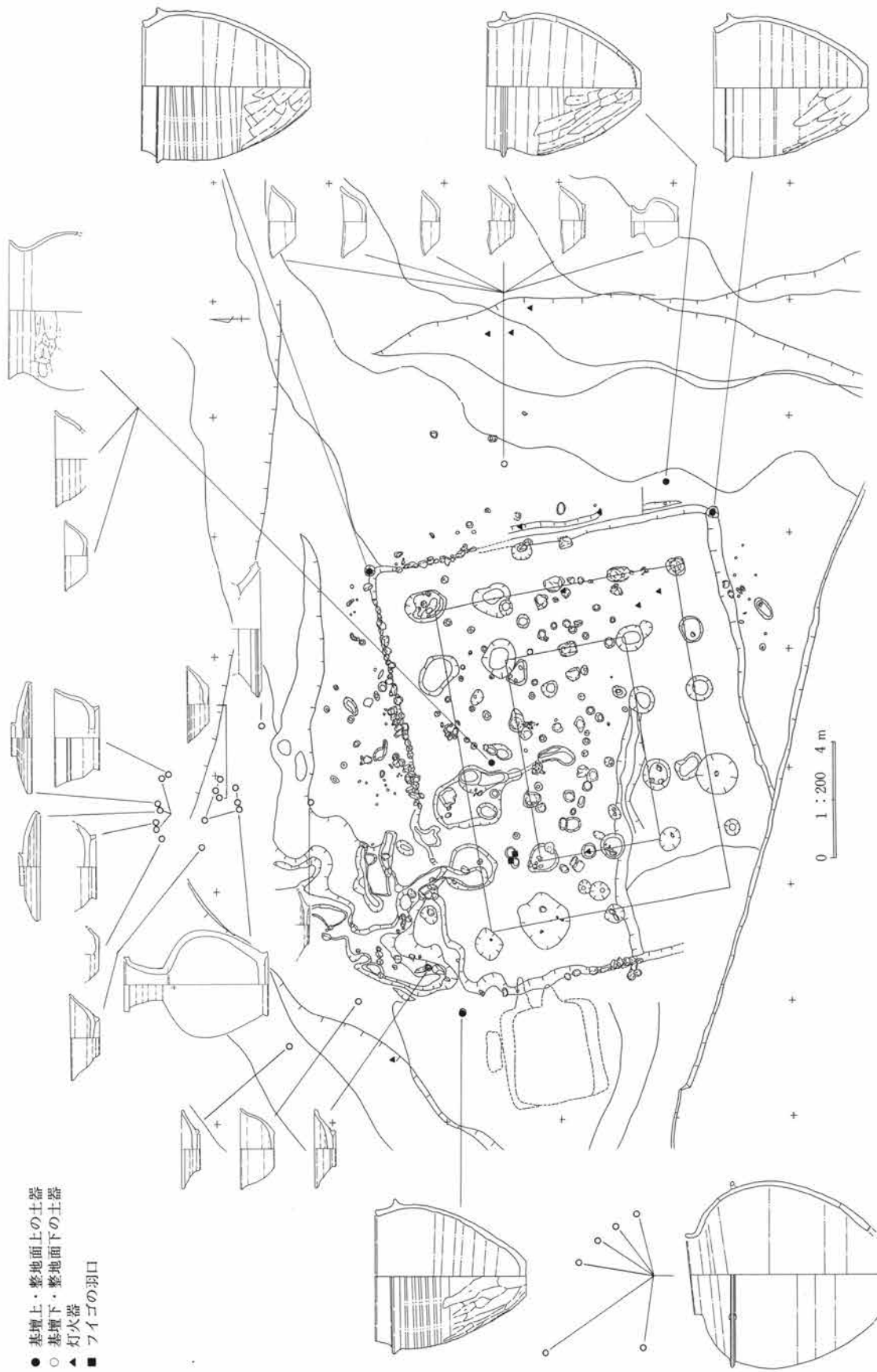
ピットの規模は、下記のとおりである。1号は径18×18 cm、深さ25 cm。2号は径20×21 cm、深さ21 cm。3号は径24×20 cm、深さ21 cm。4号は径25×23 cm、深さ23 cm。5号は径25×24 cm、深さ6 cm。6号は径23×21 cm、深さ29 cm。7号は径34×35 cm、深さ20 cm。8号は径23×24 cm、深さ15 cm。9号は径28×26 cm、深さ3 cm。10号は径19×20 cm、深さ38 cm。11号は径23×25 cm、深さ18 cm。12号は径22×22 cm、深さ20 cm。13号は径39×51 cm、深さ61 cm。14号は径19×19 cm、深さ50 cm。15号は径26×24 cm、深さ28 cm。16号は径29×25 cm、深さ14 cm。17号は径35×25 cm、深さ20 cm。18号は径36×32 cm、深さ14 cm。19号は径25×17 cm、深さ30 cm。20号は径51×52 cm、深さ27 cm。21号は径45×40 cm、深さ22 cm。22号は径39×23 cm、深さ28 cm。23号は径23×20 cm、深さ40 cm。24号は径17×18 cm、深さ60 cm。25号は径17×18 cm、深さ23 cm。26号は径20×20 cm、深さ20 cm。27号は径18×16 cm、深さ40 cm。28号は径15×14 cm、深さ30 cm。29号は径15×13 cm、深さ29 cm。30号は径25×26 cm、深さ15 cm。31号は径20×19 cm、深さ25 cm。32号は径23×28 cm、深さ5 cm。33号は径26×26 cm、深さ9 cm。34号は径23×22 cm、深さ17 cm。35号は径38×36 cm、深さ19 cm。36号は径15×15 cm、深さ17 cm。37号は径16×21 cm、深さ27 cm。38号は径11×11 cm、深さ10 cm。39号は径23×25 cm、深さ40 cm。ピットは、全体的に覆土の特徴としては黒褐色土ないしは暗褐色土を呈し、しまりはもろい土であって、焼土や炭化物を混入するものが多い。瓦や土器を混入するものもある。また、形



第34図 2号建物跡瓦分布図



第35図 2号建物跡軒瓦・鬼瓦分布図



- 基壇上・整地面上の土器
- 基壇下・整地面下の土器
- ▲ 灯火器
- フイゴの羽口

第37図 2号建物跡主要土器分布図

第三章 遺構と遺物

状からみると、柱穴とみられるものが多い。ただし、3号と17号の2基のピットは、フィゴの羽口が出土しているので、鍛冶にかかわる可能性もある。

土坑は、4基がある。1号土坑は、平面円形状であって、径52×(54)cm、深さ36cmである。覆土は黒褐色土でもろく、焼けた壁材や炭化物を混入する。2号土坑は、平面円形であって、径65×68cm、深さ28cmである。覆土は、暗褐色土・暗黄褐色土であって、焼土が少量混入する。3号土坑は、平面形は不整形であって、径80×(73)cm、深さ22cmである。覆土は、1号土坑と同様であるが、下底部に暗褐色土がある。4号土坑は、平面円形であって、径46×42cm、深さ19cmである。覆土は、主体は焼土とロームの混入する暗褐色土であり、上層に焼けた壁材や炭化物を混入する黒褐色土がある。

足場穴 基壇の東方には、側柱東辺から2.6m、つまり基壇化粧外辺から0.8mの所に3個の足場穴が確認された。1号足場穴は、径25×25cm、深さ56cmである。2号足場穴は、径25cm、深さ39cmである。3号足場穴は、径40×30cm、深さ46cmである。覆土は3本とも共通し、炭化物を混入する暗褐色土であり、下半はしまりはないが、上層は固い。穴の間隔は1.7~1.8mであり、ほぼ均等に建物の周囲にめぐるとすると、足場穴の総数は36個があることになる。3個の足場穴は深さが40から60cmほどと比較的深いのに、他の足場穴が確認されなかったのは理解に苦しむことである。が、3個の足場穴の北に1個、あるいは基壇の北に2個足場穴状の小ピットがあり、それらの深さは数cmから10数cmであって、浅い足場穴もあるのではないかと思われる。なお、足場穴は、整地Bの上面から掘り込まれたことが、土層断面からも確認されている。

基壇隅部の設置羽釜 基壇の南東・北東・北西の三隅に、ピットが穿たれ、羽釜が設置されていた。南東隅のピットは径40cm、深さ18cm。北東隅のピットは径35cm、深さ16cm。北西隅のピットは径32cm、深さ17cmである。それぞれ平面計は円形であり、断面形はすり鉢状を呈す。羽釜は割れていたが、口縁部を上にしており、正位置で設置されていたことが確認される。また、地中に埋設されたのではなく、口縁部や内面は露出していたものとみられる。南西隅のものは調査区外に出るために確認されないが、設置された可能性が高いと考えられる。すなわち、基壇の四隅に1個ずつ羽釜が設置されていたと考えられる。以上のことから、これらの羽釜は、屋根の四隅から落下する水滴を受けるものと推測される。

鍛冶状遺構 2号建物跡の基壇の北西部、p23からp24のグリッドラインの中間の位置において、基壇盛土の中で鍛冶にかかわるかと思われる遺構が確認された。本遺構は、30cmほど盛土が盛られた時点で、径80cmほど掘り込まれ、10~30cm大の石が11個配置されていたものとみられる。石は、原位置から多少動いているようであって、その配置状況は厳密にはわからない。周囲に炭化物が多量に散布し、鍛冶が行われたかと思われるが、確定はできない。なお、第58図「基壇下」No.2の椀は、本遺構の近辺で出土したものである。

廃絶状況 2号建物跡は、火災にあっており、その状況は激しいものであって、基壇上や周辺に焼土・炭化物・焼けた壁材などが多量に堆積すると共に、瓦や礎石にも激しく火を受けた形跡がある。また、残存する礎石や小礎石には柱の痕跡がみられ、そのようなことから、建物が建っていた時点で火災にあったものと考えられる。

B 遺物

出土位置分類 2号建物跡の出土遺物は、瓦類・土器類・土製品・鉄製品などがある。これらの遺物は、出土位置によって、4群に大別され、細かくは9類に類別した。

まず、基壇に直接かかわる出土遺物、これは基壇とその近辺の出土遺物ということであるが、「基壇上」・「基壇下」・「出土位置不明」の3つに区分した。「基壇上」は基壇の上面および基壇周辺の2号建物存在時の地表面上の出土遺物である。「基壇下」は基壇の盛土および基壇下の整地土内の出土遺物である。「出土位置不明」は出土位置の記録のない遺物であって、実際としては基壇上の可能性が高く考えられるものである。なお、出

土位置の指示の付いていない瓦類や鉄製品は「基壇上」の出土遺物である。

つぎに、基壇北方の整地土にかかわる出土遺物であるが、これは、「整地面上」・「整地面下」・「出土位置不明」の3つに区分した。「整地面上」は文字どおり整地面上の出土遺物である。「整地面下」は整地土内と整地面下層の出土遺物であるが、事実上は後者が主体である。「出土位置不明」は出土位置の記録のないものである。

3番目に、基壇西方の整地土にかかわる出土遺物は、「整地面上」・「整地面下」の2つに区分した。「整地面上」は文字どおり整地面上の出土遺物である。「整地面下」は整地土中および整地土下層の出土遺物である。

最後に、基壇東方の整地土（整地B）内から出土した地鎮状の遺物があるが、これは「地鎮跡出土遺物」とした。

瓦 瓦は、丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦がある。文字瓦の出土はない。なお、瓦の分類については、黒熊中西遺跡全体を通じた分類（第Ⅲ章第1節3項）による。

軒丸瓦 2号建物跡の軒丸瓦は、4類がある。黒熊中西遺跡の分類でのB類・C類・D類・E類である。B類（第38図1）は重弁の単弁四弁文、蓮子は1+4、珠文は弁間に3個ずつ、界線は1本である。破片5点が出土した。本類は3号建物跡に多く出土し、淡褐色と灰色の2種がある。C類（第38図2）は単弁四弁文、蓮子は1、珠文は弁間に1個ずつ、界線は1本である。灰色と淡褐色の2種がある。半損1点、破片3点が出土した。D類（第38図3・4）は重弁の単弁四弁文、蓮子は1、珠文はない、界線は2本である。灰色と淡褐色の2種がある。部分破損2点、破片7点がある。E類（第38図5・6）は単弁四弁文、蓮子1、珠文は弁間に1個ずつ、界線は2本である。灰色と淡褐色の2種がある。部分破損8点、半損10点、破片約20点がある。この他に、D類かE類のいずれかにあたる小破片が約50点ある。

軒平瓦 軒平瓦は2種がある。黒熊中西遺跡における分類のE類・F類である。E類（第39図1・2）は、やや太い単線の鋸歯状文のそれぞれの単位に先の尖った線が1本ずつ配されたものであって、唐草文の1種かとみられるが、意匠は不明である。施文原体（范型）は、軒平瓦の文様面の幅に対して長さが足らず、2ないし3回に分けて施文されている。灰色と淡褐色のものが半々ほどある。半分以上あるものが6点、破片約20点がある。F類（第39図3、第40図4）は、5本ほどの平行線を斜め上と斜め下に交互に繰り返す文様であって、中心に中央飾りを意識したとみられる部分がある。完形2点、半損4点、破片約30点がある。

丸瓦・平瓦 2号建物跡の丸瓦と平瓦（第41～44図）は、総量で6,514点・359.0kgである。内訳は、丸瓦が882点・75.0kg、平瓦が5284点・280.0kg、不明が348点・4.0kgである。丸瓦は、1枚を2kgとすると37.5枚分、平瓦は1枚2kgとすると140.0枚分があることになる。しかし、2号建物跡は、南側が耕作により瓦が

類	丸瓦		平瓦		図示資料	
	重量	比率	重量	比率	丸瓦	平瓦
I A	1.6kg	2.1%	2.2kg	0.8%	丸瓦1・2	平瓦1・2
I B	2.5kg	3.3%	6.4kg	2.3%	丸瓦3・4	平瓦3・4
II	35.1kg	60.1%	165.2kg	58.9%	丸瓦5	平瓦5・6
III A	13.0kg	17.3%	66.1kg	23.6%	丸瓦6～9	平瓦7～10
III C 1	4.0kg	5.3%	27.4kg	9.8%	丸瓦10・11	平瓦11・12
III C 2	0.1kg	0.1%	0.7kg	0.3%	丸瓦12	平瓦13・14
分類不能	8.7kg	11.6%	12.0kg	4.3%		
合計	75.0kg	100 %	280.0kg	100 %		

第三章 遺構と遺物

除去されており、建物に使われた瓦の全てが残っているとは見られない。また、瓦の四隅の数は、上記の枚数よりはるかに多い。したがって実際の枚数はより多いことは確実である。

丸瓦と平瓦は細別できるが、それぞれの量と比率は上記のようである。

瓦の散布範囲をみると（第34図）、基壇の上と裾部に多く、周辺には希薄であり、屋根から落下した状況がうかがわれる。なお、基壇南側に少ないようにみられるが、それは耕作により抜き取られたからである。

鬼瓦（第45・46図） 2号建物跡の鬼瓦は、5ないし6個体分ほどがある。分類すると、3種があり、黒熊中西遺跡の鬼瓦分類のB類・C類・D類にあたる。鬼瓦の1・2はB類、同じく3・4はC類、同じく6・7はD類である。製作技法や胎土・焼成などは共通する。つまり、面の造形は、いわゆる手捏ねであって、厚さ1.5～2.0cmの粘土板の上に粘土を貼ってなされている。裏面には布目痕が残る。横断面を見ると、C類とD類は平板であって、平板な成形台の上で製作されたとみられる。が、B類は、上に湾曲しており、そのことから、蒲鉾形状の成形台の上に布をかぶせ、その上に粘土板を置いて成形したものと考えられる。すなわち、平瓦の「一枚造り」の技法と同様である。

鬼瓦1（第45図1）は、ほぼ全体形が復元されたものである。タテ40.3cm、ヨコは下端部で35.3cmである。胎土は普通であるが、小礫を混入する。色調は、淡灰褐色から橙色を呈す。焼成は不完全な還元であって、やや軟質気味である。顔面の表現は力強さが感じられる。全体としては逆U字形状であって、下部中央に丸瓦を受ける半円状のエグリが切り込まれている。目は、径5.5cm・高さ4cmの円柱状であって、裏面まで貫通する。目の輪郭や眉は幅0.8cm、高さ1.5cmの幅の狭い隆帯により表現される。鼻は遺存しないが、3号建物跡の鬼瓦（第70図2）と2号建物跡鬼瓦3（第46図3）とから推定復元した。頬は丸みをもって盛り上がる。口は横長に開き、下に2本、上に4本の四角の牙が付く。口の輪郭・髭・顔面の周囲の巻き髭は、眉などと同様に細い隆帯で表される。

鬼瓦2（第45図2）は、1と同種であって、顔面の左上部の破片である。胎土はやや雑であって、砂礫を少量混入する。焼成は還元炎であって、淡灰色を呈する。

鬼瓦3（第46図3）は、顔面の上半分が遺存する。鼻の位置でのヨコ幅は、29.7cmであって、鬼瓦1の32cmと比べると、やや小ぶりである。胎土はやや粗雑であって、礫を少量混入する。焼成は還元炎であって、淡い灰色を呈す。堅さは普通である。目は、円柱状であって、外径4.7cm、内径2.5cm、高さ2.5cmであり、裏面まで貫通する。目の輪郭の表示はない。鼻は、幅11.5cm、長さ13cm、高さ7cmであって、鼻孔は貫通しない。鼻稜が明瞭に通る、大きな鼻である。頬は、径は4cmで、盛り上がりは低い。口は完存しないが、裏面まで貫通しないものようである。牙は、1本が残り、幅13cm・長さ2cmであるが、形はややダレている。顔面の周囲は、B類と同様に巻き髭がめぐるが、断面形は丸みがあって、鋭利さは失われている。

鬼瓦4（第46図4）は、3と同種であって、その右上部の巻き髭の部分である。

鬼瓦5（第46図5）は、造形意匠は鬼瓦3つまりC種と同種とみられるが、断面に湾曲がみられるので、製作技法はB種である。

鬼瓦6（第46図6）は、7と同種であり、その左下部とみられる。

鬼瓦7（第46図7）は、顔面の中央部の破損品である。鼻の位置でのヨコ幅は、25.8cmである。小規模で小ぶりであり、表現も簡略的である。粘土板は0.9cmほどで薄い。胎土は普通、焼成は還元炎であって淡い灰色を呈す。目は、高さ4cm、径3cmの円柱形であるが、形は整わない。径5mmほどの細かい孔が裏面まで通る。鼻は幅11cm、長さ14cm、高さ7cmであって、大きい形は整わない。鼻孔は貫通しない。頬や巻き髭は簡略されており、顔面の余白には幅1cm、高さ13cmの粘土帯が配される。

以上、2号建物跡の鬼瓦は、数個体分があるが、種別としてはB類・C類・D類の3類に分けられる。これらは造形に差異があつて、同時に造られたのではなく、時間差があるように考えられる。が、出土状態からみると、屋根上において同時に使用されていたとみられる。また、数的にはそれぞれの類ごとに2個体ずつ、つまり6個体あるようであり、そのようなことから、寄せ棟か入り母屋の大棟と降り棟に配置されていたのではないかとみられる。ただし、鬼瓦の出土地点（第35図）からそれを検証するのは難しい状況にある。

瓦の全体的組成 黒熊中西遺跡の瓦の全体的分類については表5に示したとおりであるが、2号建物跡の瓦については、丸瓦・平瓦を基軸としてI A類・I B類・II類・III A類・III C 1類・III C 2類の6類に分けられる。これに対する軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦の対応関係は、下記のように考えられる。

丸瓦・平瓦	軒丸瓦	軒平瓦	鬼瓦
I A 類	B類		
I B 類			
II 類			
III A 類	C類・D類・E類	E類・F類	B類・C類・D類
III C 1 類			
III C 2 類			

言うまでもなく、2号建物跡において量的に主体を占める丸瓦・平瓦は、III A類である。それに伴って供給されたのは、軒丸瓦C類・D類・E類、軒平瓦E類・F類、鬼瓦B類・C類・D類であると考えられ、これらによって瓦の主体が占められていたものと考えられる。

軒瓦の組み合わせ まず軒丸瓦B類については2号建物跡では対応する軒平瓦が出土していないので不明とせざるをえないが、3号建物跡の状況からは格子目文の軒平瓦が対応する可能性が考えられる。つぎに、軒丸瓦C類・D類・E類と軒平瓦E類・F類については、量的な面から軒丸瓦E類と軒平瓦F類の対応関係は确实視される。また、質的（胎土・焼成）な面から、軒丸瓦C類と軒平瓦E類が対応し、軒丸瓦D類は軒平瓦E類に対応する可能性が推測される。

土器 2号建物跡の土器は、本遺跡における礎石建物の中でも最も多量である。図示したもの他に、不実測の破片がパン箱（60×36.5×14.5cm）に4箱ある。不実測資料の主体は、須恵器の杯・碗・甕である。図化したものには甕類が少ないが、実態としてはより多いことが考えられる。

2号建物跡の土器は、出土地点により、「基壇上」と「基壇下」、基壇北方の「整地面上」・「整地面下」、基壇西方の「整地面上」・「整地面下」、および基壇東方の整地土内の「地鎮状の遺物」の7群に分けた。この区分は、建物との時間的關係を意識したものである。すなわち、「基壇上」・「基壇北方整地面上」・「基壇西方整地面上」は2号建物跡に伴う土器つまり建物建造から廃棄までの土器であり、「基壇下」・「基壇北方整地面下」・「基壇西方整地面下」は基壇築造以前あるいは基壇築造時の土器群である。また、「地鎮状の土器」は未使用な土器が意図的に埋納されており、基壇築造時の土器であることが明瞭である。

「基壇上」の土器は、須恵器の皿・杯・碗が量的に多く、その中では「灯火器」いわゆる灯明具に使用されたものが14個体と多く、杯碗類の1/3におよぶ。土器類は、基壇の東半側に多く出土する傾向が見られた。なお、遺物番号の3・20・47の3個体は基壇上の浅い窪みの中からまとまって出土し、建物建造時に使用したものをまとめて残置したような状況がうかがわれた。

土器の中で留意されることは、2号建物跡に先行する遺構の存在を予測させるものがあることである。それ

第三章 遺構と遺物

は具体的には「西方整地面下」と「北方整地面下」の土器群を指す。前者は、墨書土器の割合が多く、特種羽釜などもあって、特徴的である。それ以上に特記されることは、「北方整地面下」の10・11・12・13・18などの土器である。これらの土器は整地面の下層においてまとまって出土しており、一括して廃棄された状況を示している。年代的には8世紀中葉から後半とみられるが、12は金属器写しであって、このような土器が一般の住居から出土する確率はさきわめて少なく、官衙や寺院に伴うことが多い。2号建物跡の下層には、78・79号住居のように住居跡もあるが、以上のことから先行する寺院建物の可能性が多分にあることも考えられるように思われる。

フィゴの羽口 フィゴの羽口は2点がある(第51図53・54)。53は後端部が破損する。現存長10.8～11.5cm、外径7.8cm、内径2.3cmである。酸化炎焼成で淡橙色を呈す。前半分は半還元化して淡灰褐色を呈す。前端部には薄く鉄滓が付着し、さらにその先には鉄滓の塊がこびりつく。54は後端部が破損する。現存長10.9～12.9cm、外径9.0cm、内径2.1cmである。酸化炎焼成で淡褐色を呈す。前半分は還元化して灰色を呈す。前端部には薄く鉄滓が付着し、さらにその先には鉄滓の塊がこびりつく。

鉄製品(第52図) 鉄製品は、鉄釘、S字状製品、蝶番、不明品などがある。

鉄釘は、総数102本があり、典型的なもの19点を図示した(第52図)。鉄釘の分類(分類については、下記の項を参照されたい)では、No.58・59が素Ⅰ型、No.60・61が素Ⅱ型、No.62・63・66が素Ⅲ型、No.64・67が素Ⅳ型、No.68・71が素Ⅴ型、No.72が素Ⅵ型、No.65が方頭Ⅱ型、No.69・70が方頭Ⅲ型、No.73・74が方頭Ⅳ型、No.57・75は円頭型である。全体の量比としては、頭部素型はⅠ類が6本、Ⅱ類が16本、Ⅲ類が37本、Ⅳ類が6本、Ⅴ類が8本、Ⅵ類が5本であり、頭部方型は、Ⅱ類が1本、Ⅲ類が6本、Ⅳ類が2本である。

No.70やNo.73のような小さな釘は、野地板を打ち付ける用途とみられる。

No.78とNo.79は、小ぶりの蝶番であり、家具や調度品用とみられる。

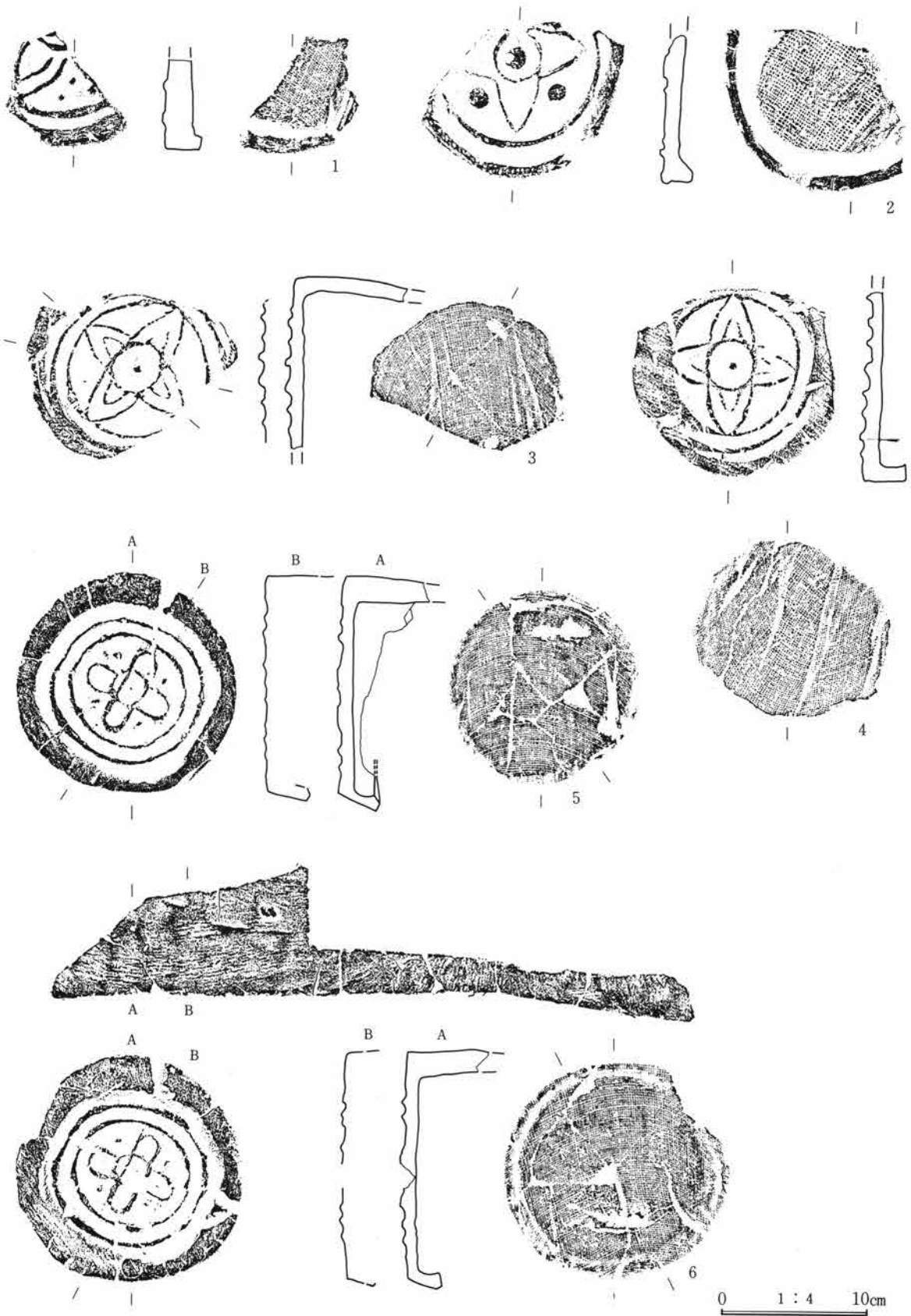
鉄滓 2号建物跡の基壇上からは、いわゆる碗型鉄滓が2点出土した(写真図版91)。1点は、15×13cm、厚さ6cm。もう1点は、13×10cm、厚さ4.5cmである。これらは鍛冶にかかわるものと考えられる。

壁材 基壇上および周辺から壁材が多量に出土した(写真図版90)。表面に白色の漆喰が厚さ1mmほど塗られており、内部にはスサや木舞の跡が見られる。粘土質部が、火を受けて硬質化している。

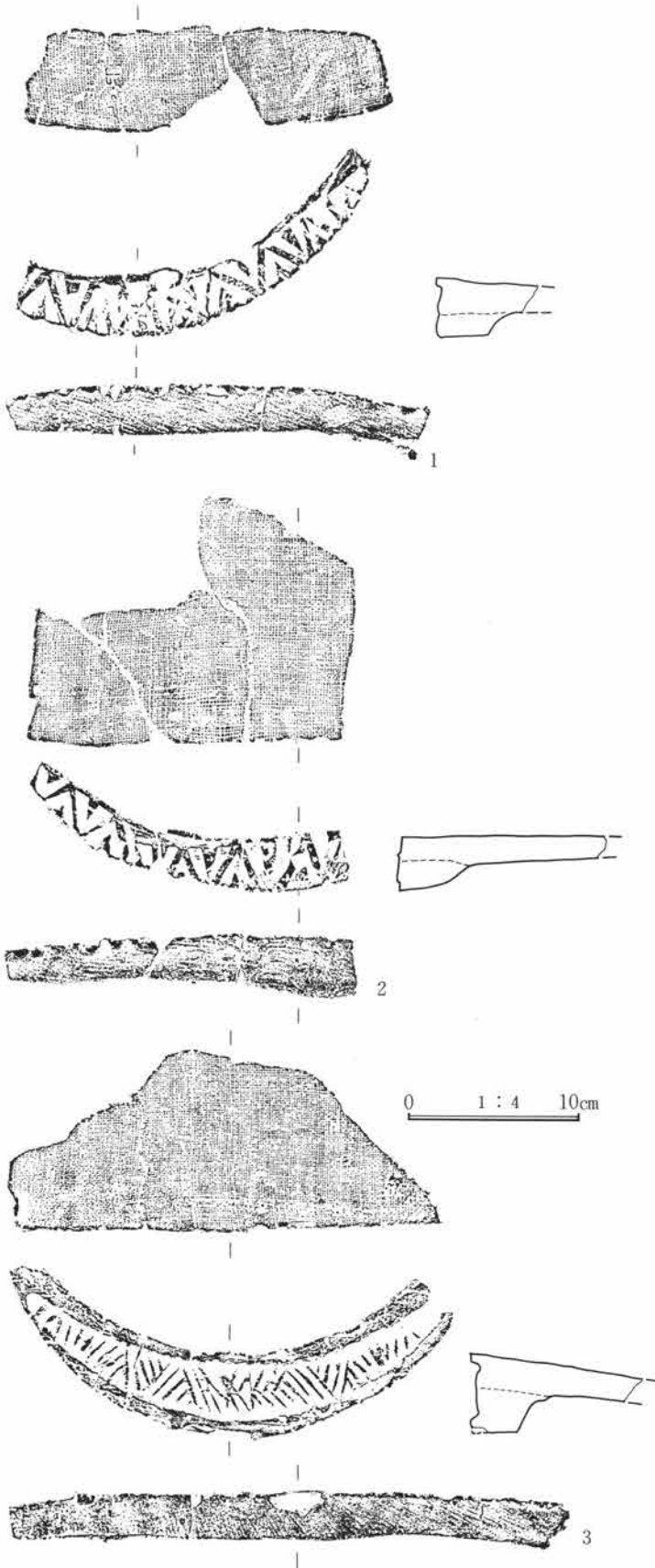
砥石 砥石は2点がある。No.55は破損しているが、上面と右側面が使われている。No.56は小さな砥石で、6面が使われている。共に、石材は、いわゆる「砥沢」の石材である。

鉄釘の分類 黒熊中西遺跡では基壇建物を中心に多量の鉄釘が出土した。それらは頭部の形態および長さによって、分類することが可能である。以下、その概要を記すが、この分類は、2号建物跡以外の鉄釘も含むものである。まず、頭部の形態については、頭部に円形の材が付加されているものを「頭部円型」、頭部が方形に打ち出されているものを「頭部方型」、頭部が未加工のものを「頭部素型」とした。なお、頭部素型の頭部を折り曲げたものを「頭部折り曲げ型」と考えるが、これに該当するものはなかった。

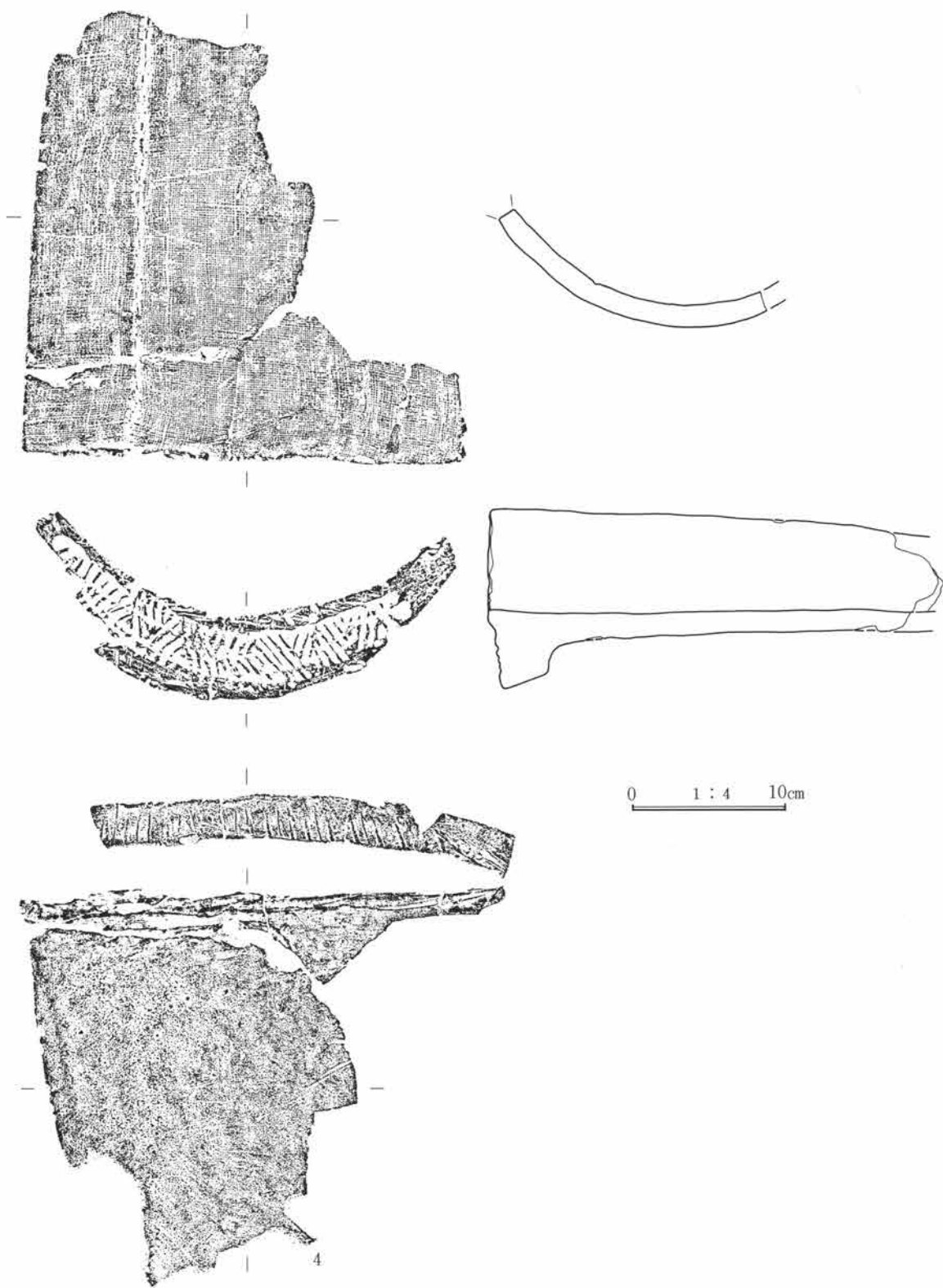
そして、頭部素型と頭部方型は、長さ重量の違によりランク分けし、長いものからⅠ・Ⅱ～Ⅵ類などに区分した。頭部素型は、Ⅰ類が16～17cmで60～80g、Ⅱ類が14cmで35～40g、Ⅲ類が12～13cmで20～45g、Ⅳ類が8～10cmで10～20g、Ⅴ類が6cmで5～6g、Ⅵ類が4cmで2gである。また、頭部方型は、Ⅰ類が16～17cmで25～50g、Ⅱ類が8～12cmで15～20g、Ⅲ類が7cmで8g、Ⅳ類が4cmで2～3gである。



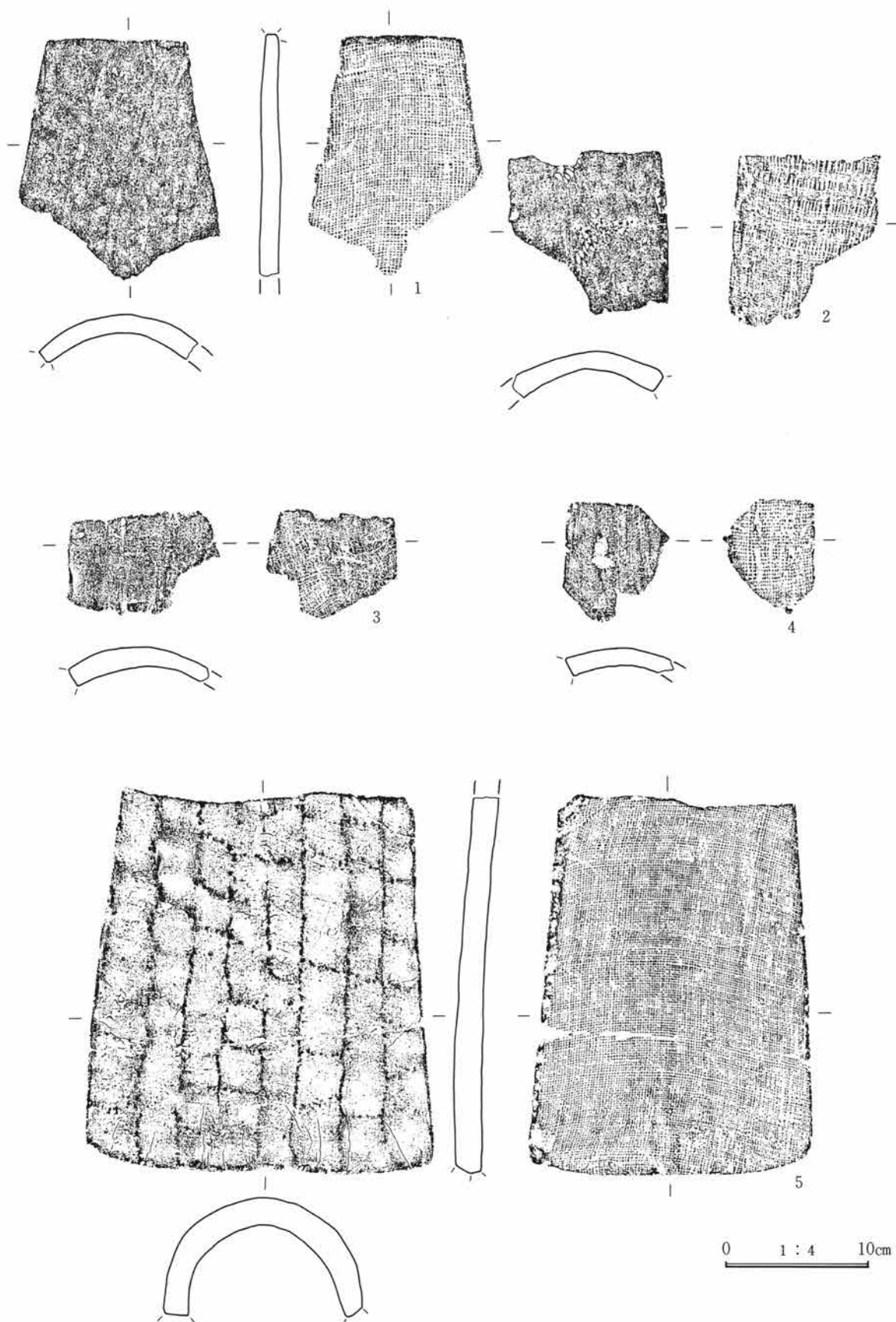
第38図 2号建物跡出土軒丸瓦



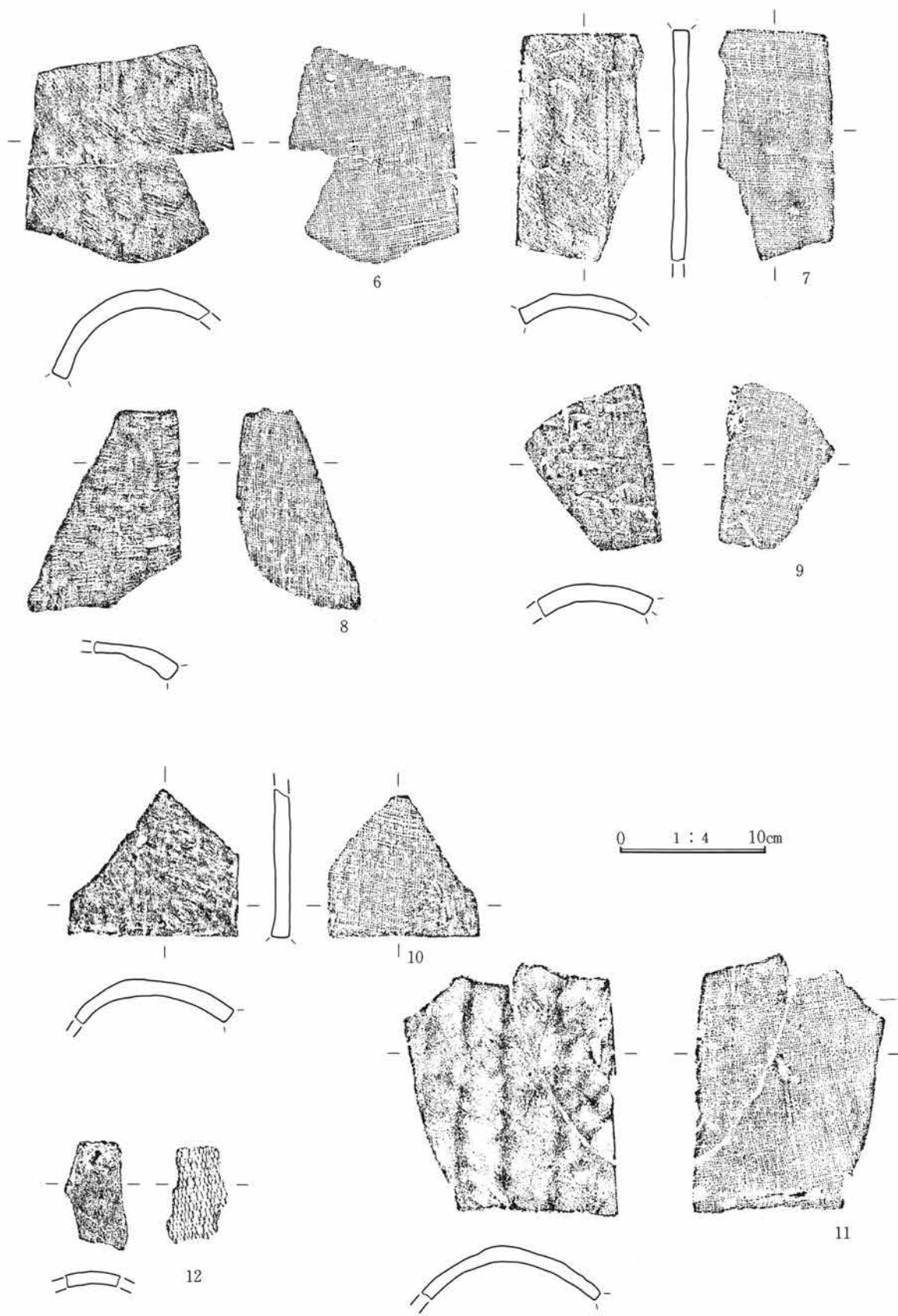
第39図 2号建物跡出土軒平瓦



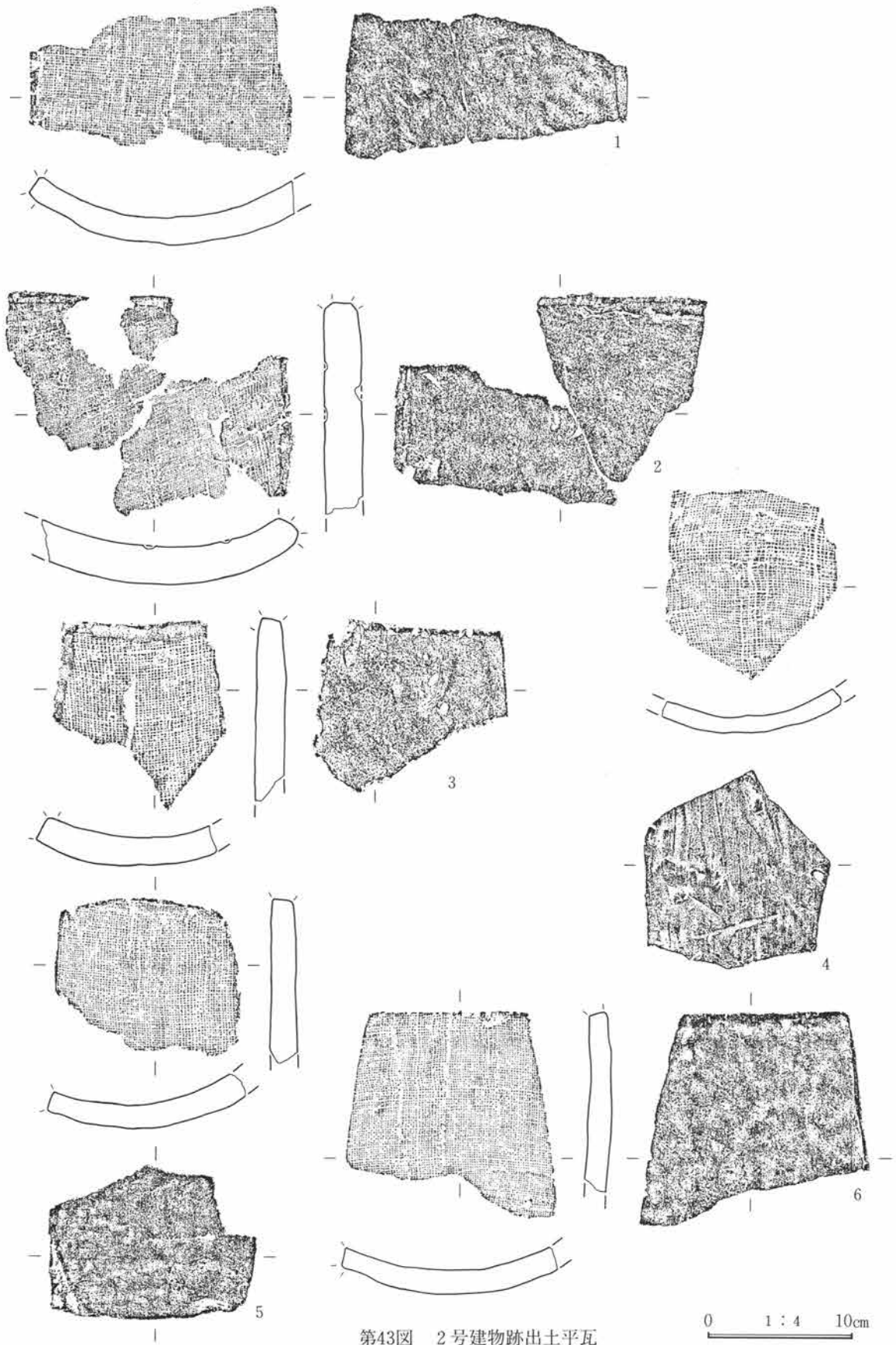
第40図 2号建物跡出土軒平瓦



第41図 2号建物跡出土丸瓦

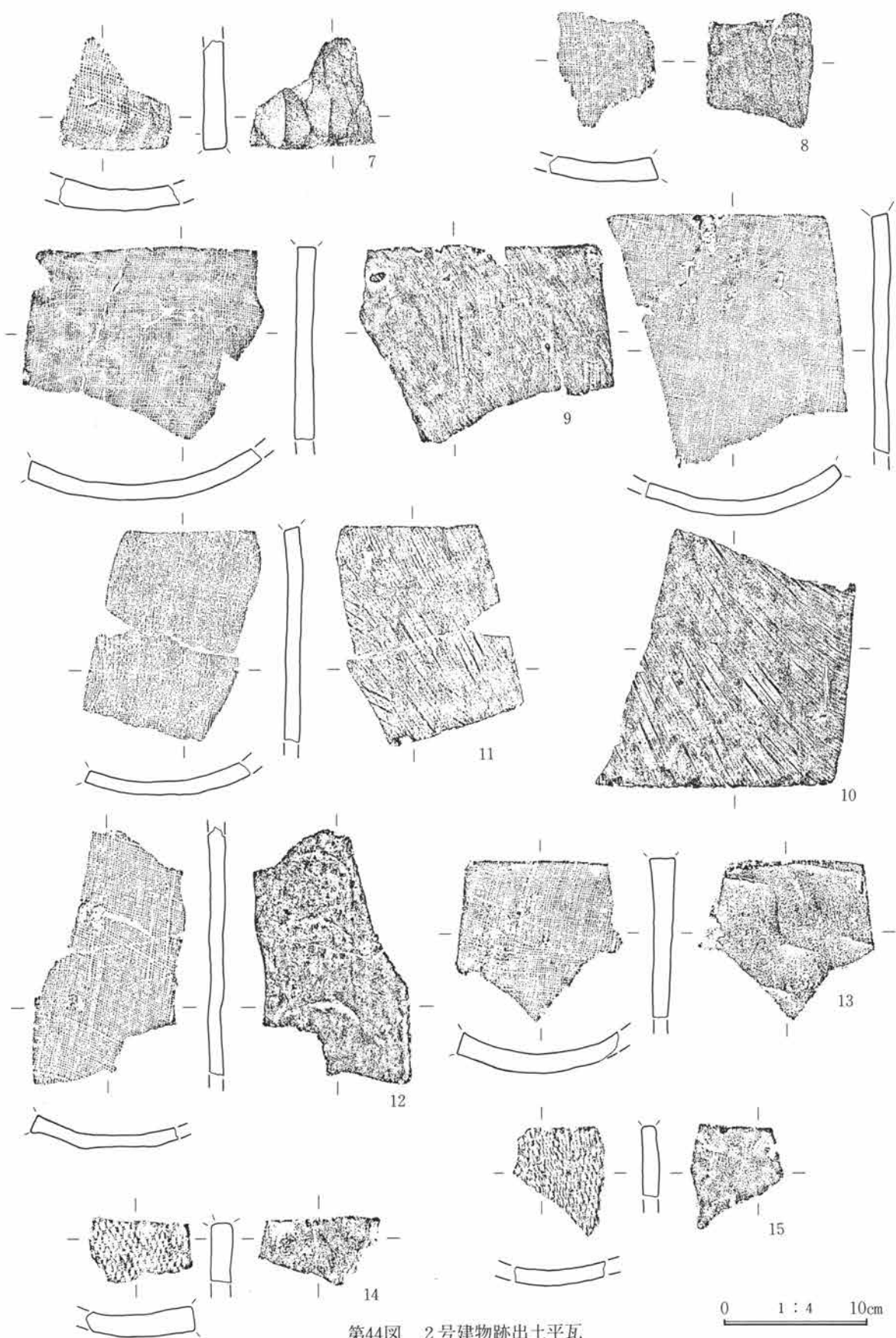


第42图 2号建物跡出土瓦

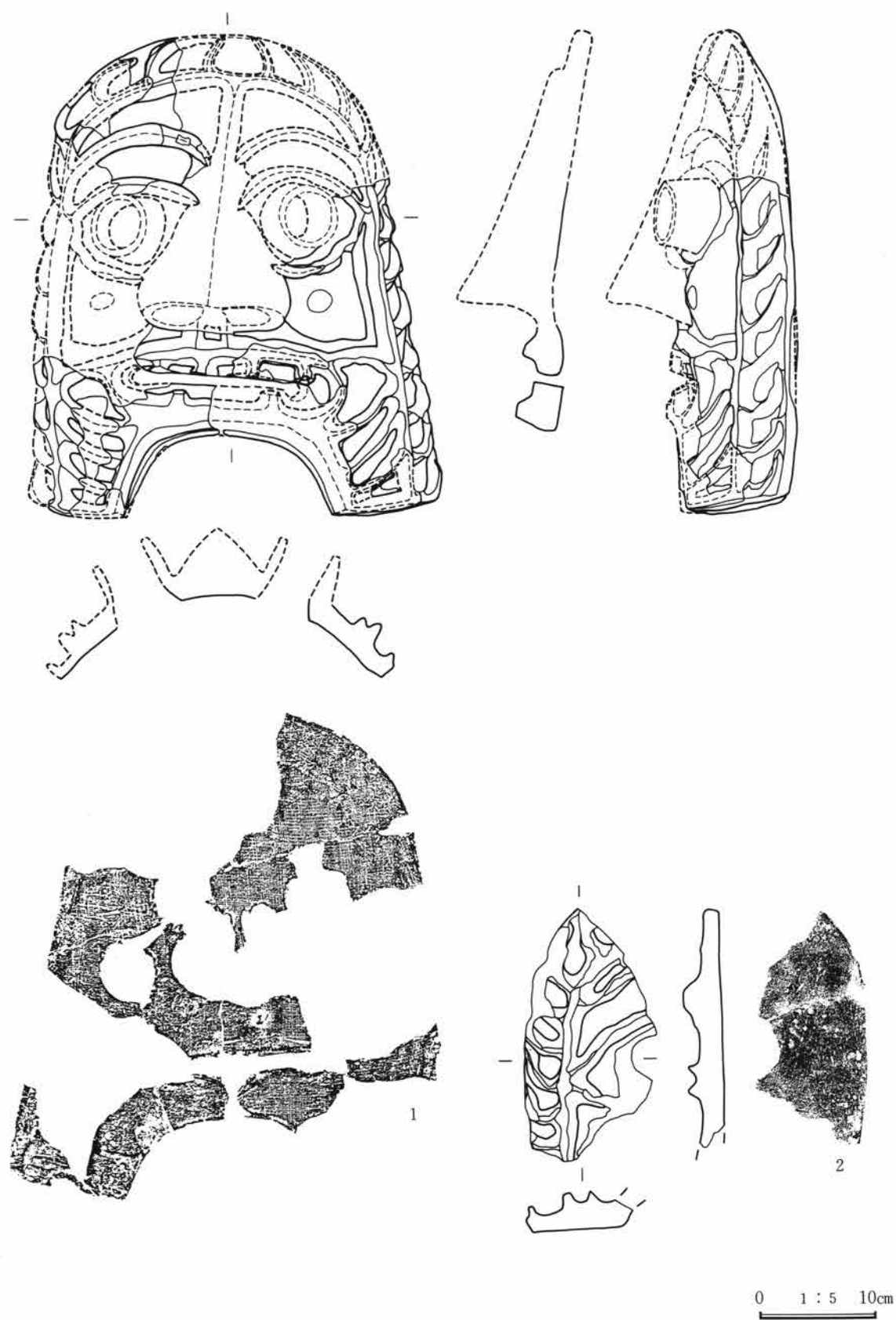


第43図 2号建物跡出土平瓦

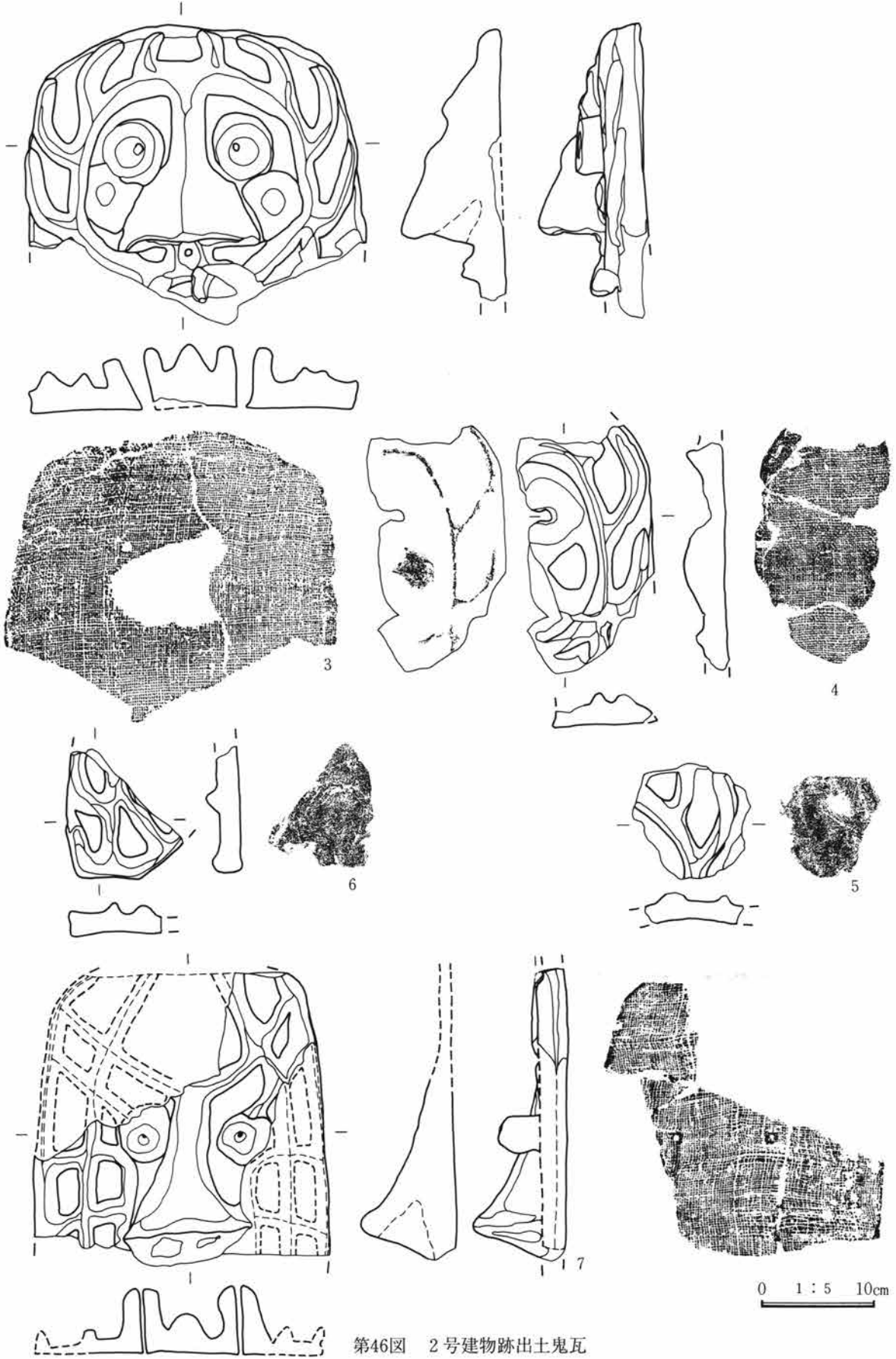
0 1 : 4 10cm



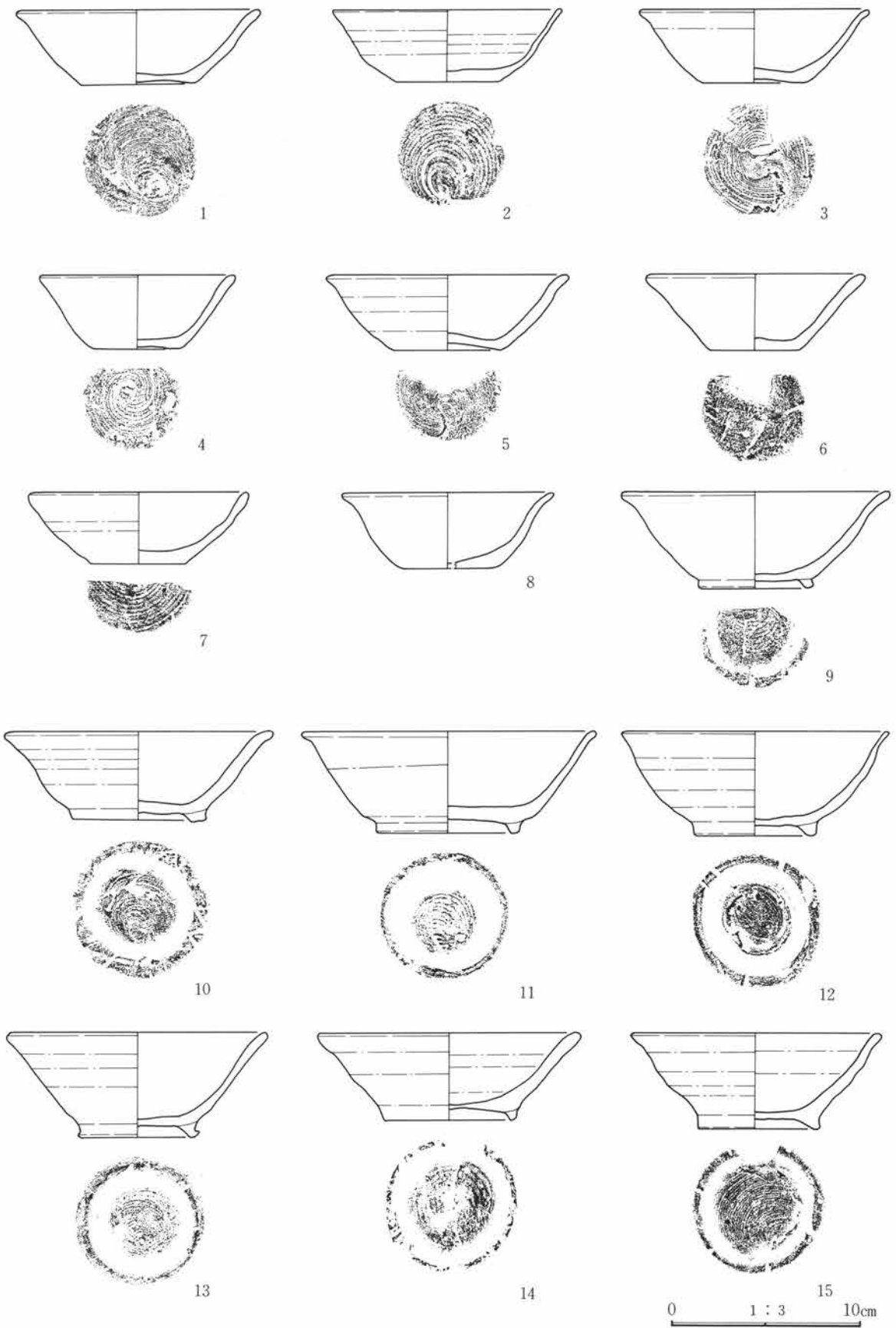
第44図 2号建物跡出土平瓦



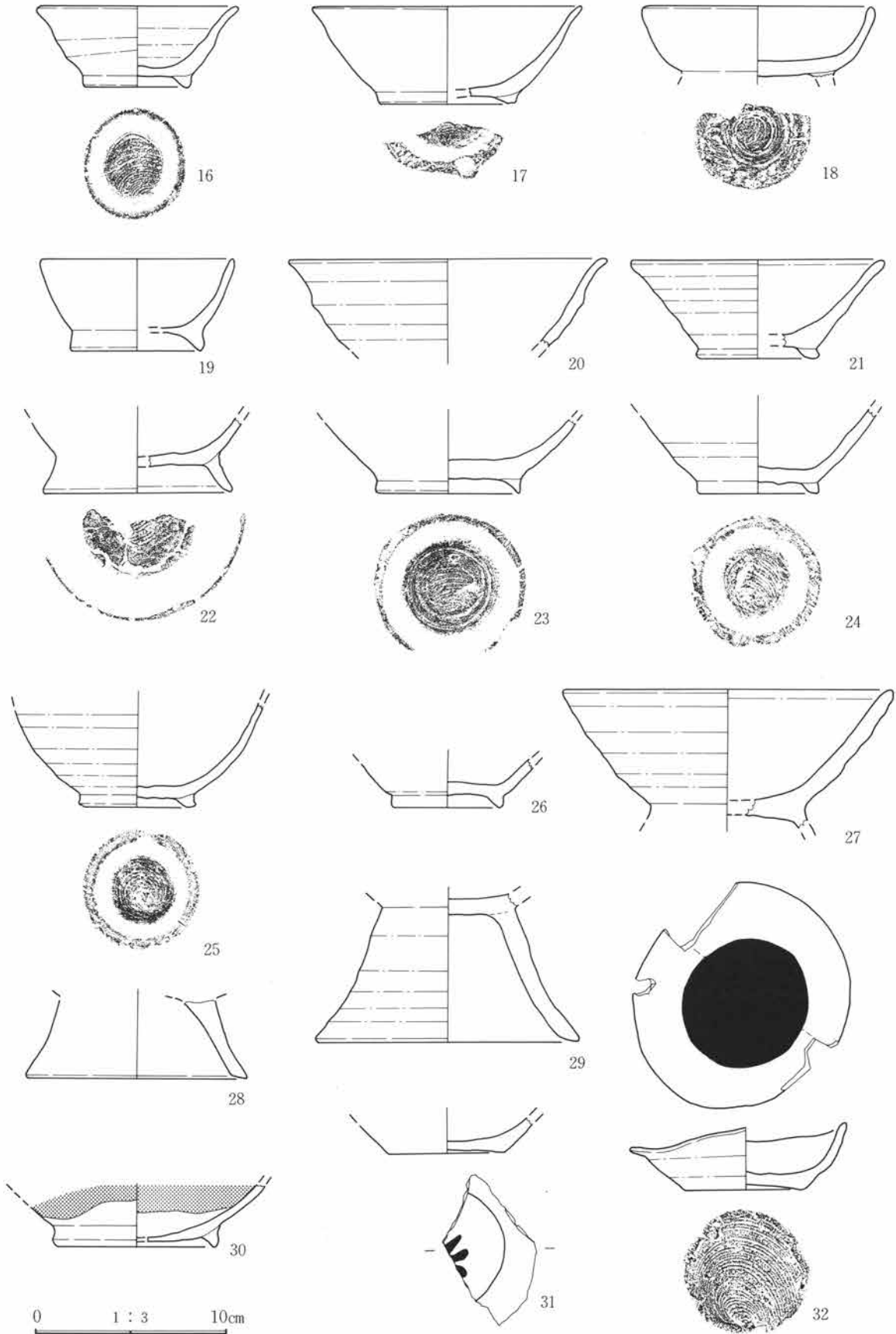
第45図 2号建物跡出土鬼瓦



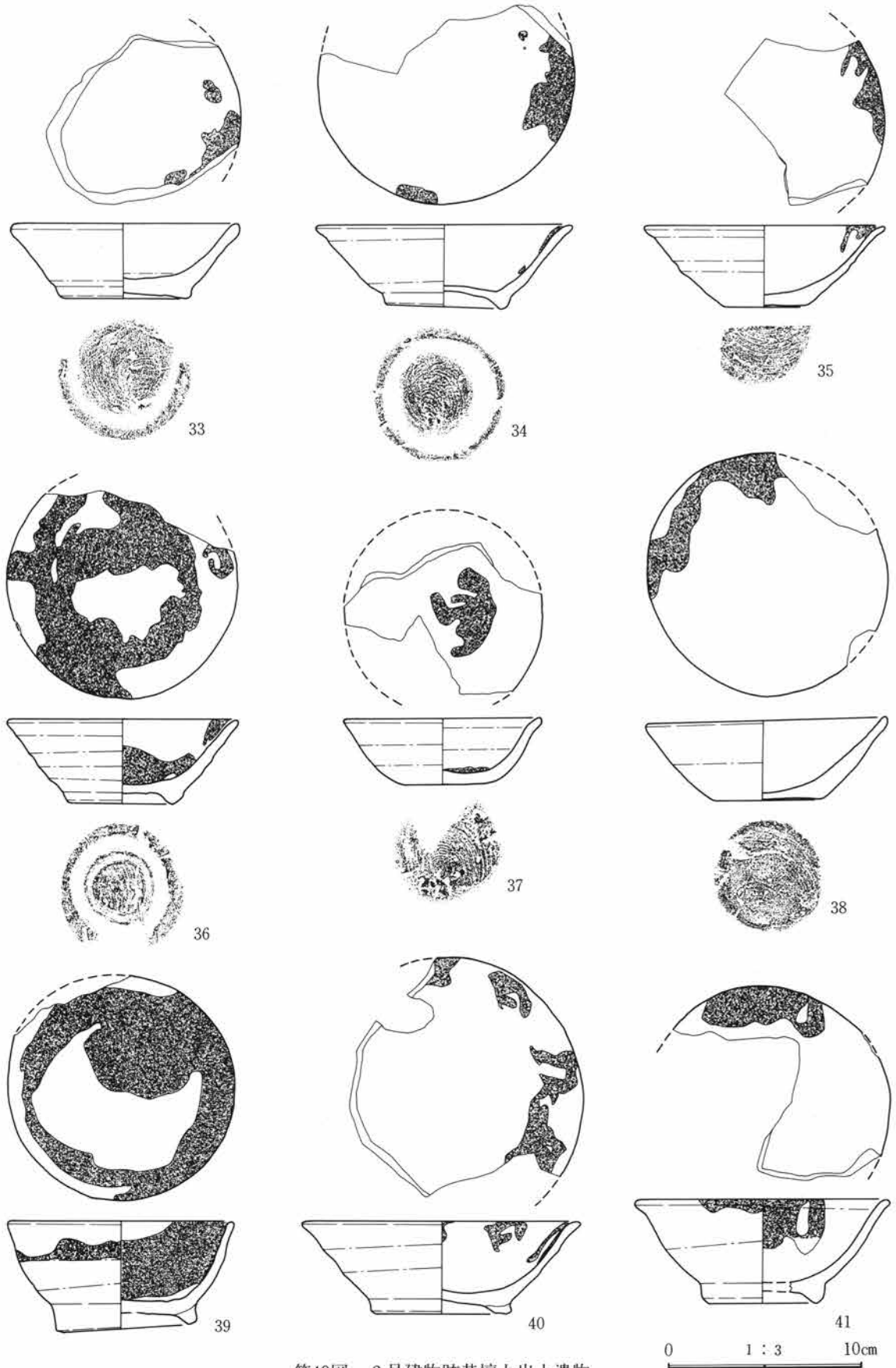
第46図 2号建物跡出土鬼瓦



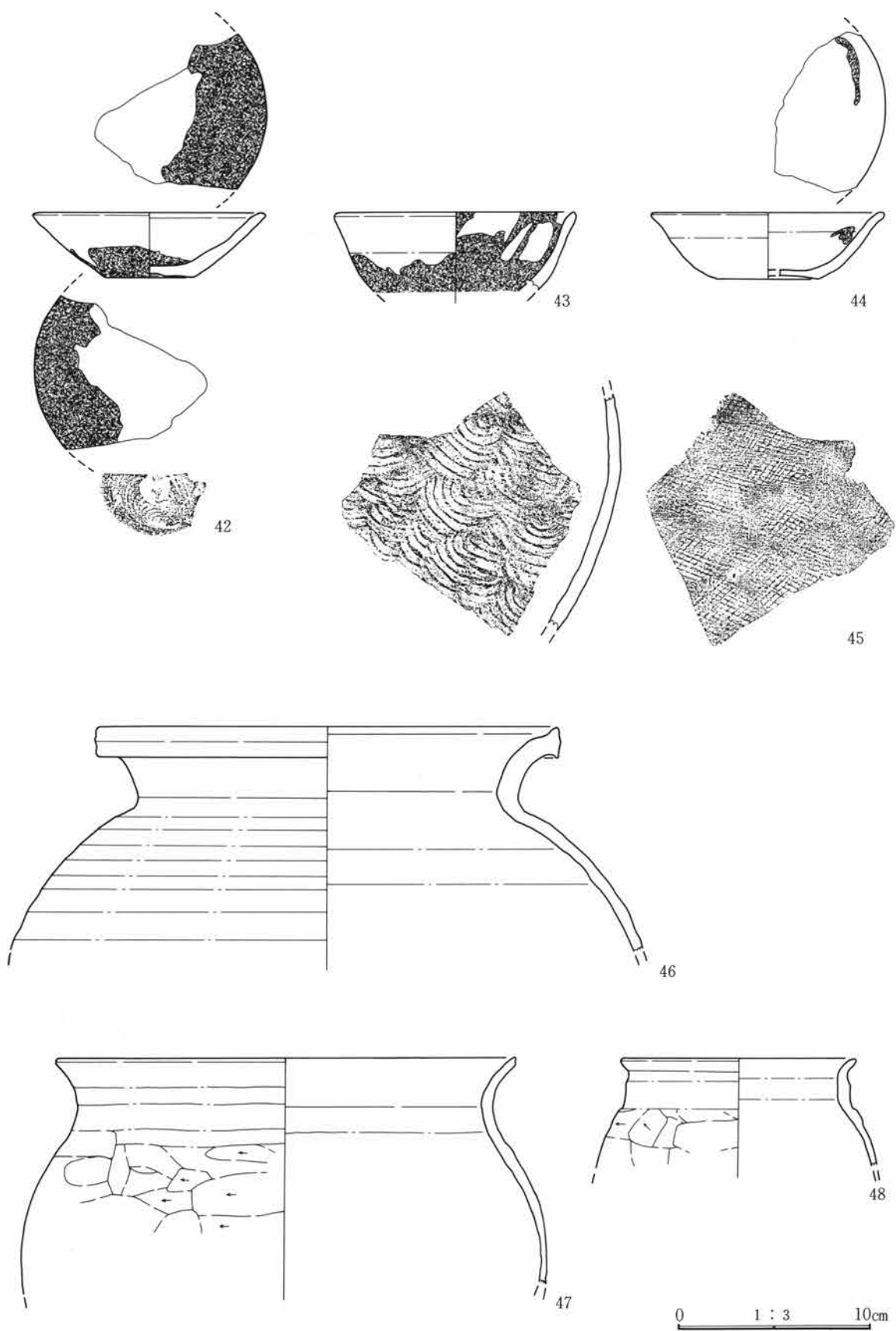
第47図 2号建物跡基壇上出土遺物



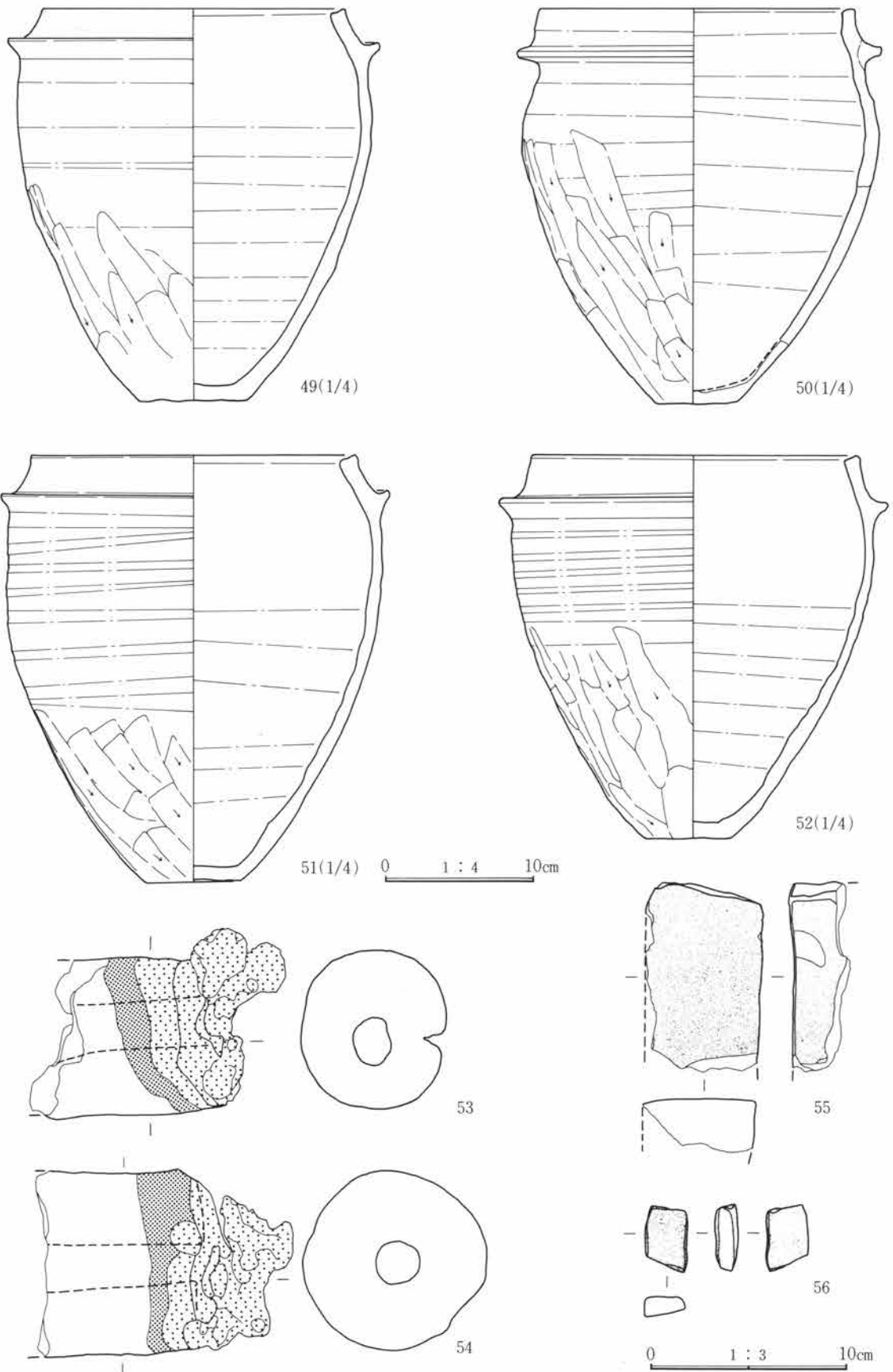
第48図 2号建物跡基壇上出土遺物



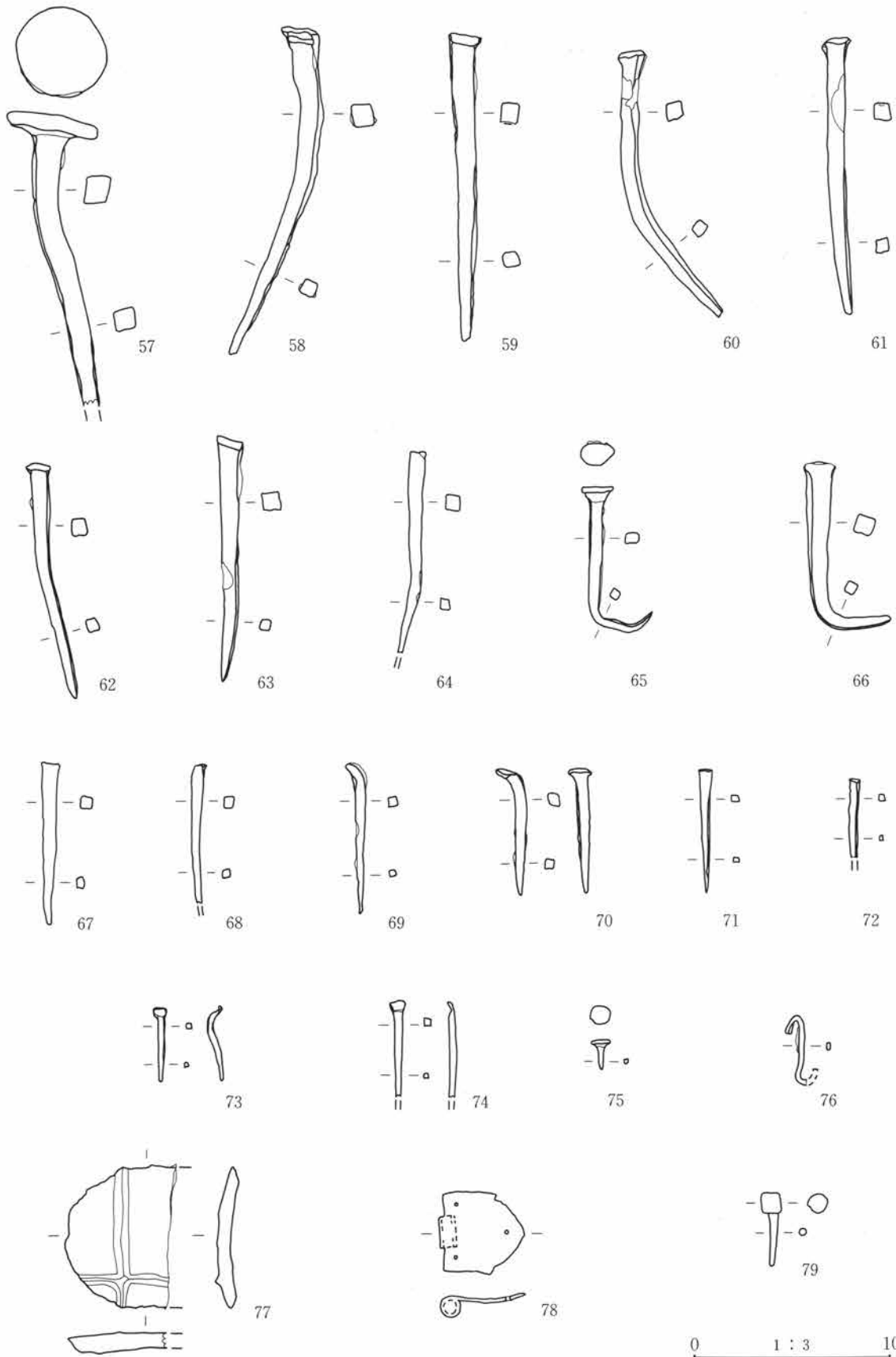
第49図 2号建物跡基壇上出土遺物



第50図 2号建物跡基壇上出土遺物

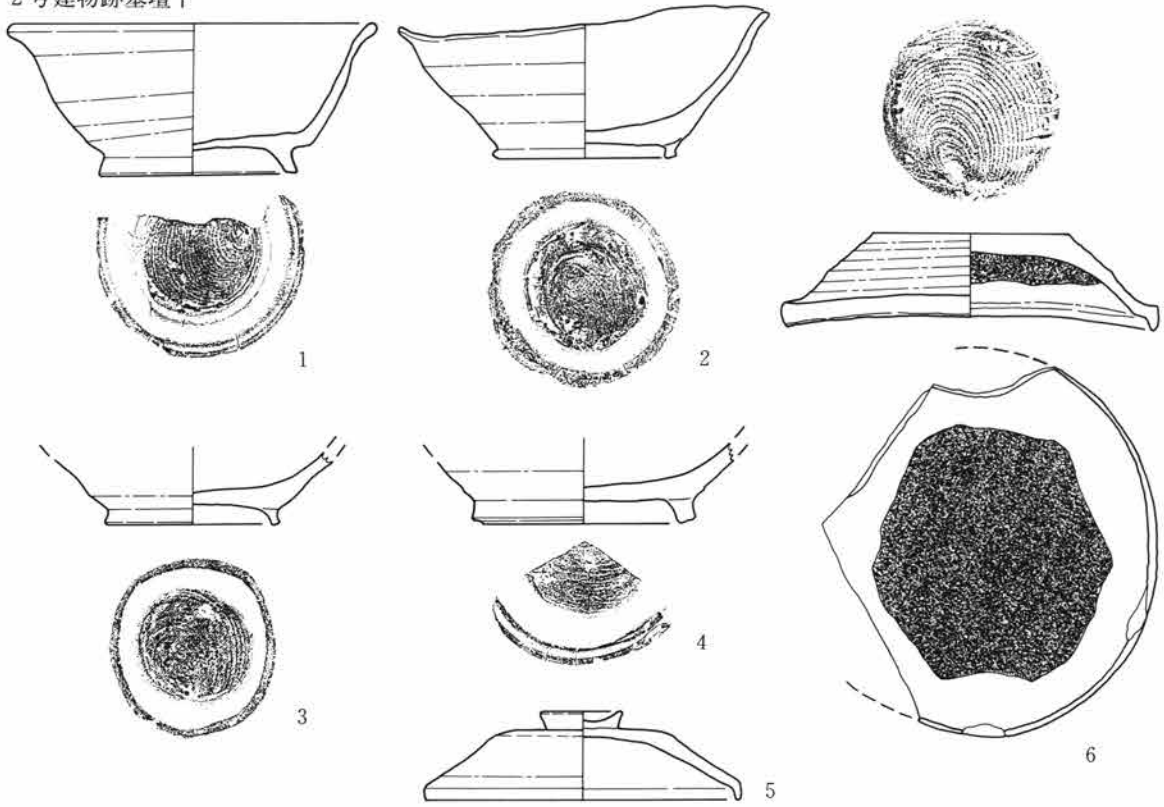


第51図 2号建物跡基壇上出土遺物

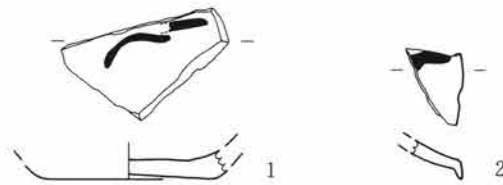


第52図 2号建物跡基壇上出土遺物

2号建物跡基壇下

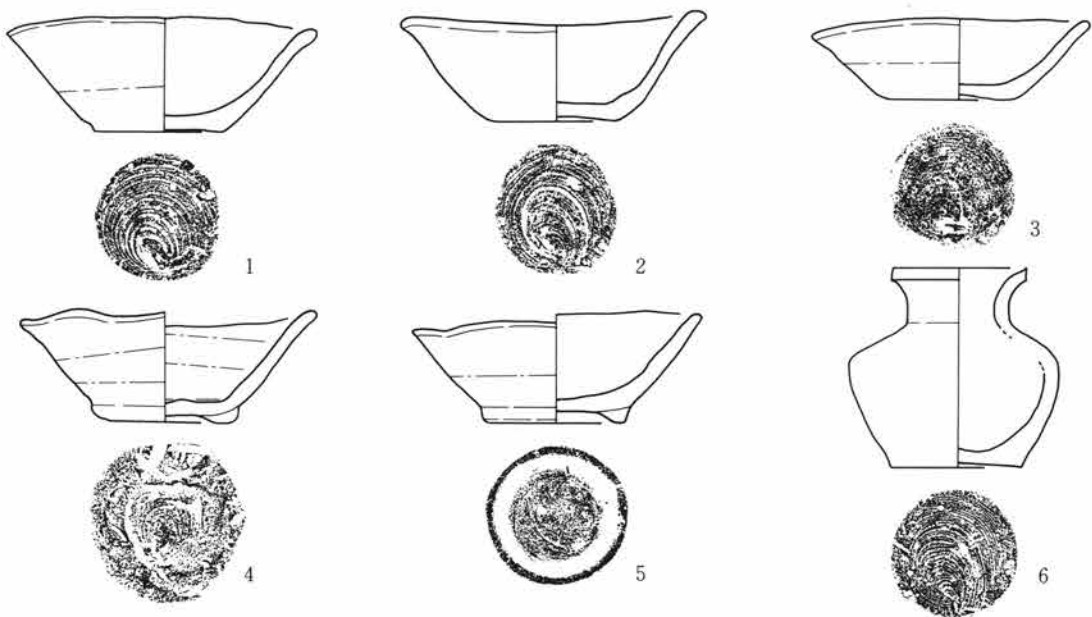


2号建物跡出土位置不明



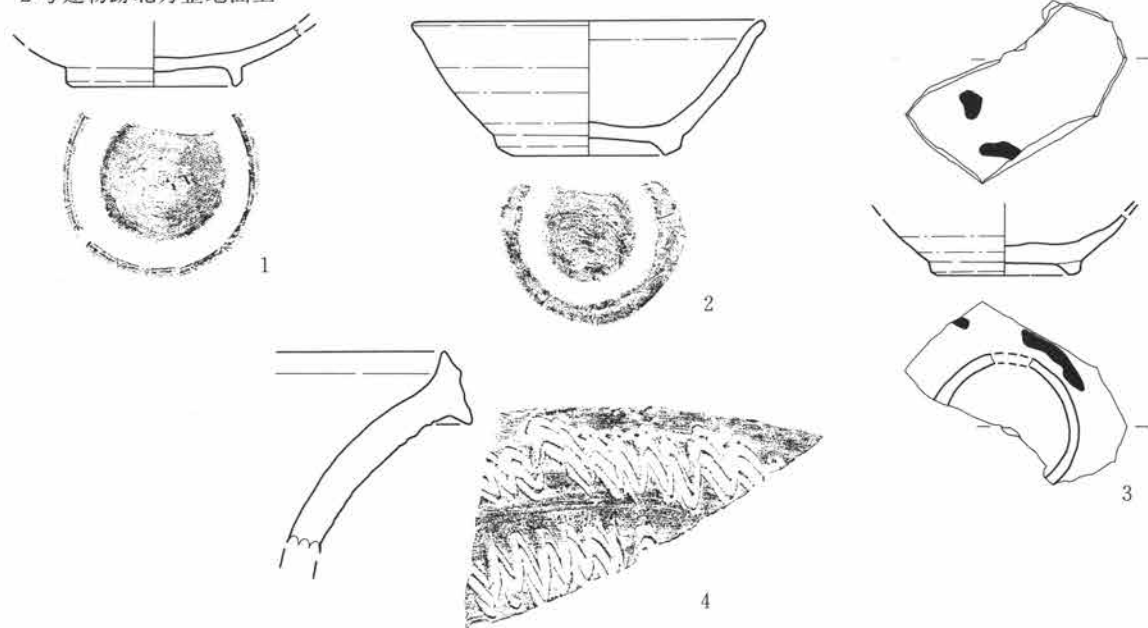
0 1 : 3 10cm

2号建物跡地鎮跡

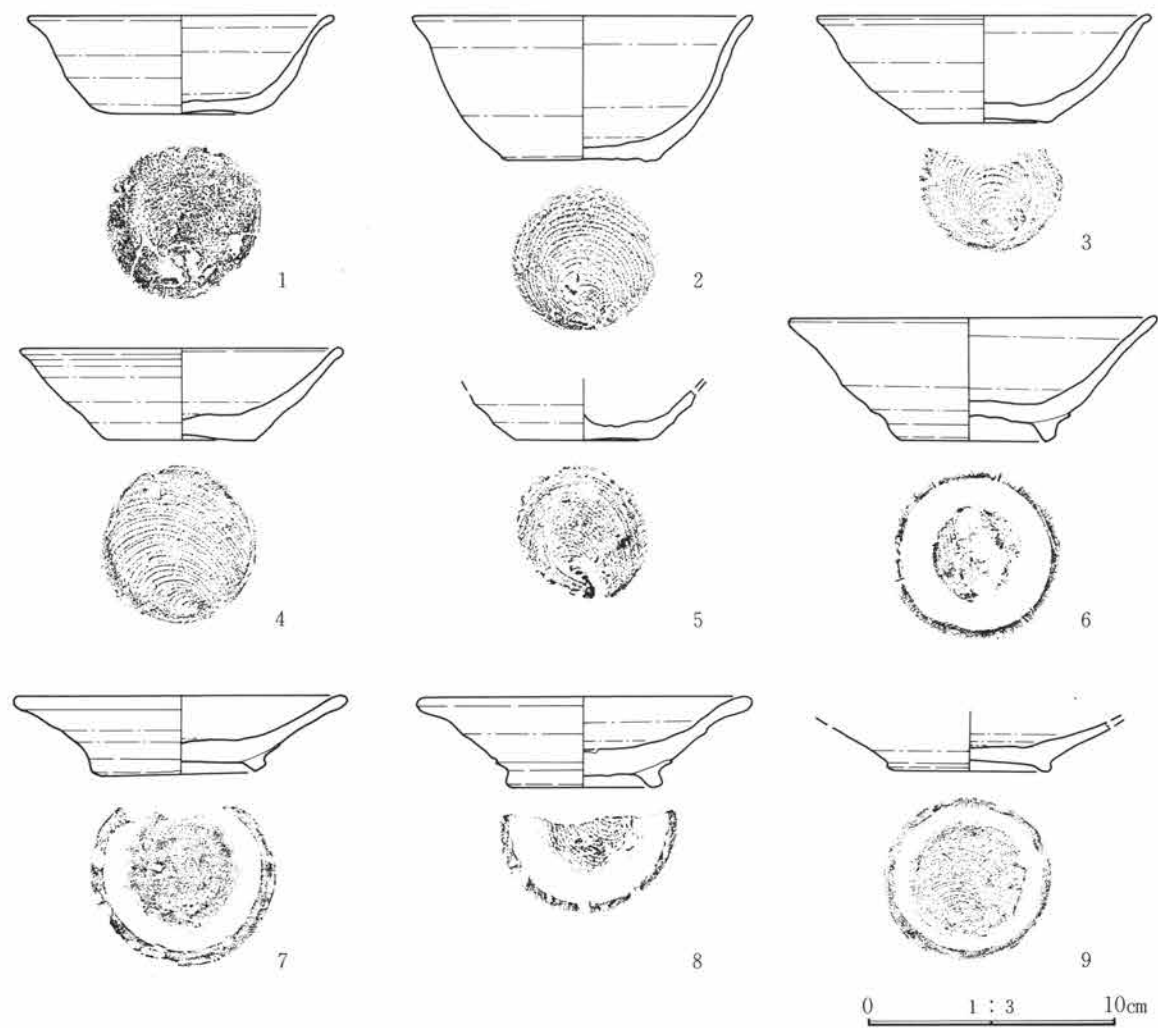


第53図 2号建物跡基壇下・出土位置不明・地鎮跡出土遺物

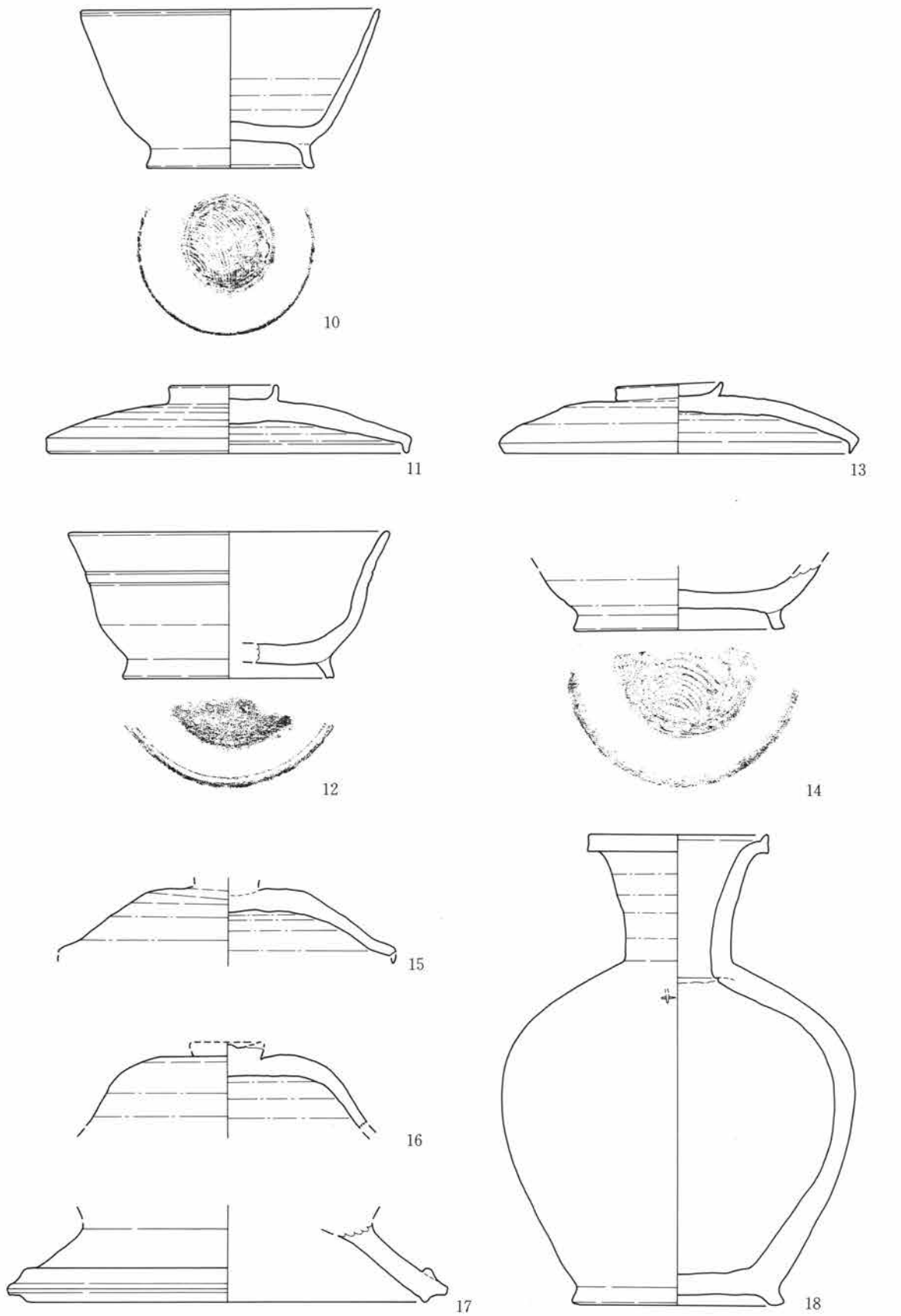
2号建物跡北方整地面上



2号建物跡北方整地面下

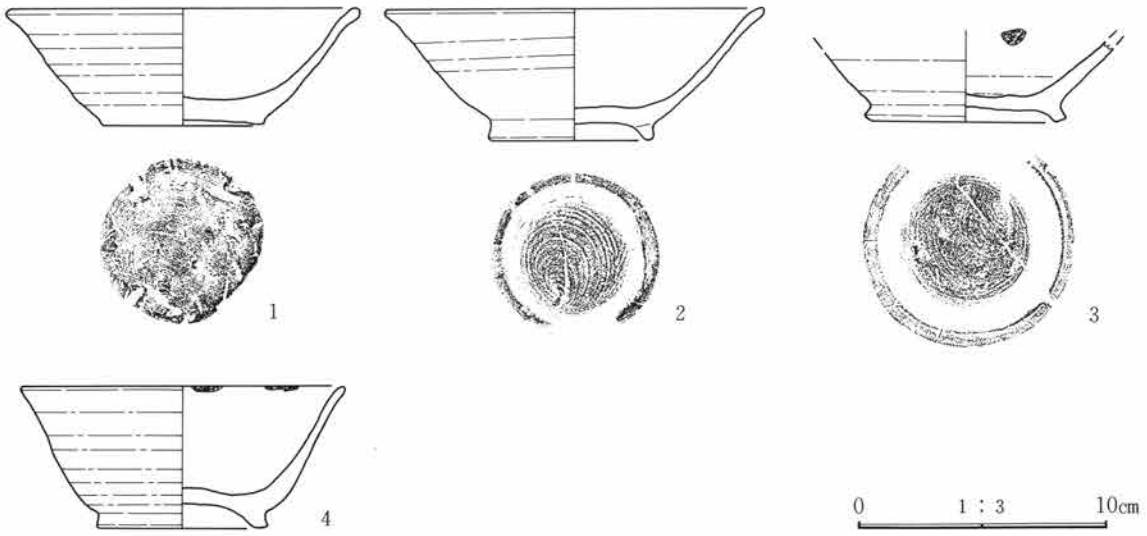


第54図 2号建物跡北方整地面上・北方整地面下出土遺物

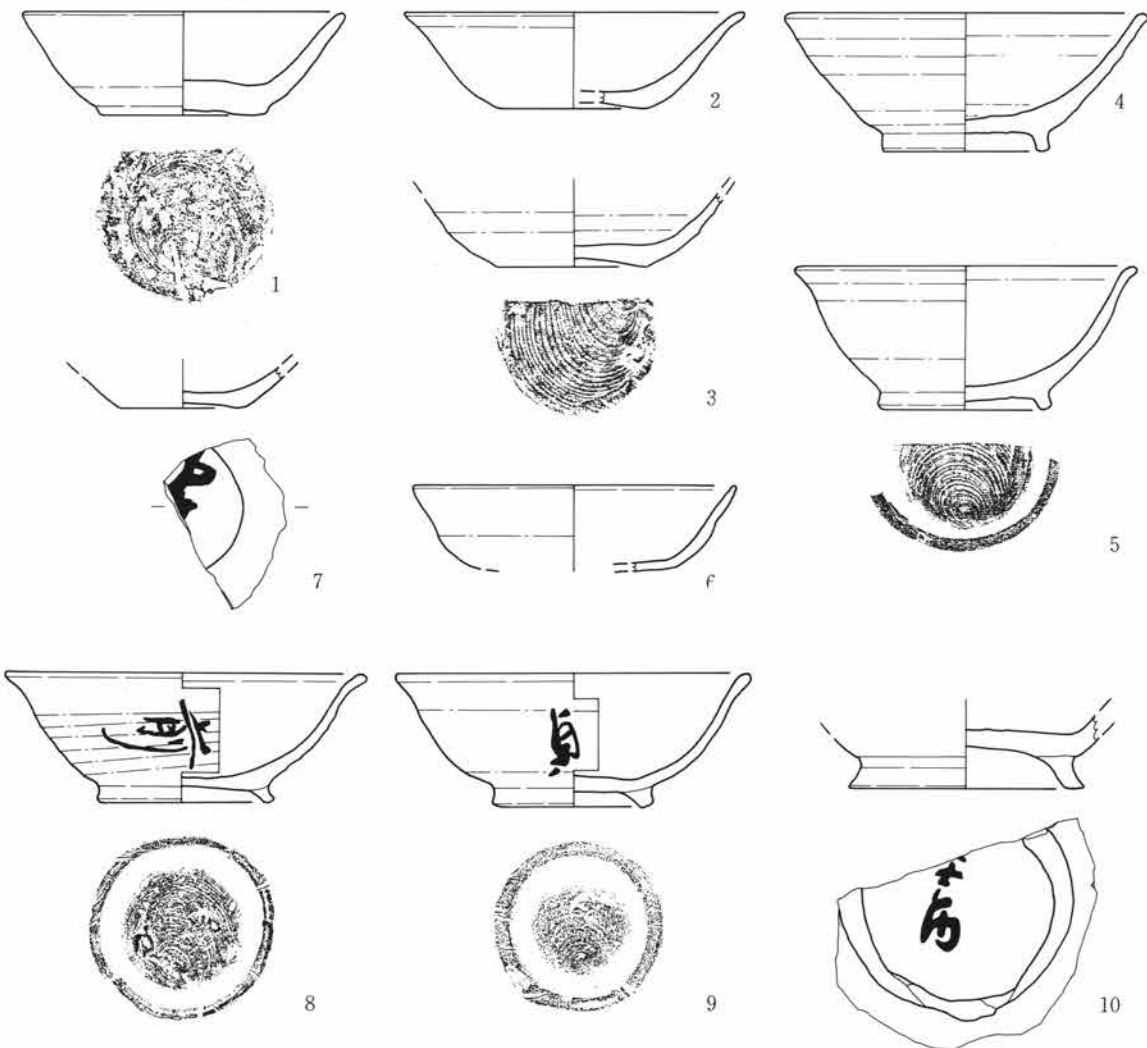


第55図 2号建物跡北方整地下面出土遺物

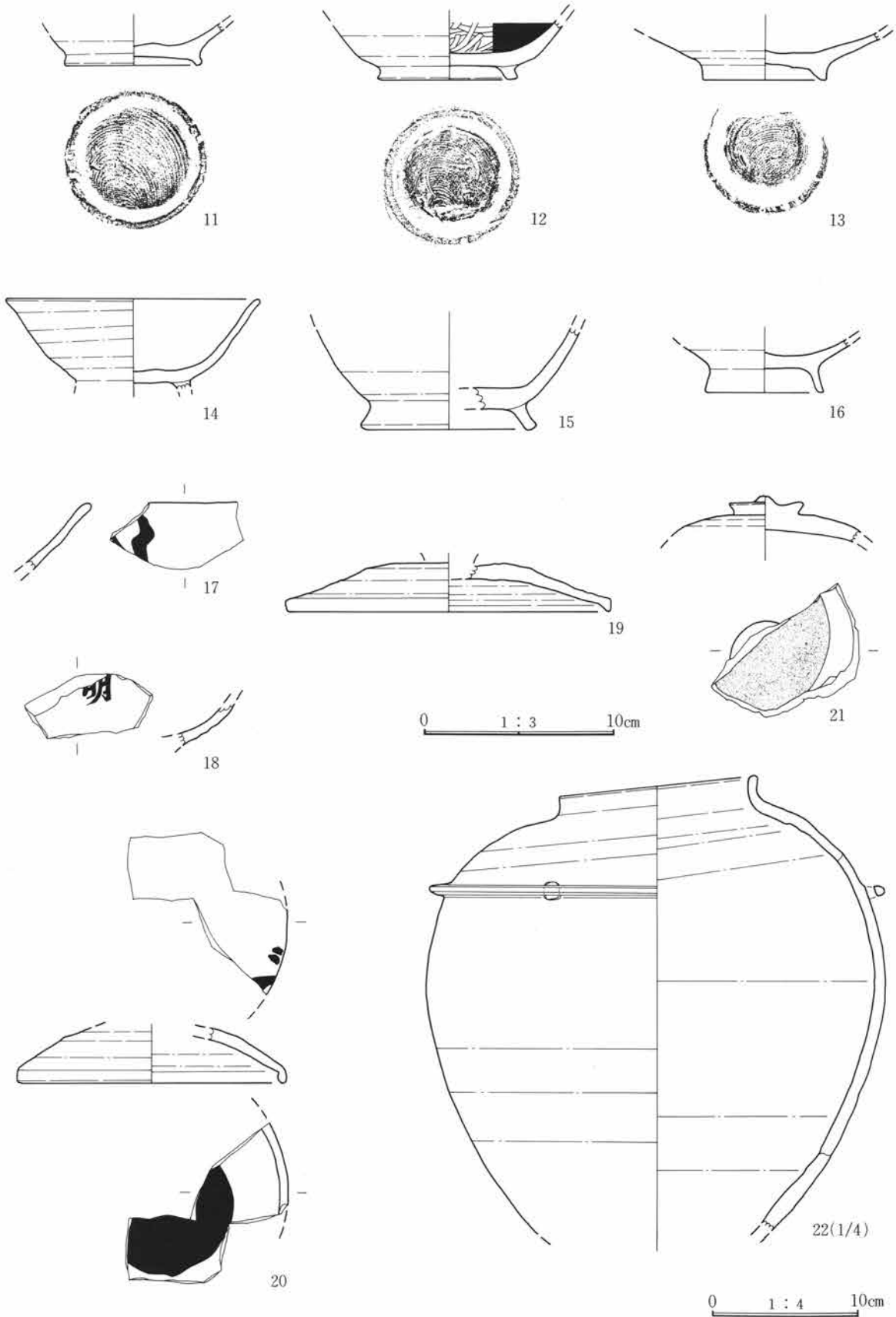
2号建物跡北方出土位置不明



2号建物跡西方整地面下



第56図 2号建物跡北方出土位置不明・西方整地面下出土遺物



第57図 2号建物跡西方整地地下出土遺物

(3) 3号建物跡

A 遺 構

概要 基壇上に建つ5間4間の礎石建物であって、瓦葺き建物である。

位置 頂部区の中央に位置する。言い換えれば、寺院跡の主体が形成されている東から西へのびた尾根頂部のほぼ中央にあたる。標高は190.2mである。西方に2号建物跡、南東方に4号建物跡がある。

整地 3号建物跡は、遺跡内最高地点である4号建物跡の所在する小丘から北西に下る丘陵斜面に所在し、この傾斜面をかなり大規模に整地して建造されている。基壇の基盤と周辺の整地および基壇の造成は、切土と盛土により、連続的になされているが、整地については、以下のような3つの工程が推定される。

まず、3号建物の南側半分から4号建物跡の所在する小丘との間は、東西20数m・南北12m以上に及ぶ相当広い部分が切土されている。切土は黄白色の凝灰質の泥岩層に達しており、下面はほぼ水平で整っている。なお、この切土は、3号建物跡の基壇南側を作り出すものともなっている。

つぎに、基壇下と基壇北側裾部の整地をみると、この部分ではおおむね黄色ローム質土あるいは浅間室田軽石が上面に出ており、表層の軟質土を除去するような浅い削土がなされたとみられる。

第3に、基壇北方は、幅3～6m程の平坦な面が続いた後、急な崖斜面となって落ち込むが、その縁部に盛土がなされている。この盛土は、黄色ローム質土を主体とするが、純層では無く、炭化物や土器なども混入している。厚さは1m以上に及び、量的にはかなり多い。おそらく、基壇周辺の整地に伴う余剰土を盛ったものとみられる。この盛土作業は、3号建物前方（北側）の空間を広くとる意図が多分に含まれているものと考えられる。

基壇 本建物の基壇は、南東隅部を除く東辺が耕作により奥へ2mほど削除されており、また、礎石列で南から3列目までの部分は上面が一時畑とされ礎石や遺物が除去されているが、他はおおむね遺存状況は良好であった。

規模は、下底では南北13.7m・東西15.3mであり、上端では南北12.0m・東西14.3mである。この基壇規模は、下底部については基壇化粧石の外側の数値であり、上端部については必ずしも完全に旧状をとどめていないので残りの良い部分での数値である。

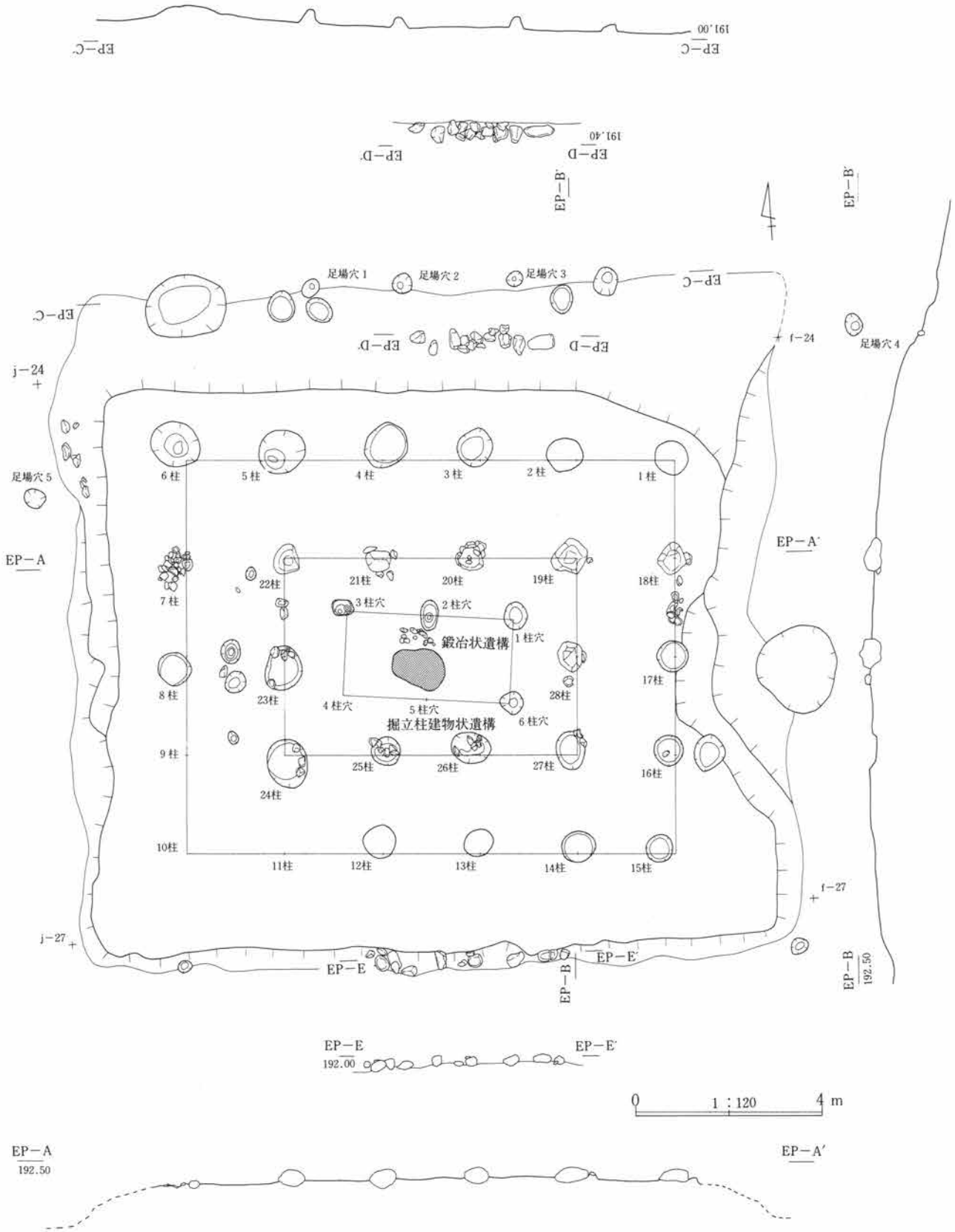
基壇の高さは、南側が高く北側に下がる地形であることから、南側では40～50cm、北側では100～110cmである。基壇の上面は、現状では中央から四側縁に向かって緩やかに下っているが、本来は水平であったと考えられ、基壇高はそれを復元しての数値である。

基壇の造成 本建物の基壇は、南半分は削り出し、北半分は整地後の盛土によって造成されている。削り出し部分では、暗褐色のしまりのある粘質土および黄白色凝灰質泥岩の岩盤が表面に出ている。盛土は、整地面が北側に傾斜しているため、南側から北側に向かって厚くなり、最も厚いところでは80cm以上に及ぶ。土の積み方は、いわゆる版築といえるものである。細かく分けると、薄いところでは1層が3～4cmで、10層以上に及んでいる。北側寄りの下半部では斜めに堆積するが、上半部は水平堆積をしている。用土は、淡褐色土・褐色土・暗褐色土などを主体とし、暗褐色粘質土・黄白色泥岩・浅間室田軽石を混入するものである。全体として、しまりは強く、ていねいでしっかりした造成とみとめられる。

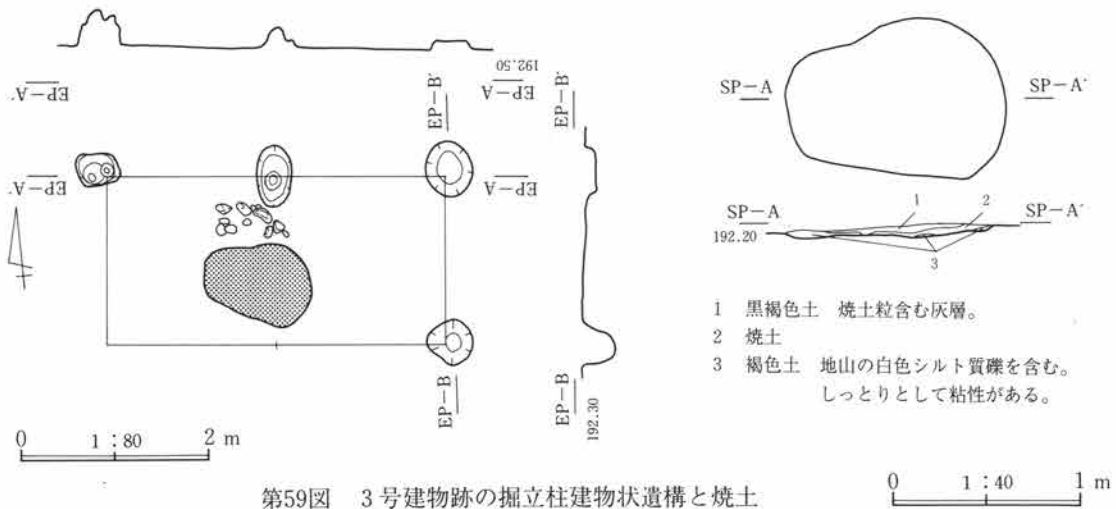
基壇化粧 基壇化粧は、明確な形としては北面と南面にみられ、西面はやや不明確であり、東面は攪乱のため全く不明である。

北面は、中央からやや東寄りに幅3mにわたり、径20～55cmの大小の河原石が17個並べられていた。基壇の基部に並べられたものである。石の組み方・用い方はやや不規則的である。この西側にも、3～4個が原位

第三章 遺構と遺物



第58図 3号建物跡



第59図 3号建物跡の掘立柱建物状遺構と焼土

置からやや動いた状況であったり、数個の石が崩落しており、そのような状況から基壇化粧は、本来は北面の中央に幅6mにわたり組まれていたものと推測される。

南面は、中央部の幅4.2mの部分に径30~40cmの大ぶりの石と径15~20cmの小ぶりの石が混じって配されていた。化粧は基壇の裾から側面にかけてなされているが、石積みは一段である。石は計13個があり、組み方はまばらであって、遺存状況はあまり良くない。耕作などにより抜き取られたことによるものとみられる。西面は、北寄りの部分に大小の石が8個あり、基壇化粧とみなされるが、原位置からやや動いているので、確実ではない。なお、西面周辺には他にも崩落した基壇化粧とみられる石が散在する。

以上、3号建物跡の基壇化粧は、北面と南面の中央部の裾部になされたことは確実であり、西面の一部にもその痕跡を残すことから、可能性としては四面になされたとみられる。が、全周する可能性は希少であると考えられる。基壇化粧の石材は、安山岩・珪質片岩・チャートである。

平面構造 本建物遺構は、東西5間、南北4間の東西棟であって、四面庇付きの礎石建物である。原位置を保っている礎石は身舎部に5個、東側柱に1個である。根石は7カ所で確認された。礎石の据え付け穴は8カ所でみられた。礎石や根石のほぼ中心に柱位置を推定すると、桁行は、総長約10.5m(35尺)で、柱間は2.1m(7尺)等間、梁行は、総長約8.4m(28尺)で、柱間は2.1m(7尺)等間である。

建物軸の方位はN-4°-Eである。

なお、側柱から基壇化粧までは、2.1~2.4mであり、軒の出は7尺から8尺と推測される。

礎石 18号柱の位置(以下、柱の位置と番号は、第58図による)の礎石は、安山岩の自然石であって、大きさは54cm×66cmである。根石は1個である。19号柱の礎石は、安山岩であって、80cm×75cmである。20号柱の礎石は、安山岩であって、50cm×50cmである。根石は9個がある。21号柱は、安山岩であって、55cm×45cmである。根石は数個がある。22号柱は、安山岩であって、60cm×69cmである。根石はない。28号柱は、珪岩であって、54cm×52cmである。根石は1個である。総じて、礎石は、自然石(河原石)であって、造り出しなどの加工はみられない。弱い火を受けて赤変したり、表面に剝離が生じている部分もみられた。根石は、礎石によってあるものと無いものがあり、数もばらつきがある。

基壇上の遺構 基壇の中央部に、掘立柱建物状遺構1、鍛冶に関連する遺構1(焼土・石組)がある。

掘立柱建物状遺構は、4個の柱穴が依存し、構造は2間1間と推定され、桁行は3.6m(12尺)であって、

第Ⅲ章 遺構と遺物

柱間は1.8 m (6尺)である。梁行は、1.8 m (6尺)である。柱穴の規模は、40～50 cmであって、深さは5～40 cmでばらつきがある。

鍛冶状遺構は、基壇の中心部に位置し、石組と焼土からなる。石組は、10～25 cmの6個の小石がコの字状に配置され、南に開いている。この石組の南側を中心に焼土面が110 cm×80 cmの範囲にみられる。周囲には他に数個の石が散乱し、それらも石組にかかわるものとみられる。

この焼土と石組の周辺からは、フイゴの羽口や椀形鉋滓が出土しており、鍛冶がなされたことが考えられる。そして、掘立柱建物状遺構は、焼土と石組遺構を取り込むような位置関係にあることから、これらは一体的な遺構と考えられる。掘立柱建物状遺構は、鍛冶作業の覆い屋と推測される。

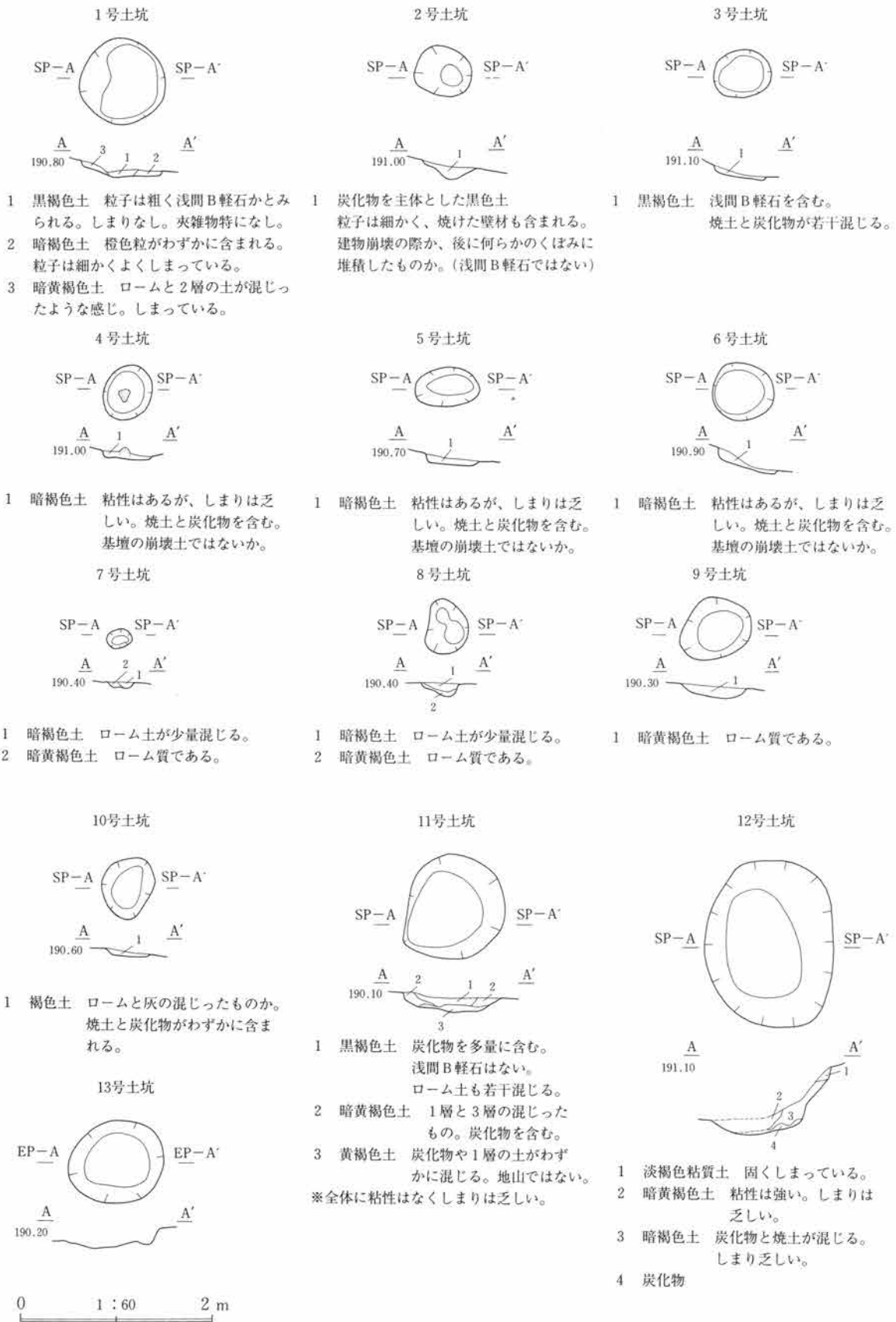
足場穴 基壇の周囲には足場穴とみられるピットが5ないし6個ある(第58図)。基壇北側には1～3号の3個の足場穴および足場穴の可能性の考えられる2号土坑の計4個、基壇東側の北寄りに1個、基壇西側の北側に1個がある。規模は、おおむね径30～40 cm、深さ30 cmである。北側の足場穴列は、基壇基部の化粧石の外表面から穴の中心まで110 cmの幅があり、足場穴間の距離は1.8～2.4 mであって、均一ではない。基壇東側の足場穴は、基壇の裾から1 mほど離れており、基壇西側の足場穴は同じく70 cmほどである。

土坑 基壇の北側には裾部から7 mほどの範囲に13基の土坑がある(付図6第60図)。それぞれの状況は下記のとおり(単位はcm)である。

番号	規模	深さ	形状	フク土の特徴
1号	90×88	6	円形	
2号	58×52	13	不整形	炭化物多、焼けた壁材を含む。
3号	50×59	3	不整円形	焼土・炭化物少量。
4号	55×50	5	長円形	焼土・炭化物・基壇の崩壊土を含む。
5号	66×40	7	長円形	〃
6号	62×60	5	不整円形	〃
7号	26×20	5	長円形	
8号	56×45	13	不整形	
9号	81×63	12	不整形	
10号	56×53	5	不整形	灰・炭化物・焼土を含む。
11号	105×110	15	不整形	炭化物を多量に含む。
12号	173×124	15	長円形	下底部に炭化物が多量に堆積。
13号	98×85	15	不整円形	

この中で特徴的な土坑は、12号土坑であって、基壇北側の西寄り裾部に位置し、裾部を掘り込む形で造られている。平面形は横長の長円形で整っている。炭化物が下底面に5 cmほど厚く堆積し、その上を暗褐色土・暗黄褐色土が覆い、さらにその上に浅間B軽石が堆積する。底面や壁面は焼けた形跡は明瞭ではないので、短期的に何らかの目的で火が燃やされたものと思われる。

石敷き状遺構 基壇西方に2カ所、小ぶりの河原石の集中する部分がある。これを「石敷き状遺構」と呼び、遠くのを「A遺構」、近くのを「B遺構」と呼ぶ。A遺構は幅2.5 m・長さ4.3 m、B遺構は幅2.0 m・長さ2.2 mであり、石は、数cmの小ぶりのものを主体にして、30 cmほどのものも含む。地表面に散布されたように分布し、地中には数個を除いて見られない。2つの石敷きは、長軸方向に連続する形をとり、3号建物跡から北西方にのびている。3号建物跡から2号建物跡へ下る斜面にあり、かつ、地面の土質は粘質土であっ



第60図 3号建物跡土坑

第三章 遺構と遺物

て滑りやすいことから、通路的な部分に意図的に石を敷いたものとみられる。そして、この想定が成り立つとすれば、建物への石敷の取り付く位置から見て、西側柱の南から第2間に入り口が推定される。

廃絶状況 3号建物跡は、焼失した痕跡がある。しかしながら、その状況は激しいものではない。そのようなことから、ある程度建物の崩壊が進んだ時点で焼失したものかと推測される。

B 遺物

3号建物跡の出土遺物は、瓦類・土器類・土製品・鉄製品などがある。これらの遺物は、出土位置によって、「基壇上」と「基壇下」の二つに大別した。「基壇上」は、基壇の上面および基壇周辺の整地面上的の遺物である。「基壇下」は、基壇の盛土内および基壇周辺の整地面下の遺物である。なお、瓦類と鉄製品は、出土位置が特に指示していないものは「基壇上」に属するものである。

瓦 瓦は、丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦および文字瓦・特殊瓦などがある。以下、瓦の分類については、黒熊中西遺跡全体を通じた分類（第三章第1節3項）による。

軒丸瓦 軒丸瓦は、2種類がある。第63図の軒丸瓦1・2は、本遺跡における瓦分類での軒丸瓦B類であるが、1は范キズが無く、2は范キズがある。本種は小破片まで含めると、20～30点がある。第63図の軒丸瓦3は、軒丸瓦C類である。量は3～4点で少量である。

軒平瓦 軒平瓦は、2種類がある。第63図の軒平瓦1は、范型施文による格子目文であり、瓦分類では軒平瓦A類である。第63図の軒平瓦2は、ヘラ描きの格子目文であり、軒平瓦B類である。いずれも出土量は、1点ずつである。

軒瓦の組み合わせ 軒瓦は、軒丸瓦2種（軒丸瓦B・C類）、軒平瓦2種（軒平瓦A・B類）があるが、胎土から見ると、軒丸瓦C類は孤立的であり、軒丸瓦B類と軒平瓦A・B類が対応する可能性を有するとみられる。しかし、軒平瓦は量的に希少であるので、軒丸瓦B類との組み合わせを想定することに無理も感じられる。3号建物跡は、主としては軒丸瓦B類により飾られたとしておくのが穏当かと考えられる。

丸瓦・平瓦 丸瓦・平瓦は、総量で7,601点・501.5kgがある。内訳は、丸瓦は708点・86.1kg、平瓦は6,872点・415.2kg、不明21点・0.2kgである。丸瓦は1枚を2kgとすると43.1枚分、平瓦は1枚2kgとすると207.6枚分となる。ただし、3号建物跡は、南側の半分以上が耕作により遺物が大量に除去されており、以上の数は3号建物跡の総量ではない。また、瓦の四隅数は上記の枚数よりはるかに多く、実際に枚数はより多いことは確実である。丸瓦・平瓦は、細別できるが、それぞれの量と比率は、下記のようなものである。

類	丸瓦		平瓦		図示資料	
	重量	比率	重量	比率	丸瓦	平瓦
I A	0.9kg	1.0%	1.8kg	0.4%	丸瓦1	平瓦1
I B	17.4kg	20.2%	25.7kg	6.2%	丸瓦3	平瓦2・3
II	12.4kg	14.4%	74.2kg	17.9%	丸瓦2・4・5	平瓦4・5
III B	40.8kg	47.3%	138.7kg	33.4%	丸瓦6・7・8	平瓦6・7・8・9・10・11・12
III C 1	11.1kg	12.9%	133.0kg	32.0%	丸瓦9・10	平瓦13
III C 2			17.9kg	4.3%	平瓦14	
分類不明	3.5kg	4.1%	23.9kg	5.8%		
合計	86.1kg	100 %	415.2kg	100%		

瓦の散布範囲を見ると、基壇の上と裾部に多く、周辺には希薄であり、屋根から下方に落下した状況がうかがわれる（第61図）。なお、基壇南側に瓦が少ないのは耕作によって抜き取られたためとみられる。

文字瓦・特殊瓦 文字瓦として明確なものは、2点がある（第69図文字瓦1・2）。1は、軒丸瓦B類の瓦当側面にヘラで記されたものであり、「連珠連珠」の4文字がある。筆跡を見ると、前2文字と後2文字は異なるので、複数の者が記したとみられる。本軒丸瓦は破損しており、側面部は1/7が残っており、復元すると、総数28文字ほどが記されていた可能性が考えられる。2は、「見」であり、平瓦の凸面部にヘラで記されている。瓦の破損状況からみて文字数は一字である。意味は不明確である。

特殊瓦は、あつかいとしては「特殊瓦」と呼んだが、厳密には瓦ではないので、不明品とすべきものである。タテ4cm・ヨコ3cm・厚さ1cmの破片であって、表面に范型により文様が付されている。縁に幅0.4cmの縁取りがめぐり、中には二重の輪郭をもった縦長の棒状文様がある。図象は不明であるが、蓮弁か、仏像の頭部かとみられる。

鬼瓦 鬼瓦は、数個体分がある。種類は細かく見ると2種類となる。一つは、第70図の1・2・3・5であって、1によりほぼ全体形が知られる。鬼瓦分類のA類である。もう一種の4は、破片であるが、A類とB類の中間的なタイプとみられる。製作技法や胎土などはほぼ、全て共通である。つまり、面の造形は、いわゆる手捏ねであり、厚さ1.5~2.0cmほどの平板な粘土板の上に粘土を貼ってなされている。裏面はナデ整形である。胎土は、白色細礫を含み粗雑である。焼成は、還元炎であって、やや堅緻であって、色調は淡い褐色味をおびた灰色を呈す。胎土や焼成は丸瓦・平瓦のI類に類似する。

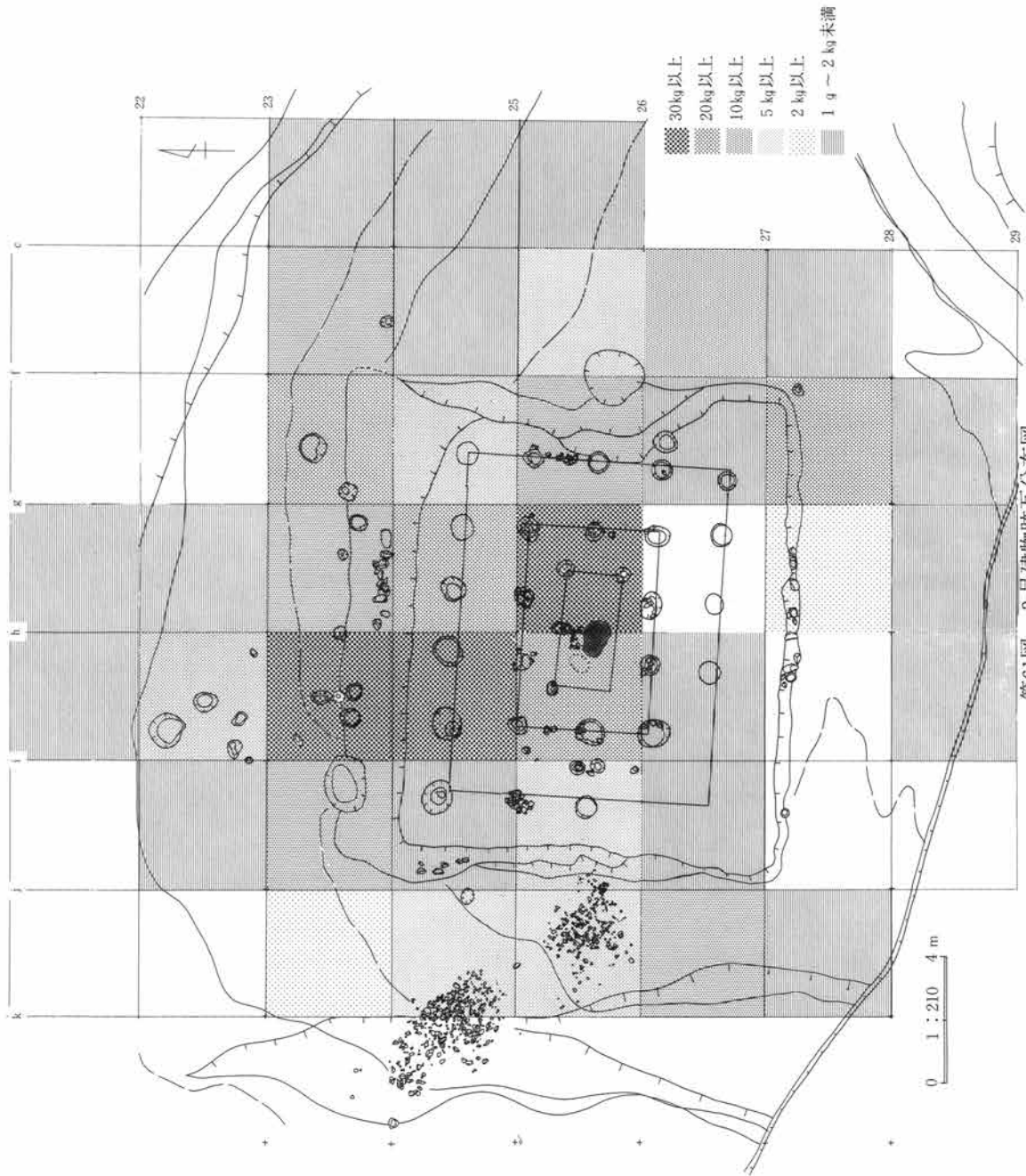
第70図は、長さ37.4cm、幅は上が27cm・下が32cmである。全体形は長方形に近く、下部に丸瓦を受ける台形状の凹部がえぐり込まれている。顔面は目・鼻・口・頬等が表現され、目・鼻孔・口は穴が穿たれている。牙は断面三角形の突起として6本が表されている。頬は円形で、高い。目と頬の周りや口の脇の空間には、幅・高さ2cmの断面三角状の隆帯が配され、その交点には巻き髭と同様な突起が付される。面の周縁にも断面三角状の隆帯がめぐり、総数18の突起状の巻き髭が付される。牙や巻き髭などをはじめ、全体として表現には写実性や立体感をとどめている。

鬼瓦の出土位置は、第62図のようである。大棟の両端に置かれていたと受けとめられなくもないが、確定するほどではない。

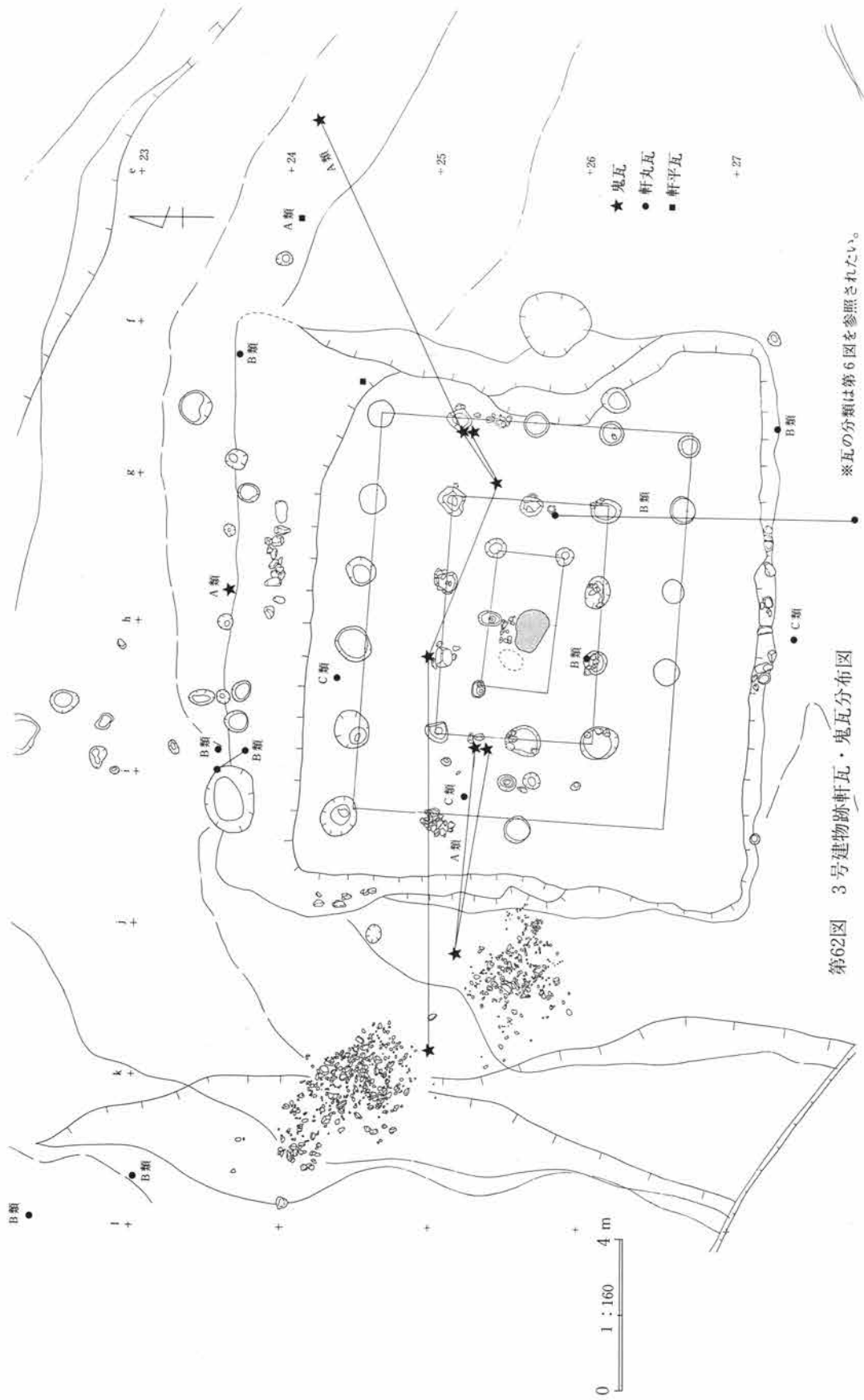
瓦の全体的組成 黒熊中西遺跡の瓦の全体的な分類については、表5（p.19）に示したとおりであるが、3号建物跡の瓦は、丸瓦・平瓦はI A類・I B類・II類・III B類・III C 1類・III C 2類の6類となる。これに対しての軒瓦・鬼瓦は、軒丸瓦B類・軒平瓦A類B類・鬼瓦A類がI類に対応し、軒丸瓦C類はIII（B）類に対応すると考えられる。また、年代的には、I類からIII C類にむかって新しくなる傾向があると考えられる。が、これらは時間的には連続的かつ短期的なものと考えられる。また、量的にはIII B類が主体であって、I類・II類・III C 1類は少ない。以上のことから、3号建物跡の瓦は、まずI類の丸瓦平瓦・軒丸瓦B類・軒平瓦A B類・鬼瓦A類およびII類の瓦が導入されたが、I類・II類の瓦は少量であって量的には足りず、引き続きIII B類・III C類が導入された。III B類は量は多く、これで屋根の大部分は葺かれ、III C類は少量で足りる状況に至っていたと考えられる。瓦の質では、I・II類とIII類のあいだにギャップがあり、I・II類は既存体制で生産されたものであろうが、III類は生産量を高めるために体制を拡充したものと推測される。

土器 3号建物跡の土器は量的にはパン箱（60×36.5×14.5cm）2箱分であって、さして多くはない。出土位置により「基壇上」と「基壇下」に分かれる。出土位置は第63図のとおりであるが、後者については、4・7・9・10は基壇の盛土内からの出土であって、基壇構築時の土器として確実視できるものである。また、1・2・3・8は基壇東方の整地面下の出土であるが、攪乱の可能性もある。

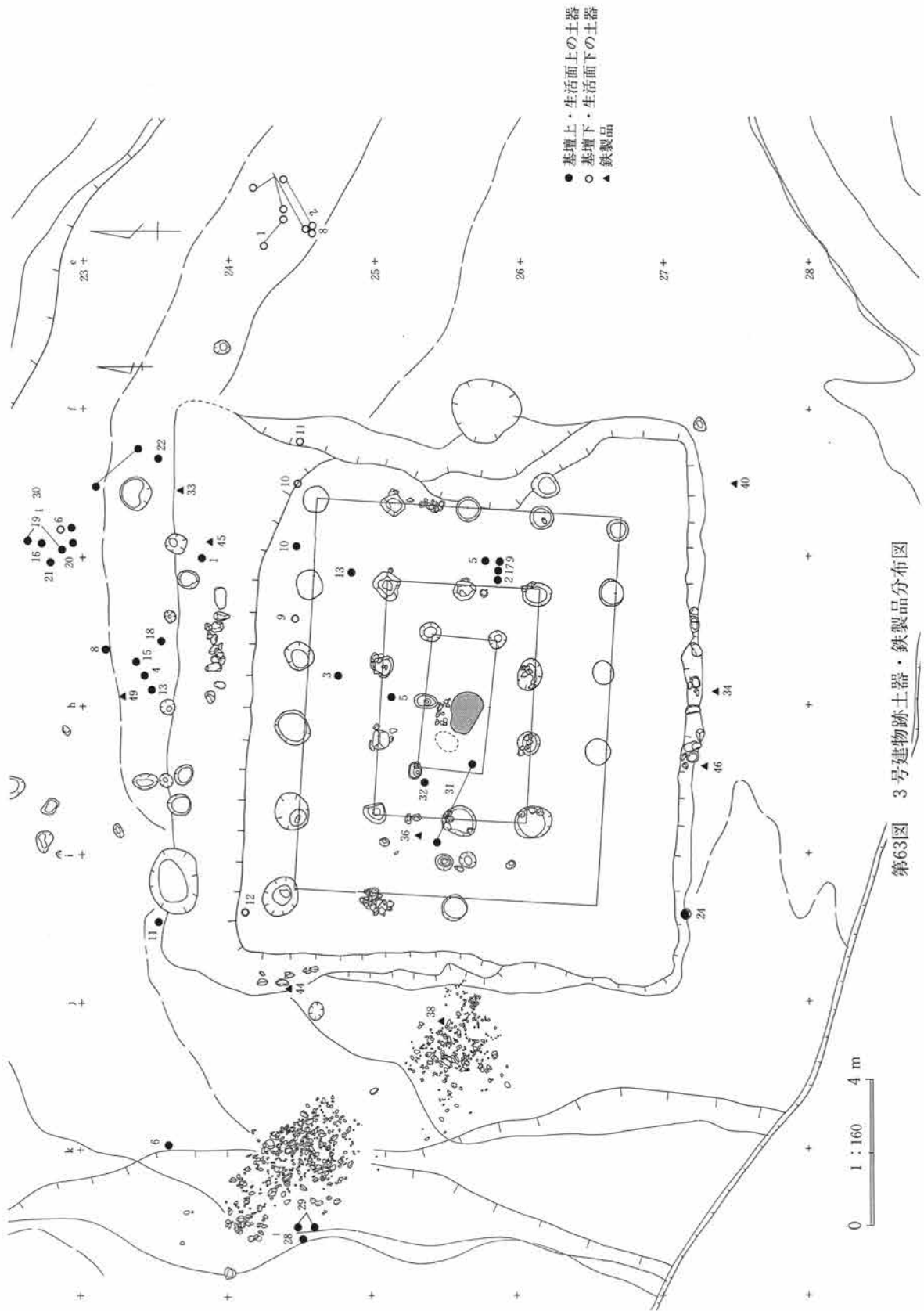
土器類で注目される点は、基壇上の土器ではいわゆる灯明に使用されたとみられる灯火器の杯・椀が8個体



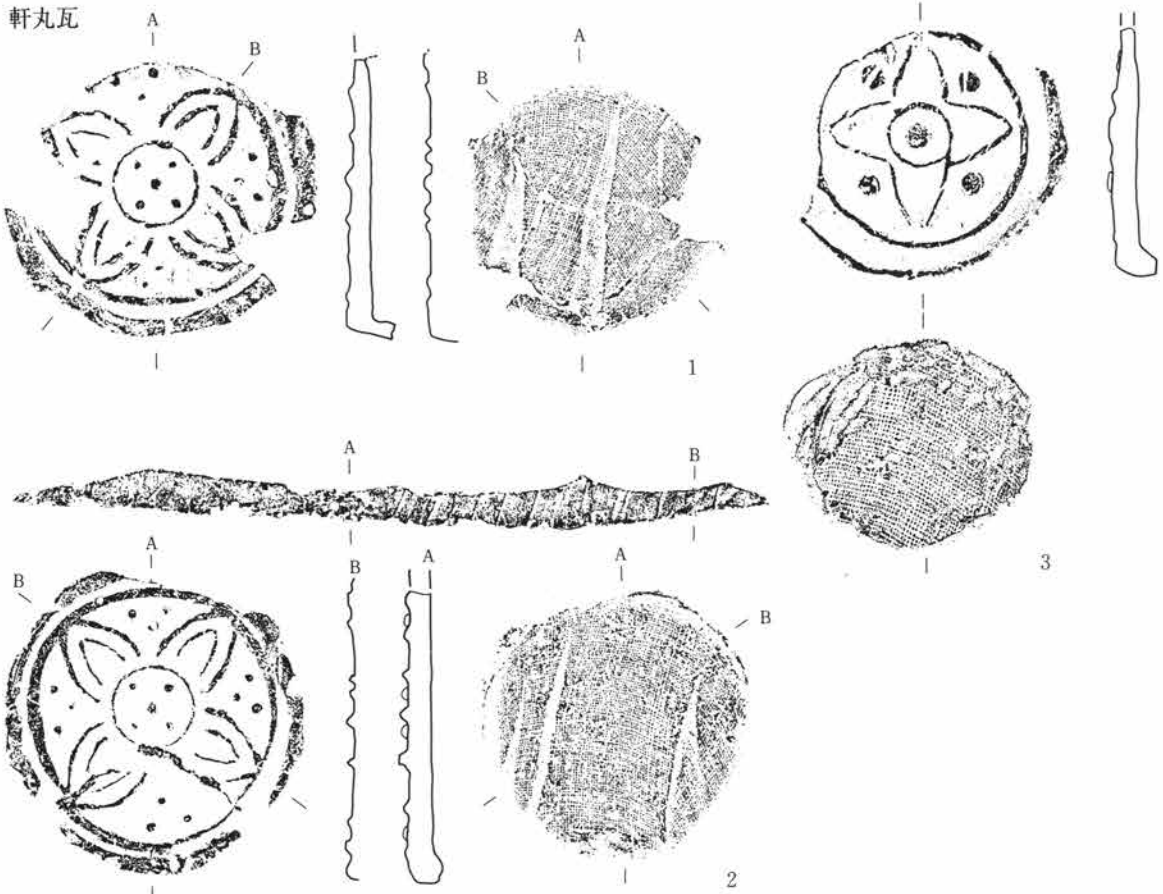
あり、個体数としてやや多い傾向がある。また、基壇下の土器の中に脚付きの鉄鉢（第74図10）があることが留意される。



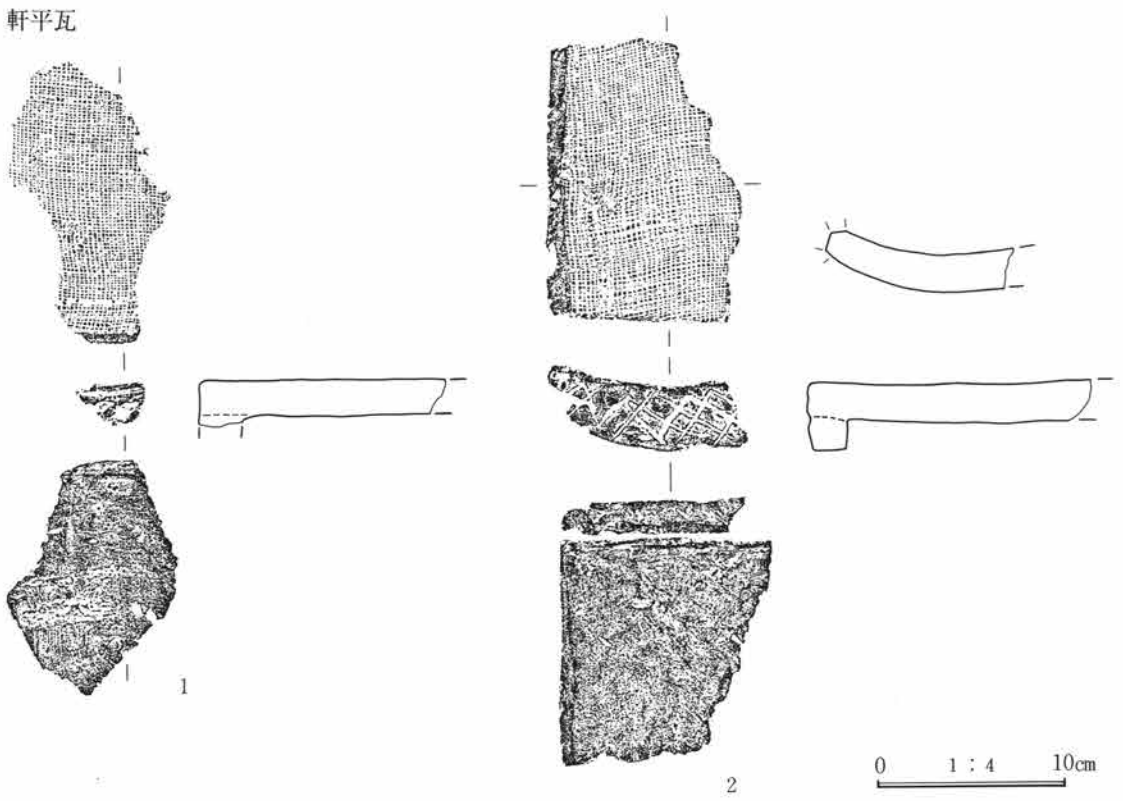
第62図 3号建物跡軒瓦・鬼瓦分布図



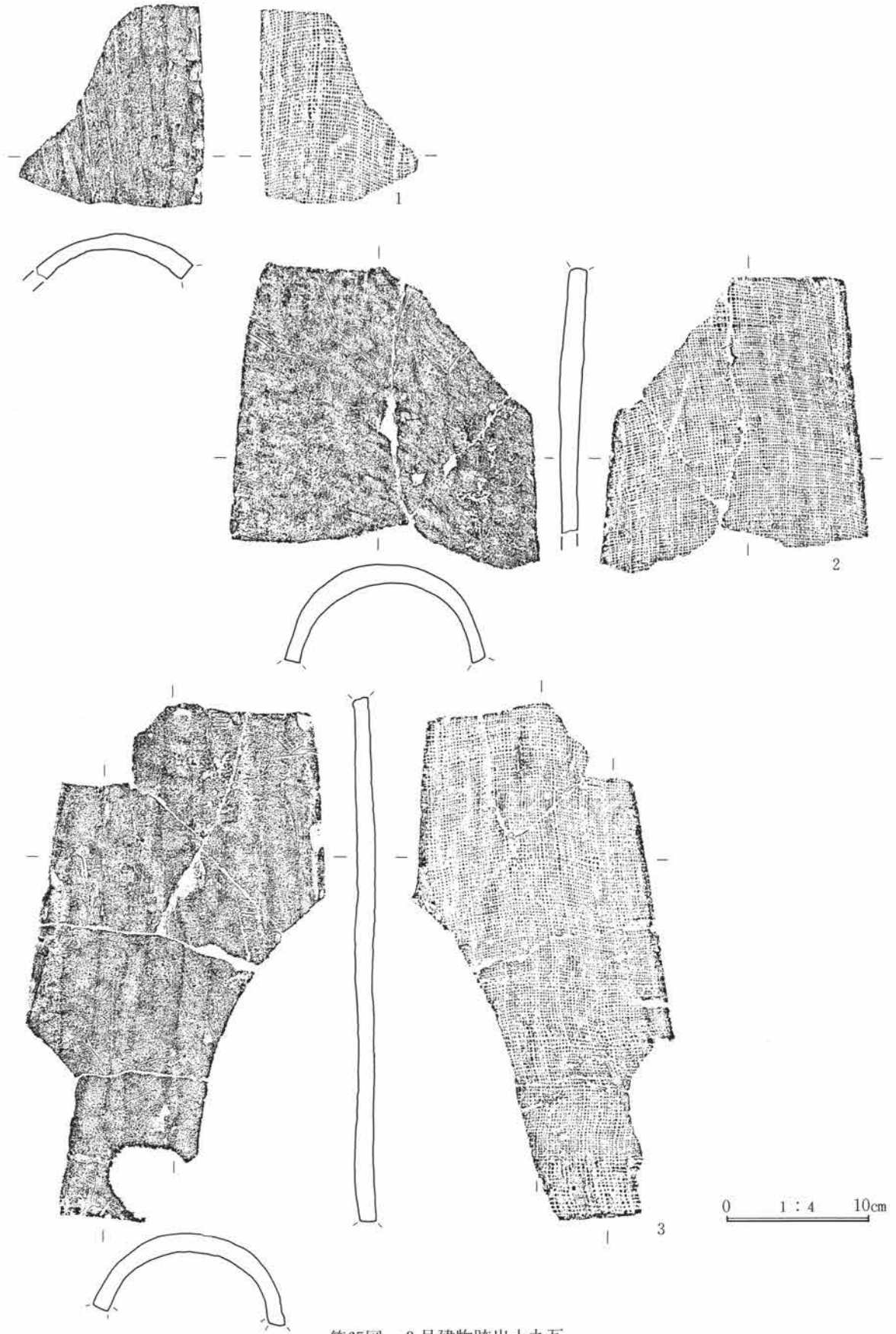
軒丸瓦



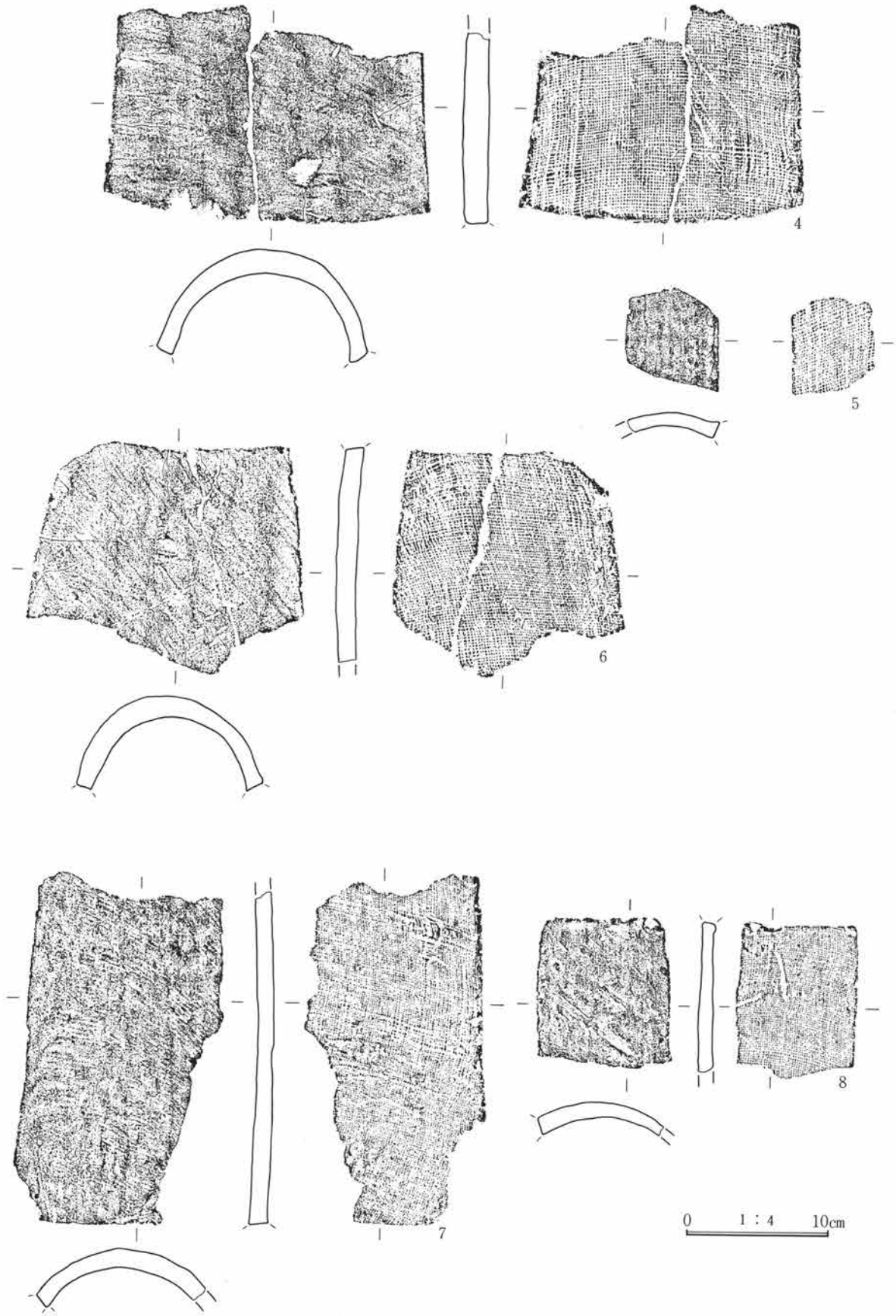
軒平瓦



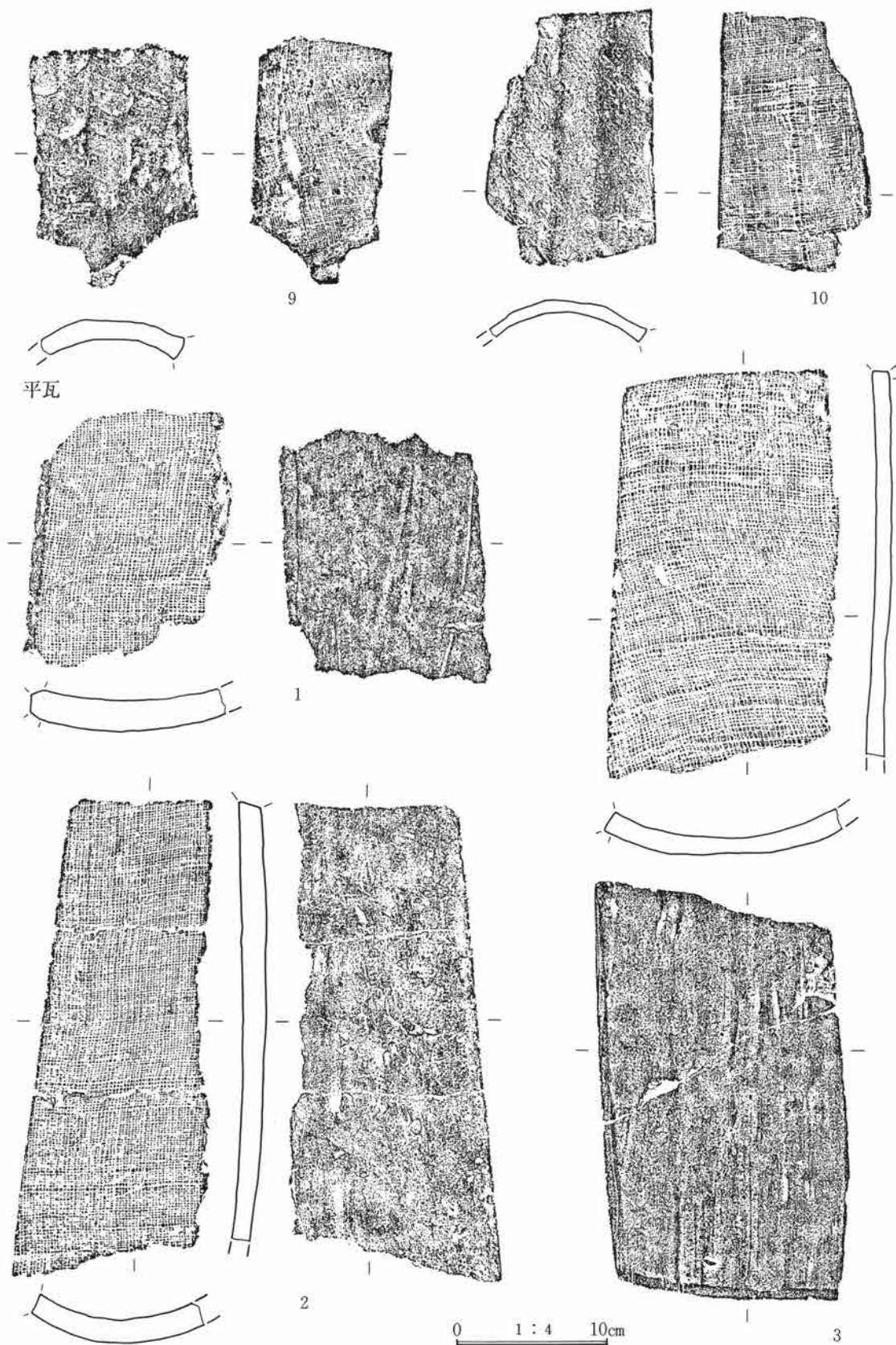
第64図 3号建物跡出土軒丸瓦・軒平瓦



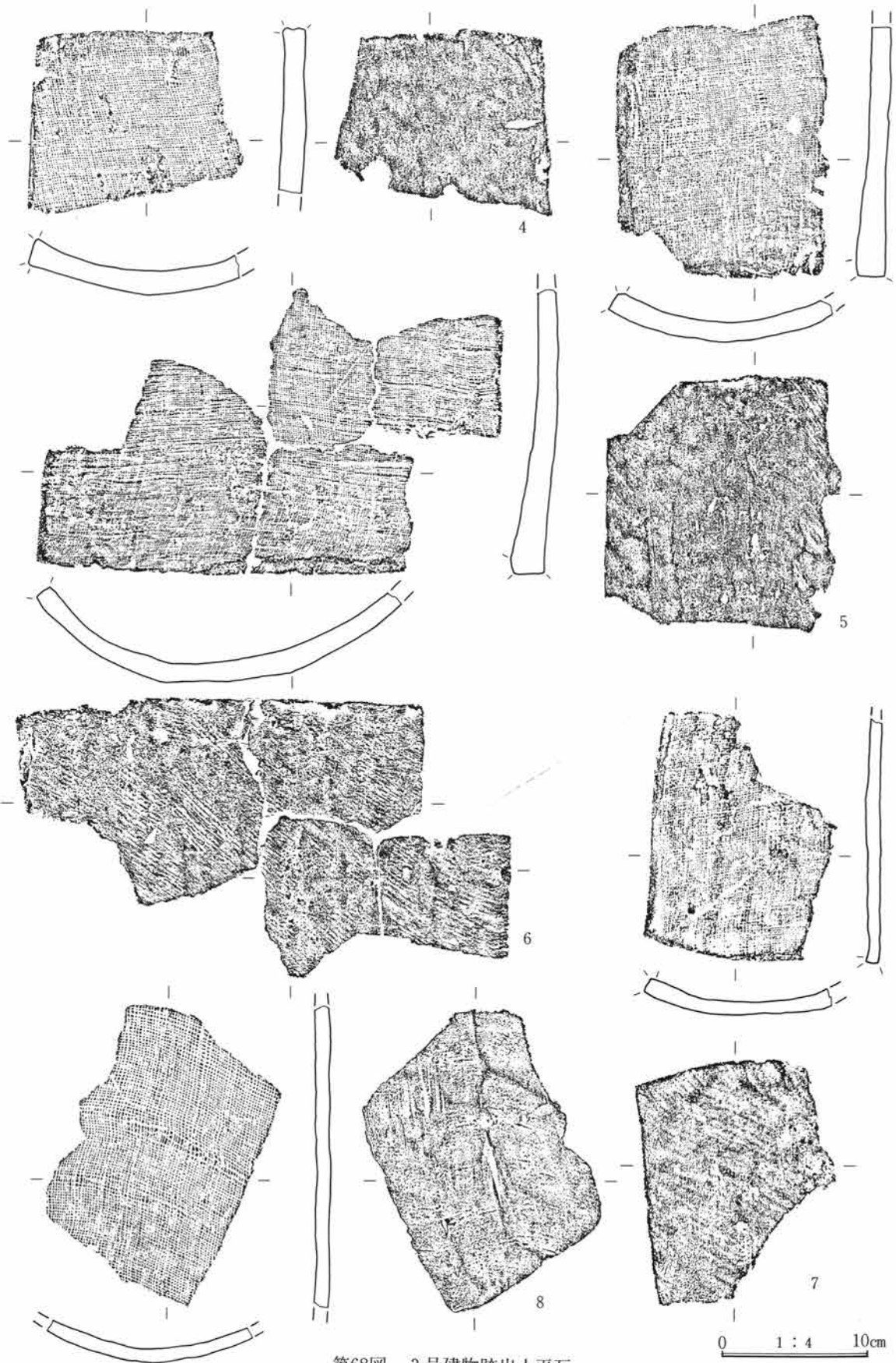
第65図 3号建物跡出土丸瓦



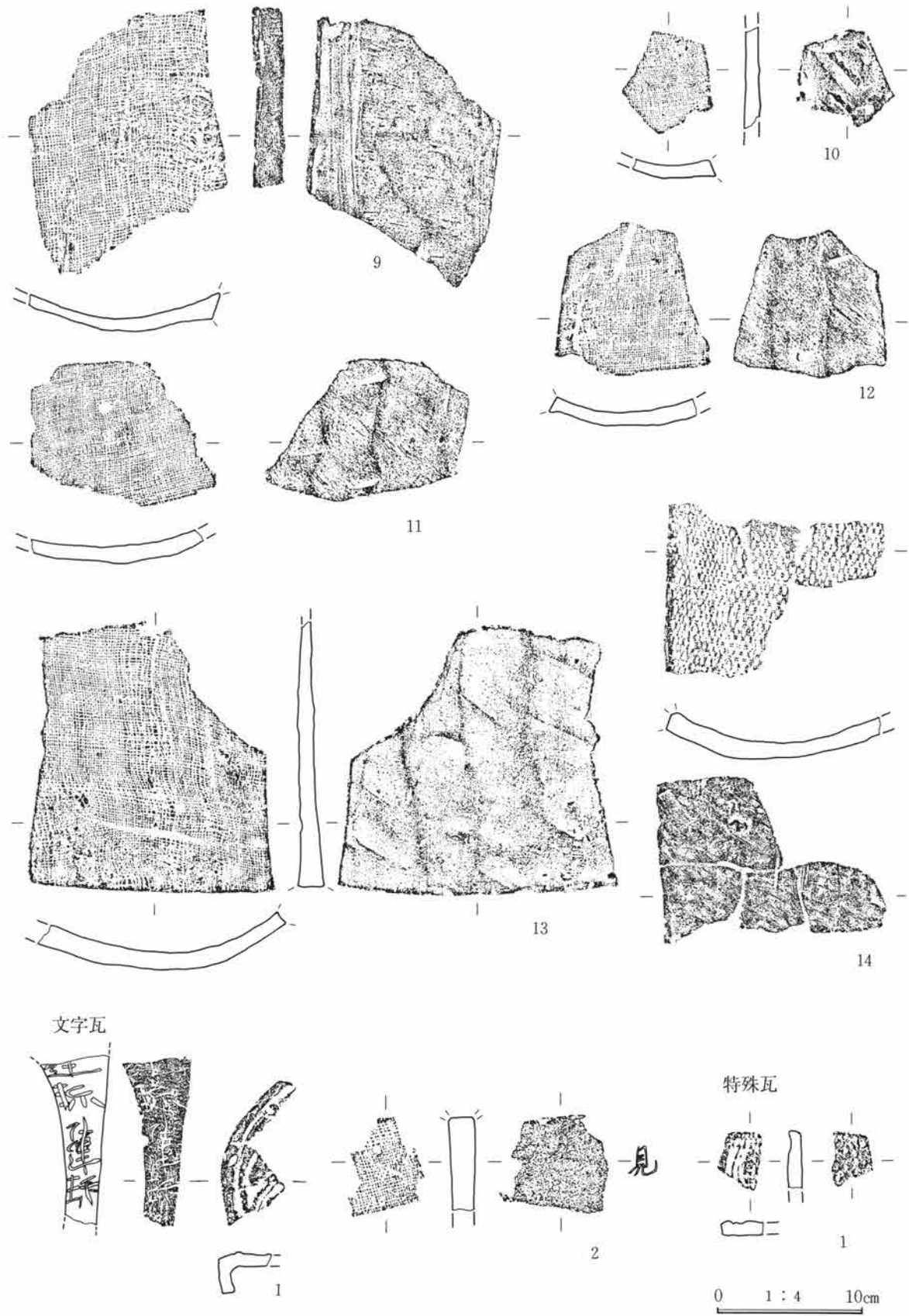
第66図 3号建物跡出土丸瓦



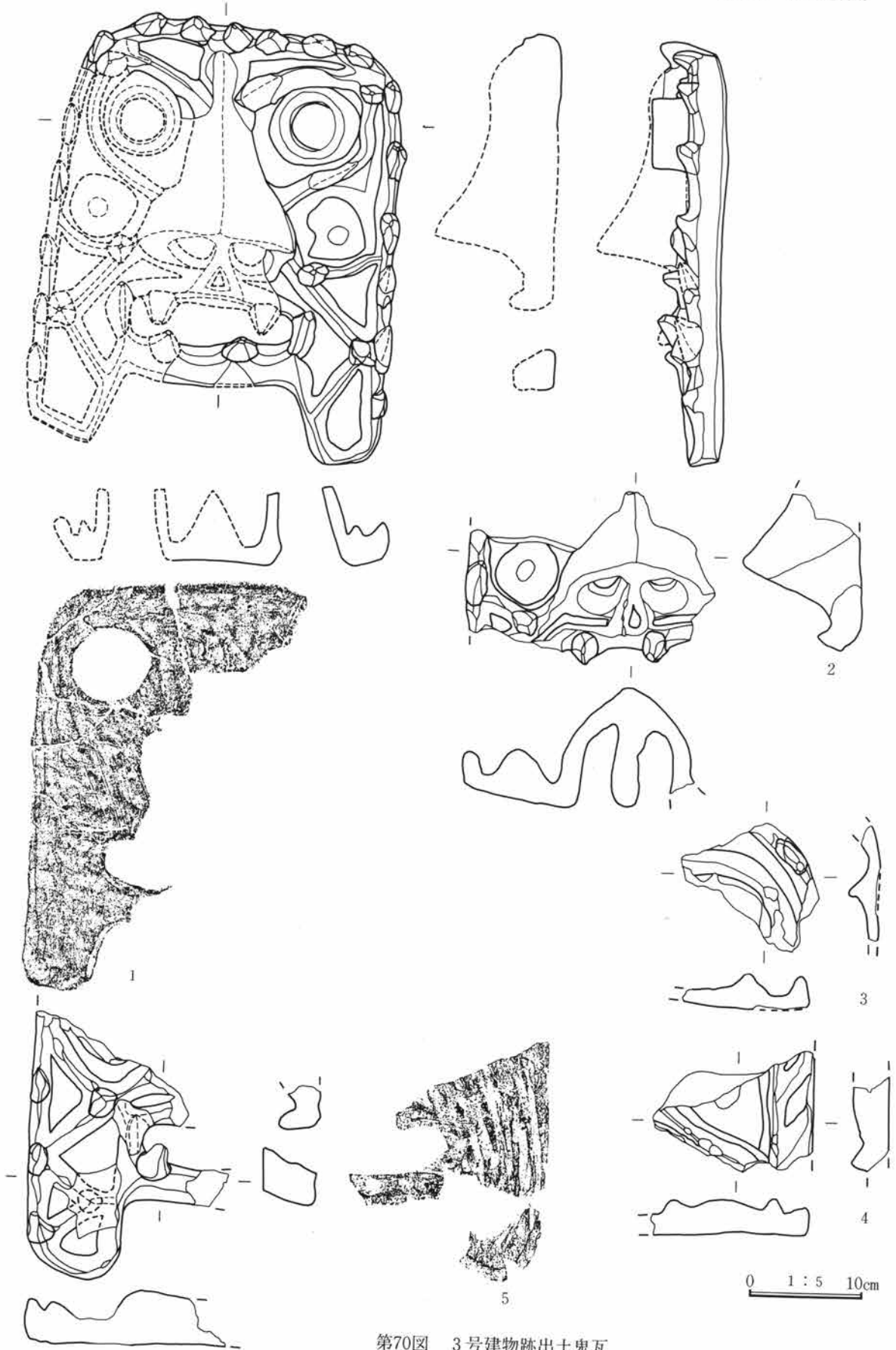
第67図 3号建物跡出土丸瓦・平瓦



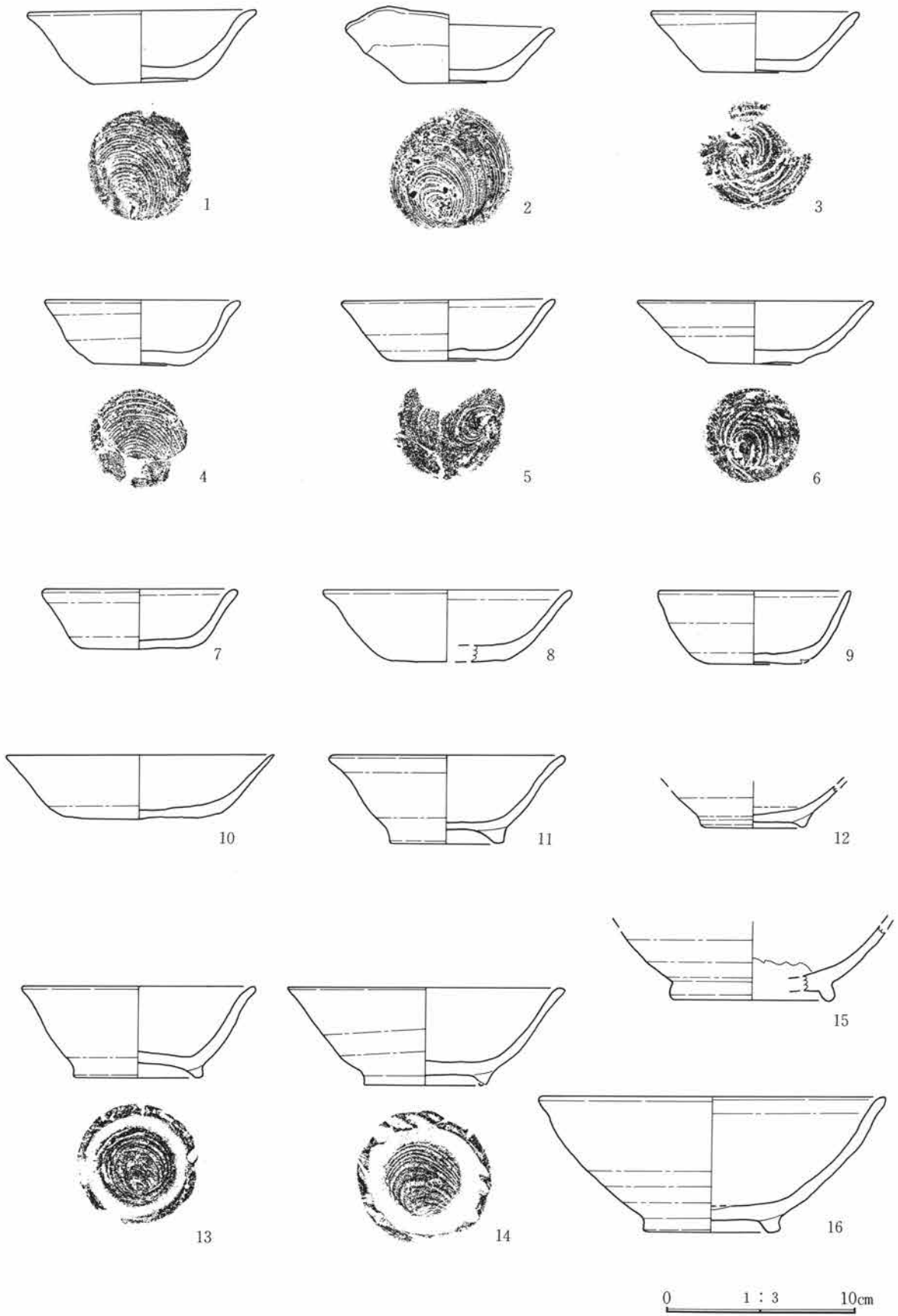
第68図 3号建物跡出土平瓦



第69図 3号建物跡出土平瓦・文字瓦・特殊瓦

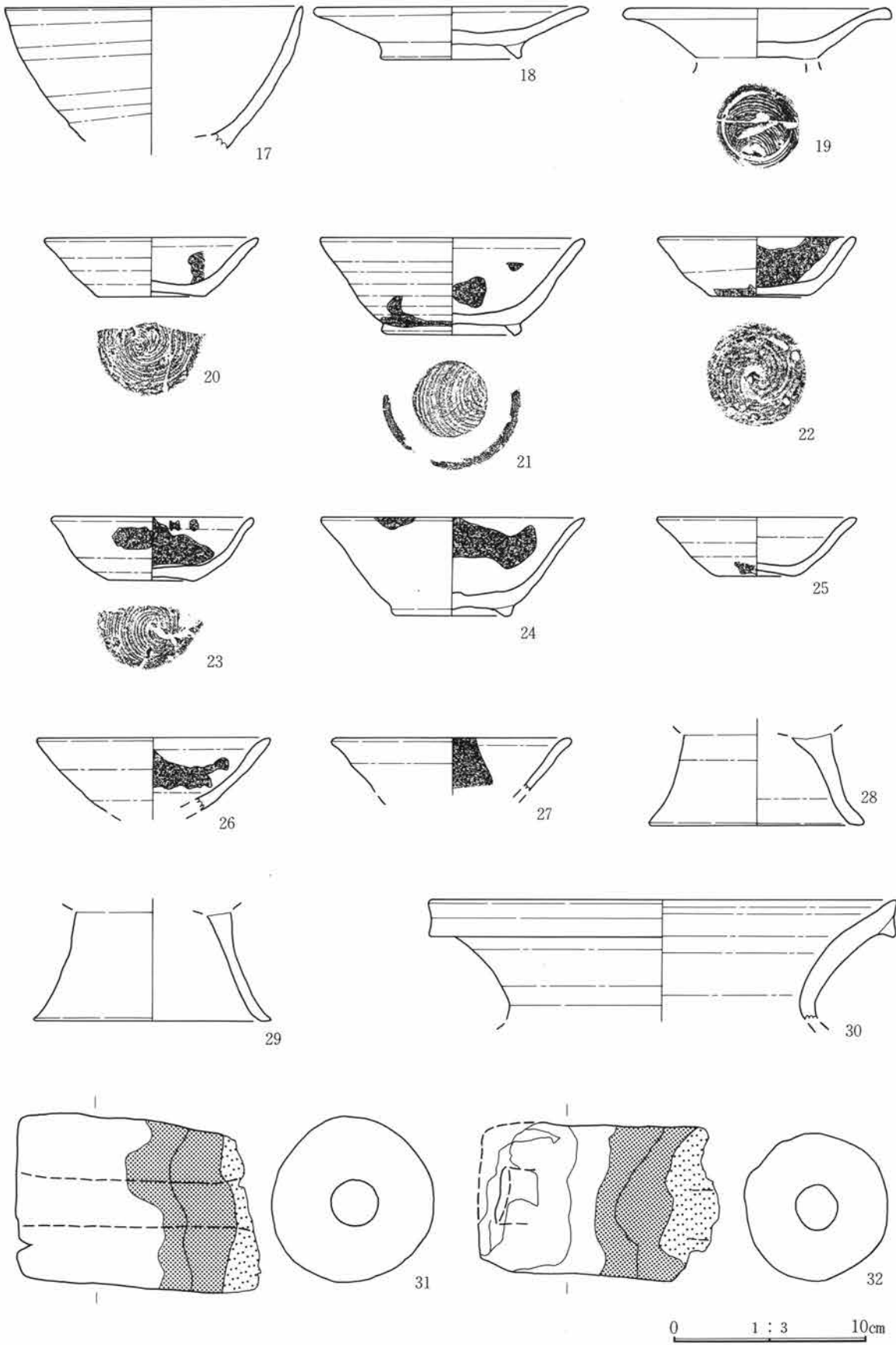


第70図 3号建物跡出土鬼瓦

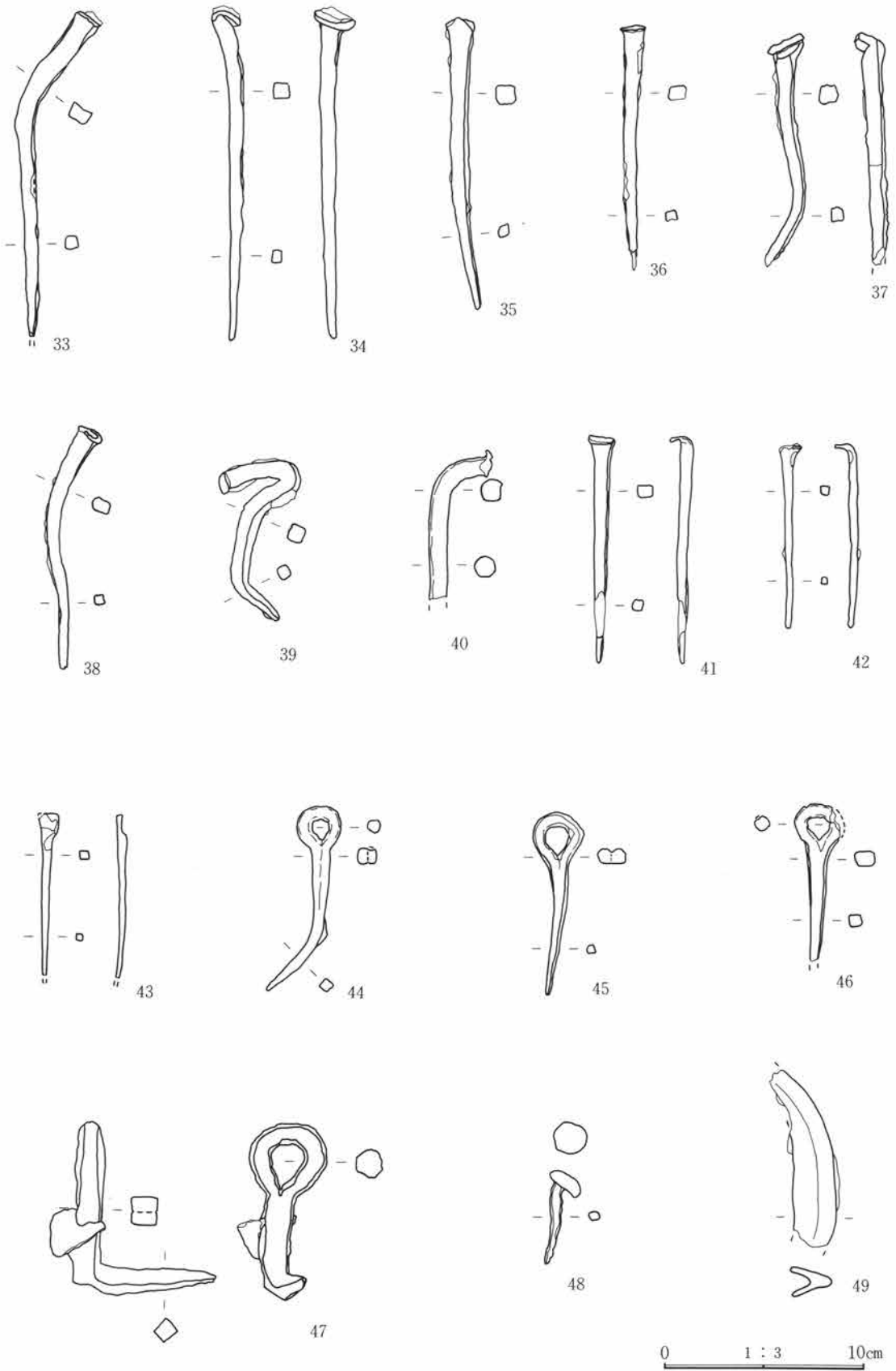


第71図 3号建物跡基壇上出土遺物

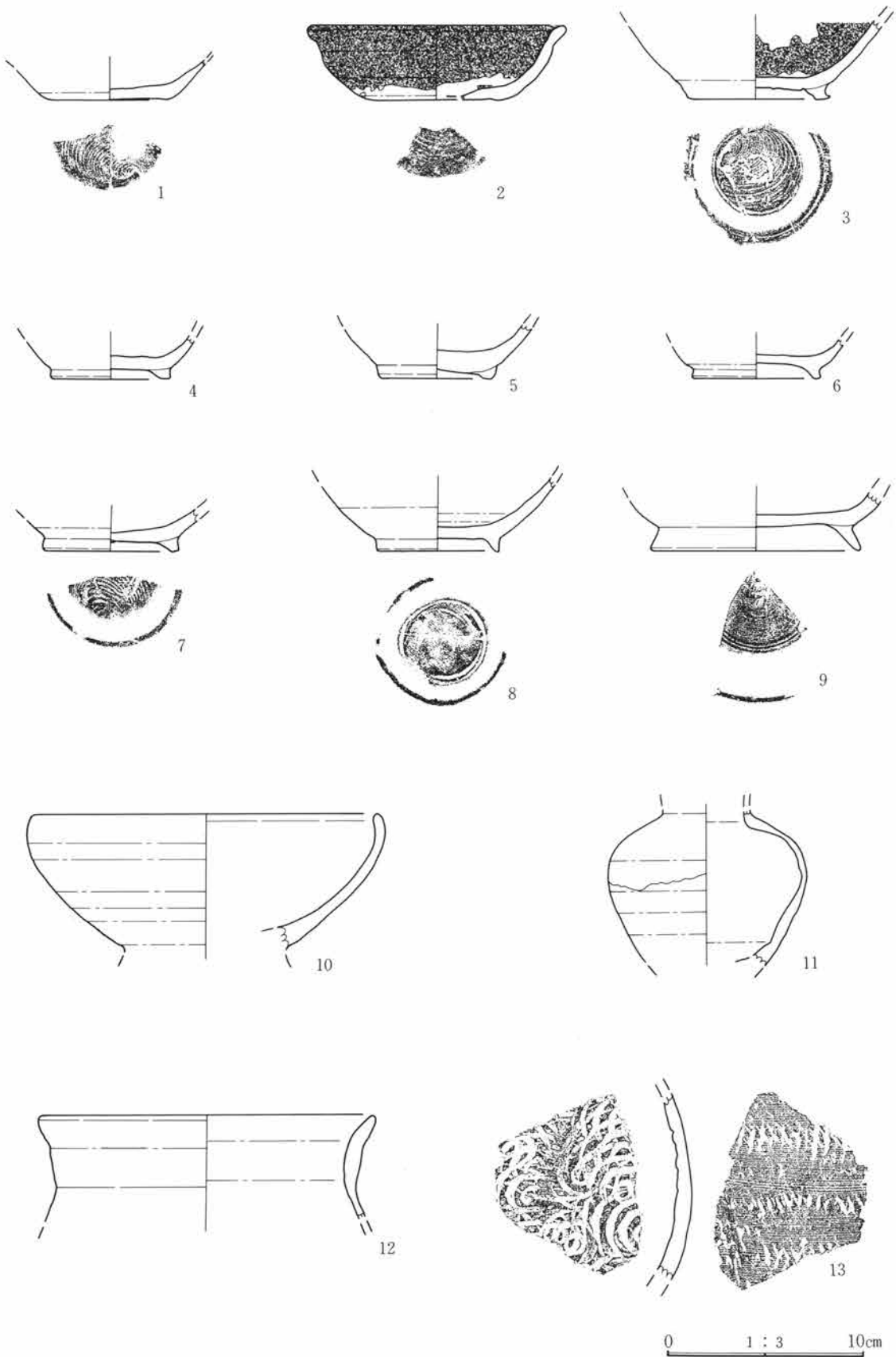
第5節 礎石建物跡



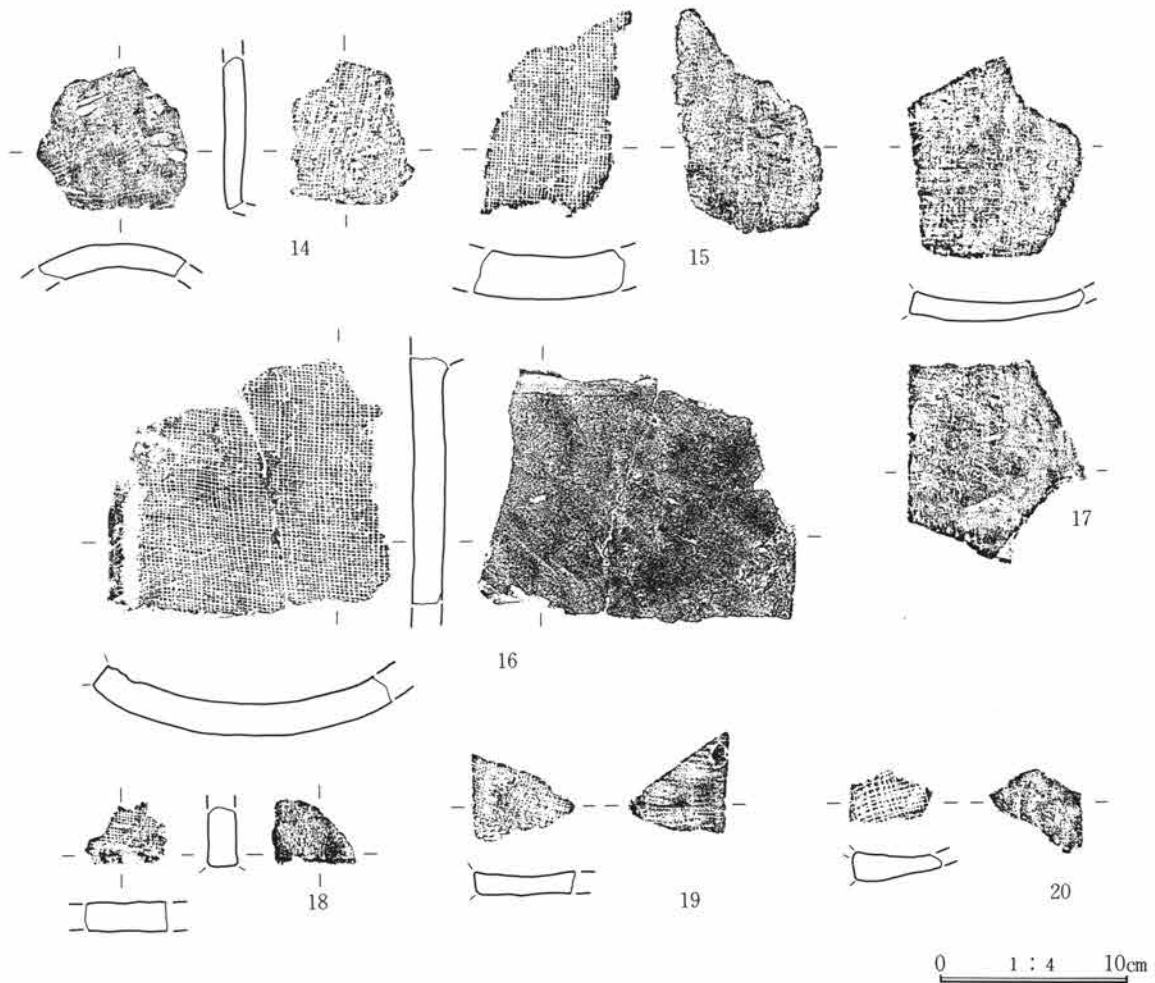
第72図 3号建物跡基壇上出土遺物



第73図 3号建物跡基壇上出土遺物



第74図 3号建物跡基壇下出土遺物



第75図 3号建物跡基壇下出土遺物

フイゴの羽口 フイゴの羽口は2点がある(第72図31・32)。31は、完形で、全長11.1~12.3cm、外径8.3cm、内径2.3cmである。酸化炎焼成で暗赤褐色を呈す。先端部は鉍滓が付着し、また前半分は還元化して灰色から灰黄色を呈す。32は、一部破損するが、全長12.3cm、外径7.3cm、内径2.1cmである。他は31と同様である。

鉄製品 鉄製品は、鉄釘・壺金・鋤先がある。個々の状況は観察表によられたい。

鉄釘は、総数43本があり、典型的なもの11本を図示した(第73図)。鉄釘の分類(分類については、2号建物跡の項を参照されたい。)では、No.33が素Ⅰ型、No.35・38・39が素Ⅱ型、No.36が素Ⅲ型、No.34・37が方頭Ⅰ型、No.41が方頭Ⅱ型、No.42・43が方頭Ⅲ型、No.48が円頭型である。全体の量比としては、頭部素型はⅠ類が1本、Ⅱ類が3本、Ⅲ類が2本、Ⅳ類が8本であり、頭部方型はⅠ類が2本、Ⅱ類が6本、Ⅲ類が6本、Ⅳ類が1本である。

No.47は、頭部が円環状で、先端を木部に打ち込んで使用される鉄製品である。3号建物跡の屋根の南東隅から出土し、すぐそばから風鐸かと推測される遺物も出土していることから、風鐸を下げたものではないかとみられる。

(4) 4号建物跡

位置 頂部区の中央部やや東よりにある。標高は、195 mを計り、遺跡内で最も標高の高い地点である。東側に4号テラス、北西側に3号建物跡がある。

立地 本建物跡は、東西28 m、高さ4 mの円丘状の小丘の上にある。この小丘は、本寺院跡の所在する尾根の最も高い部分の東西の裾部を人為的に削って造成されたものであり、頂部区の中で一段と高く盛り上がって目立つ所である。

遺構 上記の小円丘は、頂部に4号建物跡1棟があり、北側の裾部に「祭壇状遺構」と呼称した特殊な遺構がある。以下、4号建物跡については整地・基壇・基壇化粧・犬走り状の平坦面などの項目順で状況を記し、ついで、祭壇状遺構について記すこととする。

整地 4号建物跡は、基壇上に建つ建物であり、基壇下に整地がなされている。しかし、整地の規模はあまり大規模ではない。整地は、まず表層を除去し、ついで基壇の縁寄りに少量の盛土がなされ、基壇の奥側は削土がなされている。基壇の縁から1.5 m以上奥では、削土は暗褐色粘質土まで達している。

基壇 本建物跡は、北半部が調査区にかかったものであり、南半部はゴルフ場の造成によってすでに削除されている。基壇は、北西隅がやや不明瞭なため正確な数値は出しがたいが、東西10.8 m前後、南北6.0 m以上である。基壇の高さは、60 cm内外である。基壇の主軸方位は、N-13°-Eである。

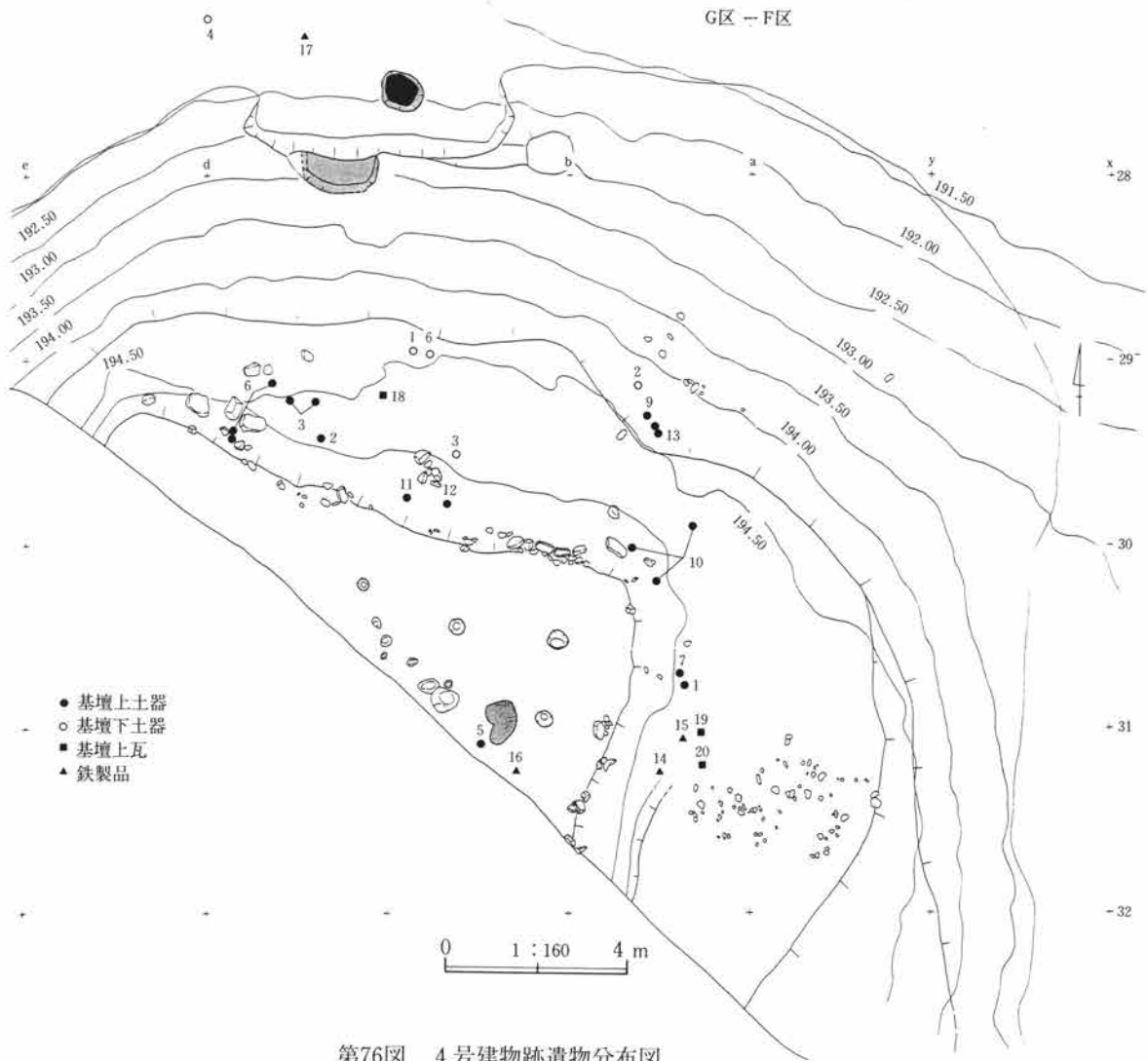
基壇の盛土は、大部分流失しているが、基壇の縁寄りでは10~20 cm、奥寄りでは0~10 cm程の盛土がなされたものとみられる。盛土の用土は、橙色の粒子や粘土塊を混入する暗黄褐色土である。いずれにしても、盛土はあまり顕著ではなく、版築の様相も見られない。すなわち、本基壇は、地山の削り出しによる造成を主としている。

基壇化粧 基壇化粧は一部が遺存し、また、周辺には基壇化粧に使われたとみられる石が散乱しており、基壇の周囲（厳密に言えば、基壇北面と東面）には化粧がなされていたとみられる。しかし、基壇の根元に遺存する石は全く無いことから、側面全面に化粧がなされていたとは考えられない。つまり、基壇化粧は基壇の上端部になされたものであって、現状ではその一部が残存しているものとみられる。特に、基壇北面の東寄りで状況の良い部分があり、その造り方を見ると、前面に長さ25~50 cmの横長の石を横に並べ、その奥に径10~15 cmの小ぶりの石を詰めている。石材は、結晶片岩・安山岩・チャートの三種を混用している。なお、階段にあたる施設はみられなかった。

基壇上の遺構と石 基壇の上面は、人為的な攪乱は受けてはいないが、全体に盛土が浅く流されている傾向があり、旧状を良好にとどめているとはいいがたい状況である。現状では、ピット4個、大小の石7個、焼けている部分1カ所、土坑状の落ち込み1カ所がある。

4個のピットは、基壇北側に3個、東側に2個が並ぶ形、つまり、基壇の縁から180 cmほど入った所にL字状に並ぶ。そのような配列状況からみると、4個のピットは柱穴とみることが妥当と思われる。遺構のあり方から見ると、1号ピットは形状・規模・覆土などがしっかりして柱穴とみて良いとおもわれるが、2号・4号ピットはやや不確実であり、1号ピットは柱穴としては小規模である。したがって、これらの柱穴は4号建物の主柱穴というよりは、補助的な柱穴になるものと推測される。規模は、1号ピットが、径42×41 cm・深さ35 cm、2号ピットが径33×33 cm・深さ20 cm、3号ピットが径28×26 cm・深さ7 cm、4号ピットが径37×36 cm・深さ16 cmである。

基壇上の石は、大小7個ある。いずれもどのような性格のものかは不明である。最も大きな石は、径55×55 cm・厚さ25 cmであって、これはほぼ水平に据えられていること、また、基壇の北端と東端からそれぞれ



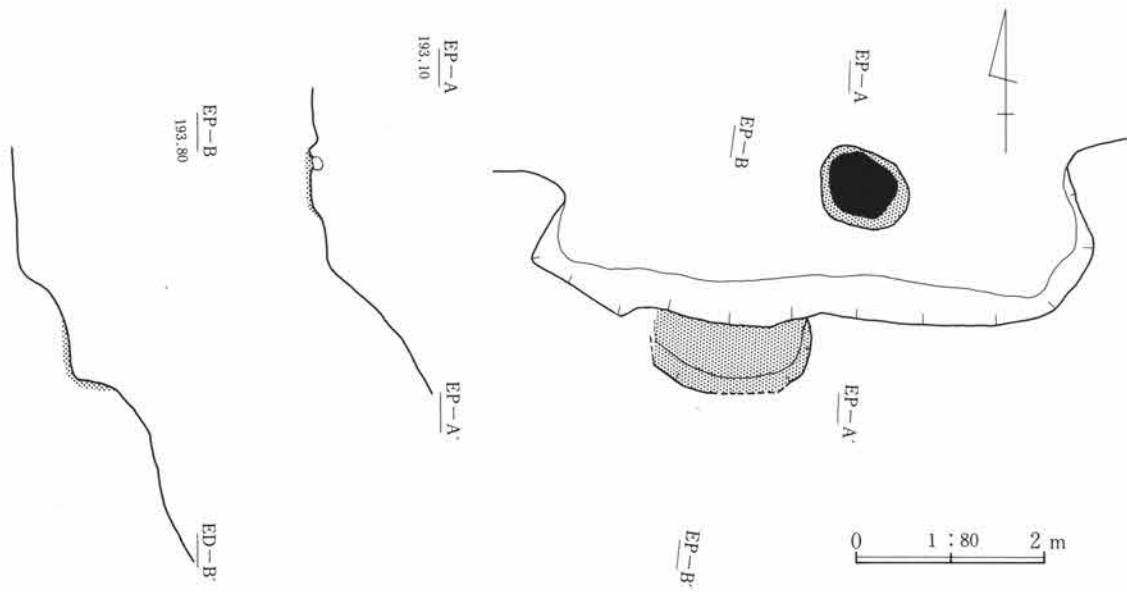
第76図 4号建物跡遺物分布図

3.6 mほどの位置にあって4個のピットとの位置関係もよいことから、礎石かと見られる。しかし、根石が無いこと、対応する他の石が確認できていないことから、断定するまでにはいたらない。

基壇上の焼土は、径100×75 cmほどの不整形の範囲が焼けているものであって、土坑や配石を伴っていない。焼けている理由は不明であるが、建物造営時のものと見られる。少なくとも、4号建物は全体としては焼失した様相は見られないので、建物焼失などの理由によるものではない。

土坑状の落ち込み 基壇上の大きな石や焼土の下面には、径2 m・深さ20~40 cmの規模の大きな不整形の落ち込み（1号土坑）1基と径40~50 cmのピット2基・径20 cmのピット1基がある。規模の大きな落ち込みは基壇の構築作業に伴うものと推測され、2基の径40~50 cmのピットは礎石状の石を据える作業にかかわるものかと推測される。

犬走り状の平坦面 基壇の裾部周辺には、西側を除いて東側から北側にかけて幅2 mほどの平坦面がめぐる。この平坦面は斜面を切土することによって造成されたものであるが、基壇北側では斜面側に盛土がなされたかとも見られる。この盛土はローム質土を主体とする黄褐色土であって、夾雑物は含まないが、土器を包含する。盛土の規模は、幅2~3 m、厚さは20 cm前後である。土質から見ると、自然堆積層の可能性も残るが、人為



第77図 4号建物跡祭壇状遺構

的に動かされたものとみるのが妥当と判断された。

祭壇状遺構 4号建物の乗る小丘の北側裾部にある特殊な遺構である。小丘の裾を4号建物の方に向かって切り込んで造られている。遺構は、2段に分かれており、下段は幅5.4m・奥行き1.25m、上段は幅1.2m・奥行き0.5mである。主軸方位はN-4°-Eであり、4号建物の方位に大差はない。

下段部の基底のレベルは周囲の地表面と同一であり、標高値は191.90mである。下段部の中央やや東寄りには土坑1基がある。平面形は隅丸方形気味であって、規模は径100×80cm・深さ10cmである。下底部はほぼ平坦である。土坑内部は、火が燃やされて下底部は赤変し、覆土には炭化物が含まれていた。

下段部の奥壁は60°の角度をなして立ち、その奥の一段高い所、中央よりやや西寄りに上段部がある。下段部と上段部のレベル差は50cmである。下段部の底面はほぼ水平であるが、前側はやや斜めに下る。奥壁はほぼ直である。上段部も火が燃やされており、底面と壁は赤変していた。

この祭壇状遺構の性格については、所在する位置から4号建物に伴うものと考えられる。機能的には、段状の特殊で整った遺構形態を呈しているため、単に廃材の焼却や暖房目的とは考えられない。4号建物に伴う、信仰や何らかの儀式として火が燃やされた施設であったのではないかと推測される。

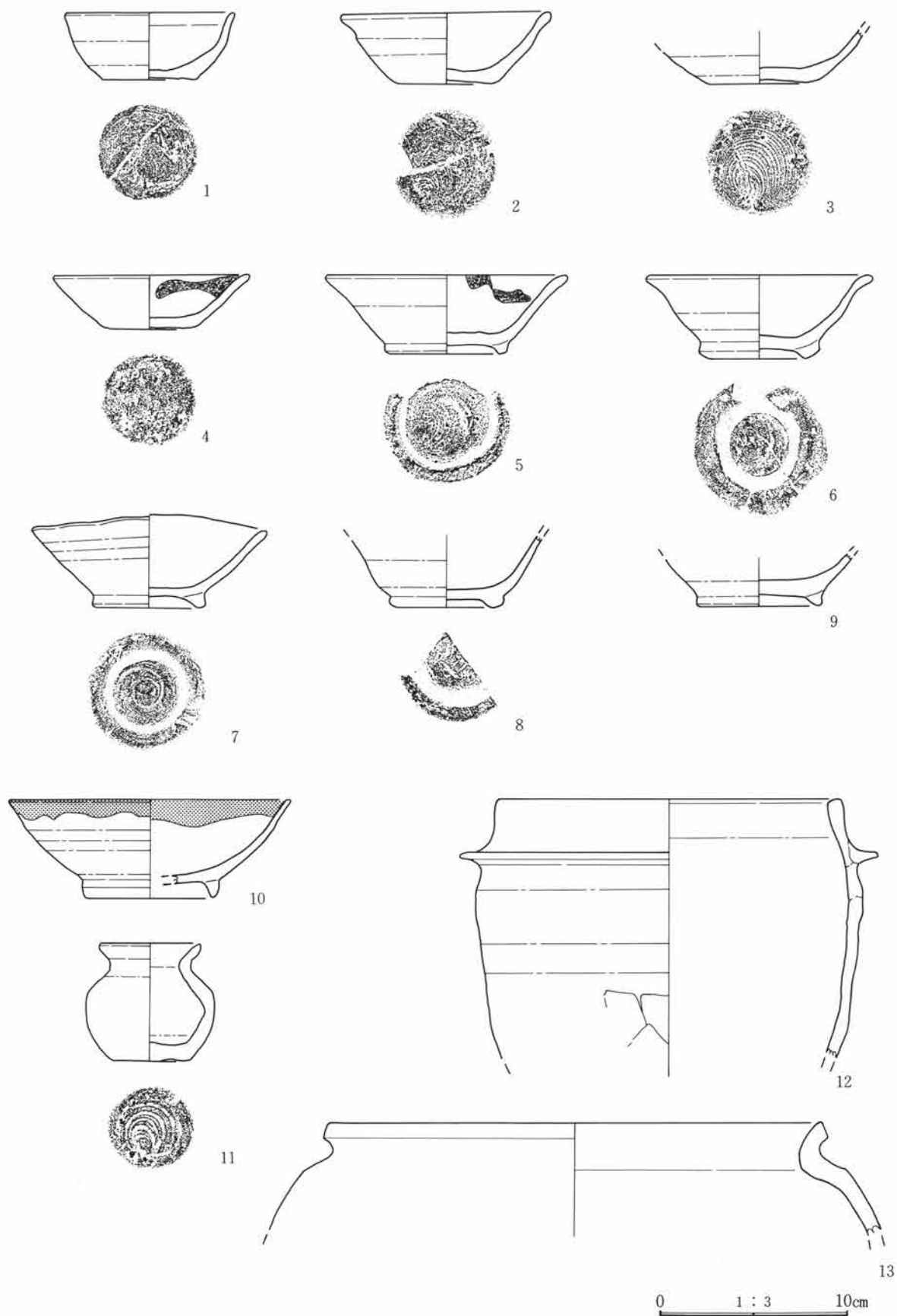
出土遺物 4号建物の出土遺物は、基壇上と基壇下の2つに区分した。「基壇上」としたものは、基壇上面および周辺の遺構存在時の地表面上より出土した遺物である。「基壇下」としたものは、主として犬走り状平坦面の盛土内やその下部から出土した遺物である。

(5) 5号建物跡

位置 西尾根区にある。西尾根の頂部からやや東に下った尾根上に立地する。標高は188.5mである。西側は9号溝を隔てて8号建物跡が隣接し、東方17mには2号建物跡がある。なお、本建物遺構は、基壇の北辺が調査区にかかったものであって、南半の大部分は調査区外に出る。

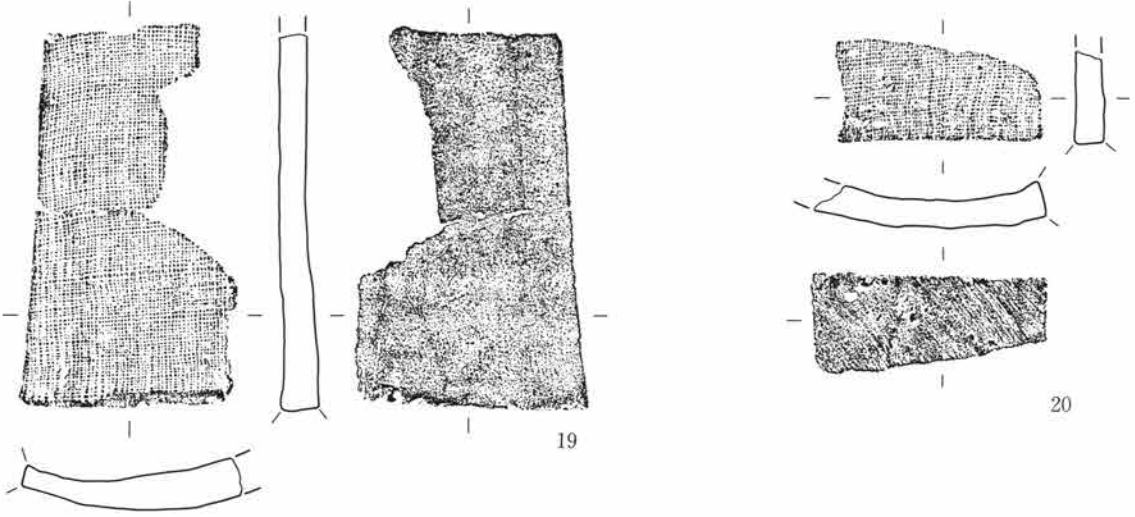
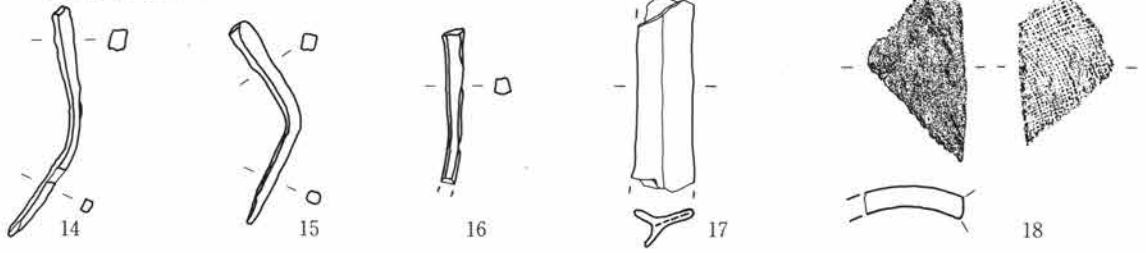
整地 本遺構の基壇は、東側および北側に下る斜面に造成されており、基壇の造成に先立って盛土および切土による整地がなされている。

第Ⅲ章 遺構と遺物

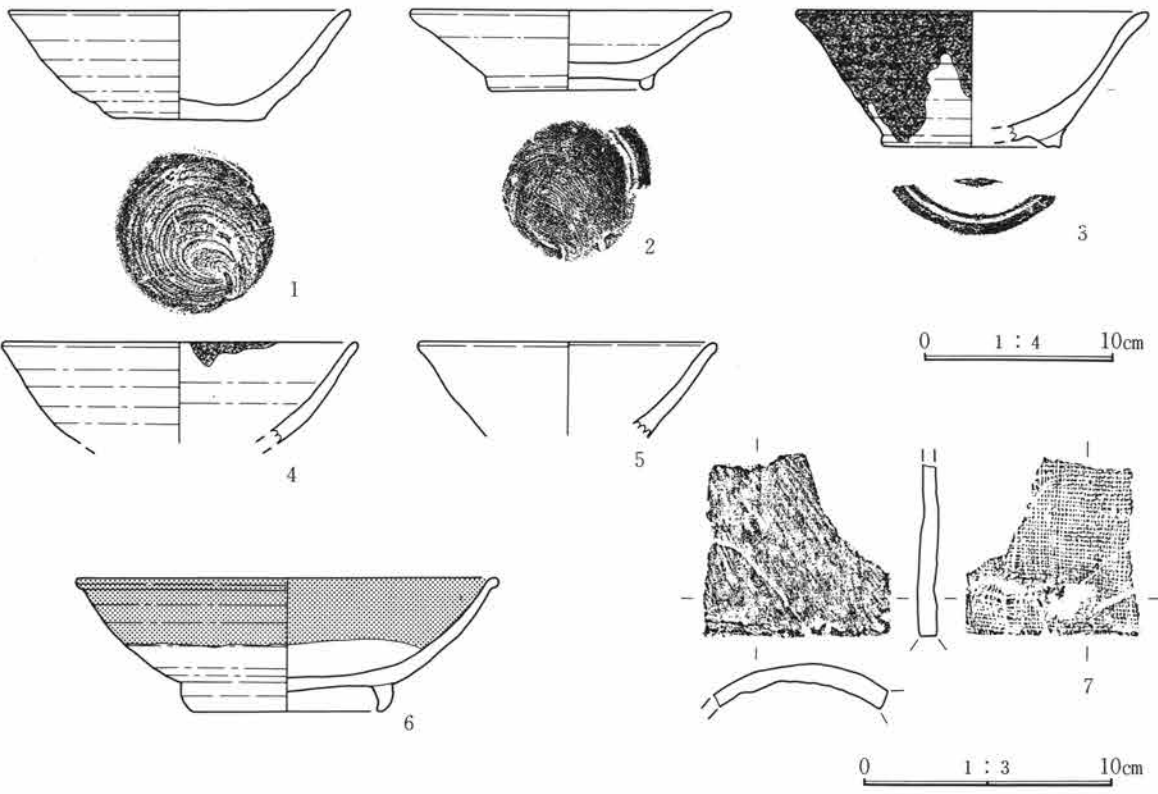


第78図 4号建物跡基壇上出土遺物

4号建物跡基壇上



4号建物跡基壇下



第79図 4号建物跡基壇上・基壇下出土遺物

第Ⅲ章 遺構と遺物

明確な盛土の整地は、基壇の東方にみられる（付図9）。盛土は基壇の東縁から東方にかけて、ローム漸移層上になされている。厚さは20～25 cm内外である。用土はややくすんだ黄褐色土である。本整地層の東限は確認されなかったが、2号建物跡まで達しているとみられる。なお、基壇北方には盛土による整地はなされなかったとみられる。

一方、基壇下では、切土によってしっかりした面を出しつつ、丘陵斜面を平坦化する整地がなされている（付図10）。切土は、当然のことながら、山側が深く、谷側が浅い。基壇の中央部では、切土の下面は暗茶褐色粘質土まで達している。

基壇 本建物跡の基壇は、北辺部のみが調査区にかかったものである。よって以下、基壇の記述は基壇北辺における観察所見である。基壇は、端部に崩壊があるため、本来の規模や高さは計測しがたい。一応、平面規模としては東西9.5 m、南北4.0 m以上であるが、西辺北側は張り出す傾向があるために東西の実長は9 mほどとなろう。また、基壇の高さを推定すると、基壇周辺の平坦面からは80～100 cmほどとみられる。

基壇の形状は、南北の奥行きが不明なために分からないが、東西に長い尾根上に位置することから、東西に長い長方形を呈したものと推定される。基壇の方位は、ほぼ真北にあっている。

基壇の上面は、数cmから60 cm程の石が散乱していたが、明確に礎石とみられるものはない。土器片は多量にあった。また、本建物跡は焼失していたため、基壇上面に焼土が堆積し、焼けた壁材も多量にあった。

基壇の盛土は、暗褐色粘質土を主体にしてローム質の黄褐色土などを混ぜて互層に積まれている。層の厚さは数cmから25 cmとまちまちである。積み方は必ずしも水平ではなく、地形に沿うように山側から谷側に順次押し出すような傾向がある。しまりは全体に固くしまっている

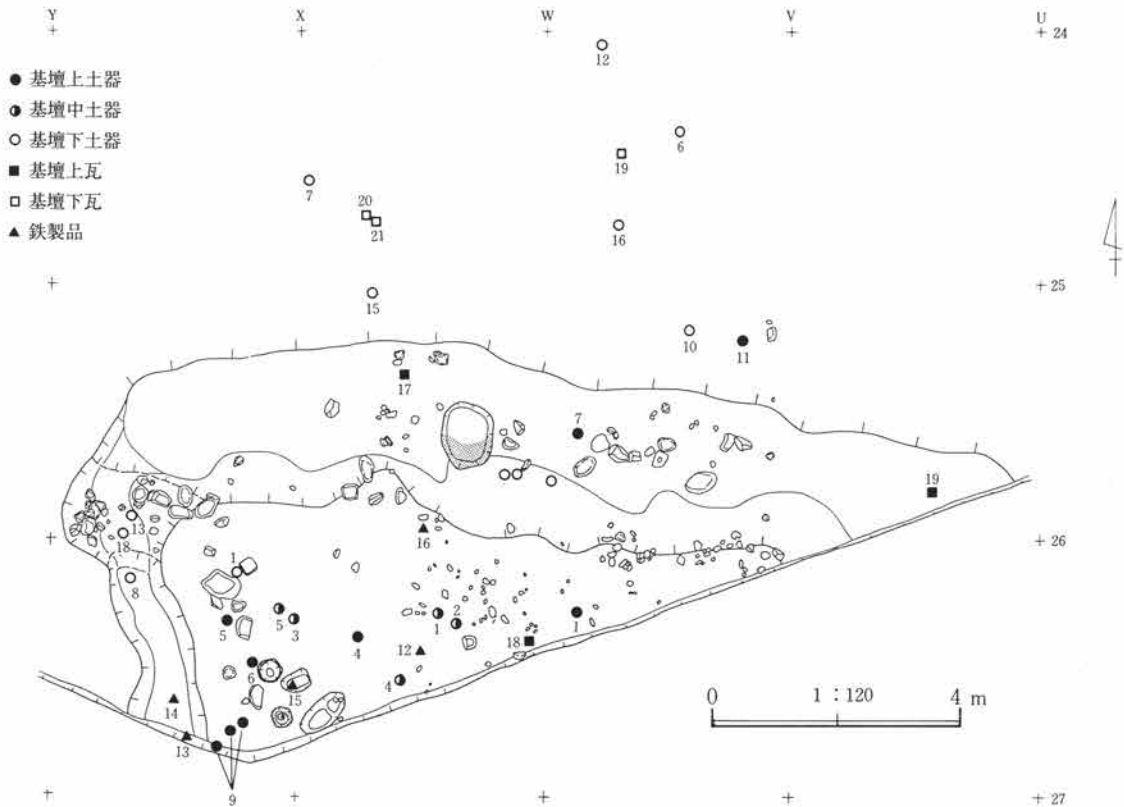
基壇化粧 基壇化粧については、基壇縁の遺存状況があまり良くないことから、詳細な状況は不明であるが、基壇の根本に遺存する化粧石は皆無であることから、基壇の側面全面が石によって化粧されていたとは考えられない。基壇の北辺東半部では、基壇上縁の化粧の裏込めの石とみられる径5～15ほどの小ぶりの石が20～30個ほど並んでいた。基壇北方に沿う平坦面付近にも化粧に使われていたとみられる径30～50 cmほどの石が20～30個ほど散乱しており、それらの大ぶりの石によって基壇上縁が化粧されていた可能性が考えられる。

通路状の平坦面 基壇の北方裾部には幅1.5～1.8 mの平坦面がある。この平坦面は5号建物への出入りや、傍らを行来する時の通路状の部分とみられ、西方は9号溝を境にして9号道路に接続している。また、東方は基壇の裾をめぐって尾根上に細い硬化面が続くが、調査範囲が限られているため不明確である。

この平坦面上は、硬化面という感じはないが、凹凸はなく、面としては整っている。平坦面上には、5号建物の基壇北辺中央部の位置に3号土坑があるが、この土坑については後述する。平坦面を覆う覆土は焼土・焼けた壁材・淡黄色の粘質土などが遺構面を直接覆い、その上に浅間B軽石が堆積する。焼土・壁材・粘質土は建物から落下したものであり、それを天仁元年（1108年）に降下した軽石が覆う形である。

この平坦面の基盤土層は、暗褐色粘質土やローム質土の地山の上に、ロームブロック・焼土・炭化物・土器などを混入する層があり、後者の土層の上面が平坦面となっている。この土層が自然堆積か、人為的なものかの判断は難しいが、後者の可能性が高いものと推測される。また、平坦面の上面は、基壇盛土下の整地面に連続しており、この平坦面が基壇築成に伴う整地と同時になされたことが考えられる。

基壇上の遺構 5号建物跡は、基壇上と基壇下のそれぞれに鍛冶炉と土坑があり、また、基壇北側の平坦面上に土坑がある。基壇上には1号炉・2号炉の2基の鍛冶炉と1号土坑・2号土坑の2基の土坑、基壇下には3号炉と4号土坑・5号土坑の2基の土坑、基壇北側の平坦面上には3号土坑がある。個々の規模は、下記のようなのである（単位は、cmである）。



第80図 5号建物跡遺物分布図

基壇上遺構計測図

	掘方		炉床	
	径	深さ	径	深さ
1号炉	40×36	18	32×31	7
2号炉	32×32	11	22×18	4
3号炉	50×43	11	36×33	2

	平面形	平面規模	深さ
1号土坑	長円形	×32	7
2号土坑	長円形	85×40	7
3号土坑	長円形	105×80	10
4号土坑	円形	80×70	13
5号土坑	不整円形	×60	0

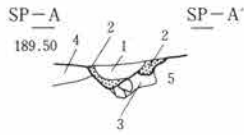
黒熊中西遺跡では、鍛冶炉は、おおむね土坑を伴い、かつ土坑内には鉄滓が混入する。5号建物においても、1号土坑と2号土坑からは鉄滓が詰まるような形で出土し、位置的な関係からみても、1号炉と1号土坑、2号炉と2号土坑がそれぞれ付帯する関係にあるとみられた。4号土坑・5号土坑は、鍛冶にかかわるものか、あるいは整地や基壇の構築にかかわるものかのいずれかとみられる。

3号土坑は、基壇北方の平坦面の中央部にある。南側つまり5号建物側が焼けており、何らかの目的で火が燃やされたものとみられる。5号建物の建造に伴うものとみられるが、詳細は不明瞭である。

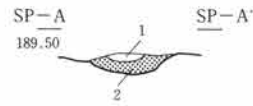
9号溝5号建物と8号建物の間には、幅1m、深さ10cm～15cmの南北方向の浅い溝がある。8号建物方向から下る尾根を断ち切る形であって、雨水が5号建物上に乗ることを防ぐための排水の機能を有するものとみられる。この溝が、5号建物北側の通路状の平坦面から9号道路へつながる部分と交差する所では、溝内に石

第三章 遺構と遺物

基壇上



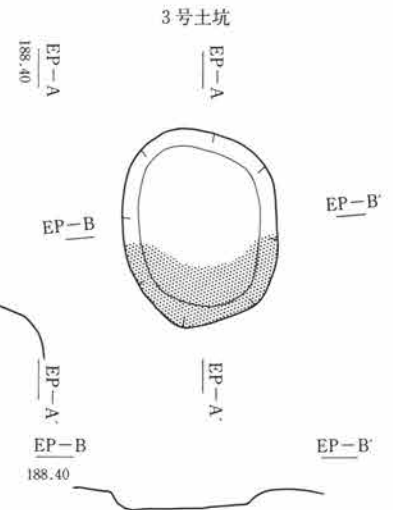
- 1 粉状の炭
- 2 焼土層 赤く焼けている。
- 3 くすんだ黄褐色土
- 4 暗褐色粘質土 [基壇盛土]
- 5 黄褐色土 漸移ローム的な土である。



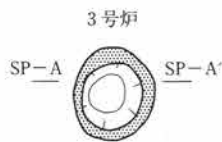
- 1 暗褐色土 青色の粘質土を混入する。
下面は鉄サビが堆積する。
- 2 暗赤褐色土 褐色土が弱く焼けている。



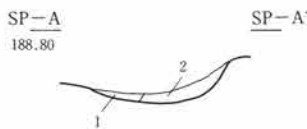
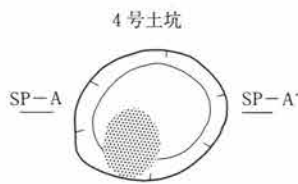
- 1 くすんだ黄褐色土 炭化物と焼土の粒土を混入し、まばらに鉄滓の混入もみられる。



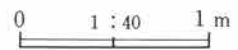
基壇下



- 1 粉状の炭化物
 - 2 焼土層
- ※鉄滓はみられず、さびた鉄片の散布もないことから、鍛冶炉とはみられない。



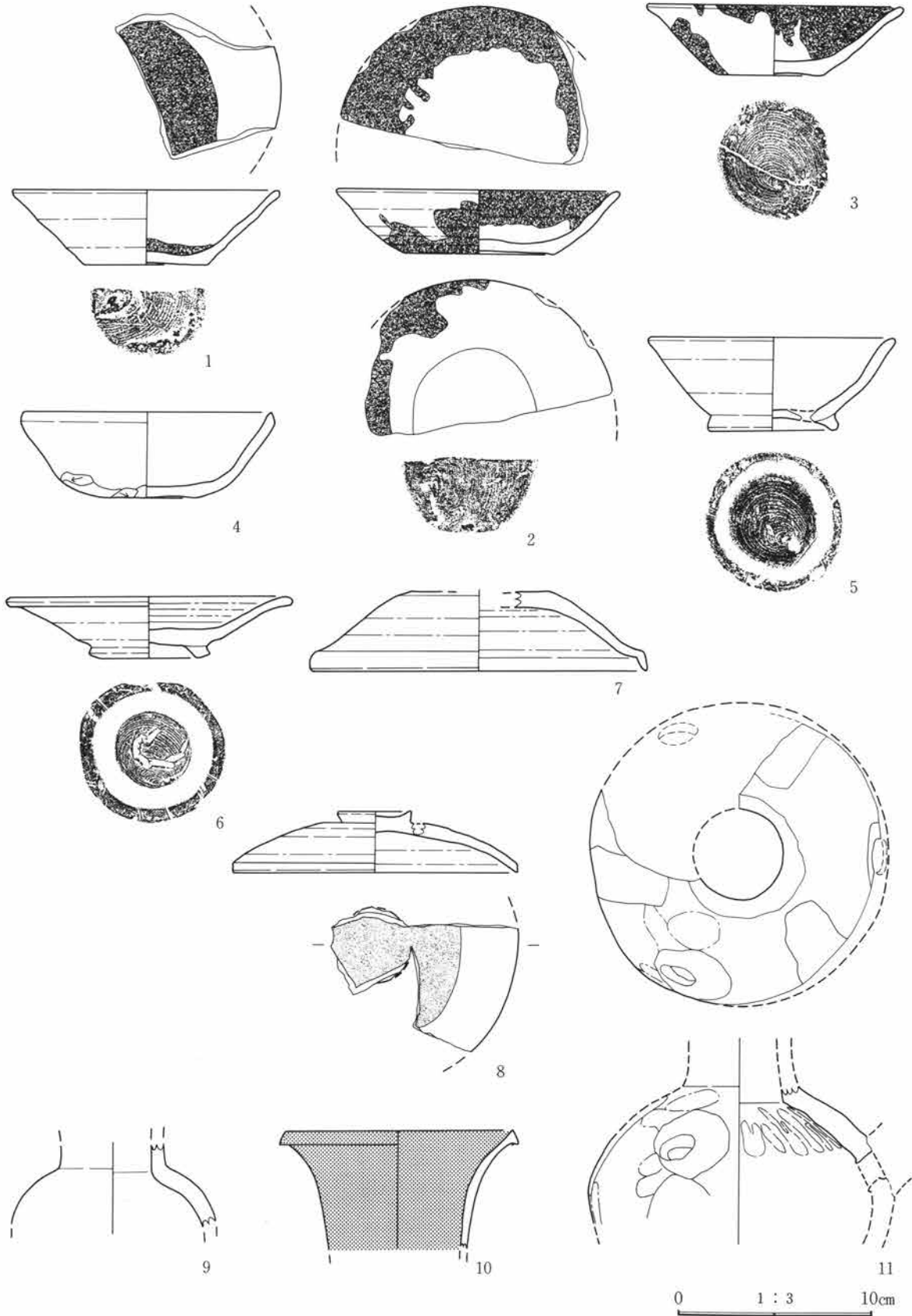
- 1 暗黄褐色土
- 2 炭化物を主体とし、黄褐色土が少量混入する。



第81図 5号建物跡鍛冶炉と土坑

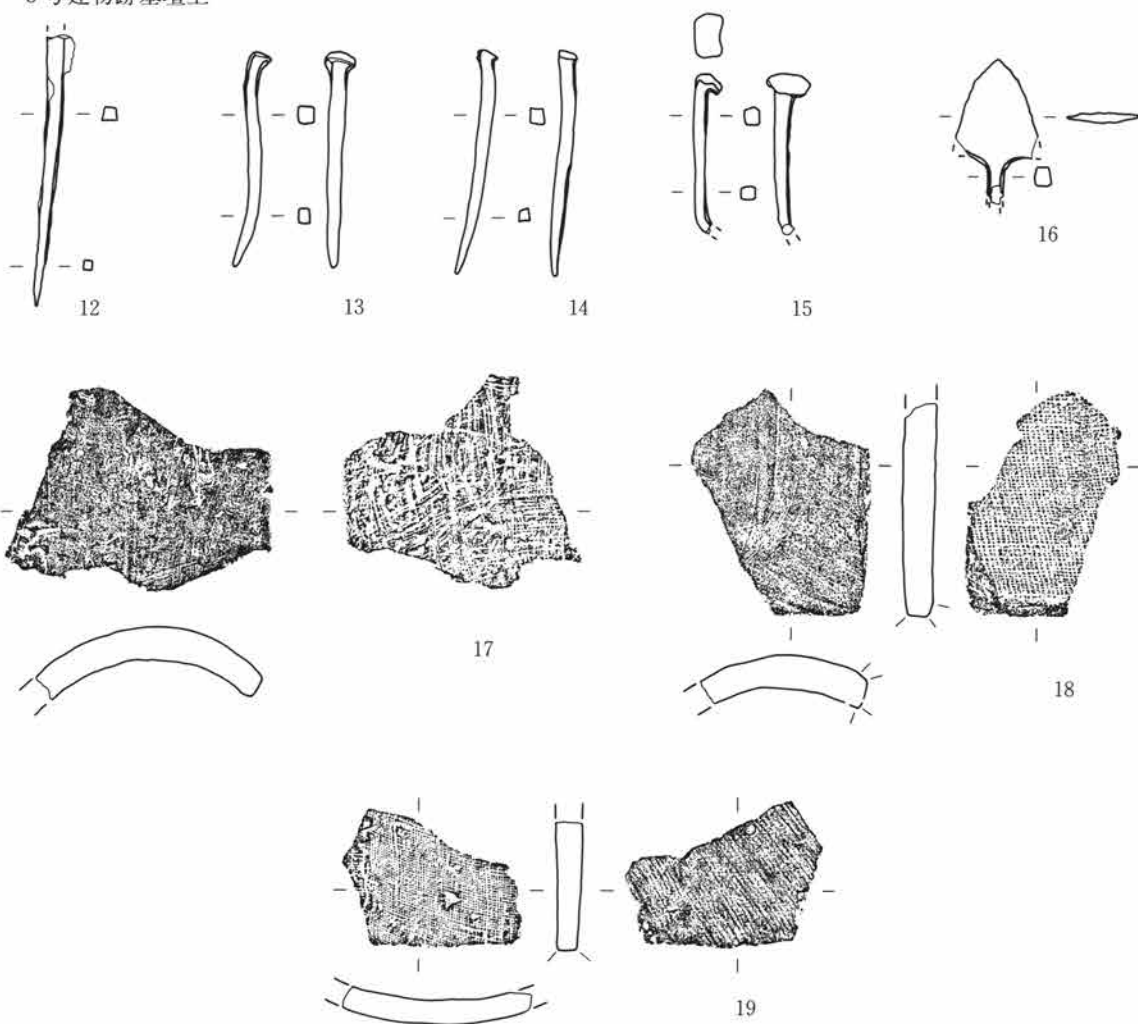
が積まれて下底分を暗渠通水し、その上が1.3 mほどの幅で通れるようにしてあった。

出土遺物 5号建物の出土遺物は、基壇上・基壇中・基壇下・周辺グリッドの4つに区分して呈示した。「基壇上」とした遺物は、基壇上面および周囲の整地面上の遺物である。「基壇中」とした遺物は、基壇の盛土中および基壇構築前の整地面上の出土遺物である。「基壇下」とした遺物は、基壇盛土下の堆積土層中の出土遺物である。「周辺グリッド」としたものは、5号建物の周囲から出土したものである。

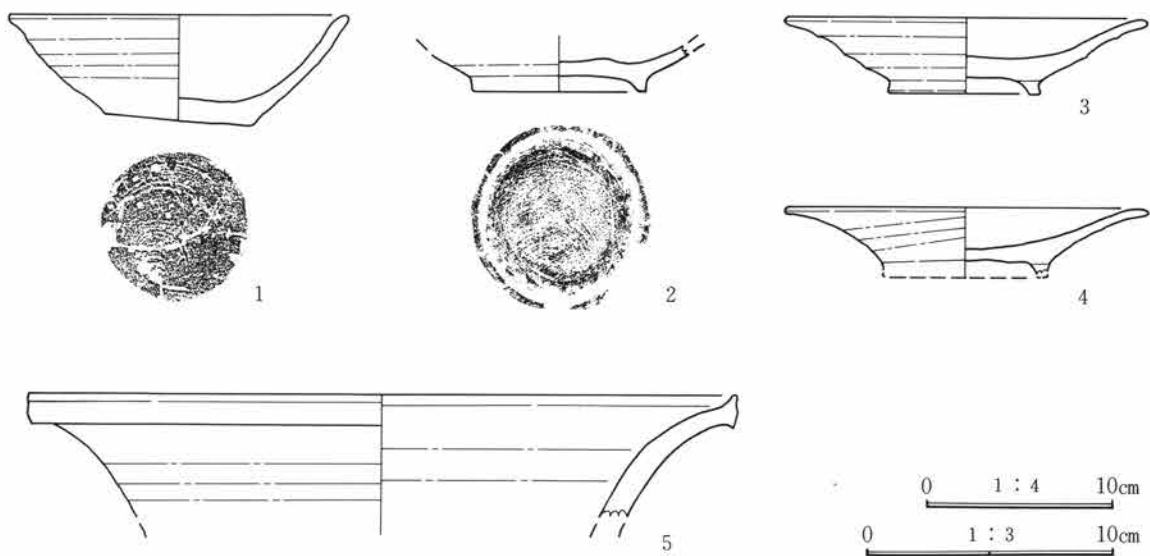


第82図 5号建物跡基壇上出土遺物

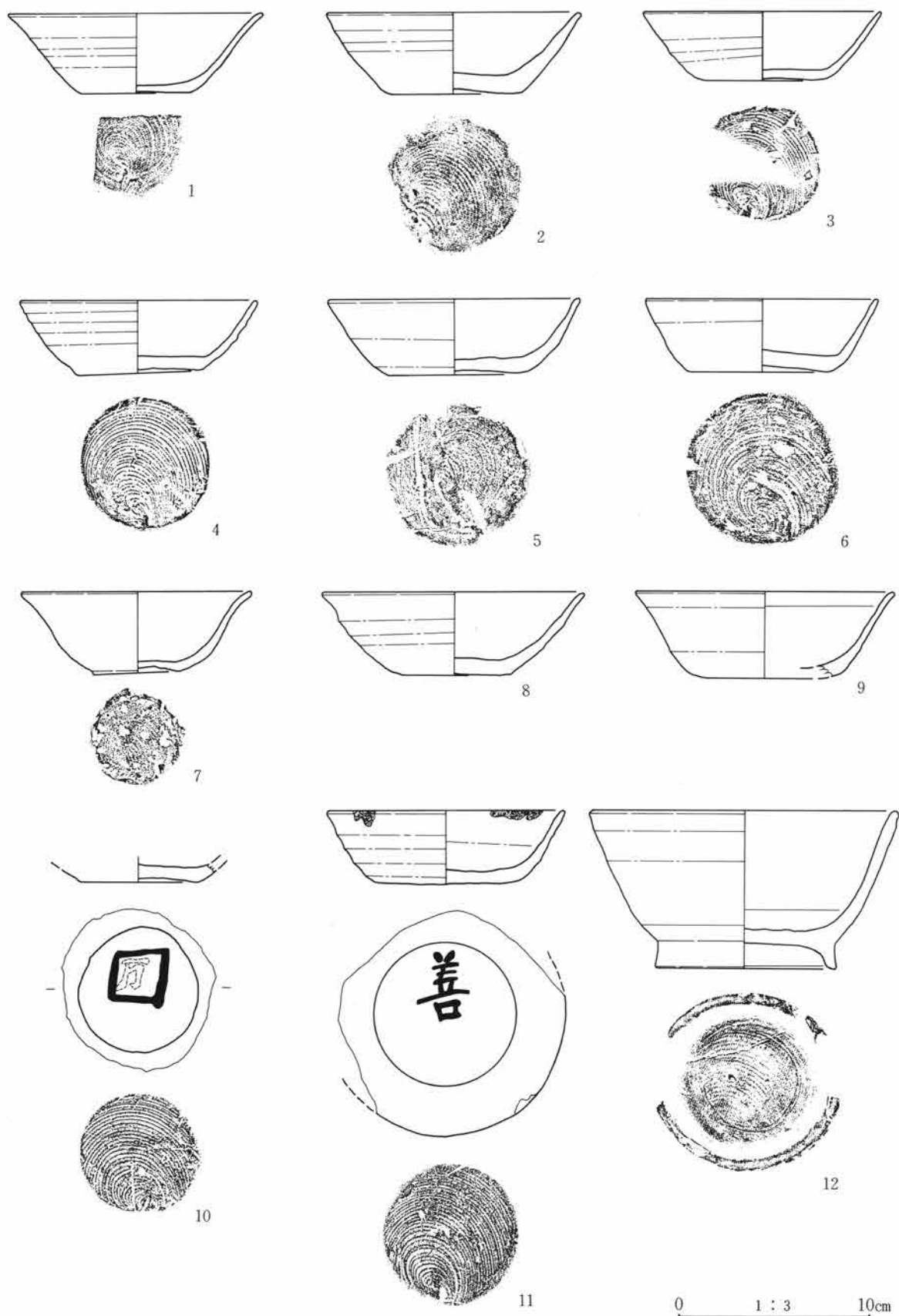
5号建物跡基壇上



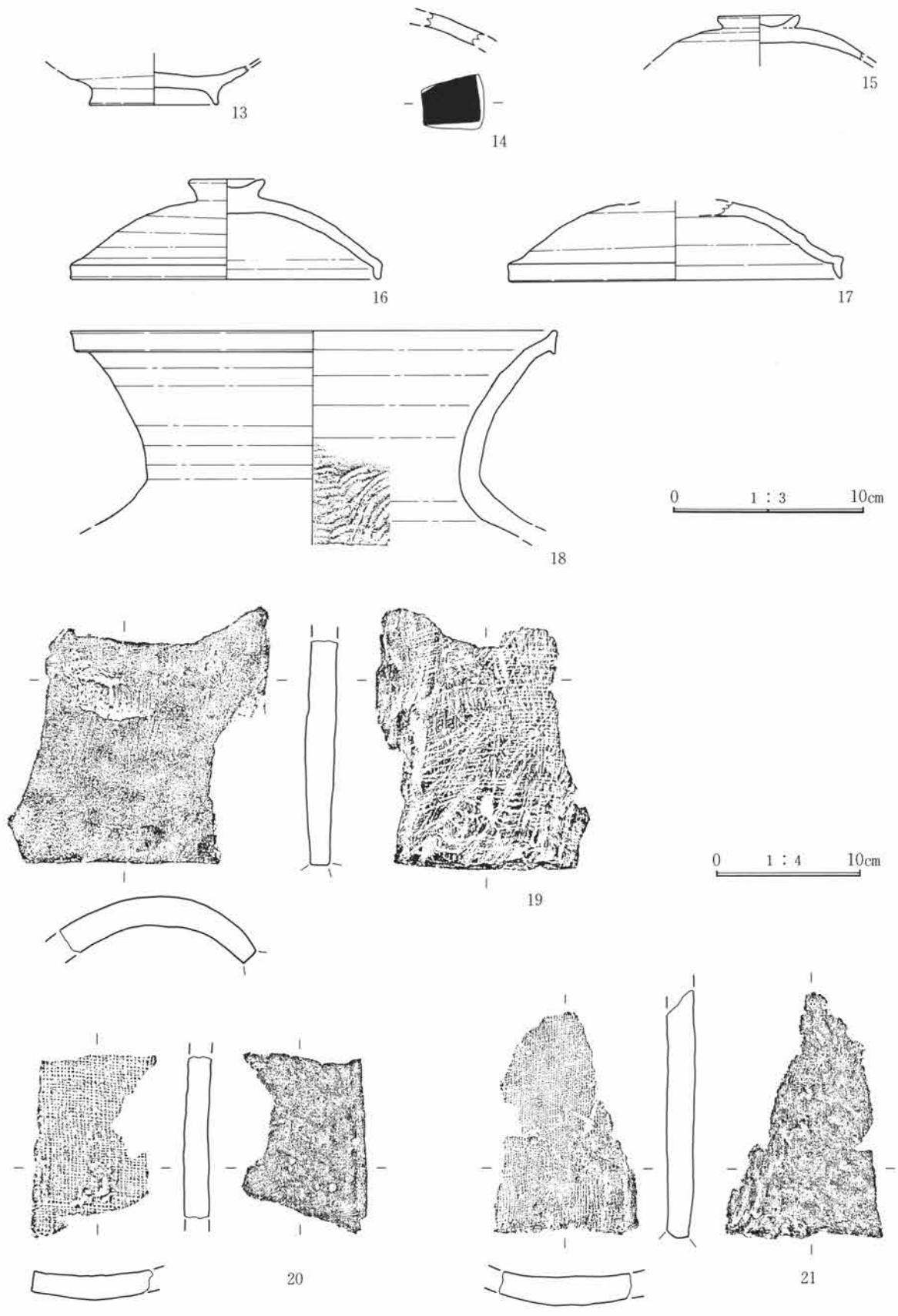
5号建物跡基壇中



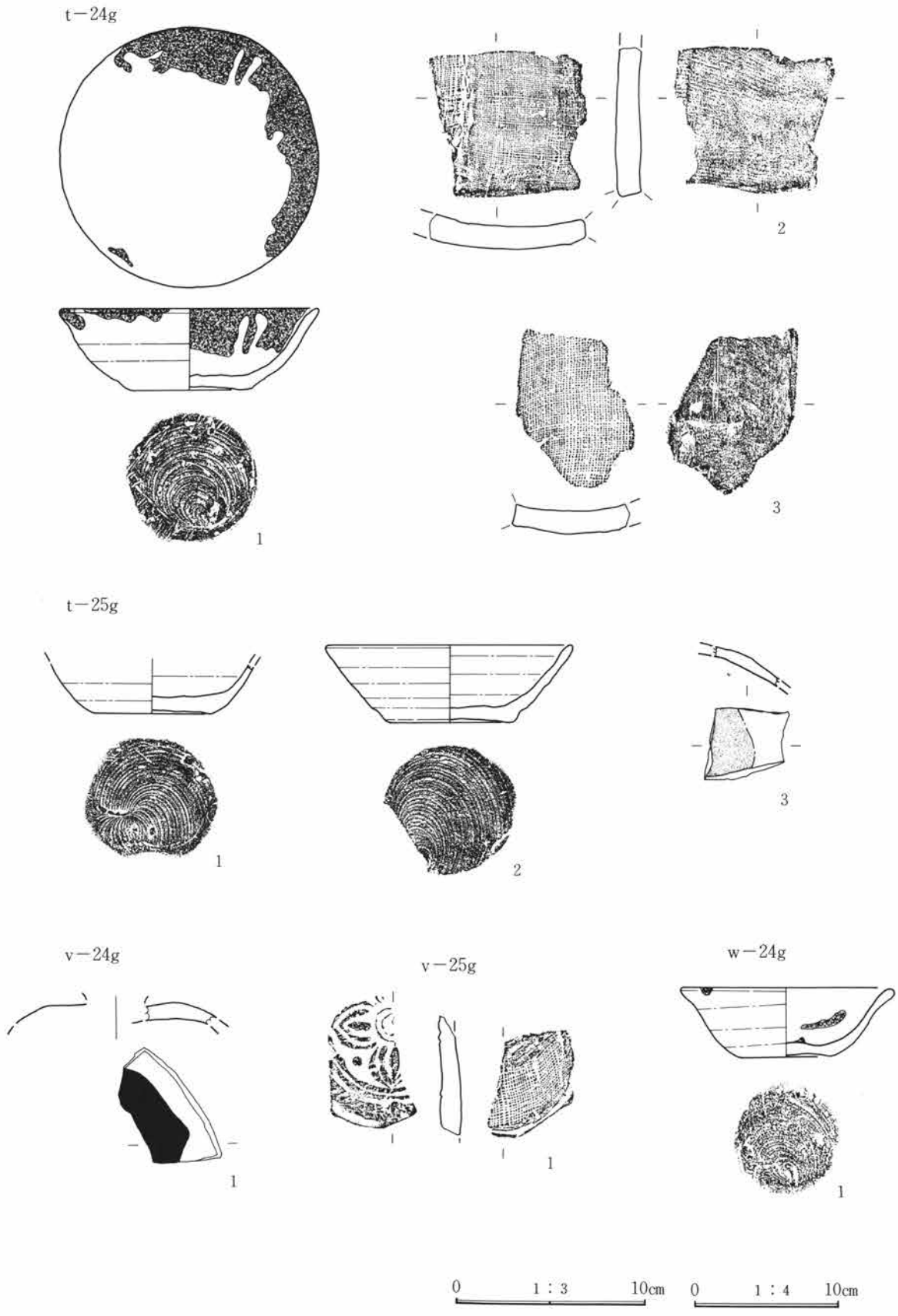
第83図 5号建物跡基壇上・基壇中出土遺物



第84図 5号建物跡基壇下出土遺物

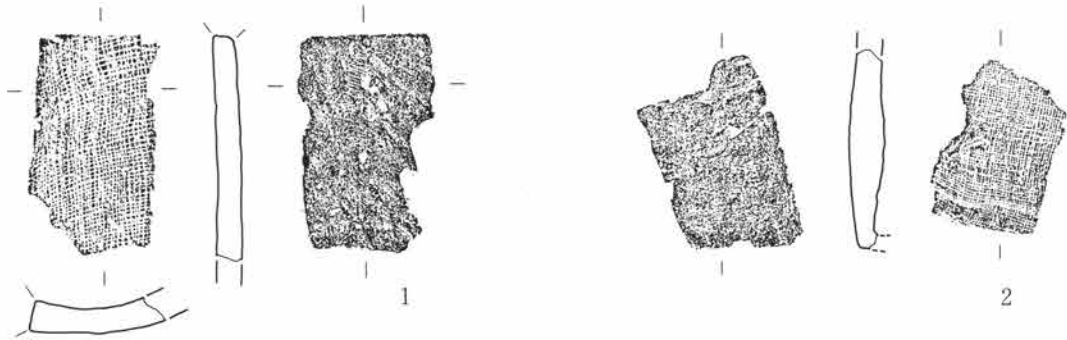


第85図 5号建物跡基壇下出土遺物

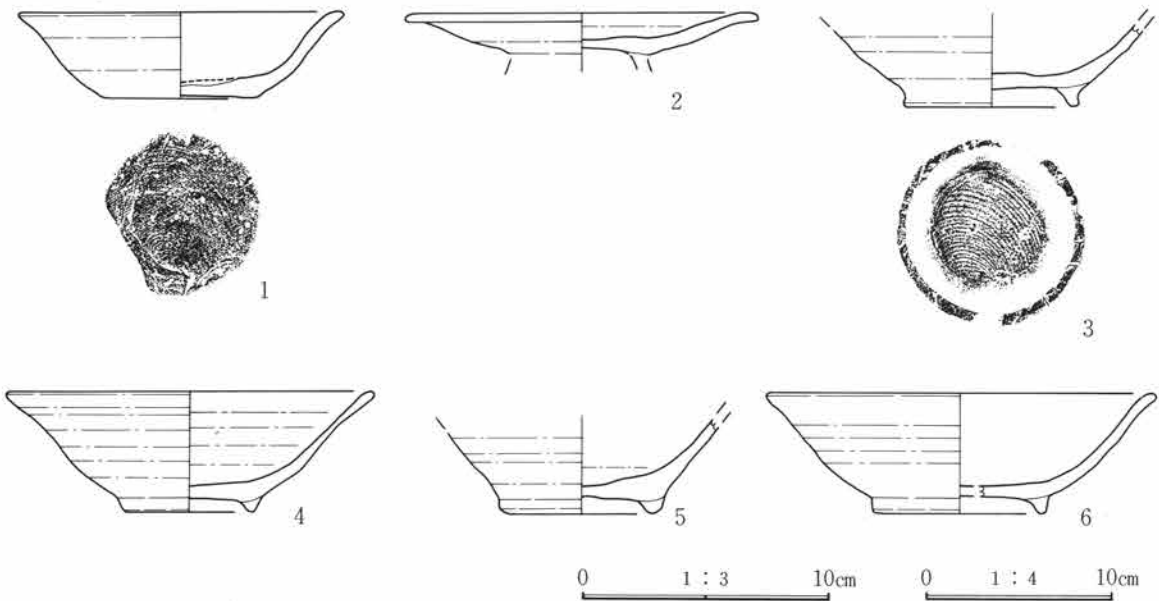


第86図 5号建物跡周辺グリッド出土遺物

w-25g



y-25g



第87図 5号建物跡周辺グリッド出土遺物

(6) 7号建物跡

A 建物遺構

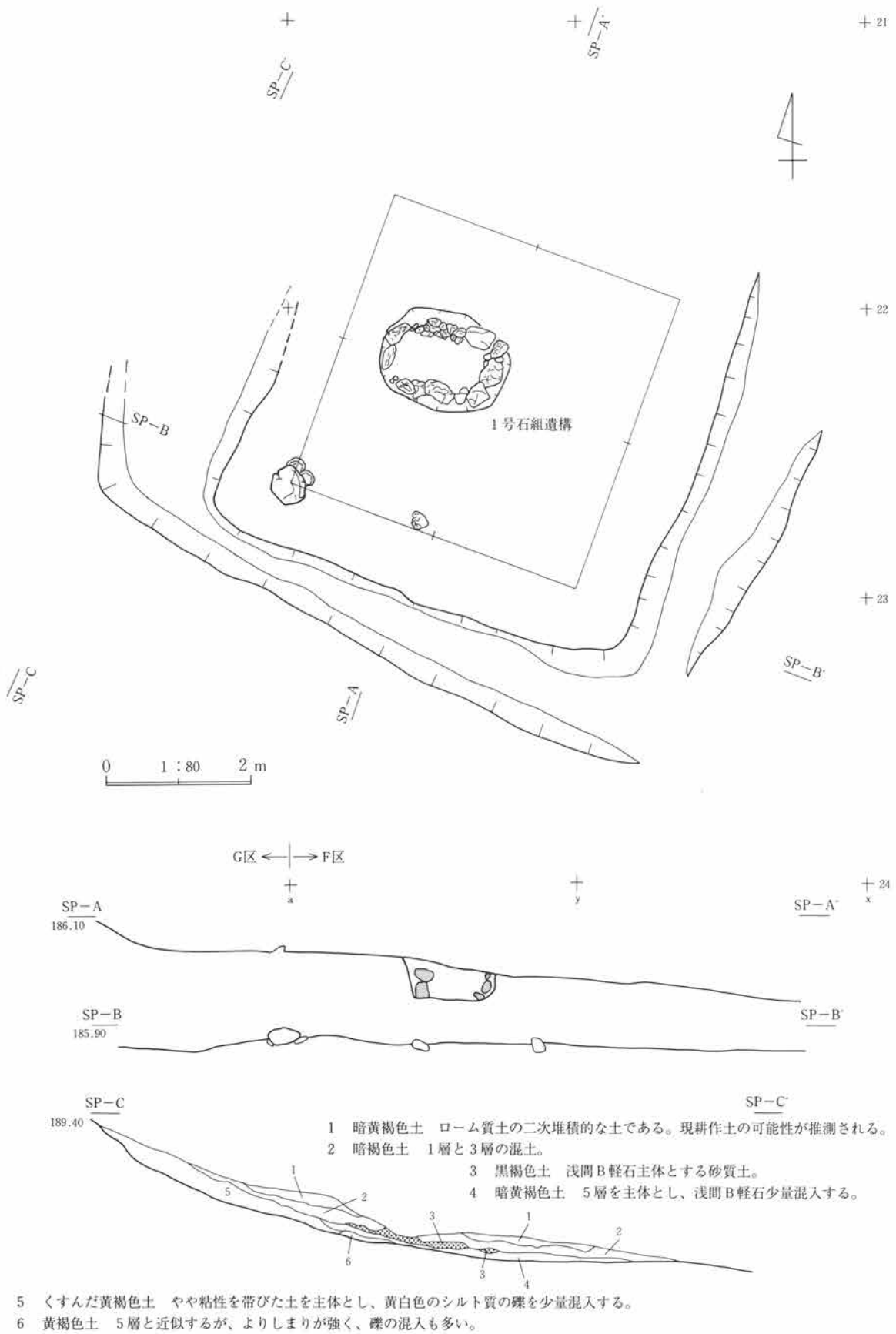
位置 1号テラスの整地面上的の遺構の一つであり、同テラスの西寄りに位置する。標高は185.5 mである。

遺構 本遺構は基壇上に建つ礎石建物である。遺構は、北半部がほとんど遺存せず、南半部も基壇の下部や礎石1個が残るのみであって、全体に遺存状況はよくない。

基壇 基壇は、東西長が6.0 m (20尺)である。南北長は北辺が遺存しないために規模は不明確である。が、テラスの北辺崖端までのスペースからみて、東西長と同規模が妥当と考えられる。つまり基壇は方6 m (20尺)と推測される。基壇の周囲には基壇化粧はみられない。

基壇は、現状では地山削り出しの整形面が露出する。この面は北に緩く下っている。遺存する礎石の上面高からみて、本来はその上に南側で5~10 cm、北側で15~20 cmほどの盛土がなされていたとみられる。つまり総高15 cm内外の低い基壇と推測される。

周溝 基壇の西辺南半から南辺と東辺にかけて浅く幅広の溝がめぐる。溝の幅は、西辺が2 m、南辺が0.6~1.2 m、東辺が1.3~1.6 mであり、溝の覆土には浅間B軽石を多量に含む黒褐色土が堆積する。本溝は、雨落



第88図 7号建物跡

第三章 遺構と遺物

ち水や南側の丘陵斜面から流入する水を排水するためのものとみられる。

礎石 基壇上には南西隅に礎石1個が遺存し、またその東の2カ所の柱想定位置には根石状の石がそれぞれ1個ずつある。礎石は、未加工の河原石であって、たて51cm・よこ45cm・厚さ24cmである。石材は、灰青色の安山岩である。礎石の下には径15~30cmの河原石の根石4個が配されている。

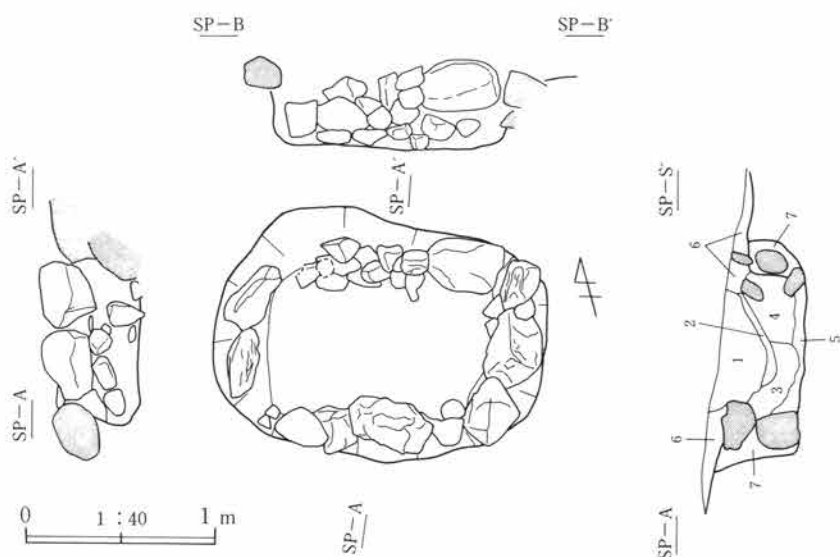
柱間 本建物遺構の柱間については、基壇の規模と礎石位置あるいは根石とみられる石との関係から、方2間とみられる。柱間寸法は2.1m(7尺)等間であって、全長4.2m(14尺)である。軒の出は90cm(3尺)ほどとみられる。

出土遺物 基壇上および周辺からは遺物が散出したが、量的には多くはない。本遺構の南側の丘陵斜面裾部には上方から落下した遺物が多数散乱しており、土器や丸瓦・平瓦のほかは軒瓦や鉄釘が10本ほど束になって癒着したのもあった。本遺構の遺物としたものにもそのように流れ落ちたものも多々あるとみられる。須恵器は破片が10点ほど、瓦は破片20点ほどがあり、その中から数点を図化した。瓦は屋根を葺くほどの量は少ない。また、3の鉄製品は、鉄製品を加工する際に用いる敲き工具(槌)とみられるもので、1号石組遺構の脇から出土した。長さ9.2cm。断面形は正方形であるが、隅が面取り状になっている。幅は中央部で4cmである。広端面が使用されており、やや外湾する。重量は1,042.3gである。

B 1号石組遺構

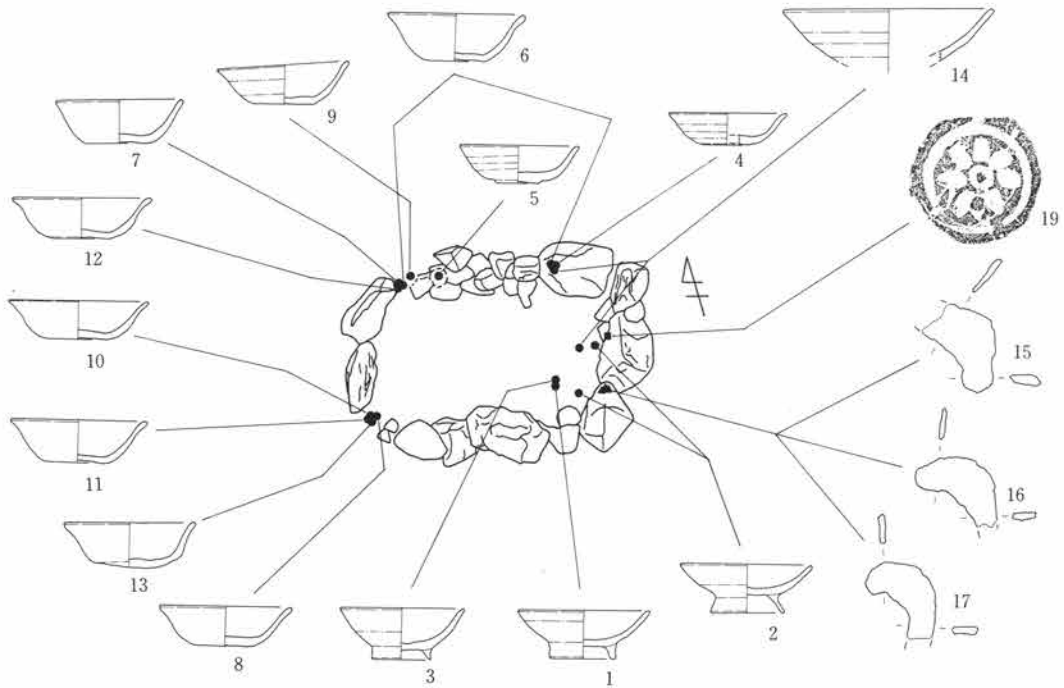
石組遺構 7号建物跡の中央部やや西寄りにある。平面が長方形で、壁に石が組まれている遺構である。掘方は、東西178cm、南北140cm、深さ38~60cmである。下底面は水平である。壁面には、10~40cmの大小の河原石や割石が2~4段ほど積まれている。積み方はいわゆる乱石積みである。上縁は大ぶりの石を主にして上面を整えている。石組みの内法は、東西115cm、南北52cmである。下底面は土のまままで平坦である。

覆土 本遺構の覆土は、炭化物や焼土で充填している。つまり、下底面と中層との2層の炭化物堆積層があり、それぞれの上に焼けた壁材や焼土・粘土などからなる厚い層がある。このことから、二度にわたり、壁材を含む廃材などを焼却したのではないかと推測される。が、壁石が焼けた痕跡はほとんどないので、石組遺構内での燃焼は単発的なものとみられる。



第89図 7号建物跡1号石組遺構

- 1 焼けた壁材と焼土粒を多量に混入する。主体土は灰含みの褐色土。
- 2 黒色の灰と炭の層。
- ※1層と2層は1度弱く火を燃やしていると思われる。
- 3 黄褐色土 やや粘性があり、しまりもある。混入物はみられない。
- 4 褐色土 焼けた壁材や焼土をやや多く混入する。
- 5 黒色の炭化物層
- 6 褐色土 白色軽石や小さな礫を混入し、焼土粒も微少みられる。
- 7 やや暗い褐色土 混土であり、ソフトである。[裏ごめ土]



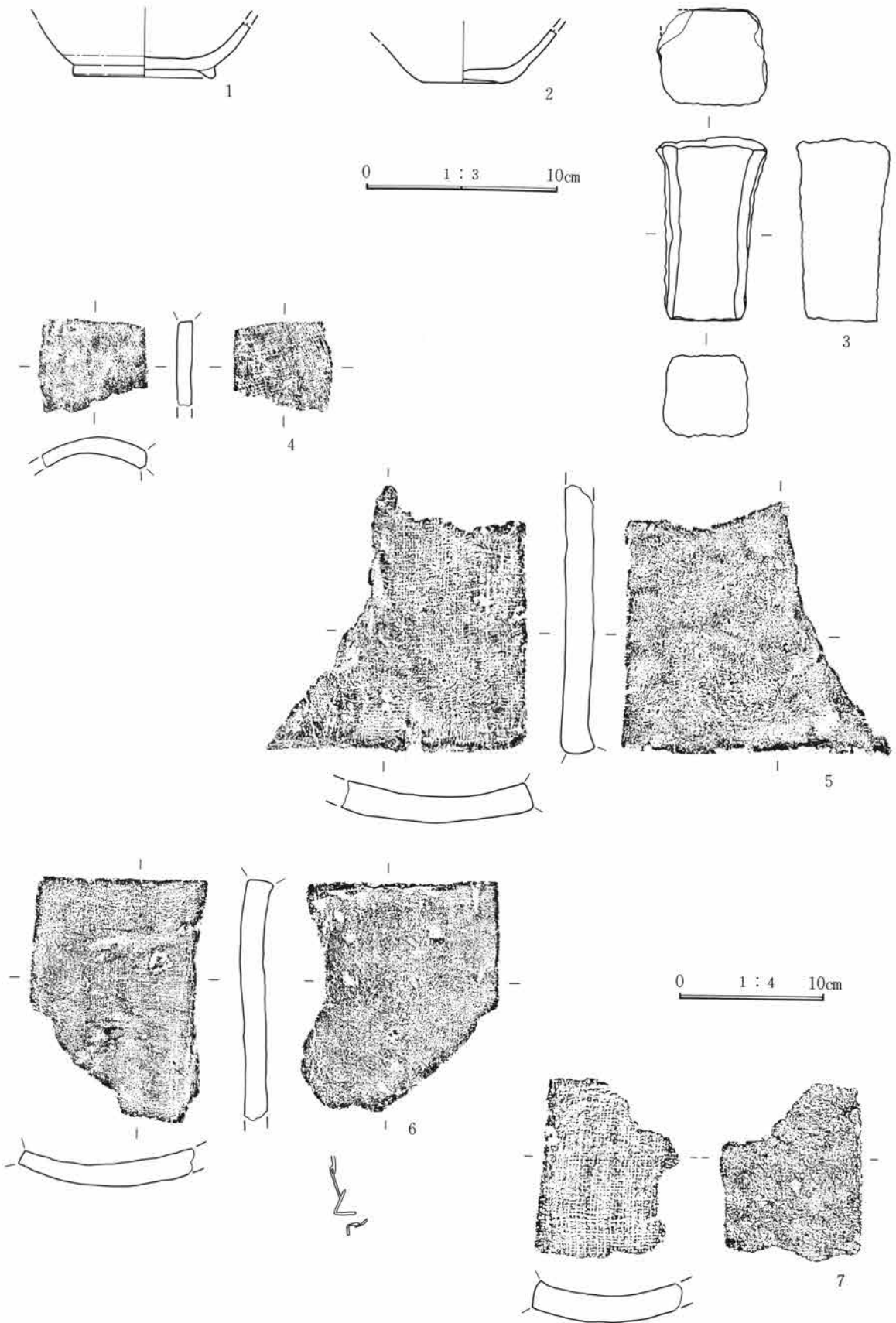
第90図 7号建物跡1号石組遺構遺物分布状況

出土遺物 本遺構の遺物の出土状態はやや特異な在り方を示している。つまり、A類 石組遺構の上縁部の四隅にあるもの、B類 覆土内にあるもの、C類 壁石に組み込まれたもの、の三者に区別される。以下、遺物番号は第90図・第92図に対応する。A類は4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14が該当し、1・2・3も覆土上層からの出土であって、A類に属するものと考えられる。B類は18の鉄釘がある。C類は、15・16・17の3点の鉄製品と19の軒丸瓦がある。前者は鋤先かともみられ、後者は陰刻の七弁蓮華文であって、上野国分寺跡に同范瓦がある（高井佳弘氏の分類では「D002」である。『史跡上野国分寺跡』群馬県教育委員会 1988）。ただし、この軒丸瓦の文様は、2号建物跡や3号建物跡など、本遺跡の瓦の中には見られないものであり、石組の中に組み込まれた理由は推し量りがたい。

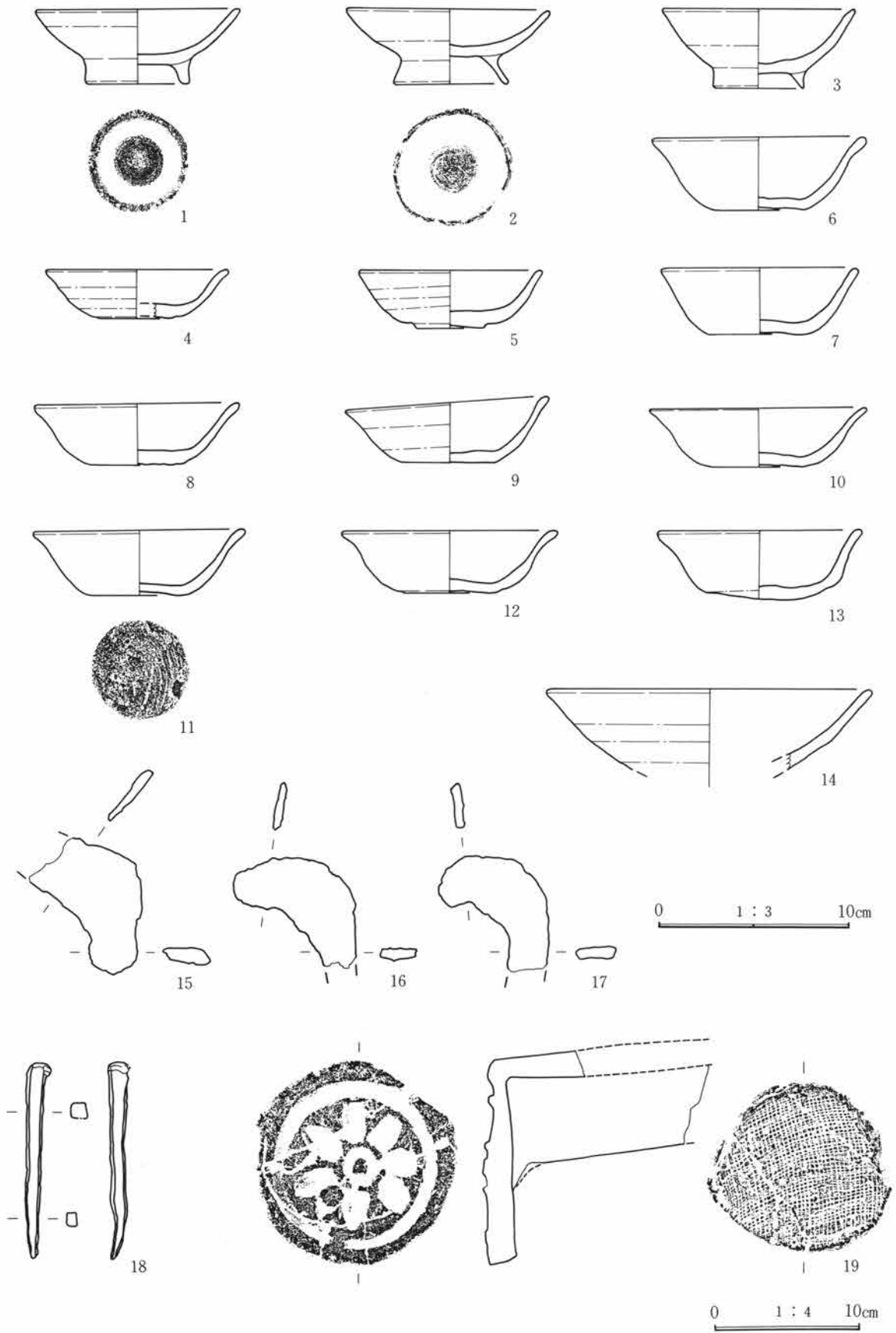
留意されるのはA類の土器であって、石組遺構の上縁の四隅にそれぞれ杯や碗を3から4個ずつ配置したとみられ、何らかの意図のもとになされたものと考えられる。

性格 7号建物跡と1号石組遺構は、同時に存在したかどうか、あるいは関係ある遺構かどうか、ということが基本的な問題としてある。これについては、二つの遺構が1号テラスの整地面上にあり、その整地は10世紀前半から11世紀前半の年代が考えられ、7号建物跡と1号石組遺構の年代はかなり限定されたものである。位置的にも、共存していたものとして不自然ではない。

1号石組遺構は、土器のありかたに儀式的な行為の形跡が推測され、7号建物はそのような行為を行うための施設であったのではないかと推測される。



第91図 7号建物跡出土遺物



第92図 7号建物跡1号石組遺構出土遺物

(7) 8号建物跡

位置 本遺構は、西尾根南区の頂部からわずかに西に寄ったところにある。尾根に沿った東側には5号建物跡が隣接している。標高は、190.00 mである。

遺構 本遺構は盛土の裾が調査区にかかったものであって、遺構の主要部は調査区の南側にて（付図9）。盛土は北東に下る斜面に盛られており、現状では長さ4.5 m、厚さ20 cmが確認される。盛土の用土は暗褐色粘質土であって、しまりが強い。盛土の下層には径45 cm・深さ20 cmと径38 cm・深さ38 cmの2基の土坑状の落ち込み遺構があり、また、基壇の東縁には径20 cm・深さ30 cmの柱穴状のピットがある。これらの遺構の性格は不明であるが、後者は盛土の土留めであろうかと思われる。

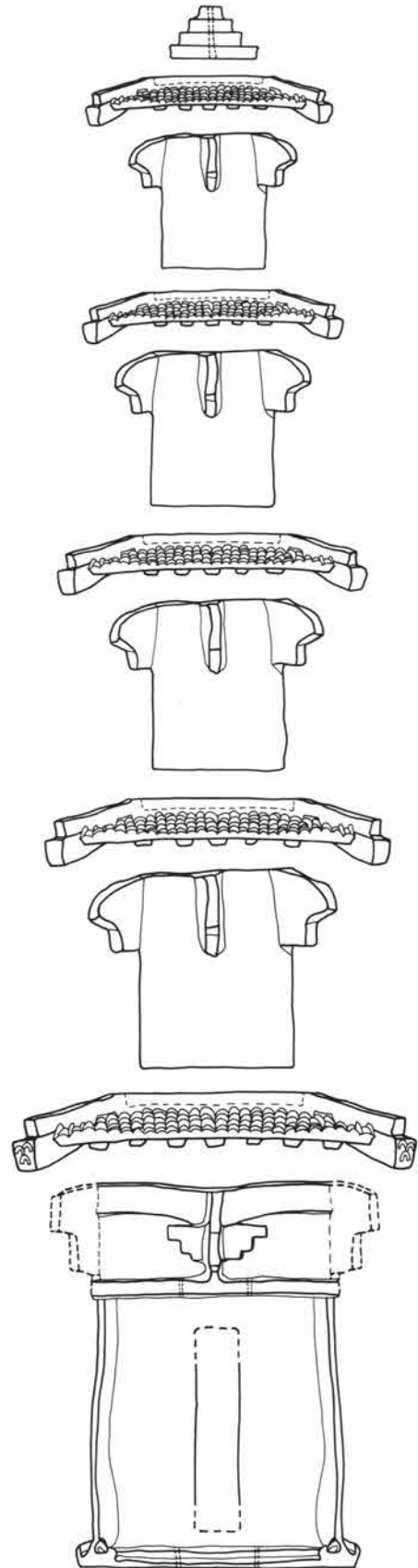
本遺構と5号建物跡は東西に並ぶ遺構であるが、この2者を隔てる遺構として9号溝がある。本溝は幅1 m、深さ10 cm程の浅い溝である。また、西方1 mのところには3号焼土坑がある。3号焼土坑は本遺構に関連、しいていえば付帯するものとみられる。

出土遺物 本遺構に伴う明瞭な遺物はないが、北側の丘陵斜面や9号溝・5号建物跡などに本遺構から落下したとみられる遺物がある。第95図の瓦塔の大部分はそのような形で出土したものである。

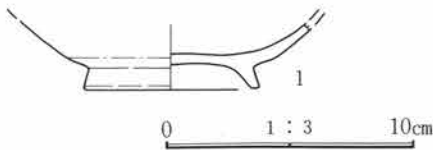
また、第93図の須恵器の椀は、厳密には8号建物跡の盛土下の土坑状遺構から出土したものであって、8号建物跡の上限年代を示す資料と考えられる。なお、3号焼土坑の出土遺物（第121図）も本遺構の年代を示す資料になりうるか考えられる。

瓦塔 瓦塔は25片ほどの小破片となって散乱して出土した。第95図は、瓦塔各部の部材の代表的な資料を図示したものである。

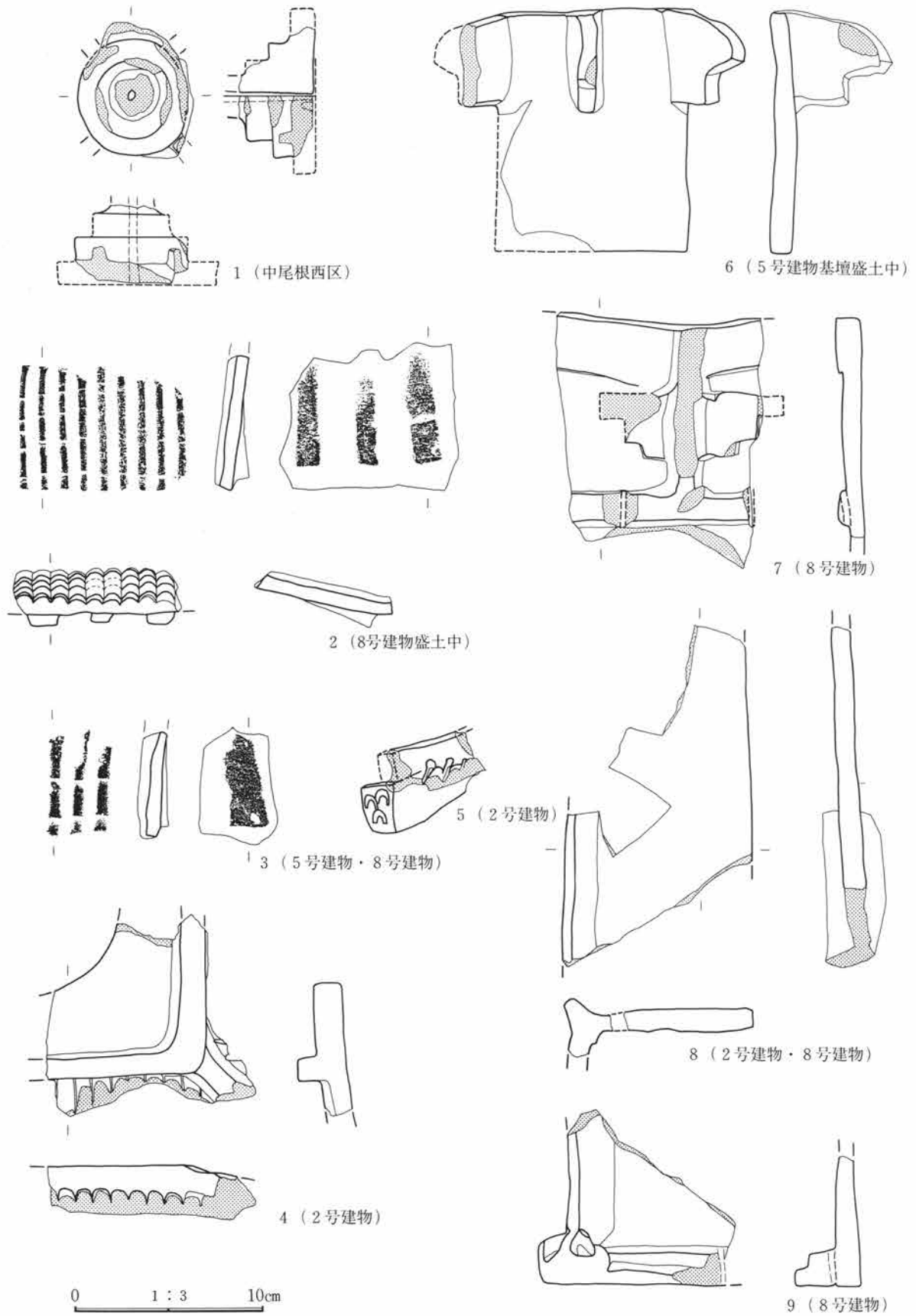
1は2号建物跡北西方の斜面から出土したものであって、瓦塔の伏鉢かとみられるものである。胎土はややき



第94図 瓦塔推定復元図 S=1/13



第93図 8号建物跡出土遺物



第95図 瓦塔実測図

第三章 遺構と遺物

めが粗く、器面は黒色、内面は赤褐色を呈す。本資料は他の瓦塔部品とは質感が異なるので、別個体の可能性も推測される。

1以外は、全て同一個体とみられ、色調は、酸化炎焼成で淡褐色を呈し、軟質である。2～5は屋蓋部である。2は、半截竹管によって瓦（丸瓦）が5段表現され、垂木は方形1段であって、削り出しにより表現される。4は降棟があり、45度の方向で出るので、塔の可能性が考えられる。中心部の通貫孔は径6.6cmである。6は軸部であって、中央と隅に簡略的な持送部分が表現されている。柱の表現は全くなく、壁付きの三斗も省略されている。幅11.5cmと小規模なことから最上層あるいはそれに近いものかと考えられる。

7～9は基部であって、7は斗栱部、8は壁部、9は下底部である。7は、隅の柱が壁に粘土帯を付けて表現されるが、中の柱は省略されている。長押あるいは頭貫は粘土帯で表現される。斗栱は中央に1カ所あり、大斗の上に抽象化した壁付きの三斗とそれに直行する持送が配される。通肘木は幅広の粘土帯で表現される。

7の頭貫には2カ所、扉の軸を受ける孔が通っており、これは9の下底部の対応する位置にもみられる。この軸穴と斗栱との位置関係をみると、側柱間に斗栱が1カ所あるのみであって、塔の組み物としては異常である。本瓦塔は、他にも木造塔に比して簡略的な表現がみられ、斗栱の数が変則な点もそのような特徴の一つと見られよう。

相輪部は残存資料はないが、竜車かとみられる径1.5cmほどの円球状の土製品1個がある。

第94図は、瓦塔の全体形を推測したものであって、総高150cm前後と推測される。全体的に簡略的であって、他遺跡の資料に比してやや小ぶりである。年代的には、埼玉県甘粕山遺跡（9世紀第1四半期）の資料に類似する要素もみられるが、全体としては簡略化が進んでおり、9世紀後半頃と推測しておきたい。

性格 8号建物跡は、遺構としては盛土の一部が確認されたのみで、建物とテラスのいずれかの可能性を有するものである。しかし、本遺構には瓦塔が伴っていたとみられ、瓦塔は建物内に設置されていたものとするのが妥当な形であると考えられるので、本遺構も建物とみておくのが穏当と思われる。

(B) 1号特殊遺構

位置 本遺構は、1号テラスの北東部の縁辺にある。盛土整地層の下面に構築された遺構である。標高は183.4m前後である。

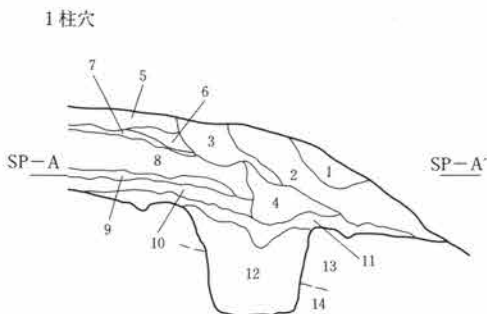
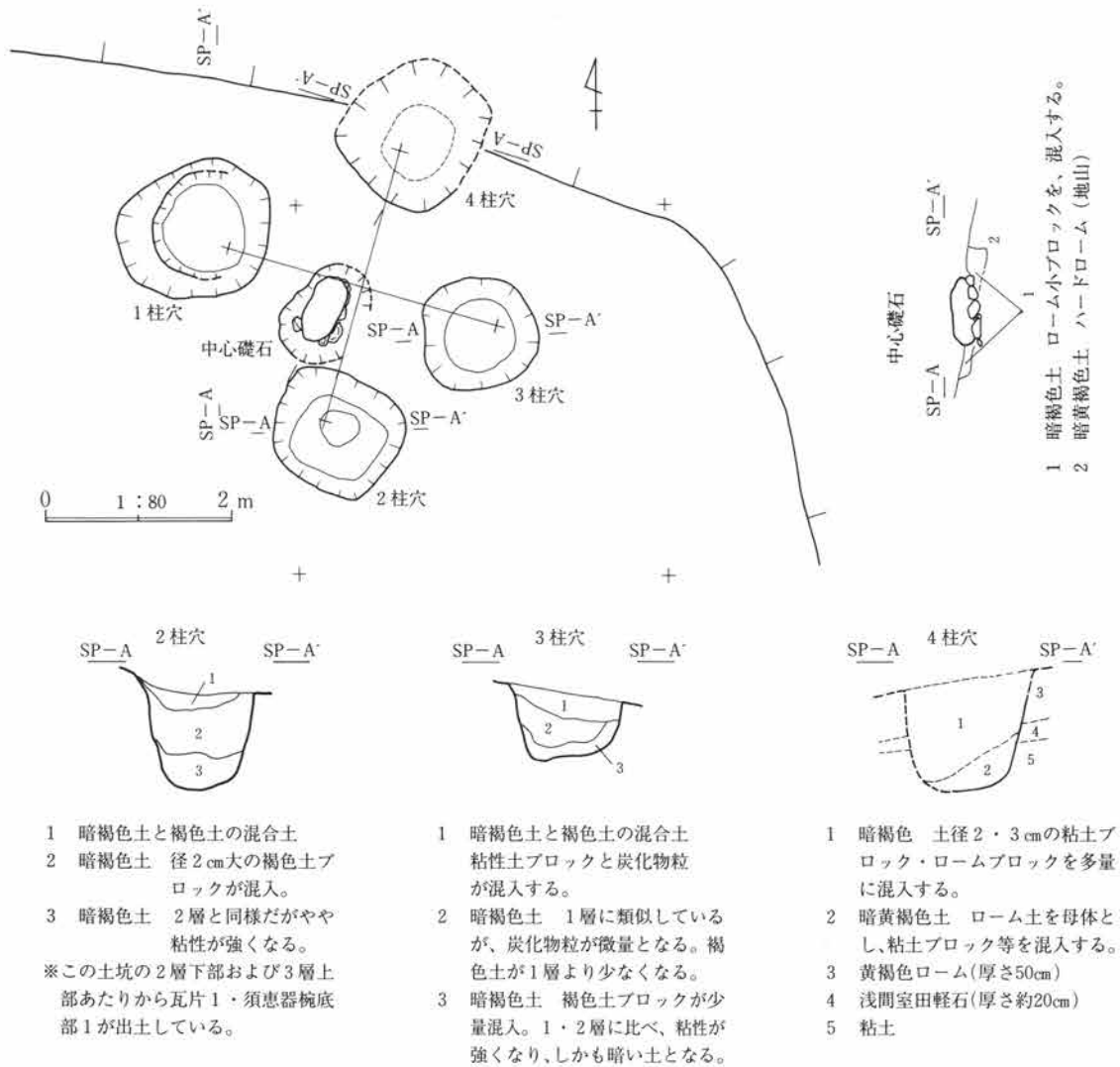
礎石と柱穴 本遺構は、1個の礎石状の石と4個の柱穴状のピットからなる。以下、前者を「中心礎石」、後者を「1号～4号の柱穴」と呼ぶこととする。

中心礎石は、長さ74cm、幅36cm、厚さ27cmの細長い石である。河原石で、未加工である。礎石の上面は長さ55cm、幅18～27cmほどが平坦となっている。礎石上面の標高は183.43mである。本礎石の下部には径15～20cmの根石12個が配されている。礎石や根石は、長さ116cm、幅80cm、深さ18cmほどの浅い土坑状の窪みが掘られ、その中に据えられている。

4個の柱穴の平面形は不整形である。それぞれの規模は下記のようなものである。

番号	上端(cm)	下端(cm)	深さ(cm)	掘込面標高(m)	下底面標高(m)
1	164×148	89×93	100	183.30	182.30
2	144×132	78×72	110	183.07	181.97
3	122×120	76×78	68	183.34	182.66
4	136×	80	100	183.00	182.00

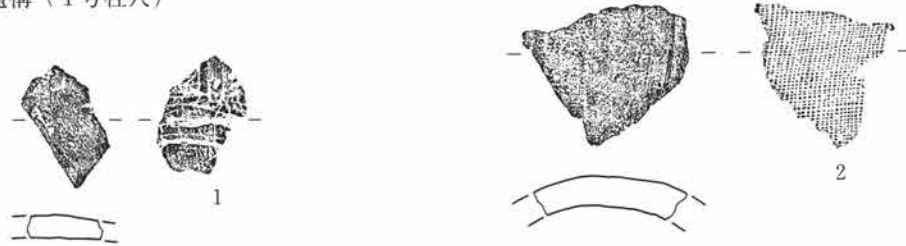
柱穴の覆土は、暗褐色土を主体として褐色土とロームのブロックを混入する混土である。2号柱穴と3号柱穴は3層に分層されるが、土質に大差はない。覆土の堆積状況は層状をなさず、短時間で埋められたよう



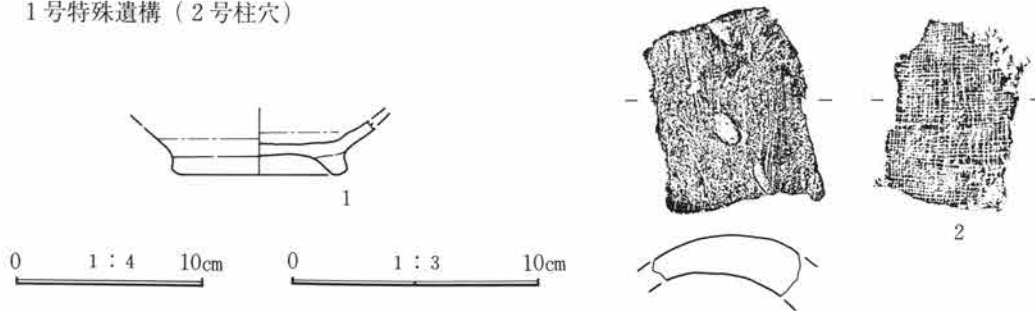
- 1 褐色土 シルト質の小礫を少量混入する。
 2 黄褐色土 シルト質の軟質礫をきわめて多量に混入する。
 3 黄褐色土 2層と同様であるが、シルト質の礫の混入は半分以下である。
 4 明茶褐色土 全体に粒子が粗く、しまりが弱い。焼土と炭化物の粒子が混入する。
 5 褐色土 径数mmから3cmほどの礫を多量に混入する。
 6 褐色土 5層に近似するが、礫の混入がより少ない。
 7 褐色土 黄褐色土ブロックの混入がより少ない。
 8 暗茶褐色土 きめの細かな粘質土であり、混入土はほとんどない。炭化物がまばらに混入する。
 9 暗茶褐色土 8層と黄褐色のややきめの粗い地山の混土。
 10 暗茶褐色土 8層と同質である。
 11 8層と黄色ロームの混土。
 12 明茶褐色土 8層を主体にし、ローム土など数種の土をブロック状に、混合する。しまりは強くない。
 [1柱穴のフク土]
 13 黄色ローム [地山]
 14 暗茶褐色土 緻密でしまりのある粘質土。[地山]
 ※1~11層は1号テラスの盛土整地層である。

第96図 1号特殊遺構

1号特殊遺構（1号柱穴）



1号特殊遺構（2号柱穴）



第97図 1号特殊遺構出土遺物

であり、しまりはさして強くはない。土層断面の確認からは柱痕はみられない。

柱穴を結ぶ軸線は柱痕が確認されないことから、厳密には確定できないが、おおむね軸方向はN-15°-Eで、心々距離が3mの直交する軸線が想定される。

構造 本遺構は中心礎石の上に1本の柱が立ち、それを周囲の4本の添え柱で支えるものが想定される。4本の柱穴にそれぞれ柱が立ち、相対する柱を横木で結び、その交点で中心柱を支えたものと考えられる。ただし、柱穴を結ぶ軸線と礎石の位置関係をみると、軸線の交点は礎石上には乗らず、軸線交点の南西側に礎石が位置するようである。したがって、中心柱に穴を開けて横木を通す形ではなく、横木の交点に中心柱を添えて固定する方法がとられたものと推測される。

なお、本遺構は1mほどの厚い盛土に覆われた遺構であって、整地がなされた以後の攪乱は受けていない。中心礎石が動かされた形跡はない。また、周囲に住居跡や土坑があるものの、礎石や柱穴など本遺構に関する遺構はない。したがって、本遺構は、1個の礎石と4本の柱穴からなるものとほぼ断定できる。

廃絶状況 本遺構は、柱穴の覆土に柱痕跡がみられないことから、自然の廃絶の可能性は低いと考えられる。覆土の様相からは、1号テラスの整地に伴って、柱を抜いて埋め戻したものと考えられる。また、礎石は撤去せず、これらの遺構を覆うように盛土の整地がなされたものと考えられる。

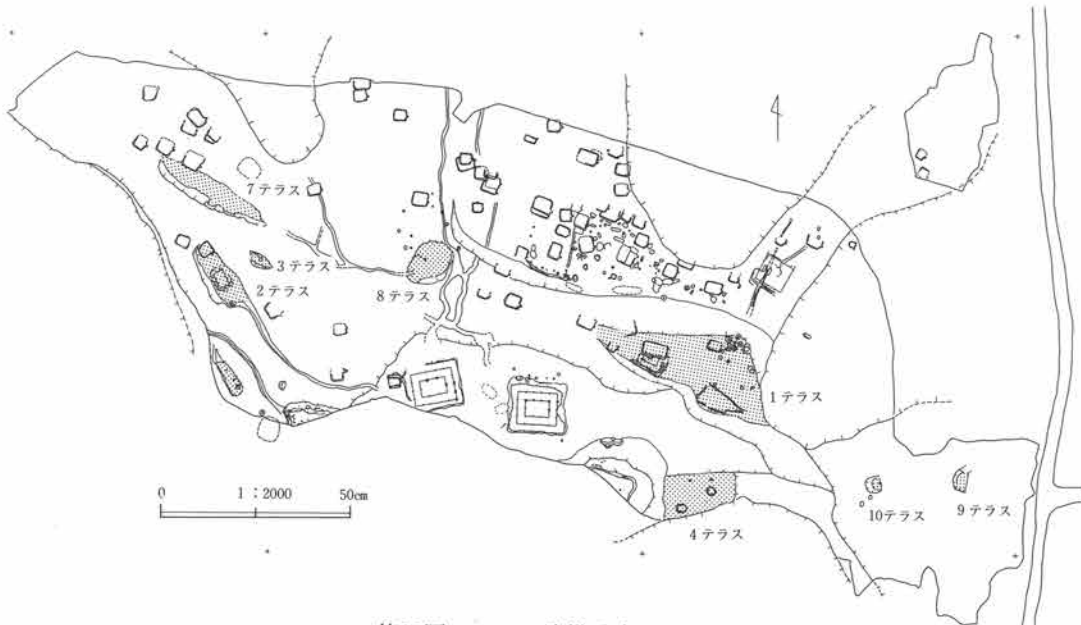
出土遺物 本遺構に直接的に帰属する遺物はないが、柱穴の覆土内に遺物が混入している。1号柱穴は須恵器の破片20片、2号柱穴は須恵器の碗や甕などの破片と瓦数片、3号柱穴は須恵器の碗などの破片があり、図示した遺物は、第97図のようである。

性格 本遺構は1本の中心柱とそれを支える4本の柱からなる特殊な建造物とみられる。このような建造物の類例としては、天台系の寺院にみられる相輪椽があげられる。相輪椽の現存例は延暦寺・上野の寛永寺・日光の輪王寺などにあるが、古代の遺構をとどめるものはなく、実態が不明である。よって、1号特殊遺構が相輪椽にあたるかどうかは慎重な検討を要するものと考えられる。

第6節 テラス

本書でテラスという用語は、平坦面という意味である。丘陵斜面や尾根などの傾斜面において山側を切土したり、谷側を盛土したりして人為的に造成された遺構を指す。規模や形態はさまざまであり、機能的にもある特定のものではなく、鍛冶工房などの工房的施設が多いとみられるが、礎石建物の構築されていることもあり、いくつかの種類があるとみられる。そのようなものを総括的に、テラスと呼ぶこととする。

本遺跡におけるテラス遺構の総数は、9カ所が数えられる。このほかにも中尾根東区の住居跡域や東尾根区の1号掘立柱建物跡の2カ所は切土によって平坦面が造成されているとみられるが、形状があまり顕著ではないことからテラス遺構には含めないこととした。



第98図 テラス遺構分布図

(1) 1号テラス

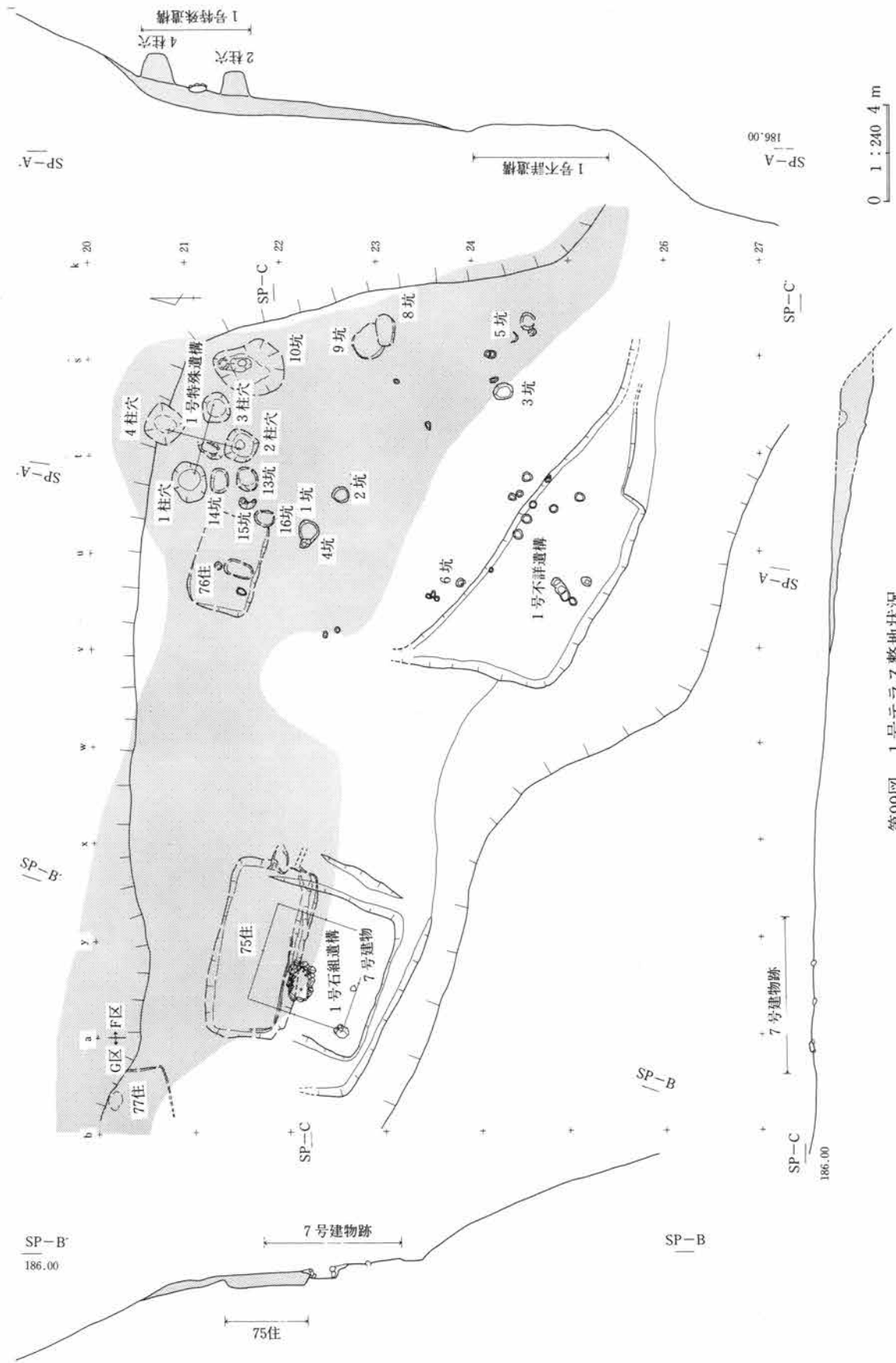
A テラス

位置 頂部区の北東方に造成された規模の大きなテラスである。地形的には頂部区から北東方に派生する尾根（「東尾根」）の基部に位置するとみることもできる。標高は、183～185 mである。北側は、斜面下に中尾根区と東尾根区の集落域があり、東側は東尾根区と東斜面区との谷へ急角度をなして落ち込んでいる。

規模 本テラスは北東隅を頂点とする三角形の平面形を呈し、東西幅40数m、南北の奥行き20 mを測る。面積300 m²ほどであって、本遺跡内で最も規模の大きなテラスである。テラスの開く向きは北東方であって、方位はN-25°-Eである。

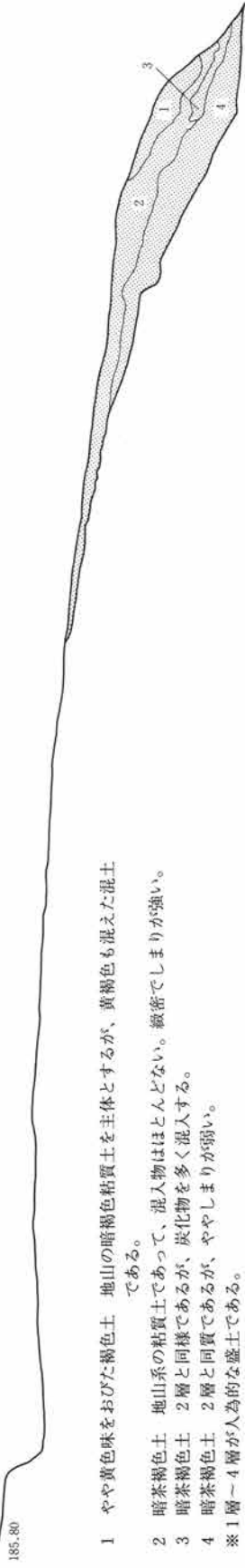
整地 本テラスは、山側つまり南側を切土し、谷側つまり東側や北側に盛土して造成されている。盛土の範囲は長さ40 m以上、最大幅10 mであって、最も厚い所では2 m以上に達しており、造成の規模は大規模である。盛土の用土は暗褐色粘質土を主とし、部分的にローム質土や黄白色の泥岩礫を混える。しまりは強く、しっかりしている。テラス上面は緩やかな凹凸はあるものの、比較的ていねいな造成とみなされる。盛土の手順は、谷側つまり低い方へ押し出すように盛られており、版築のような水平堆積の様相は呈していない。

分布遺構 本テラスには、テラスの上面に遺構が分布する他に、盛土の下面にも遺構が分布する。



第99図 1号テラス整地状況

SP-A



- 1 やや黄色味をおびた褐色土 地山の暗褐色粘質土を主体とするが、黄褐色も混えた混土である。
 - 2 暗茶褐色土 地山系の粘質土であって、混入物はほとんどない。緻密でしまりが強い。
 - 3 暗茶褐色土 2層と同様であるが、炭化物を多く混入する。
 - 4 暗茶褐色土 2層と同質であるが、ややしまりが弱い。
- ※1層～4層が人為的な盛土である。

SP-B



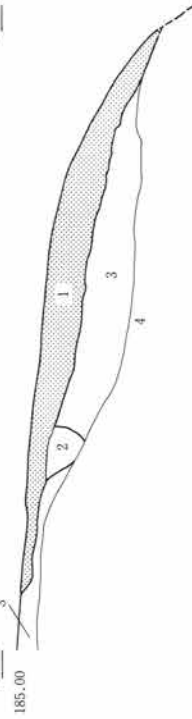
- 1 暗褐色土 軽石混じりのざらざらした土である。焼土粒も少量混入する。
- 2 暗褐色土 軽石の混入は少ない。
- 3 黄褐色土 黄白色のシルト質軟質礫を多く含む。
- 4 褐色土 径数mmから3cmほどの小礫を多量に混入する。
- 5 褐色土 径1mmから数mmシルト質黄白色の小礫片を、まんべんに混入する。
- 6 やや黄色味をおびた褐色土 数種の土が混入した混土である。
- 7 暗茶褐色土 きめの細かな粘質土であり、混入土はほとんどない。炭化物がまばらに混入する。
- 8 にぶい黄色 砂質土である。
- 9 わずかに黄色味をおびた褐色土 6層と7層の中間的な土である。

SP-B'



- 10 暗茶褐色土 7層を主体として、黄橙色のややきめの粗い土をブロック状に混入する。
- 11 暗茶褐色土 7層と同質である。
- 12 暗茶褐色土 きめの細かなしまりのある粘質土。混入物のない純土である。[地山]

SP-C



- 1 茶褐色土 緻密な粘質土を主体とし、礫や軽石を混入し、炭化物や焼土もみられる。上層部に黄白色の軟質のシルト質の礫がやや多くみられる。[盛土]
- 2 茶褐色土 炭化物の混入が少量みられる。[土坑か]
- 3 やや明るい茶褐色土 くすんだ褐色の土などが混入し、動いている様相がみられる。人為的な盛土が自然堆積土が判断し難いが後者の可能性が高いとみられる。
- 4 黄橙色土 [地山]



第100図 1号テラス土層断面図

第三章 遺構と遺物

テラス上面の遺構は、7号建物跡・1号不詳遺構・土坑6基・ピット約20基、あるいは74号住居跡がある。面積が広い割には遺構数は少なく、特にテラスの北東半域には遺構がなく、そのような平坦な空地を確保することにも意味がもたれていたのではないかと考えられる。

整地層下面の遺構は、75号住居跡・76号住居跡・1号特殊遺構・土坑7基がある。これらの遺構は盛土下面つまりテラスの北東域にある。切土のなされたテラスの山側には遺構はみられないが、切土によって消滅した可能性が多分にあるものと思われる。

7号建物跡・1号特殊遺構・74号住居跡・75号住居跡・76号住居跡はそれぞれの項目でふれるので、ここでは、以下、1号不詳遺構と土坑について記述する。

B 1号不詳遺構

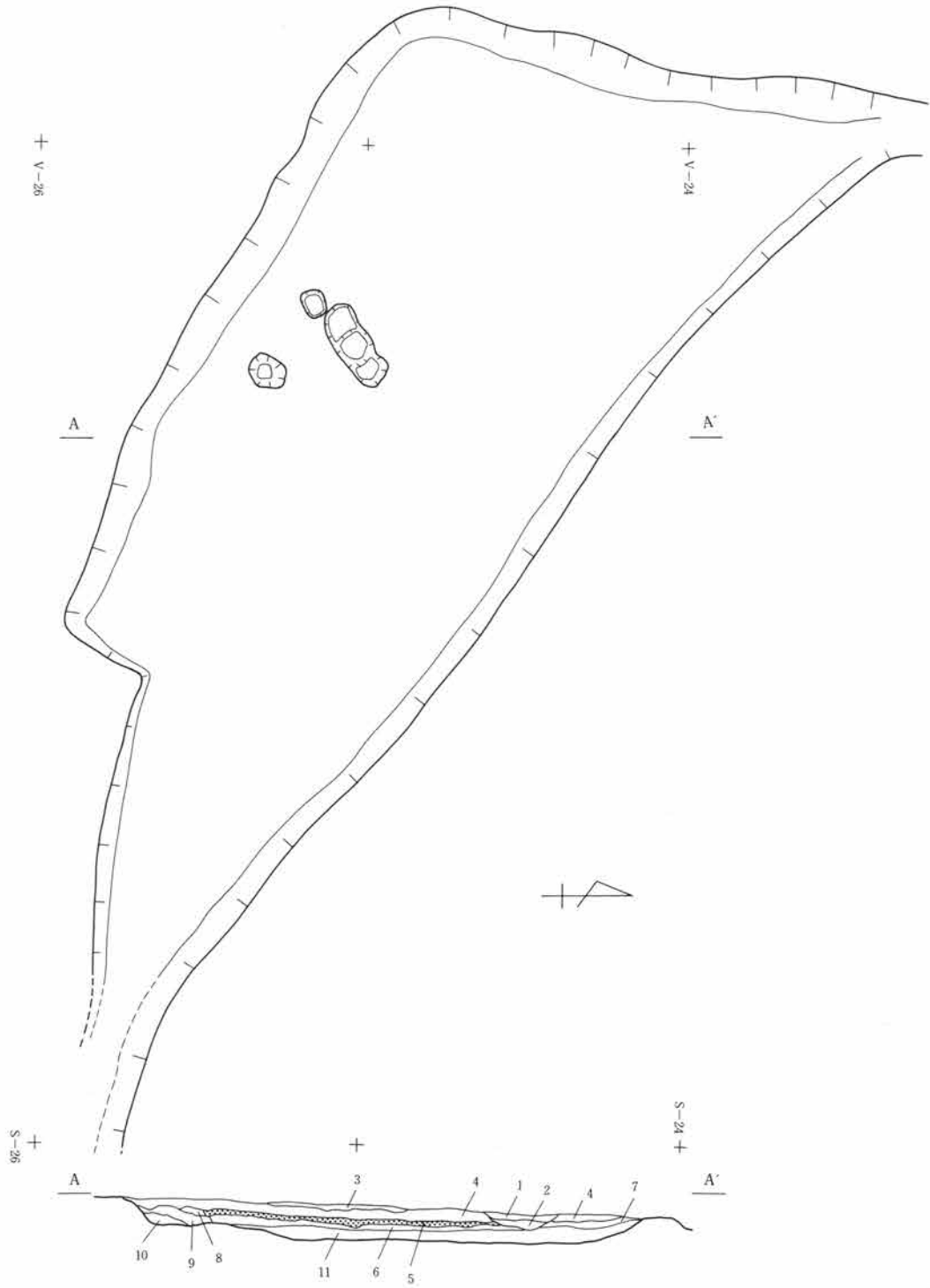
1号テラスの南東部に位置する。本遺構の南側は切土によって造りだされた崖状の急斜面となっており、その基部に位置する。平面形は独特な形であって、北西隅部と東端部は先細りになり、中央部は不整形形状にふくらむ。北東辺はほぼ直線であって南側の急斜面に平行するような走向を示す。南辺は南西隅が110度ほど開き、また、南東隅はクランク状をなす。規模は現状では、長さ14m、最大幅5.1mである。が、東端は、幅40cmほどの溝状となって、1号テラスの東南部の崖端まで達するとみられ、その場合はさらに7ないし8mほど伸びる。南辺はやや鋭く、また、北東辺はやや緩やかに掘り込まれ、深さは40cmほどである。底面はほぼ平坦であるが、あまり整ってはいない。また、堅くしまってもいない。底面は北西部と東端部の比高差が30cmあり、東側にわずかに下っている。遺構内や周囲に径15～30cmほどのピットが数個あるが、形は不整形で規則的な配置とは認められない。

本遺構の性格は不明である。崖下にしみ出る水を切るための溝という機能がまず推測されるが、形状は溝とは言い難く、なんらかの特定の機能を持っていたのではないかとと思われる。東端部を堰止めれば水が溜まるとみられるので、滞水させることにより何か行われたのではないかと推測される。

C 土 坑

1号テラスでは、テラス面上に6基の土坑と約20基のピット、テラス面下に7基の土坑がある。各土坑の状況は下記のとおりである。なお、テラス面上のピットは径15～40cmであって、覆土はおおむね暗褐色土か黒褐色土である。配置は不規則で、掘り込みも浅いので柱穴にはならず、性格は不明確である。

位 置	番号	平面形	規模・深さ(cm)		覆 土 ・ 遺 物 な ど
テラス面上	1坑	不整円形	90×100	12	暗褐色土。焼土混入。
	2坑	円 形	65× 65	15	黒褐色土。焼土と炭化物を少量混入する。
	3坑	円形気味	70× 80	12	
	4坑	不整円形	50× 30	20	
	5坑	円 形	45	13	黒褐色土。焼土と炭化物を混入する。
	6坑	円 形	35× 35	10	暗褐色土。礫を3個伴う。
テラス面下	8坑	長 円 形	133× 83	12	床面が焼け、焼土と炭化物多量。土器あり。
	9坑	不整円形	156×134	10	暗褐色粘質土。炭化物少量。
	10坑	不 整 形	280×227	18	暗黄褐色土。炭化物少量。須恵器破片約10点。
	13坑	不整円形	98× 90	30	暗褐色土と黄色ロームの混土。
	14坑	長 円 形	103× 76	8	暗褐色粘質土とロームの混土。
	15坑	不 整 形	70× 45	10	暗褐色土。
	16坑	長 円 形	84× 70	29	暗褐色土。76住のカマドをを切る。



- | | |
|--|---|
| <p>1 浅間A軽石 近世の攪乱か土坑。</p> <p>2 黄褐色土 近世の攪乱か土坑。</p> <p>3 黄褐色土 軽石（浅間Aか）を少量混入する。</p> <p>4 暗黄褐色土</p> <p>5 暗褐色土 浅間B軽石を多量に混入する。</p> <p>6 暗褐色土 ちみつで粘性もある。</p> <p>7 暗黄褐色土 焼土粒を多量に混入する。
※下面が焼けている様子はない。</p> | <p>8 暗茶褐色土 焼土粒をやや多く混入する。</p> <p>9 茶褐色土 地山の小礫や炭化物を混入する。</p> <p>10 黄褐色土 粘性のある土であって、地山の流出土とみられる。</p> <p>11 くすんだ黄褐色土 やや粘性のある土を主体とする。上半部には黄色の細かな岩礫が混入する。置物も少量混入する。</p> |
|--|---|

0 1 : 80 2 m

第101図 1号不詳遺構

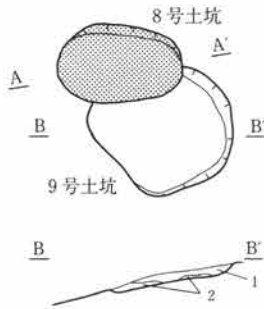
第Ⅲ章 遺構と遺物

6号土坑



- 1 暗褐色土
焼土がまばらに入る。

8号土坑・9号土坑

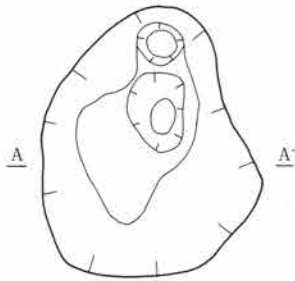


- 1 暗褐色粘質土 8号土坑の1層に似るが炭化物等が少ない。
2 淡褐色粘質土 やや黄色味をおびる。地山と思われる。

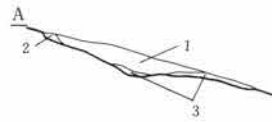


- 1 暗褐色粘質土 細粒でよくしまっている。焼土粒・炭化物粒を多量に含む。
2 黒褐色土 径1～2cm大の焼土塊・炭化物を多量に混入する。ガサガサした感じである。
3 暗灰褐色土 2層と同様に径1～2cm大の焼土塊・炭化物粒を多量に混入する。

10号土坑

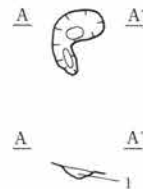


10号土坑



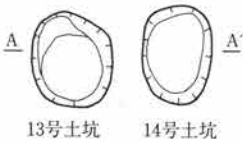
- 1 暗黄褐色土 ローム質的な土がうすく混じる。炭化物粒を少量含む。粘性は強いが、しまりは2層に比べ弱い。やや粗粒。
2 黄褐色土 くすんだロームを主体とし、わずかに暗褐色の粘質土が混じる。しまりそれほどでもないが、地山と思われる。
3 暗褐色粘質土 ところどころ淡褐色になる。細粒で非常に固く、地山と思われる。

15号土坑



- 1 暗褐色土 炭化物粒・ローム粒を少量混入する。

13号土坑・14号土坑



13号土坑

- 1 暗茶褐色土粘質土と黄色ローム質土の混土

14号土坑

- 1 暗茶褐色粘質土 黄色ローム質土のブロックを少量混入する。
2 黄色ローム質土〔地山〕

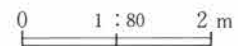


16号土坑



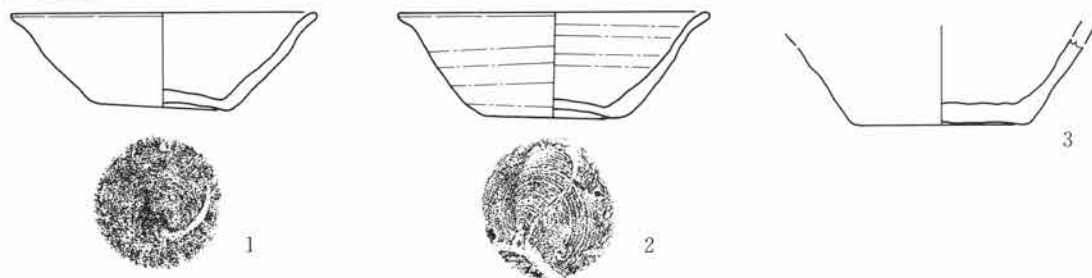
- 1 暗褐色土と褐色土の混泥土 1号テラス造成時の盛土の一部。
2 暗褐色土 ロームブロック・炭化物粒・焼土粒を混入する。炭化物粒・焼土粒は76住カマドが給源か。
3 暗褐色土 炭化物粒・焼土粒が2層と同様に混入する。ロームブロックが少なくなった分だけ暗くなる。

※16土坑は76住カマドを切って、作られている。



第102図 1号テラスの土坑

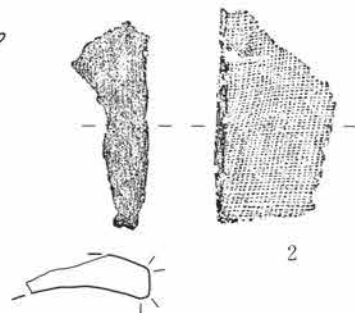
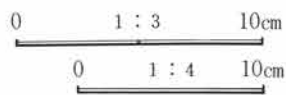
8号土坑



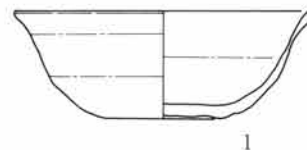
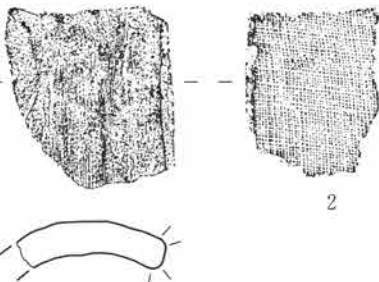
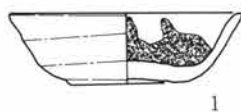
9号土坑



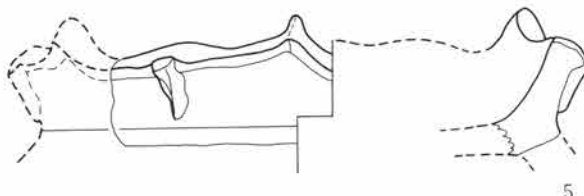
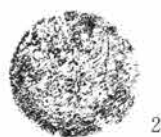
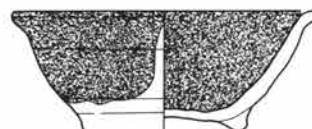
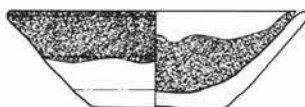
10号土坑



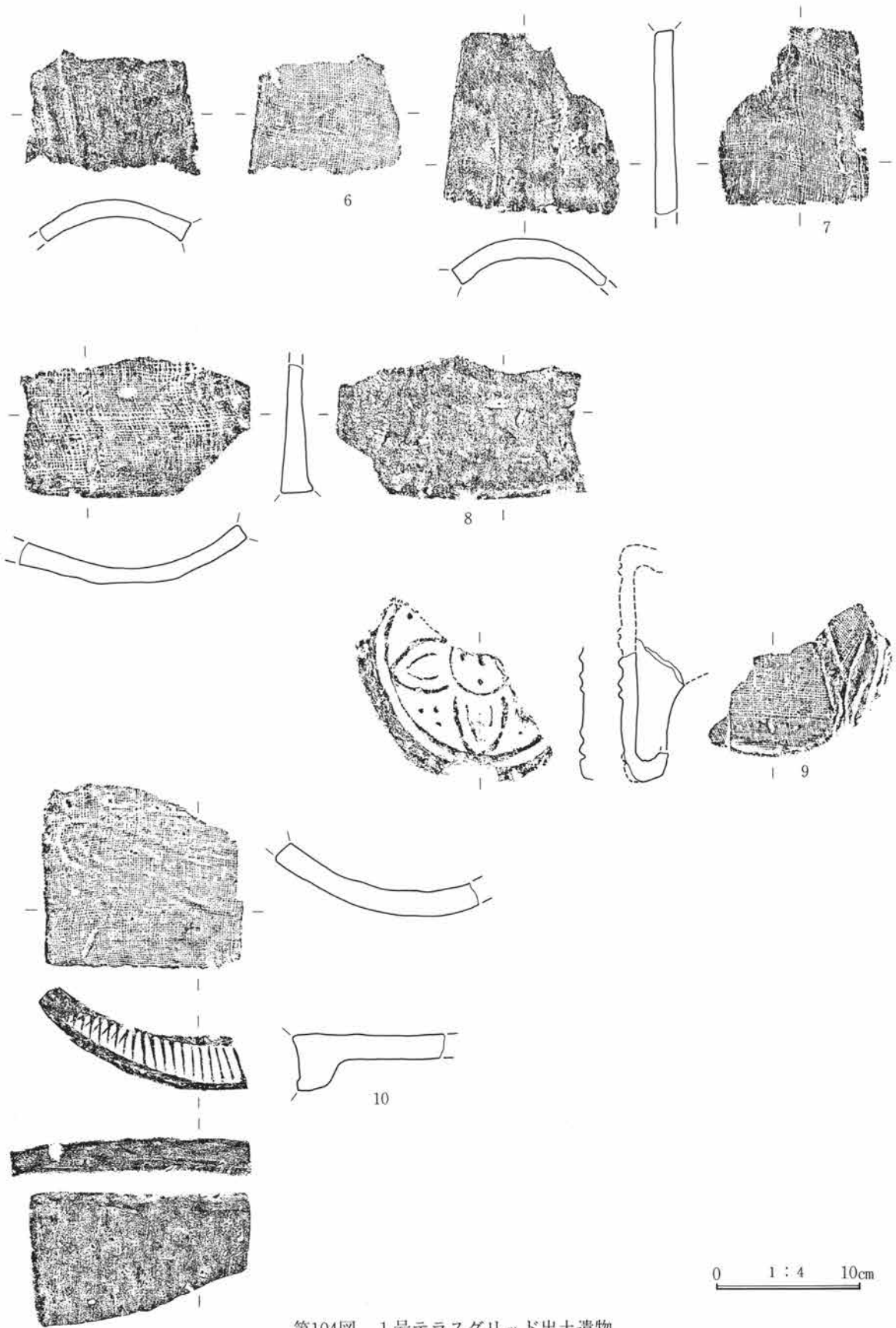
16号土坑



1号テラス区グリッド



第103図 1号テラス土坑・グリッド出土遺物



第104図 1号テラスグリッド出土遺物

(2) 2号テラス

本テラスは西尾根南区にある。1号建物跡の所在するテラス面、つまり同建物を建造するに当って造成された平坦面である。テラスの規模は幅12.0 m、奥行き7.0 mである。その他、本テラスの形状や整地等の詳細については1号建物跡の項で記述してある。

(3) 3号テラス

位置 西尾根南区の丘陵斜面にある。標高は181.0 m前後である。1号建物跡の北東8 m、7号テラスの南東10 mにある。

形状・規模 テラス面の形状は半月状を呈し、規模は現状で幅7.5 m、奥行き2.2 mを計る。が、テラス面の前端部は崩落しており、確認された面より幾分広がったことは確実である。本テラスの開く向きはN-32°-Eであって、丘陵の等高線にほぼ直交している。

造成 本テラスは山側つまり南西側の斜面を、奥に向かって半月状に切り込んで造られている。切土は、河原石含みの暗褐色粘質土まで及んでおり、テラス面は堅くしっかりしている。なお、テラス面は水平ではなく、北側にむかって緩やかに下がっている。

所在遺構 テラス面上には、中央から西に向かって、円形の土坑が3基ある（1号土坑、2号土坑、3号土坑）。各土坑の特徴は下記のようなものである。

名称	径	深さ	状況	フク土
1号土坑	105 cm	5 cm	床面が弱く焼ける	炭化物を混入する。
2号土坑	90 cm	15 cm	奥壁が焼けている	灰と炭化物が多量に混入する。
3号土坑	100 cm	10 cm	奥壁が焼けている	焼土粒・灰・炭化物が混入する。

出土遺物 特になし。

性格 本テラスは3基の円形土坑において、なんらかの形で火を燃やした形跡がある。それがどのような形や目的でなされたのかは重要な問題であるが、現状では不明確である。3基の土坑は形や規模が同一であり、形も整っていることから、単なる不要物や廃材の焼却ではなく、より積極的な用途があったものと推測される。その可能性としては、一つにはなんらかの生産的行為に関すること、もう一つは本テラスが1号建物跡の前方正面に位置しているので同建物に関わる機能を有したのではなかったかということがあげられよう。

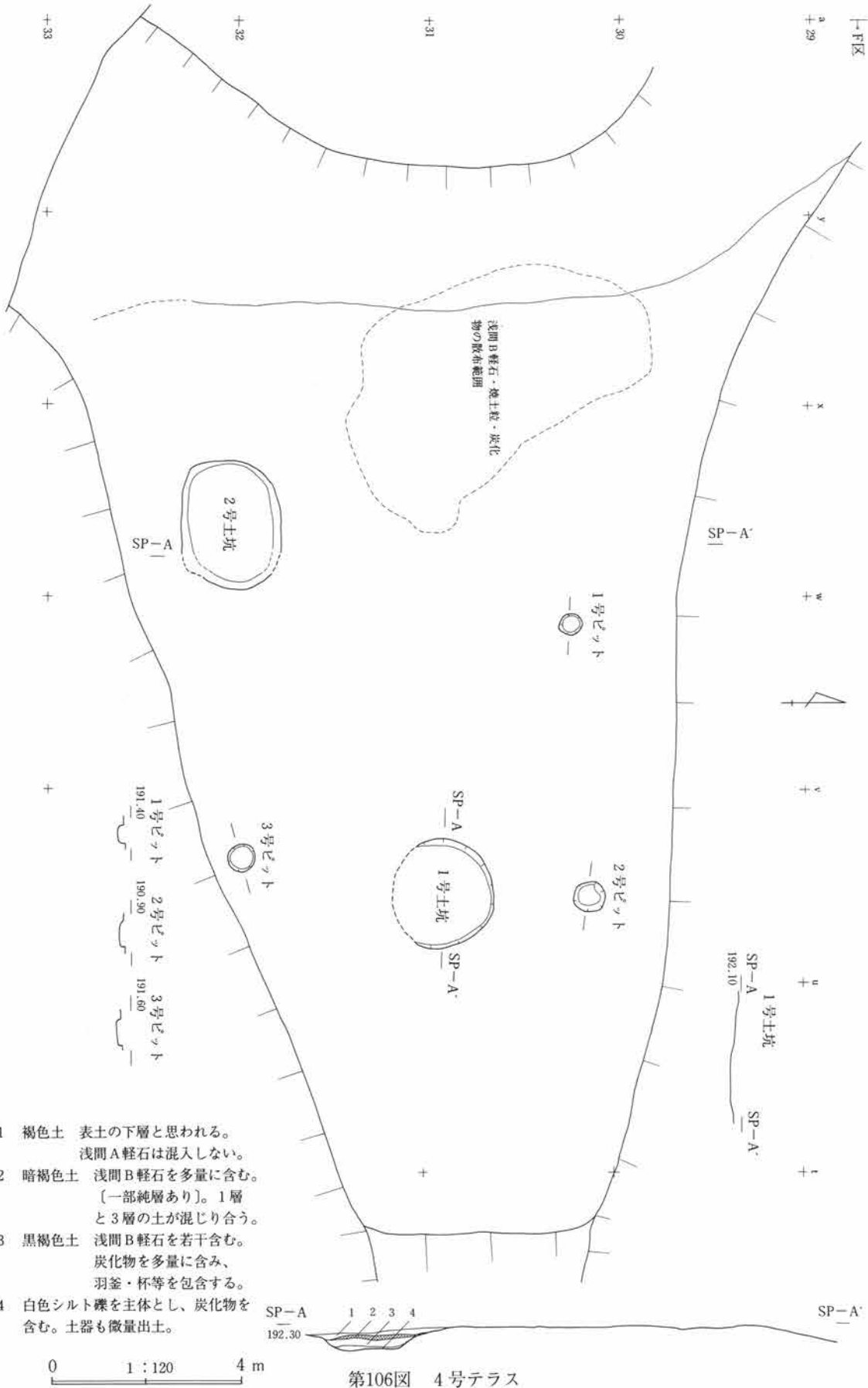
(4) 4号テラス

位置 頂部区の東に位置する。4号建物跡の東側にあたる。標高は191.5～193.1 mである。西側は4号建物跡の所在する半丘状の小丘であり、その裾部は大きく切土されている。東側は5号テラスに緩やかに接続する。北側はやや緩やかな丘陵斜面（D斜面）、南側は急な丘陵斜面になっている。

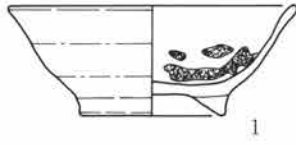
造成 東に向かって緩やかに下る尾根の上面を削平して造成されている。西端と東端の標高差は1.6 mあり、東側に緩やかに下っている。

4号建物跡寄りの急斜面下には、浅間B軽石を主体とする焼土粒や炭化物を混入する、厚さ5～10 cmほどの土層が、3.5×6.8 mの不整形の範囲に堆積する。焼土粒と炭化物は4号建物跡あるいは3号建物跡・2号建物跡が焼失した際に降下したものとみられる。

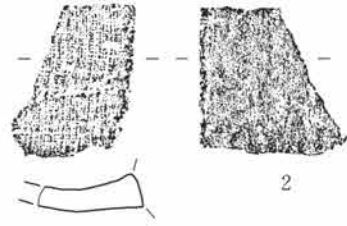
所在遺構 テラス面上には、土坑2基とピット3基がある。1号土坑は円形で、径2.3 m、深さ5 cmである。2号土坑は長円形で、規模は2.65×2.10 mであり、下底面には炭化物粒が多く含まれ、その上に浅間B軽石を含む層が堆積する。覆土からは須恵器の羽釜や椀が出土する。3基のピットは径40～60 cm、深さ10～15 cmであり、配置からみても柱穴とはみられない。



4号テラス

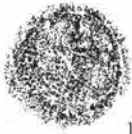
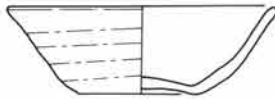


1

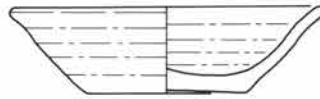


2

D斜面



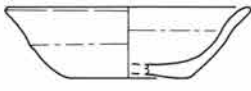
1



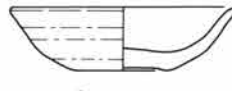
2



3



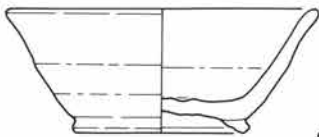
4



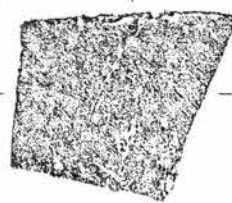
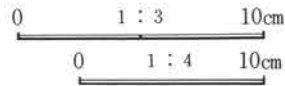
5



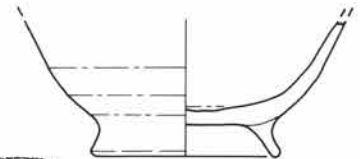
6



7



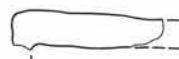
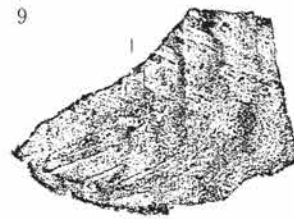
9



8



10



11



第107図 4号テラス・D斜面出土遺物

(5) 5号テラス

4号テラスの東側に接続し、尾根の上面を削平した面である。が、むしろ、簡略的にならしたような感じである。平坦面の幅は3～4mで、長さは25mほどである。南側と北側は丘陵斜面であり、東端部は崖状の急斜面となっている。南東隅からは南東方へ細い尾根が続いている。標高は西端で191.5m、東端で187.5mであり、比高差は4mである。

本遺構は人為的な遺構とみられるが、面上には遺構は認められず、遺物の散布も皆無に近い。テラスというよりは道路あるいは通路のような様相をもつものとみられる。

(6) 7号テラス

位置 西尾根南区の丘陵斜面のやや下寄りにある。標高は178mほどである。1号建物跡の南側20mにあたる所に所在し、また、本遺構の南側には8軒の竪穴住居跡が集中するように分布する。

造成 本テラスは南東から北西へ伸びる尾根の北東側斜面にあり、山側の斜面を切り込んで造られている。掘削は最も大きい所で、深さ1m、幅7mである。礫混じりのしまりの強い粘質土を切り込んでいる。

形状・規模 本テラスは等高線に沿って長く造られており、形状は細長い凸レンズ状をなす。長さ30m、奥行き最大の値4.5mである。テラス面は、奥部と前端では60cmの差があり、北東側へ緩く下っている。

覆土 覆土をみると、テラス面を直接覆う土層は礫を多量に混入し、やや粘性をおびるしまりのある暗褐色土であり、その上に浅間B軽石を多量に含む褐色土が堆積する。

遺構 テラス面上には土坑2基とピット10基があった。2基の土坑は2号掘込遺構の前にあり、それとのかかわりが想定されるが、性格は不明である。10基のピットは規模や配列が不揃いであって、掘立柱建物にはまとまらない。が、後述する掘込遺構の近くにあるものはそれとの関係が想定されよう。また、テラス東半側の奥壁には、2基の壁を掘り込んだ、やや特異な遺構がある。本稿ではこれを「掘込遺構」と仮称する。

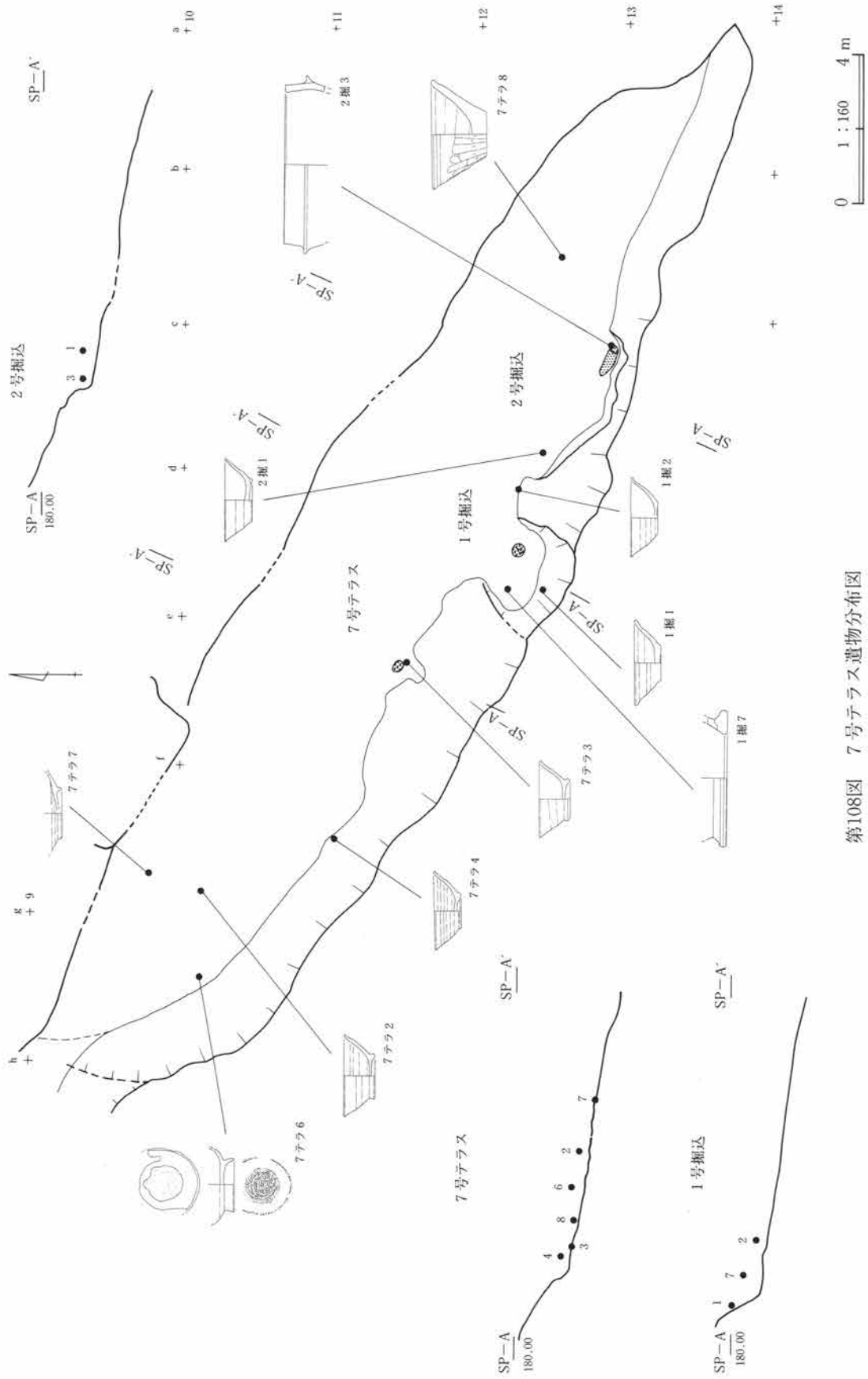
北西側にある**1号掘込遺構**は、幅2.0m、奥行き1.3mであり、奥壁と側壁は60°ほどの傾斜があり、奥壁は1.2mの高さがある。床面はほぼ水平である。床面の東寄りに炭化物と灰が径35cmの範囲に散布する。火を燃やしたと思われるが、その痕跡は窺えなかった。

南東寄りにある**2号掘込遺構**は、北西側の壁がやや不明確であるが、幅2.5m、奥行き0.6mである。南東隅に径18cmの焼けた部分があり、西方に炭化物と灰が30×70cmの範囲に散布する。床面はほぼ平坦であって、平坦な面は奥壁から2mほど前方まであり、その部分までが床面と見られる。奥壁は床から高さ50cmまで直に立ち、続いて45°の傾斜面が75cmある。床面は住居跡の床面のように平坦でややしまりがあり、炭化物の散布をみる。床面にはピットのような遺構はない。

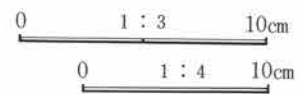
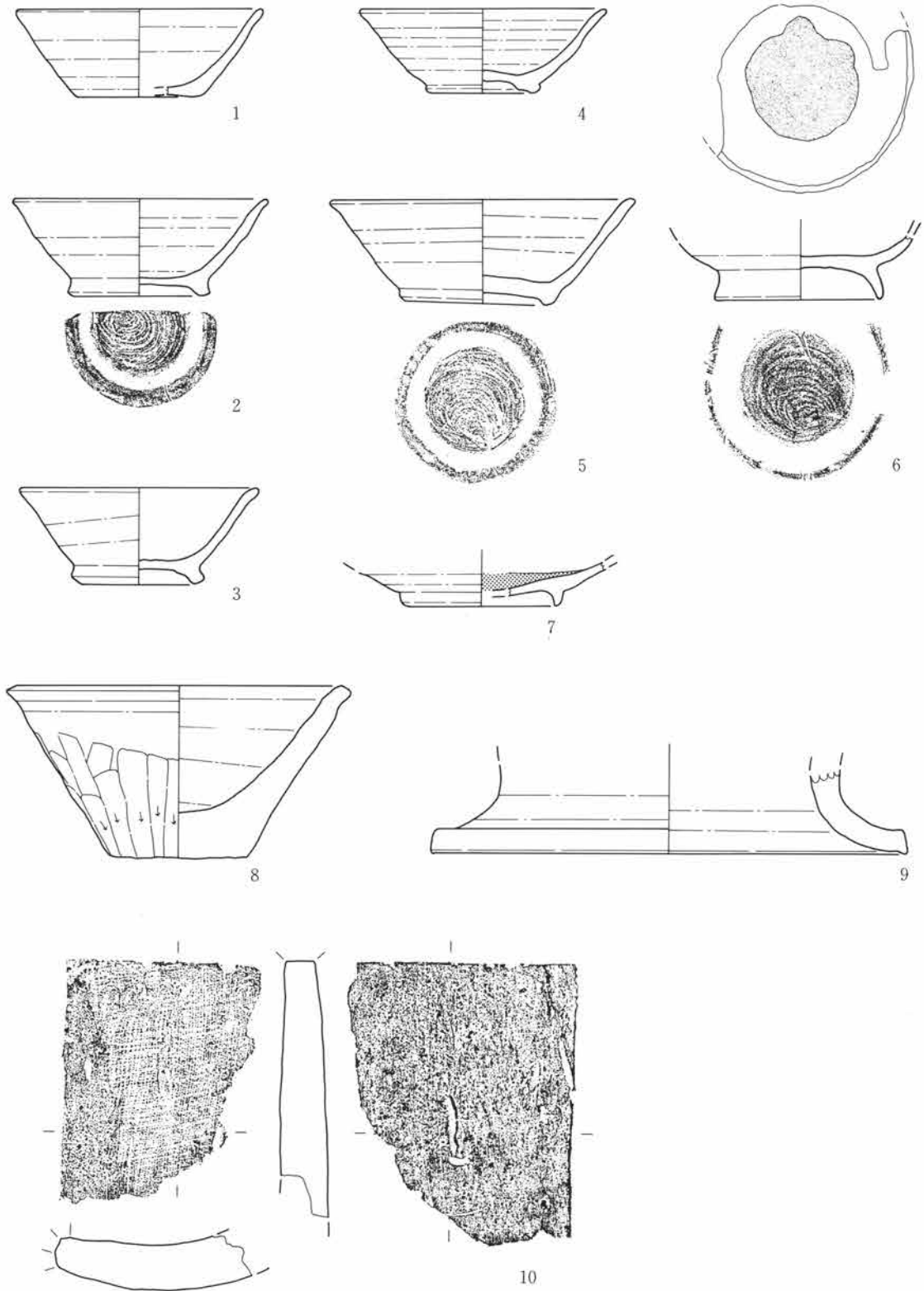
なお、1号掘込遺構から北西4.5mの斜面際に径30cmの炭化物の散布がある。この部分には径20cmほどの石が4ないし5個集まっており、須恵器の椀が2個体ある。また、その近くの斜面の裾が幅70cm・奥行き60cmほど入り込んでいて、1号掘込遺構や2号掘込遺構のように顕著ではないが、類似したような遺構があったかもしれないと思われる。

出土遺物 7号テラス・1号掘込遺構・2号掘込遺構では広範囲から遺物が出土した。遺構ごとの類別は、まず1号掘込遺構と2号掘込遺構の遺物を確定し、次いでそれ以外のものを7号テラスの遺物とした。

遺物の出土レベルを見ると、テラス面や床面に付くものと、面から距離があるものがあり、前者は本来的に遺構に伴い、後者は流入した可能性が想定される。おおむね10cmを境に区分すると、7号テラスの2・3・4・7・8は遺構に付き、6は流入、1号掘込遺構の2は遺構に付き、1・7は流入、2号掘込遺構の1・2は流入と判断される。その他はフク土出土であって、分類はできない。



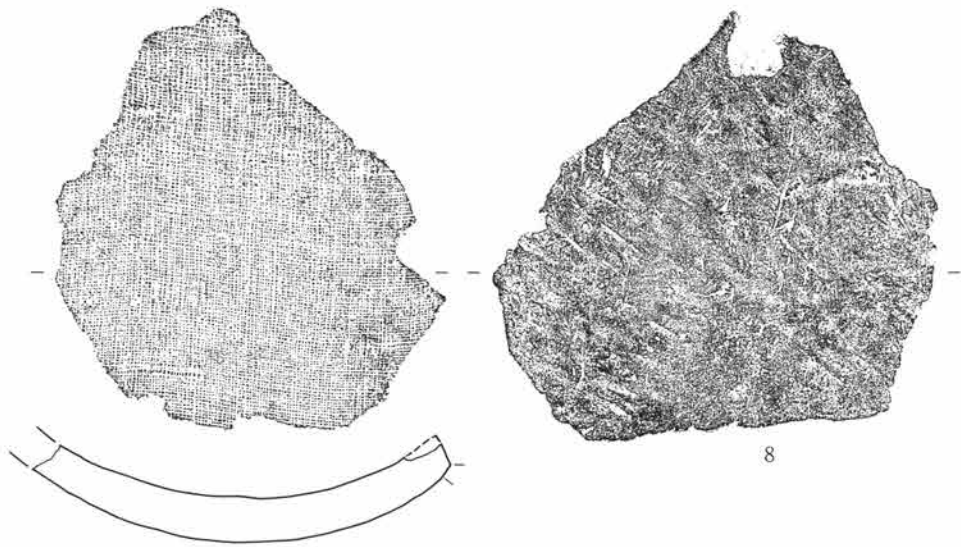
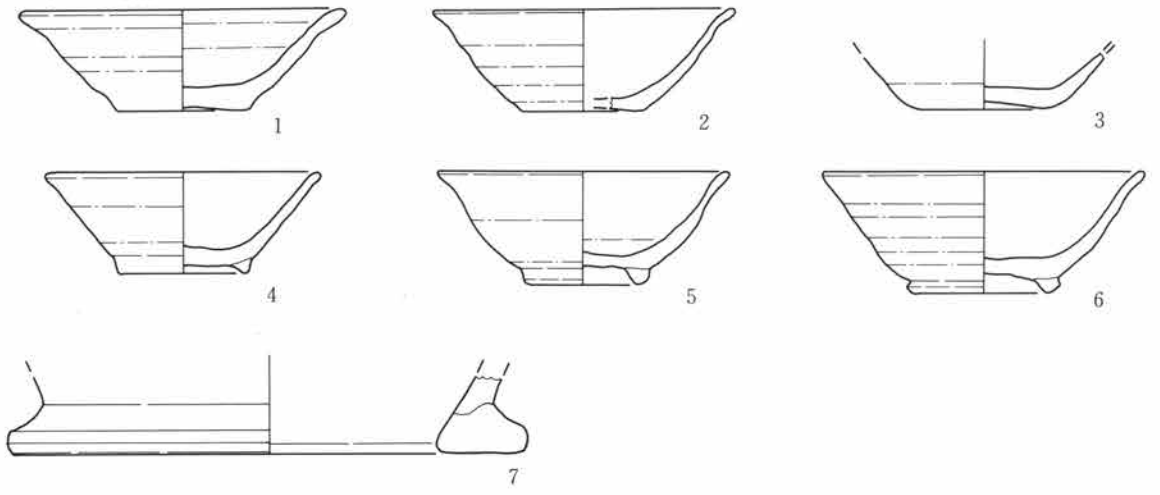
第108図 7号テラス遺物分布図



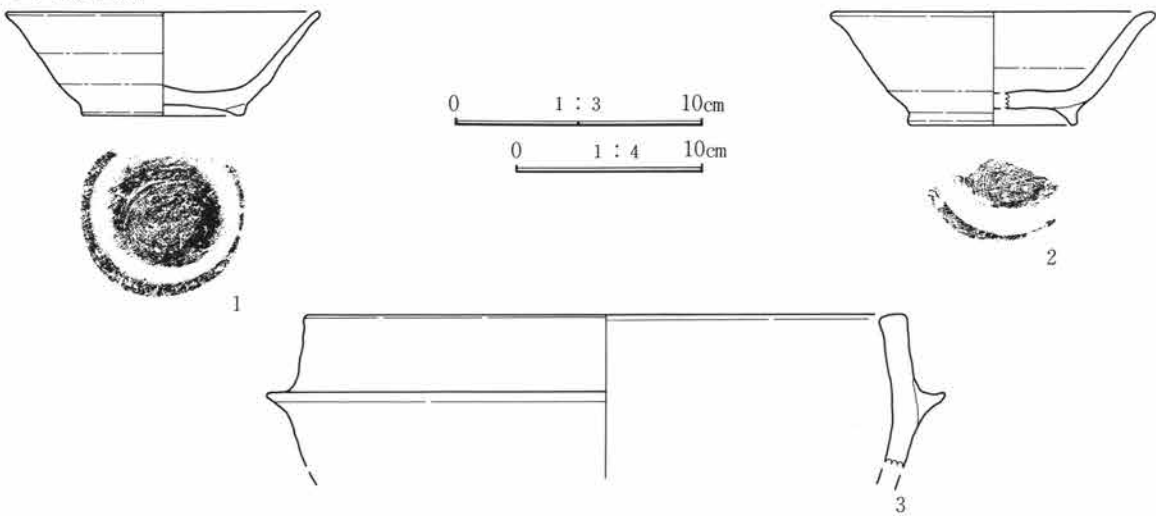
第109図 7号テラス出土遺物

第Ⅲ章 遺構と遺物

1号掘込遺構



2号掘込遺構



第110図 7号テラス掘込遺構出土遺物

(7) 8号テラス

位置 頂部区の西寄りから北へ派生する尾根上に造られたテラスである。標高は、183.5 m前後である。2号建物跡の北方25 mにあり、頂部区の礎石建物群に比較的近い所にある。

造成 本テラスは北方に緩く下る尾根の中央からやや西側に占地し、東側と南側の斜面を切土して造られている。地山は黄色のローム層である。尾根の幅がやや広く傾斜も緩いため、テラス面が広い割には切土の深さは最も深いところで50 cmと浅い。

形状・規模 本テラスは東西10 m、南北9 mほどの歪んだ方形状を呈す。前端の縁は緩やかに尾根の斜面に移行することから、形状・規模は厳密にはとらえにくい。テラス面の開く向きは、北方と西方であって、テラス面の形を方形とみた場合、辺の方向はN-108°-Eであり、方位軸に一致している。テラス面の標高はほぼ平坦であるが、標高は奥寄りで183.7 m、前端で183.0 mであり、わずかに下っている。

所在遺構 テラス面上には鍛冶炉5基、土坑10基、ピット約10基、焼土面1などの遺構がある。これらの遺構の大部分はテラス面の北西側に集中するようにあり、逆に言えば東側と南側は空いているとみられる。

鍛冶炉は、掘方の径が40 cm前後・深さ20 cm弱で、その中に径20~30 cmの炉床が造られていて、炉床は赤く焼けて、堅くしまっている。覆土は炭化物粒を多量に含む。土坑は鍛冶炉と相接するように混在しており、関連して機能していたものとみなされ、実際にそれを示すように3号土坑・7号土坑・8号土坑・9号土坑では鉄滓片が多量に出土した。鍛冶炉と土坑の規模や覆土の状況は下記のとおりである。

また、ピットは、径はおおむね15~20 cmであるが、深さは10 cm未満のものと30 cmほどのものがある。柱穴の可能性も考えれるが、建物にはまともならなかった。

出土遺物 テラスの中央付近、10号土坑の周りの径3 m程の範囲に土器がまとまって散布する。その中には敲き台状の石もあった。遺物番号の3・5・6・8はこの中に含まれるものであって本テラスに伴う可能性が考えれるが、15・20あるいは4と10は流入の可能性が考えれる。

鍛冶炉・土坑一覧

名称	規模・深さ(cm)	炉床の規模・深さ(cm)	覆土
1号炉	35×35 18	23×23 8	黒色土。細粉状の炭化物粒多量。
2号炉	37×35 17	31×30 9	黒色土。径数mmの炭化物粒多量。
3号炉	35×31 17	32×30 9	(黒色土)。
4号炉	43 12	15 5	黒色土。細粉状の炭化物粒多量。
5号炉	45×40 11	37×30 8	黒色土。細粉状の炭化物粒多量。
1号土坑	32×32 27		暗褐色土。
2号土坑	105×55 19		褐色土。焼土粒と炭化物粒を含む。
3号土坑	52×45 15		黄褐色土。鉄滓片の混入がある。
4号土坑	55×51 18		暗褐色土。軽石を多量に混入する。
5号土坑	40×40 12		暗褐色土。軽石を混入する。
6号土坑	28×24 10		暗褐色土。
7号土坑	100×75 14		暗黄褐色土。鉄滓片がやや多量。
8号土坑	86×85 15		暗黄褐色土。鉄滓片と炭化物粒多量。
9号土坑	100×77 7		暗黄褐色土。鉄滓片と炭化物粒多量。
10号土坑	88×62 32		

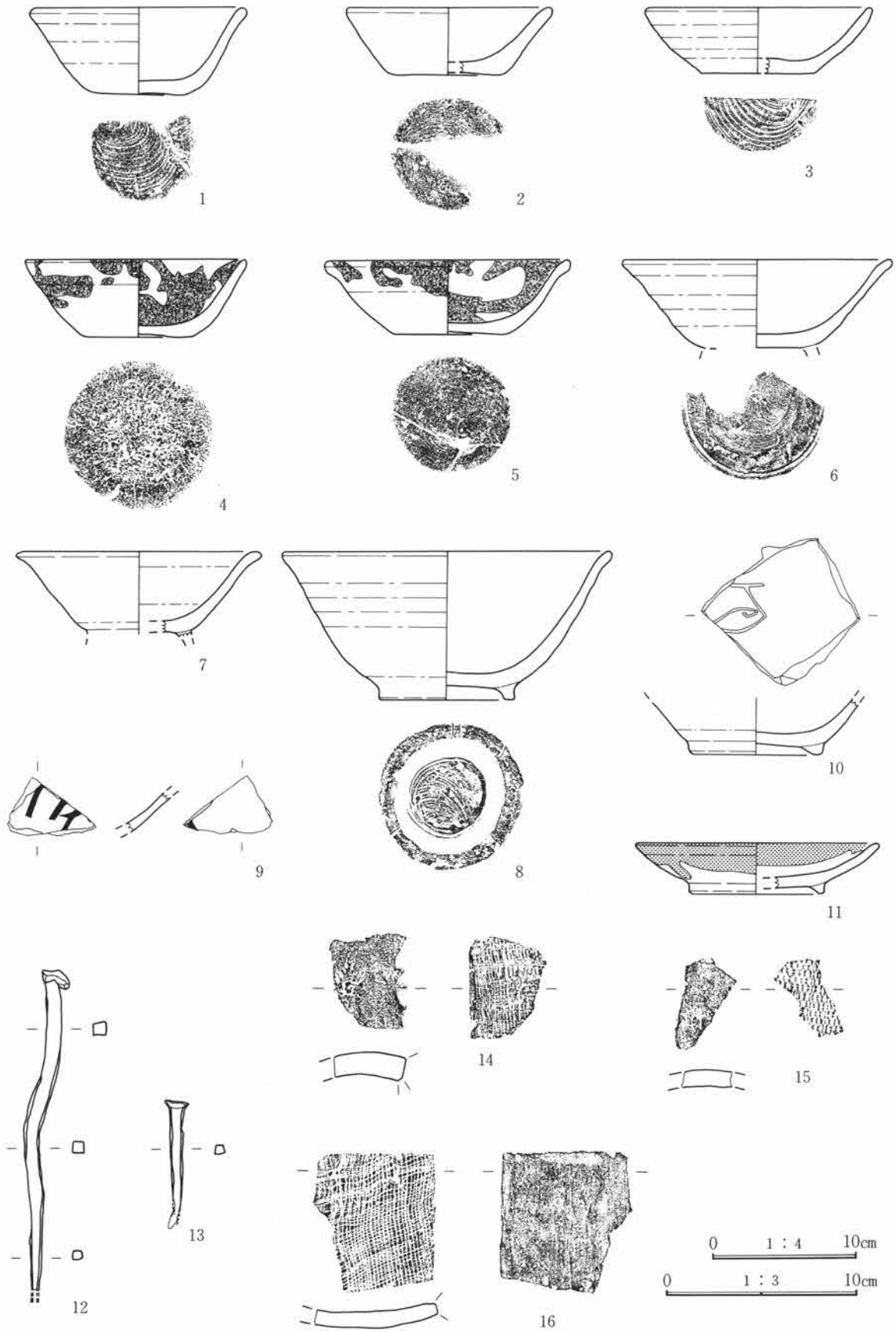


- 1 淡褐色土 しまりのないさくさくとした土である。〔攪乱土〕
- 2 暗褐色土 浅間B軽石を混入する。しまりはない。〔攪乱土〕
- 3 くすんだ黄褐色土 浅間B軽石を微量に混入する。しまりは弱い。
- 4 淡褐色土 軽石粒を混入し、ざらざらする。
- 5 黒褐色土 浅間B軽石を主体とし、褐色土などを少量混入する。
- 6 暗黄褐色土 土質は漸移ローム的であるが、土器片及び焼土・炭化物・鉄滓片などを混入する。本層の下面が鍛冶の作業面と見られる。
- 7 明黄褐色土 ローム漸移層的な土。
- 8 ややくすんだ黄色土 ローム漸移層的な土。
- 9 ややくすんだ黄色土 明褐色のローム質土を主体に黄色のロームブロックを混入する。しまりはややある。
- 10 やや暗い黄褐色土 ローム漸移的な土質であるが、混土である。
- 11 暗黄褐色土 混土であり、下面に炭化物が堆積する。
- 12 黄褐色土 10層に近似する。

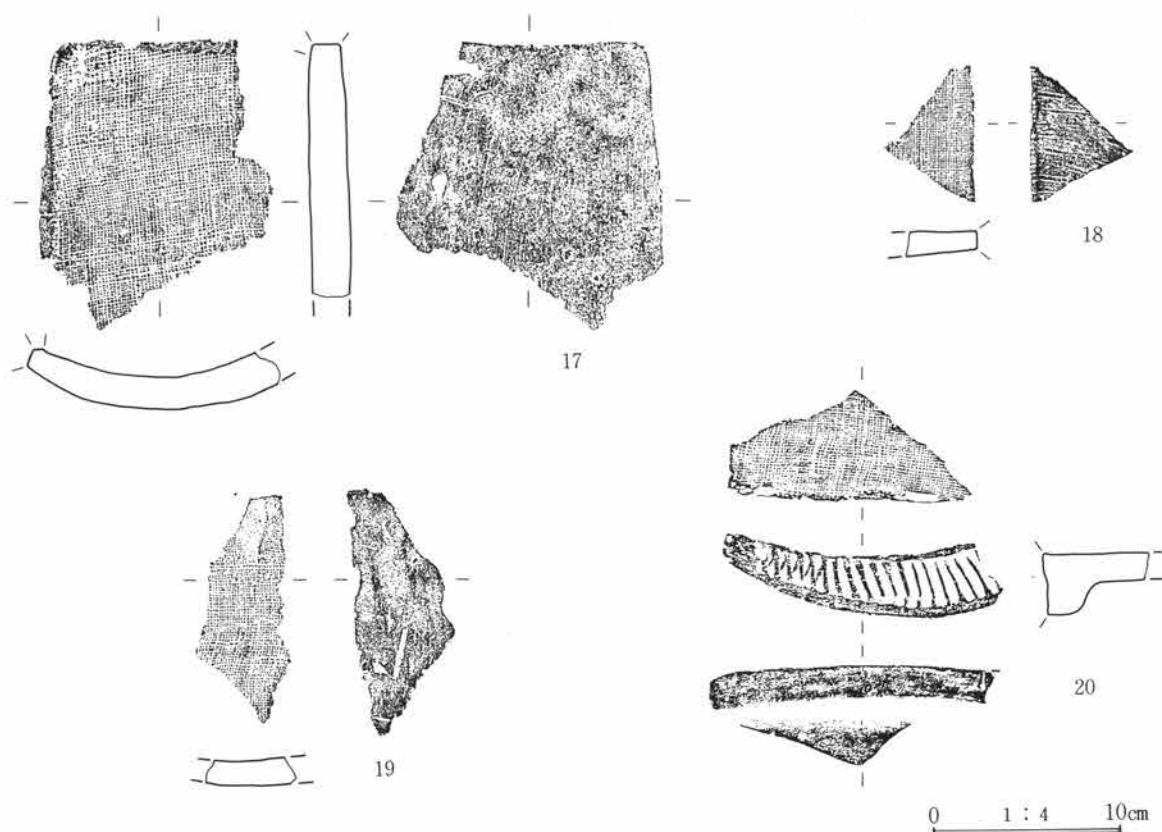
0 1 : 120 2 m

第111図 8号テラス

第三章 遺構と遺物



第113図 8号テラス出土遺物



第114図 8号テラス出土遺物

(8) 9号テラス

位置 東斜面区のやや下寄り、標高171 mに所在する。

東斜面区は頂部区の東方にあり、本遺跡の東側を限る開析谷まで一気に下る急斜面である。本区は斜面の角度が27度を測る急峻な斜面であるために遺構の存在は予測されなかったが、2基のテラスが確認され、下方のテラスを9号テラス、上方のテラスを10号テラスと名づけた。

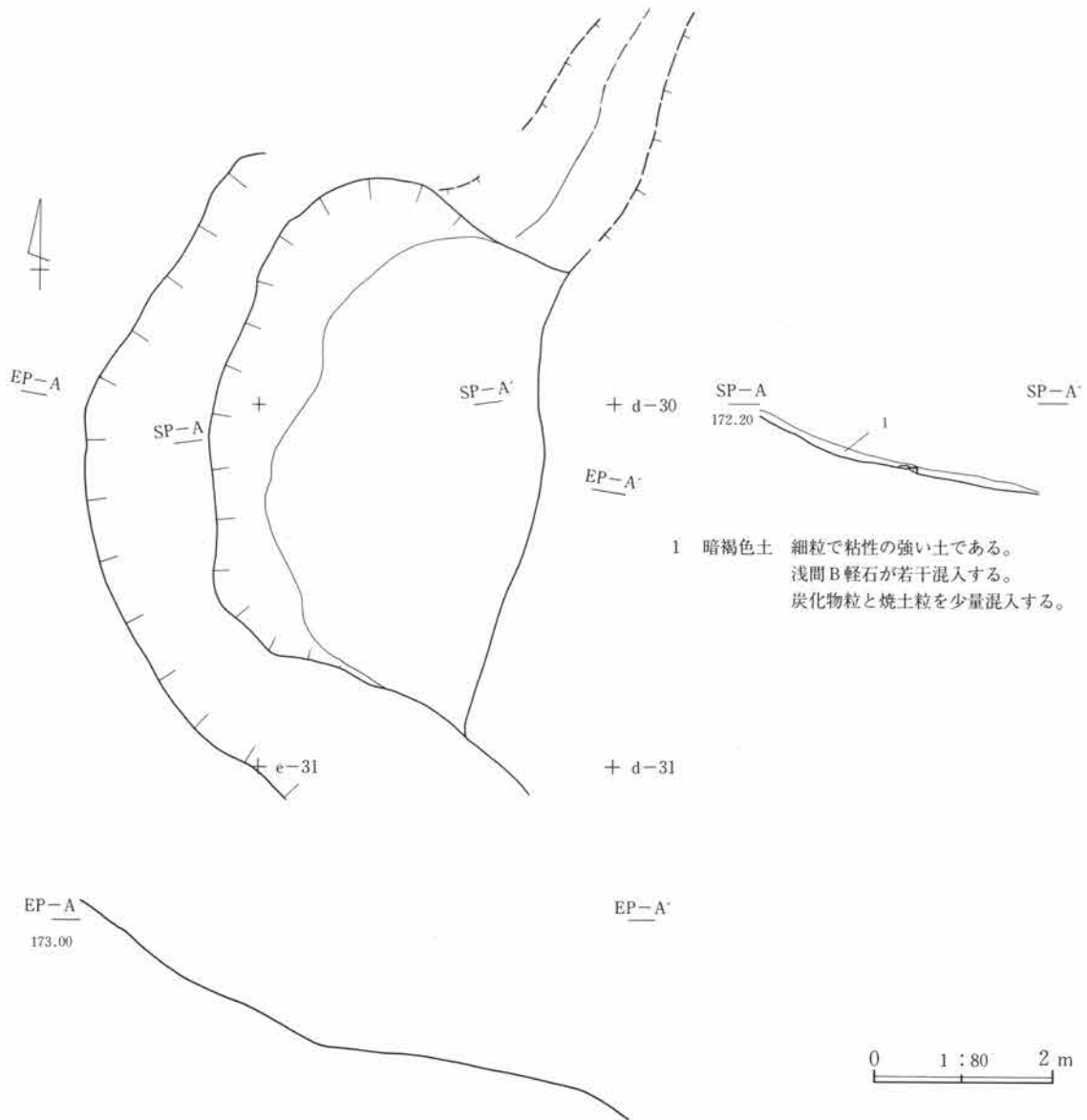
造成 丘陵斜面を比較的大きく掘りこんで造られている。地山は、礫を含むしまりの強い褐色の粘質土であり、掘削には苦慮したものと推測される。

形状・規模 平面形は方形気味の半円形であって、規模は幅5.0 m、奥行き3.0 mである。面積的には、一般的な住居跡と同規模である。テラスの開く向きは、N-108°-Eである。テラス面は、奥部と前端部では長さ3 mに対し、50 cmの差があり、東側に緩やかに下っている。南側は切土による壁面となっているが、北側は幅50 cmほどの平坦面が細長く続いているようであり、道路的な様相が推察された。

テラス面上には柱穴や炉などの遺構は確認されない。覆土は浅間B軽石を少量混入する暗褐色の粘性土であって、炭化物粒や焼土粒の混入もある。覆土内やテラス面上には石や土器片の散布があるが、土器はかならずしも原位置を保っているとはみられない。

出土遺物 9号テラスの出土遺物は、少量であって、図示したものは須恵器の高台付きの椀2個体と羽釜1点である。

なお、9号テラスと10号テラスのある東斜面では、全面に土器や瓦の破片の散布がみられた。上方つまり、5号テラスの方から落下したような状況が濃厚のようにみられた。その量はパン箱(60×37.5×14.5 cm)半分ほどであり、時期は全て平安期のものである。



第115図 9号テラス

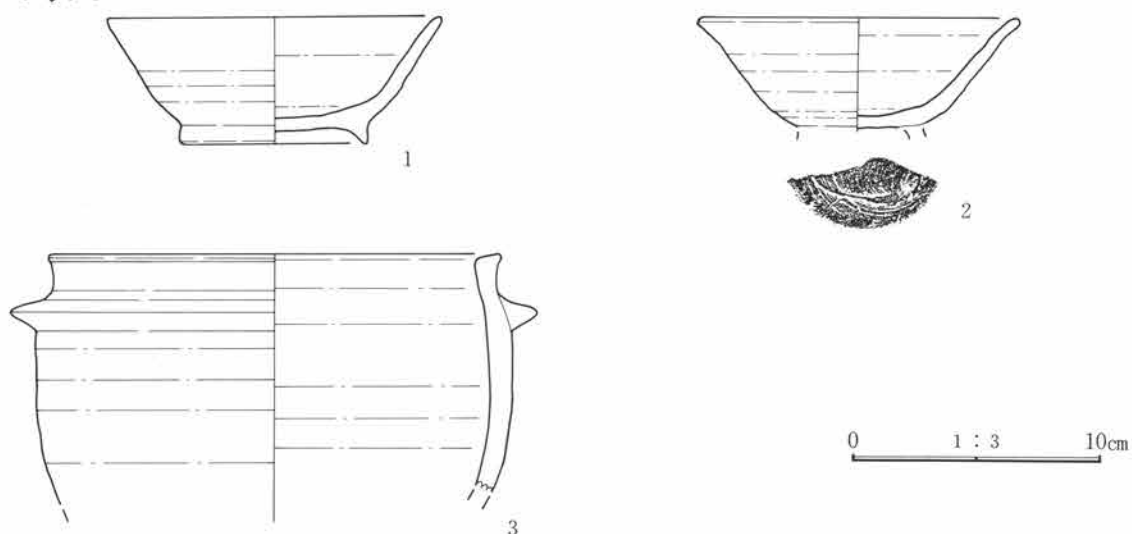
9号テラスと10号テラスの性格 9号テラスと10号テラスは共に東斜面区の急斜面にあり、形状・規模が類似していることから、同様な機能を有した遺構と考えられる。

この二つの遺構は、規模が竪穴住居跡とほぼ同様であり、性格として住居的な性格をもっていたかどうか問題となろう。しかし、本遺跡における竪穴住居跡は、斜面地においても基本的には矩形の平面形を呈し、また、壁も直にしっかり掘り込まれている。9号テラスと10号テラスはカマドも無く、伴出土器も皆無に近い。したがって、竪穴住居跡とは明確に区分されるものと考えられる。

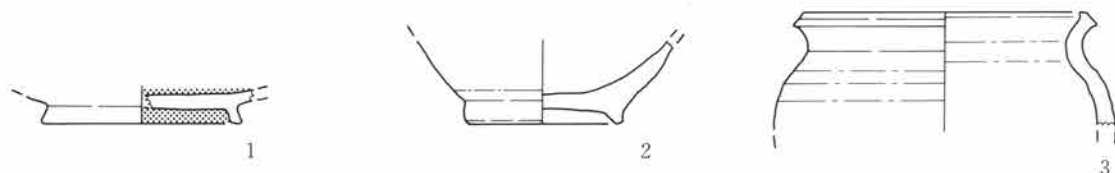
可能性としては、工房のようなものと推測されるが、鍛冶工房としての形跡は皆無であり、他の機能を考えるべきであろうが、具体的には不明確である。

9号テラスと10号テラスは、急な斜面に立地しており、また、岩礫を混入したきわめて粘性の強い地山を掘り込んでいる。あえてこのような地を選地したものと思われる。意図的に、そのような地形を選んで設けられるべき特殊な性格を有した遺構と見ておくのが妥当と推測される。

9号テラス



東斜面区



第116図 9号テラス・東斜面出土遺物

(9) 10号テラス

位置 東斜面区の上寄りにある。標高は180 mである。5号テラスの東縁から落ち込む急な崖面の直下であり、本テラス周辺はやや傾斜が緩やかとなっている。

造成 9号テラスと同様に丘陵斜面を切り込んで造られている。地山は灰褐色の粘質土であって、きわめて粘性が強く、掘削には相当苦慮したものと推察される。

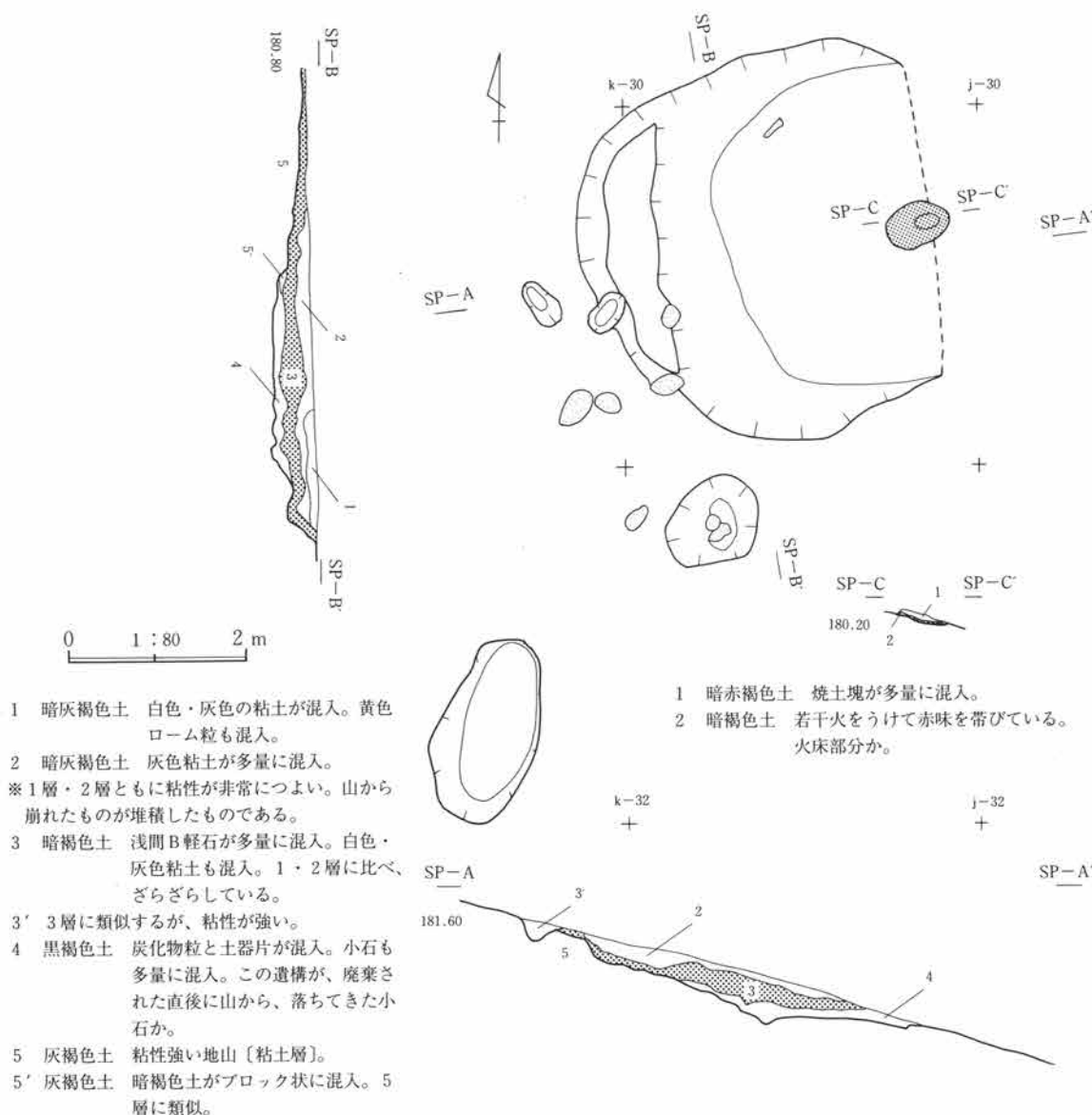
規模・形状 テラス面は方形気味の半円形を呈し、幅3.5 m、奥行き2.3 mであって、ほぼ水平である。テラス面の前端部は多少崩落しているようであり、元来は奥行きがより長かったものと思われる。テラスの開く向きは東方であって、方位はN-73°-Eである。

テラス面の前端部中央には、炉状の遺構がある。長さ70 cm、幅46 cm、深さ7 cmであって、浅く窪んでいる。焼け方はあまり強くはない。

本テラスの覆土はテラス面上に黒褐色土が堆積し、その上に浅間B軽石を多量に含む暗褐色土が堆積する。前者の黒褐色土は本遺構が廃棄された直後に堆積したものと見られ、炭化物や土器片の混入が見られる。後者の浅間B軽石層は、天仁元年(1108年)に降下したものであり、本遺構がその時期に近いものであることを示唆するものである。

隣接土坑 本テラスの南東方には土坑2基がある。本テラスに近い土坑は径95×110 cm、深さ15 cmであり、遠いほうの土坑は径210×110 cm、深さ20 cmである。この2基の土坑は本テラスに伴うものと見られるが、性格は不明である。

出土遺物 本遺跡に伴う遺物は、破片が少量あるものの、全て流れ込んだものと見られる。



第117図 10号テラス

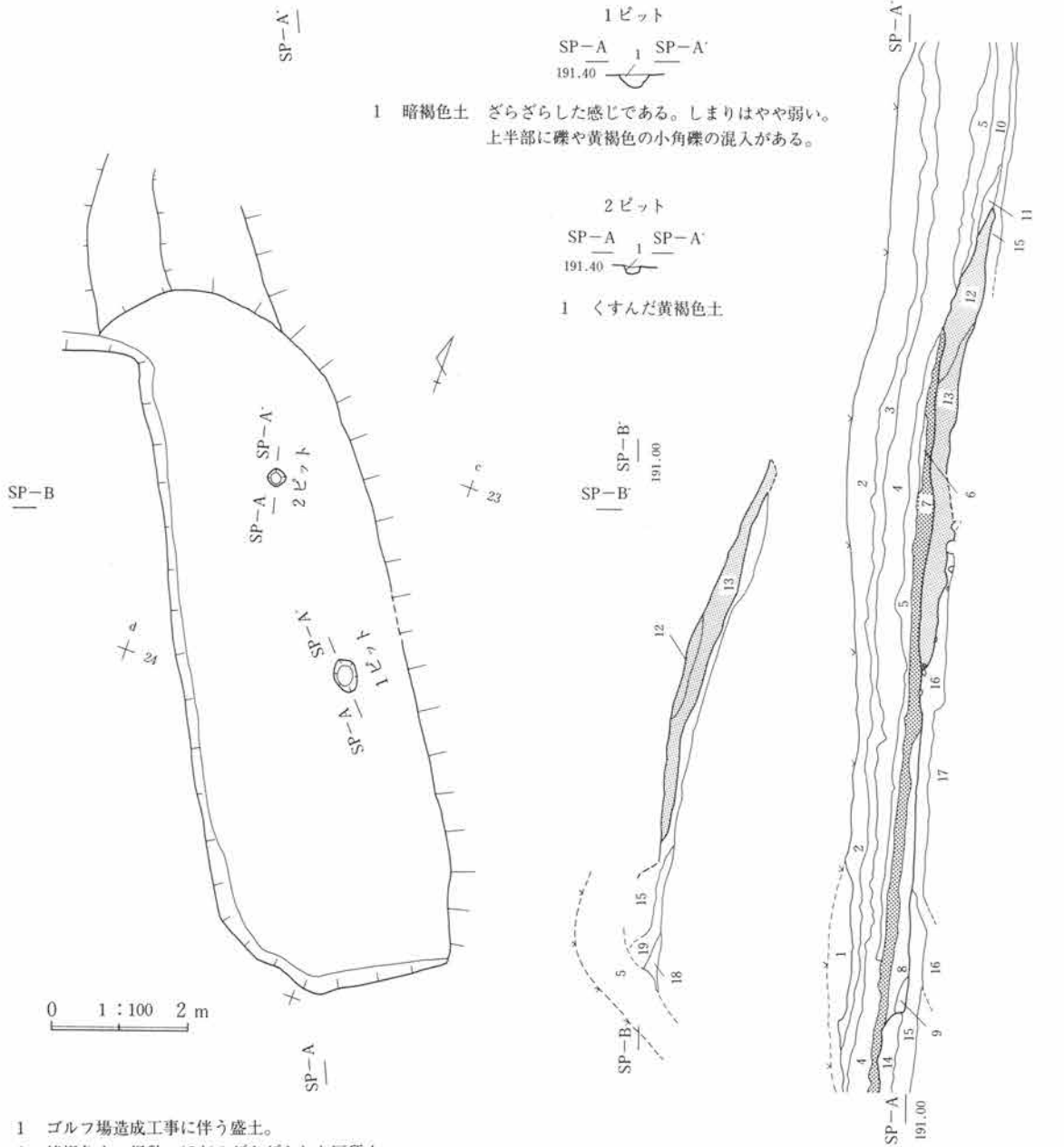
(10) 12号テラス

位置 西尾根の頂部からわずかに北西方にあたる尾根上にある。標高は191.5 mである。

造成 北西方へ下り気味に伸びる細尾根の北東側を切開、つまり南側と西側を切土し、東側と北側に盛土して造成されたテラスである。盛土は厚さ30~40 cmであり、黄白色の泥岩礫と褐色土の混土である。土の盛り方は層状をなしてはおらず、まとめて谷側に押し出すように盛られている。

形状・規模 本テラスは、幅10 m・奥行き2.5~3 mの細長い長方形を呈す。テラスの開く向きはN-62°-Eである。上面はほぼ平坦であるが、緩く北東側に下がっている。奥寄りには切土が暗褐色粘質土に達していてその中に含まれる河原石が数多く露出している。

所在遺構 テラス面上には小さなピットが2基ある。1号ピットは径40×25 cm・深さ20 cm、2号ピットは径20 cm・深さ10 cmである。この二つのピットの間隔は3.0 mであり、ピットを結んだ軸線の方位は北から39度西へ振れる。二つのピットの間隔である3 mの距離をとると、北西方はテラス外に出てしまう。が、南東方は



- 1 ゴルフ場造成工事に伴う盛土。
- 2 淡褐色土 径数mmほどのざらざらした灰質土。
- 3 浅間A軽石の純層である。
- 4 淡褐色土 2層と同じである。
- 5 淡黄褐色土 4層と同様な成分からなるとみられるが、粒子がより細かく、灰のような質感をもつ。混入物が全くなく、純粋な土である。
- 6 やや暗い黄褐色土 質的には5層に近似するが、色調がより暗く、またしまりもややある。
- 7 暗褐色土 ややきめが粗く、砂質でざらざらしている。浅間B軽石の混入層がある。
- 8 茶褐色土 きめの細かな粘性のある土である。上半部には7層の混入が見られる。
- 9 茶褐色土 8層に近似するが、色調がより明るい。
- 10 やや暗い黄茶褐色土 全体としては6層と7層の混合層とみなされるが、11層の混入が少量みられる。
- 11 淡黄褐色土 12層と13層の混合土とみなされる。
- 12 淡褐色土 きめの細かな褐色土であるが、黄橙色や黄白色の凝灰質泥岩の崩壊礫をきわめて多量に混入する。
- 13 やや黄色味をおびた褐色土 粘性をおび、しまりも強い。黄色の砂質の崩壊礫を少量混入する。〔盛土か〕
- 14 黄色ソフトローム質土。
- 15 暗褐色粘質土
- 16 やや暗い褐色粘質土 大小の河原石の礫を多量に含む。
- 17 黄色泥岩が崩壊した礫層
- 18 白色のシルト質の軟質礫層
- 19 黄褐色土層 褐色粘質の土層を主体にし、2層の礫が混入する。

第118図 12号テラス

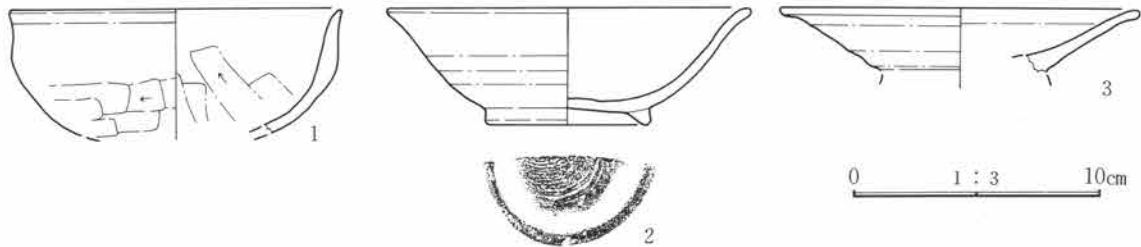
第Ⅲ章 遺構と遺物

テラス内に収まっており、所在の可能性はあるが、木痕により攪乱されて確認できなかった。もし、そこにピットがあるとすれば、3mつまり10尺の間隔で3個のピットが並ぶこととなる。またピット列の前面は1m内外の広さしかないが、奥は1.5~2.5mある。奥側にはピットは確認できなかったが、上屋など、なんらかの小規模な施設の存在は不可能ではないように思われる。

出土遺物 出土遺物はきわめて少量である。土師器の杯、須恵器の高台付碗と高台付皿が各一点ある。そのほかに、本遺構から落下したとみられる土器が斜面上に数点あった。

性格 本テラスの性格や機能についてはテラス上の遺構が不明確なため、類推は困難である。

本テラスから北東方を望むと、黒熊中西遺跡の寺院跡のほぼ全てを見ることができる。そのみならず、本遺跡の東方に隣接する黒熊八幡遺跡や塔ノ峰遺跡も指呼の間に見ることができ、さらに藤岡市から関東平野まできわめて広い眺望がえられる。本テラスは、広い眺望をえることも機能の一つにあったのではないかと推測されるほどである。



第119図 12号テラス出土遺物

第7節 焼土坑（燃火跡）

遺跡内にはさまざまな形の、火を使用したり、燃やしたりした遺構がある。住居跡のカマドや鍛冶炉も火の使用された遺構であるが、それを除いても遺構の数は多い。そして、カマドや炉以外の遺構は形態はさまざまであるが、性格や機能を推定することもきわめて難しい。しかし、多分に推測を含めて分類すると、以下の三つのケースにまとめられるように思われる。

A類 何らかの生産や作業のために火の使用が伴ったと推測されるもの。

B類 火を燃やして暖房としたり、不要物を焼却したとみられるもの。

C類 火を燃やす行為に何らかの意味や比重が置かれていたと推測されるもの。つまり、あえていえば儀式や祭礼に伴うと推測されるもの。

言い換えれば、A類は生産・作業にかかわる遺構、B類は暖房・焼却の遺構と表現されよう。C類は適切な表現は難しいが、本稿では「燃火跡」と呼ぶこととしたい。この分類はごくおおまかなもので、より細かな分類もありうるであろうし、二つ以上の機能を兼ねたものもありえたとと思われる。

個々の遺構が上記の分類のいずれに該当するかという判断基準・観点は、遺構の形状・遺構の位置・伴出遺物などによることが適当と思われる。具体的には下記のようなものである。

3号テラス上の3基の土坑、東尾根区の65号土坑・166号土坑、1号テラス区の8号土坑などはA類に該当する遺構とみられ、4号テラスの2基の土坑、10号テラス、東尾根区の1号掘立柱建物跡内の数基の焼土もA類と推測される。3号テラスの土坑は1号建物跡との位置関係からC類の可能性も考えられる。

3号建物跡の12号土坑、5号建物跡の3号土坑、1号建物跡の基壇上の土坑、4号建物跡の基壇上の焼土、中尾根東区の80号土坑・81号土坑・112号土坑はB類に該当するとみられる。しかし、3号建物跡の12号土

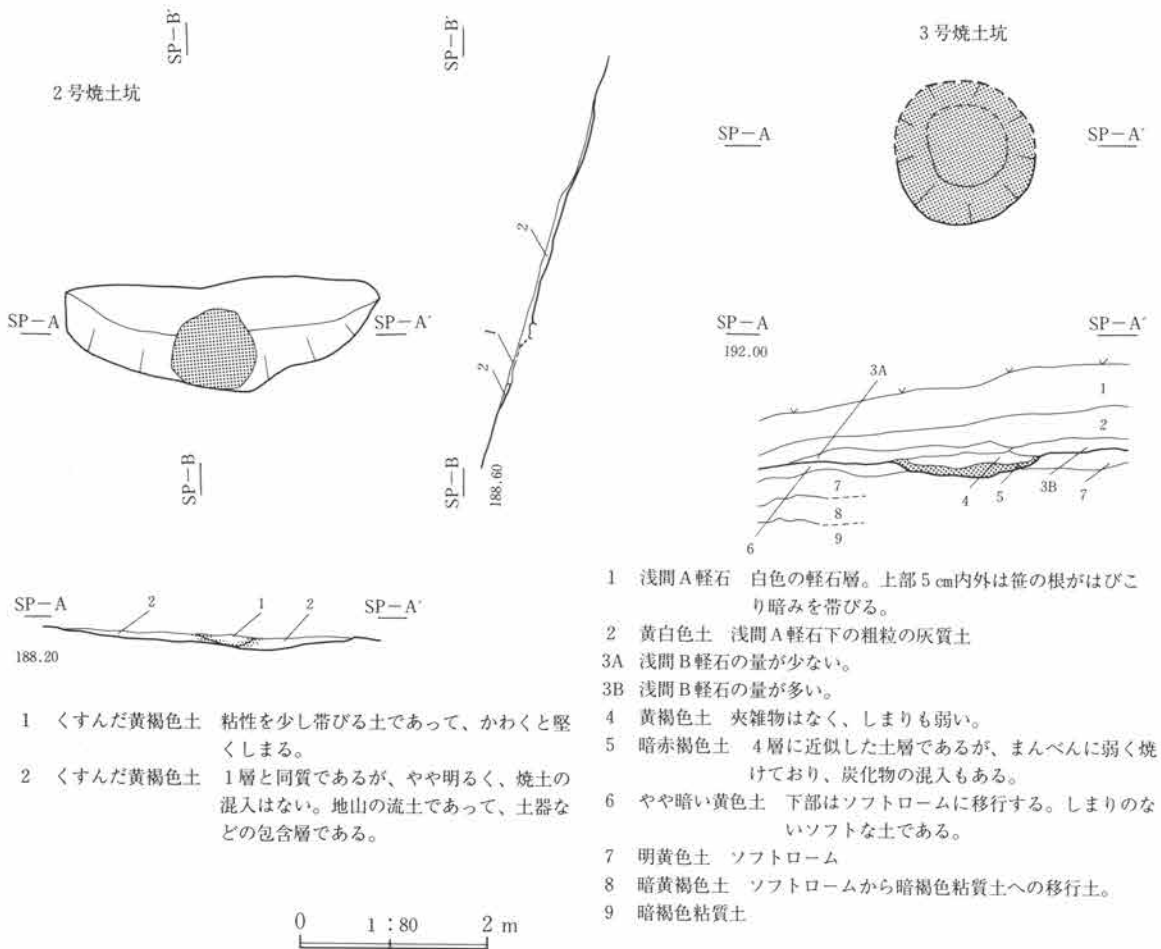
坑は建物建造にともなうものともみられ、その場合はA類に含まれる。また、5号建物跡の3号土坑は、建物との位置関係からみてC類の可能性もある。

4号建物跡の祭壇状遺構、7号建物跡の1号石組遺構、西尾根北区の2号焼土坑・3号焼土坑はC類に該当する遺構とみられる。

なお、2号焼土坑と3号焼土坑の「焼土坑」という用語は、発掘調査の時点において土坑内が焼けているものに用いた名称であるが、「焼土坑」は群馬県域では中近世の火葬墓を指すことが多く、そのような意味から、本遺跡の2号焼土坑と3号焼土坑にこの語を使うことには不適切な面が感じられ、「燃火跡」あるいは「燃火土坑」の語を用いるのがよいのではないかと考えられるものである。

(1) 2号焼土坑

西尾根南区、G区Y-24グリッドに位置し、北東方に傾斜する斜面にある。5号建物跡の北西約10mにあたる。焼けた部分は径90cmの不整形円形であって、深さ8cmほどの浅い土坑状を呈している。火の受け方はあまり強いとはみられない。本遺構は、山側を切土して造られた小規模なテラス状の平坦面、幅3.3m・奥行き1.1mの中央やや奥よりに位置しているようにみられる。このテラス状の平坦面は形としてはあまり明瞭ではないが、この平坦面上で西を向いて火を焚いたものと推測される。本遺構および周辺からは比較的多量の土器が出土した。ただし、本遺構の上方には5号建物跡や8号建物跡があり、それらの遺構から流下した可能性も



第120図 2号焼土坑・3号焼土坑

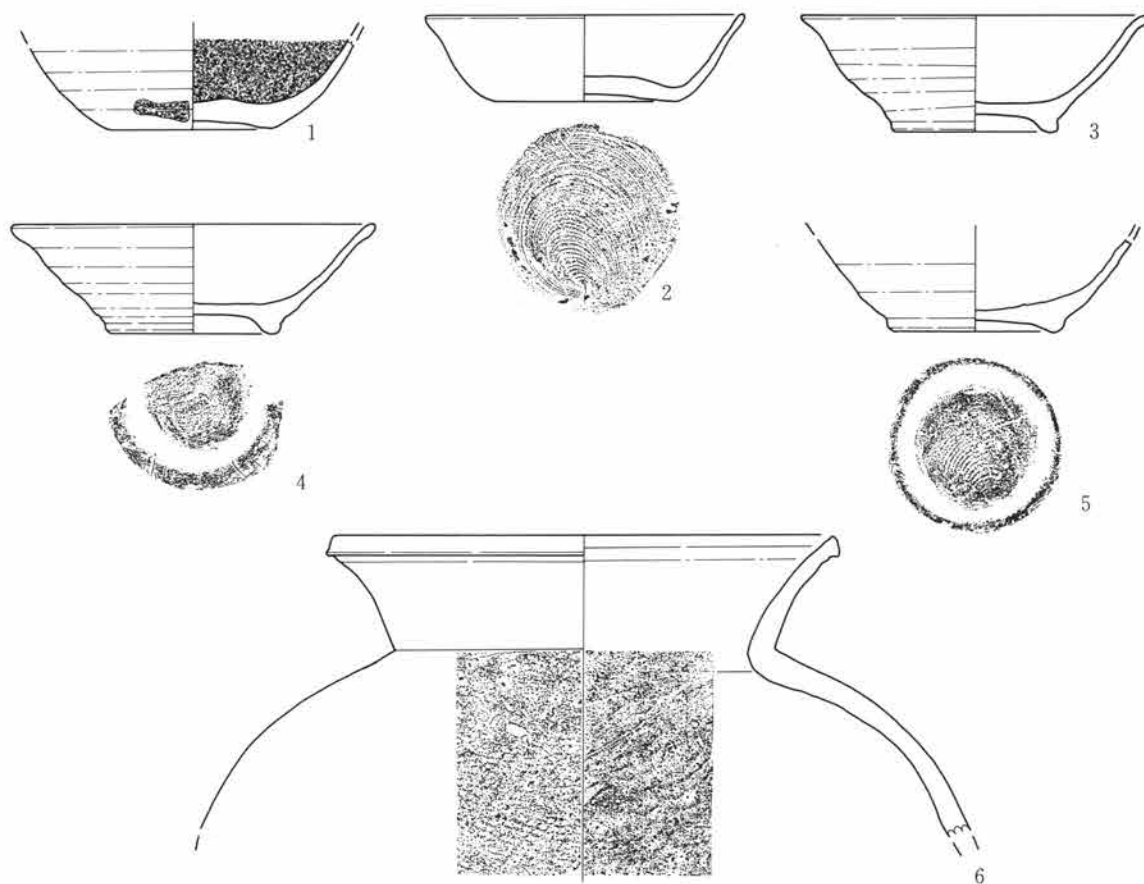
考えられる。

(2) 3号焼土坑

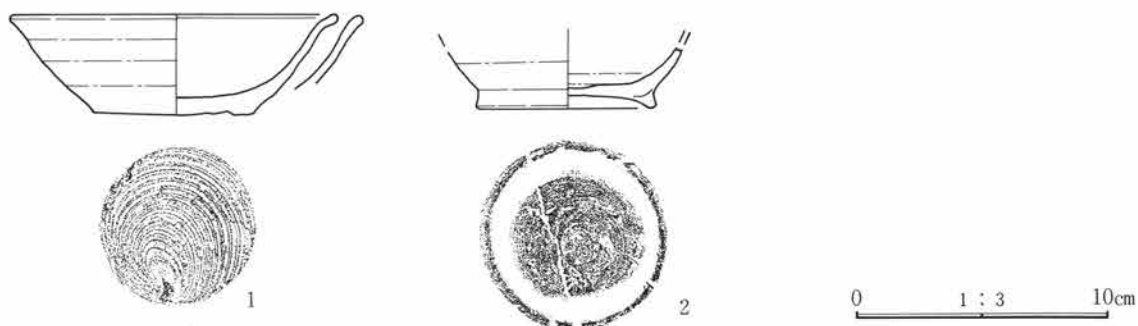
西尾根南区、H区A-26グリッドに位置し、8号建物跡と共に西尾根南区の尾根の最も高い地点、標高190.80 mにある。径150 cm、深さ5 cmほどの浅い土坑であり、底面が厚さ10 cmほど焼けて赤変している。焼け方は弱く、炭化物も少量混入する。本土坑は黄褐色土で埋まり、その上に浅間B軽石を多く混入する黄褐色土が広く堆積する。本土坑は8号建物跡の北西側の裾部に位置しており、同建物との関連が深いものと推測される。

本土坑からは、須恵器の杯と高台付椀各1個が出土している。8号建物跡からの流下した可能性も少しはあるが、おおむね本遺構に伴うものとみられる。

2号焼土坑



3号焼土坑



第121図 2号焼土坑・3号焼土坑出土遺物

第8節 鍛冶遺構

本遺跡で鍛冶遺構として確認されたものは、いわゆる鍛冶炉である。鍛冶炉には土坑を伴うものが多々あり、以下、そのような場合、鍛冶遺構としては鍛冶炉と土坑を一体的なものとして扱うものとする。

鍛冶炉は、8号テラス・5号建物跡・10号道路遺構上の3地点に分布し、2号建物跡・3号建物跡の基壇上でも鍛冶の行われた形跡を示す遺構がある。また、9号テラスや10号テラスなどでも鍛冶に関する作業がなされたことも想定されるが、断定はしえない。

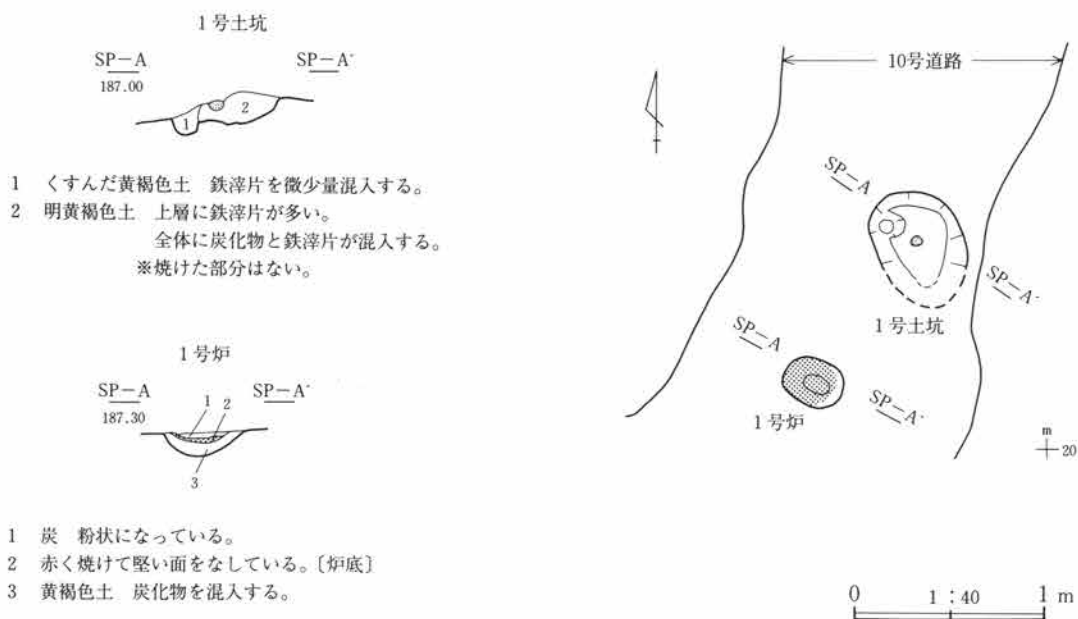
8号テラスは、5基の炉と約10基の土坑があり、土坑の中には小粒の鉄滓片の混入するものもあった。テラスの一角には敲き石とみられるものもあった。また、テラス上には小さな柱穴状のピットがいくつかあったが、作業小屋のような上屋施設の有無の確認はされなかった。8号テラスは、鍛冶工房的な域と考えられる。

5号建物跡では、基壇上に鍛冶炉と土坑各2基があり、基壇下に鍛冶炉1基があった。基壇上の土坑からは多量の鉄滓が残置されたような形で出土した。

10号道路遺構では路面上に、鍛冶炉と土坑各1基がある。鍛冶炉は、平面が長円形で、たて32cm、よこ25cm、深さ6cmである。炉床は赤く焼けて堅い。土坑は、たて63cm、よこ36cm、深さ12cmで、鉄滓片と炭化物が混入し、ファイゴの羽口が出土した。

2号建物跡・3号建物跡では、鍛冶炉は遺存していないが、ファイゴの羽口と鉄滓が散在し、鍛冶の行われた形跡が推測される（2号建物跡の「鍛冶状遺構」、3号建物跡の「鍛冶状遺構」）。

8号テラスのように鍛冶を主としたとみられる区域もあるが、礎石建物の基壇上に鍛冶遺構が多々あり、建物建造に伴って基壇上で鍛冶を行うことが普遍化していたこととも考えられる。



第122図 G区m-19グリッドの鍛冶炉と土坑

遺物觀察表

表 6	土器觀察表	p. 156~176
表 7	軒丸瓦觀察表	p. 177
表 8	軒平瓦觀察表	p. 177
表 9	丸瓦・平瓦・文字瓦等觀察表	p. 178~181
表10	鉄製品觀察表	p. 182

表6 土器観察表

3号道路

番号	器 器 種 形	遺 存 率	法 量(cm)	胎 土	焼 成 色 調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴
1	須恵器 甕	3/4	口 (25.0) 底 高 42.5	細	還元 良 青灰色	胴部の内面は青海波文の叩きがあり、底面付近は自然釉が付着する。胴部外面は平行文叩きの後、ヘラと思われるナデが施される。口頸部はロクロ回転ヨコナデである。

4号道路

番号	器 器 種 形	遺 存 率	法 量(cm)	胎 土	焼 成 色 調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴
1	須恵器 高台付椀	1/3	口 底 7.4 高	やや粗	酸化ざみ 不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ回転糸切りか。高台は付け高台、ヨコナデ。
2	須恵器 高台付椀	1/5	口 (13.0) 底 (7.0) 高 5.5	粗	酸化ざみ 不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。高台は付け高台、ヨコナデ。内外面に少量の黒色油煙が付着する。
3	須恵器 羽釜	破片	口 26.0 底 高	粗	酸化ざみ 不良 明橙色	内外面ロクロ回転ヨコナデ。鏝は貼り付け。部分的にススが付着する。

10号道路

番号	器 器 種 形	遺 存 率	法 量(cm)	胎 土	焼 成 色 調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴
1	須恵器 小壺	完形	口 8.1 底 2.3 高 6.0	普	酸化ざみ 普 明橙色	内面から外面口縁部はヨコナデ。胴部外面から底部はヘラ削り。内面に斑状の器面剝離が見られ、若干の使用は認められるが、頻度は高くはないと思われる。

1号建物跡基壇上

番号	器 器 種 形	遺 存 率	法 量(cm)	胎 土	焼 成 色 調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴
1	須恵器 杯	3/4	口 (11.6) 底 5.0 高 3.8	普	還元 普 淡褐色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。体部外面のロクロ目は不明瞭。
2	土師器 杯	4/5	口 11.4 底 4.2 高 3.2	普	酸化 普 明赤褐色	内面から体部外面はヨコナデ。底部は無調整か。体部外面に指おさえあり。
3	須恵器 高台付椀	2/5	口 (13.0) 底 (5.0) 高 4.3	普	還元 普 灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部は右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。体部外面のロクロ目はあまり明瞭ではない。
4	須恵器 高台付杯	1/3	口 (12.7) 底 (5.7) 高 4.2	粗	酸化 不良 淡橙色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。高台は付け高台、ヨコナデ。
5	須恵器 高台付椀	3/4	口 14.8 底 9.8 高 7.0	粗	酸化ざみ 不良 褐色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。高台は付け高台、ヨコナデ。器面がややあれており、整形がやや不明瞭。口縁部は二次焼成を受け、明茶褐色味をおびている。いわゆる「土師質土器・足高高台の椀」。
6	須恵器 高台付椀	底部のみ	口 底 8.2 高	普	還元 普 灰色	底部は整形不良。高台は付け高台、ヨコナデ。
7	須恵器 高台付椀	底部のみ	口 底 7.0 高	粗	還元 普 褐色	高台は付け高台、ヨコナデか。

1号建物跡基壇下

番号	器 種 器 形	遺 存 率	法 量(cm)	胎 土	焼 成 色 調	成 形・整 形 の 特 徴
1	須恵器 高台付椀か	破片	口 底 高	普	酸化ざみ 不良 明橙色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデか。底部はロクロ右回転糸切り。

1号建物跡周辺・フク土

番号	器 種 器 形	遺 存 率	法 量(cm)	胎 土	焼 成 色 調	成 形・整 形 の 特 徴
1	須恵器 高台付椀	1/5	口 (13.2) 底 (5.8) 高 4.3	粗	酸化ざみ 不良 黄灰色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部は整形不明。高台は付け高台、ヨコナデ。体部外面のロクロ目は不明瞭。
2	須恵器 高台付椀	破片	口 底 高 6.0	普	酸化ざみ 不良 黄灰色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部は整形不明。高台は付け高台、ヨコナデ。内面底部は器面があられている。
3	須恵器 硯	破片	口 底 (27.0) 高 (5.0)	普	酸化ざみ 不良 明橙色	円面硯の脚部である。整形は、ロクロ回転ヨコナデである。窓は方形で8ヶ所にあく。ヘラによる平行線状の線刻がある。
5	須恵器 杯	底部のみ	口 底 高 6.6	普	酸化ざみ 普 淡褐色	内面から外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。
6	須恵器 羽釜	小片	口 底 高	普	酸化ざみ 良 淡褐色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。罫は貼り付け。

2号建物跡基壇上

番号	器 種 器 形	遺 存 率	法 量(cm)	胎 土	焼 成 色 調	成 形・整 形 の 特 徴
1	須恵器 杯	2/3	口 12.6 底 5.8 高 3.8	普	酸化ざみ 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。下半部は黒色で燻べ焼き状を呈す。
2	須恵器 杯	1/5	口 (11.8) 底 5.4 高 3.7	粗	酸化ざみ 不良 鈍い灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。体部外面のロクロ目は明瞭。内面のロクロ目はやや不明瞭。体部内外面に黒色油煙状の付着物が少量あり。
3	須恵器 杯	1/2	口 12.2 底 5.4 高 3.8	普	還元 普 暗灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。体部外面のロクロ目はわずかにあり。焼成は燻べ焼き風で、ややあまい。
4	須恵器 杯	1/5	口 (10.0) 底 4.5 高 3.8	普	酸化ざみ 普 淡褐色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。
5	須恵器 杯	5/6	口 12.4 底 5.1 高 3.9	普	還元 普 淡褐色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。焼成は燻べ焼風で、ややあまい。
6	須恵器 杯	1/3	口 (11.0) 底 4.6 高 3.9	粗	酸化ざみ 不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ回転糸切り。
7	須恵器 杯	2/5	口 (11.2) 底 4.8 高 3.7	普	酸化 普 明橙色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ回転糸切り。体部外面のロクロ目はやや明瞭である。
8	須恵器 杯	1/6	口 (10.8) 底 (4.6) 高 3.9	普	酸化 普 橙色	体部内外面は摩耗しているために整形は不明。
9	須恵器 高台付椀	1/6	口 14.0 底 5.6 高 5.0	普	還元 良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。

10	須恵器 高台付椀	4/5	口 底 高	13.6 6.9 4.5	普	酸化ざみ 普 明橙色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
11	須恵器 高台付椀	3/5	口 底 高	15.2 7.5 5.2	細	酸化ざみ 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。器面全体に油を吸収して、剥離が生じているかのような。部分的に薄い油煙が付着する。
12	須恵器 高台付椀	1/3	口 底 高	(13.8) 6.0 5.3	粗	酸化ざみ 不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
13	須恵器 高台付椀	1/3	口 底 高	(13.4) 5.8 5.4	粗	還元 不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。体部外面のロクロ目は弱い。
14	須恵器 高台付椀	3/5	口 底 高	(13.4) 6.8 4.5	普	還元 普 鈍い黒色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転ナデ状。高台は付け高台、ヨコナデ。体部内外面のロクロ目はやや不明瞭。焼成は燻べ焼き状である。
15	須恵器 高台付椀	3/5	口 底 高	12.8 6.2 4.9	普	酸化ざみ 普 明橙色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。体部外面のロクロ目は明瞭。体部内面のロクロ目は不明瞭。
16	須恵器 高台付椀	4/5	口 底 高	10.2 5.4 4.1	普	酸化ざみ 不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。体部内外面のロクロ目は明瞭。
17	須恵器 高台付椀	1/4	口 底 高	(13.8) (7.0) 5.0	普	還元 普 灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
18	須恵器 高台付杯	1/4	口 底 高	(11.6)	普	還元 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部は糸切り。高台は付け高台の後に、ロクロ回転ナデ。
19	須恵器 高台付椀	1/5	口 底 高	(7.8) (6.6) 4.7	粗	酸化ざみ 普 灰黄色	器面が全体に荒れているため、整形は不明瞭。
20	須恵器 高台付椀	1/5	口 底 高	(16.0)	普	還元 普 灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。体部外面のロクロ目が顕著。
21	須恵器 高台付椀	1/5	口 底 高	12.8 6.0 5.1	普	酸化ざみ 不良 褐色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部は整形不明。高台は付け高台、ヨコナデ。体部外面のロクロ目はやや明瞭。全体に油状物質を吸着しているために、色調が黒色味をおびている。
22	須恵器 高台付椀	下半部のみ	口 底 高	9.6	普	還元 普 灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部は糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
23	須恵器 高台付椀	下半部のみ	口 底 高	7.2	細	還元 良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部は糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
24	須恵器 高台付椀	下半部のみ	口 底 高	6.2	普	酸化ざみ 良 淡褐色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
25	須恵器 高台付椀	下半部のみ	口 底 高	5.5	普	還元 良 明橙色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。体部外面のロクロ目はあまり明瞭ではない。器面には広く油状物質が付着し、その部分は黒色味をおびている。
26	須恵器 高台付椀	下半部のみ	口 底 高	5.4	普	酸化ざみ 普 明橙色	高台は付け高台。器面が摩耗しているため、整形は不明。
27	須恵器 高台付椀	1/3	口 底 高	(16.8)	普	酸化 良 明赤褐色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。高台部の作成技法は不明。体部外面のロクロ目は明瞭。
28	須恵器 高盤か	脚部完存	口 底 高	11.2	普	酸化ざみ 良 明橙色	内外面ロクロ右回転ヨコナデ。糸切り痕付着。

29	須恵器 高盤	脚部の3/4	口 底 13.4 高	細	還元 良 灰黄色	内外面ロクロ回転ヨコナデ。外面のロクロ目は弱い。
30	灰釉陶器 高台付椀	1/3	口 底 7.8 高	細	還元 良 灰白色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はナデか。高台は付け高台、ヨコナデ。釉は口縁部の内外面に漬け掛けで、薄く塗布。釉の色調は淡い灰緑色である。高台は三日月高台。
31	須恵器 杯	下半部のみ	口 底 (6.0) 高	粗	還元 普 青灰色	内面から口縁部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。外面底部に墨書あり。
32	須恵器 杯 (転用硯か)	ほぼ完形	口 11.0 底 6.0 高 3.4	普	還元 良 青灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。内面底部がやや摩耗している。口縁部内面に広く墨痕が付着する。
33	須恵器 高台付椀 灯火器	1/3	口 (11.4) 底 6.5 高 3.8	粗	酸化 不良 明橙色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。内面口縁部に油煙が付着する。
34	須恵器 高台付杯 灯火器	1/3	口 13.0 底 6.2 高 4.1	普	酸化ざみ 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
35	須恵器 杯 灯火器	1/3	口 (12.2) 底 (4.3) 高 4.1	普	酸化ざみ 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ回転糸切り。内面、口縁部から口唇部に油煙が付着する。
36	須恵器 高台付杯 灯火器	4/5	口 11.8 底 6.0 高 4.2	粗	還元 普 淡褐色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部は糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。内面に黒色油煙状物質が付着する。
37	須恵器 杯	1/3	口 (10.0) 底 4.5 高 3.3	普	還元 普 褐色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。体部外面のロクロ目は弱い。内面底部に油煙が付着する。口縁部を除いた内外面に油が吸着しているためか、黒色味をおびている。
38	須恵器 杯 灯火器	ほぼ完形	口 12.3 底 5.5 高 4.0	普	還元 普 暗褐色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部は糸切り。口縁部の内外面に、少量の油煙が付着する。
39	須恵器 高台付椀	ほぼ完形	口 11.6 底 7.2 高 5.4	普	還元 普 暗褐色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部は整形不明。高台は付け高台、ヨコナデ。内面に厚く、外面に薄く、黒色物質が付着する。漆であろうか。
40	須恵器 高台付椀 灯火器	3/5	口 (14.2) 底 7.2 高 4.6	普	酸化ざみ 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部は糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。体部外面のロクロ目は明瞭。器面全体に油を吸着したかのような表面剥離がみられる。内面口縁部に4ヶ所の灯心痕と油煙がみられる。
41	須恵器 高台付椀 灯火器	1/3	口 (12.7) 底 (5.5) 高 5.3	粗	酸化ざみ 不良 明橙色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部は整形不明。高台は付け高台、ヨコナデ。内面口縁部から口唇部にかけて、油煙が付着する。
42	須恵器 杯 灯火器	1/4	口 (11.7) 底 (4.5) 高 3.3	普	還元 普 淡褐色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ回転糸切り。口縁部内外面に油煙が付着する。
43	須恵器 杯 灯火器	破片	口 (12.4) 底 高	普	還元 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。外面の黒色付着物は薄い。
44	須恵器 杯 灯火器	1/3	口 (12.0) 底 (5.2) 高 3.4	粗	酸化ざみ 不良 灰黄色	体部内外面は摩耗のために、整形は不明。
45	須恵器 甕	破片	口 底 高	細	還元 良 青灰色	内面は青海波文の叩き。外面はヨコナデ後、格子目叩き。
46	須恵器 壺	破片	口 (23.4) 底 高	普	還元 良 灰色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。
47	土師器 甕	破片	口 (23.4) 底 高	細	酸化 良 明赤褐色	成形は粘土紐積み上げ。内面から口唇部はヨコナデ。口縁部外面は指による成形後、二条のヨコナデ。胴部外面はヘラ削り。

48	土師器 小型甕	破片	口 底 高	(11.8)	細	酸化 普 橙色	内面から頸部外面はヨコナデ。胴部外面はヘラ削り。
49	須恵器 羽釜	ほぼ完形	口 底 高	20.3 7.3 26.0	粗	還元 普 灰黄色	内外面ロクロ回転ヨコナデ。下半部ヘラ削り。
50	須恵器 羽釜	3/4	口 底 高	21.3 5.3 26.3	粗	酸化ざみ 普 明橙色	内面から外面上半ロクロ右回転ヨコナデ。下半部ヘラ削り。底部ヘラ削り。煮沸に使用したかもしれない。
51	須恵器 羽釜	ほぼ完形	口 底 高	22.0 6.4 28.2	粗	還元 普 灰黄色	内外面ロクロ回転ヨコナデ。下半部ヘラ削り。底部ヘラ削り。
52	須恵器 羽釜	ほぼ完形	口 底 高	22.0 5.6 25.4	粗	還元 普 黒色	内面から外面上半ロクロ右回転ヨコナデ。下半部ヘラ削り。二次焼成(煮沸の使用)はみられない。

2号建物跡基壇下

番号	器 種 器 形	遺 存 率	法 量(cm)	胎 土	焼 成 色 調	成 形・整 形 の 特 徴	
1	須恵器 高台付椀	1/2	口 底 高	14.5 7.8 6.0	やや粗	還元 やや不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
2	須恵器 高台付椀	3/4	口 底 高	14~16 7.1 6.0	普	還元 普 灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。体部外面のロクロ目は弱い。
3	須恵器 高台付椀	下半部のみ	口 底 高	6.5	普	酸化 普 明赤褐色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
4	須恵器 高台付椀	下半部のみ	口 底 高	(7.8)	普	還元 普 黒色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部は回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。内外面黒色処理。
5	須恵器 蓋	1/4	口 鈕 高	12.4 3.1 3.5	やや細	還元 やや良 灰色	内面から体部外面下半はロクロ右回転ヨコナデ。体部外面上半はロクロ右回転ヘラ削り。ツマミは貼付け後、ヨコナデ。
6	須恵器 蓋	4/5	口 鈕 高	(14.5) 3.7	普	還元 普 灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。外面のロクロ目は明瞭。内面底部にスガが付着する。摩耗はしていないので転用硯とはいいいがたい。

2号建物跡不明

番号	器 種 器 形	遺 存 率	法 量(cm)	胎 土	焼 成 色 調	成 形・整 形 の 特 徴	
1	須恵器 杯	底部のみ	口 底 高	(7.0)	普	還元 普 灰色	内面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。内面底部に墨痕があるが、文字かどうかは判然としない。
2	須恵器 蓋	破片	口 鈕 高		細	還元 普 灰色	整形はロクロ回転ヨコナデ。外面に墨書あり。

2号建物跡地鎮状

番号	器 種 器 形	遺 存 率	法 量(cm)	胎 土	焼 成 色 調	成 形・整 形 の 特 徴	
1	須恵器 椀	完形	口 底 高	11.8 5.2 4.5	普	還元 普 灰黒色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。使用した痕跡はみとめられない。
2	須恵器 椀	完形	口 底 高	10.3 5.2 3.8	普	酸化ざみ 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。使用した痕跡はみとめられない。

3	須恵器 杯	4/5	口 底 高	10.6 5.0 3.2	粗	酸化 不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。使用した痕跡はみとめられない。
4	須恵器 高台付杯	ほぼ完形	口 底 高	11.7 5.0 4.5	粗	酸化 不良 淡褐色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台。
5	須恵器 高台付椀	完形	口 底 高	11.0 5.7 4.3	普	酸化 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部は回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
6	須恵器 小壺	完形	口 底 高	5.2 5.2 7.9	普	還元 普 淡灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。使用した痕跡はみとめられない。

2号建物跡北方整地面上

番号	器 種 形	遺存率	法 量(cm)	胎 土	焼 成 調	成 形・整 形の特 徴	
1	灰釉陶器 高台付椀	底部のみ	口 底 高	6.4	細	還元 良 灰黄色	内面から外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ回転ナデ。高台は付け高台、ヨコナデ。
2	須恵器 高台付椀	1/5	口 底 高	(14.0) 6.0 5.3	普	還元 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
3	須恵器 高台付椀	下半部のみ	口 底 高	(6.0)	細	還元 普 灰色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。外面にロクロ目あり。内外面に墨痕があるが、文字とは認め難い。
4	須恵器 大甕	破片	口 底 高		普	還元 良 青色	内外面ロクロ回転ヨコナデ。外面に3条の波状文が2段あり。

2号建物跡北方整地地下

番号	器 種 形	遺存率	法 量(cm)	胎 土	焼 成 調	成 形・整 形の特 徴	
1	須恵器 杯	1/3	口 底 高	(12.2) 5.8 3.8	細	還元 やや不良 灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。
2	須恵器 椀	1/2	口 底 高	(13.6) 6.0 5.7	普	酸化 普 明赤褐色	内面は丁寧なナデ。体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。
3	須恵器 椀	1/2	口 底 高	(13.4) 5.2 4.2	普	酸化 普 明橙色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。
4	須恵器 杯	2/3	口 底 高	(13.0) 6.0 3.6	やや細	還元 普 青灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。
5	須恵器 杯	1/3	口 底 高	5.5	普	やや還元 普 暗褐色	内面から体部外面はロクロヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。
6	須恵器 高台付椀	2/3	口 底 高	(14.4) 6.0 5.0	普	還元 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部は糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
7	須恵器 高台付皿	1/2	口 底 高	13.0 7.0 3.3	細	やや酸化 普 黒色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部は整形不明。高台は付け高台、ヨコナデ。色調は一部灰黄色を呈す。
8	須恵器 高台付皿	2/3	口 底 高	(13.5) 6.2 3.5	普	酸化 普 橙色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
9	須恵器 高台付皿	1/3	口 底 高	6.6	普	還元 普 灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。

10	須恵器 高台付椀	1/4	口 底 8.6 高 8.1	やや細	酸化ざみ 良 明灰褐色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部は糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。外面口縁部に弱い一条の沈線あり。
11	須恵器 蓋	ほぼ完形	口 18.6 鈕 5.5 高 3.5	普	還元 良 青灰色	内面から体部外面下半はロクロ右回転ヨコナデ。体部外面上半はロクロ右回転ヘラ削り。ツマミは貼付けで、ロクロ回転ヨコナデ。
12	須恵器 高台付椀	1/4	口 (16.6) 底 (10.8) 高 7.5	普	還元 普 灰色	内面から体部外面上半はロクロ右回転ヨコナデ。体部外面下半はロクロ右回転ヘラ削り。高台は付け高台後、ロクロ回転ヨコナデ。体部外面にロクロ回転による沈線が二条あり。
13	須恵器 蓋	ほぼ完形	口 18.0 鈕 5.2 高 3.5	普	還元 良 青灰色	内面から体部外面下半はロクロ右回転ヨコナデ。体部外面上半はロクロ右回転ヘラ削り。ツマミは貼付けで、ロクロ回転ヨコナデ。
14	須恵器 高台付椀	1/8	口 底 10.8 高	普	還元 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ロクロ右回転ヨコナデ。色調は外面の器表が灰黒色を呈す。
15	須恵器 蓋	1/2	口 (17.5) 底 高	細	酸化 普 橙色	内面から体部外面下半はロクロ右回転ヨコナデ。体部外面上半はロクロ右回転ヘラ削り。ツマミは剝離している。
16	須恵器 蓋	1/3	口 底 高	やや細	還元 普 青灰色	内面から体部外面下半はロクロ右回転ヨコナデ。体部外面上半はロクロ右回転ヘラ削り。
17	須恵器 脚(壺か)	破片	口 底 (26.0) 高	やや粗	還元 良 青灰色	内外面ロクロ回転ヨコナデ。
18	須恵器 長頸瓶	3/4	口 7.2 底 10.2 高 24.2	普	還元 良 青灰色	頸部内面から肩部外面はロクロ右回転ヨコナデ。肩部内面と胴部外面はナデ。内面胴部から底部はロクロヨコナデ。外面下部ヨコ方向ヘラナデ。底部はナデ。高台は付け高台、ヨコナデ。頸部と肩部の接合は明瞭。他に肩部と胴部でもついていると見られる。胎土は細かいが、白色の小礫粒がやや多い。肩部に「十」字状のヘラ記号あり。

2号建物跡北方不明

番号	器 種 器 形	遺 存 率	法 量(cm)	胎 土	焼 成 色 調	成 形・整 形 の 特 徴
1	須恵器 椀	1/3	口 (14.2) 底 6.4 高 4.6	やや細	還元 普 灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。体部外面のロクロ目は明瞭。
2	須恵器 高台付椀	3/4	口 15.0 底 6.2 高 5.2	普	還元 普 灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
3	須恵器 高台付椀 灯火器か	下半部のみ	口 底 7.2 高	普	還元 普 灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。内面体部に油煙がわずかに付着する。
4	須恵器 高台付椀 灯火器	1/3	口 (13.0) 底 6.8 高 5.6	普	酸化ざみ 不良 灰褐色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。高台は付け高台、ヨコナデ。体部外面のロクロ目は不明瞭。外面から底部にかけて器面の摩耗がみられる。口唇部に2カ所、黒色油煙が付着する。

2号建物跡西方整地地下

番号	器 種 器 形	遺 存 率	法 量(cm)	胎 土	焼 成 色 調	成 形・整 形 の 特 徴
1	須恵器 杯	1/4	口 (13.0) 底 6.6 高 4.1	普	還元 普 灰オリーブ	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。器面は全体に荒れている。
2	須恵器 杯	1/3	口 (13.6) 底 (6.0) 高 3.8	普	酸化ざみ 普 明橙色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ回転糸切り。

3	須恵器 杯	1/3	口底 高 6.0	普	還元 普 灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。
4	須恵器 高台付椀	1/2	口 (14.0) 底 (6.5) 高 5.5	普	還元 普 青灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
5	須恵器 高台付椀	1/3	口 (5.8) 底 5.7	普	還元 普 灰青色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
6	土師器 杯	1/4	口 (12.8) 底 (8.4) 高 (3.3)	細	酸化 良 明橙色	内面から体部外面上半はヨコナデ。体部外面下半は指押え。底部は手持ちヘラ削り。
7	須恵器 杯	1/5	口 (5.0) 底 高	やや細	還元 普 青灰色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。底部に墨書あり。
8	須恵器 高台付椀	2/3	口 14.2 底 6.8 高 5.1	普	還元 やや良 灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。体部外面のロクロ目は明瞭。口縁部の外面に横位で「前」の墨書がある。
9	須恵器 高台付椀	1/3	口 (14.0) 底 5.5 高 5.3	普	還元 普 灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。口縁部外面に正位で「貞」の墨書あり。
10	須恵器 高台付椀か	底部のみ	口 (9.3) 底 高	細	還元 やや良 灰色	内面から外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部は糸切り。高台は付け高台、ヨコナデか。底部外面に墨書(二字以上か)がある。
11	須恵器 高台付椀	底部のみ	口 7.2 底 高	普	還元 普 灰色	内面から外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
12	須恵器 高台付椀	下半部のみ	口 7.0 底 高	やや細	酸化 普 明橙色	内面は黒色処理、ヘラ研磨。体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
13	須恵器 高台付皿	底部 2/3	口 6.2 底 高	普	酸化ぎみ 普 明橙色	内面から外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
14	須恵器 高台付椀	4/5 高台欠損	口 13.2 底 高	細	還元 普 青黒色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
15	須恵器 瓶	破片	口 (8.7) 底 高	細	還元 良 青色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
16	須恵器 高台付椀	底部のみ	口 (6.1) 底 高	普	酸化ぎみ 不良 明橙色	内面から外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
17	須恵器 椀	破片	口 (7.0) 底 高	やや粗	還元 やや不良 灰色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。外面口縁部に墨書あり。字体は不明。
18	須恵器 椀	破片	口 底 高	普	還元 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。外面のロクロ目は明瞭。口縁部内面に正位で「明」かの墨書あり。
19	須恵器 蓋	1/3	口 鈕 高	粗	還元 普 青灰色	内面から体部外面下半はロクロ右回転ヨコナデ。体部外面上半はロクロ右回転ヘラ削り。
20	須恵器 蓋 転用硯	1/5	口 (14.0) 鈕 高	普	還元 普 灰色	内面から体部外面下半はロクロ回転ヨコナデ。体部外面上半はロクロ回転ヘラ削り。内面が転用硯として使用され中央部が摩耗しており、全面に墨痕が付着する。墨痕は外面にも少量が付着する。
21	須恵器 蓋	1/4	口 鈕 3.7 高	普	還元 普 青灰色	内面は摩耗。体部外面はロクロ右回転ヘラ削り。ツマミは貼付けで、ロクロ回転ヨコナデ。

22	須恵器 特殊羽釜	1/3	口 (13.5) 底 高	やや細	還元 やや良 灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。罫は貼り付 けで、6ヶ所に穿孔がある。底部は痕跡からみて、径15cm ほどの平底の可能性があり、その場合は器高が32cmほど になる。
----	-------------	-----	--------------------	-----	-----------------	--

3号建物跡基壇上

番号	器 器 種 形	遺 存 率	法 量(cm)	胎 土	焼 成 調	成 形・整 形 の 特 徴
1	須恵器 杯	ほぼ完形	口 11.5 底 5.3 高 3.7	粗	還元 不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロク ロ右回転糸切り。内面口縁部に微量の油煙が付着する。
2	須恵器 杯	完形	口 10.8 底 5.2 高 3.5	粗	酸化ざみ 不良 淡褐色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロク ロ右回転糸切り。器形に歪みあり。二次焼成を受け、体 部外面から底部にかけて、発泡がみられる。
3	須恵器 杯	ほぼ完形	口 10.5 底 5.5 高 3.15	粗	酸化 不良 明橙色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロク ロ右回転糸切り。二次焼成を受けたとみられる。
4	須恵器 杯	4/5	口 9.9 底 5.0 高 3.4	粗	還元 不良 灰白色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロク ロ右回転糸切り。
5	須恵器 杯	1/3	口 (11.0) 底 6.2 高 3.2	粗	酸化ざみ 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロク ロ右回転糸切り。内面は油が吸着しているためか、黒み を帯びている。
6	須恵器 杯	4/5	口 12.2 底 4.8 高 3.3	粗 (砂礫 やや多)	酸化 不良 明赤褐色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロク ロ右回転糸切り。
7	須恵器 杯	1/4	口 (10.0) 底 6.0 高 3.1	粗	還元 良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロク ロ右回転糸切り。内面底部及び外面底部に、油煙が付着する。
8	須恵器 杯	1/3	口 (12.8) 底 6.0 高 3.7	普	還元 普 淡褐色	内面から体部外面はロクロ左回転ヨコナデ。底部はロク ロ右回転糸切り。
9	須恵器 杯	1/4	口 (9.8) 底 5.0 高 3.8	普	酸化ざみ 普 淡褐色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロク ロ右回転糸切り。器面に油を吸着か。
10	須恵器 杯	2/5	口 14.0 底 8.4 高 3.3	やや細	酸化 不良 明橙色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデか。底部はロク ロ右回転糸切りか。外面の口縁下半より底部にかけて、黒 色味を帯びている。軟質で器面が摩耗している。
11	須恵器 高台付椀	2/5	口 (12.0) 底 6.0 高 4.6	粗	酸化ざみ 不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロク ロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
12	須恵器 高台付椀	1/5	口 5.0 底 高	粗 砂礫混入	還元 普 灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロク ロ右回転ヨコナデ。高台は付け高台、ヨコナデ。
13	須恵器 高台付椀	2/5	口 (12.2) 底 6.8 高 4.7	普	還元 不良 青黒色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロク ロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
14	須恵器 高台付椀	3/5	口 14.4 底 6.4 高 5.0	普	還元 不良 灰オリーブ	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロク ロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
15	灰釉陶器 高台付椀	1/8	口 (8.0) 底 高	細	還元 良 灰白色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロク ロ右回転ヨコナデ。高台は付け高台。内面の釉は降灰による 自然釉の可能性ある。
16	須恵器 高台付椀	1/4	口 (18.0) 底 6.2 高 7.0	粗	還元 普 灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロク ロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。体部外面のロ クロ目は不明瞭。
17	須恵器 椀	3/5	口 15.5 底 高	粗	酸化ざみ 不良 灰オリーブ	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。体部外面の ロクロ目は弱い。内面にくすんだ黄褐色の付着物がある。

18	須恵器 高台付皿	1/3	口 (13.6) 底 7.0 高 2.7	普	還元 不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
19	須恵器 高台付皿	3/5	口 13.0 底 高	細	還元 良 黒色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
20	須恵器 杯	1/3	口 (10.8) 底 5.4 高 3.0	普	酸化 良 明橙色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。内面に薄く油煙が付着する。
21	須恵器 高台付椀	1/2	口 (13.4) 底 6.4 高 4.9	普	還元 普 灰黒色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。体部外面のロクロ目はやや明瞭。内外面の一部に油煙が付着する。内面に剝離部分あり。
22	須恵器 杯 灯火器	ほぼ完形	口 9.7 底 4.8 高 3.5	粗	酸化 不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。内外面および底部に広く油煙が付着する。
23	須恵器 杯 灯火器か	1/4	口 (10.2) 底 5.0 高 3.2	粗	還元 不良 黒色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。内面底部に厚く、体部外面一部に油煙が付着する。
24	須恵器 高台付椀 灯火器か	1/3	口 (13.4) 底 5.6 高 5.0	粗	酸化 普 明橙色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。内面口縁部から口唇部に油煙が付着する。全体に器面があれている。
25	須恵器 杯 灯火器か	1/4	口 (10.0) 底 4.0 高 3.0	普	酸化 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ回転糸切り。口縁部内外面及び外面底部に油煙が付着する。
26	須恵器 杯 灯火器か	1/8	口 11.8 底 高	粗	還元 普 灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。内面に油煙が付着する。
27	須恵器 椀 灯火器	1/5	口 (12.0) 底 高	普	還元 普 灰色	内面から体部外面はヨコナデ。内面に油煙が付着する。灯心あり。
28	須恵器 高盤か	脚部 1/3	口 (11.6) 底 高	粗	酸化 やや不良 明橙色	内面から外面はロクロ回転ヨコナデ。
29	須恵器 高盤か	脚部 2/5	口 (11.8) 底 高	粗	酸化 やや不良 明橙色	内面から外面はロクロ回転ヨコナデ。
30	須恵器 甕	口縁 1/4	口 (23.8) 底 高	粗	酸化 普 明橙色	内面から外面はロクロ右回転ヨコナデ。内面の器表に斑状の剝離あり。

3号建物跡基壇下

番号	器種 器形	遺存率	法量(cm)	胎土	焼成 色調	成形・整形の特徴
1	須恵器 杯	1/4	口 (6.0) 底 高	普	還元 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。
2	須恵器 杯 灯火器	1/6	口 (11.6) 底 (6.4) 高	普	還元 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部は整形不明。口縁部内外面に黒色油煙が付着する。
3	須恵器 高台付椀	1/5	口 7.0 底 高	普	酸化 ぎみ 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。内面に黒色油煙が広く付着する。
4	須恵器 高台付椀	1/5	口 (6.2) 底 高	普	還元 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部は整形不明。高台は付け高台、ヨコナデ。
5	須恵器 高台付椀	1/5	口 (5.6) 底 高	普	還元 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ回転糸切り。高台は付け高台で、ロクロ回転ヨコナデ。

6	須恵器 高台付椀	1/4	口底高 6.5	普	還元 普 淡褐色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。高台は付け高台、ヨコナデ。
7	須恵器 高台付椀	1/6	口底高 (6.8)	普	酸化ぎみ 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
8	須恵器 高台付椀	1/5	口底高 6.2	普	酸化ぎみ 不良 明橙色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部は整形不明。高台は付け高台、ヨコナデ。体部の内外面にロクロ目あり。
9	須恵器 高台付椀	1/8	口底高 10.4	細	還元 良 灰白色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ回転ヨコナデ。高台は付け高台か。底部外面中央部に、薄く墨痕があるかと見られる。
10	須恵器 台付鉄鉢	1/6	口底高 (17.2)	普	還元 良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。ロクロ目は不明瞭である。
11	須恵器 長頸瓶か	1/3	口底高	細	還元 良 青灰色	整形は内外面共にロクロ回転ヨコナデ整形。外面肩部にくすんだ灰緑色の灰軸がやや厚くかかっているが、自然釉かと思われる。
12	土師器 甕	破片	口底高 (16.6)	細	酸化 良 明橙色	内面から外面頸部はヨコナデ。外面胴部はヘラ削り。
13	須恵器 甕か	破片	口底高	普	酸化ぎみ 良 黄灰色	内面に青海波文の叩き。外面はヨコ方向のカキ目の後、平行状の叩き。

4号建物跡基壇上

番号	器種形	遺存率	法量(cm)	胎土	焼成調	成形・整形の特徴
1	須恵器 杯	1/2	口底高 (9.0) 5.1 3.4	普	酸化 普 明橙色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ回転ヘラ調整か。
2	須恵器 杯	3/4	口底高 11.0 5.0 3.7	普	還元 普 暗灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。
3	須恵器 杯	下半部のみ	口底高 5.2	普	酸化ぎみ 普 明橙色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。
4	須恵器 杯 灯火器	ほぼ完形	口底高 10.2 4.5 2.8	細	酸化 不良 明橙色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデか。底部は整形不明。内面に黒色油煙が付着する。
5	須恵器 高台付杯 灯火器か	1/2	口底高 12.8 6.4 4.1	普	酸化ぎみ 不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。口縁部内面に黒色油煙が付着する。
6	須恵器 高台付杯	2/3	口底高 (12.0) 6.6 4.4	普	還元 普 黒色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。体部外面のロクロ目は弱い。
7	須恵器 高台付杯	完形	口底高 11.3 6.0 4.8	普	酸化ぎみ 普 明橙色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。高台は付け高台、ヨコナデ。体部外面のロクロ目は弱い。口縁部の形に歪みがある。
8	須恵器 高台付杯	下半部のみ	口底高 (6.0)	粗	還元 普 淡褐色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部は糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
9	須恵器 高台付椀	底部のみ	口底高 6.6	普	還元 普 灰黄色	内面から外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。内面の色調は黒色を呈す。
10	灰釉陶器 高台付椀	1/3	口底高 (14.8) (6.6) 5.1	細	還元 良 灰白色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。高台は付け高台、ヨコナデ。体部外面のロクロ目はやや明瞭。釉は灰色を呈し、口縁部内外面に付く。漬け掛けと思われる。

11	須恵器 小壺	3/4	口 (5.2) 底 4.0 高 6.1	粗	酸化 不良 明橙色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部は右回転糸切り。
12	須恵器 羽釜	破片	口 (18.0) 底 高	粗	酸化ざみ 不良 明橙色	内面から外面上半はロクロ回転ヨコナデ。下半部はヘラ削り。鐙ははりつけか。
13	須恵器 壺	口縁片	口 (25.8) 底 高	普	還元 普 青黒色	口縁部は内外面ロクロ回転ヨコナデ。体部は内外面指ナデ。

4号建物跡基壇下

番号	器 種 器 形	遺 存 率	法 量(cm)	胎 土	焼 成 色 調	成 形・整 形 の 特 徴
1	須恵器 椀	3/4	口 13.6 底 6.8 高 4.3	普	還元 良 灰褐色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部は右回転糸切り。体部外面のロクロ目は明瞭。
2	須恵器 高台付皿	ほぼ完形	口 12.6 底 6.4 高 3.2	普	還元 良 青灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。内外面のロクロ目は弱い。
3	須恵器 高台付椀	1/4	口 (13.8) 底 (7.0) 高 5.3	普	還元 良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。高台は付け高台、ヨコナデ。外面に薄く黒色物質が付着する。
4	須恵器 高台付椀か	1/3	口 (14.0) 底 高	普	還元 良 灰白色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。内外面のロクロ目は不明瞭。底部を欠損するが、高台付椀と思われる。
5	須恵器 杯	1/5	口 (11.6) 底 高	普	還元 普 黒色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。
6	灰釉陶器 高台付椀	3/5	口 16.6 底 (7.6) 高 5.3	細	還元 良 灰白色	内面から体部外面上半はロクロ回転ヨコナデ。下半はロクロ回転ヘラ削り。高台は付け高台、ヨコナデ。釉は黄色味をおびて薄い。漬け掛けか。

5号建物跡基壇上

番号	器 種 器 形	遺 存 率	法 量(cm)	胎 土	焼 成 色 調	成 形・整 形 の 特 徴
1	須恵器 杯	1/4	口 (13.6) 底 (6.4) 高 4.0	普	還元 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。内面底部に黒色付着物が、やや厚く付着する。
2	須恵器 杯 灯火器	1/2	口 (14.0) 底 (7.1) 高 3.3	普	還元 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。黒色油煙状物質は、口縁部内面に厚く外面では薄い。
3	須恵器 杯 灯火器	3/4	口 12.8 底 5.0 高 3.5	普	還元 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。内外面に黒色油煙が付着する。
4	土師器 杯	3/5	口 12.6 底 高 4.3	普	酸化 普 淡褐色	内面底部はナデ。体部内面から口縁部はヨコナデ。体部外面は指オサエ。底部は不定方向ヘラ削り。
5	須恵器 高台付椀	ほぼ完形	口 12.2 底 6.4 高 4.7	普	還元 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。底部に径5mmの、焼成後の円孔あり。
6	須恵器 高台付皿	2/3	口 (14.6) 底 5.0 高 3.1	細	酸化ざみ 良 淡褐色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。内面のロクロ目は明瞭。底部のヘラがきは偶然のものである。
7	須恵器 蓋	1/5	口 (17.0) 鈕 高	細	還元 良 青灰色	内面から体部外面下半はロクロ回転ヨコナデ。体部外面上半はロクロ右回転ヘラ削り。
8	須恵器 蓋 転用碗	1/4	口 14.6 鈕 3.7 高 3.1	普	還元 良 青灰色	内面から体部外面下半はロクロ回転ヨコナデ。体部外面上半はロクロ回転ヘラ削り。ツマミは貼付けで、ロクロ回転ヨコナデ。ツマミと体部外面上半が摩耗している。

9	須恵器 長頸瓶	肩部のみ	口 底 高	細	還元 普 灰黄色	内面はナデ、外面はロクロ右回転ヨコナデ。
10	灰釉陶器 長頸瓶	口頸部1/4	口 (11.6) 底 高	細	還元 良 灰白色	内面から外面はロクロ回転ヨコナデ。全面に灰釉が施釉。釉の色調は、外面はくすんだ灰緑色、内面は淡灰緑色である。
11	須恵器 多嘴瓶	肩部破片	口 胴径(15.2) 高	普	還元 普 灰黄色	多嘴瓶の破片である。口頸部は全て欠失するが、主口1、子口3からなる。外面は広くナデられており、子口間にタテ方向の丁寧なヘラナデが施される。内面は、上半は未調整、下半はヨコナデである。

5号建物跡基壇盛土中

番号	器 種 形	遺 存 率	法 量 (cm)	胎 土	焼 成 調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴
1	須恵器 椀	3/5	口 13.6 底 6.0 高 4.2	普	酸化 不良 灰黒色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。体部外面のロクロ目は明瞭。
2	須恵器 高台付椀	底部のみ	口 底 高 7.0	細	酸化 普 明赤褐色	内面から外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台。
3	須恵器 高台付皿	2/5	口 (14.4) 底 (6.1) 高 3.0	やや細	酸化 普 明橙色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。高台は付け高台、ヨコナデ。体部外面のロクロ目は明瞭。
4	須恵器 高台付皿	ほぼ完形	口 14.4 底 (6.1) 高	細	還元 普 灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ回転糸切りか。高台は付け高台、ヨコナデ。胎土は微細で、白色粘土を縞状に混える。
5	須恵器 甕	口縁部破片	口 (28.0) 底 高	細	還元 良 青灰色	内面から外面はロクロ回転ヨコナデ。

5号建物跡基壇下

番号	器 種 形	遺 存 率	法 量 (cm)	胎 土	焼 成 調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴
1	須恵器 杯	1/4	口 (13.2) 底 (5.1) 高 4.1	やや細	酸化 普 明橙色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。
2	須恵器 杯	1/2	口 (13.3) 底 6.8 高 4.2	細	還元 普 灰白色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。体部外面のロクロ目は弱い。
3	須恵器 杯	1/2	口 (12.3) 底 6.0 高 3.5	やや細	還元 普 明灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。体部外面のロクロ目は弱い。
4	須恵器 杯	ほぼ完形	口 12.2 底 6.4 高 3.8	やや粗	酸化 やや不良 灰オリーブ	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。体部外面のロクロ目は明瞭。内面の色調は明赤褐色を呈す。
5	須恵器 杯	ほぼ完形	口 12.9 底 7.0 高 3.9	普 (砂礫やや多)	酸化 不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。体部外面のロクロ目は弱い。
6	須恵器 杯	3/5	口 (11.9) 底 7.3 高 3.8	普	還元 普 青灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。色調は青灰色であるが、オリーブ色味をおびる。
7	須恵器 椀	1/3	口 (11.9) 底 4.6 高 4.2	普	酸化 普 明赤褐色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。体部外面に斑状の剥離痕あり。
8	須恵器 杯	ほぼ完形	口 13.7 底 5.7 高 4.3	粗	還元 不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部は摩耗しており、整形不明。体部外面のロクロ目は弱い。胎土に白色粘土が縞状に入り、石英粒及び砂礫粒を、微量混入する。

9	須恵器 碗	1/2	口底高 13.2 (6.8) 4.4	普	還元 不良 灰オリーブ	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。
10	須恵器 杯	底部のみ	口底高 6.2	普	還元 普 青灰色	内面から外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。底部に墨書あり。
11	須恵器 杯 灯火器	3/4	口底高 12.0 7.6 3.7	普	還元 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。口唇部に油煙が1ヶ所付着する。外面底部に「善」の墨書あり。
12	須恵器 高台付碗	1/3	口底高 (15.6) 9.2 8.1	細	還元 良 青灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。体部外面のロクロ目は弱い。
13	須恵器 高台付皿か	底部のみ	口底高 6.7	粗	酸化ぎみ 普 明橙色	内面から外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
14	須恵器 蓋 転用硯	破片	口鈕高	普	還元 普 灰色	内外面ともロクロ回転ヨコナデとみられる。内面が摩耗し、薄く墨痕が付着する。
15	須恵器 蓋	1/4	口鈕高 4.1	普	酸化ぎみ やや不良 灰黄色	内面から体部外面下半はロクロ回転ヨコナデ。体部外面上半はロクロ回転ヘラ削り。ツマミは貼付けで、ロクロ回転ヨコナデ。
16	須恵器 蓋	ほぼ完形	口鈕高 16.0 5.1	普	還元 普 灰黄色	内面から体部外面下半はロクロ右回転ヨコナデ。体部外面上半はロクロ右回転ヘラ削り。ツマミは貼付けで、ロクロ回転ヨコナデ。
17	須恵器 蓋	1/2	口鈕高 17.0 4.0	普	還元 良 青灰色	内面から体部外面下半はロクロ右回転ヨコナデ。体部外面上半はロクロ右回転ヘラ削り。
18	須恵器 甕	口縁 1/2	口底高 25.0	普	還元 良 青色	口縁部内面から外面はロクロ右回転ヨコナデ。肩部内面は青海波文の叩き。

G区W-24グリッド

番号	器種形	遺存率	法量(cm)	胎土	焼成調色	成形・整形の特徴
1	須恵器 杯 灯火器	2/3	口底高 11.0 5.0 3.5	やや粗	還元 普 灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。口唇部及び内面に、少量の黒色油煙が付着する。

G区V-24グリッド

番号	器種形	遺存率	法量(cm)	胎土	焼成調色	成形・整形の特徴
1	須恵器 蓋 (転用硯)	破片	口底高	普	還元 普 青灰色	内面から体部外面下半はロクロ回転ヨコナデ。体部外面上半はロクロ回転ヘラ削り。内面中央部に墨痕が付着する。

G区t-24グリッド

番号	器種形	遺存率	法量(cm)	胎土	焼成調色	成形・整形の特徴
1	須恵器 杯 (灯火器)	ほぼ完形	口底高 13.2 6.2 4.2	普	酸化ぎみ 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。内面の口縁部から口唇部に、黒色油煙が付着する。

G区t-25グリッド

番号	器 器 種 形	遺 存 率	法 量 (cm)	胎 土	焼 成 色 調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴
1	須恵器 杯	下半部完存	口 底 6.0 高	やや細	還元 やや良 白色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。
2	須恵器 杯	1/2	口 (12.6) 底 6.4 高 4.0	やや細	還元 やや良 灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。外面のロクロ目はやや明瞭であるが、内面のロクロ目はあまり明瞭ではない。
3	須恵器 蓋	破片	口 鈕 高	普	還元 良 灰色	内面から体部外面下半はロクロ回転ヨコナデ。体部外面上半はロクロ回転ヘラ削り。内面中央部は摩耗している。

G区Y-25グリッド

番号	器 器 種 形	遺 存 率	法 量 (cm)	胎 土	焼 成 色 調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴
1	須恵器 杯	1/2	口 (12.7) 底 6.0 高 3.4	普	酸化ざみ 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。内外面に器面の剝離痕あり。
2	須恵器 高台付皿	1/2	口 13.6 底 高	細	酸化ざみ 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。高台は付け高台、ヨコナデ。
3	須恵器 高台付椀	下半部のみ	口 底 6.8 高	普	還元 良 灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。体部外面のロクロ目は明瞭。
4	須恵器 高台付椀	1/3	口 (14.8) 底 5.2 高 4.8	やや粗	還元 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部は整形不明。高台は付け高台、ヨコナデ。内外面のロクロ目は浅く不明瞭。
5	須恵器 高台付椀	下半部のみ	口 底 6.6 高	粗	酸化ざみ 不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部は整形不明。高台は付け高台、ヨコナデ。
6	須恵器 高台付椀	1/3	口 (15.6) 底 (7.0) 高 4.8	やや細	酸化ざみ 普 淡灰褐色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部は整形不明。高台は付け高台、ヨコナデ。体部外面のロクロ目は明瞭。内外面に円形状の剝離痕が多数あり。

7号建物跡

番号	器 器 種 形	遺 存 率	法 量 (cm)	胎 土	焼 成 色 調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴
1	須恵器 高台付椀	下半部のみ	口 底 7.4 高	粗	還元 不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。高台は付け高台、ヨコナデ。
2	須恵器 杯	下半部のみ	口 底 4.6 高	粗	酸化ざみ 不良 灰オリーブ	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はヘラ調整か。

7号建物跡・1号石組遺構

番号	器 器 種 形	遺 存 率	法 量 (cm)	胎 土	焼 成 色 調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴
1	須恵器 高台付杯	3/4	口 10.4 底 5.1 高 3.8	粗	酸化 不良 明橙色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。高台は付け高台、ヨコナデ。
2	須恵器 高台付杯	ほぼ完形	口 10.6 底 6.0 高 3.8	粗	酸化ざみ 不良 明橙色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部は糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。内面に径2~4mmの円形状の器面剝離痕が20カ所ほどある。土器の使用痕とみなされる。
3	須恵器 高台付杯	3/4	口 9.8 底 4.6 高 4.1	粗	酸化 不良 明橙色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。高台は付け高台、ヨコナデ。

4	須恵器杯	1/2	口底高 (9.5) (4.4) 2.5	粗	酸化不良 明橙色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ回転ヘラ切りか。
5	須恵器杯	3/4	口底高 9.6 5.0 3.0	粗	酸化ぎみ 不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ回転ヘラ切りか。体部外面のロクロ目は弱い。
6	須恵器杯	1/2	口底高 11.1 5.0 3.7	粗	酸化ぎみ 不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ回転ヘラ切りか。
7	須恵器杯	2/3	口底高 10.0 5.2 3.4	粗	酸化ぎみ 不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はヘラ切りか。
8	須恵器杯	1/2	口底高 10.4 4.8 3.2	粗	酸化ぎみ 不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はヘラ切りか。
9	須恵器杯	2/3	口底高 10.5 5.0 3.1	粗	酸化ぎみ 不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はヘラ切りか。体部外面のロクロ目はきわめて弱い。
10	須恵器杯	3/4	口底高 11.2 5.0 3.0	粗	酸化ぎみ 不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はヘラ切りか。
11	須恵器杯	完形	口底高 11.0 5.0 3.8	粗	酸化ぎみ 不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ回転ヘラ切りか。整形は丁寧であるが、焼成はあまい。
12	須恵器杯	1/2	口底高 (11.0) 4.7 3.3	粗	酸化ぎみ 不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ回転ヘラ切りか。
13	須恵器杯	1/3	口底高 10.4 6.8 3.5	粗	酸化ぎみ 不良 灰黄色	内面から体部外面はヨコナデ。底部は内外面共にゆがんでおり、整形は特にしていないようである。
14	須恵器碗	1/4	口底高 (16.6)	粗	酸化ぎみ 不良 暗赤褐色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。体部外面のロクロ目は弱い。部分的に二次焼成を受け、橙色を呈す。

8号建物跡

番号	器種形	遺存率	法量(cm)	胎土	焼成調色	成形・整形の特徴
1	須恵器高台付碗	底部完存	口底高 7.0	普	酸化ぎみ 普 灰黄色	内面から外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。

1号テラス区・1号特殊遺構2柱穴

番号	器種形	遺存率	法量(cm)	胎土	焼成調色	成形・整形の特徴
1	須恵器高台付碗	底部完存	口底高 7.1	普	還元 普 灰黄色	内面から外面はロクロ回転ヨコナデ。高台は付け高台、ヨコナデ。

1号テラス区・8号土坑

番号	器種形	遺存率	法量(cm)	胎土	焼成調色	成形・整形の特徴
1	須恵器碗	完形	口底高 12.1 5.3 4.0	粗	酸化ぎみ 不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。内面下半部は、油状物質のようなものを吸着している。
2	須恵器碗	4/5	口底高 12.6 5.5 4.2	粗	還元 不良 青黒色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。内外面のロクロ目は弱い。

3	須恵器 椀	下半部のみ	口 底 7.0 高	普	酸化ざみ 不良 明橙色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部は剝離が 広く及んでおり、整形は不明。
---	----------	-------	-----------------	---	-------------------	---

1号テラス区・9号土坑

番号	器 器 種 器 形	遺 存 率	法 量(cm)	胎 土	焼 成 色 調	成 形・整 形 の 特 徴
1	須恵器 杯	1/5	口 (13.2) 底 (5.0) 高 (3.8)	粗	酸化ざみ 不良 暗褐色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ 回転糸切り。体部外面のロクロ目は不明瞭。

1号テラス区・10号土坑

番号	器 器 種 器 形	遺 存 率	法 量(cm)	胎 土	焼 成 色 調	成 形・整 形 の 特 徴
1	須恵器 高台付杯	ほぼ完形	口 12.6 底 5.5 高 4.3	細	酸化ざみ 不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ 右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。体部外面の ロクロ目はあまり明瞭ではない。

1号テラス区・16号土坑

番号	器 器 種 器 形	遺 存 率	法 量(cm)	胎 土	焼 成 色 調	成 形・整 形 の 特 徴
1	須恵器 杯	完形	口 9.3 底 5.0 高 3.8	粗	酸化 不良 明橙色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部は回転へ ら調整か。内面の底部から口唇部にかけて、光沢のある 黒色の油煙が、かなり広く付着している。

1号テラス区・1号不詳遺構

番号	器 器 種 器 形	遺 存 率	法 量(cm)	胎 土	焼 成 色 調	成 形・整 形 の 特 徴
1	須恵器 杯	1/4	口 (11.9) 底 (5.0) 高 4.3	粗	酸化ざみ 不良 暗褐色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデか。底部はへら 調整か。色調はオリーブ色味をおびる。

1号テラス区・フク土

番号	器 器 種 器 形	遺 存 率	法 量(cm)	胎 土	焼 成 色 調	成 形・整 形 の 特 徴
1	須恵器 杯	1/4	口 (13.4) 底 5.4 高 3.5	普	還元 普 淡褐色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部は整形不 明。全体に器面の摩耗がみられる。
2	須恵器 杯 灯火器か	完形	口 11.8 底 5.0 高 3.9	普	還元 普 淡褐色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部は整形不 明。内外面に黒色油煙状物質が付着する。
3	須恵器 高台付椀 灯火器	完形	口 11.8 底 6.2 高 4.8	粗	酸化ざみ 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部は回転 糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。内外面に黒色油煙 状物質が付着する。
4	須恵器 高台付椀	完形	口 14.0 底 6.2 高 5.2	普	還元 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部は整形不 明。高台は付け高台。体部外面のロクロ目は明瞭。部分 的に二次焼成を受けている。
5	須恵器 火舎か	破片	口 (21.0) 底 高	普	酸化ざみ やや不良 灰黄色	成整形は体部をロクロ回転ヨコナデ。その後文様を貼り つけて、口唇部はへら整形。脚は失われているが、接合 痕がみられる。

4号テラス

番号	器 種 器 形	遺 存 率	法 量(cm)	胎 土	焼 成 色 調	成 形・整 形 の 特 徴
1	須恵器 高台付椀 灯火器か	1/4	口 (11.6) 底 (5.8) 高 4.3	やや粗	酸化ざみ 不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。高台は付け高台、ヨコナデ。内面に黒色油煙が付着する。部分的に二次焼成を受けている。

D斜面

番号	器 種 器 形	遺 存 率	法 量(cm)	胎 土	焼 成 色 調	成 形・整 形 の 特 徴
1	須恵器 杯	3/4	口 10.8 底 5.0 高 3.5	普	酸化 普 明橙色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。体部外面のロクロ目はきわめて弱い。部分的に二次焼成を受けて、明赤褐色を呈している。
2	須恵器 杯	1/3	口 (12.6) 底 6.6 高 3.4	やや粗	酸化 普 暗褐色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。内外面のロクロ目は弱い。内面の色調は明赤褐色を呈す。
3	須恵器 杯	1/3	口 (11.6) 底 (6.0) 高 3.4	粗	酸化 普 明赤褐色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ回転糸切り。体部内外面のロクロ目は弱い。
4	須恵器 杯	1/3	口 9.8 底 4.8 高 2.8	細	酸化 普 明橙色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。
5	須恵器 杯	1/3	口 (9.0) 底 (4.0) 高 2.5	やや細	酸化 良 明橙色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。体部外面のロクロ目はやや弱い。
6	須恵器 杯	1/2	口 (10.0) 底 4.2 高 3.5	粗	酸化ざみ 普 灰褐色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部は整形不明。体部外面のロクロ目は弱い。内面のほぼ全面と外面の口縁部に黒色の油煙が付着する。
7	須恵器 高台付椀	1/2	口 (12.2) 底 (6.6) 高 4.9	普	酸化ざみ やや不良 明橙色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。高台は付け高台、ヨコナデ。
8	須恵器 高台付椀	1/3	口 底 (7.2) 高	普	酸化ざみ 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ回転糸切りか。高台は付け高台、ヨコナデ。体部外面のロクロ目はやや弱い。「土師質土器、足高高台の椀」

7号テラス

番号	器 種 器 形	遺 存 率	法 量(cm)	胎 土	焼 成 色 調	成 形・整 形 の 特 徴
1	須恵器 椀	1/3	口 (12.0) 底 (6.0) 高 4.2	粗	酸化ざみ 不良 淡褐色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部は回転糸切り。体部外面のロクロ目は弱い。
2	須恵器 高台付椀	1/2	口 (12.2) 底 6.3 高 4.7	普	酸化ざみ 不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。体部内外面のロクロ目は不明瞭。
3	須恵器 高台付椀	ほぼ完形	口 11.6 底 6.5 高 4.6	粗	酸化ざみ 不良 灰オリーブ	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部は回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
4	須恵器 高台付椀	1/3	口 (12.0) 底 (5.6) 高 4.0	普	還元 不良 灰色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部は整形不明。高台は付け高台、ナデ。
5	須恵器 高台付椀	3/4	口 14.5 底 6.9 高 5.1	粗	酸化ざみ 不良 灰黒色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
6	須恵器 高台付椀 転用硯	底部のみ	口 底 7.8 高	普	還元 やや良 白色	内面から外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
7	灰釉陶器 高台付皿	1/4	口 底 (7.2) 高	細	還元 良 灰色	内外面ロクロ回転ヨコナデ。高台は付け高台。釉は内外面に施され、色調は淡い褐色味を呈し、比較的是っきりと塗られている。漬け掛けか。内面に重ね焼き痕あり。

8	須恵器 鉢	完形	口 15.6 底 6.6 高 8.3	粗	酸化 不良 灰黄色	内面から体部外面上半はロクロ回転ヨコナデ。体部外面下半はタテ方向ヘラケズリ。底部はヘラナデ。内面底部は摩耗。内外面に二次焼成痕あり。
9	須恵器 甌か	底部のみ	口 底 (22.8) 高	普	酸化 普 明赤褐色	内外面ロクロ回転ヨコナデ。

7号テラス・1号掘込遺構

番号	器 器 種 形	遺 存 率	法 量(cm)	胎 土	焼 成 色 調	成 形・整 形 の 特 徴
1	須恵器 碗	1/2	口 13.2 底 5.4 高 4.0	粗	酸化 不良 明橙色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転ヨコナデ。
2	須恵器 杯	1/3	口 (12.2) 底 (5.0) 高 4.0	粗	酸化 不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部は整形不明。
3	須恵器 杯	下半部のみ	口 底 (5.4) 高	やや粗	酸化 不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部は糸切り。
4	須恵器 高台付碗	1/4	口 (11.8) 底 (5.1) 高 4.0	粗	酸化 不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。高台は付け高台、ヨコナデ。
5	須恵器 高台付碗	1/2	口 11.5 底 4.4 高 4.5	粗	酸化 不良 暗褐色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部は整形不明。高台は付け高台、ヨコナデ。部分的に二次焼成を受け、橙色から灰褐色に変色している。
6	須恵器 高台付碗	3/5	口 13.0 底 6.2 高 4.8	やや粗	還元 普 灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。体部外面のロクロ目は明瞭。
7	須恵器 甌	破片	口 底 (20.5) 高	粗	酸化 不良 灰黄色	内外面はロクロ回転ヨコナデか。接地面は無調整。素地は縞状粘土が使われている。

7号テラス・2号掘込遺構

番号	器 器 種 形	遺 存 率	法 量(cm)	胎 土	焼 成 色 調	成 形・整 形 の 特 徴
1	須恵器 高台付杯	2/5	口 (12.4) 底 6.4 高 4.1	普	還元 やや不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
2	須恵器 高台付杯	1/4	口 (12.8) 底 (6.6) 高 4.5	普	還元 普 淡褐色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。二次焼成を受けている。
3	須恵器 羽釜	破片	口 24.0 底 高	普	還元 良 明橙色	内外面はロクロ回転ヨコナデ。鏝は貼り付け。熱を受けた痕跡あり。

8号テラス

番号	器 器 種 形	遺 存 率	法 量(cm)	胎 土	焼 成 色 調	成 形・整 形 の 特 徴
1	須恵器 碗	1/2	口 10.8 底 5.0 高 4.4	普	還元 普 灰橙色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。体部外面のロクロ目はきわめて弱い。色調は本来灰色であるが、7割近く二次焼成を受けて、橙色に変色している。
2	須恵器 杯	1/3	口 10.4 底 5.8 高 3.4	普	還元 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。二次焼成により、ややもろくなっている。
3	須恵器 杯	1/4	口 (10.4) 底 (6.0) 高 3.4	やや細	還元 良 青色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ回転糸切り。体部外面のロクロ目は明瞭。

4	土師器 (型造り) 杯	完形	口 10.2 底 5.5 高 4.0	普	酸化ざみ 普 暗灰黄色	内面から体部外面上半はヨコナデ。体部外面下半はナデ。底部は整形なし。内面にはこびりつくように、外面には薄く黒色油煙が付着する。漆であろうか。底部には放射状のシワがみられ、型造りの可能性が考えられる。
5	須恵器 杯 灯火器	3/4	口 12.2 底 5.6 高 3.8	普	還元 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ回転糸切りか。口縁部の内外面に黒色油煙が付着する。
6	須恵器 高台付椀	1/4	口 (13.4) 底 高	細	酸化ざみ 良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。体部外面のロクロ目は明瞭。
7	須恵器 高台付椀	1/3	口 (11.8) 底 高	普	還元 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。高台は付け高台。
8	須恵器 高台付椀	2/5	口 (16.8) 底 7.0 高 7.6	普	還元 普 灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。体部外面のロクロ目は明瞭。
9	須恵器 杯	破片	口 底 高	普	還元 普 灰黄色	内外面ロクロ回転ヨコナデ。内外面に墨痕あり。
10	須恵器 高台付椀	下半部のみ	口 底 (7.0) 高	普	還元 普 灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。内面底部に刻文あり。意味は不明。
11	灰釉陶器 高台付皿	2/5	口 (12.2) 底 (6.4) 高	細	還元 良 灰白色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。高台は付け高台。釉は口縁部内外面に、漬け掛けで施される。

9号テラス

番号	器 器 種 形	遺 存 率	法 量(cm)	胎 土	焼 成 調 色	成 形 ・ 整 形 の 特 徴
1	須恵器 高台付椀	1/4	口 (13.2) 底 (7.4) 高 5.0	普	還元 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部は整形不明。高台は付け高台、ヨコナデ。
2	須恵器 高台付杯	1/5	口 (12.4) 底 高	普	酸化ざみ 普 淡褐色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ回転糸切り。高台は付け高台。
3	須恵器 羽釜	破片	口 (17.8) 底 高	普	酸化 普 淡褐色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。

東斜面

番号	器 器 種 形	遺 存 率	法 量(cm)	胎 土	焼 成 調 色	成 形 ・ 整 形 の 特 徴
1	緑釉陶器 高台付皿	底部1/4	口 底 (7.8) 高	細	還元 良 灰色(胎土)	内外面ロクロ回転ヨコナデ。高台は付け高台。器面の全面に淡緑色の緑釉が施されている。胎土は須恵器質で、硬質である。
2	須恵器 高台付椀	下半部のみ	口 底 6.0 高	普	還元 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部は整形不明。高台は付け高台。全体に器面が摩耗している。
3	須恵器 鉢か	小破片	口 (11.0) 底 高	細	還元 良 灰色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。

12号テラス

番号	器 器 種 形	遺 存 率	法 量(cm)	胎 土	焼 成 調 色	成 形 ・ 整 形 の 特 徴
1	土師器 杯	1/5	口 (13.0) 底 高	普	酸化 普 明赤褐色	内面上半から体部外面上半はヨコナデ。内面下半はヘラナデ。外面下半はヘラケズリ。

2	須恵器 高台付碗	1/4	口 (14.6) 底高 (6.6) 4.6	普	還元 普 灰白色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。体部外面のロクロ目はきわめて弱い。
3	須恵器 高台付皿	破片	口 (14.2) 底高	やや粗	還元 やや不良 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。高台は付け高台。

2号焼土坑

番号	器種形	遺存率	法量(cm)	胎土	焼成調	成形・整形の特徴
1	須恵器 杯 灯火器か	下半部3/4	口 底高 6.8	粗	酸化ぎみ 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ回転糸切りか。内面は全体に、厚く黒色油煙が付着し、外面には部分的に薄く付着する。
2	須恵器 杯	3/5	口 (12.8) 底高 7.4 3.4	やや細	還元 良 青灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。
3	須恵器 高台付杯	完形	口 14.0 底高 6.6 4.6	普	酸化ぎみ 普 灰黄色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。高台は付け高台。胎土は白色粘土を混えた綿状を呈す。焼成がややあまいために、器面が全体に摩耗しており、整形はよくわからない。
4	須恵器 高台付杯	1/3	口 (14.6) 底 (7.0) 高 (4.3)	やや細	酸化 普 明赤褐色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部は右回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。体部内外面に黒色物が薄くまばらに付着。
5	須恵器 高台付碗	下半部のみ	口 底高 7.0	粗	酸化ぎみ 不良 灰オリーブ	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。
6	須恵器 甕	上半部	口 20.0 底高	普	還元 良 灰色	口縁部から胴部上端にかけてロクロ回転ヨコナデ。胴部は、回転ヨコナデ後、外面に斜格子叩き、内面に青海波文叩きが打たれる。

3号焼土坑

番号	器種形	遺存率	法量(cm)	胎土	焼成調	成形・整形の特徴
1	須恵器 杯	3/4	口 12.8 底高 6.3 3.9	普	還元 普 青灰色	内面から体部外面はロクロ右回転ヨコナデ。底部はロクロ右回転糸切り。体部外面のロクロ目は弱い。
2	須恵器 高台付碗	下半部のみ	口 底高 6.8	やや粗	還元 普 灰色	内面から体部外面はロクロ回転ヨコナデ。底部はロクロ回転糸切り。高台は付け高台、ヨコナデ。

表7 軒丸瓦観察表

遺構	番号	直径	内			区			外			区		
			中房径	運子	弁区径	弁幅	弁長	弁数	幅	内幅	内文様	外幅	外文様	高さ
2 建軒丸	1								1.8	1.0	素文	0.8	0.1	素文
ク	2	(15.6)	3.3	1	(11.6)	3.9	3.6	4	2.0	1.4	素文	0.6	0.2	素文
ク	3	15.0	3.5	1	9.2	2.8	3.2	4	3.0	1.0	素文	2.0	0.25	素文
ク	4	15.0	3.4	1	9.4	3.0	3.1	4	2.8	1.9	素文	0.9	0.2	素文
ク	5	14.5	2.7	1	9.7	1.8	2.0	4	4.0	2.0	素文	2.0	0.3	素文
ク	6	15.1	2.3	1	7.4	1.4	1.6	4	4.3	2.1	素文	1.4	0.1	素文
3 建軒丸	1	(16.1)	4.3	1+4	(13.0)	3.7	4.2	4	1.8	0.9	素文	0.9	0.15	素文
ク	2	(17.2)	4.5	1+4	13.4	3.4	4.5	4	1.5	0.7	素文	0.8	0.25	素文
ク	3	15.0	3.3	1	11.8	3.0	3.5	4	1.9	1.3	素文	0.6	0.15	素文
G V 25 グ	1		重圏	1	9.4	3.0	3.1	4			素文		0.1	素文
1号石組	19	13.8	3.0	1	9.8	1.5	3.0	7	2.3	1.1	素文	1.2	0.15	素文
1号テラス区	9	16.6	4.4	1+4	12.8	3.6	4.2	4	1.9	0.7	素文	1.2	0.2	素文
D 斜面	11													

表8 軒平瓦観察表

遺構	番号	厚さ	瓦			当面			区			類			尻			全長		
			文様	上弦幅	下弦幅	弧深	内幅	内文様	上外区幅	上外区文様	下外区幅	下外区文様	脇幅	脇文様	高	幅	形		幅	深さ
2 建軒平	1	3.4	0.4				3.1	鋸歯状文	0.3	素文				2.9	2.9	1.1	曲線			
ク	2	3.0	0.2				2.7	鋸歯状文	0.3	素文				3.2	3.2	1.5	曲線			
ク	3	4.5	0.4				3.2	綾杉状文	0.5	素文	1.0	素文	1.8	2.5	2.2	2.2	段線			
ク	4	5.1	0.5	24.5	6.0		3.1	綾杉状文	1.0	素文	1.0	素文	4.3	2.8	2.7	2.7	段線			
3 建軒平	1							格子目文	0.8	素文										
ク	2	3.5	0.15				2.6	格子目文	0.5	素文	0.4	素文		1.8	1.6	1.6	段線			
1号テラス区	11	3.6	0.2				2.5	格子目文	0.6	素文	0.5	素文	2.0	2.1	22	22	段線			
8号テラス	20	3.7	0.2				2.7	格子目文	0.4	素文	0.6	素文	2.0	1.6	1.75	1.75	段線			

表9 丸瓦・平瓦・文字瓦等観察表 (含、軒丸瓦の丸瓦部・軒平瓦の平瓦部)

遺構名	番号	瓦の種類	形状・規模			胎土	焼成	形成			整形			形端			備考	
			長さ	幅	厚			素地	狭雑物	焼成	色調	粘土板		横骨痕	凹面	側面		端面
												凸面	凹面					
10号道路	2	丸瓦			1.5	地	砂少	酸	淡橙	なし	なし	なし	なし	なし	なし	1面		
〃	3	平瓦			1.4	粗	砂多	酸	暗褐	なし	なし	なし	なし	なし	なし	2面		
1 建基上	8	平瓦			2.0	粗	砂多	酸	淡橙	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
1 建基下	2	平瓦			1.9	粗	砂多	還	灰	なし	なし	なし	なし	なし	なし			
〃	3	平瓦			1.7	粗	砂多	還	明灰	なし	なし	なし	なし	なし	なし	3面		
1 建周・フ	4	平瓦			1.3	粗	砂多	還	灰	なし	なし	なし	なし	なし	なし	3面		
〃	7	平瓦			1.3	普	砂少	還	灰	なし	なし	なし	なし	なし	なし	2面		
〃	8	平瓦			0.8	普	砂少	還	灰	なし	なし	なし	なし	なし	なし	1面		
2 建軒丸瓦	1				0.9	普	砂少	還	灰	なし	なし	なし	なし	なし	なし		I類	
〃	2				(1.0)	細	砂少	酸	淡橙								ⅢA類小	
〃	3				1.0	細	砂少	酸	淡灰橙	なし	なし	なし	なし	なし	なし	1面		
〃	4				1.0	細	砂少	酸	淡橙	なし	なし	なし	なし	なし	なし	1面		
〃	5				1.3	細	砂少	酸	淡灰橙	なし	なし	なし	なし	なし	なし	(2面)		
〃	6				1.5	細	砂少	酸	淡灰橙	なし	なし	なし	なし	なし	なし	2面		
2 建軒平瓦	1				1.4	細	砂少	酸	淡灰橙	なし	なし	なし	なし	なし	なし	1面		
〃	2				1.6	細	砂少	還	灰	なし	なし	なし	なし	なし	なし	1面		
〃	3				1.5	細	砂少	酸	橙	なし	なし	なし	なし	なし	なし	1面		
〃	4				1.4	細	砂少	酸	橙	なし	なし	なし	なし	なし	なし	1面		
2 建	1	丸瓦			1.3	粗	砂多	還	青						2面			
〃	2	丸瓦			1.2	普	砂少	還	灰	なし	なし	なし	なし	なし	なし	1面		
〃	3	丸瓦			1.5	普	砂少	還	淡灰	なし	なし	なし	なし	なし	なし	1面		
〃	4				1.2	普	砂少	還	灰	なし	なし	なし	なし	なし	なし	1面		
〃	5	丸瓦			13.0	普	砂少	還	淡橙	なし	なし	なし	なし	なし	なし	1面		
〃	6	丸瓦			1.3	細	砂少	酸	淡褐	なし	なし	なし	なし	なし	なし	1面		
〃	7	丸瓦			0.9	細	砂少	還	灰	なし	なし	なし	なし	なし	なし	1面		
〃	8	丸瓦			1.0	細	砂少	酸	淡橙	なし	なし	なし	なし	なし	なし	1面		
〃	9	丸瓦			1.0	普	砂少	還	灰	なし	なし	なし	なし	なし	なし	2面		
〃	10	丸瓦			1.0	普	砂少	還	暗灰	なし	なし	なし	なし	なし	なし	1面		
〃	11	丸瓦			1.0	普	砂少	還	灰	なし	なし	なし	なし	なし	なし	1面		
〃	12	丸瓦			0.8	細	砂少	酸	淡褐	なし	なし	なし	なし	なし	なし	1面		

表10 鉄製品観察表

番号	出土遺構	遺物番号	種類	特徴
1	1号建物跡	基壇上 9	鉄釘	下半部欠損。頭部素形。長さ6.8cm。太さ5.5×5.5mm。重さ10.7g。
2	2号建物跡	基壇上 57	鉄釘	先端部欠損。頭部円形。長さ15.0cm。太さ10.0×10.0mm。重さ165.8g。
3	〃	〃 58	〃	完形。頭部素形。長さ17.0cm。太さ9.8×8.0mm。重さ65.7g。
4	〃	〃 59	〃	完形。頭部素形。長さ15.0cm。太さ9.5×8.0mm。重さ82.5g。
5	〃	〃 60	〃	完形。頭部素形。長さ14.5cm。太さ7.0×5.0mm。重さ40.1g。
6	〃	〃 61	〃	完形。頭部素形。長さ13.5cm。太さ8.0×7.5mm。重さ48.4g。
7	〃	〃 62	〃	完形。頭部素形。長さ11.5cm。太さ7.0×6.0mm。重さ26.4g。
8	〃	〃 63	〃	完形。頭部素形。長さ12.0cm。太さ7.5×6.5mm。重さ34.5g。
9	〃	〃 64	〃	先端部欠損。頭部素形。長さ10.2cm。太さ5.5×5.0mm。重さ15.5g。
10	〃	〃 65	〃	完形。頭部方形。長さ10.5cm。太さ6.0×6.0mm。重さ10.7g。
11	〃	〃 66	〃	完形。頭部素形。長さ11.9cm。太さ7.5×7.0mm。重さ34.0g。
12	〃	〃 67	〃	完形。頭部素形。長さ8.0cm。太さ6.0×5.5mm。重さ11.5g。
13	〃	〃 68	〃	先端部欠損。頭部素形。長さ7.0cm。太さ5.0×4.0mm。重さ6.7g。
14	〃	〃 69	〃	完形。頭部方形。長さ7.5cm。太さ5.0×4.0mm。重さ6.8g。
15	〃	〃 70	〃	完形。頭部方形。長さ7.0cm。太さ5.5×5.0mm。重さ7.3g。
16	〃	〃 71	〃	完形。頭部素形。長さ6.0cm。太さ3.5×3.5mm。重さ4.9g。
17	〃	〃 72	〃	先端部欠損。頭部素形。長さ4.0cm。太さ3.0×3.0mm。重さ2.3g。
18	〃	〃 73	〃	完形。頭部方形。長さ4.0cm。太さ3.5×3.0mm。重さ1.7g。
19	〃	〃 74	〃	先端部欠損。頭部方形。長さ5.8cm。太さ3.5×3.0mm。重さ3.1g。
20	〃	〃 75	〃	先端部欠損。頭部円形。長さ1.5cm。太さ4.0×3.0mm。重さ1.3g。
21	〃	〃 76	S字状鉄製品	下端部欠損。現長3.5cm。太さ2.0mm。
22	〃	〃 77	不明	厚さ6.0~9.0mm。ゆるく外湾し、表面に高さ2.5mm、幅4.0mmの隆線が付される。
23	〃	〃 78	蝶番	完形。タテ4.0cm、ヨコ4.3cm。釘穴3孔があく。
24	〃	〃 79	蝶番の軸か	完形。全長3.6cm。頭部径1.0cm。軸径0.3cm。
25	3号建物跡	基壇上 33	鉄釘	先端部欠損。頭部素形。長さ16.9cm。太さ7.5×7.0mm。重さ50.9g。
26	〃	〃 34	〃	完形。頭部方形。長さ16.2cm。太さ7.5×7.0mm。重さ48.0g。
27	〃	〃 35	〃	完形。頭部素形。長さ14.1cm。太さ9.0×7.0mm。重さ38.0g。
28	〃	〃 36	〃	完形。頭部素形。長さ12.0cm。太さ6.5×5.5mm。重さ27.7g。
29	〃	〃 37	〃	先端部欠損。頭部方形。長さ11.3cm。太さ8.0×7.5mm。重さ37.1g。
30	〃	〃 38	〃	先端部欠損。頭部素形。長さ12.3cm。不明6.0×5.0mm。重さ22.2g。
31	〃	〃 39	〃	完形。頭部素形。長さ14.3cm。太さ8.0×7.5mm。重さ38.3g。
32	〃	〃 40	不明品	中間部残存。長さ9.1cm。太さ9.0×9.0mm。重さ31.1g。
33	〃	〃 41	鉄釘	完形。頭部方形。長さ10.9cm。太さ6.0×5.0mm。重さ16.6g。
34	〃	〃 42	〃	完形。頭部方形。長さ9.1cm。太さ4.0×3.5mm。重さ7.6g。
35	〃	〃 43	〃	先端部欠損。頭部方形。長さ7.9cm。太さ4.5×3.5mm。重さ6.4g。
36	〃	〃 44	壺金	完形。折り合わせて頭部を円環状につくる。全長9.8cm。
37	〃	〃 45	壺金	完形。折り合わせて頭部を円環状につくる。全長9.0cm。
38	〃	〃 46	壺金	先端部欠損。折り合わせて頭部を円環状につくる。全長7.7cm。
39	〃	〃 47	〃	完形。折り合わせて頭部を円環状につくる。全長13.5cm。
40	〃	〃 48	鉄釘	完形。全長4.4cm。頭部径1.6cm。太さ4.0×4.0mm。重さ6.7g。
41	〃	〃 49	鋤先	部分。
42	4号建物跡	基壇上 14	鉄釘	完形。頭部素形。長さ10.1cm。太さ5.5×4.5mm。重さ11.6g。
43	〃	〃 15	〃	完形。頭部素形。長さ9.2cm。太さ6.0×5.5mm。重さ12.7g。
44	〃	〃 16	〃	下半部欠損。頭部素形。長さ6.0cm。太さ5.0×4.0mm。重さ9.2g。
45	〃	〃 17	鋤先	部分。
46	5号建物跡	基壇上 12	鉄釘	完形。頭部素形。長さ10.6cm。太さ5.5×5.5mm。重さ18.9g。
47	〃	〃 13	〃	完形。頭部素形。長さ8.5cm。太さ6.0×5.5mm。重さ12.6g。
48	〃	〃 14	〃	完形。頭部素形。長さ8.8cm。太さ6.0×5.5mm。重さ15.9g。
49	〃	〃 15	〃	先端部欠損。頭部方形。長さ6.4cm。太さ5.0×5.0mm。重さ10.4g。
50	〃	〃 16	鉄鎌	一部破損。平根式の鎌である。推定幅3.6cm。
51	7号建物跡	3	敲き工具	(本文で既述)
52	7建1号石組	15	不明(鋤先か)	
53	〃	16	〃	
54	〃	17	〃	
55	〃	18	鉄釘	完形。頭部素形。長さ9.9cm。太さ7.0×6.5mm。重さ15.3g。
56	8号テラス	12	鉄釘	先端部欠損。頭部方形。長さ17.3cm。太さ7.5×7.0mm。重さ29.2g。
57	〃	13	〃	先端部欠損。頭部素形。長さ6.4cm。太さ6.0×6.0mm。重さ10.7g。

第IV章 むすびにかえて

本報告書は、黒熊中西遺跡の発掘調査報告書の第一分冊である。本遺跡は、発掘調査に入るまでまったく予期していなかった平安時代の寺院跡が確認され、奈良平安時代の地方寺院の様相を知るうえで貴重な資料を得ることができた。本分冊では、寺院の主要構成遺構である建物跡（堂宇跡）やテラス遺構などを収め、寺院に付帯するか、あるいは関係を有さない竪穴住居跡などの遺構は第二分冊に収めることとした。さらに、調査の成果と問題点および考察については第二分冊の作成後に行う予定である。ここでは本寺院跡が内包する内容や問題点について、現状で予測可能な範囲で概括的に列記しておきたい。

1 立地と環境

本寺院跡は、標高200m程の低丘陵の頂部に立地する。今次調査区域から北方の河岸段丘面にかけては縄文から奈良平安時代におよぶ大規模な集落跡が形成されており、本寺院跡はその集落の縁辺に所在する。

2 寺の規模

寺の規模としては基壇建物（仏堂）が6棟以上あることから、本格的な古代寺院跡とみられる。が、寺の外郭を示す遺構は検出されなかった（外郭施設は造営されなかったものと考えられる）ことから寺域の規模・範囲を確定することはできない。また、これに関連した問題として寺の全域が発掘調査の対象となったかどうかということがある。これについては、基壇建物遺構の在り方から見ると、南方への若干の広がりには确实視できる。しかし、本寺院跡は北方を正面としたものと考えられ、調査域の南側は丘陵の背面側になるので、他に主要堂宇が存在したとは考え難いように思われる。東・西および北の三方は地形から見て寺域が広がることはないと考えられる。以上、寺の南側の状況把握に課題が残るものの、寺域の大部分が調査対象になったのではないかと推測される。

3 寺の年代

遺構として確認された基壇建物遺構などは伴出遺物からみて、10世紀前半頃に造営され、11世紀（前半）頃に廃絶したとみられる。しかし、基壇の下層から寺院に伴うとみられる遺物が出土しており、9ないし8世紀の前身的な寺院遺構の存在した可能性も考えておくべきものと思われる。なお、遺構・遺物の詳細な年代観については後日の考察で検討する所存である。

4 寺の立地分類

本寺院跡が、いわゆる「平地寺院」か「山寺（山岳寺院）」のいずれにあたるかという判断はたやすくはなし得ないことである。眺望のよい丘陵の頂部に立地すること、堂宇が東西に延びる丘陵の尾根上に不規則的に配置されることなど、山寺的な要素を示している。しかし、集落が寺の近辺にあり、そのような在りかたは山寺と見ることに対し疑問がはさまれることである。基本的には、立地や堂宇の配置状況からすると、平地寺院とみることは不適切であろうことを確認したい。そもそも古代の山寺の形態については未解明な点が残されているようである。山寺の概念の明確化をはかると共に、他に本遺跡と類似した山寺の遺跡がないかどうか検討を重ねる必要性を感じるものである。

5 寺の全体像

本寺院跡の性格や全体像を考えるうえで配慮したいことは、東方300mの黒熊八幡遺跡、および700mの塔之峰遺跡（黒熊栗崎遺跡）に寺院跡存在の可能性を示唆させる要素があることである。仮にこの二遺跡が寺院跡であるならば、700mという近距離内で東西に並ぶ三つの尾根上に寺が営まれたことになる。そして、三つの遺跡が全く別個なものであったのか、それとも一体的なものだったのかという問題も生じよう。仮に、三つの遺跡が相関連するとすれば、相当大規模な寺院跡が存在したことになるろう。

6 寺の性格

寺の造立者や背景について推測することは最も困難なことであるが、関連するとみられる文献資料は2、3ある。具体的には、まず、本寺院跡は古代の上野国の緑野郡と多胡郡の境界付近にあるが、緑野郡周辺では8世紀後半頃から僧道忠が緑野寺（浄院寺・浄土院）を拠点にして教団を形成していたこと（道忠の活動範囲は武蔵国・下野国にも及んでいる）。つぎに、弘仁8（817）年、道忠教団の援助のもとに最澄が緑野寺に来て布教活動を行っていること。第三に、嘉祥3（850）年に上野国の聖隆寺が延暦寺別院になっていること。以上のようなことである。道忠教団は、天台座主を輩出するなど平安期の天台宗の中心的な勢力となっており、その拠点の一つが上野国緑野郡周辺であったことが確認される。本寺院跡は、そのような地域の中に営まれたものであり、寺の性格を考える上で看過できないものと考えられる。

古代寺院跡の発掘調査は、群馬県域でも近年類例が増加している。しかし、本遺跡のように規模の大きな寺院跡を完掘した例は聞かない。本遺跡では、基壇建物以外の空閑的な地点から性格を特定し難い種々な遺構が確認され、複雑な遺構の処置は調査担当者の非力を露呈させるに十分なものがあつた。古代寺院跡は、基壇建物のみで構成されるのではなく、種々の付帯的な遺構で構成されることはいわば当然であろう。この点は、古代寺院跡の調査にかかわった者として、今後の銘とするものである。調査及び整理については担当者を中心に、群馬県埋蔵文化財調査事業団の多くの同僚の協力のもとに進め、誠意努めたつもりではあるが、至らぬ点が多々あることと憂えるものである。

発掘調査においては関係機関・地元地権者・作業に参加された皆様に御協力を賜りました。報告書の作成にあたっては多くの機関・研究者にご教示を、また整理補助員の皆様にご協力を賜りました。末尾ながら厚くお礼申し上げて、擲筆するものであります。

＜参考文献＞

- 1 尾崎喜左雄「上野国上代寺院についての一考察」『史学会報』3 群馬師範学校史学会 1948年『上野国の信仰と文化』1973年に所収
- 2 松田 鑽『藤岡町史』藤岡町史編纂委員会 1957年
- 3 『吉井町史』吉井町 1974年
- 4 『群馬の古代寺院と古瓦』群馬県立博物館 1981年
- 5 『第3回関東古瓦研究会研究資料No.3』1982年
- 6 福山 敏男「初期天台真言寺院の建築」『仏教考古学講座』第3巻 1936年 雄山閣
- 7 筑紫 美鈴「奈良末・平安初期の東国仏教に見られる師資関係」『史窓』38号 京都女子大史学会 1980年
- 8 菅原 征子「両毛地方の仏教と最澄」『群馬県史研究』第15号 1982年
- 9 由木 義文『東国の仏教』山喜房仏書林 1983年
- 10 岩淵 一夫「『愍諭弁惑章』に見る古代下野国の歴史的背景」栃木県考古学界誌第9集 1988年
- 11 『埼玉県史』通史編1 埼玉県 1987年
- 12 『栃木県史』通史編2 栃木県 1980年

写 真 图 版



航空写真（昭和22年米軍撮影） S=1/35,000



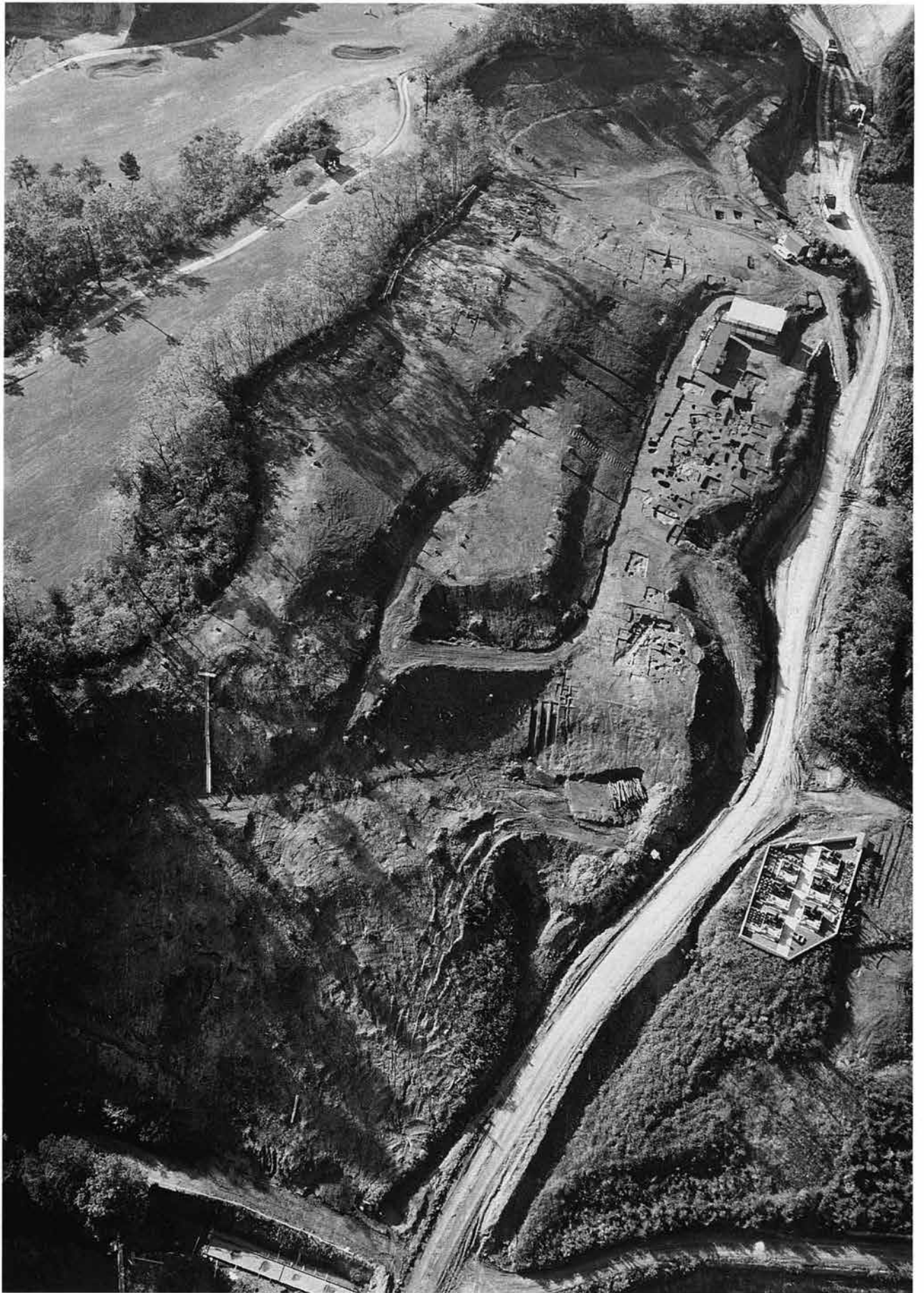
遺跡遠景（北から）



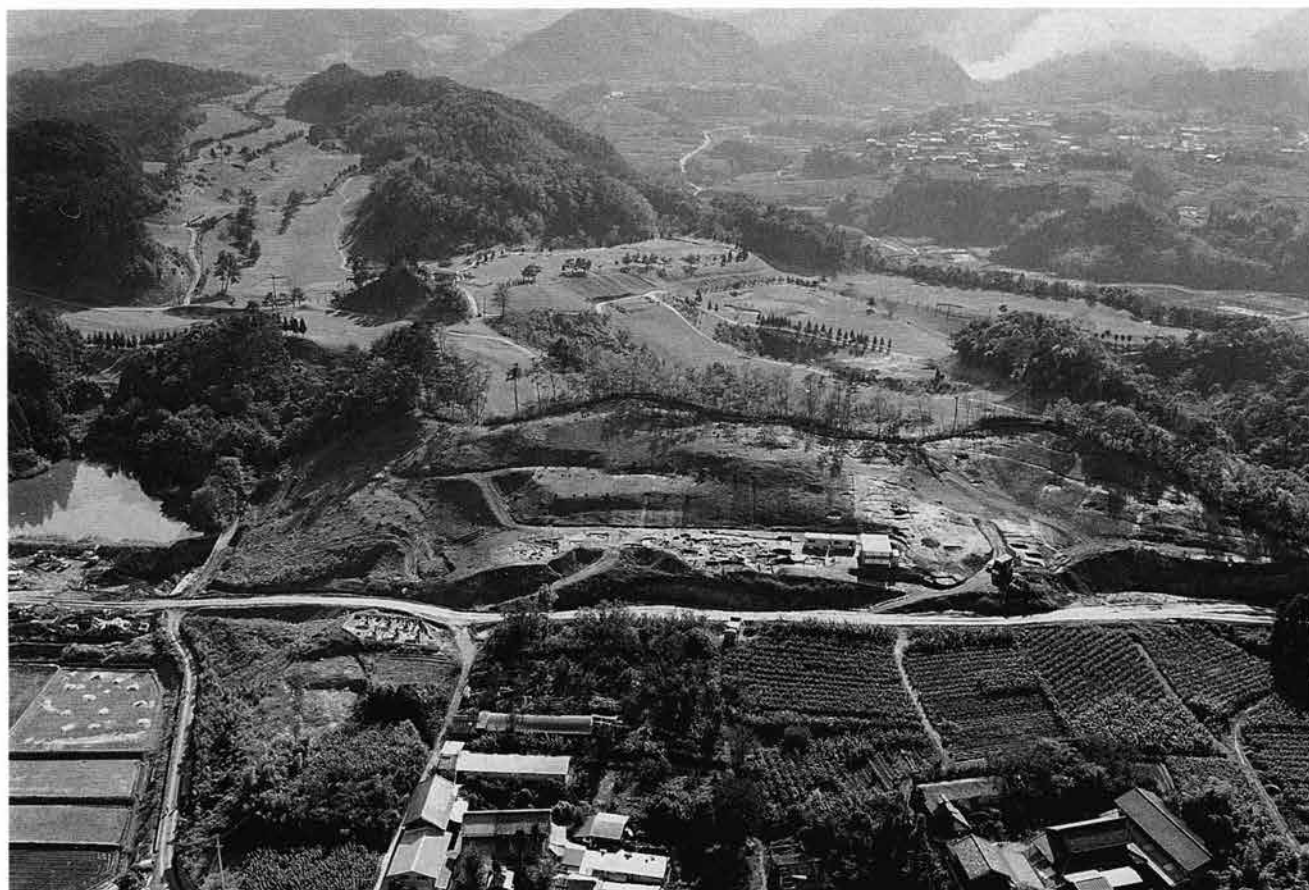
遺跡遠景（北東から）



遺跡全景（西から）



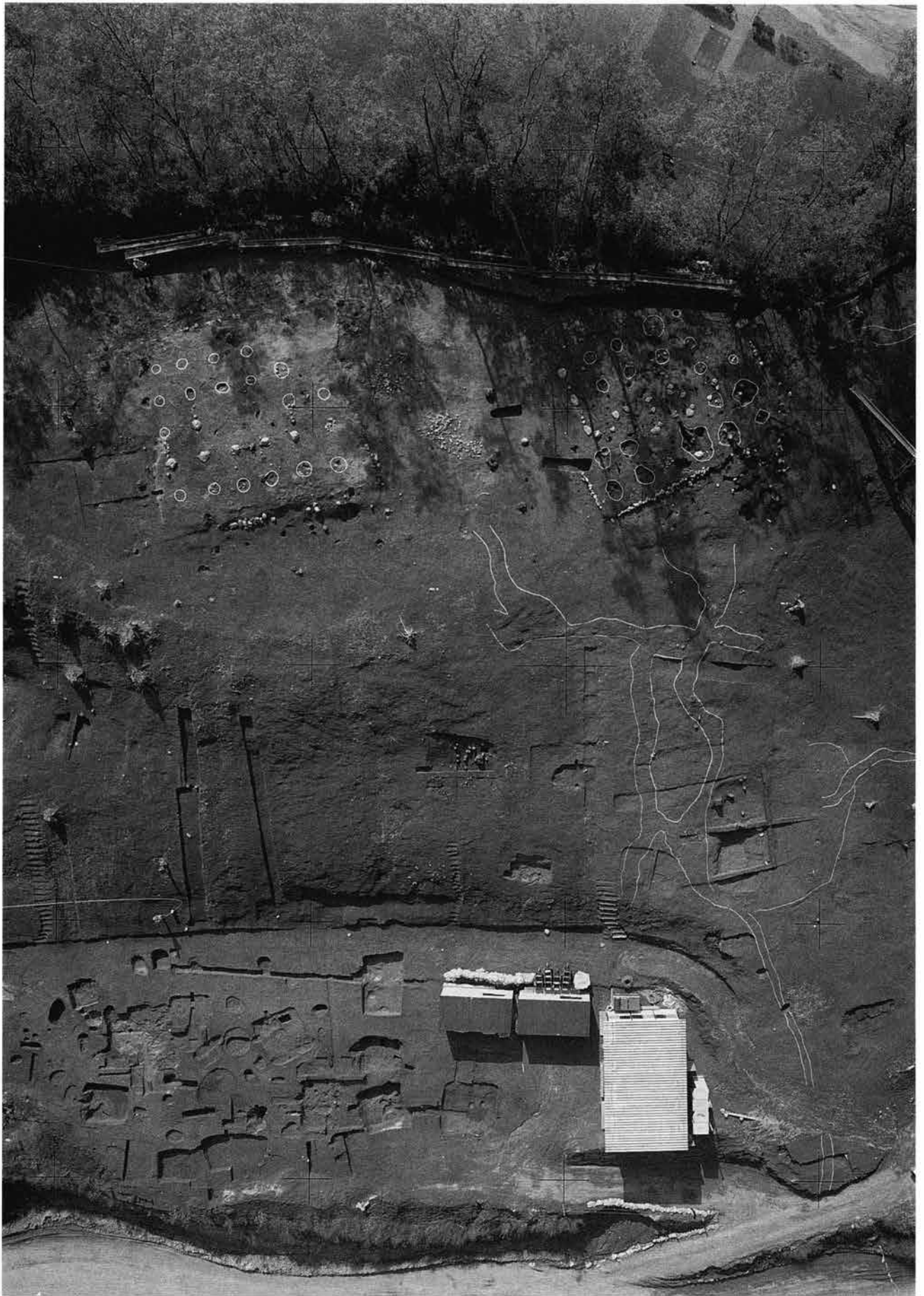
遺跡全景（東から）



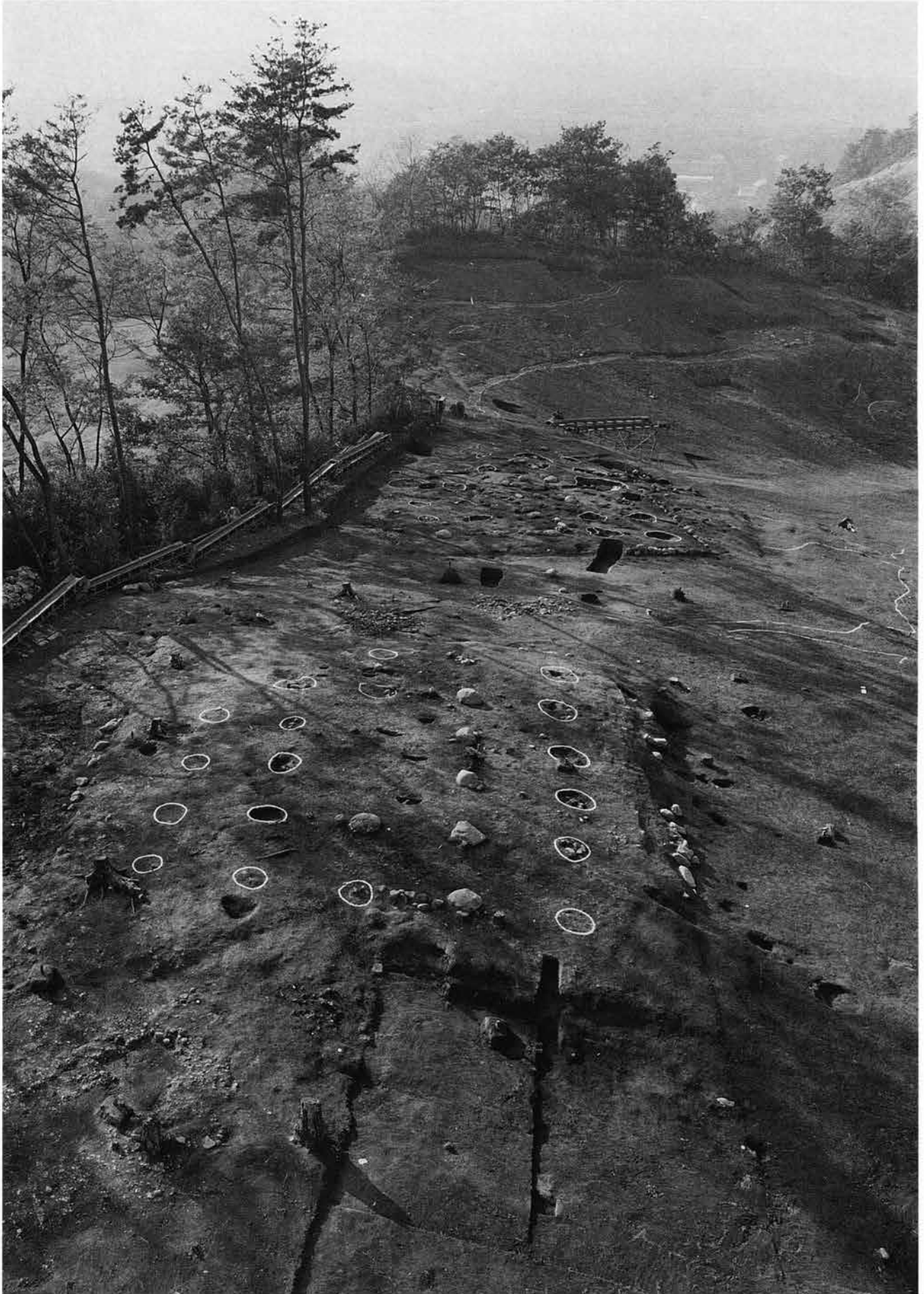
遺跡全景（北から）



遺跡全景（上空北から）



遺跡中央部（北上から）



頂部区景観 (3号建物跡から西尾根を望む)



頂部区景観（西から）



西尾根区景観（北西から）



1号道路跡・南半部（北から）



1号道路跡・北半部（南から）

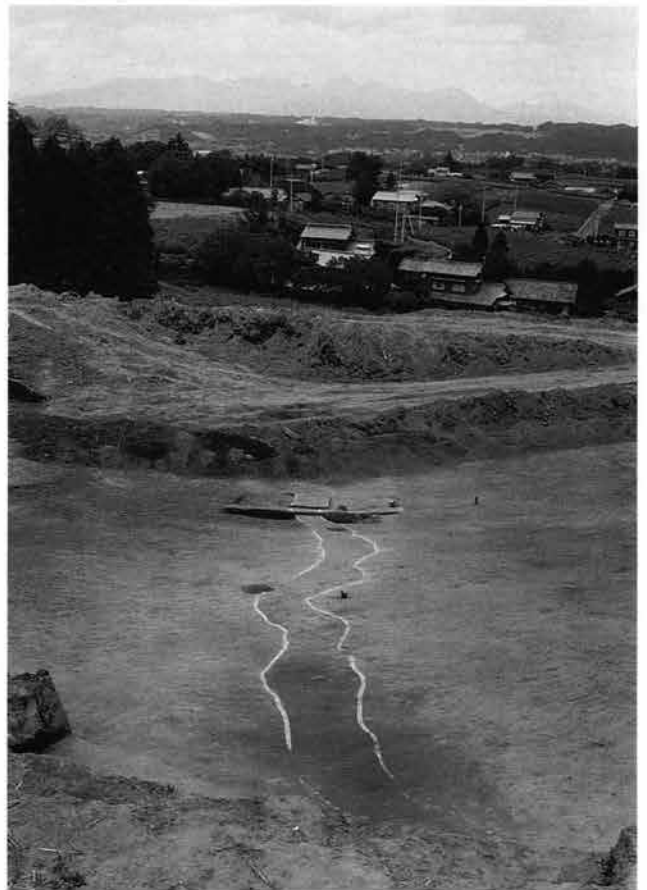


1号道路跡・南半部（北から）

PL.10



1号道路跡土層断面



3号道路跡（南から）



3号道路跡（北から）



4号道路跡（東から）



4号道路跡（西から）



1号建物跡景観（西から）



1号建物跡景観（東から）



1号建物跡・付設土坑（北上から）



同上（北東から）



1号建物跡（南東から）



1号建物跡（南西から）



1 建 1 柱礎石



1 建 6 柱礎石



1 建 2 柱礎石



1 建 7 柱礎石



1 建 3 柱礎石



1 建 8 柱礎石



1 建 4 柱礎石



1 建 9 柱礎石



1 建 5 柱礎石



1号建物跡基壇上の土坑



1号建物跡付設土坑



1号建物跡盛土除去後の状況



2号建物跡調査状況



同上



同上



2号建物跡・3号建物跡調査状況



2号建物跡(右)・3号建物跡(左) (北上から)



2号建物跡全景（東から）



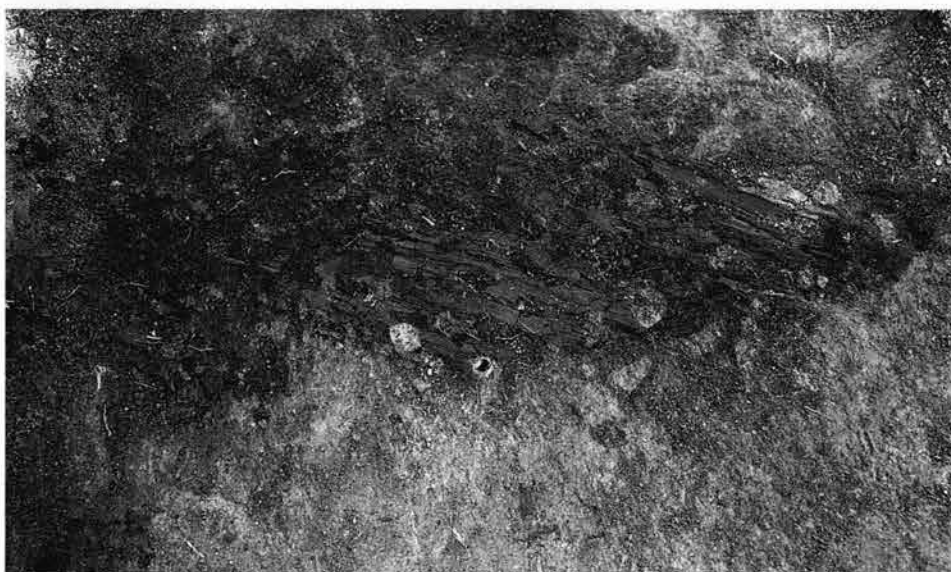
同上（北上から）



2 建基壇北側瓦溜り



2 建基壇上遺物出土状況



2 建炭化材出土状況



2 建基壇上の状況



同上



同上



2 建基壇化粧（北面）



同上



同上



2 建基壇化粧 (東面)



2 建基壇化粧 (西面)



2 建基壇 (南面)



2 連15柱礎石



2 連20柱礎石



2 連16柱礎石



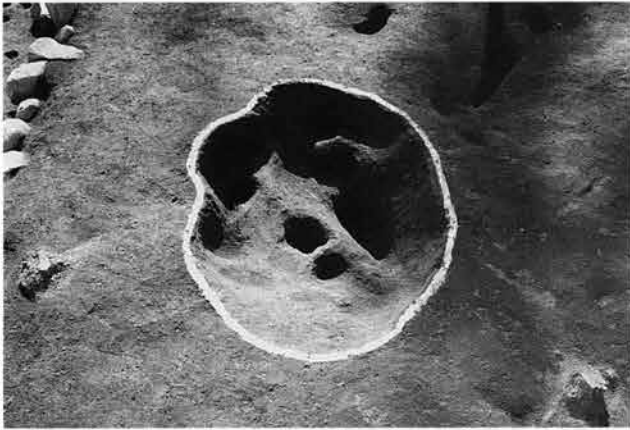
2 連21柱礎石



2 連17柱礎石



2 連28柱礎石



2建1 柱礎石据え付け跡



2建5 柱礎石据え付け跡



2建2 柱礎石据え付け跡



2建6 柱礎石据え付け跡



2建3 柱礎石据え付け跡



2建7 柱礎石据え付け跡



2建4 柱礎石据え付け跡



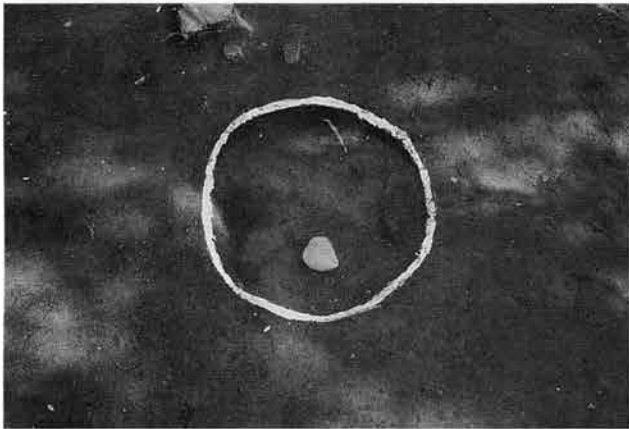
2建8 柱礎石据え付け跡



2 建12柱礎石据え付け跡



2 建22柱礎石据え付け跡



2 建14柱礎石据え付け跡



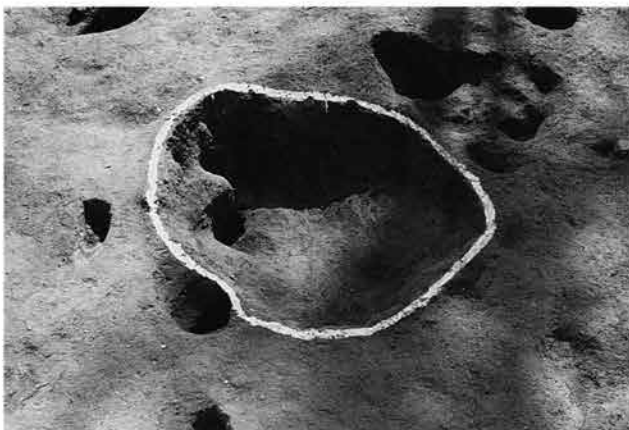
2 建23柱礎石据え付け跡



2 建18柱礎石据え付け跡



2 建24柱礎石据え付け跡



2 建19柱礎石据え付け跡



2 建25柱礎石据え付け跡



2 建北東隅羽釜設置状況



2 建北西隅羽釜設置状況



2 建南東隅羽釜設置状況



2号建物跡地鎮状遺物



同上



同上



2 建基壇北側地割れ状況



同上



基壇北方整地土下遺物出土状況



2 建基壇断ち割り状況



2 建基壇盛土状況



同左



2 建基壇内鍛冶状遺構



同左



2 建基壇東方整地狀況



2 建基壇北方整地狀況



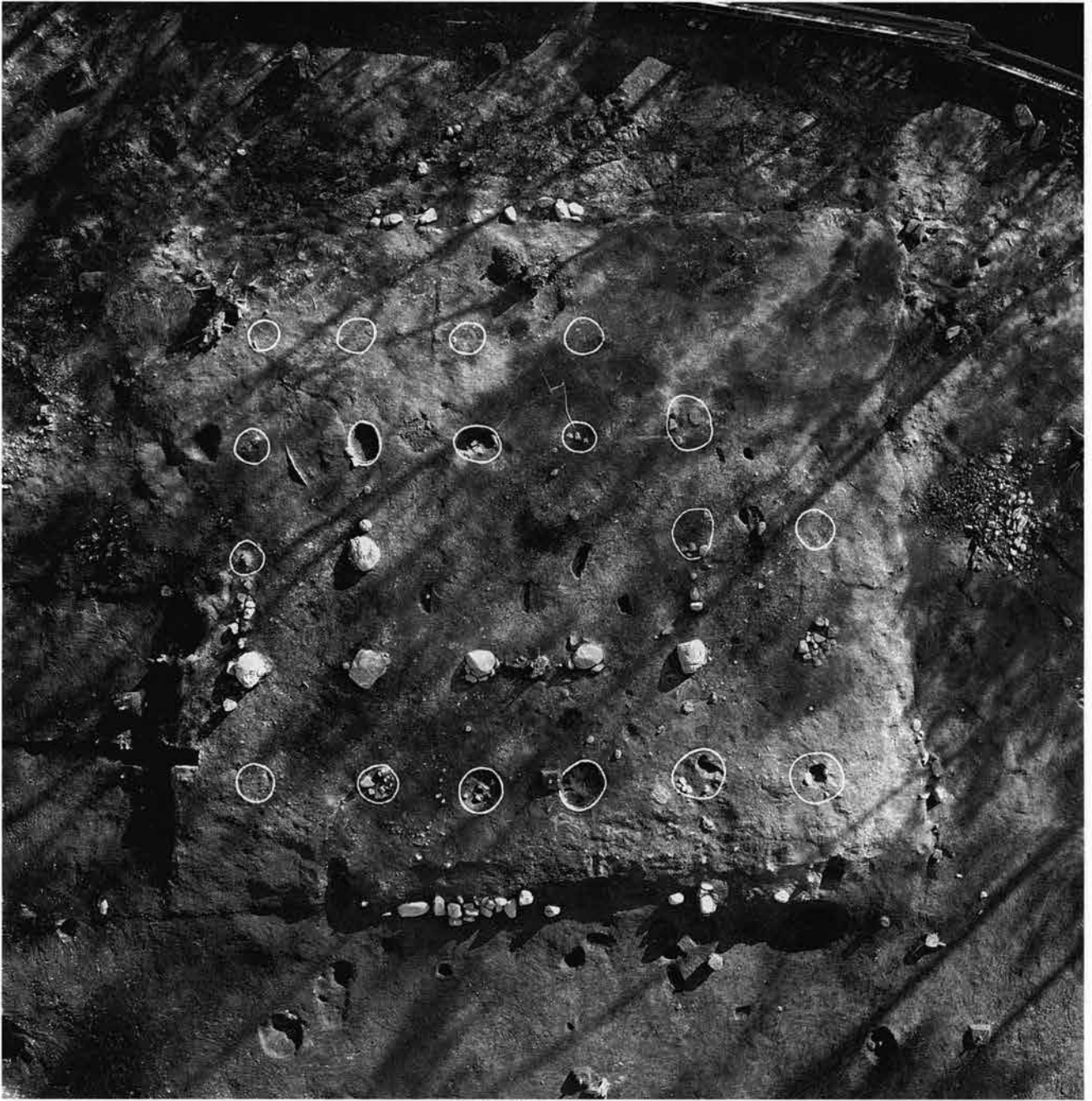
同上



3号建物跡景観（西から）



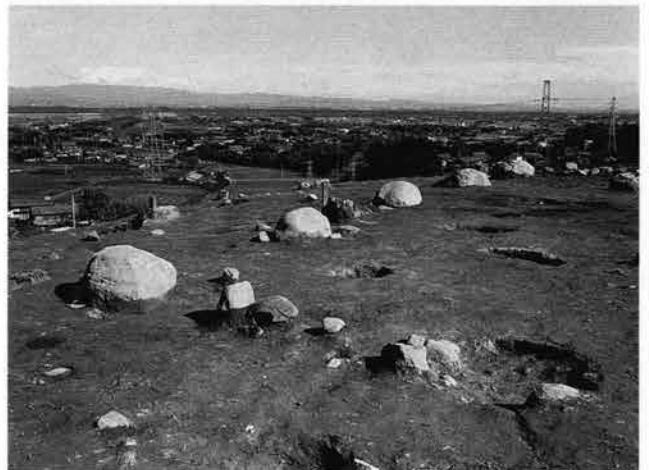
3号建物跡全景（北から）



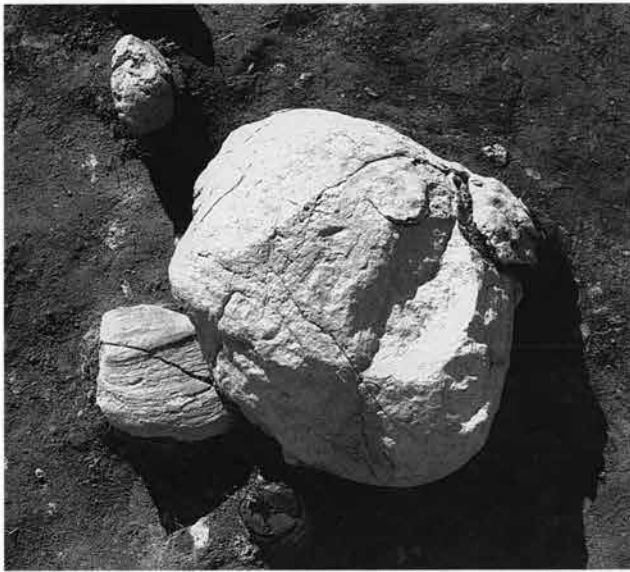
3号建物跡全景（北上から）



3号建物基壇上状況



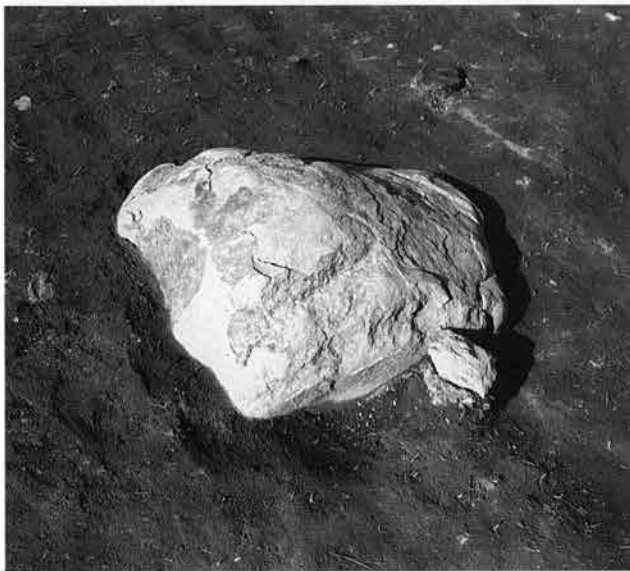
同左



3 連18柱礎石



3 連21柱礎石



3 連19柱礎石



3 連22柱礎石



3 連20柱礎石



3 連28柱礎石



3 建 2 柱礎石据え付け跡



3 建 7 柱礎石据え付け跡



3 建 3 柱礎石据え付け跡



3 建23柱礎石据え付け跡



3 建 4 柱礎石据え付け跡



3 建24柱礎石据え付け跡



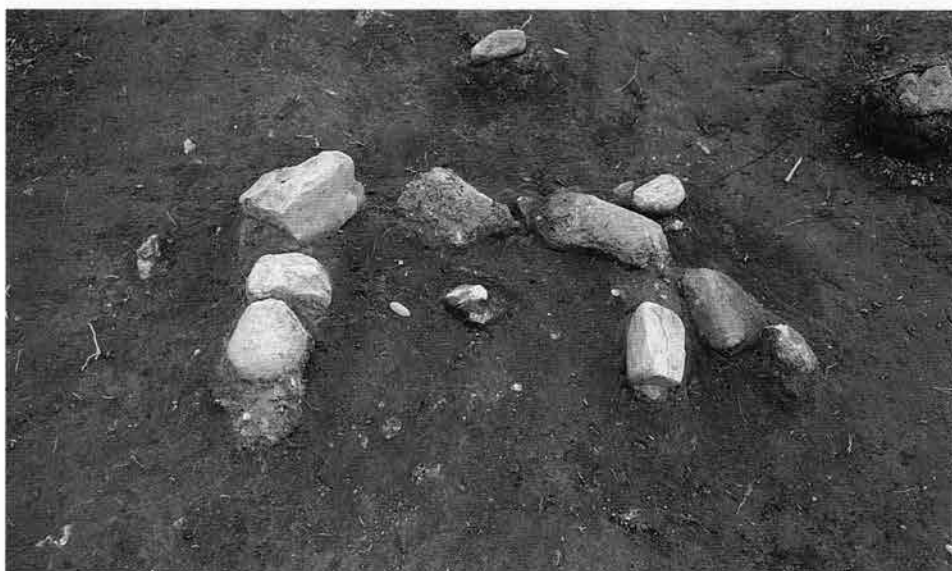
3 建 5 柱礎石据え付け跡



3 建25柱礎石据え付け跡



3 建遺物出土状況



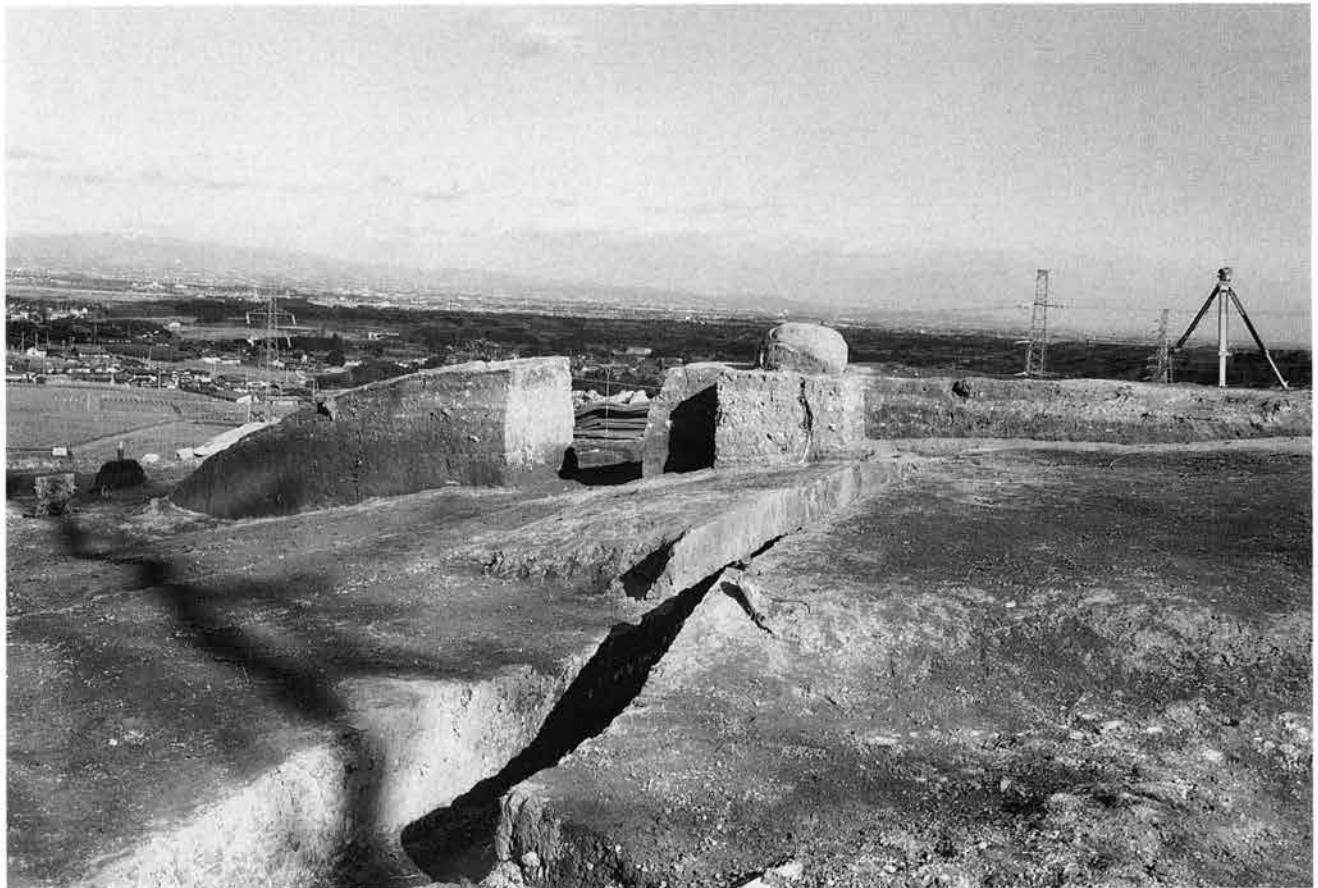
3 建鍛冶炉状石組



3 建石敷状遺構



3 建基壇断ち割り状況



同上



4号建物跡全景（北上から）



同上（北から）



4号建物跡全景（東から）



4号建物跡基壇（東から）



4 建礎石状の石



4 建祭壇状遺構



4 建祭壇状遺構内の土坑



5号建物跡景観（北から）



5号建物跡全景（北上から）



5号建物跡全景（西から）



5号建物跡全景（東から）



5号建物跡土層断面



同上



5 建調査状況（北から）



同上



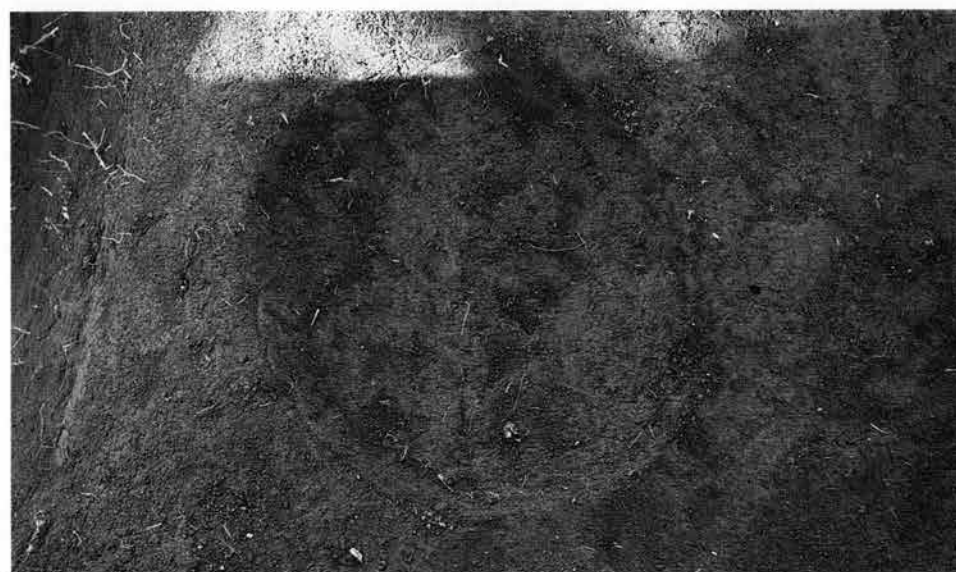
9号溝（北から）



5建1号鍛冶炉



5建2号鍛冶炉



5建3号鍛冶炉



7号建物跡全景（南から）



7号建物跡石組遺構



同上



1号特殊遺構全景（南西から）



1号特殊遺構調査風景



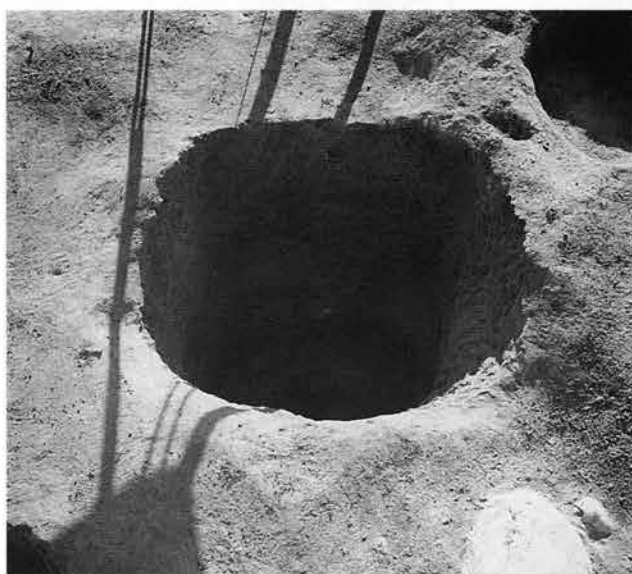
1号特殊遺構中心礎石



1号特殊遺構1号柱穴



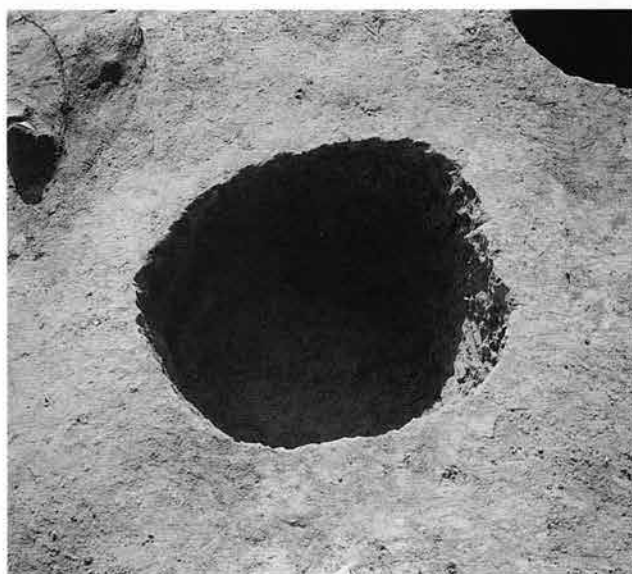
同上



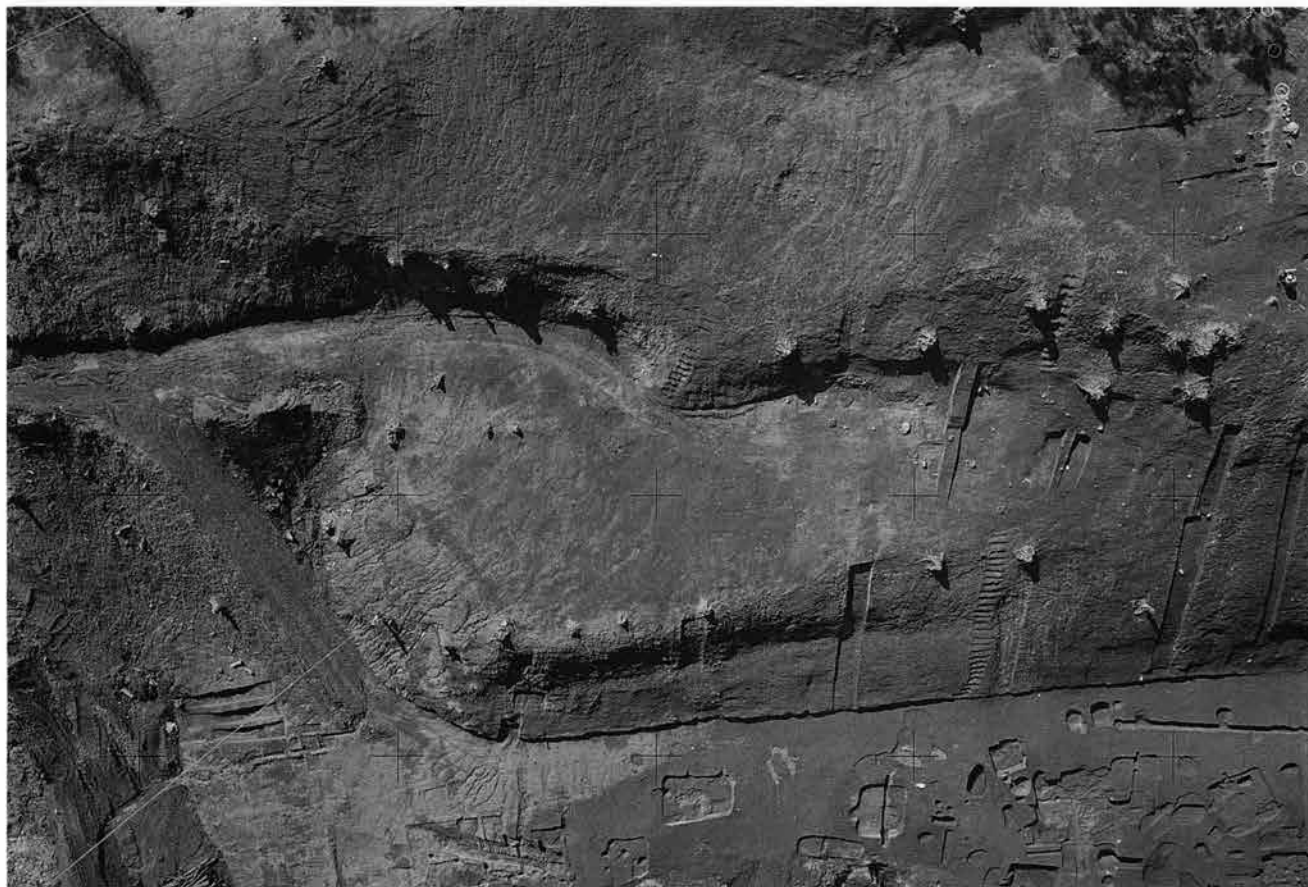
1号特殊遺構2号柱穴



1号特殊遺構4号柱穴



1号特殊遺構3号柱穴



1号テラス全景（北上から）



1号テラス作業風景



1号テラス全景 (西から)



1号テラス不詳遺構 (西から)



1号テラス8号土坑・9号土坑



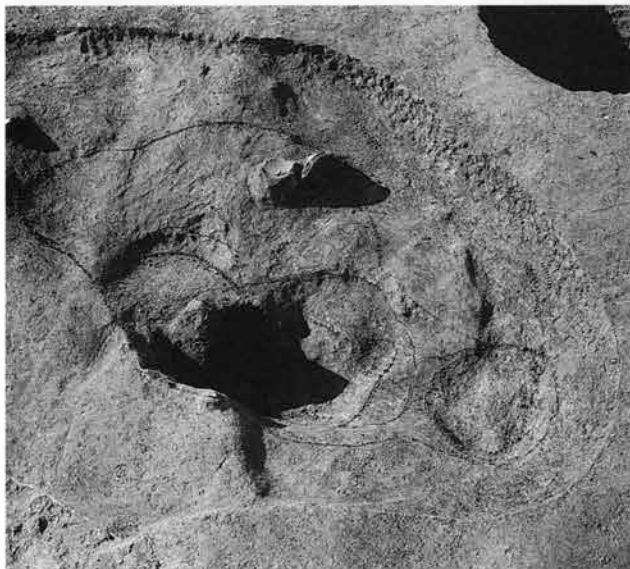
1号テラス13・14・15号土坑



同上



1号テラス16号土坑



1号テラス10号土坑



3号テラス周辺遠景（東から）



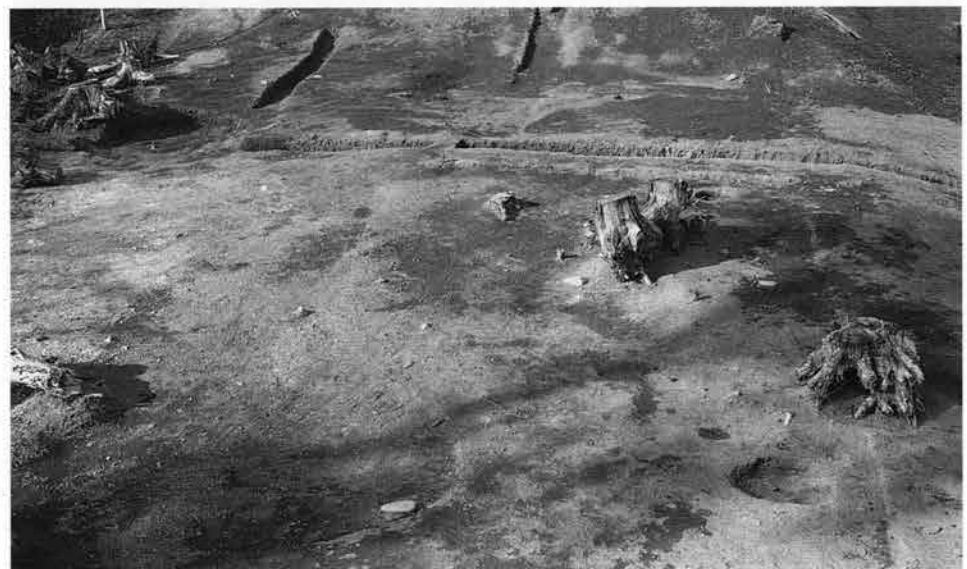
3号テラス近景（東から）



4号テラス (西から)



同上 (東から)



同上



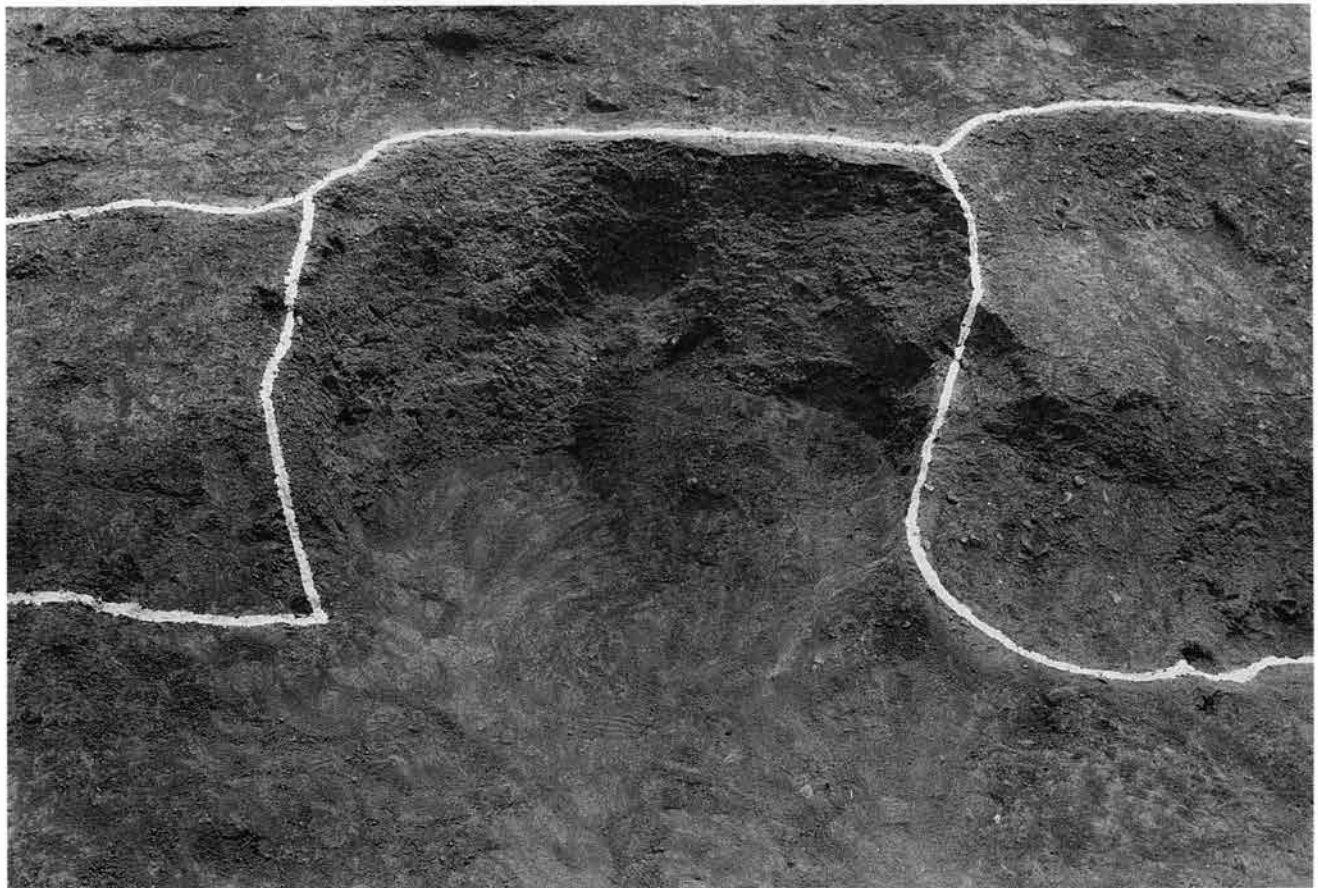
7号テラス発掘状況（北東から）



7号テラス全景（東から）



7号テラス1号掘り込み遺構（北から）



同上



7号テラス2号掘り込み遺構（北から）



同上



同上



8号テラス全景（北から）



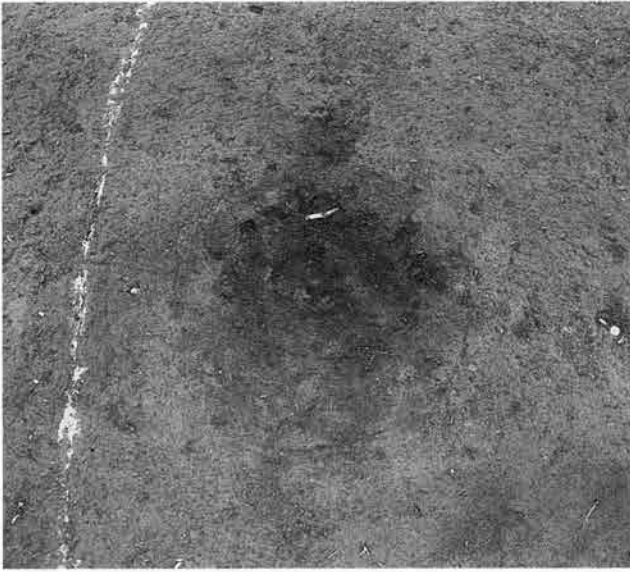
8号テラス全景（北から）



8号テラス鍛冶遺構面（東から）



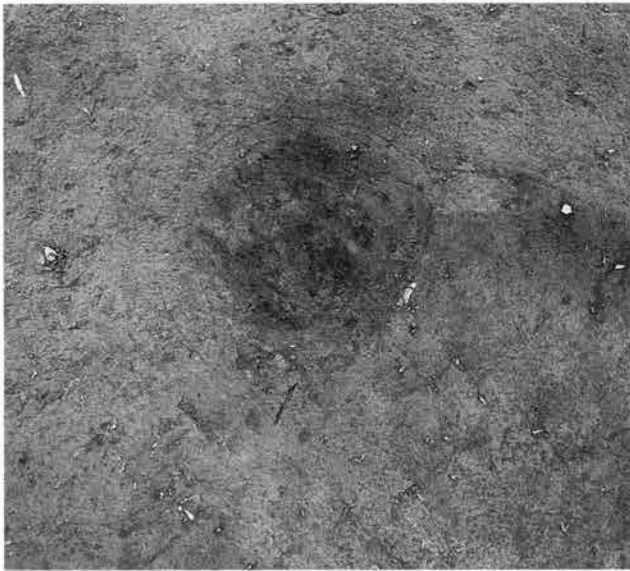
8号テラス鍛冶炉・土坑群（南から）



8号テラス1号鍛冶炉



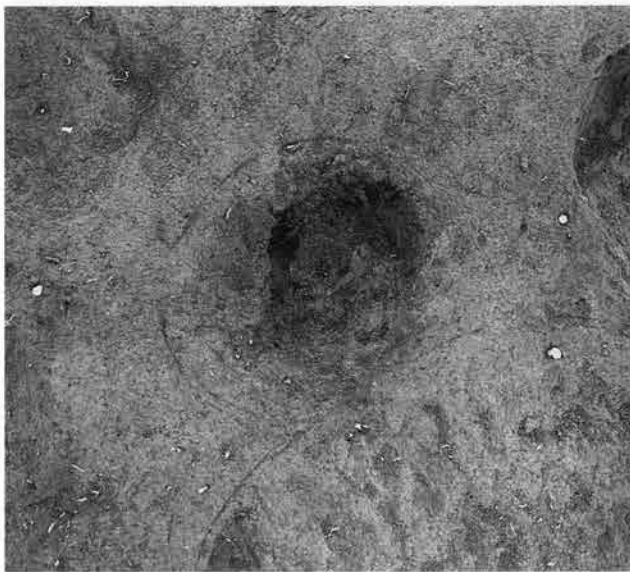
8号テラス4号鍛冶炉



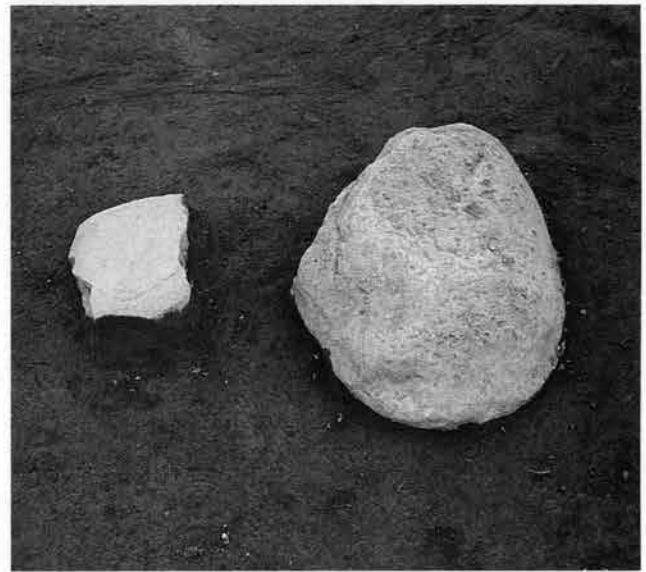
8号テラス2号鍛冶炉



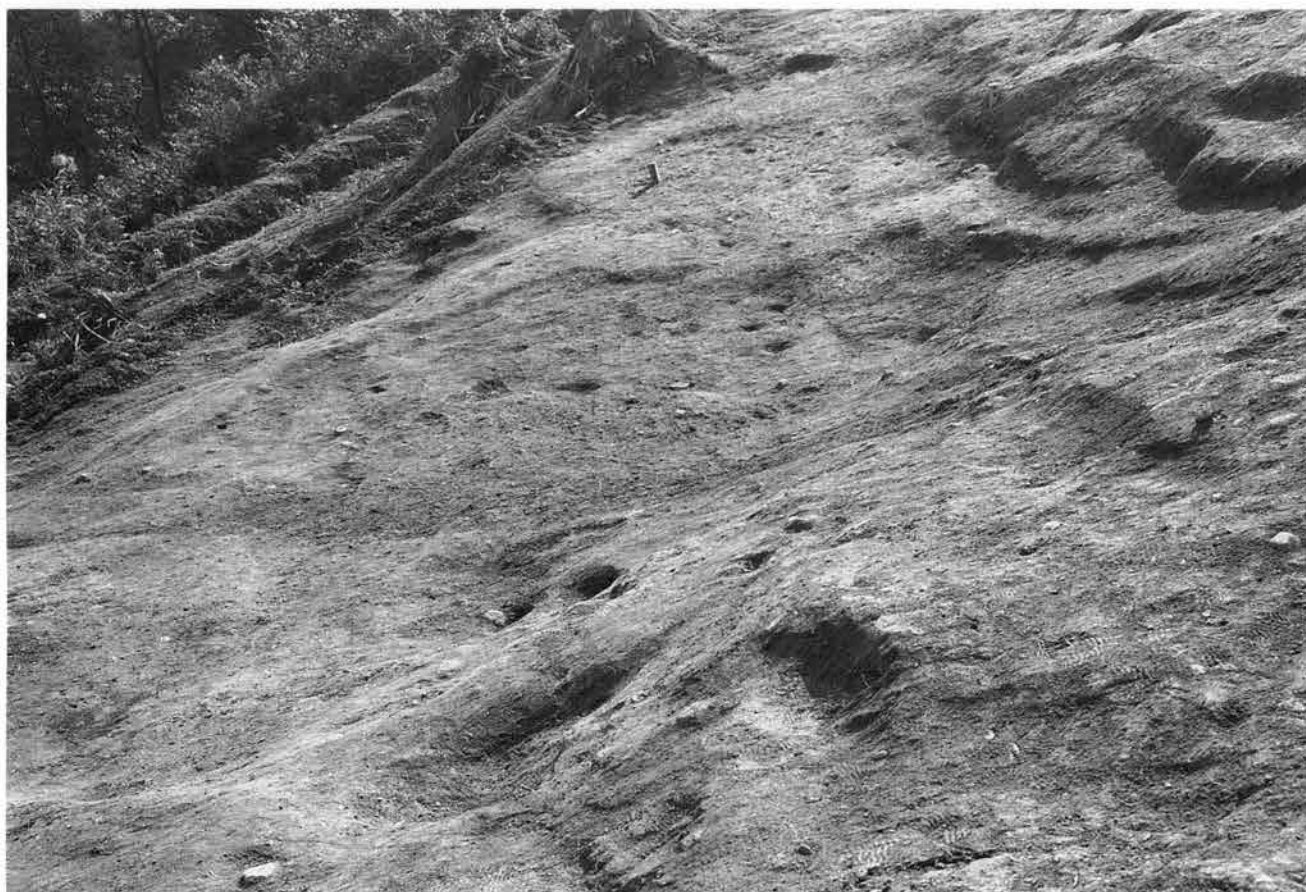
8号テラス5号鍛冶炉



8号テラス3号鍛冶炉



8号テラス敲击台状の石



9号テラス (北から)



10号テラス (北から)



12号テラス (南から)



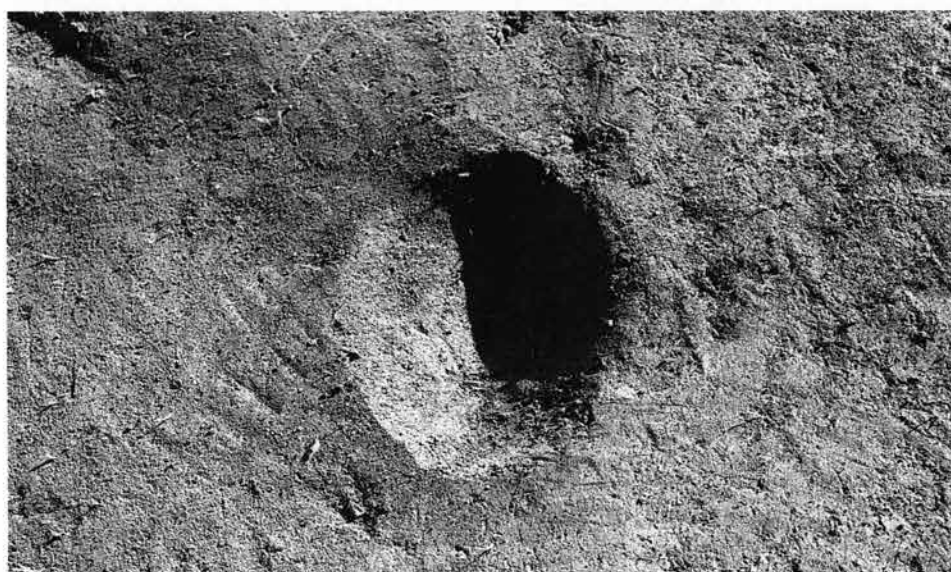
12号テラス (北西から)



2号焼土坑（北から）



3号焼土坑（西から）



m-19グリッド鍛冶炉



3道1



4道1



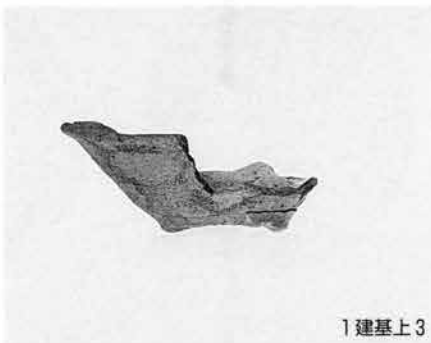
10道1



1建基上1



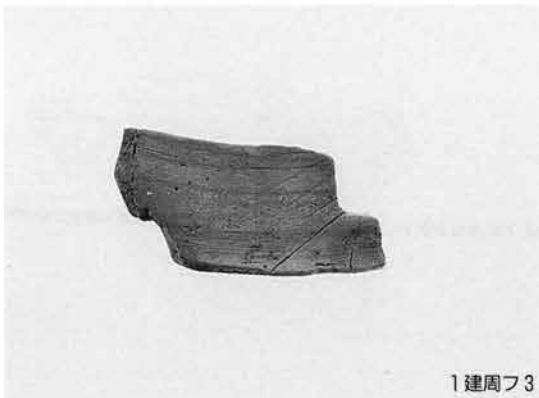
1建基上2



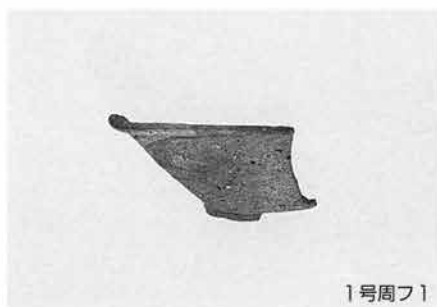
1建基上3



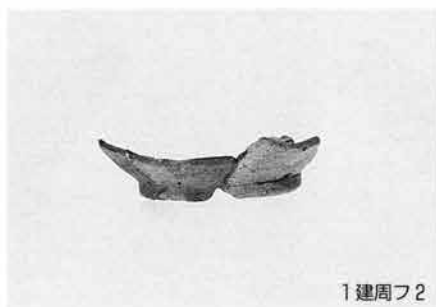
1建基上5



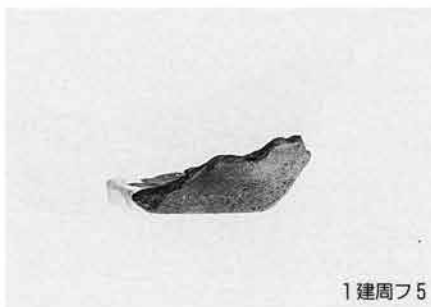
1建周フ3



1号周フ1



1建周フ2



1建周フ5



2 建軒丸瓦 1



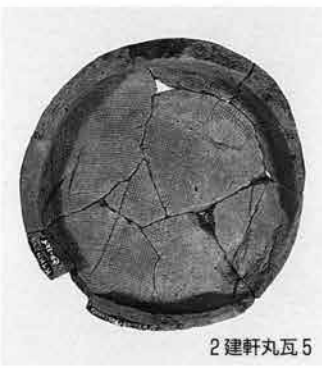
2 建軒丸瓦 2



2 建軒丸瓦 3



2 建軒丸瓦 4



2 建軒丸瓦 5



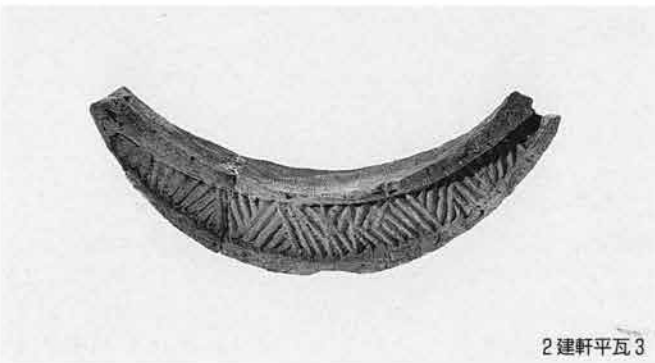
2 建軒丸瓦 6



2 建軒平瓦 1



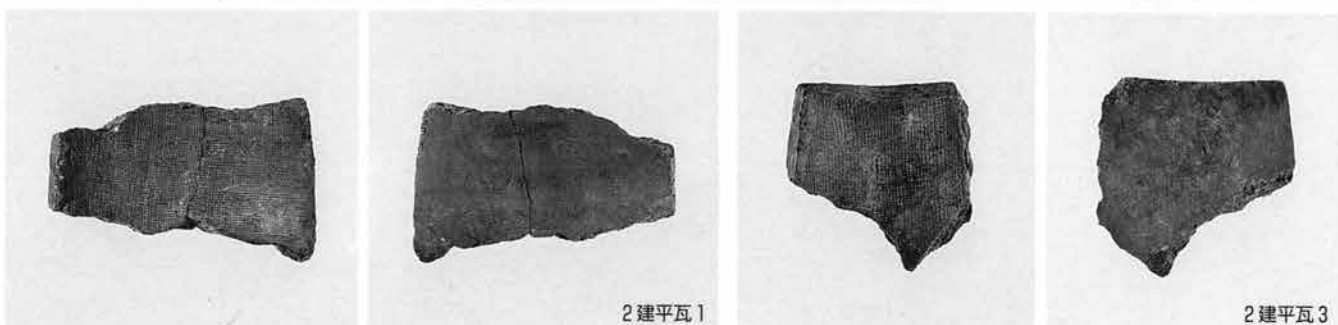
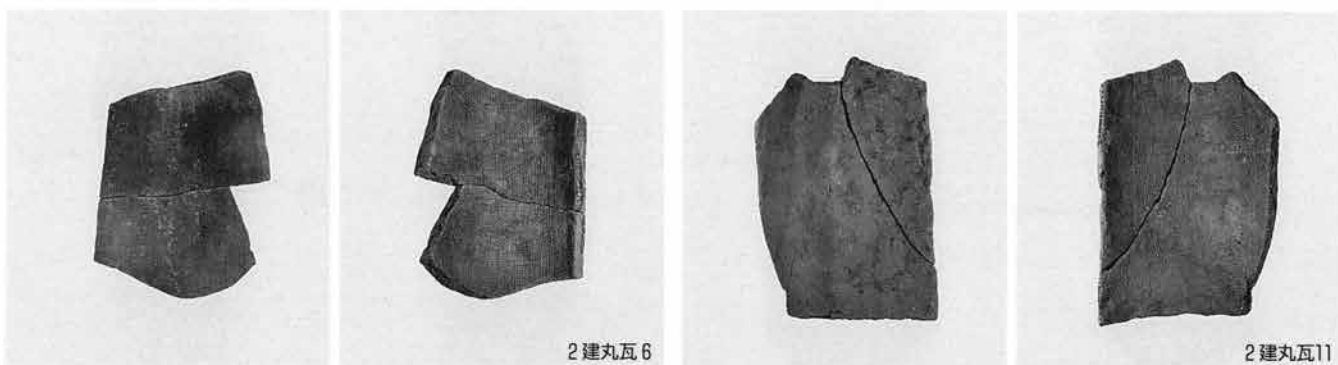
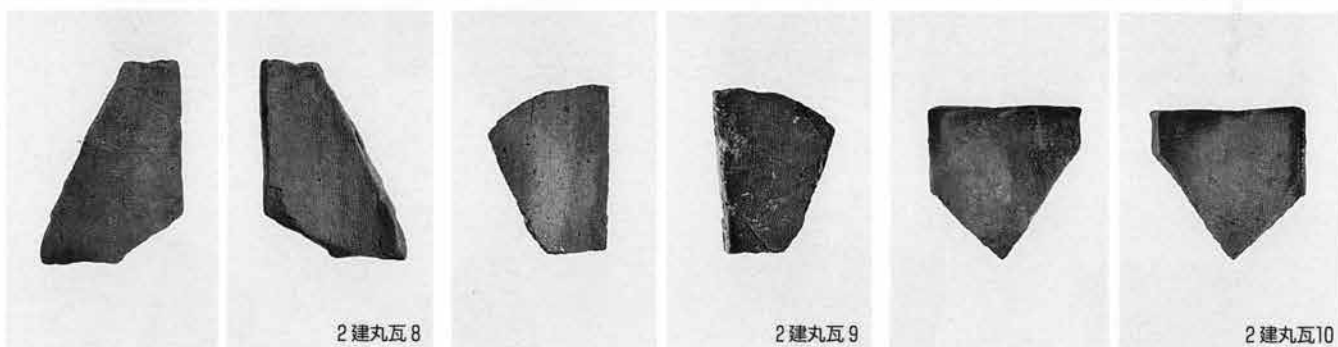
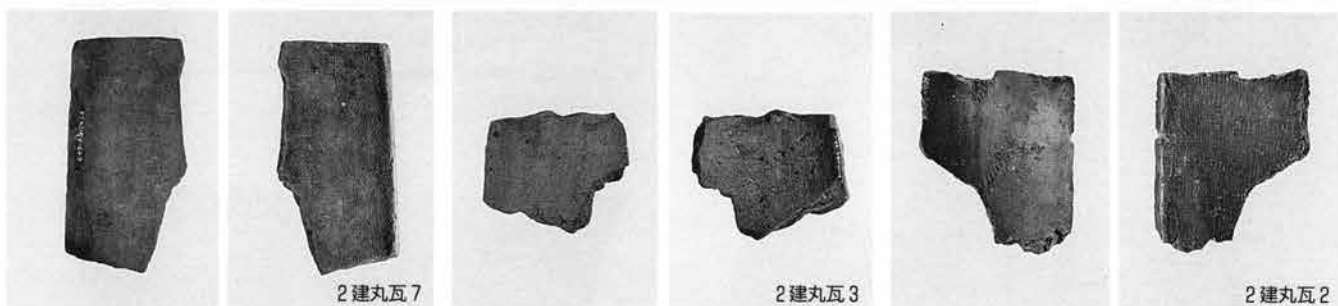
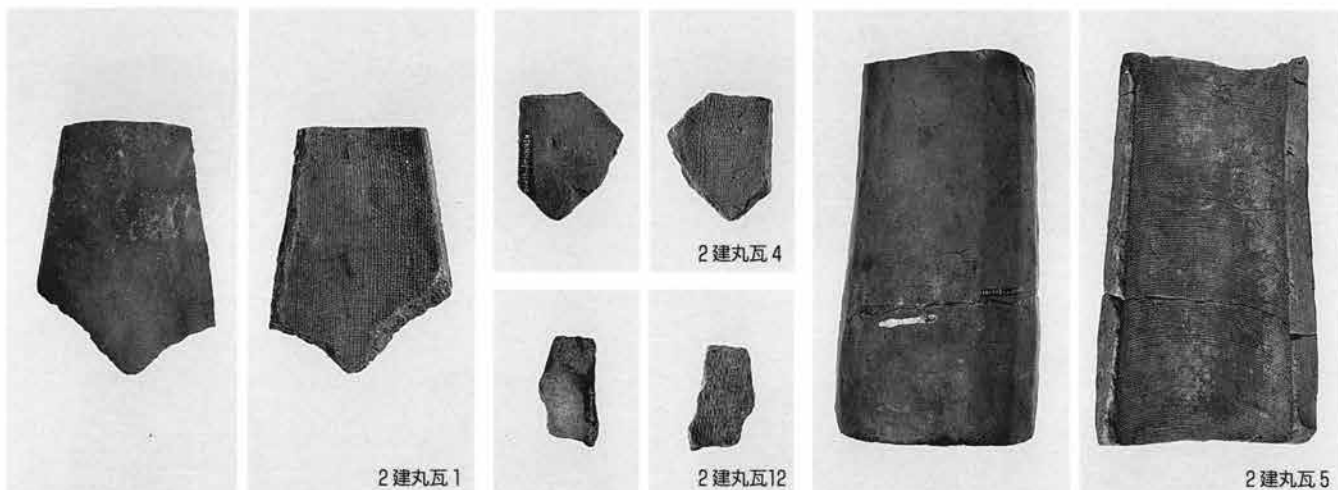
2 建軒平瓦 2

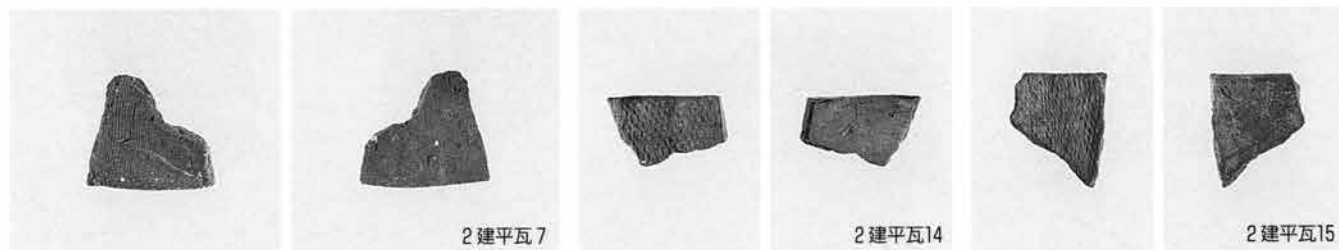
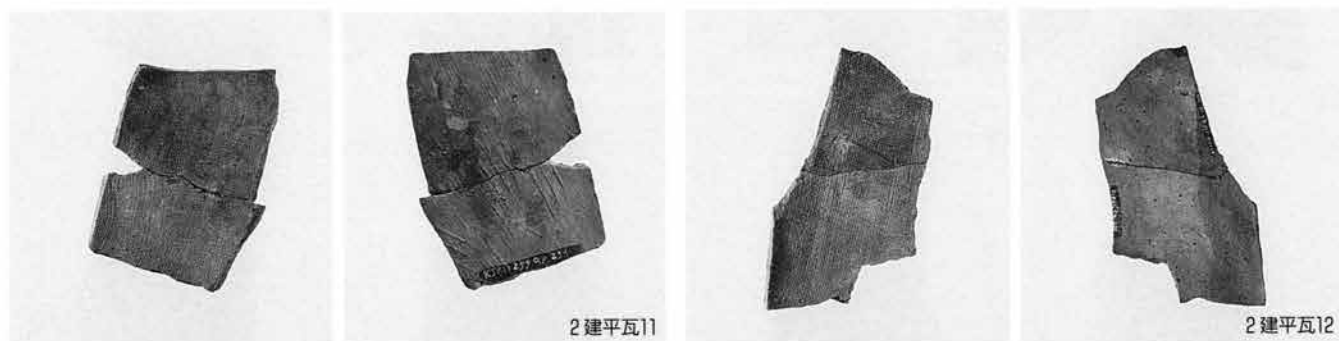
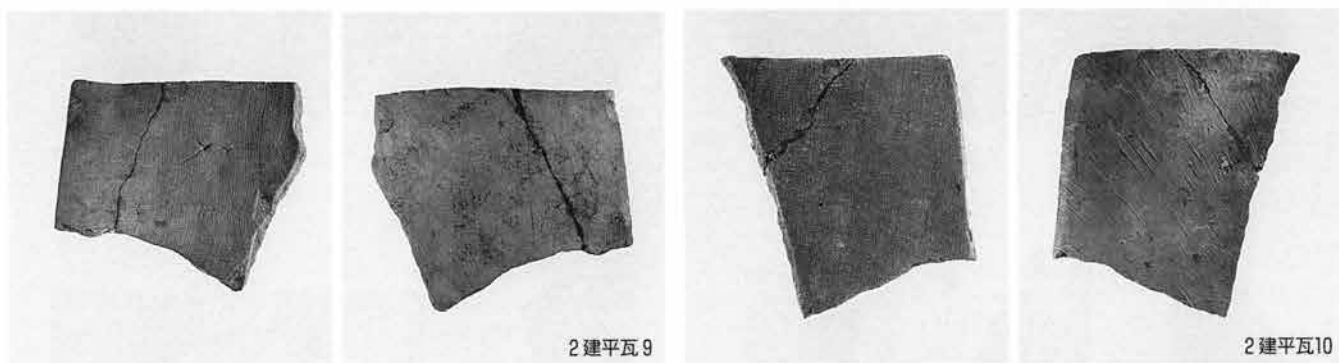
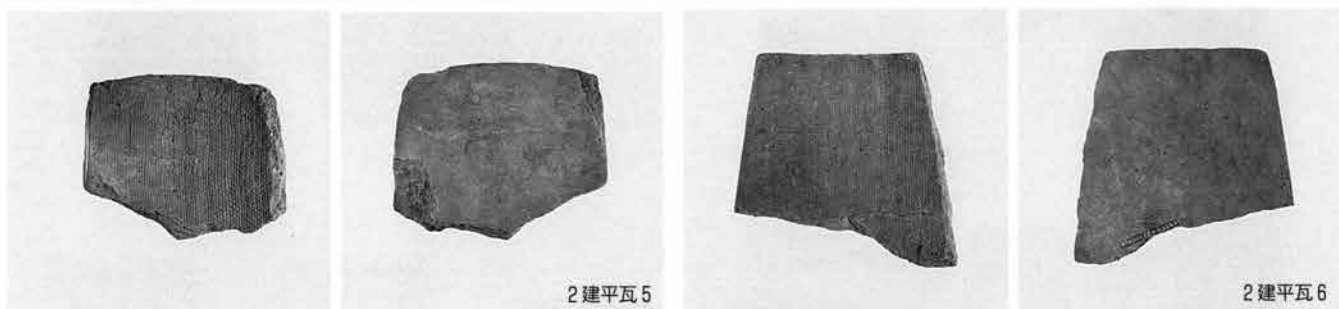
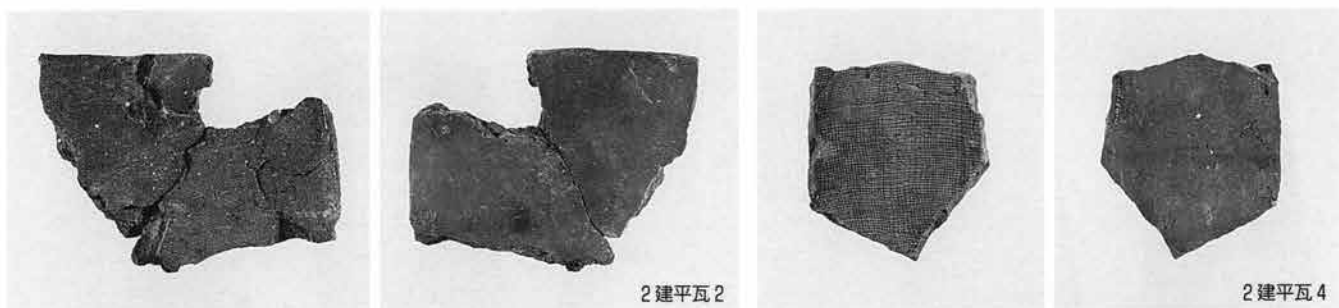


2 建軒平瓦 3



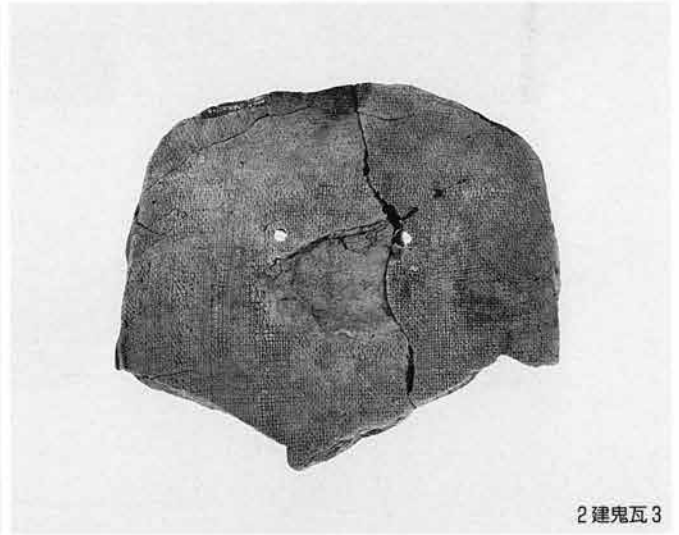
2 建軒平瓦 4







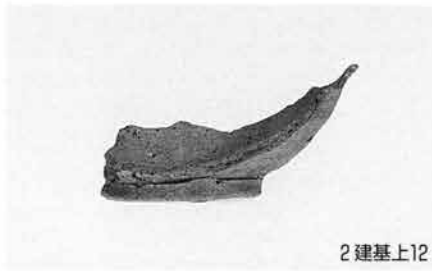
2 建鬼瓦 1



2 建鬼瓦 3



2 建鬼瓦 7





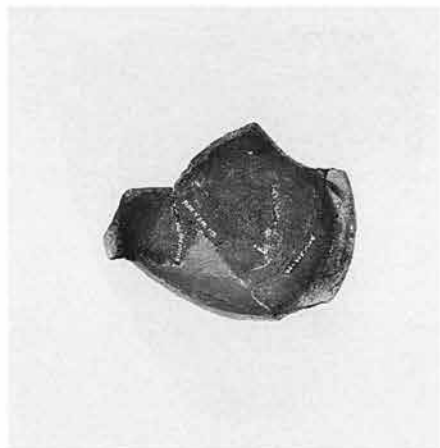
建基上34



2 建基上36



2 建基上38



2 建基上37



2 建基上35



2 建基上39



2 建基上40



2 建基上41

2 建基上42

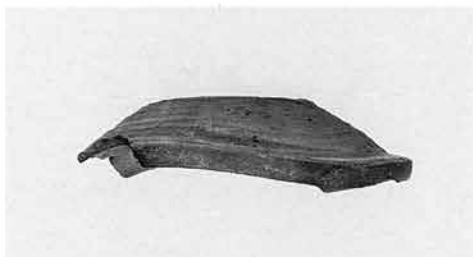
2 建基上51



2 建基上50

2 建基上49

2 建基上52



2 建基上56

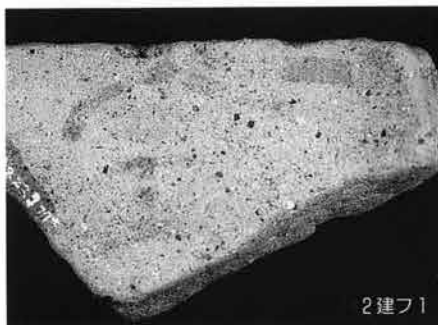
2 建基下1



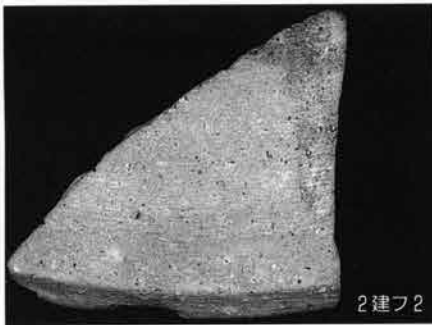
2 建基上55

2 建基下2

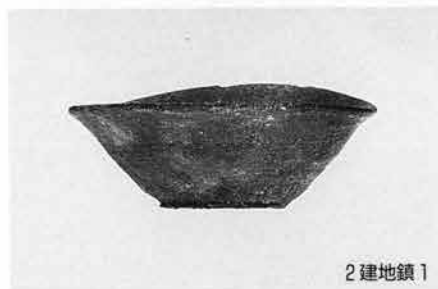
2 建基下6



2建フ1



2建フ2



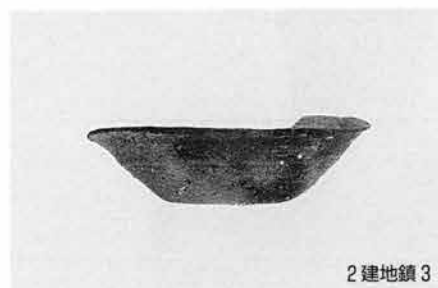
2建地鎮1



2建地鎮2



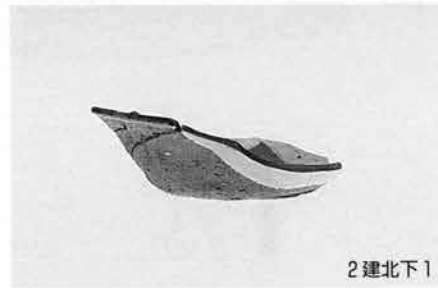
2建北上3



2建地鎮3



2建地鎮4



2建北下1



2建地鎮5



2建地鎮6



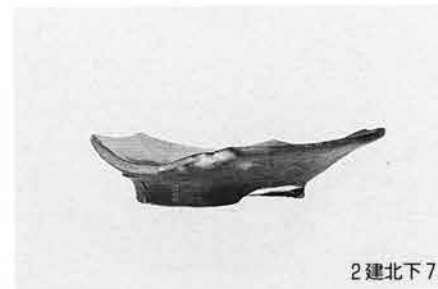
2建北下2



2建北下3



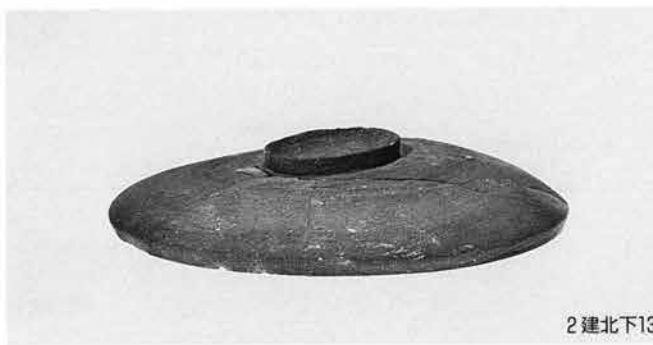
2建北下6



2建北下7



2建北下10



2建北下13



2 建北下11・12



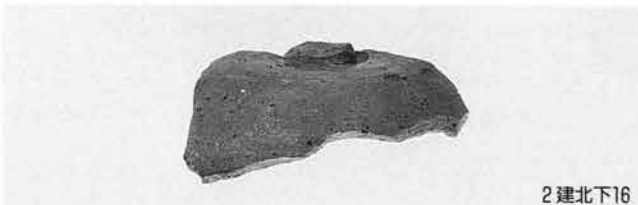
2 建北下11・12



2 建北下11



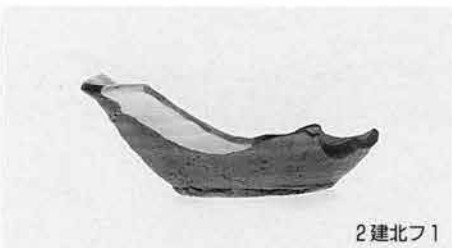
2 建北下12



2 建北下16



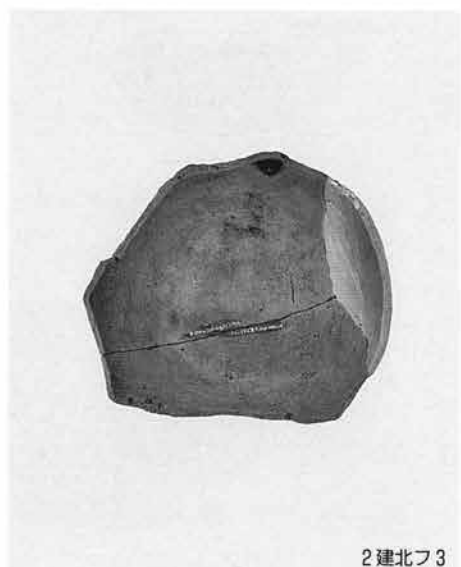
2 建北下18



2 建北フ1



2 建北フ4

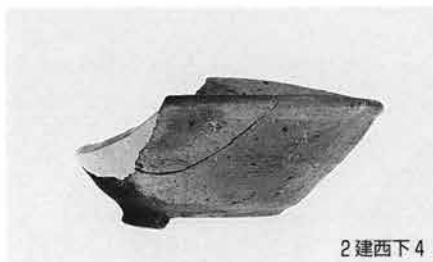


2 建北フ3



2 建北フ2





2建西下4



2建西下5



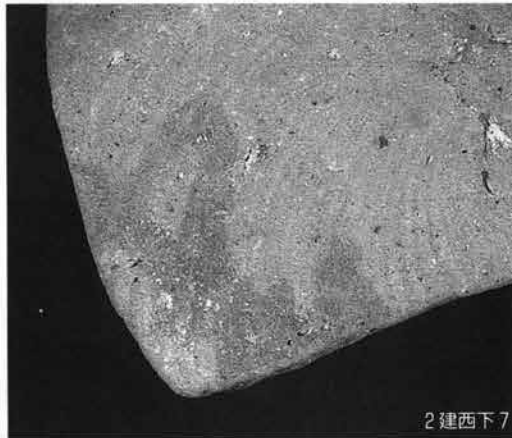
2建西下12



2建西下14



2建西下20



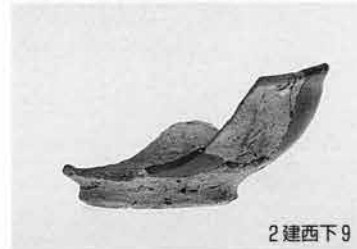
2建西下7



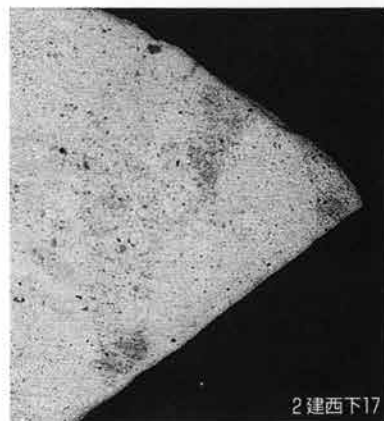
2建西下10



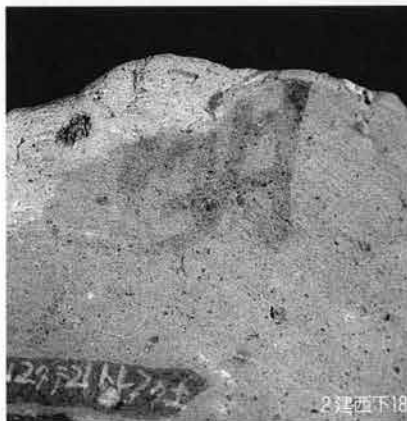
2建西下8



2建西下9



2建西下17



2建西下18



2建西下22



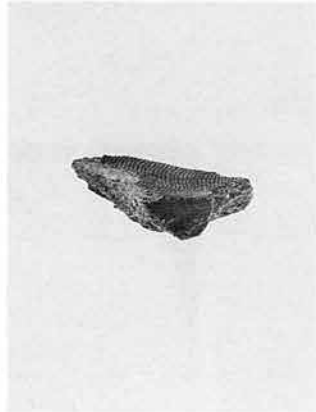
3 建軒丸瓦 1



3 建軒丸瓦 3



3 建軒丸瓦 2



3 建軒平瓦 2



3 建文字瓦 1



3 建文字瓦 2



3 建特殊瓦 1



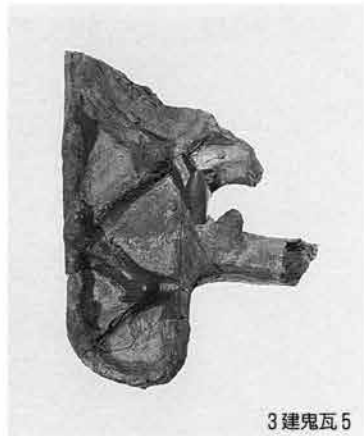
3 建鬼瓦 2



3 建鬼瓦 3



3 建鬼瓦 4



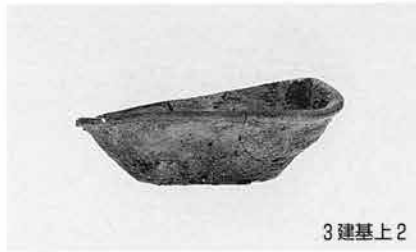
3 建鬼瓦 5



3 建鬼瓦 1



3 建基上 1



3 建基上 2



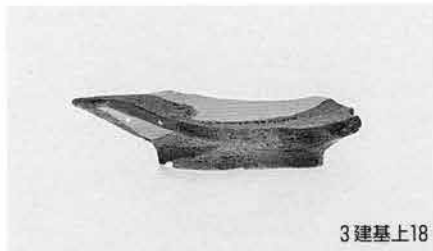
3 建基上 6



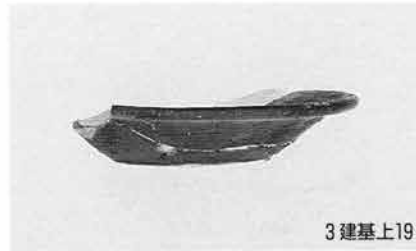
3 建基上 3



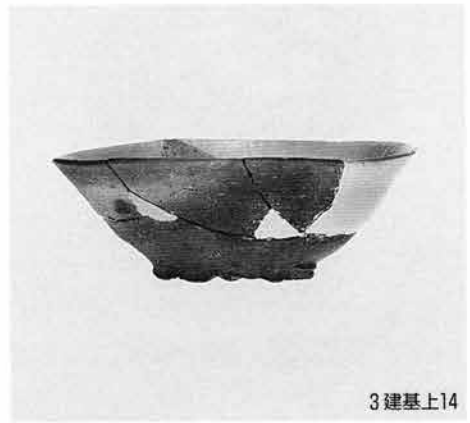
3 建基上 4



3 建基上 18



3 建基上 19



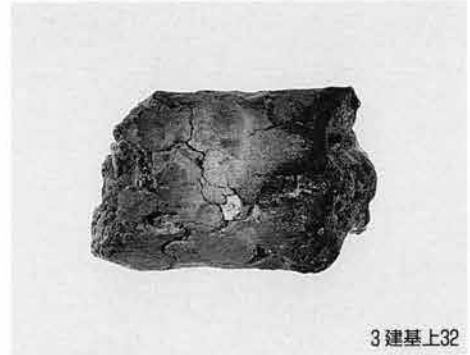
3 建基上 14



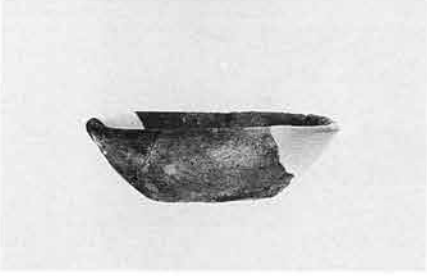
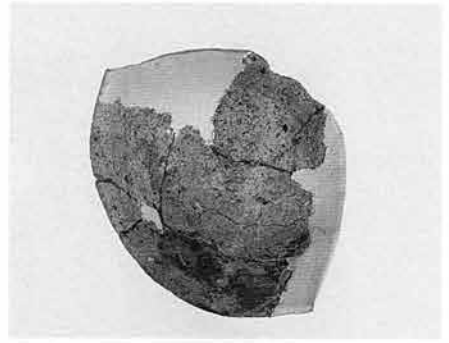
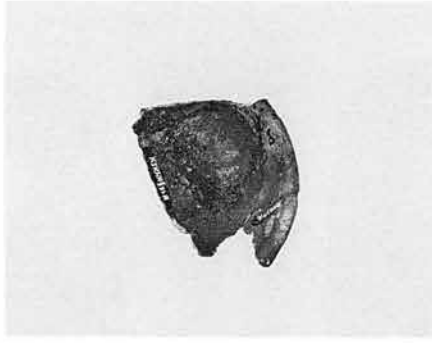
3 建基上 16



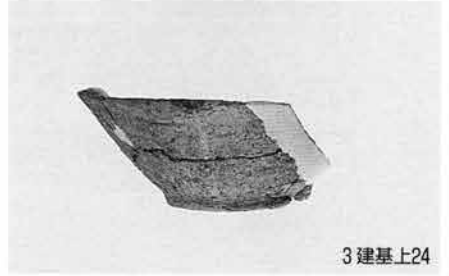
3 建基上 31



3 建基上 32



3 建基上23



3 建基上24



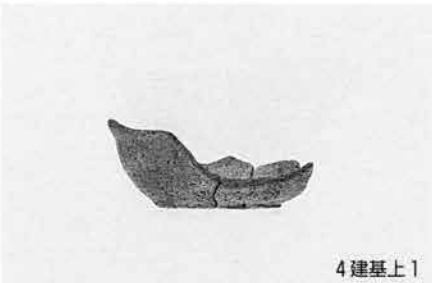
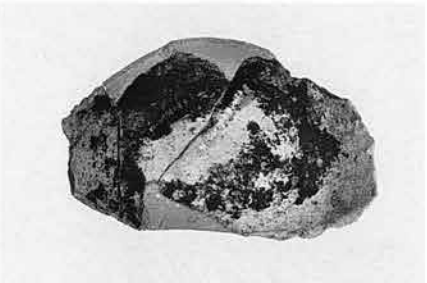
3 建基上22



3 建基下10



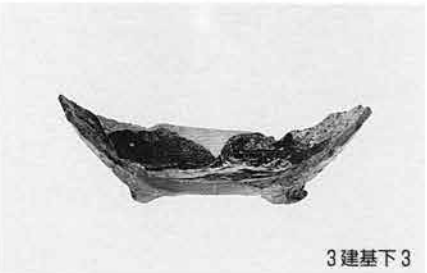
3 建基下11



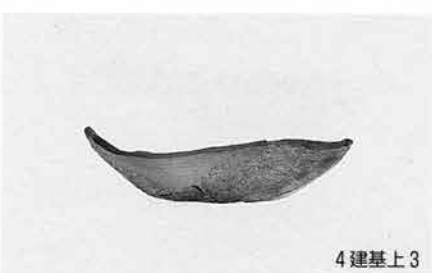
4 建基上1



4 建基上2



3 建基下3



4 建基上3



4 建基上4



4 建基上5



4 建基上6



4 建基上7



4 建基上10



4 建基上11



4 建基下1



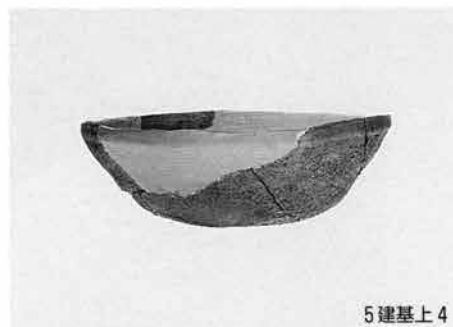
4 建基下2



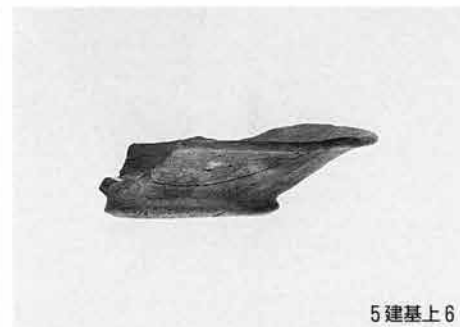
4 建基下6



5 建基上1



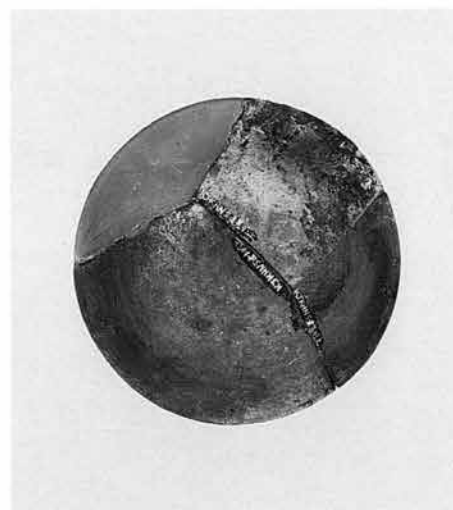
5 建基上4



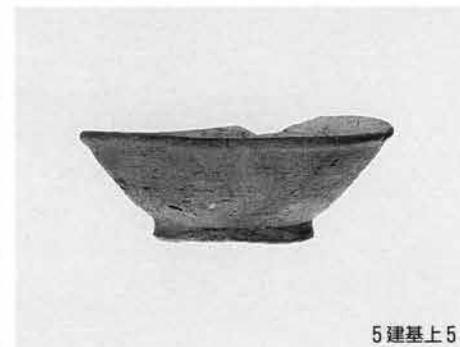
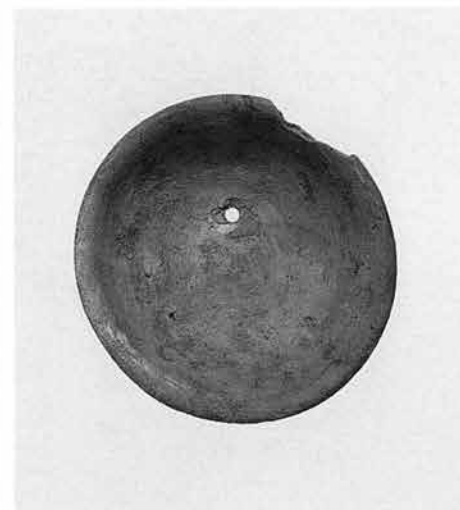
5 建基上6



5 建基上2



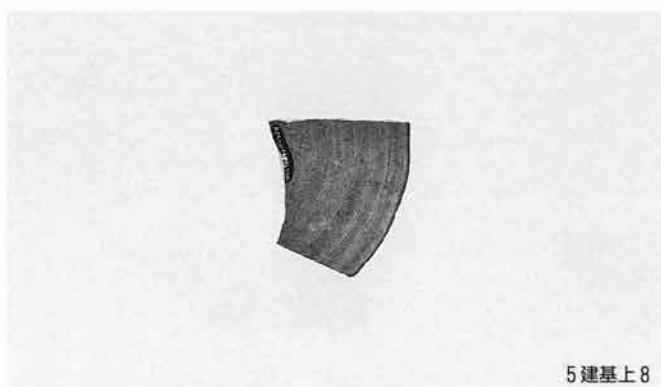
5 建基上3



5 建基上5



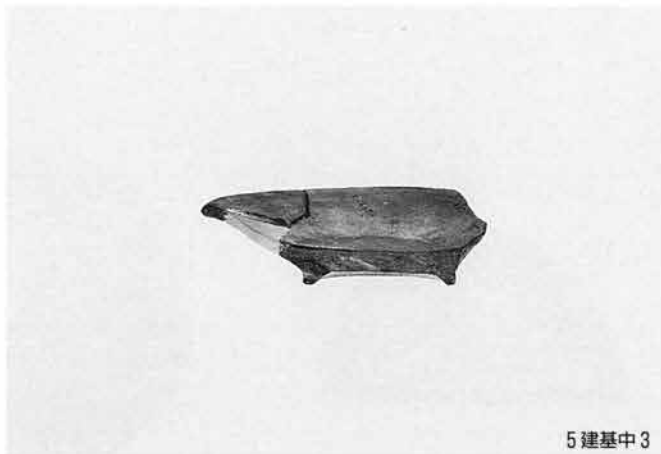
5 建基上7



5 建基上8



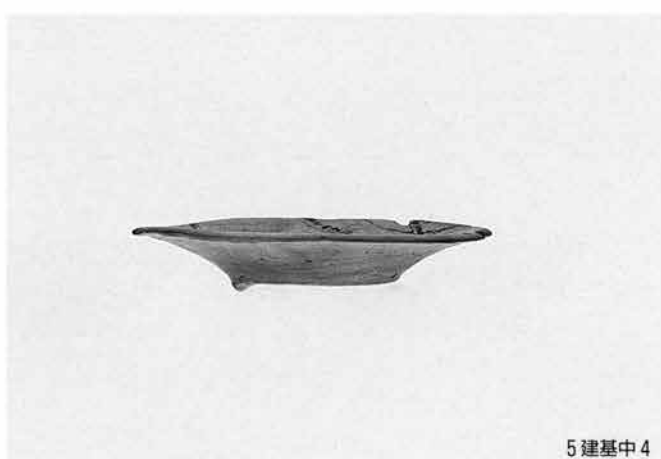
5 建基上11



5 建基中3



5 建基中1



5 建基中4



5 建基下2



5 建基下4



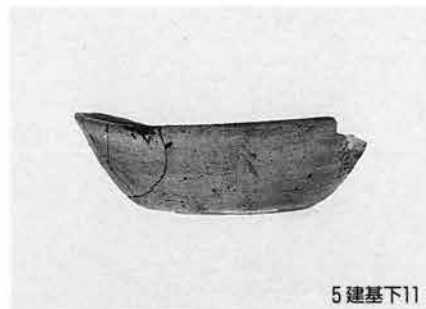
5 建基下5



5 建基下6



5 建基下7



5 建基下11



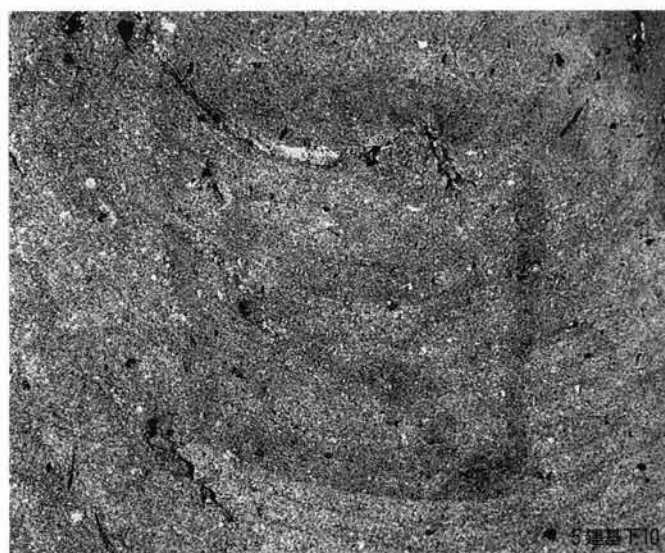
5 建基下8



5 建基下9



5 建基下12



5 建基下10



5 建基下11



5 建基下16



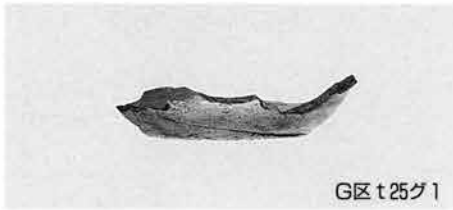
5 建基下17



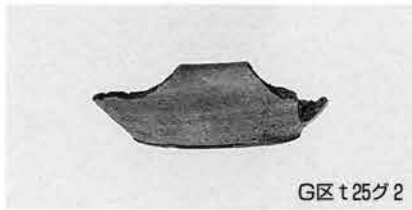
5 建基下18



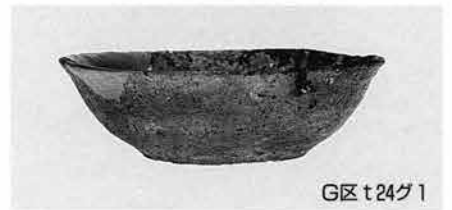
G区 t24グ1



G区 t25グ1



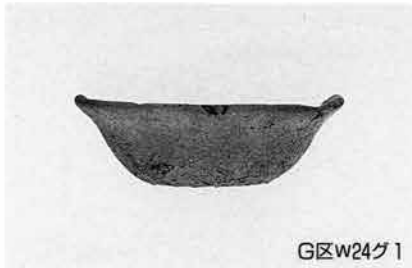
G区 t25グ2



G区 t24グ1



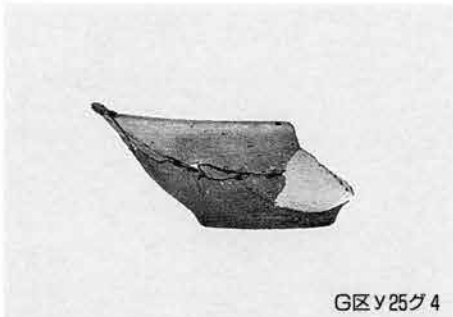
G区 v25グ1



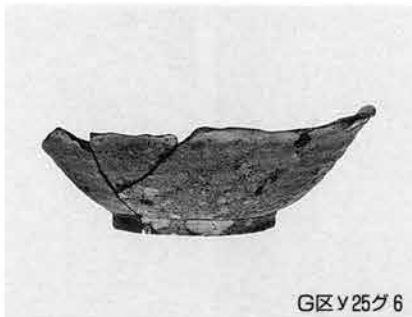
G区 w24グ1



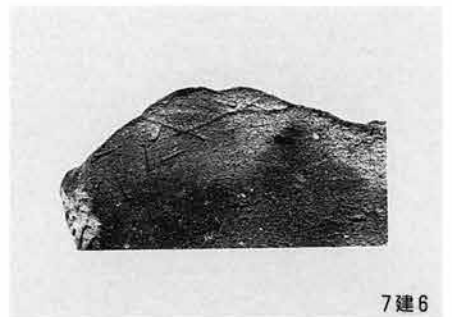
G区 y25グ1



G区 y25グ4



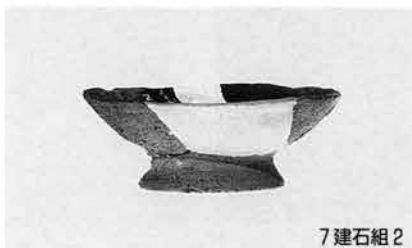
G区 y25グ6



7 建 6



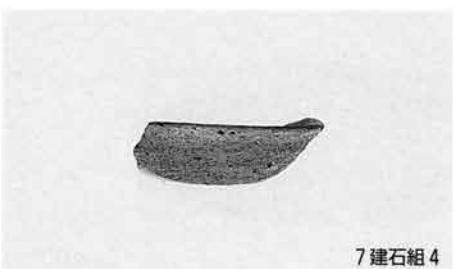
7 建石組 1



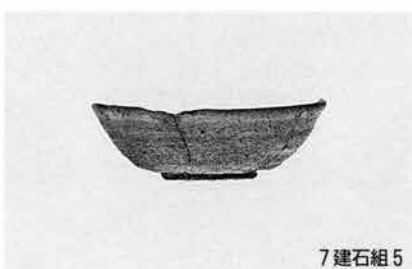
7 建石組 2



7 建石組 3



7 建石組 4



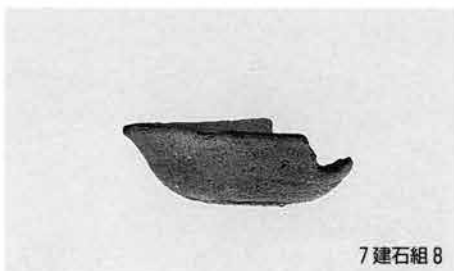
7 建石組 5



7 建石組 6



7 建石組7



7 建石組8



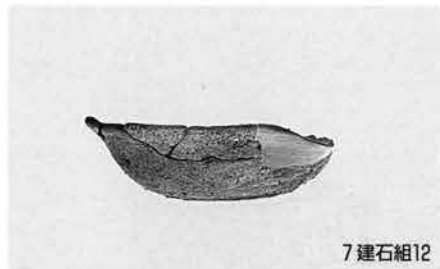
7 建石組9



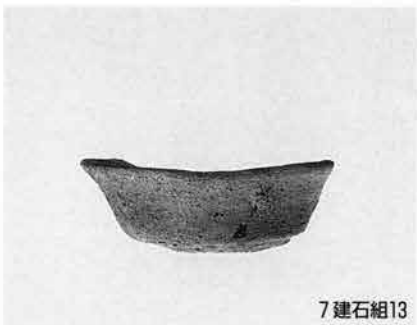
7 建石組10



7 建石組11



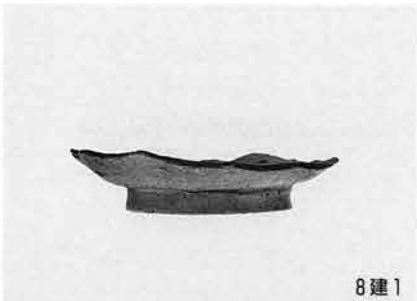
7 建石組12



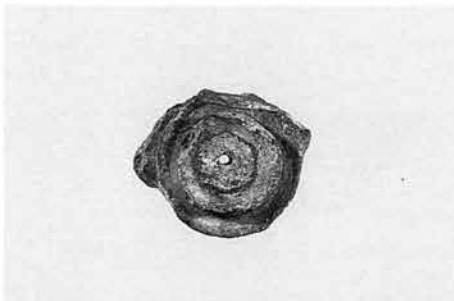
7 建石組13



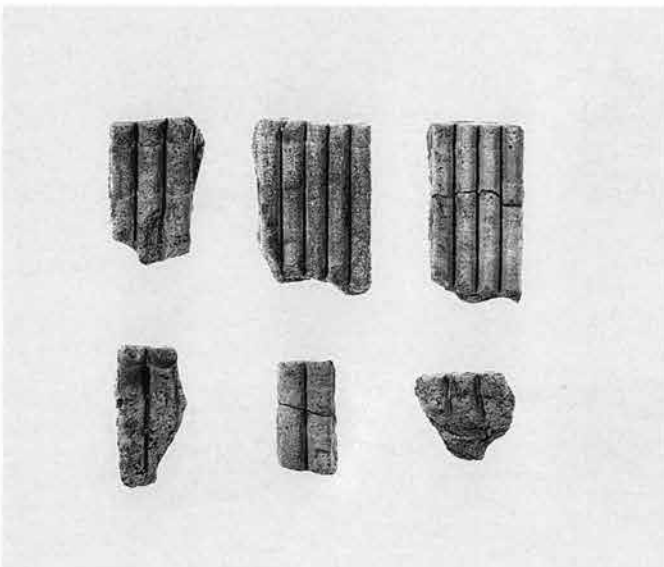
7 建石組19



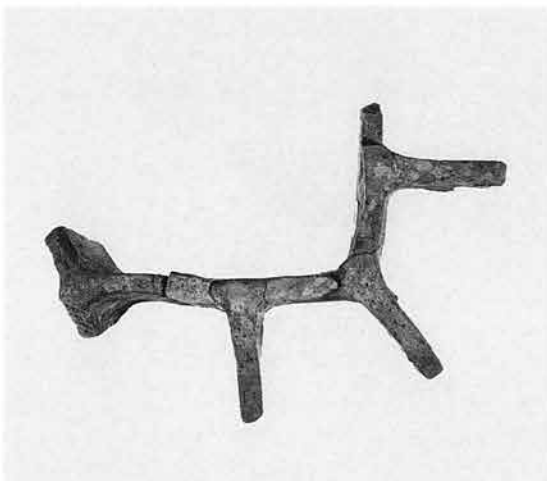
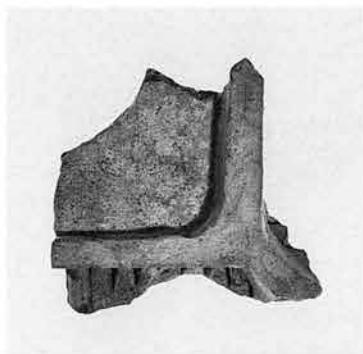
8 建1



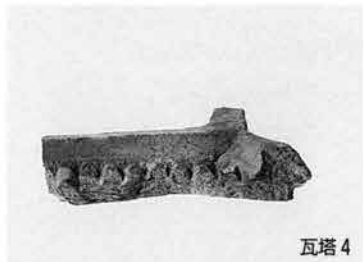
瓦塔1



瓦塔(屋蓋部)



瓦塔(屋蓋部)



瓦塔4



瓦塔7



瓦塔9



瓦塔6



1テ8坑1



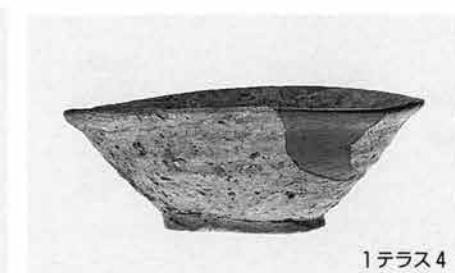
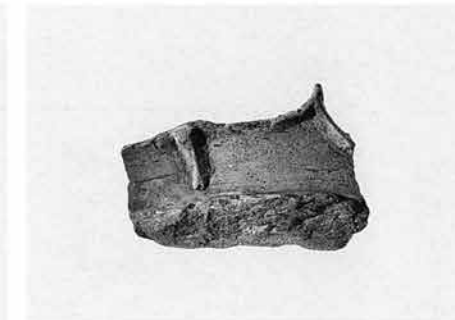
1テ8坑2



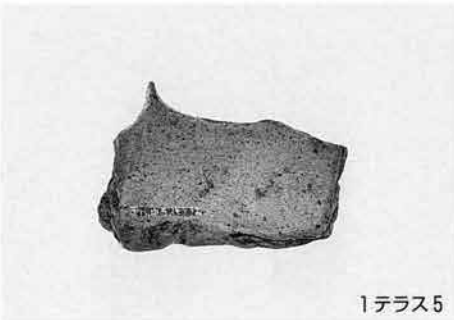
1テ10坑1



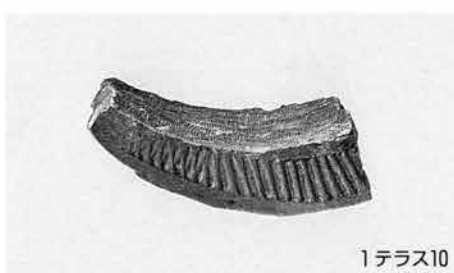
1テ16坑1



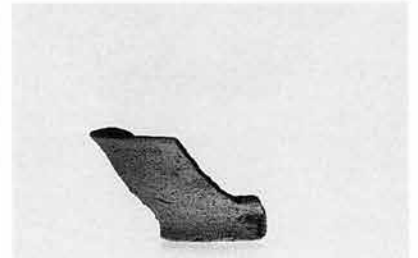
1テラス4



1テラス5



1テラス10



1テラス3

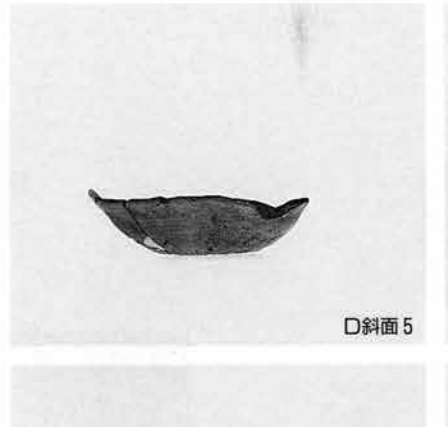
4テラス1



1テラス2

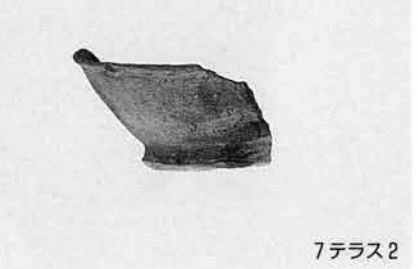
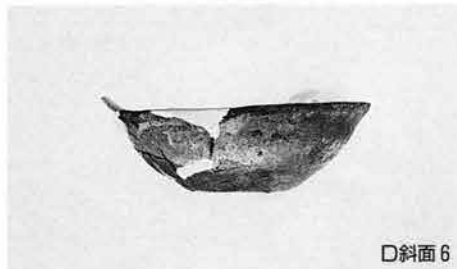
D斜面1

D斜面4



D斜面5

D斜面7



D斜面6

7テラス1

7テラス2



7テラス3



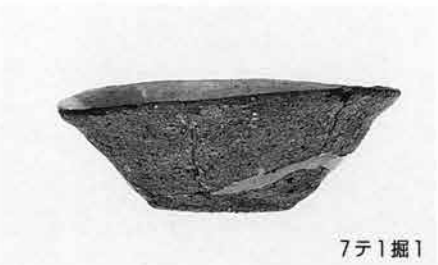
7テラス8



7テラス6



7テラス5



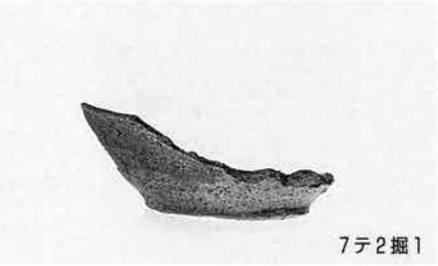
7テ1掘1



7テ1掘4



7テ1掘5



7テ2掘1



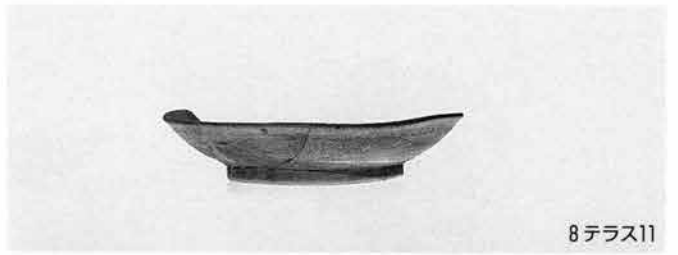
8テラス1



8テラス2



8テラス8



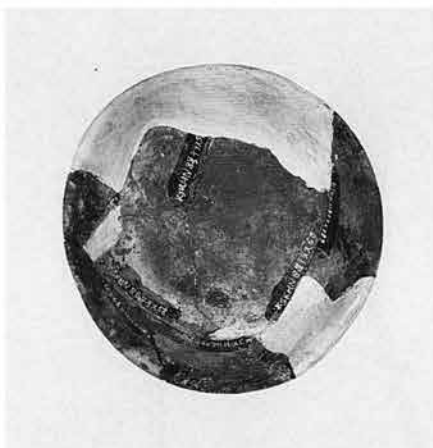
8テラス11



8テラス10



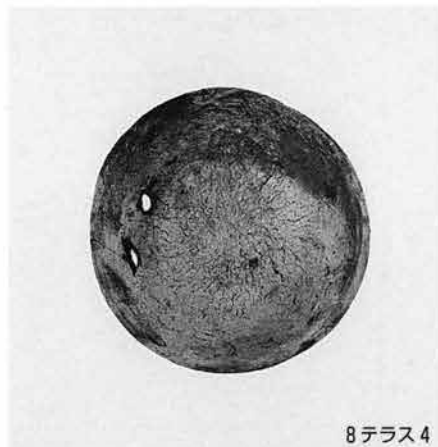
8テラス9



2 焼坑 1



2 焼坑 2



8 テラス 4

8 テラス 5

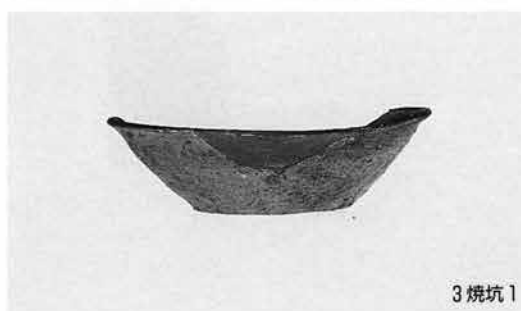
2 焼坑 3



2 焼坑 6



2 焼坑 4

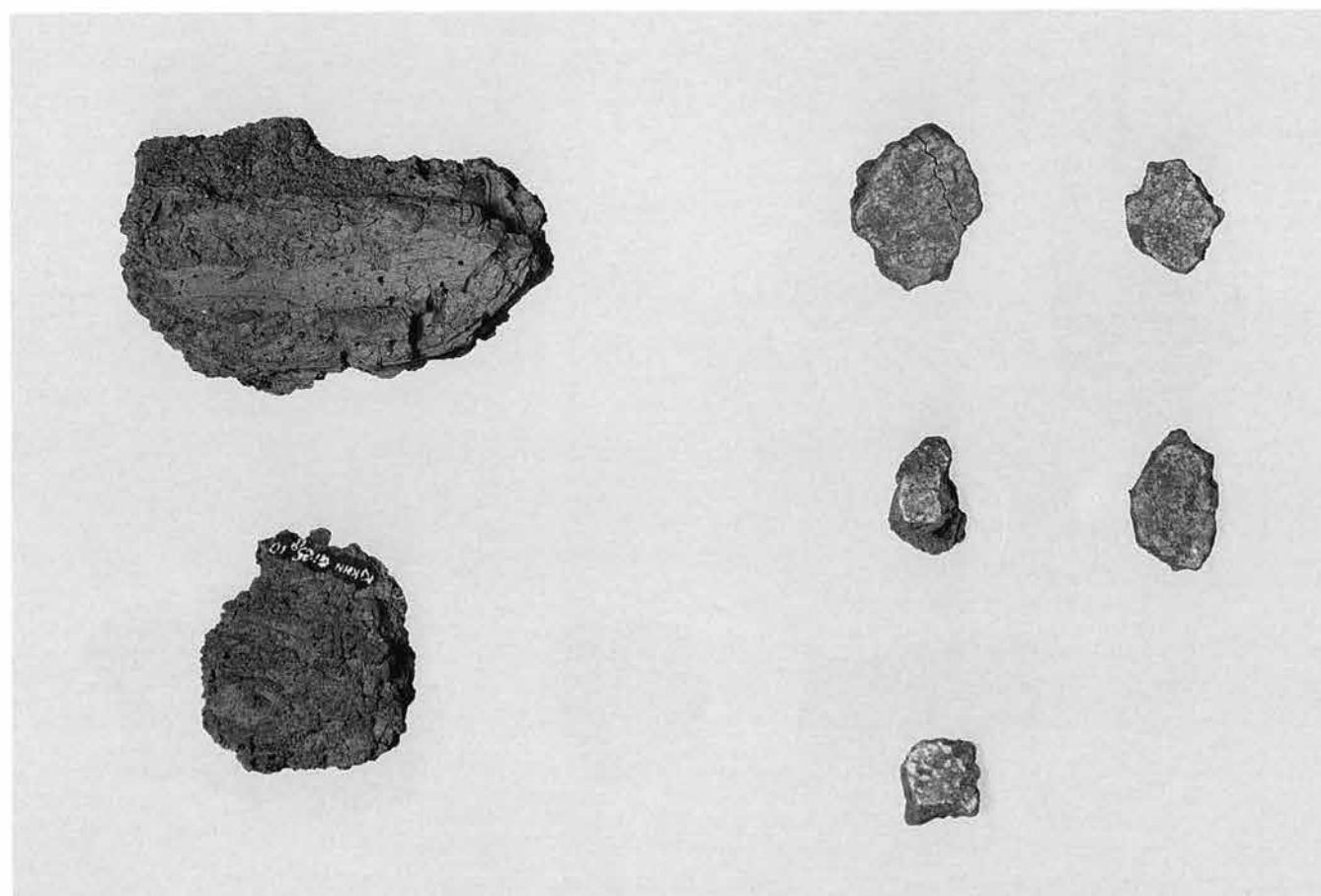
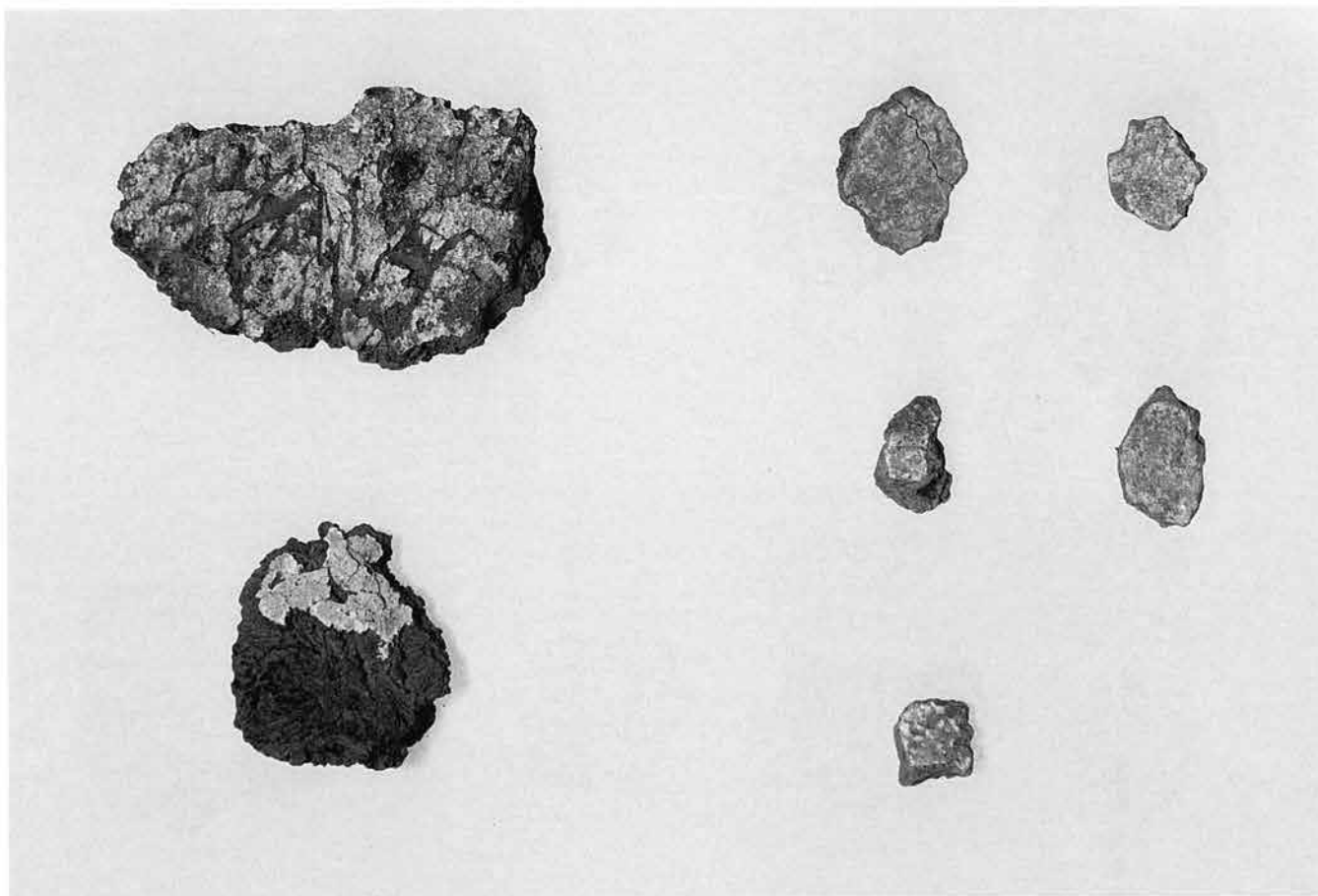


3 焼坑 1

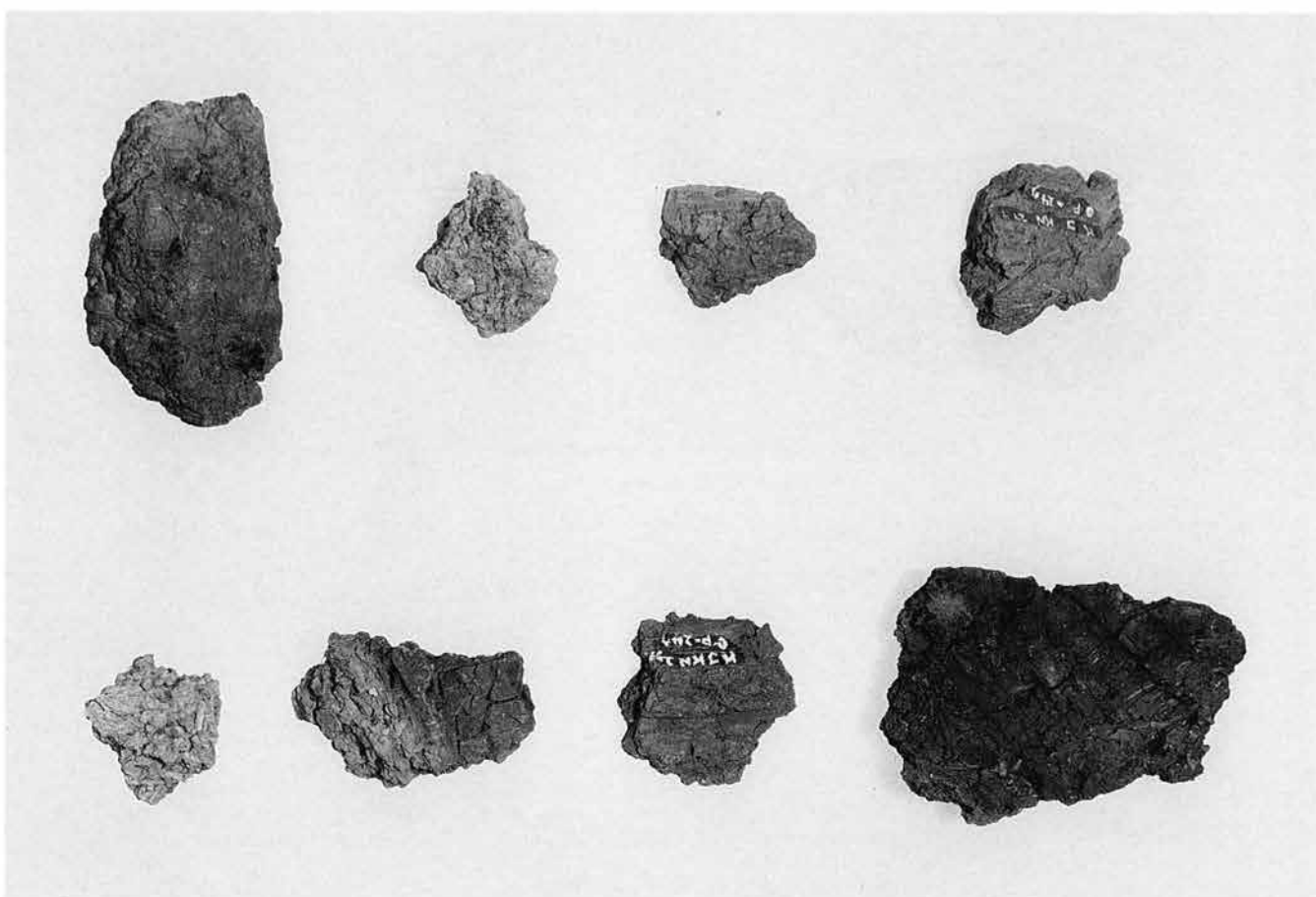
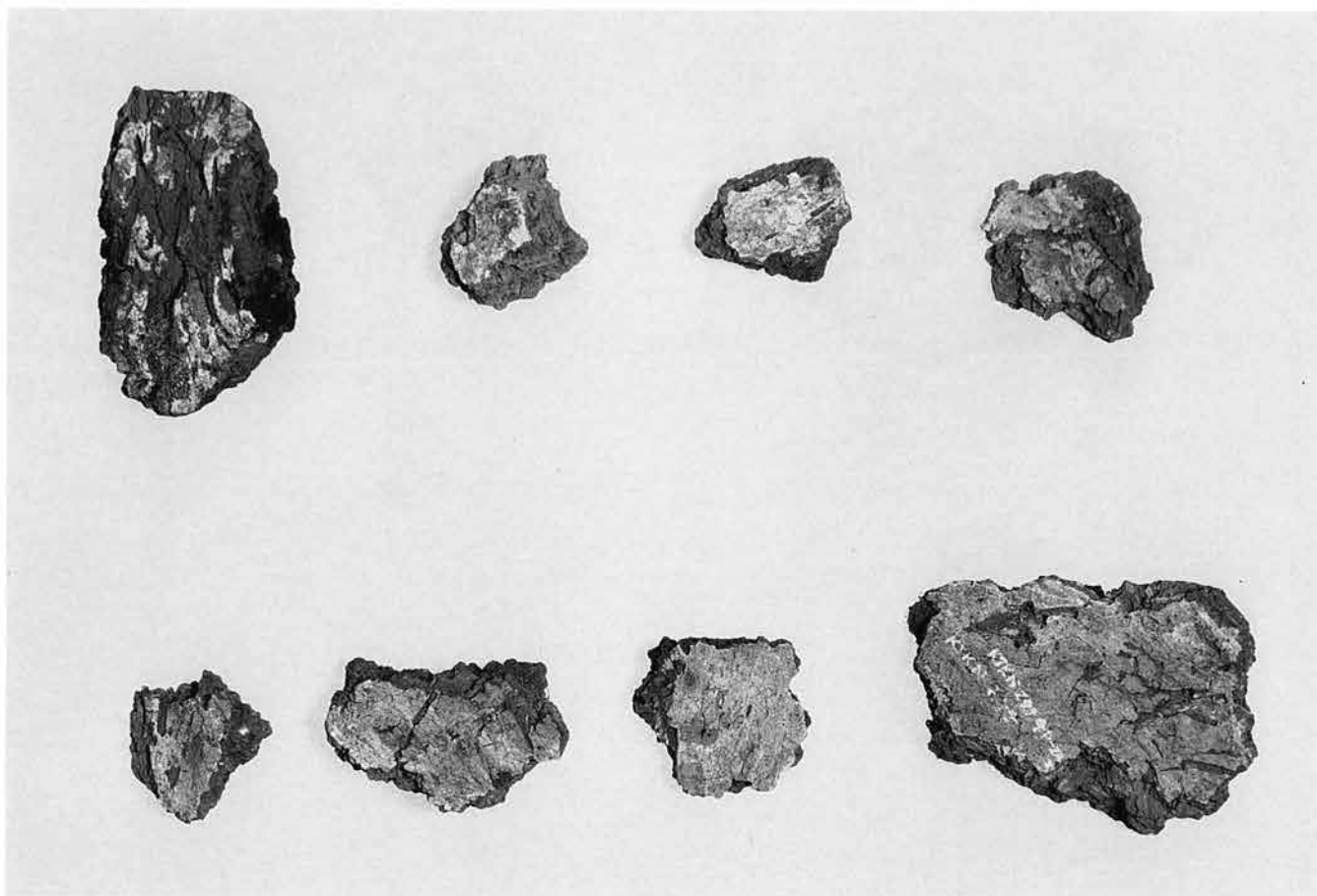




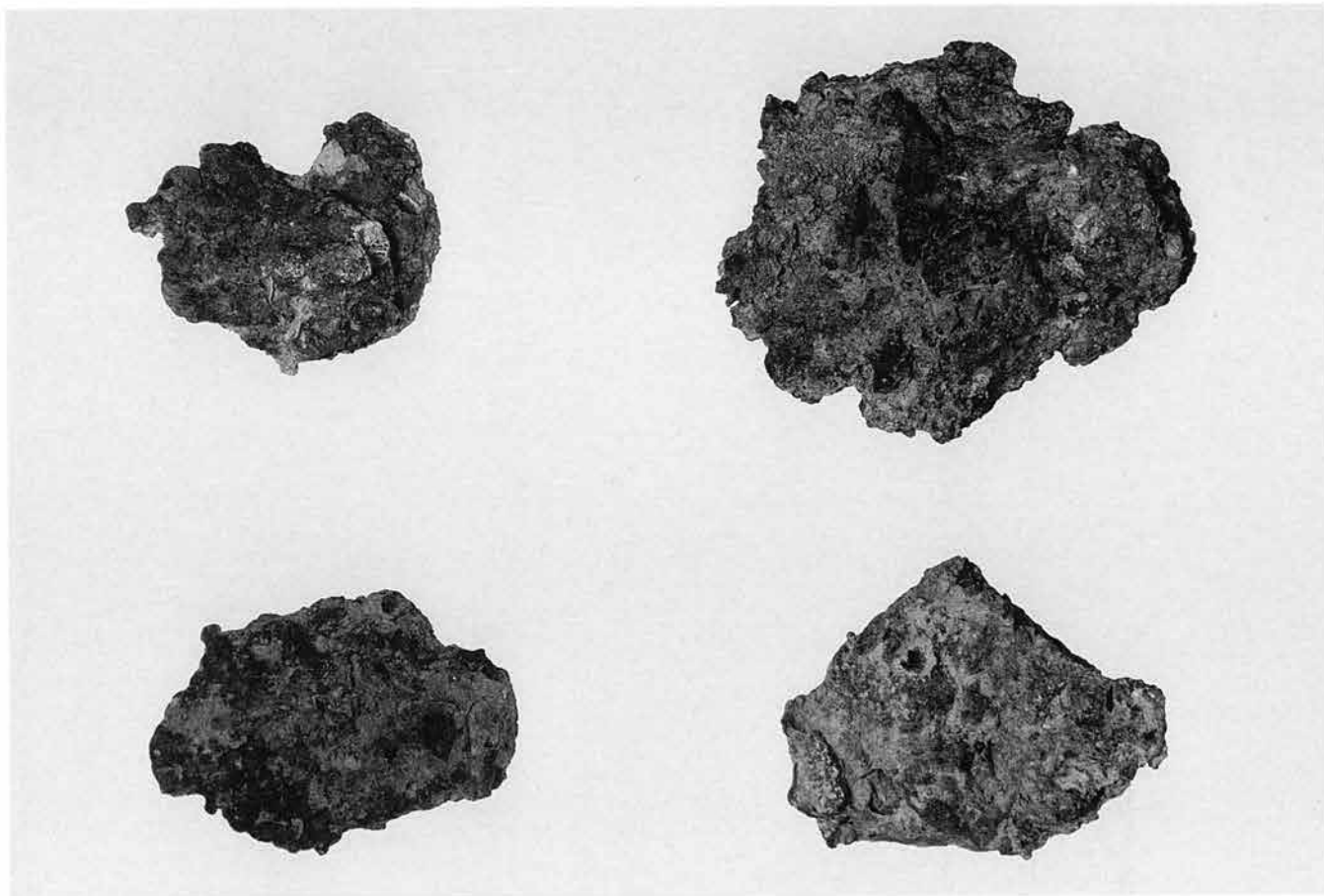




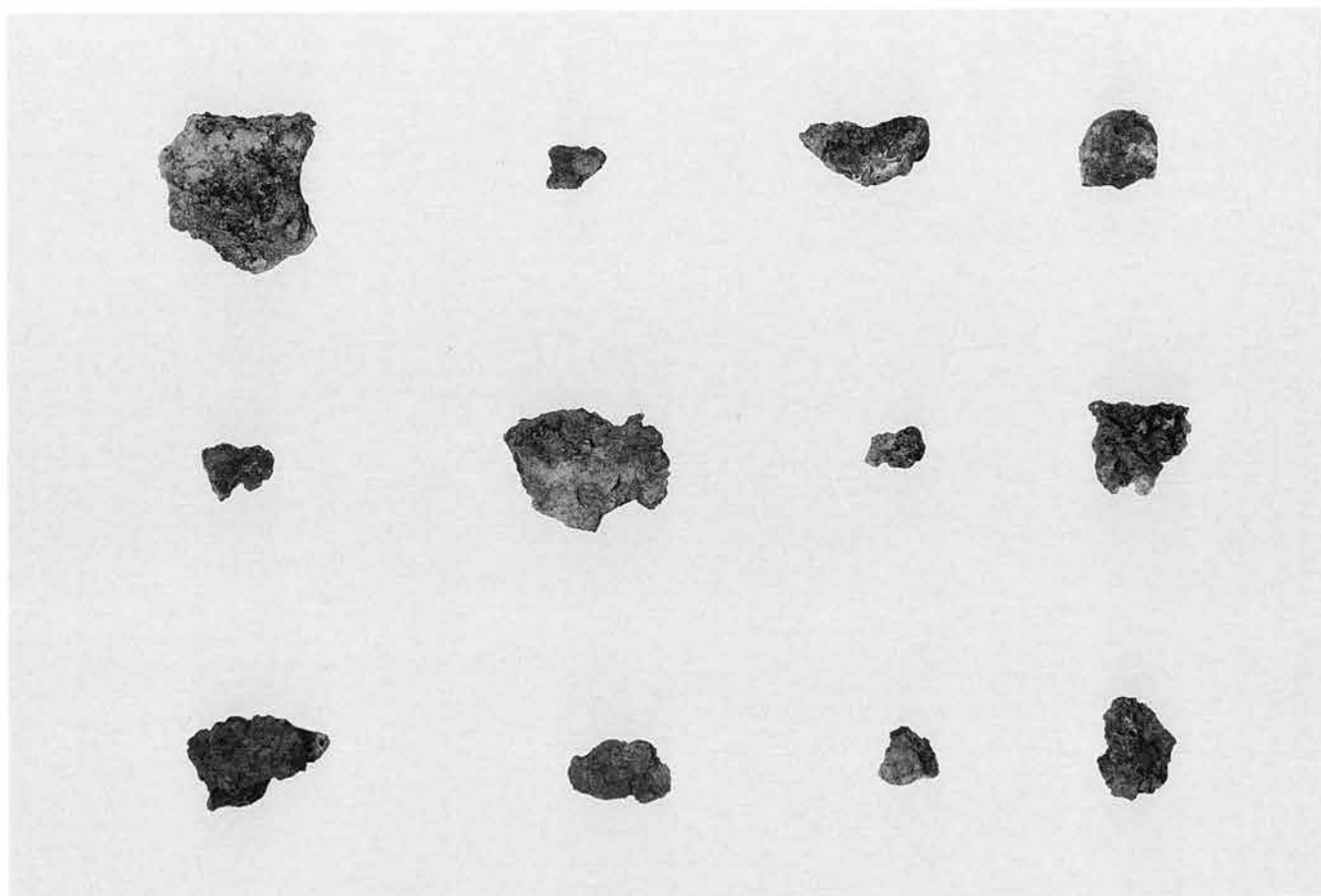
壁材 (左半：3号建物跡 右半：5号建物跡 S=1/2.5)



壁材 (2号建物跡 S=1/2.5)



椀形鉱滓 (左半: 3号建物跡 右半: 2号建物跡 S=1/2.5)



鉄滓 (8号テラス S=1/2.5)

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発掘調査報告 第135集

黒熊中西遺跡(1)

関越自動車道(上越線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書 第10集

平成4年3月15日 印刷

平成4年3月26日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

印刷／上毛新聞社出版局



付図1 関連遺跡位置図



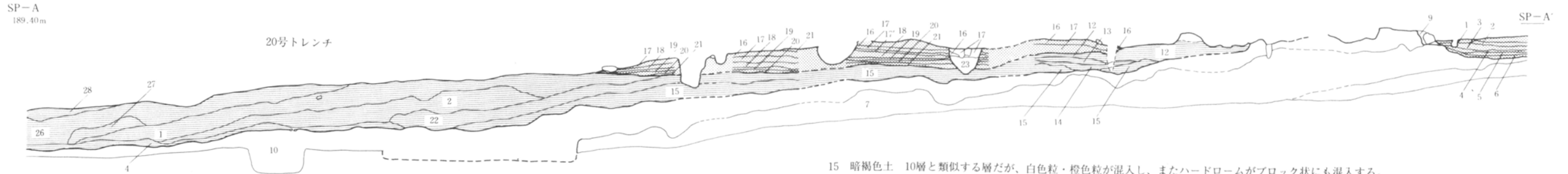
付図2 黒熊中西遺跡全体図(庚申山区を除く)



付図3 1号建物跡及び周辺地形

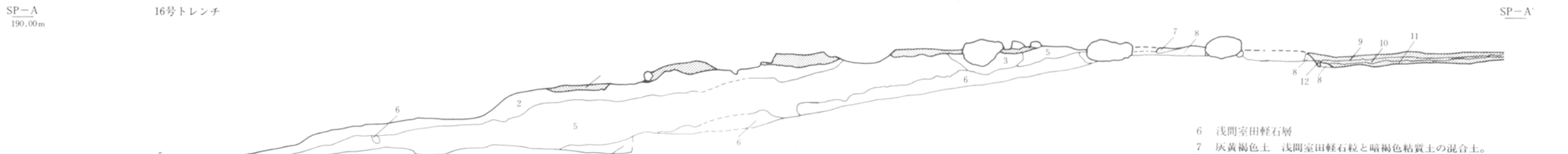


付図4 2号建物跡及び周辺地形



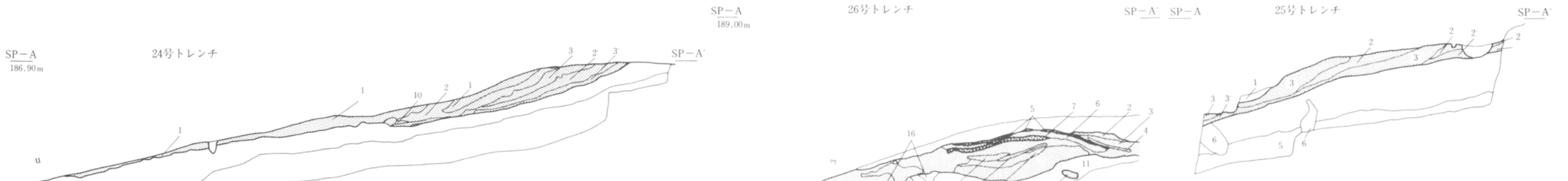
- 1 褐色土 焼土粒と炭化物粒を微量混入。白色粒を多く含む。
- 2 暗黄褐色土 厚さ1cm弱でロームと褐色土が交互にシマ模様をなす。2層と同質であるが、3層の方が若干色調が明るく、ローム分が多い。
- 3 暗黄褐色土
- 4 褐色土 ロームのうすい層が挟まる。白色粒と橙色粒が混じる。
- 5 暗褐色粘質土 地山を削って盛った土。灰白色粘土を比較的多く含む。
- 6 暗褐色粘質土と黄褐色ローム（浅間室田軽石粒を若干混入）との混合土。
- 7 ハードローム層
- 8 浅間室田軽石層
- 9 暗褐色土 焼土粒と炭化物粒を多く混入。基壇化粧の石を組み入れるときの裏込めの土。
- 10 暗黄褐色土 ソフトローム的な土。炭化物粒を若干混入。西側基壇外では縄文・平安期の遺物を包含する。
- 11 暗黄褐色土 白色粒と橙色粒を少量混入。炭化物粒と焼土粒も混入。
- 12 暗褐色土 炭化物粒を微量混入。
- 13 暗褐色土 白色粒と橙色粒を混入。12層より色調は暗い。
- 14 暗灰褐色土 白色粒を多量に混入し、12・13層より明るい感じ。

- 15 暗褐色土 10層と類似する層だが、白色粒・橙色粒が混入し、またハードロームがブロック状にも混入する。基壇中央部ではこの層との境は堅くしまっており、本層の上面では人為的に踏み詰められたようである。
- 16 暗黄褐色土 浅間室田軽石粒が多量に混入している。
- 17 暗黄褐色土 16層と類似するが、16層よりも浅間室田軽石粒が少量となる。
- 17' 暗黄褐色土 17層よりさらに浅間室田軽石粒が少量となる。
- 18 暗黄褐色土 炭化物粒・白色粒が微量混入。
- 19 暗黄褐色土 白色粒・ブロック状にハードロームが少量混入する。
- 20 暗黄褐色土 白色粒を少量混入。19層と類似するが、19層より堅い。
- 21 暗黄褐色土 炭化物粒を少量混入。
- 22 暗黄褐色土 炭化物粒が多量に混入。柱礎5と6の間に鍛冶遺構がある。そこで、出た炭化物が、この層に含まれと考えられる。
- 23 暗褐色土と黄褐色土の混合土 焼土粒・黒褐色土ブロックも混入、浅間室田軽石粒も混入。版築を終えたあと11層をのせる前に穴を掘った様子。あるいは、地すべり時にできた穴か。
- 24 暗黄褐色土
- 25 暗黄褐色土と黄褐色土の混合土
- 26 暗黄褐色土
- 27 暗黄褐色土と暗褐色粘質土の混合土 橙色ローム粒を少量混入。
- 28 暗褐色土 暗褐色粘質土ブロック・炭化物粒を混入。



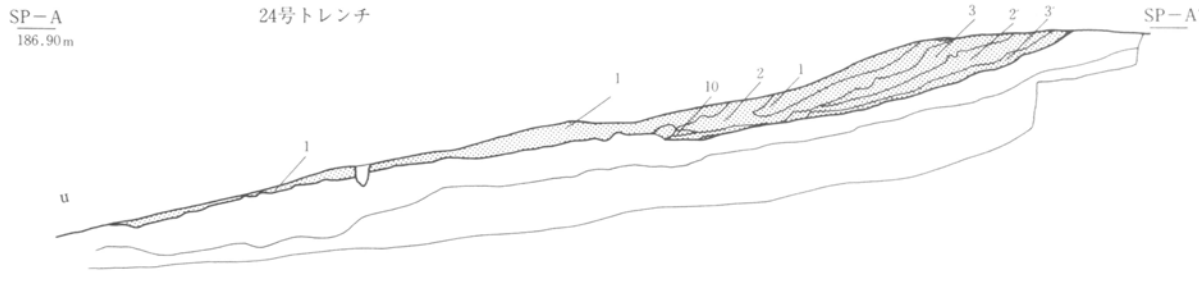
- 1 暗褐色土 暗褐色粘質土をブロックとして含む。焼土粒と炭化物粒を混入。〔盛土〕
- 2 暗黄褐色土 炭化物粒を若干混入。遺物包含層である。
- 3 暗黄褐色土 浅間室田軽石粒とハードロームブロックの混合土。7の礎石を据え付ける時に動かした土。
- 4 暗黄褐色土 3層に類似するがハードロームはない。
- 5 黄褐色土 ハードローム層。〔地山〕

- 6 浅間室田軽石層
- 7 灰黄褐色土 浅間室田軽石粒と暗褐色粘質土の混合土。
- 8 暗褐色粘質土 非常に堅い土。〔地山〕
- 9 暗褐色粘質土と浅間室田軽石粒の混合土。
- 10 暗褐色土 浅間室田軽石粒を少量混入。
- 11 暗褐色粘質土。
- ※ 9層・10層・11層は南側の基壇外の版築層である。
- 12 暗褐色土 炭化物粒を少量混入。基壇化粧石の採取穴か。



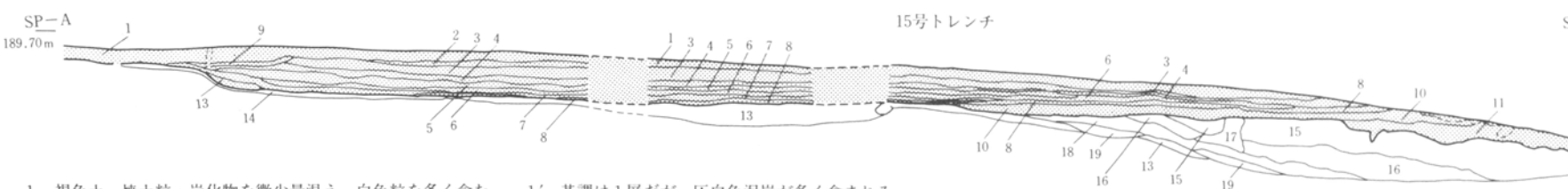
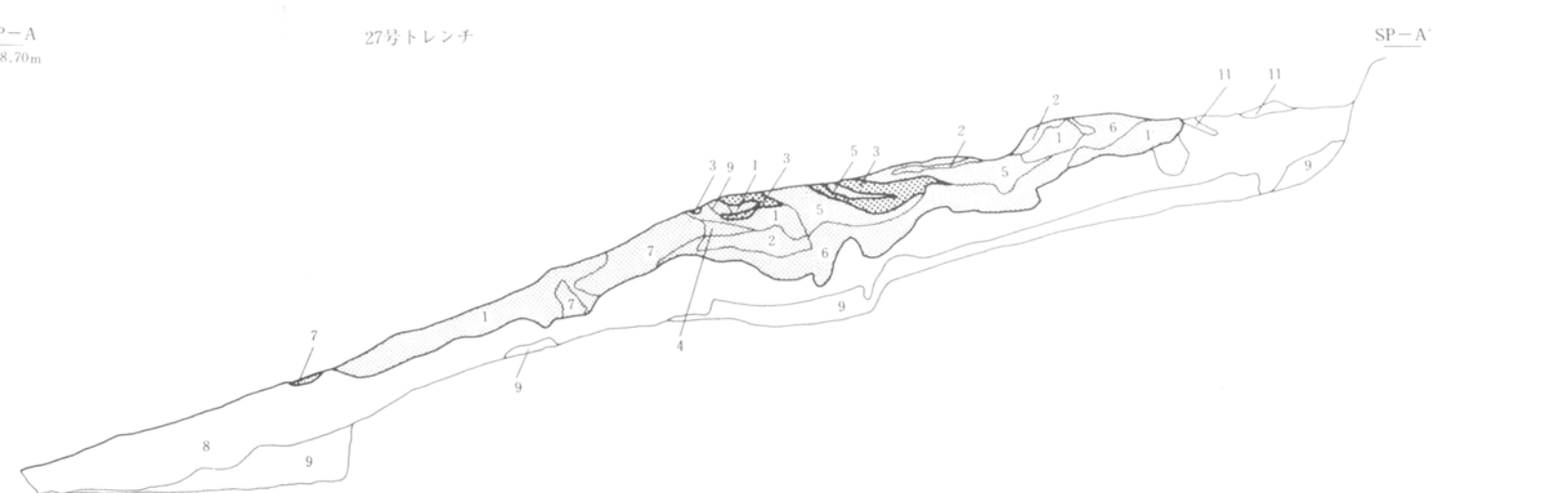
- 1 暗黄褐色土 炭化物粒・浅間室田軽石粒・軽石粒・シルト塊を混入。地すべりした際に、2号建物側（南側）からすべり落ちてきた土か。
- 2 暗褐色土 浅間室田軽石粒・暗褐色粘質土が混入し、全体に粘性のある土。
- 3 暗黄褐色土 炭化物・浅間室田軽石粒を混入。
- 4 暗褐色土 2層と類似するが、2層よりも暗い土。
- 5 灰色土 浅間B'軽石の純層。
- 6 暗黄褐色土 暗褐色粘質土・シルト塊が多量に混入する。炭化物も少量混入。
- 7 暗褐色土 浅間B'軽石がブロック状に混入している。炭化物も少量混入。
- 8 暗褐色土 6層に類似するが、6層よりも暗い土。
- 9 暗褐色粘質土と暗黄褐色土の混合土 粘性のある土。
- 10 暗黄褐色土 9層と同質の暗褐色粘質土が多量に混入。6層と類似している。炭化物粒も少量混入。
- 11 暗褐色粘質土 粘質土とシルト塊で構成された層。2号建物と3号建物の中間地域の下層（地山）を削ってこの層を作ったと考えられる。
- 12 暗黄褐色土 黄褐色土ロームブロック・暗褐色粘質土が少量混入。
- 13 暗黄褐色土 ロームブロックを混入。土質じたいは、12層とほぼ同様
- 14 黄褐色土 ハードローム層（地山）
- 15 暗黄褐色土 3層よりも暗い土。炭化物粒・灰褐色粘土塊を混入。
- 16 黒褐色土ブロック ローム粒を混入。さらさらとして、しまりのない土。

- 1 暗黄褐色土 炭化物粒・浅間室田軽石粒・軽石粒シルト塊を混入。地すべりした折りに、2号建物側（南側）からすべり落ちた土か。
- 2 暗黄褐色土 炭化物粒・浅間室田軽石粒を混入。2'暗黄褐色土 2層と類似するが、浅間室田軽石粒が非常に多くなる。
- 3 暗褐色粘質土 粘質土とシルト塊で構成された層。3'暗褐色粘質土 3層と類似するが、シルト塊がほとんどなくなり、かわりにローム土が混入してくる。粘質土が主体の層。
- 4 暗黄褐色土 黄褐色土ロームブロック暗褐色粘質土が少量混入。
- 5 黄褐色土 ハードローム層（地山）
- 6 黒褐色土ブロック ローム粒混入。さらさらしてしまりのない土。土器混入。
- 7 黒褐色土と黄褐色土の混合土 壁材・炭化物粒を混入。さらさらした土。2号建物焼失時にあいていた穴か、あるいは地すべりであいた穴に、上層の土が混入したと考えられる。



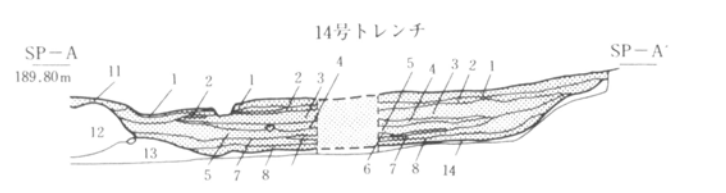
- 1 暗黄褐色土 暗褐色粘質土が多量に混入する。
- 2 暗褐色粘質土 粘質土とシルト塊で構成された層。2号建物と3号建物の中間地域の下層。地山を削って、この層を盛ったと考えられる。2'暗褐色粘質土 2層と類似するがシルト塊がほとんどなくなり、かわりにローム土が、若干混入する。ほとんどが、粘質土の層。
- 3 暗黄褐色土 炭化物粒と浅間室田軽石粒を少量混入する。3'暗黄褐色土 3層に類似するが、炭化物を多量に混入する。
- 4 暗黄褐色土 黄褐色土ブロックと暗褐色粘質土を少量混入。この層の上半部から土器が多量に出土する。
- 5 黄褐色土 ハードローム層

- 1 暗黄褐色土 炭化物粒・浅間室田軽石粒を混入。1'暗黄褐色土 1層に類似するが、浅間室田軽石粒が多量となる。
- 2 暗黄褐色土 暗褐色粘質土・シルト塊が多量に混入。炭化物粒も少量混入。
- 3 暗褐色土 浅間B'軽石が、ブロック状に混入。炭化物粒も少量混入。
- 4 暗褐色土 2層に類似するが、2層よりも暗い土。
- 5 暗褐色粘質土と暗黄褐色土の混合土 粘性ある土。
- 6 暗黄褐色土 5層と同質の暗褐色粘質土が多量に混入。2層と類似、炭化物粒を少量混入。
- 7 暗褐色粘質土 粘質土とシルト塊で構成された層。2号建物と3号建物の中間地域の下層（地山）を削ってこの層を盛ったと考えられる。
- 8 暗黄褐色土 黄褐色土ロームブロック・暗褐色粘質土を少量混入。
- 9 黄褐色土 ハードローム層（地山）
- 10 暗褐色土 2層と類似するが、2層よりも暗い土
- 11 黒褐色土と黄褐色土の混合土 壁材・炭化物粒を混入。さらさらした土。2号建物焼失時にあいていた穴か、あるいは地すべりであいた穴に、上層の土が混入したと考えられる。



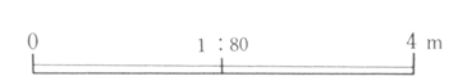
- 1 褐色土 焼土粒・炭化物粒を微量混入、白色粒を多く含む。1'基調は1層だが、灰白色泥岩が多く含まれる。
- 2 黄褐色土 ロームを主体とする土を版築したもの。
- 3 暗黄褐色土 厚さ1cm弱でロームと褐色土が交互にシマ模様をつくる。若干色調が明るくローム分が多い。
- 4 暗黄褐色土 厚さ1cm弱でロームと褐色土が交互にシマ模様をつくる。
- 5 黄褐色土 ローム土のみの層。
- 6 褐色土 ロームのうすい層が挟まれる。白色粒・橙色粒が混じる。
- 7 暗褐色土 粘質土を混入。灰白色粘土を少量含む。

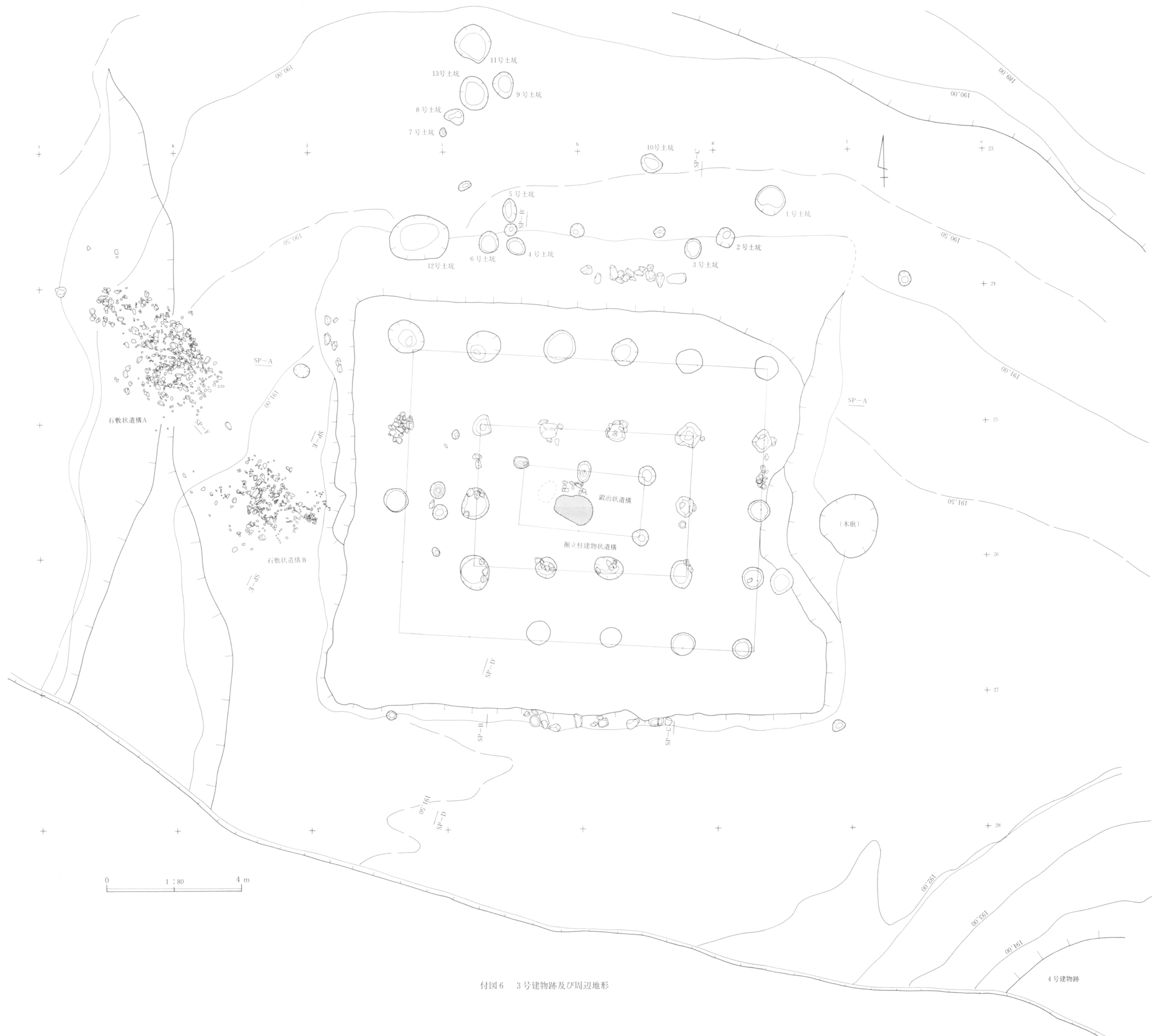
- 8 黄褐色土 ローム層・浅間室田軽石粒を多量に含む。
- 9 暗褐色粘質土 13層の地山を削り、版築したもの。
- 10 暗褐色粘質土と黄褐色土（浅間室田軽石粒若干混入）との混合土。
- 11 黄褐色土ローム層だが、若干暗褐色粘質土をブロックとして、混入している。
- 12 暗褐色粘質土 夾雑物はなし。



- 13 暗褐色粘質土 大きめの礫が混じってくる。
- 14 灰白色粘土
- 15 明黄褐色土 ソフトローム。
- 16 黄褐色土 ハードローム。
- 17 暗黄褐色土 ローム主体。浅間室田軽石粒が少量混じる。
- 18 浅間室田軽石層 橙色粒を主体。
- 19 浅間室田軽石層 白色系が主体。

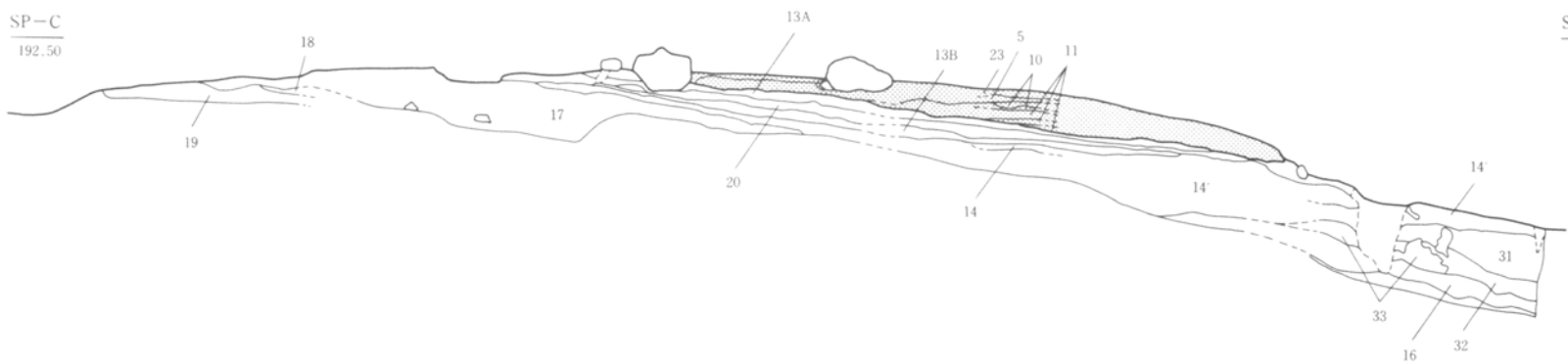
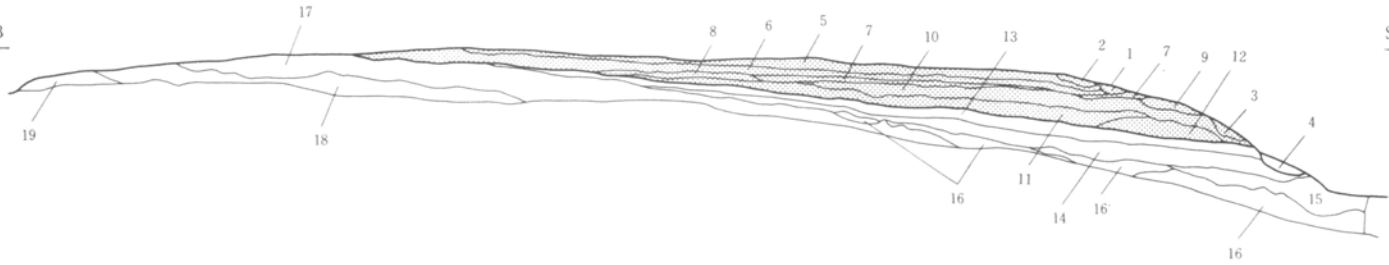
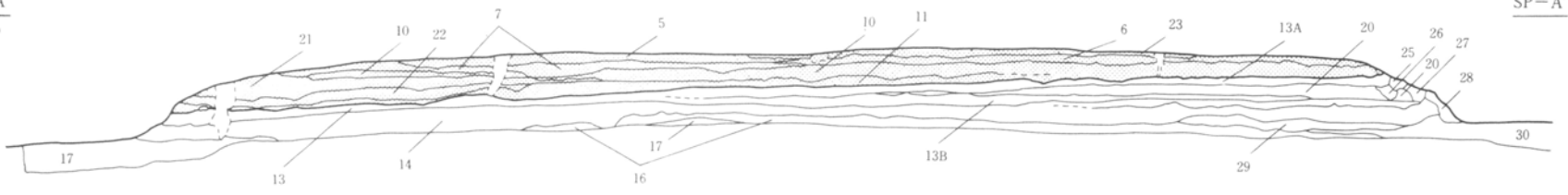
付図5 2号建物跡土層断面図（本図は付図4に対応する）



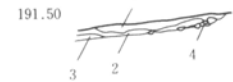


付図6 3号建物跡及び周辺地形

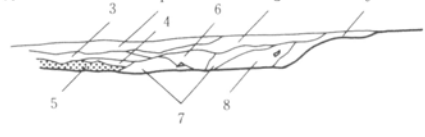
4号建物跡



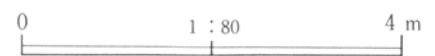
- 1 暗褐色土 根が入っていてもろい。
- 2 褐色土 炭化物を含む。焼土も少量含む。
- 3 褐色土 地山礫をわずかに含む。固くしまる。
- 4 暗褐色土 サラサラで粘性としまりを欠く。基壇化粧の裏込めと思われる。
- 5 褐色土 径3cm程の白色地山礫を含む。
- 6 淡褐色土 橙色味をおびる。粒子が粗く、径0.5cm～4cm程の地山礫を主体とする。
- 7 暗褐色粘質土 径1cm程の地山礫を少量含む。
- 8 7層に似るが、混入する地山礫の径が大きい(5cmぐらいのがある)。
- 9 褐色土 地山礫の混入量が少ない。
- 10 暗褐色土 径1～3cmの地山礫を含む。橙色系が多い。
- 11 褐色土 径10mm程の橙褐色と白色の地山礫を多く含む。
- 12 11層より地山礫の混入量が、だいぶ少ない。固くしまっている。
- 13A 暗褐色粘質土 小礫をわずかに含み、ポロポロした感じ。
- 13B 暗褐色粘質土 橙色粒を若干含む。13A層に比べしっかりしている。
- 14 浅間室田軽石層を主体とし、径2～4cmの粘土塊が多量に混じる。
- 14' 浅間室田軽石層を主体とし、径2～4cmの粘土塊が混じる。14層より粘土塊の量は少ない。
- 15 黄褐色ローム
- 16 浅間室田軽石の純層橙色の軽石が主体。
- 16' 浅間室田軽石が主体であるが、純層とは言えない。
- 17 暗褐色粘質土
- 18 暗褐色粘質土 17層の粘土中に、19層の岩盤の礫が混じる。
- 19 第3紀層 シルト質泥岩の岩盤。
- 20 茶褐色土 浅間室田軽石粒が多量に混じる。粘土塊も混じる。
- 21 白色・橙色の地山礫(5～8cm)がぎっしり詰まる。
- 22 21層よりも全体に橙色がかかった地山礫(2～8cm)を多量に含む。密度は21層よりうすい。
- 23 暗褐色土 橙色・白色の地山礫がわずかに混じる。
- 24 暗褐色土 夾雑物は特になし。粗粒。よくしまる。
- 25 暗褐色土 粘質土塊が混じる。しまっているが、ポロポロ崩れる。
- 26 褐色土 しまりゆるく、粘性なし。
- 27 褐色土 26層に似る。焼土粒がほんのわずかに混じる。
- 28 暗黄褐色土 ローム崩壊土と思われる。
- 29 黄褐色土
- 30 黄褐色土
- 31 ローム土
- 32 ローム土 白色粒が混じる。暗色帯に似かよる。
- 33 浅間室田軽石が多量に混じる。白色粒も多い。浅間室田軽石との境が明瞭でないので自然堆積土と思われる。



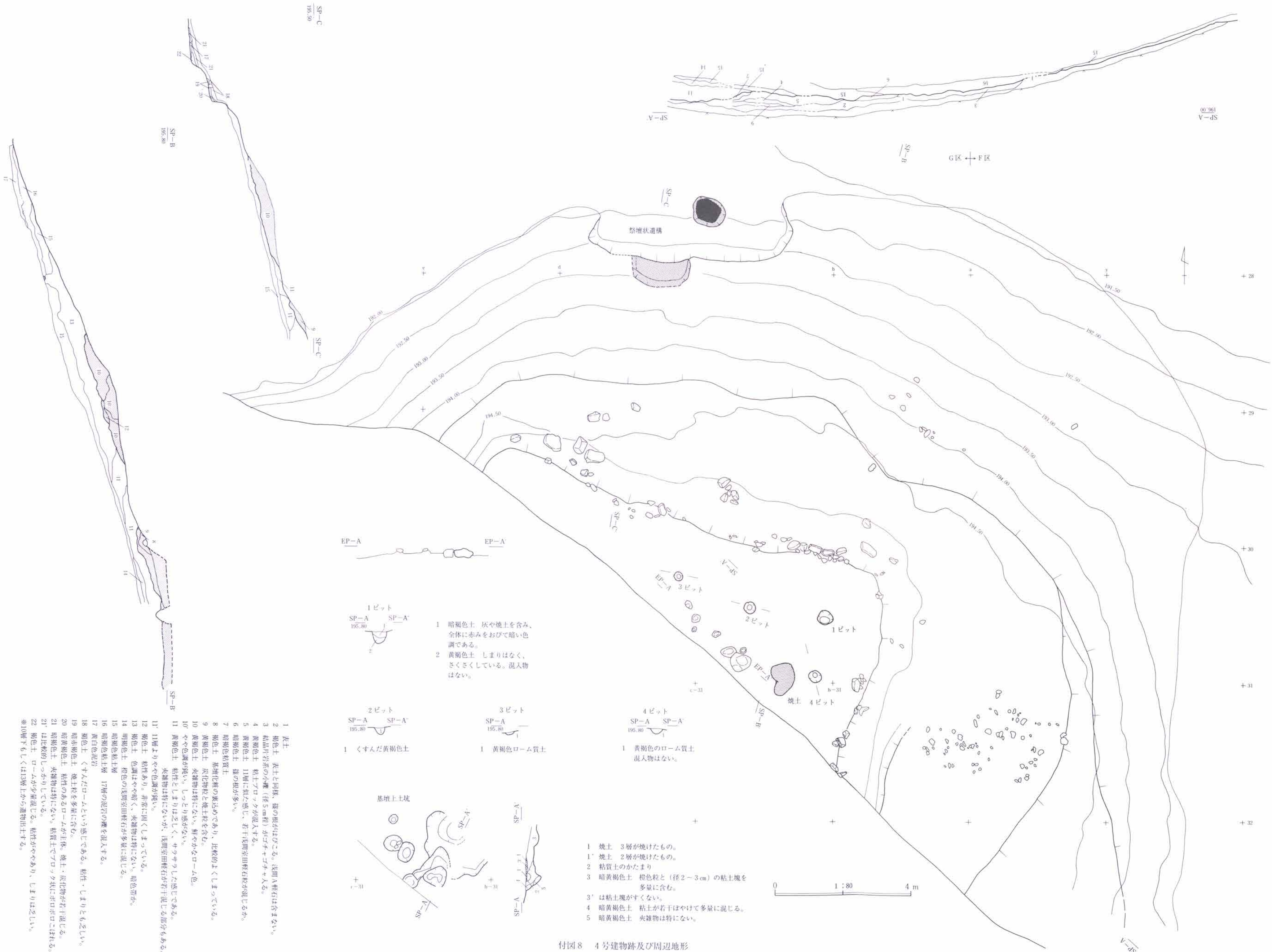
- 1 褐色粘質土 白色粒が若干混じる。
 - 2 褐色粘質土 白色粒はなく、径1～2cmの礫が混じる。
 - 3 褐色粘質土 色調がやや暗い。夾雑物は特になし。
 - 4 暗褐色土 1～3層に比べ粒子が粗い。
- ※全体に粘性あり非常に固い。



- 1 褐色土 A軽石を含む。篠の根が張る。〔表土〕
 - 2 褐色土 焼土粒を少量含む。篠の根の限界。わずかだが浅間A軽石が混じる。
 - 3 やや暗い褐色土 2層に似るが、色調がやや暗い。
 - 4 暗褐色土 B軽石が若干混じる。わずかだが焼土を含む。
 - 5 黒褐色土 B軽石を主体とする。わずかだが焼土を含む。
 - 6 褐色土 量的にはさほど多くはないが、大きめの焼土塊(径1～1.5cm)ぐらいが、含まれる。
 - 7 暗褐色土 比較的小粒の焼土塊(径5mm以下ぐらい)が非常に多く含まれる。地山の白色軟質礫も、わずかに混じる。
 - 8 暗褐色土 大小の焼土塊が一気にドサッと混じる(7層よりさらに多い)。他層と比べるとしまりはやや乏しい。
 - 9 褐色土(やや淡い) 大きめの焼土塊が多い。焼けた壁材が基壇に周縁から多数出土。
- ※6～9層は全体に固くしまっている。大きく分けると4つになる。建物が火災を受け破壊する際に、基壇側から順に崩れ流れていった様子がうかがえる。
- ※地山は白色シルト質のヒビわれたようなポロポロの岩盤である。



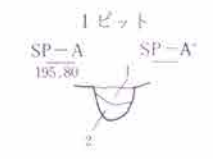
付図7 3号建物跡土層断面図 (本図は付図6に対応する。)



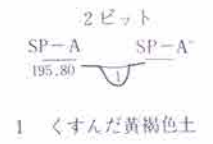
付図8 4号建物跡及び周辺地形

- 1 表土
- 2 褐色土 表土と同様、篠の根がびびこる。浅間A軽石は含まない。
- 3 結晶片岩系の小礫(径5cm程)がチヤコチヤ入る。
- 4 黄褐色土 粘土ブロックが混入する。
- 5 黄褐色土 11層に似た感じ、若干浅間室田軽石が混入する。
- 6 暗褐色土 篠の根が多い。
- 7 暗褐色粘質土
- 8 褐色土 基壇化層の裏込めであり、比較的よくしまっている。
- 9 黄褐色土 灰化物粒と焼土粒を含む。
- 10 黄褐色土 灰化物は特にない。鮮やかなローム色。
- 10' やや色調が強い。しっとり感が少ない。
- 11 黄褐色土 粘性は少し不足し、サラサラした感じである。灰化物は特にないが、浅間室田軽石が若干混入する部分もある。
- 11' 11層よりやや色調が強い。
- 12 褐色土 粘性あり。非常に固くしまっている。
- 13 褐色土 色調はやや暗く、灰化物は特にない。暗色部が。
- 14 明褐色土 褐色の浅間室田軽石が多数に混入する。
- 15 暗褐色粘土層
- 16 暗褐色粘土層 17層の混入の層を混入する。
- 17 黄白色泥岩
- 18 褐色土 くすんだロームという感じである。粘性・しまりとも乏しい。
- 19 暗赤褐色土 焼土粒を多数に含む。
- 20 暗黄褐色土 粘性のあるロームが主体。焼土・灰化物が若干混入する。
- 21 暗褐色土 灰化物は特にない。粘質土でブロック状にボロボロこぼれる。
- 21' は比較的しっとりしている。
- 22 褐色土 ロームが少量混入する。粘性がややあり、しまりは乏しい。

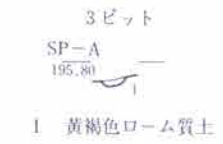
※10層下もしくは13層上から遺物出土する。



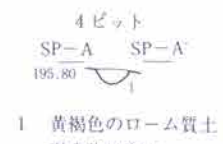
- 1 暗褐色土 灰や焼土を含み、全体に赤みをおびて暗い色調である。
- 2 黄褐色土 しまりはなく、さくさくしている。混入物はない。



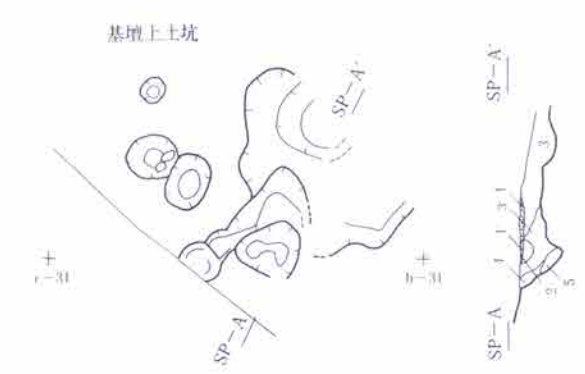
- 1 くすんだ黄褐色土



- 1 黄褐色ローム質土

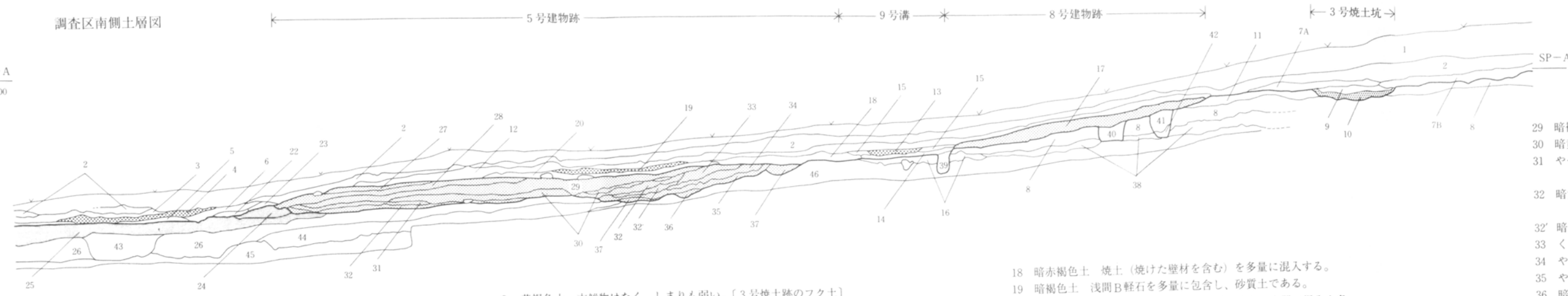


- 1 黄褐色のローム質土 混入物はない。



- 1 焼土 3層が焼けたもの。
- 1' 焼土 2層が焼けたもの。
- 2 粘質土のかたまり
- 3 暗黄褐色土 褐色粒と(径2-3cm)の粘土塊を多量に含む。
- 3' は粘土塊がすくない。
- 4 暗黄褐色土 粘土が若干ばやけて多量に混入する。
- 5 暗黄褐色土 灰化物は特にない。





- 1 浅間A軽石 白色の軽石層。上部5cm内外は笹の根がはびこり暗みをおびる。
- 2 黄白色土 浅間A軽石下の粗粒の灰質土。
- 3 明黄褐色土
- 4 暗褐色土 浅間B軽石を主体とする。粒子の細かな砂質土。
- 5 黄褐色土 ややかたくしまっている。
- 6 暗赤褐色土 焼けた壁材、焼土、炭化物を多量に混入する。
- 7 暗黄褐色土 浅間B軽石を混入する。
- 7Aは浅間B軽石の量が少なく、7Bは多い。
- 8 明黄色土 ソフトローム。

- 9 黄褐色土 夾雑物はなく、しまりも弱い。〔3号焼土跡のフク土〕
- 10 暗赤褐色土 9層に近似した土層であるが、まんべんに弱く焼けており、炭化物の混入もある。〔3号焼土跡のフク土〕
- 11 やや暗い黄色土 下部はソフトロームに移行する。しまりのないソフトな土である。
- 12 黄褐色土 やや粒子が粗く、しまりはあまりない。
- 13 暗褐色砂質土 浅間B軽石を主体とする。
- 14 黒褐色土 浅間B軽石を混入し、しまりがなく、ざらざらしている。
- 15 暗褐色土 浅間B軽石を少量混入する。主体土は細かな砂礫を含む。ややきめの粗い土である。
- 16 暗黄褐色土 ややきめが細かく、しまりもややある。〔地山〕
- 17 暗褐色粘質土 地山の暗褐色粘質土を用いた盛土であって、しまりが強い。〔8号建物の盛土〕

- 18 暗赤褐色土 焼土(焼けた壁材を含む)を多量に混入する。
- 19 暗褐色土 浅間B軽石を多量に包含し、砂質土である。
- 20 暗茶褐色土 焼土と炭化物を多量に混入する。土器の混入も多い。
- 21 くすんだ黄褐色土 しまりのやや弱い土である。混入物はない。
- ※6・18・20の3層は5号建物焼失に伴う焼土層である。
- 22 炭化材を主体とする。
- 23 くすんだ黄褐色土
- 24 黄褐色土 ローム質であり、しまりはさして強くない。〔5号建物基壇整地層〕
- 25 ややくすんだ黄色ローム質土 混入物はほとんどなく、動かされた跡はみとめがたいが、人為的な整地土の可能性が推測される。
- 26 明黄褐色土 いわゆるローム漸移層的な土である。
- 27 暗褐色粘質土 夾雑物はあまりない。きわめてしまりは強い。
- 28 暗褐色粘質土 礫や白色粘質土を混入する。しまりはきわめて強い。

- 29 暗褐色粘質土 27層と同様であるが、より純質である。しまりはきわめて強い。
- 30 暗黄褐色土 暗褐色粘質土と黄褐色土の混土。しまりは強い。
- 31 やや暗い黄褐色土 黄褐色ローム質土を主とし、暗褐色粘質土を少量混える。あまりしまりは強くない。
- 32 暗黄褐色土 黄褐色ローム質土と暗褐色粘質土の混土。あまりしまりは強くない。
- 32' 暗黄褐色土 32層と同質であるが、やや明るい。
- 33 くすんだ黄褐色土
- 34 ややくすんだ黄褐色土 ソフトローム的な土である。
- 35 ややくすんだ黄褐色土 34層と同質であるが、やや暗い。
- 36 暗黄褐色土 35層と暗褐色粘質土の混土。
- 37 くすんだ黄褐色土 焼土粒が数片混入する。
- 38 暗黄褐色土 ソフトロームから暗褐色粘質土への移行土。
- 39 暗褐色粘質土 土質は17層に近い。焼土粒片が混入する。
- 40 くすんだ黄褐色土 8層を主体にして17層が少量混入する。
- 41 くすんだ黄褐色土 8層を主体にして17層が少量混入する。
- 42 くすんだ黄褐色土 同質だが17層の量がより多い。
- 43 ややくすんだ明黄褐色土 遺構の可能性もある。
- 44 黄色軟質ローム
- 45 黄色ローム
- 46 暗褐色粘質土

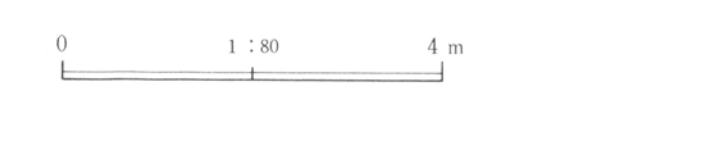
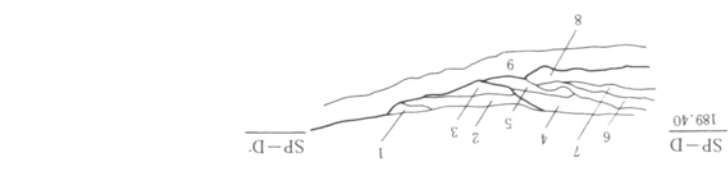


付図9 5号建物跡及び周辺の遺構

G区 ← → H区

※ 9層の上層が5号建物の基礎構築時の地面である。4～8層は5号建物の基礎の版築盛土である。4層の上層で、ある時期に溝が形成されていたらしいが、その後3層が堆積し2層を置き土して、その上に行を掘入で盛としたのではないかと推測される。

- 1 やや明るい褐色土 しまりはない。
- 2 淡褐色粘質土
- 3 褐色土 褐色土とやや黄色味をおびた褐色土の混土。あまりしまりはない。
- 4 やや暗い褐色土 ややしみが強い。
- 5 やや暗い褐色土 白色粘質土をフロッツ状に混入する。
- 6 褐色土 やや明るく黄色味をおびる。
- 7 暗褐色土 8層と同質であるが、おすかに明るい。
- 8 暗褐色土 ちみつつも粘性も少しあり、かたしくまっています。
- 9 褐色土 やや黄色味をおび、しまりはさして強くはない。土器を少量含む。
- 10 暗褐色粘質土 (地山)

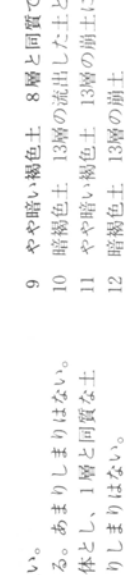
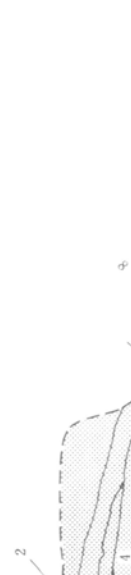


- 1 赤褐色土 壁際の焼けたもの。
- 2 暗褐色土 浅間B軽石を混入する。
- 3 黄褐色土 焼土の粒子をまんべんに混入する。
- 4 黄褐色土 淡黄色の粘質土をフロッツ状に混入する。
- 5 黄茶褐色粘質土 地山に近い土である。
- 6 焼土 床面も焼けている。



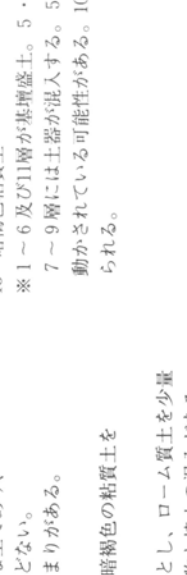
付図10 5号建物跡

- 1 暗褐色粘質土 ちみつつもしまりが強い。
- 2 黄褐色土 ソフトローム的な土である。あまりしまりはない。
- 3 暗黄褐色土 くすんだ黄褐色土を主体とし、1層と同質な土を少量混入する。あまりしまりはない。
- 4 くすんだ黄褐色土 ローム漸移層的な土であり、夾雑物もほとんどない。
- 5 黄褐色土 ローム質であり、やしみが強い。
- 6 くすんだ黄褐色土 ローム質土を主体とし、暗褐色の粘質土を少量混入する。
- 7 黄褐色土 ローム質土を主体とし、ローム質土を少量混入する。
- 8 やや暗い褐色土 13層の崩土を主体とし、ローム質土を少量混入する。炭化物と焼土の混入がある。



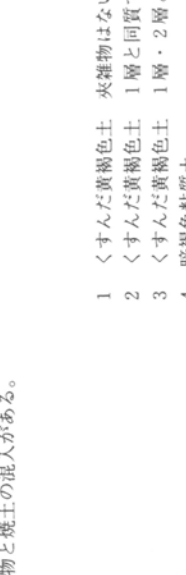
- 9 やや暗い褐色土 8層と同質であるが、より暗い。
- 10 暗褐色土 13層の流出した土とみられる。
- 11 やや暗い褐色土 13層の崩土に少量のローム質を混入する。
- 12 暗褐色土 13層の崩土
- 13 暗褐色粘質土
- 14 暗褐色粘質土

※ 1～6及び11層が基壇盛土。5・6・11の下面が整地土上面。7～9層には土器が混入する。5号建物の基礎の造成に伴い動かされている可能性がある。10層ないし13層は地山と考えられる。



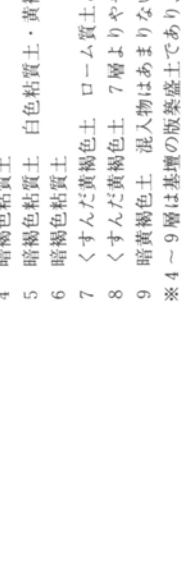
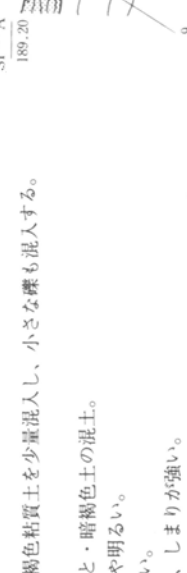
- 1 くすんだ黄褐色土 夾雑物はない。漸移ローム質である。
- 2 くすんだ黄褐色土 1層と同質であるが、やや明るい。
- 3 くすんだ黄褐色土 1層・2層と同質であるが、やや明るい。
- 4 暗褐色粘質土
- 5 暗褐色粘質土 白色粘質土・黄褐色粘質土を少量混入し、小さな礫も混入する。
- 6 暗褐色粘質土
- 7 くすんだ黄褐色土 ローム質土と、暗褐色土の混土。
- 8 くすんだ黄褐色土 7層よりやや明るい。
- 9 暗黄褐色土 混入物はあるが、しまりが強い。
- ※ 4～9層は基壇の版築盛土であり、しまりが強い。
- 10 黄褐色土 土質はあまりしまりはなくソフトである。焼土粒の混入も少量ある。遺物の包含層である。
- 11 くすんだ黄褐色土 いわゆるローム・漸移層的な土である。
- 12 やや明るい黄褐色土 ハードロームのアロックを数層混入する。
- 13 やや明るい黄褐色土 ソフトロームとみなされる。
- 14 暗褐色粘質土 BP層 (ハードローム) とみなされる。
- 15 黄褐色土 12層に近似するが、やや暗くハードロームのアロックを混入する。
- 16 やや暗い黄褐色土

※ 10層は自然堆積の可能性が考えられるが、人為的に押し出された可能性も考えられる。11～16層は自然堆積的な層序を示すが、11・12・15・16層は流れている可能性がある。

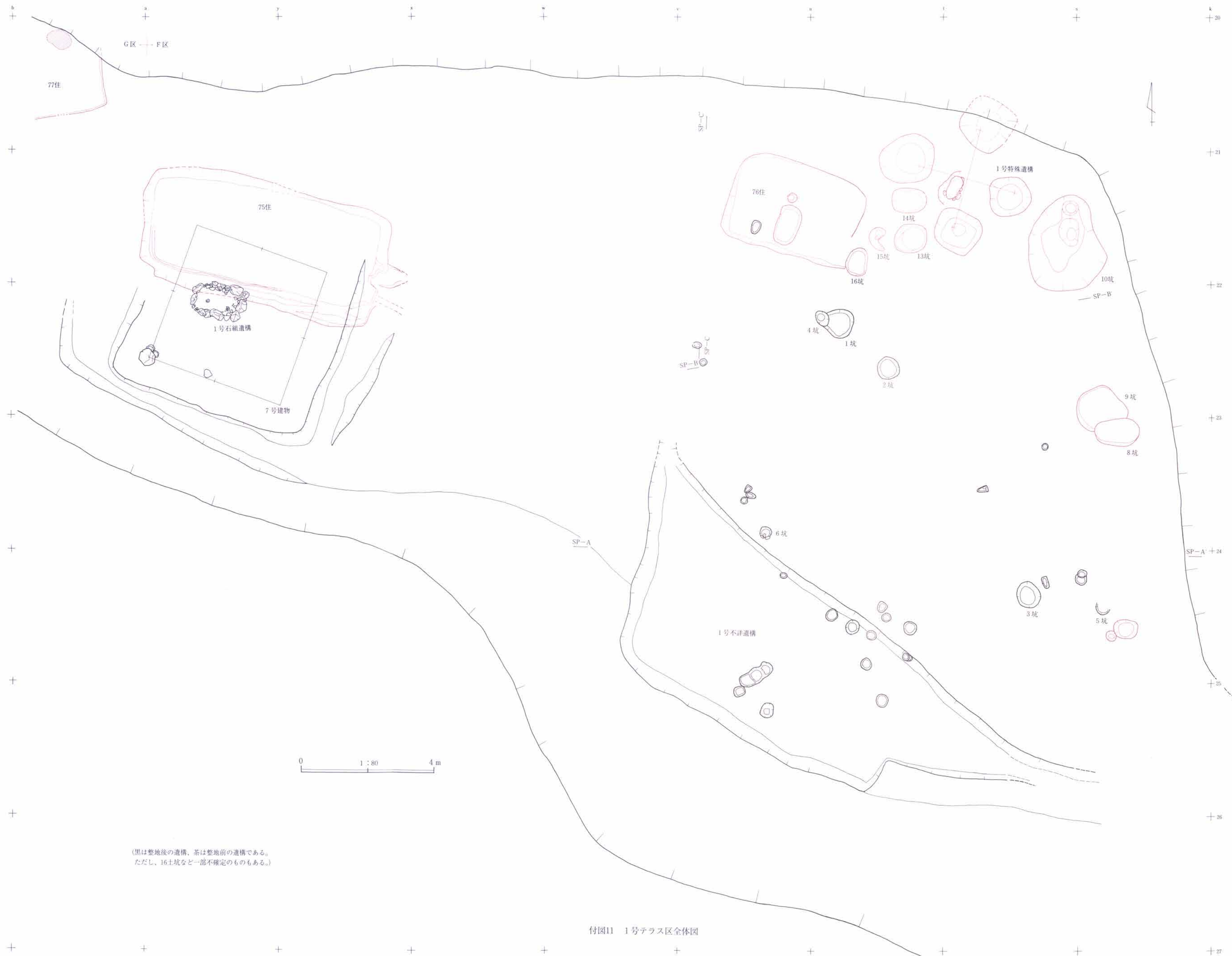


- 1 くすんだ黄褐色土 1層と同質であるが、やや明るい。
- 2 くすんだ黄褐色土 1層・2層と同質であるが、やや明るい。
- 3 くすんだ黄褐色土 1層・2層と同質であるが、やや明るい。
- 4 暗褐色粘質土
- 5 暗褐色粘質土 白色粘質土・黄褐色粘質土を少量混入し、小さな礫も混入する。
- 6 暗褐色粘質土
- 7 くすんだ黄褐色土 ローム質土と、暗褐色土の混土。
- 8 くすんだ黄褐色土 7層よりやや明るい。
- 9 暗黄褐色土 混入物はあるが、しまりが強い。
- ※ 4～9層は基壇の版築盛土であり、しまりが強い。
- 10 黄褐色土 土質はあまりしまりはなくソフトである。焼土粒の混入も少量ある。遺物の包含層である。
- 11 くすんだ黄褐色土 いわゆるローム・漸移層的な土である。
- 12 やや明るい黄褐色土 ハードロームのアロックを数層混入する。
- 13 やや明るい黄褐色土 ソフトロームとみなされる。
- 14 暗褐色粘質土 BP層 (ハードローム) とみなされる。
- 15 黄褐色土 12層に近似するが、やや暗くハードロームのアロックを混入する。
- 16 やや暗い黄褐色土

※ 10層は自然堆積の可能性が考えられるが、人為的に押し出された可能性も考えられる。11～16層は自然堆積的な層序を示すが、11・12・15・16層は流れている可能性がある。

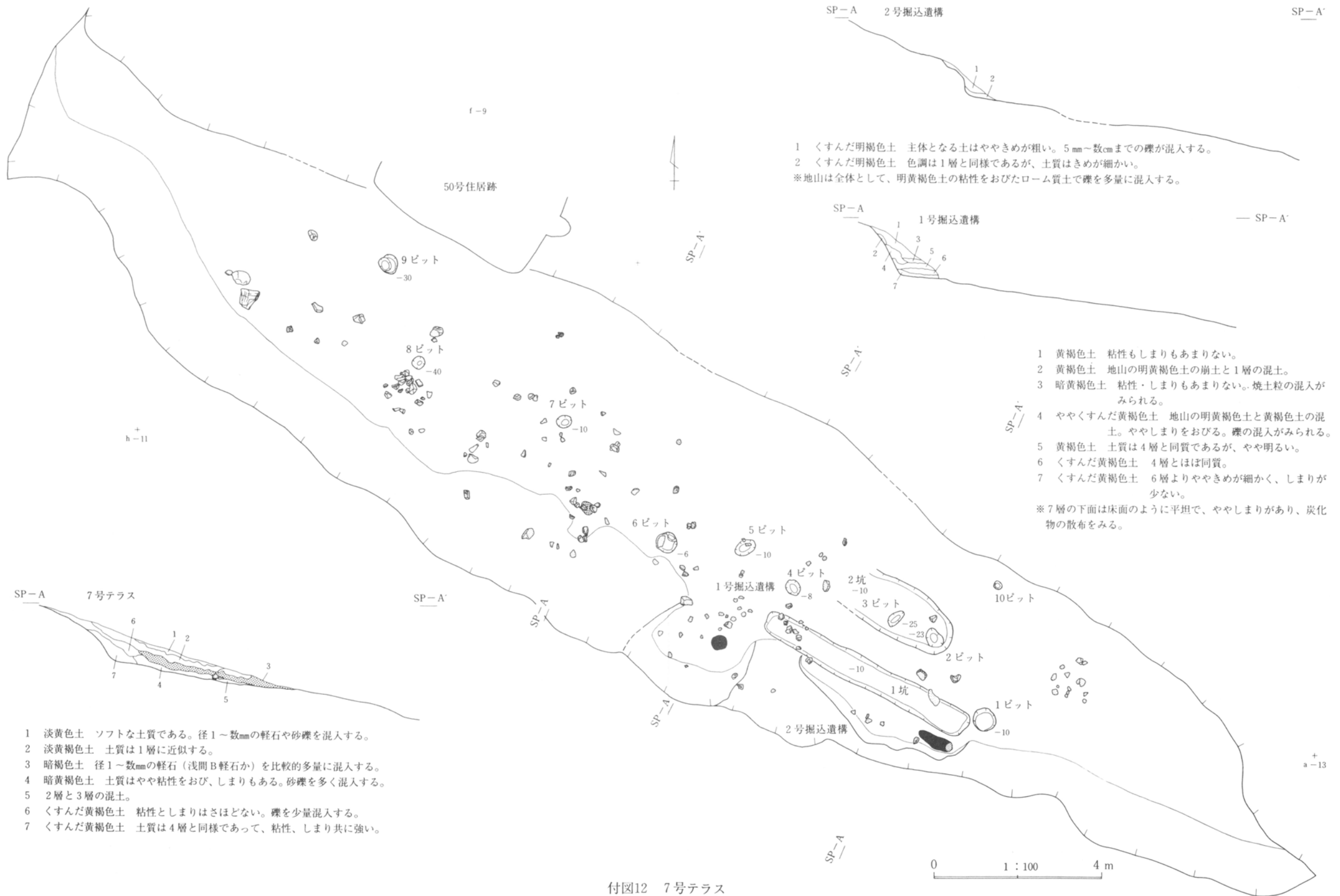


- 1 くすんだ黄褐色土 1層と同質であるが、やや明るい。
- 2 くすんだ黄褐色土 1層・2層と同質であるが、やや明るい。
- 3 くすんだ黄褐色土 1層・2層と同質であるが、やや明るい。
- 4 暗褐色粘質土
- 5 暗褐色粘質土 白色粘質土・黄褐色粘質土を少量混入し、小さな礫も混入する。
- 6 暗褐色粘質土
- 7 くすんだ黄褐色土 ローム質土と、暗褐色土の混土。
- 8 くすんだ黄褐色土 7層よりやや明るい。
- 9 暗黄褐色土 混入物はあるが、しまりが強い。
- ※ 4～9層は基壇の版築盛土であり、しまりが強い。
- 10 黄褐色土 土質はあまりしまりはなくソフトである。焼土粒の混入も少量ある。遺物の包含層である。
- 11 くすんだ黄褐色土 いわゆるローム・漸移層的な土である。
- 12 やや明るい黄褐色土 ハードロームのアロックを数層混入する。
- 13 やや明るい黄褐色土 ソフトロームとみなされる。
- 14 暗褐色粘質土 BP層 (ハードローム) とみなされる。
- 15 黄褐色土 12層に近似するが、やや暗くハードロームのアロックを混入する。
- 16 やや暗い黄褐色土



(黒は整地後の遺構、茶は整地前の遺構である。
ただし、16土坑など一部不確定のものもある。)

付図11 1号テラス区全体図



SP-A 2号掘込遺構 SP-A'

- 1 くすんだ明褐色土 主体となる土はややきめが粗い。5mm~数cmまでの礫が混入する。
 - 2 くすんだ明褐色土 色調は1層と同様であるが、土質はきめが細かい。
- ※地山は全体として、明黄褐色土の粘性をおびたローム質土で礫を多量に混入する。

SP-A 1号掘込遺構 SP-A'

- 1 黄褐色土 粘性もしまりもあまりない。
 - 2 黄褐色土 地山の明黄褐色土の崩土と1層の混土。
 - 3 暗黄褐色土 粘性・しまりもあまりない。焼土粒の混入がみられる。
 - 4 ややくすんだ黄褐色土 地山の明黄褐色土と黄褐色土の混土。ややしまりをおびる。礫の混入がみられる。
 - 5 黄褐色土 土質は4層と同質であるが、やや明るい。
 - 6 くすんだ黄褐色土 4層とほぼ同質。
 - 7 くすんだ黄褐色土 6層よりややきめが細かく、しまりが少ない。
- ※7層の下面は床面のように平坦で、ややしまりがあり、炭化物の散布をみる。

SP-A 7号テラス SP-A'

- 1 淡黄色土 ソフトな土質である。径1~数mmの軽石や砂礫を混入する。
- 2 淡黄褐色土 土質は1層に近似する。
- 3 暗褐色土 径1~数mmの軽石(浅間B軽石か)を比較的多量に混入する。
- 4 暗黄褐色土 土質はやや粘性をおび、しまりもある。砂礫を多く混入する。
- 5 2層と3層の混土。
- 6 くすんだ黄褐色土 粘性としまりはさほどない。礫を少量混入する。
- 7 くすんだ黄褐色土 土質は4層と同様であって、粘性、しまり共に強い。

0 1:100 4m

付図12 7号テラス